



麻生路郎 読本

「川柳雑誌」 「川柳塔」

通卷一〇〇〇号記念出版

麻生路郎讀本

川柳塔社



大阪市川口居留地にあったプール女学校。
後列右端がヨシノ。入学時だとすると、明治の末頃。



「番傘」3号（大2・8）の「番傘の人々」に、「今はダブルカラーに替ちヨツキ、（略）三分の粗髯を試みに一時間寫眞に撮る」とある。この写真のことを言ったものか。写真の右下に、「一時間寫眞／三越寫眞部」の文字が見える。



「番傘」創刊当時の関西川柳社の人々。前列左から浅井五葉、馬場緑天、岸本水府。後列左から西田當百、杉村蚊象、路郎、木村半文銭。



大正9年の春、大阪市外萩の茶屋三日路の路郎居にて。左は半文銭。近所に住んでいたため、頻りに往き来していた。



大正12年3月14日(水)、兵庫県苦楽園六甲ホテルにて。左から三好正明、路郎、三好久美子、野口雨情、吉岡利康。



大正13年3月、鳴尾遅日荘裏庭にて。無花果の下に立つ葎乃、背の子は次男アート。黒木英豆撮影。



大正13年4月4日(金)、川柳稲荷会。鳴尾遅日荘にて。前列左から高橋かほる、原史風、太田徹底郎、竹田蘆穂、路郎、西垣松雨、高橋古城山、武田彩霞、橋本二柳子(後の緑雨)。後列左から不盡、宮内一洲、催主の河盛蘆村(葎乃の父)、森田輝翠、葎乃。黒木英豆撮影。



大正14年3月、本田溪花坊宅で東北三春の赤牛を路郎が写生したもの。昭和46年3月、溪花坊から贈られた絵を中島生々庵が印刷して、同年7月11日(日)、路郎7回忌出席者に進呈した。



年代未詳。千日前歌劇団の役に扮装する路郎。



大正15年3月7日(日)、女人高野(天野山金剛寺)吟行の帰途、長野町西條橋畔にて。前列左から太田朝陽、塚崎松郎、路郎、林田馬行、竹内多聞。後列左から竹田蘆穂、橋本二柳子、庄萬よし、西垣松雨、井上刀三、徳田双柳、高橋かほる。



昭和3年1月8日(日)夜、本社新春句会。日本橋俱樂部にて。第一列左から山雨楼、梧郎、琴人、かほる、萬よし、紋太、路郎、柳秀、ひろし、三笑、彩秋、秋風、秋水、卓。第二列左から文蝶、吉郎、二竹、馬行、松郎、源坊、乱耽、聞路、翠川、幸泉、十紫。第三列左から二柳子、翠仙、松山子、楓林、幽香、迷亭、九柳、二南、新水、陽喜亭、孤舟、泰平。第四列左から虚白、蹄二、蝶二、木三、二水、柳骨、放馬、革郎、加香、翠峰。



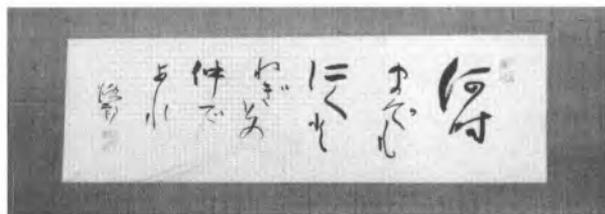
その日暮しも軒に雀がこぼるゝよ
 「川柳雑誌」昭和4年11月号に発表



昭和5年5月24日(木)、福島県白河の大谷五花村邸にて。前列左から五花村令息謹也君、昂三君。中列左から葉吉、路郎、喜四雄、タニ子夫人。後列左から汀舟、五花村。5月18日(金)第二回海峡親善大会(函館)に出席し、その帰途立ち寄った。



昭和6年6月26日(金)、堺市立公民病院(現・市立堺病院)事務長時代。



何時までも
にくとねぎとの
仲であれ

昭和5年7月6日(日)
本社社会「肉」軸吟。



昭和8年9月27日(水)夕、伊藤愚陀・住田乱耽句集「潮騒」刊行記念句会。島之内端の坊にて。左は住田乱耽。黒木鶴足撮影。



昭和9年3月20日(火)夜、撫順川柳社による路郎歓迎句会。撫順、日の出館にて。前列左から日高阿喜良、齋藤外風、岩崎柳路(熱河凌原)、岩崎松代(熱河凌原)、路郎、江戸みつる(奉天)、福井天弓、山下岸柳。後列左から安武仙涙、城島舟禮、溝口阿豆起、齋藤十念坊、石井矢車、松浦蝶古、中島喜代次。路郎は、3月9日(金)~29日(木)まで鮮満地方へ川柳行脚に出た。その費用は、岩崎柳路が一切の面倒を見た。



凡聖一如元旨のごころしる
「川柳雑誌」昭和10年1月号に発表。



昭和10年2月23日(土)、兵庫県御影の長崎邸にて。右は長崎柳秀医学博士。〈金魚屋に舞妓袂を教へられ〉が有名。柳秀夫妻は、昭和20年6月自宅の壕で戦災死した。令息仙之助撮影。



昭和10年晩夏、仮寓(孔子園)の庭前にて。「川柳雑誌」(昭10・9)に、「秋が—僕の好きな秋が/庭の隅から/匍ひ寄つて來た/孔子園の書齋では/ちろりを抱いて/句に耽つてゐる/なあちろりこれから秋に親しまう/路郎」とある。

昭和11年1月10日(金)、御旅支部新年句会の帰途。
 前列左から生田翠夢、路郎、松田多郎。後列左か
 ら松盛琴人、近藤 勇、江戸みつる、平井與三郎、
 増位汀柳、青木史呂。



昭和11年9月19日(土)夜、芝浜松町田中すゞか居二階にて。前列左から高島玉兔朗、白石維想楼、
 藤島茶六、路郎、井上信子、塚越迷亭、村田周魚、八十島勇魚、福田山雨楼。中列左端は西島〇丸、
 右方の左から山路星文洞、田中すゞか。後列左から三浦太郎丸、田中空壺、竹田花川洞、前田雀郎、
 川上三太郎、森井荷十、高須唾三味、伊藤瑤天。「川柳雑誌」8月号に「川柳職業人宣言」を発表し
 「川柳人協会」を発足させた路郎は、9月17日(木)上京、「川柳人協会」の支援を東京柳人に懇請した。



昭和13年7月24日(日)、グライダー見学川柳会。盾津飛行場(大阪陸軍飛行場)にてプライマリー機上の路郎。

昭和13年10月11日(火)朝、北京から西北817kmの包頭で駱駝に乗る路郎。9月16日(金)～10月21日(金)まで北支蒙疆の旅に出た。大阪時事新報の社長の好意で新聞の特派員として派遣された。昭和9年の鮮満地方への旅と同じく、岩崎路郎が一切の面倒を見た。



昭和14年夏、生駒山頂青年道場にて。左は中島生々庵。石井白面人撮影。「川柳雑誌」(昭14・8)の「後記」に、「今年をよく山へ出かけた。このみの會で岩湧山へ一泊、富士山麓と云つても三千尺以上の高原へ一泊、山科の一燈園へ日歸り、生駒山上の青年道場へ一泊、スツカリ若返つてしまつた」とある。



昭和14年3月25日(土)、西日本鉄道川柳大会(尾道)に出席。40年振りに父母の眠る福善寺に詣る。左は岡田某人。



奈良公園にて。

「川柳雑誌」(昭16・3)に掲載。



昭和23年7月11日(日)、路郎還暦川柳大会の
明るる朝、天王寺町の路三居にて。前列左から
路郎、霞乃。後列左から夕風、路三、三星子。



黄菊白菊明治の匂いなつかしむ
「川柳雑誌」昭和23年7月号に発表



昭和26年1月15日(土)、山焼川柳大会。

奈良若草山にて。
路郎の句を花火で打ち揚げた。



昭和32年7月7日(日)、古稀祝賀川柳大会。
大阪市網島元藤田邸庭園にて。若本多久志撮影。

踊り見物、路師先生

三男三介



クイックスロー
クイックスロー

古稀をはなやかに

「川柳雑誌」昭和32年8月号に発表。



昭和29年8月14日(土)、阿波踊り見物と鳴門観潮吟行。
当時の「川柳雑誌」の表紙を描いていた米田三男三介のスケッチ。
「川柳雑誌」10月号に、三男三介が次のように書いている。
「一行が川柳人だけに到る処、ユーモアの演出するもの面白い。中にも船中で服を着替えた路師先生の、ゆかたに靴履きで踊見物、超然と徳島の街を漫步されるあたり、実に川柳人らしく、道行く人の不審な視線が先生の靴と顔を見くらべて居るのを見た時、僕も思わずふき出してしまった」



昭和32年9月8日(日)、北国新聞社主催北国川柳大会。金沢市北国新聞社屋上にて。前列左から若本多久志、路郎、不二田一三夫。後列左から土井文蝶、西尾菜、河井庸佑、清水白柳、山田季賛、須崎豆秋。



昭和34年9月5日(土)、丸池スキーハウス前にて。3日大阪を発ち、木曾の湯田中の中島紫痴郎の別宅無心庵に逗留、この日は志賀高原で遊んだ。初めての、霞乃と二人だけの旅行だった。

昭和35年9月11日(日)、誌寿400号記念川柳大会。大成閣にて。創刊号から400号までの「川柳雑誌」を並べて、初代川柳翁に献花する路郎と霞乃。



昭和35年某日。ダッコちゃんはこの年の7月に発売されるや、大ブームになった。



昭和37年7月10日(火)。写真の裏面に路郎のメモがある。「一九六二年七月十日／七十四回誕生日記念／自祝乾杯自宅にて／麻生路郎／ご馳走はいただきました／大鯛を中心に／有難うございました／生々庵さま／小石奥さま」



昭和37年7月22日(日)、青森県川柳大会の帰途、26日(木)東京新橋キッチンにて。左から路郎、川上三太郎、阿部佐保蘭。橋高薫風子撮影。



昭和38年2月17日(日)、不朽洞柳樽室にて。左から橋高薫風子、塚越迷亭、霞乃、路郎。林宏子撮影。



昭和39年10月9日(金)、熊本の田中辰二(鳴風)を見舞う。田中邸にて。

第一句碑 すべりんこ親は涼しいとこで待ち

昭和25年5月28日(日)、大阪市小島小児科後庭内に建立。
木碑のため現存せず。



第三句碑 俺に似よおれに似るなと子をおもひ
昭和25年9月17日(日)、岡山県弓削駅前建立。



第二句碑 名もしらぬ山の起伏をうれしがり
昭和25年8月3日(木)、奈良県上田翠光居に建立。

第四句碑 ふるくとも僕には仁義禮智信

昭和26年4月22日(日)、岡山県大森娯句楽居で句碑除幕記念川柳大会を催す。
句碑の裏面には、「一九五〇年晩春／翠光 白香 建立」とある。
写真は、「岡山の川柳」(昭46・5、日本文教出版株式会社)より転載。



第五句碑 夕桜とんぼがへりがしてみたし

大阪市阿部野神社境内に建立。裏面には、「平成元年11月11日建立／川柳塔社」とある。同2年4月1日(日)、句碑除幕式を挙行。





路郎・葎乃比翼句碑

おれに似よ俺に似るなと子をおもひ 路郎
 飲んで欲しやめてもほしい酒をつぎ 葎乃

平成13年7月7日(土)、尾道市志賀直哉旧居前文学公園に建立。

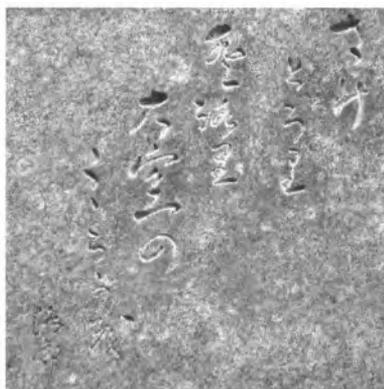


句碑除幕式で謝辞を述べる西村梨里(路郎・葎乃夫妻の五女)。

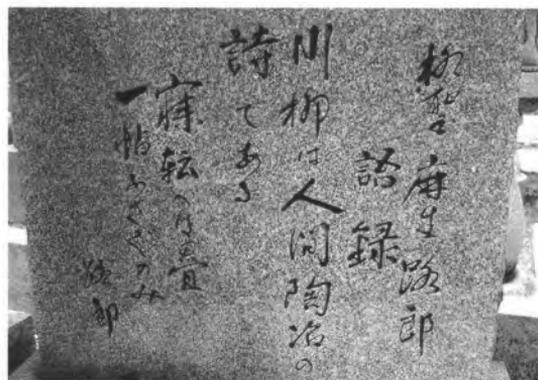


句碑の裏面

美作市靈山寺十三世住職永幡善男（柳号とく路）の句碑へ笠すて、見よ青空の廣いこと（昭37・3建立）の左下部に、路郎のへさけとろりとろり大空のこゝろかもを色紙大ではめ込んだ形となっている。



平成元年11月12日(日)、高野山奥の院大霊園に建立された「川柳塔」碑の序幕・開眼式が挙行された。「川柳塔」碑の裏面には、当時の主幹西尾菜の書で、「俱会一処／川柳塔同人並に川柳愛好家は死／して尚柳号で呼びあい永遠に川柳を／語りあう絆を以て此処に愉しく眠る」が刻まれている。



「柳聖麻生路郎／語録／川柳は人間陶冶の／詩である／寐転べば畳／一帖ふさぐのみ／路郎」とある。

発刊の辞

麻生路郎が「川柳雑誌」を創刊したのは、大正13年2月15日のことでした。以後二十年間月刊を守り通しましたが、戦争による物資の欠乏には勝てず、昭和18年12月号を「雑誌奉還」終刊号（二二九号）としました。昭和21年8月に復刊しましたが、わずか4頁の粗悪な紙での再出發でした。当時は、急激なインフレ・紙不足のため、遅刊もやむなく合併号を出さざるをえない時代状況でした。そのような苦難を物ともせず、戦後も「川柳雑誌」を拠点として、川柳界発展のためにその情熱の火を燃やし続けた路郎は、昭和40年7月7日に亡くなり、「川柳雑誌」も9月号の麻生路郎追悼号（四六〇号）をもって、その幕を閉じました。

翌10月からは中島生々庵を主幹とした同人雑誌「川柳塔」として蘇り、昭和57年11月号（六六六号）からは西尾葉が二代目主幹、平成6年11月号（八一〇号）からは橘高薫風が三代目主幹、平成12年11月号（八八二号）からは私が四代目主幹となり、本年9月に「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号を迎えることができました。「川柳雑誌」創刊号が発刊されてから、実に八十六年七箇月の歳月が過ぎたことになりました。

川柳塔社では、その記念事業として『麻生路郎読本』を編むことを決めました。「故きを温ねて新しきを知る」という言葉があります。先人の業績を顧みて現代に活かすのは、私たち後進の務めだと思います。本書が川柳界の発展に寄与することができれば幸甚に存じます。

平成22年9月

川柳塔社主幹 河内 天笑

麻生路郎アルバム 3

発刊の辞

河内 天笑 19

麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」 26

「旅人」 旅人 人生の雑音……27

大空 李白の末裔……38

戀ごころ……40

愛 慾……44

不死鳥 水の垢……50

前書のある句……69

旅つれづれ……71

「旅人その後の作品」……74

麻生路郎文集

先輩無用論の前提 80

作家と環境 80

二通の手紙 84

麻生路郎氏の書翰 87

誤れる川柳観を排す 91

一句を遺せ 95

新聞柳壇雑感 97

時事吟に就て 99

大正十三年を送る 102

句作と評論 103

蠣なまこの外にて 105

川柳作家十五戒 107

川柳 鮮満とこころぐ 109

うちは 132

秋と酒 134

劍花坊を悼む 135

ちぐさぐさ問答⑥ 女秀頼・中村芳子嬢 138

變遷を思ひ出すまゝ、 140

掲載内容の擴大化 141

川柳職業人宣言 142

川柳人協會と私 143

川協と其の事業 145

僕は思ふ 148

鑑賞川柳の味に就て 153

外から見た堺 162

歳末一筆 自家用車 166

髭 171

バット異變 146

戦争と川柳 149

植物痴 159

麻生葭乃川柳句集『福壽草』の序 164

川柳五十四年 168

阿部佐保蘭句集『鶴の姿』の序 173

大時計の下で(雑感) 147

不朽洞山房徹夜句會 152

一枚のはな紙 160

窓口談義 机上雜然 166

一行詩人 170

窓口談義 婚後五十年解消説 177

麻生路郎語録 180

麻生路郎物語

東野 大八

- (1) まえがき・尾道の風 204
- (2) 十七歳の出会い 209
- (3) 川柳開眼は六厘坊 213
- (4) つつましき川柳結婚 218
- (5) 河盛仁平噂ばなし 222
- (6) 「番傘」発刊のころ 226
- (7) 新短歌運動の雪 発刊 230
- (8) 古マントと土団子 235
- (9) 同志の人々 240
- (10) こども地獄 245
- (11) 三日路亭・遅日莊繁盛記 249
- (12) 童謡流行と新興川柳の台頭 254
- (13) 「川柳雜誌」の誕生 258
- (14) 躍進と試練の川柳 262
- (15) 同人の集散と橋本緑雨 266
- (16) 路郎の妻を語る 270
- (17) 爆弾を抱えて来たる事件 274
- (18) キング喫茶店 279
- (19) 職業川柳人宣言 283
- (20) 信濃の旅と松坂倶楽部 287
- (21) 蒙疆北支の旅 292
- (22) 葭乃書簡の文学素養 296
- (23) 「川柳雜誌」戦時奉還 300
- (24) 戦争と路郎一家 304
- (25) 川雑戦後復刊号 308
- (26) 六十一歳の情熱 312
- (27) 福田山雨楼メモの終結 316
- (28) 資料雑記から 320
- (29) 葭乃書簡ダイジェスト 324
- (30) 路郎作句語録(上) 328
- (31) 路郎作句語録(下) 332

麻生路郎の人と作品

- 麻生路郎論……福田山雨樓 338
- 詩性と大衆性との中で……河野 春三 356
- 白石朝太郎の講演より……白石朝太郎 368
- 「二日逢わねば……」……岸本 水府 376
- アンケートある日の恩師……丸尾 潮花・黒川 紫香・須崎 豆秋・浜田久米雄 381
- 父を想う……西村 梨里 382
- ああ、路郎君……岸本 水府 385
- 恩師路郎先生を偲んで……北川 春巢 387
- 噫 路郎先生……阿部佐保蘭・西尾 葉・山川 阿茶 389
- 人物像……橘高 薫風 391
- 路郎先生の初心時代……清水 白柳 343
- 「川柳職業人宣言」を讀んで……森田 一二一 367
- 臨川亭秘話 川雜岡山最後の日……政田 大介 369
- 愛の鞭は嚴し……中島生々庵 377
- あの人は、死々を知っていた……川上三太郎 386
- 險の師……高須啞三味 388

麻生葭乃作品「福寿草」 402

麻生路郎著作解題 416

麻生路郎年譜 469

麻生路郎・葭乃作品索引 512

編集後記

榎原 道夫 513

写真表 1 麻生路郎年代未詳

表 4 麻生路郎74回目の誕生日

麻生路郎讀本

麻生路郎作品
「旅人」
「旅人その後の作品」



句集『旅人』の口絵より

「旅人」 「旅人その後の作品」

1 「旅人」は句集『旅人』（昭28・11・30）を底本とした。

仮名遣い・用字も、可能な限り底本通りとした。ただし、明らかな誤植については訂正した。「旅人」は、旅人（人生の雑音）・大空（李白の末裔・戀ごころ・愛慾）・不死鳥（水の垢・前書のある句・旅つれづれ）の三部七章からなる。また、『旅人』は、一行書きではなく、二行三行の分かち書きで表記された作品が多い。それを次のように示した。

① 分かち書きであることを、半角空けることによって示

した。これは、『麻生路郎句集 旅人とその後の作品』（昭52・5・8）の表記に倣ったものである。

〔例〕 見渡すとユダのころをみんな持ち

見渡すと

ユダのころを

みんな持ち

の表記であることを示す。

② 一行書きではあるが、半角空けた部分がある作品につ

いては、次のように示した。

〔例〕 奥 一人 天井が鳴る*

作品の後に*をつけて、「奥 一人」の後に、半角空白があることを示す。

③ 分かち書きであり、なお、いずれかの行に半角空けた

部分がある作品については、次のように示した。

〔例〕 もう僕も 長い食事の*連続さ

もう僕も

長い食事の連続さ

の表記であることを示す。

2 「旅人その後の作品」は、『麻生路郎句集 旅人とその

後の作品』（昭52・5・8）に拠った。百句収録されているが、冒頭の二句（出鱈目に生きて米寿もないものだ）

（女のいない酒はさみしき）は、それぞれ『旅人』の、

「旅人」「大空」の部に収録されているので削除した。

3 巻末に、索引を付した。

「旅 人」

旅 人

人生の雑音

二階を降りてどこへ行く身ぞ

見渡すとユダのこころをみんな持ち

天井にいつまでおさへられて生き

往来で夢を見てゐる男にて

大臣になれぬことだけわかつたり

紙屑をまるめてすてるに等しき

お元日坐るところへ坐らされ

居候もおんなじやうに家をあげ

往診の誤診を飯を食ひながら

戯れに死ねればこころやすからん

今日も店にゆきたるのみ机のほこり

ひとり立てば風ふところに入りけり

無常とや猫も錦魚も死んで見せ

奥様一人 天井が鳴る*

鯛焼けば 鯛の臭ひが残る也

くびきりへ 今日秋立つ日なりけり

お互ひの世にせうとしてかどがたち

もう叱るばかりの宅と思つて居

寝転べば畳一帖ふさぐのみ*

まけて呉れる頃の茄子の小さくて

菌が痛いさうかと亭主出てしまい

お前達は畳の上の資本論

食ふべくもないのに被てる 緞の羽織

滅私奉公だなんて云つていたボス

あの女この女みな十九なり

嘘をまろめて 書斎けうとし*

その日ぐらしも 軒に雀が こぼるるよ

日あたりのいいうちだが物足りなさに変りない

戯れについても 淋し鐘の巾

冬は尖つて 金のこといふ*

PTA こんこでも 労資 こぜりあひ

証文は要らぬしつかりやりたまへ

祈つた甲斐もなく 共産党の中にある*

鯛一疋で 人間の騒ぐこと*

嫁入りをして 大劇と縁が切れ

それが世の中ですとは けちなこと

売る土地があつて 老人折れて出ず

金は無くとも 金は無くとも 君と僕

わが世とぞ思ふ 春にはならざりし

寒うおまんアと 藝者も年をとり

人間にしてやると云ふ嘘をつく

撞球よたまころべ ころを吸ふて ころびゆけ

女の浴衣が のれんとなつて 揺れ

資本家はキヤラクターまで買ひたがり

妾となつて奪^とるも戦術

機械の一部それが人間なんだとさ

独り身へ余所の時計が鳴るのなり

神経衰弱の死でないことを書いておく

他人らしくしたといふのがもめのもと

おしやべりはきらいわが妻ならずとも

運を待つやうに此の頃尙かず

機械化のその群衆へ溶けこまう

車庫の裏から街へ何しに*

悪運つきず資本家の端*

つまり胃が弱いのかんと突き放し

てにをはのあはぬ悔みとなりにけり

おべつかが米の飯とは知らざりし

暴力はよしキリストも殺される*

青空に藝者を連れた莫迦らしさ

てつちりへ社長が先に箸を入れ

いつまでも肉と*葱との仲であれ

弱点を握られて居て二号にし

老人は元祖にされて気をよくし

急所とは知らずに云つて左遷され

会社では横顔だけが見える位置

嘘を云ふたがどうしたに困るなり

女中の子血の冷めたさを思ひゐる

職責で窓が一つの中に生き

その嘘に女は縋りついてゆく

嘘と嘘 女いよいよ美しく

にぎりやのことも知つてる 雇仲居やとな来る

朝鮮の如く会社もつぶれそう

書齋はいいがゐた事はなし*

お互ひがみな病院にゐるとも知らず

混雑の中で 売名忘れない*

聞いてゐれば十人ばかり投げたやう

失明に学者としての名があたり

苦々しがればそれからよりつかず

寄り添へと云はぬばかりに風が吹く

十二月剃刀持つて怖わがらせ

夫より通帳かよひの方を頼つて居

おしやべりの中にも 夫人虚栄が出

心にもない約束が明日あすとなる

死は強しもう女中ではありませぬ

一口もきかぬ強さを持つてゐる

蝙蝠よ 僕も裏切者にされ

追放をけつく喜ぶ妻を持ち

もう僕も長い食事の*連続さ

もしひよつと妻が死んだらなと思ひ

医者が死を早めたことを誰が知る

畳も匂い初刷も匂い

人妻のあまりに長き袂なる

軍服で来てもヤツチヨロまかせを踊り

パチンコの煙草かいなど喫われて居

幻の中に時計が鳴つてゐる

君・君もう少し静にし給へ*蠅

会社が仆れるかも知れぬ世にゴルフ

一生は腐つた梨にさも似たり

弁護士も家賃の方は滞り

サンシーもあるけど二三人は生み

長靴がへびにも見へて灯がともる

豚の子へ続く豚の子ばかりなり

一ンち違ひで廿円が死んでしまつた

大きなものにその影さへも奪はれて

善人が滅びつつある寂しさに

只一句超生活の句を遺し

大杉を殺ろし思想を取り逃がし*

君見たまへ 菠稜草が伸びてゐる

まだ嘘がはんぷ半分まじつた辞世なり

元日の卓上日記晴とだけ

時計にまでうつる 神経衰弱症*

春のすえ 気違ひじみた手紙が来

天才へ 親類あんなものと云ひ

千円がまだたまらない仲居なり

遊ばしもするが意見もする*女将おかみ

太つたを娘片輪のやうにいひ

雑談の前にお布施がさらされる

駈落に旅の花火の淋しうて

二階のへ火種をあげて疑はれ

お見舞と称し如己堂見にこられ

あの記事も私が書いたやうにいひ

もう世辞を世辞として聞く年になり

貧しさにだんだん仲がよくなつて

やうもまあ豆腐ばかりとあきれられ

人間のあわててたべたさもしい気

これ以上には瘦せられぬ*瘦せられぬ

出世などもう問題にしてはあらず

家へ帰れば社長は社長*僕は僕

後家の相談こそばゆく聞く*

生活を顔に出すなといふてたに

ふと眼をやれば煙突にけむりなし

ひとりゐればひとりは限りなくさびし

収入の足りないところでうまがあひ

有限もよしとおもへり米の嵩

なすびもおばあさんも小さくなつてゆく

そろばんの三桁四桁の人生か

裸の外にうらやまれるものを持たず

ああ日向五尺の影と知るも憂し

天井へ聞かす講義と知らざりき

天才か癩癩持ちと思ひしに*

ぬけさくの扱ひされて詩に知られ

腰のひくいことも家主にひけをとり

店子店子とただで貸すやう

肩書が役にも立たぬ十二月

小新聞の主筆にて候 五ツ紋

しづかさは白髪の話などをして

気の弱いくせに鱗の帯をしめ

鹹になつた人の名刺がメモにされ

春の僕ただ良寛をこころざす

重役もいいが会社は葬式屋

色仕掛けでも追つかぬ十二月

煙突の横とは初日*哀れなり

うぬぼれを左様々々と片附ける

時計がとまつた淋しさですよ僕にも

凡聖一如元旦のこころ知る

友達に別れた時がお元日

元旦も二階 二日三日も二階に居

ビルの窓誰を呼んでるのでもなし

総辞職 犬も一緒に引き揚げる

総辞職 再び松の風を聴き

西部戦線わが童貞に異状なし

春の日はねまきのままで暮れてゆく

子が死んで葱や菜ツ葉の乳母車

本復をして辛辣な口をきき

云ふだけは云へ云へ 若さ失ふな

銀行のお世辞も気の腐るものの一つ

この腕を見よと脱税してゐたり

春寒し拾ひ手のない首二つ

二・二六事変

身代りの緋緘しぐらゐ着てて欲し

飜へる文字は帰順の外になし

煉瓦の下のみみずの如く生きるのみ

桜かね*と落ちついてゐる年になり

落人の刺身に箸もつけざりき

くびをつれとの兵児帯にはあらず

春の艸代議士などに踏まれるな

突撃で別れたまんまそのまんま*

ばんばんの娘の方に養はれ

幸福は金庫の中になかりけり

トランクは ダークサイドも知つてゐる

鉄が錆びたと同様に扱はれ

臨月へ 電話番号書いて出る

太を弾くその健康をみつめられ

エキストラ雲を見てゐるのもまじり

失戀が彼を 日曜画家にさせ

陳情に代表一人腰をかけ

世も末か 神様さへも左り前

巻脚絆巻いて貰つた*顔もせず

私達と複数で云う愛しよう

草の根よ 僕も鬪ふ草の根よ*

玉碎す 逸話などはなかりしが

良心があつて 本日休業し

ラヂオ又英語で何か云うてはる

あの博士 今度は民主主義を売り

買出しと知つてか 牛は尻を向け

一ト握り 題 聖徳太子之像 ああ人生は和に如かず*

搾取されてゐた 若き日をなつかしむ

三合になれば 胃病をかこつらん

人柄が 焼け出されてても 足袋を履き

古くとも 僕には 仁義禮智信

門出の日 牛へも言葉かけてやり

還曆 六十一 まだ情熱は燃えに燃え

芳紀まさに 六十一を ほほえまむ

ワイシヤツも よれよれ 左派の左派に居て

無力な男 みみずのやうに ちぢかんだ

失禮々々 君の奥さん だつたのか

くすぐつたいよ 紙入なんか あづけられ

嫁ですと ひきあはされる 松の内*

ハガキすらよこさなくなり 寒いこと

中風だんねと 奥にほつとかれ*

総選挙 一票が 悲しき支配力を持ち

保険金あてに されてるのを なげき

財産がハッキリわかり養子逃げ

正月も昔は紫雲たなびいた

お互ひにきつちり座る薄情さ

追放解除もとの一徹者になり

筆不精釣りにゆくひまありながら

お婆さんに限り死にたがり死にたがり

月に吸はれ戸も締めないで出て行つた

胸像も主張をまげぬ面ヲ構え

全壊と少し誇張もして寄越し

死んだそうなど簡単に片づける

君止せよ風見舞にまで商売気

仲直り口の軽さを封じられ

颱風のあんな力が欲しくなり

あんたと一緒なら喰べますと河豚料理

瓦の飛んだ話いつまで続くのか

地震からやつぱし男頼りにし*

鐘樓に鐘のないよな暮らしして

金持だ胃癌だいつの間にか死に

彼の一生雨雨雨のままだった

院長をもみくちやにする藝者が居

料理屋をさして貰えぬうちに切れ

老人の日に旗竿がまだ買えす

斜陽族 仏壇までが小さくなり

腐肉とは女の中のお女将さん

吹殻でそのけちくささけちくささ

いつからか死後の準備もしてるなり

帰れとは死ねといふことにもあたり

人類は悲しからずや 左派と右派*

労基法無視した老いの一徹さ

ああ僕も 啄木祭に 汽車を下りしに ゆくところなし

お女将さんと云うてやるには 少し若し

あんにプラスにならぬのなら 考えるわと女

駅を出た村の子既に影もなし

鯉節に男のちからからるる

親船を離れてきりきりと舞ひぬ

出鱈目に生きて米寿もないものだ

うんそうだそりアそうだとたかられる

壁に塗り込められたやう 人動かず

去年の子今年の子 お玉杓子かラケットか

男ばかりで虫のいい話かな

しらじらしき悔みの淀まず

水溜り 飛びそこねても 一人かな

涼み船水の深さをききたがり

涼むのかと思や女はついとたち

定食へ かひこが桑を食ふ如く

元旦だ せめて眼鏡を拭きましよう

老人の日の告白に 妻が欲し

いつのほどにか 二号に養われ

戎橋さえも いつしか秋となり

銀行と縁もないのに 忙がしく

貯金帳 忘れたところに出し入れす

大空

李伯の末裔

酒とろりとろり大空のこころかも

樽据へて誰にも呑せたがる也

腰が抜けた話を酒の肴にし

酔ふて来ると他人のお前などといふ

酒女酒で不惑に手がとどき

なあちろりこれから秋に親しまう

人並にいけるといふが酒のこと

酒がいつしか水になつてゐる

呑ます気でゐるに資本家ののしられ

それからは資本家呑ます事にきめ

さて呑むとなれば資本家先に酔ひ

一合の酒だに女口を出し

夫婦づれチップの要らぬところで呑み

二合饅きつちり酔ふて先へ去に*

だまつて呑むは惚れているなり

どつかで飲んで来てのマルクス・エンゲルス

火事か火事かと言うばかり矢張り飲み

その書棚酔に乗じて買った本

坐食しているとも言へずつけさせる

十二月首だけ入れて呑んで行く

現在に満足をして二三杯

君の酒はいいと云はれて松の内

飲みに来いと云い云い春を留守にする

大浜の丸万別館にて

三人が酔へば三人らしくなり

女のいない酒はさびしき

女房の予感 呑んで来るにきめ

あほらしさおみきに酔うて寝たといふ

ビール*ビール 秋が来たとして秋が来たとして

のみに来た友に家賃をきかれて居

君の顔で僕の顔でと呑みにゆく

十二月まがりくねつたところで飲み

落ちついて呑むは雨傘持つていず

酎をのむぐらいの金は友も持ち

ではここでなどと別れて飲み直し

いつになく女の方が呑むという

照り照りてコップは*ひとりほつとかれ

ビールの泡を吹いて話をそらす気か

みな呑んでるぞビールが散るぞ夏

まあまあといふがコップが足らぬなり

焼酎は呑みなさんなと気をつかい

俳風松竹梅の会にて

酒なんか呑んでいられぬ酒を呑む

元日を飲み友達と出てしまひ

箸紙を書いた手でもう父は呑み

敬遠をされて一人で飲みに行く

酔うて来て既に零時をすぎた水

銃後*銃後 飲まずに辻で別れたり

ラウンドガール父の酒ぐせ思はされ

青春を呑むべく生れ来し如し

戀ごころ

行末はどうあろうとも火の如し

媾曳の影と大根を干した影

初戀の思ひ出になる夏蜜柑

かんにんしてとキツス両手でふせがれる

薄情な日傘きりきり廻すだけ

初戀も知らず博士は嫁をとり

ナフキンへ誰が書いたか戀の唄

少女で通す ちちははの前*

衣摺れにわくわくしたも 十八九

戀人が来ているらしい茶の間なり

戀人の匂ひ 香水だけでなし*

みだれ籠へ女小さくちぢこまり

木の葉をくつつけ 戀をむさぼる

女遂に微熱のことは云ひ出さず

手紙では戀しいなどとかいてなし

思ひきり惚れて 毒婦と知らず死に

惚れられているとは知らぬ 十三四

青空の いよいよ青し 片思ひ

本妻があると知つてか死をいそぎ

かたくななことは云ふなどあてがはれ
連れたのをかくさんとしてよそよそし

藝者自身も顔のことなど忘れて居

唇は御意のまにまに金となり

惚れて居るのにヨーヨーで胡魔化され

女中ではございませんと云ひたさう

気の弱いくせに船まで送る也*

岐阜提灯の下で背広を脱がされる

噂に聞けば仲居になつている

ねエ愛して頂だいにあきれさせ

襟垢をためて戀でもあるまいか

船は行く行く戀人の顔小さし

拜まれて女は泊まる気にもなり

ふられたと見へておつりもやらぬなり

親類に十九の春がひとりいる

逢ひたかつた逢ひたかつたと裾をふみ

戀しさがありあり浮いた洗面器

写真だけやうやう呉れただけのこと*

若い燕切符を買うて渡される

猫入らず外にりんきの手を知らず

まま事のそのさいちうに保護願

転げ込んで行けば女は疑ぐられ

友達をみんなだまして南に居

逢ふだけでよかつたころの菜種咲き

のろけることを姉も妹も*

きつちりと坐はれば膝の女にて

二人きりしつぺいなどをして遊び

眞似したりしてゐるうちに少し惚れ

半襟をもらつたまんまそのまんま*

まちぼけをさされてもまだ信じたし

うれしさと怖しさとの指環にて

そのころの女はいふがままになり

あの眼の中で男討死

たべさしを食うほど男惚れている

炭ついで炭ついで女をうらむ*

くされ縁だとは女の*づうづうし

桜は桜僕は君君*

戀の毘あの眼だらうか*眼だらうか

あつさりとふられた事を笑ひ合ひ

骨抜きにされた毒婦を諦めず

戀をしてるのよといひたい眼のあをさ

泣けて来るほどに恋しき君ならず

思ひあがつた女よ恋を棄て給へ

操など考へていず脂ぎり

サルトルを伏せて女に溶け込みぬ

抵抗のきかぬ媚態にまばたいた

円光の射すを男は見のがさず

ただ歩くだけの恋にも春が来る

ネオンの下を妬きつ妬かれつのし歩き

妖艶を愛しつづけて息を引く

思はざり臍が痴態の罪を被る

人前はあんな女と云つておき

愛人が雪の中の黒点となりぬ*

もの思う女は鮎に手をつけず

色事に疲れ糸切草を見る

割箸を割つてもらつてやに下り

老らくの恋の濃度のでれくさく

云い出したからには女強しとも*強し

金ですむ恋もさみしきもののうち

もう未練ないが糸屑とつてやり

別離わかれの言葉に深酒しなさんな*

きつと来てくれと仲居の年増なり

慰謝料の月賦と言うがおかしくて

未だいま慾あり水晶の数珠

人妻とあまりに近い膝となり

人妻のてかてか光る鼻の先

地でゆくか舞台か恋の成駒屋

薄情と云はれうなずく薄情さ

媚薬の如く炬燵蒲団が眼に迫る

ほほえめばほほえむ恋の川田順

情痴の果てのひとり飯炊く

くちづけへお金はあした届けよう*

椅子の背にもう青春が消えていた

秋さらり銀の襖のものおもひ*

わかれたらとも思ひ死んだらとも思ひ

幻の黒髪となり脚となり

首しめたまでは覚えている嘆き

だらしなさいつそ死なうかたれとしの

あきらめていたと思ふに死を選び

人妻よ不惑とはかなしくもあるかな

愚かにも顔見にゆけば雪になる

雨風が逢いたいころつものらせる

名をすてて十七八の恋もせむ

愛 慾

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

失職をしてから父の声でなし

子にやつた机で履歴かいている

晝の風呂泳ぐ気にさへ*なる父よ

子煩惱がつたんがつたんしてくらし*

ある時は子をだんばしでくひとめる

木棉着でおごそかな父になりおほせ

何はなくとも男の子等と冬を越し

さあみんな降りててくれとお父さん

結界の中へうけとる子煩惱

ポーナスで父の腕前疑うな

箸紙を父おちついて書いてやる*

ロンドンの一周忌に

お父さんは*やはり川柳々々云つてるよ

お前がいたらと*思ひ出すと煙草ばかり喫ふ

お父さんはネ覚束なくも生きている

お父さんの神経衰弱がわかるかい

湯ざめするまでお前と話そ夢に来よ

わがままを父特権と思ひいず

俺の子といふのがあつておそろしく

凧あがりきつて親子が口をきき

蚊帳の中で泳いで見せるお父さん

子等の浴衣のつんつるてんになれなれ

資本家であつたは父の父の代

息子には替へられぬので下女をさげ

父親に詰手の本を頼まれる

畑の中父の姿のありがたし

けふの父は聞いてくれそうにも思へ

校長と意見の違ふ父をもち

くびきりにまがうかたなき父の御名*

国の父に似ていて車掌きりそこね

父の死に郊外の家見つけて来

父の死後莫迦にしている人に逢ひ

妻や待たむ靴音を高めんか

softが欲しといふ妻のうらわかく

黒髪すき下す妻に蟠りもなし

子が出来て傘の迎へが来なくなり

靴下をなげ出しぬ今日の汗かな

六畳に一^ち日父としての愛

洗濯に夫の匂ひなどもせん

家賃だけ稼いで女房気が強し

妬かれてたそのころはまだ金もあり

失禮をするに子持はなれている

気違ひじみた夫をまもり老けている

蒼空よすすくすくのびる子が五人

笑はぬ父に恩給がつき*

減俸のはらいせ女房なぐられる

かし家は聳ゆ子のある方はおことはり

ひとりひとり雑誌をあたへ冬を越そ

店を休んで母子健在を書かされる

母と子の蚤が互ひに入れかわり

父の汗これで何人食ふことぞ

障子張ることを夫婦でゆづりあひ

万引で進退伺ひ出す*夫

苦勞がる程に女房のやせていず

てんてこてんてこ妻の襷がけを見ている雀

乳の出る機械に母はなつている

髪結はぬこともしまつの数に入れ

愷気から洗濯物はつけたまま

母親は日の落ちぬうち行けといふ
慶應にいますと家主子煩惱

人並に女房も持った子も持った

腕の見せどこと女房には談しとき

親のあるうちはとふぐに箸つけず

まああがれ女房の風呂は長いから

嚴父慈母子に見せられぬ本もある

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

妻の名の電話もいつか無くなれり

父・植木・小鳥・娘はうちにいず

淋しさは父の大きな鼻とねる

鰻屋の娘うなぎの顔に似る

ちんぼこを出す子よママちゃんお留守なの
むつとしたが子どもの頭撫でておく

子供服その親にして贅沢さ

ハンモックあいそに乗つて泣き出され

胃病の子まま子のやうな膳につき

貰ひ子の方が藝者になるといふ

子を泳がせて沖の景色は眼に入らず

どの子も*どの子も息災で お元日

風よ吹け抱いてゐる子へ 歩く子へ

いつしかに母とおんなじ美顔水

腰が碎けたやうに娘の舞ひ納め

母の子に違ひはないがアナキスト

お茶漬を蚊帳の中から聞く息子

A²のB²のと娘の子

年頃は桜の咲いた様に生き

一人子のどんな玩具も淋しくて

みじかしといふかほんとに生きた子に

被^{きて}人のない帽子があるに気がつまり

だす入りの一つ缺けてもがたがたし

子を死なし学校の横に住みて学校に子の多いこと

おほきな事実子が死んでゐる

まだ弟があるやうにいふ悔み聞き

三周忌今はつかはぬ硯石

汝の父はロツク氏液をささげ立つ

子が病んで店をしめるのかと問はれ

鯨医者といふて居るとは子から聞き

金持をにくむ思想を息子持ち

一周忌その弟を泳がさず

どもの児にみんな云はさぬ親心

子沢山子に使はれる年になり

首つりは子を活動へやつておき

すべりんこ親は涼しいとここで待ち

胃病の子絵本ばかりをあてがはれ

大男を母はこの子にしてしまひ

子のことで最後の唇朝陽の命聞を悼むが動きしか

父を求め子を求めたり骨仏

母親は人出を聞いただけでやめ

ヨーヨーで待つその親々の立話

息子といふ名で五十に手がとどき

父としてエスカレーターの先に立ち

一銭の瓦斯もうれしい父と子よ

子沢山僕の枕は*何処へいた

母の事思はぬにあらず泊つて来

帰朝して子の寄りつかぬのもさみし

膳に左して子の頭子の頭*

思はざりき娘が二十四にもなり

その母も丸刈りにして待てといふ

父の名を呼びすてにする*まひごの子

父ひとりインフレをおそれてありけり

又辞職ですかと妻子驚かず

慰問文子は鶏の数も書き

死にともなかつたやろ娘のまままで置き

長男の顔と単の顔と似る

不肖の子へ儲けたことは隠しとき

お互ひの女房の話だけは避け

この村も非農家の子に写生され

やけくそでうんでるやうな子沢山

ネクタイが一本ぎりの父となり

落第かそうかと親は云つたきり

蚊の中で父は漢書を手放さず

俺の妻にしては少々みすばらし

女房に安請合をおそれられ

妻だけがまつる 神様仏様

ママとなりスターのサインどこでなし

稼ぐ母ストで休んでよろこばれ

ママ母のきげん元日からそこね

ストリツパーになるわと妻にあなどられ

PTAに出るを社交と思う母

あいの子はもうネキタイをさせられる

父の咳節約しまつをせよと云う如し

花見にやりましたと亭主手習

剃刃のするどさもあり子を愛し

もう畑自分の夫ばかりなり*

仏飯へだけはと母の心遣り

どの兵も後姿の父に似て

よう降りまんなあと老妻にねぎらわれ

名ばかりの夫婦と知らぬ公益社

又せんじ薬を妻に嘸まされる

不死鳥

水の垢

さうださうだ故人はまくし立てる癖

掬られたを苦笑ですます地位にゐる

ひげを剃る暇のないのも無事のうち

思案する膳に 目刺が置かれたり

安産に 宿直をせぬこと久し

祝電へ 四角張るだけ四角ばり

洋室へ 松竹梅を持ちこまれ

君僕といふてゐられぬ大三十日

十二月自分のうちへよりつかず

嫁にやつた娘は娘で困る 大三十日

伊達巻の汚れ 年子が二三人

誘惑をひそかに待つも 松の内

日は東西の年にて候か

今立つた人の盃うけさされ

連れ出すに 應援のある三ヶ日

十日戎 両手でうける気で出かけ

無くなると知つても さらの傘を貸し

合住居 米がどちらもきれてゐる

仏壇は 凡夫の拜む色でぬり

新嫁の やけは襷をなげるだけ

必要なことしか言はぬ 国訛り

送り人の ない出帆は 雲を見る

金拾ろた夢 ぶぶ漬けで聴く*

北風へ これだけ売れば 帰る気の

逢状の あとしばらくは 楽書し

行くだけの旅費しか持たぬ腕をもち

石鹼を忘れ 看護婦とりに来ず

爪弾の主に身受の金がなく

腰が立てばまだ富田屋の一の客

妻に中将湯をのめのめといふ寒さ

よきこともあるまじ妾流れゆけり

料理本などよむ妾なりしが秋か

向ひの貸家きづけり靴穿きながら

四十では女もあとへひかぬなり

よく怒るようになったにフト気づき

二号を持つて子に意見せず

正月も三日の客は鋤^す焼にされ

少し貸せと大学教授如才なし

情報天皇に達せず焼け出され

書置もなく料理人河豚で死に

斜陽族墓地の引越しにも困り

公報をまだ信じない信じない

附録だけでエエと編輯侮辱され

主婦としての投書を書いて胸にはせ

菊植えていても社長は俗に生き

病院の廊下財布のまま渡し

すしだけであんなにしやべる妻の客

組見の中の一人が嫁き遅れ

愛情のしるしの名古屋帯をしめ

故郷ではただ物質で評価され

流れ作業晩のおかずを思いつつ

よいとこへ来たと見積までさされ

うすぐもり誰か来そうで来ぬ日なり

火の見櫓これが職務か春の空

立ち廻りの稽古もめしの種のうち

一ト幕見みそめたとこで放り出され

水車小屋ここから隣り村になり

苦の世界めし一椀をめぐまれし

会話科に家出して来たのもまじり

遺髪が戻り 遺骨が戻り 本人が戻る

女またお皿の上に眼を伏せた

諸なんかなどと敬遠されはじめ

手の染まりそうになすびの紫よ

他殺やろうと云い云いたばこすいつけた

脱穀機三本松にてドドドドドツと日が落ちる

麦の秋 田守の農家の時計鳴る

俗曲へ六十の父脂ぎり

必要以上に米をほしがる世帯持ち

夕桜名もない橋を渡つて来

さて金となると友達甲斐もなく

薄情がどうしたのよと流行ッ児

つれないと云うのをはんぶ聞いて出る

忘れてくれと社長は金ですむつもり

薄情な男 眼鏡を拭くばかり

商売は別さときつちり払はされ

君ととも寝正月かとみくびられ

未亡人けふも涙の浪費して

握らせりや握る社党の浅間しさ

誰の墓だか赤い蜻蛉が飛んで来た

黄菊白菊明治の匂ひなつかしむ

せつかちの彼氏学者の列にゐる

世話好きが写真屋までもよこすなり

けろりかんとして代議士嘘が云え

同窓もあちらは芦屋に住む身分

停電の中へガタビシ父帰る

病院はまだ迷彩のまままで立ち

軒先に下駄にもならぬ桐がのび

新築新築負けた国とも思はれず

次の間でもう葬式の予算立て

贅沢は百姓紺の匂ひさせ

農村の時計は重く重く鳴り

付き合ひで一尾釣つただけのこと

ヤミ出来ぬ亭主は今日も毒づかれ

人参や牛蒡を恩に被せて呉れ

バラツクへ元の主人が使はれる

ジリ貧に今更家の広いこと

焼箸で晝をすました顔もせず

ふるさとは蝗右から左から

売食ひが今日は歌舞伎へ行つたそな

踊の輪月は遙に忘れられ

疎開の子繩の帯するまでに慣れ

供出を知らず蝗が飛び違ふ

シヤツよりも肉肉よりも米のこと

逐鹿陣営より

志士として花の散るのも知らぬ也

落選へはや葉桜の候となり

春もややアメリカカナイズして迎え

泥繩の英語なりけり署長以下

御降下の姓に名刺も新らしく

ふるさとの名士を訪へば炭を焼き

一万や二万長屋の端で食ひ

餓死線へまだ一丁はあるならん

だがしかしなどと天皇制を護持

闇市の面子などは遠マくに捨て

配給をさへも流して生きんとす

背の高さまでも負けてることを知り

白米の弁当へ眼の多いこと

学鷲へ父まだ若く母強し

お見外れをされて戦闘帽を脱ぎ

起重機の如く忸くたのもしさ*

兼務兼務東條さんへ続く気が

襪へる袖はなくとも美しし

朗らかさ柔道着ほどつつくつて

牛老ひて家族のやうにいたはられ

諦めてもらつた夫ですと云ふ*

腕白がそうかやつたか体当り

看護婦となつて仏印だよりかく

泰にいるそうなど稲の草をとり

軍属の自信 講道館五段*

伊無条件降伏

哀史一篇 南欧に陽は沈む

全印度よ立ちあがれ

お膳が出たのに印度が まだ来ない

衣料切符持つてるだけで 気が強し

戦術にしては断食すねたよう

祖国あるのみ 旋盤工となり

許嫁 釘ぐらゐは つけてくれ

をかしさはあいつが孫の話する

ベンチャラを電話でまでもまくしたて

敵前上陸 僕はふじみにて候*

見はらしをもう外人に奪はれて

ソアラ―機 都会の屋根が魔の如く

さすが銃後 桜は咲いただけですみ

をかしさは 鯨の靴に豚の靴

近衛内閣総辞職

磨 一步退き 小手をかざしたり

ああほんにほんにとあほぐ後の月

外科を見舞ひ 代筆たのまれる

聖書一冊 菊一輪の二階也

千人針 胡瓜抱へた手でも縫ひ

日ぐるまも 兵を見送る如く也

玉出駅踏切にて

とろろ昆布しほこぶ鬪志衰へず

包紙に鰻図案化されている

拾ひ屋のすがたも霞む窓にいる

選挙違反あの料理屋の灯を思ひ

赤心一票やりどころなし

同情の最後の品に米俵

外国の例で市長は切抜ける

人妻になつて卑怯な眼を使ひ

二人して読むは祝ひの手紙なり

二階のに聞かされている河豚の味

台風へ念仏も出ぬあわてやう

燈下管制そこへ大きな月が出た

妾ともつかず一年世話になり

職人同志ママ脚氣の足を見せ合うて

蓑盆変哲もなくモ翁坐し

寢台を辞して眉山に楽しめり

涼しさは何処の末寺か峰に立ち

おばアさんの部屋で鉄の音がする

掛軸が素直に垂れて寒いこと

米の値も知らずヒューマニズム称え

香港は手足のもげた蟹に似る

水兵に太平洋はうちの海

時局私観
気兼ねしては打水さへ出来ず

おツさんも翼賛かいと風呂で会ひ

スキツチをどういひませう新世帯

日本髪悠然として脊が低し

莫迦は莫迦だが哲学もかじり

苦学した博士はすぐに金のこと

還暦もいいが家賃をまだ払ひ

時鳥から俗物と見くびられ

葱赤蕪奥様の短歌*

女社長うつかり僕と云つちまひ

二月の寒さ土左衛門と巡查

残置燈女給馳のやうに消え

我々が今食ふ米へ閣議也

全快ただが十一貫と何百目

アルミニウムかアハハと戎さん笑ひ

買溜めに嫁の里まで手を廻はし

色気ぬきを女将^{おかみ}へうぼうしてかかり

意気張で貞女となつたまでのこと

戯れに捕へた蟹もホテルまで

返事だけしといて雲をまだ見て居

俄雨ジヨツキ一つで待つつもり*

君・君・憂鬱を配つてあるくのは止せよ

どつちつかずの返事したのを悔ひはじめ

売上のこれつばかりに笑つてしまふ

糶売屋そんならといふシヤツを出し

名古屋胴二号になつて久しけれ

藤の棚 女中は親に会ふところ

尊くもげすにも見せる乳房にて

食ふための仕事と見えず玉突屋

婦人記者こと面倒になると辞め

人の声に初手は内職持つて逃げ

内職で お米屋だけは 帰らせる

新らしい後家はぶべつのなかに立ち

つりの多いことに気付いた歩きぶり

泊り客雨で枕をあてがはれ

人形になつてゐるとは嫁へ無理

いひすぎた日は庭も掃き水も打ち

俺はもうあかんときめてかかるなり

資本家のための筆とはなり終り

うれしさに盲は一つ踏みはづし

苦楽園 仲居同士で 髪を結び

靴下を投げ出し 誰も来なんだか

襯衣一枚出来ぬくらしを 続けて来

慰めて やうやう箸を取らすなり

嘘にしておくと障子をびしやり閉め

月末の金さへ渡しや 出てあるき

これだけを持つて帰れと云はれて居

稼がねばなどと 三十七八九

近道にされてる敷地 売りに出し

すすめられ 女毛布の端に乗り

もういらぬやうに釣瓶は投げおろし

落籍されて心にもない字の稽古

兄らしいところは年回知らして来

古い値をいふて年寄値切るなり

今見ればこれつばかしの畑にて

仰山に鱗を飛ばす誕生日

下宿したところは屋根からよく訪ね

大阪へ来て屋根ばかり見てゐます

借金があるとは見へぬ石畳

これ位にしとけと思ふ居候

金ためてどうする気かと椽の端

借りる気で行けば有馬の夏と聞く

電車賃もないとは無心哀れなり

不孝者喜劇役者とまではなり

許嫁あめりか後家をたてとほし

人形を送れと支那の租界から

心得て仲居は梅の枝を折り

引止めて新茶をいれるくらしむき

羊羹のすこしかたいも旧家らし

けむだしの掃除に春の日をつぶし

雑兵に拜まれにけり選挙権

かたつむりやうやう峠越したとこ*

資本家は寢衣のまま逢ふてやり

すき焼と見えて船頭葱をさげ

叱らずにすませたことを恩にきせ

ひるひなか蠅とる用があるばかり

古本を売つて二階の暇乞ひ

書置の一ツはテロの兄へ宛て

奢られて荷物をいつか持たされる

踊子へ雲でも降りて来そうなり

胸の痛みを知らさじと箸を持つ

学校の倫理で行けば死ぬところ

歩をついたままで待たせる小商ひ

番傘に残る先祖の何右衛門

死所として京の格子の中にある

アダム・スミスを振り棄て力強く生き

よく来たと小さな机片づける

とりまきをいつそ淋しいものに見る

新町与太呂にて

河豚だ酒だ男ざかりのうれしけれ

女十八アダリンの夢

恋のない人にうれしい皿の数

十二月うれしい風も少し吹け

奥さんの鼻には困る美粧院

当選にバツタの姿思へかし

自分の好きな心配を持つ若き日よ

人前は家賃位と云うて置き

砂ぼこり売れない品を裏返す

青春を掴みぞこねた金遣ひ

米の値に換算すればおじけづき

古本屋でもやりますと帰りゆく

豆香水もう妹も女なる

新町にて

生きとし生けるものの中に妓あり

文学を軽んじ馬で裾野ゆく

スタートを切るころ既に金持さ

晝寝から海岸線がのびてゆく

絹夜具の中で減俸案生れ

代表の顔三角に見えるなり

副業を尻眼に奥へ通るなり

定食に手術の道具ほどならべ

スピーチを考へながらテキを切り

チウリップ 鍵を預る人に咲く

失望が大きすぎたかやつて来ず

悪友を姉がさへぎる寒さなり

霜やけてそれから年をよく聞かれ

夢を見てゐるうち家賃滞り

整理類々

ワイシヤツの汗も悲しい鹹くび首だつた

懸取を押し流すほど降れよかし

寒がりがつまみ出してる黒の石

訃を聞いて炬燵の人も手を合はし

宝石にもう感覚もにぶりゐる

裸婦を押さえる鋏の輝き

握らせることを忘れぬ苦勞人

素つばだかわが亭主にしてみたし

いのちがけで貰つた妻の虚栄心

朝顔の家で牛乳ことわられ

山の上二人しやがめば絵にされる

乾イズム先ず情熱を棄てなさい

桜は白け主婦は老ひたり

とは云ふものの金に頭を下げた人

先方の間違ひだが女房を叱つとき

もう泣かぬことを手紙の端に書き

間違つてお世辞を云へばキョトンとし

このごろはあつちにあると大きく出

手を貸せば人間並な口を利く

学校とは違ひ会社のうすぐらさ

獸人にあわただしきは春の雲

供託に質置く人をたのまんや

黒い鞆へ托す運命

現在の彼はいいたい事を云ひ

出は出たが一人はさびし松の内

世の中を巡査になつてもてあまし

空は晴れたり蛙の平泳ぎ

つっさき銃先の原始を見たり柿の色

大男一丁先をまだ歩き

面当ての寄附とも見える金の嵩

泣きごとは止せ止せどうせ十二月

お金を預つてやらうとせめられる

使ひきれない後家の収入

肺であることなぜ隠したりするんです

観賞のばら経済のなすも植え

僕は医者でも藁すべでもありません

大男母を軽々船に乗せ

鼻の偉大さ山脈を思はされ

人妻の襷を外すその早さ

障子さへ聞きつらい程叱つて居

尺八をすてて自炊にかかるなり

言訳も指環をいぢりいぢりする

椅子ばかり残してみんな寝てしまひ

素麵にお祖父さん丈けまだ坐はり

その座敷仲居の方が庭を向き

定食のこんなものまで数に入れ

奥さんの自慢の花がサツとこけ

羊羹のことでもめてる老夫婦

屋根に出て膝頭抱く閑があり

夜店出し余所の時計で去ぬ仕度

一皿は氣違ひじみた顔で食ひ

三代も仕え番頭露次に住み

風すこしあれど船出の四十一

売文社を興して

不渡りはたつた三桁に足らぬ金

一平へふせうぶせうに顔を見せ

貧しさのながながしくも 四十一

支那炭をつぎつぎ 南画出来上り

大金にこつちの事は聞いてゐず

いふまでもなく合服も月賦なり

マーケット女房の財布借りて買ひ

考があつてのことと かるくうけ

職人へ寝たよ寝たよと 取り合はず

借金でくれた見舞と つゆ知らず

凧つひに黒点となるうれしさよ

雲助の戻りは月を見て帰へり

道眞を訪へば 只今お手習ひ

日本びいき箸の持ち方まで習ひ

戸張孤雁氏逝く
裸女の線にも 悲しみのただよへり

寄贈品しみがあるとも云へぬ也

女房に負けまいとする愚かしさ

その乞食歳のわからぬほど汚れ

入歯の金をお自嘲ごらされたおかしさ

イイをしてご覽と 歯医者眞面目也

道ばかり今日はきかれる 焼芋屋

絵馬堂の一文菓子に世辞もなし

党のため海単になつたおそろしさ

俺は彼を莫迦にしてやろう

後添濁水再び妻を迎へるとききが来て 明けたてを軽くする

先代は自分でせねば 気がすまはず

意見した方も夜長に困るなり

死ぬ気で出たに松竹に居る

賽銭の方へ神様氣をとられ

エプロンをかけると手紙ばかりかき

村長を訪へば植木の虫を取り

不景氣がさせたきみじかとも思ひ

柳行李はや大阪へつきにけり

人の下駄そろへる事にいつか馴れ

人質のやうにとられる夏羽織

うざくかと聞き聞きシャツを脱いでゐる

儲けてるうちは冗談ばかりいひ*

袖口で押し戻したり五円札

世の苦勞みな引うけた氣でくらし

日一日下情に通じそしられる

花道の新派は客と間違へる

本堂で和尚和尚の声になり

行末を案じるように鶴は立ち

鶏を追へば踏切越して逃げ

先妻は風邪をひかさぬ様頼み

本堂の賽銭いらぬもののやう

昇降機 扇子の風は女なり

ナフキンを小さく畳む女客

本堂を降りると嫁の傘が待ち

大根をきざんで料理とは名づけ

解決を支那料理までもつてゆき

あのダイヤもう藝人の指になし

伝票の裏へ皿数聞いてゐる

藝者決して百姓の子と云はず

日永には亀もほとほと困つて居

女の笑ひごえ幾つもかさなりあひぬ

殺すことにきめて其の夜は寝たりけり

童貞が弱蟲といふ名を貰ひ

寒さは寒し炭斗の新らしさ

誰が捨てた草鞋か氷張りつめる

箱乗りもおんなじやうに眠くなり

名人は顔をあげずに返辞する

親切をおしつけた事さへも悔ひ

近頃のことは知らないがねと意見

襯衣一枚で書いた労働運動史

代診はバットをさして立ち上り

川柳の愛護者上総天香先生

池田室町の自邸に永眠せらる

夕刊の漫筆皺になつたまま*

盜塁へ夕日は既に落ちてゐる

今日中に着いたらよいと牛思ひ

本店は碁盤が据えてあるばかり

門弟の出たと思へばもう打たれ

活劇のやうにも見える水上署

相談をして洋服を着る養子

浜辺まで見にやらされる許嫁

軒店へ昨日やけふの客でなし

いつづけのもう刺身でもなかりけり

新店はそれもすぐ来るやうに云ひ

品切れにそのままそこへ話し込み

本店が椅子になるのも近いうち

いのちさへあればと思ふのみ仲居

居候が今は高座に生きてゐる

馬鹿な話だ傘一本を持ち廻り

醜男の哀れ使はれ損になり

弟の厄介ですと吸入器

板の間に寝たがこの頃金を貸し

戯曲に生きんとすと云ひぬソーダ水

このごろの疲れさんでりやは重し*

誘うても呉れぬほど髭のびてゐる

気楽さは枕をさげて出迎へる

形見分で下女孕ませた事が知れ

浜へ出りや隣りのメリーさんも出る

かなも*けりも作れず虫の声ばかり

広告塔一ト雨降つた中に立ち

蟲なくを哀れとも見ず妾住む

品切れで向ひへ這入るとこが見え

孝行はいいが男がしなびて来

雇はれてゐれば叱られ初めもあり

犬洗ふことも仕事の 浜の家

光明のなかにひたつて餅をやき

大正天皇を悼み奉る

草奔の臣かなしみの炭をつぐ*

古着屋はちよいとつまんでちよいと放り

うなされるのもありさうな古着店

青いソフト東京の夢巴里の夢*

論文の喧嘩はいつか年を越し

宴会がすむと雇仲居は女房じみ

嘘ばかり言ふ亭主とは思ふてず

哀れ哀れ税に苦しむ役者とか

はらませるだけははらます親がかり

あなたのやうにいふてもと返辞せず

前書のある句

天皇を迎えて

おなじみの帽子を今日も手にされて

お気の毒あれあれ帽子振りたまう

オープンへ迫まるは初夏の民の呼吸いき

天皇へ雨も埃りのたたぬほど

未亡人として天皇へ涙ぐみ

天皇も人気といふを御発見

妃殿下に出てほしかつた受話機持ち

天皇へ民のかまどが停電し

大阪も海が見へますほのほのと

悼青明

浴衣掛一寸いてくる旅なりし

桃哉を悼む

かなしくも 池田は雲の青々と

長崎柳秀博士の渡欧に

東洋の皮肉をもつてかしまだち

鮎美君の新婚を祝して

ふたりふたり 人ごみのなかでも*ふたり

葉平君一女を挙ぐ

眼も涼しかる*鼻もたかかろ 女の子

其象を悼む

行き先も知らさず 句帳のみ残し

蘆村を懐ふ

その子等は 一に一足すこと 知らず

新らしき職に就く

味は知らねど とりあげる箸*

楯重を悼む

裸婦かたづけ けてあるじ 申ふ

六〇号病室の人となりて

病臥しているに 電話の印鑑の

一子を儲けた久流美氏に

原稿紙へ 平二とこそは 書かれたり

佐渡支庁長に栄転された利生君に

栄転のうれしき 四十五里となり

首相逝く

待つたなしの 歩にさされたる 犬養毅

悼五葉

薬湯の隅に ひとりの君なりし*

新郎新婦に捧ぐ

よしや道は 遠くとも ふたり*

知らぬまに 靴がみがけてあるもよし

柳秀・長崎博士に

停年は七曜表に 用もなし

筑川・布施博士医学使節として訪独

往診にしては ナチスの 遙なる

洗塵・石崎博士北市民病院長に栄転

喜びの 電話院長室へ 継ぎ

近衛公に大命降下

おもむろに 笏でまねいた 組閣なり

第二次内閣誕生

近衛さん 背負ひ直した 重さ也

村田省藏氏の鉄・週大臣に就任を祝して

その船出 けむりも 見えず雲もなし

村田さん 大きな銅鑼を 聞く日也

小林一三氏商相就任

引継ぎの少し会社が大き過ぎ

風見章氏に贈る

頼むよと司法大臣磊落だ

西園寺公を悼む

折も折大番頭に亡くなられ

園公のことよ興津の鯛の鯛

丹路居

新築へもうスリツパは春の音

在外の同胞に

箸の国刺身の国を忘るるな

越舟大人を悼む

三七日へああ松風の音すなり*

芳一氏逝く

官舎の灯今はむなしくまたたくか

日の御子御降誕にあやかりて

伏屋にも一月廿日男の子

勅題

寝転ぶ癖の僕に海上雲遠し

北みきを君応召

君も征くか足もとから鳥が立つように

愛子を喪へる高尾兄に

君の子が書けば羅馬字砂手本

片山首相に捧ぐ

さあ動きますと片山運転手

淀瀬信病院薬局長に栄転の没食子君に

又飲みにゆくよと君を送るなり

生々庵母堂を偲ぶ

一周忌雲をとうしてなつかしむ

旅つれづれ

山中温泉にて

だしぬけに鐘の鳴るのも旅のこと

緑丸にて別府に向ふ

船を忘れるほど人妻の帯赤く

人の世の船も別府へまではつき

旅愁

遠く来てあらしの窓に子を思ひ

宿の二階今来た船の腹を見せ

朝霧の中を出て来た旅の人

一人旅流れるように立つてゆく

亀の井にて

みち足れる人へあふれる別府の湯

大和飛鳥にて

あすか川これかと思ふ川の幅

久方のその香久山の小さすぎ

むかしむかし明日香にちりし桜散る

南紀田辺

田辺節二燈一線で船がつき

五明樓まだ揺れている気で泊まり

宝塚

旧温泉指さすだけで引きかへし

長谷寺

一匣べつたり白粉やけをしまさずや

玄寶庵

無造作に脱げば玄寶痩せてゐる

吉野山にて

吉野山散るてふことを教へられ*

吉野皇居址

舞台人なし桜が散るばかり*

勝手神社にて

心ここにあらず静は舞ひおさめ*

吉水院

色々威落人に派手すぎて*

生々荘(山中湖畔)

襲ね着で聴くはうぐひすほととぎす

道後

丹前は坊ちゃん団子のぞきこみ

堺水族館

水族館に雀鮪にもされず生き

水族館おこせと鼻をつき合はせ

大安寺

二十六羽描かねばただの居候

仁徳陵

謹んで拜せば御陵ただ蒼し

敵 鳥

清盛へ何か云ひたい鳥へつき

干潮の鳥居は棄てた気味があり

箕虫庵に芭蕉を偲ぶ

みのむしの何代目かがぶらさがり

月ヶ瀬

一寸来て月ヶ瀬風邪をひくところ

奈良にて

奈良の宿ドカドカドカと靴を脱ぎ

神 鹿

鹿おもへらくなるほど刀掛け*

せんべいの薄くなつたを鹿も知り

宮様と知れる鹿寄せ見て帰り

正倉院

さう聞けば国宝らしい光りやう

お百度も足取早い二月堂

案内人きいているのかとも云へず

ゆびさすは三笠若草奈良ホテル*

松花堂へああ江戸の水京の水*

見てくれといふは礎石の興福寺

虫すだくまに極楽院は荒れ

猿沢の池

学童へ水が三分に魚七分

十八間戸秘めたる恋もありつらん

まんなをし地藏

七転び八起きを祈るまんなをし

般若寺

その額も嗟峨天皇で知られたり

東大寺

奈良二郎つかい果した人も聴き*

奈良の奥山

寝仏を歩け歩けが通り過ぎ

寢仏のこれも一つの生きる道

信心で来たのへ桜眞つ盛り

花見茶屋毛布はおなじやうにはげ

菖蒲池遊園地にて

夕桜とんぼがへりがしてみたし

東京

時雨れてる銀座に亀屋鶴五郎

四条にて

京の夏河原を一寸歩かされ*

雨の松本にて

遠く来て 信濃に 山のない日なり

水郷大洲

この鮎は 藤樹先生の喰べた鮎*

大和三本松村の山荘にて

名も知らぬ 山の起伏をうれしがり

翠光居を訪ねて

この村の 詩人が炭を焼くけむり

「旅人その後の作品」

べんちゃらのつもり 放送聞きました

悪筆をおしいただいたお女将なり

文楽人形みな寒むそうに寒むそうに

商魂があるかと養子ためされる

足袋の新さらだけだが僕に春が来た

サントリーで詩を談すのも春らしく

名が売れただけで淋しいことないか

梨里結婚

大安へ父も賛成しとくなり

織田作の話で更ける水都祭

水都祭まだこいさんが居そうなり

あきらめて嫁^またを無口と思ひ込み

女^おが下車^りたので岩波文庫読む

台風が外れただけでも人間はぼかんとす

爪^{つめ}弾きを聞いているのが金詰り

内閣が変りや君まで大臣か

風邪ひいて学者いよ／＼ジジむさし

苦沙彌先生そつくりという父となり

文化勲章人間いやになる頃に

ワンマンカーやもめ暮らしに似ておかし

いつ死んでもいいと云うとこまでは来た

民主主義いつまで金のない同士

宿替^{南北氏を悼みて}も今度は番地ないところ

古稀はよし弟子に孫弟子ひまご弟子

クイックスロークイックスロー古稀を華やかに

小料理屋女の匂いだけでよし

葉牡丹のつかみどころなし哲人の如く

用を持って来てお大事にお大事に

不平も云わぬ妻だ長生きするならん

余所の奥さんを鑑賞してらうちに着き

横綱がもろいたとえになりそうだ

パンとミルクの食事へ記者を待たすなり

われ老いしか千代紙を美しと見る

朝新聞を見たら友人が死んでいた

初日の出自由はここにあるものを

凡人にとつては松竹梅もよし

志賀高原奥信濃にて二句ここが山賊平とか

山と話そ霧のすがたもさまざまに

生み落とされて七十余年をウロチヨロす

貧乏だけどおちつきだけは失わず

第二の天性か女はマッチ摺る

時計が一つ鳴った役目を果たすよう

不幸にも気も狂わずに首相いる

妻よ踊れ残こんの色香ほのぼのと

血選挙を売る男一票も売り

おじいさんもう元旦の咳をする

黙秘権の行使ではなし老夫婦

坊っちゃん道後温泉にて二句と一脈通じる湯にひたり

道後の湯黙禅さんへ会釈する

昔とは父母のいませし頃を云い

台風一過今日は法事で忙しく

塀に沿うて歩るく姿も尼僧なり

デザイナーの間違ったのがはやり出し

李白という友あり遠きむかしにも

自分すら救えぬ人の立候補

老人におもちゃなしバラの前に立つ

健保の医者のへいお次ぎへいお次ぎ

一行詩これが私の墓だとは

十和田湖よみな酒になれ旅人へ

甲子園へ出たと言うのが会社に居

土地が沈むとよ平気でいる庶民

地藏盆恋の手習するもよし

錆びついた針のようでも生きんとす

城下町酒うる家をなつかしむ

黙ってはいても化石に候わず

俺だ俺だよと銅像云いたそう

人相も肝腎や蜘蛛殺される

蜘蛛の糸でも妻はわたしにすがりつく

この恋もフォアボールに終りたり

奥さんになやまされまだ重役室に居る

金婚に見馴れた顔もうれしけれ

振りむけばやっぱりついて来る妻よ

地球あわただしく揺れる淋しさ蒼く黄色く

敷かれてやるひまもなかりしに金婚か

地下センター幻の如く人がゆく

山と河人ひとりなき舞台なる

雑木林を通り抜け俗事へ戻って来

老らくの恋が土筆をふみにじり

小杉放庵逝く

星が流れたあれは放庵だったのか

ガガーリンと握手した日もあつたけど

鍵ッ子だったからか虫けらに魅力

台風と学者相撲にならなんだ

台風も聖火も通りゃことわれず

恋という字を老人凝視する

学生長髪問題で騒ぐ

長髪もよからん神武の末裔さ

定年後遇えば酒までやめている

捨てること何んでもないと思いに

三月三十一日入院 二旬

淋しがりやのボクを個室に放りこんだ

部分品がもうおまへんと言われそう

人生を暗いところで探りあて

しがみつくほどのこの世でなかりけり

五月十四日一ト先ず退院

車いすあの看護婦も若かった

炎の中に忘の字が灰となつて残り

死はゆらぐ文楽人形に死はゆらぐ

死の影が紋十郎の背後うしろから

トンボリが消えゆくか

道頓堀 メロンが腐つたなげきなり

いつのほどにかブックエンドに似てわれも

臨終が冬なら いろは 〱 おくりで逝かんかな

雲の峯という手もありさらばさらばです

麻生路郎文集



左手に煙草、右手に万年筆の路郎

先輩無用論の前提

熱と力とをもつて句作し研究し指導するところにのみ先輩の必要はあるなり。

古きより携はれるをもつて先輩となすが如きは勤続三十年の小學校教員を表彰するが如きのみ。要は勤続そのものに價値あるにあらずして教養如何にあるなり。その人の力、その人の頭、その人の人格にあるなり。我等川柳に力作し研究すること多時、しかも未だ新進作家たるに満足す。否、否、新進作家として終始せんことを望んで止まざるなり。

柳壇、阪井久良岐氏の如き五月鯉時代はたしかに先輩としての貫目を見せたりしも現時は僅に形骸を抱いて柳壇にのさばるに過ぎず、彼の如く自ら念佛を稱へて棺桶に近づかんとするものは一日も速に斯界より葬るべく葬らるべきが自他ともに爲すべきことなりと信ず。

ひとり川柳といはず今や總てのものに力の時代は來れり。世の多くの川柳家諸氏よ。力なくして何をか爲さんとはする。

我等は只、熱と力とをもつて力作し研究する人々にしてはじめて先輩たるの價値あるものと信じ満腔の敬意を表して指導さるゝを悦ぶものなり。敢てそが年少者たるにと、

その事に携はるのわかきとをいはざるなり。古くは俳壇内藤鳴雪翁にしてよく正岡子規氏に師事したるの勇氣を感嘆する。蓋し我等のみには非らざるべし。自ら先輩を以て任ずる人々の愧死すべき例證にあらずして何ぞや。

迷へる羊多き柳界にありて羊の迷はざらんことを希はば所謂思想の枯死せる大家先輩の自ら斯界を去るこそ、真にその道を愛し、その道に斃るゝ忠實なる作家たらずんばあらず。心すべきは所謂先輩が今後の行動にあり。果して自ら先輩を以て終始すべき偉大の人物が近き將來に於て出づべきや疑ふなきあたはざるなり。而して多くの實力ある先輩の輩出をのぞむこと切實なるものあるを告白し、現時に散在せる無用長物の先輩をして一日も速にゆくべき處にゆかしめざるべからず。(大8・9「楊柳」No4)

作家と環境

これは、大正10年1月9日(日)、全國川柳大會(本町橋畔府立大阪商品陳列所内衆樂館・78名出席)での、食滿南北を始めとする10本の講演の一つである。「番傘」大正10年5月号に掲載され、「雄辯 五分間演説と挨拶」(大正11年6月・藤谷崇文館)に収録された。本文は、「雄辯 五分間

演説と挨拶』に拠った。(編者)

あの馬鹿が本因坊に二目置き

この席上に列席せられてゐる諸君の悉くは川柳に於て本因坊に二目置かれる熱心且忠實な人達ばかりであらうと私に頼母しく思つて居る次第であります。

但しあの馬鹿でないことだけは不肖私が保証いたしました。とかく天才は馬鹿に見えるものでありますから諸君も天才であるといふ點に於て馬鹿に見えるのかも知れませんが。さうした人達即ち川柳に對しては皆造詣の深い所謂川柳門内漢でありますから一ツ御相談を試みたいと思ふのであります。

といふのは外でもありません。近く『大正川柳』の第百號を手に見まするに川柳はどう御考へになりまするといふ所謂名士達の各論卓説が掲げられて居ります。これは常に川柳の作家を以て任じて居る人達に取つては是非共聞いて見たい問題の一つであらうと存じます。川柳といふ狭い同じ圈内でいがみ合つてゐるが世間では川柳を果して、どう考へてゐるのであらうかと『大正川柳』はさうした作家の意志を代表してあの往復はがきを飛ばされたのに外ならぬのであらうと愚察する次第です。しかるにその解答なるものを一讀するに及んで少なからず失望せざるを得なかつたのであります。

川柳は江戸前にて嬉れしきものと存じ候だの、川柳は江戸ッ兒でなければ解せられぬものなりなどと如何にも一刀兩斷的に片付けてあります。恚うした解答をしたり、狂句を附して返書に換へたりしてゐる人達で、眞に川柳を解してゐるとは、遺憾ながら思ひ及ばないのであります。

何等申し上げる程の意見もこれなく貴誌の益々隆盛ならんことを祈り上候といつた意味の返書を出してゐる人達が反つて眞の理解者であるかも知れず、しかもさうした解答をする人達の心を非常に奥懐しく思ふのであります。門外漢で門内漢になりきつた様な解答を見せられると學者とか名士とかの頑迷なことを暴露されてゐるやうで大變に不愉快に思はれます。

しかし私としては、あの所謂門外漢の人達の解答の嘲罵や侮蔑が必ずしも當つて居らぬと斷言し得られぬ程に門内漢の活動力の鈍いこと、川柳の向上發展に努力することの頗ぶる微力なるを思ふのであります。一喝して門外漢の言としてしりぞけることの出来ないのは、一ツに我々川柳家の努力の足らざる反映として大いに恥ぢなければならぬのであります。

それに就いて思ひ起すのは曾つて私が『楊柳』誌上に『先輩無用論の前提』を載せました時に、これに對する論難が三行的にあちこちで書かれましたが、私の本當の意志のある所を讀んで呉れない人達に何をいつても到底駄目であ

ると思つて不問に附して了ひました。私の欲する處は眞の意味に於ける先輩有用論であつて單なる先輩無用論ではなかつた筈である。それは更に繰り返して讀んで貰へば直ぐ様お解りになることですが、私の切望してやまなかつたのは、川柳の向上發展を阻止する様な先輩何等川柳創作上、熱と力のない先輩を無用なりと絶叫してゐるのに外ならぬのであります。敢へて奇矯な言辭を弄したのは川柳界の耳目を牽かんが爲に用ひたまでであります。

更に私は各地を代表して來阪せられた各作家にお願いすることは、主義主張を異にせぬ川柳雜誌を各自の間に交換して、互ひに嬉れしがつたり、揚足取りをしたりしてゐるよりも、今少し社會的の雜誌を出して對社會的に川柳雜誌並びに川柳家の認められんことを望んでやまないのであります。

對社會的に認められることを得ましたならば、今日『大正川柳』の川柳をどう御考へになりますかの解答は忽ち一變して、眞に理解ある解答で我々川柳家をして大いに意を強からしめる次第であらうと存じます。此の外新聞柳壇の隆盛をはかり新聞柳壇を川柳の幼稚園視せず、僅に一ヶ月に一回發行の川柳専門雜誌のみに立籠らず、盛んに新聞柳壇を利用して大いに川柳宣傳の實を擧げられんことをぞみます。

不肖私も驥尾に附して今後共大いに努力する覺悟であ

ります。今迄述べましたことは私のこれからお話せうとする『作家と環境』に對する緒言でありまして、いよ／＼本論に入ります。しかし本論と申しましても簡單といふ希望もありましたので眞にその要點のみを申し上げるに止めたいと存じます。

あたりまへでありますれば作家とは何ぞや、環境とは何ぞやといふことからお話して、私の作家、私の環境といふものをきめてかからねばならぬのであります。この席上の諸君はのみ込みの早い方のみでありますので、さうした定義は省略して置きます。そして直ちに作家と環境、作家に及ぼす作家の環境といふ運びにいたします。

總て藝術家の環境と、その作品とを比較して見まするに作品に對して、如何に甚大に作家の環境が影響してゐるかといふことは何人もうなづき得る點であります。殊に川柳に於ける作家とその環境との關係といふものは裏と表、鏡に映れる物体そのものと、實物その物との關係の如く密接であります。その作家の作品中、十中の八九迄は確に作家の環境を描寫してゐるに外ならぬと考へられます。これは絶えず他人の句の選をいたして居りますものには、尤も興味の深いものでもあり、又選をする上に餘程便宜を得られる次第であります。

しからば作家と環境が、斯くも密接な關係があることは成程お説の通りであるがそれがどうしたのかと申される

でせう。私が静しずかに考へて見まするのに作家の環境そのものが、比較的物質上の苦痛が多い時には、その作家の作品の多くは眞珠の如き光りを放つて居ります。勿論これは熱心な作家の作品の話であります。そして精神的に苦しんでゐる作家は、尚より以上に、一種の信仰的な光りを作品の上に見せて居ります。これ等は即ち作家に環境が及ぼす大なる影響でありまして、之を逆境の恩寵とでも申しませうか。既に物故いたしました、奈良武ならぶ、青明、六厘坊、趣珍堂等は皆物質的に、精神的に、何れかの一つか双方共に苦しんであれだけの句を後世に傳へたのであります。

尙我々肉體の壊滅の變態的作品を産んで永久に生命を傳へてゐる作家も少なくないのであります。

なぜ物質的に、精神的に、肉にかかると影響を生ずるかと申しまするのに、作家がさうした環境にありまする時には社會に對する觀方感じ方が違ふのであります。その時の作家はたしかに物に對して感激が強烈でありまして、一種の熱を生じます力を生じます。この熱と力とは尋常一様の作品を描出するにしては餘りに力強いのであります。

私は物質的に豊富であり、精神的に健全であり、肉體的に健康體であるから、其作家の作品は傑出したものがないと斷言するものでは御座いませぬ。勿論さうした作家に於きましても傑出した作品を創造せられることとせうが、それは熱と力と充實してゐる時にのみ得られることであり

まして、多くは熱や力が稀薄なものになり勝ちであります。

假令、一小时前に述べました逆境の恩寵に依りまして、優れた作品を發表してゐる作家も、一度順調に向ひますると作品の上に、一大變調を來たし、平凡な句を多く見うけるやうになります。

之れは川柳に親しんで居ります多くの人達が、常に留意して居らなければならぬことではなからうかと思ひます。

それからその作家が花柳に親しんでゐる爲めに、花柳方面に對する句を發表する時に一段と優れたものを見せられ、女流作家であるがために、女性を內的に解剖せられた句を見せられるといふ様に、いろ／＼性の上から、職業の上から、生活狀態の相違から、時と、處を異にする上から、風俗習慣が違つてゐる上から種々雑多な句風が新しく生れて參ります。

我々は兎に角、あらゆる方面に對して大きな眼と耳と、鼻と、口と、心とを向けて最大最善の努力を拂つて川柳の爲めの向上を期しなければならぬと思ひます。

それが即ち私達が川柳の上に生きる唯一の方法ではなからうかと思ひます。簡單と言ひながら随分長くなりましてからこれ位にいたしましたして引き下ります。

終りに臨んで、各地から、わざわざ御出席になりました諸君の御健康を祈ります。

二通の手紙

次の手紙二通は、路郎君が實際宛各人へ夫々出すつもりで封筒にまで入れてあつたが、僕の顔を見てから、急に番傘の原稿にする氣になつたものである。文意並に辭句もそのおつもりで御覽を乞ふ。

水府生

贅六市外より（久良岐氏宛）

毎度繪ハガキやら、インペリアル、シエターのプログラムやら、川柳會の案内やら半折やら、應接にいとまのない程御送り下さつてありがたう存じます。

時々お目玉もいたゞきますが、これだけは別段ありがたくありません。路郎はやはりほめていたゞく方が嬉しく思ひます。

小生は近來ジャーナリストからブックメーカーになりつゝあります。毎日／＼原稿紙のハコの中へ字を並べることも誠に厄介です。これが飯のたねだとは思はれません。時々ウンザリします。

今日は肩の凝りから齒痛になりましたので一枚も書きません。そこらをぶら／＼して晩は火鉢の前にすはり込みましたが、何もせずにあることは私の一番苦痛なのです。

畫でも描いてあそんだらと妻がいひますが、下手な畫をかけば原稿をかくよりもつと骨が折れるのですから更に肩が凝ります。それでは差引勘定があはない。幾ら算盤がきらひでも、それ位な勘定ならまだ／＼出来るつもりです。こんな時にはボツコンリンリたる先生の書に接することがいゝと思ひますが、しまひ込んでしまつてあるので、いさゝか面倒臭い。

劍先生は西下らしいが今度は大阪はどうされるのかわかりません。先生も少々の神經スイジヤクを押しして西下されてはどうです。川柳以外に面白いかも知れませぬ。大阪も昔の大阪と違つてあます。しかしロンドンやニューヨークには未だ／＼寄りつけません。けれどもあんなものに似なくても大阪は大阪として面白い處があります。僕は大阪は好きですが大阪の人間は嫌ひです。交渉が面倒でいやになつてしまひます。ザツクバラんな處がないからです。番傘は僕を客員にしました。

僕はどつちでもいゝと思ひます。別段うれしくもありませんが、はがゆくもありません。水府先生が僕を客員にして置く方が都合がいゝのでせう。それは水府先生の都合にあるので、僕の知つたことではありません。時々やつて来て何か書けといひます。その時は仰せかしこみて何か書きます。それだけです。

川柳をもつと社會的にしたいとは何時でも思つてゐま

す。けれども社會の人は儲かる方へ走つてしまひます。

川柳も今のまゝ、だと老人の骨董いぢりのやうになつてしまひはしないかと思ひます。御説はどんなものでせう。

川柳といふものは非常に社會と接近したものだの川柳家は社會から逃げるやうに逃げるやうにしますが、それでは何時までたつても川柳王國がうまれないと思ひます。僕は不平家です。不平家といふ意味では先生と共通してはゐないでせうか。

今大阪で川柳の一番うまい人といへば川上日車でせう。けれども番傘の天下ですから、水府先生の羽振りはいししたものです。

當百クン全盛のあとをついだものと思ひます。番傘では五葉先生が大御所のやうな格になつてゐます。

水府先生の人心收攬術と來たらなか／＼うまいものです。△△でござれ川柳家でござれ皆やられてしまひます。とに角番傘は水府先生の番傘になつてしまひました。番傘の水府、水府の番傘どつちからいふても同じです。それほど水府色がはつきりしてゐます。けれども誰もこれに文句？異存？を稱へるものはありません。水府先生あればこそ、番傘が今日まで生きてゐるのですもの。水府先生は死なした妻君よりも番傘の方が可愛かつたのですからね。

僕なんか番傘をもつて來たら、もつと天才的番傘にして見せるけれど、その代り夭折は請合です。パサリツと唐

竹割にしてゐます。有象無象はチリ／＼バラ／＼でせう。あとは光風霽月といふ姿になつてしまひます。南北先生に番傘をまかしたら、さうですね。樂屋落ばかりの雜誌になつてウレチイ／＼といふでせう。

半文錢は名作家ですが、好漢惜むらくは川柳は金にならないといふて食ふ爲めの原稿ばかり書いてゐます。

何んだか書いてゐる中に長くなりましたね。これで齒痛で困つてゐるんです。どうです。仲々元氣なものでせう。

葭乃女史近來良妻賢母となつて川柳に顔をさらしません。今にロンドン（長男）がハイカラな世界的の柳樽を拵へる時代が來るかと思ふと親爺もくだらぬ川柳を作つてゐるわけにはまゐりません。

僕は今川柳漫畫「天下の別府」を書いてゐますが出來たら一部進呈したいと思つてゐます。

久良岐先生はあまりあちこちへ手紙やハガキを出しては不可いけません。先生を理解しない處へハガキや手紙は無用です。僕のところへならいくら罵倒して來られても差さし問いかりません。これでも先生に叱られた位でヘコタレルやうなやにこい男ではありませんから。（十年十月七日夜）

三道路から三道路へ（水府君宛）

今日は肩が凝つて原稿の方は休業だ。それで三軒目に住

んでゐる君に手紙を書くことにした。三軒目で手紙もおかしいが君は番傘の爲めに年中多忙だし、僕は僕の米櫃のために忙しいので、時々しか逢へないからだ。

今夜は久良岐先生と啞人とへ手紙とハガキを書いた。九段の親爺へは何んといふことなしに、御無沙汰をして居るからかいたのだ。それでも原稿紙へ十一枚あるのやで。達者なものだらう。

啞人へはみをつくしの五號に路郎先生を選者にしたのは、が、作例とかいふものを仰々しく二句くつ、けてあるので、あんなものをどつから引きづりだして來たのだい、こんな拙い句を作つては不可なといふ意味か、こんな句を作れといふ意味か判断に苦しむと叱つて置いた。

何故路郎先生の選になると作例をつけなければならぬのだらう？滑稽ぢやないか。新傾向とかいふのが來ては困まると思つてゐるのだらうか。俺はまだ新傾向といふ句を作つた覚えがない。俺の句は、そんな看板をくつつけなくつてもハツラツとしてゐると思ふ。(時にはさうでもないが)

なんだか、あんな作例が背後に立つてゐると社會主義の演説に巡査が立つてゐるやうで何れにしても面白くない。何時中止を命ぜられるかも知れないと思ふと選をするのに不安でいけない。

*九月號の番傘の表紙は莫迦にい、。

あんな名畫は八右衛門にだつてかけはしない。矢張り大正の川柳家のエライ所だ。大いに威張つてい、わけだ。

三つばんを知つてゐるかと思ふと足袋を脱ぎ 雲雀

云ひあてた年から實は三つ上 同

雲雀は段々上達して來る。雲雀だからアガルといふ洒落でもあるまいが、あの人體としてはなかく輕妙になつた。ウント褒めて置かう。

東海道の川柳行脚は是非つゞける必要あり。あれだけでは噴泉浴場へ連れて行つて貰つて何もたべさせて貰はなかつたやうな氣がする。けだし句が拙いといふ意味ではなし。尻切れとんぼだからである。君ならではと思ふ句が隨所にある。

番傘は近來駄句が大すぎる。チト整理を要す。さうすれば番傘が一段と光りを發するであらう。特に水府先生のフンドシに依頼するよりしかたがない。

株式屋の廣告が大に目立つ、あれは眼の飛び出るほど廣告料を取つてやれ。株式は儲かつてても減多に番傘のおかげだなんて思やしない。俗物の寄合だからね。けだし蹄二先生は俗物ではない。株式屋の連中の中で光つてゐる。だから何時でも貧乏なんだと、さうひやかしてはいけない。

この頃蹄二先生も番傘へ頭を出すやうになつた。それだけ俗物離れがして來たのだ。頼もしい。がしかしあまり俗物ばなれをして、番傘に廣告を出さなくなるとつまらない

から、その邊は水府先生の人心収攬術を發揮して貫はなければならぬ。

社友が随分出來て結構だ。この調子だと番傘が世界的川柳雜誌になるのも遠くはあるまい。

僕はこの頃少しく親爺らしくなつたやうな氣持がする。君はさう思はないか。齒が痛むのにあまり長い手紙をかくと後難が恐ろしいからこれ位でやめる。(十年十月七日夜)

(大正10・11「番傘」)

* 9月号の表紙は水府の画。上半身裸の女性が、前屈みになつて髪を梳いている。

麻生路郎氏の書翰

大正川柳百號たしかに落掌いたしました。おはがきも拜讀いたしました。昨冬以來度々あなたからも維想樓氏からも何か原稿を送れとすゝめていたゞきましたが、つい多忙なのでそのまゝになり失禮のところは幾重にもおわびいたします。一二度筆をとつては見ましたが、あまりかんばしいものでないので引き裂いてしまひました。そのくせ近來私は川柳のために非常に苦しんでゐます。これは私一人

の問題です。私は最早對照を求めずに川柳そのものに面接して居ります。従つてどの雜誌にどんな改革が起らうと私は知らぬ顔で過ごせます。それだけ氣樂に、一ト筋に川柳に打ち込むことが出來ます。對照を人に求めれば、ねたみや、いろんな不純な心持が出易いものですから對照を求めずに自分一人で歩いて行くことにすれば幾ら向ふへ歩いて行つても誰が何んと云つても腹も立たず、認めて呉れる人は勝手に認めて呉れるでせうし、認めて呉れる人がないからとて誰をうらむわけのものでもないと思ひます。

しかし、そんなのんきな氣持なのは他の川柳家に對してでありまして、川柳そのものに對しては、ます／＼苦痛がますますかりです。「人間は誰でも自由を求めます。そして求めた自由が得られると、今度は又好んで餘計な束縛をわれと我が手に拵らへ、自ら求めて苦しんでゐる奇怪な動物であります」と云つたやうな意味の言葉を厨川白村氏が何かの書物の中で書いてみられました。私も實生活の上に、精神生活の上に絶えず自繩自縛の苦しみを痛切に感じてゐる一人であります。私は私の實生活を續けて行く上に於て現代の社會組織に多くの不満を抱いてゐる一人であります。或る一部の人達のやうに實際運動に携はるだけの勇氣を持つてゐません。甚だ卑怯な態度のやうではあります。私の性質として、首が飛んでも主張し得るだけの確信が出來ないでは實際運動に携はることを私の理智は容

さなないので。私の貧弱な經濟學の知識では到底消費問題や分配問題に満足な解決を與へることが出来ません。世界の經濟學者と云へども、又偉大な世界的政治家といへども私の満足するやうな説明をして居らないのです。その間私は多くの悲しみと、苦しみと、悩みが横はつてゐるだけです。そしてそれ等の悲しみ、苦しみ悩みを凝視して生きて行くのが人生だと思はなければならなくなつてゐます。私の川柳はそこから生れて來るのです。私にとつては川柳は最早詩であつても、詩でなくつても、藝術であつても藝術でなくともかまひません。ある句は詩だ、ある句は詩でない。と云はれてもかまひません。見る人には黙つて見せてやります。味ふ人には黙つて味はせておきます。それより仕方がないので。

私の川柳は、さつきから申しましたやうに、たゞ苦しいから吐き出す排泄物に過ぎません。けれども私として至つて眞面目な排泄物です。時々趣味的な會合に交じつて句作します。これは自然第二義的なものとなるのは止むを得ません、けれどもこれとて矢張り眞面目さは把持してゐます。いくら遊びでもどうでもい、からといふ氣になれないのが私の性質だから仕方がありません。それが爲に單なる遊び的、享樂的、趣味的に考へてゐられる川柳家に對しては常に迷惑な言動があるだらうと思つてゐますがこれは特に大目に見ていただかなければ仕方があるまいと思つ

て居ります。私が吐き出す川柳が詩と認められ、藝術的作品として取扱はれるとしたら、それは思はぬ儲けものだと思ひます。今の私にして見れば、それは池の中の鯉がポカ／＼吐き出してゐる泡に外ならぬものです。もう一度同じやうなことを繰り返して云はせてください。私は從來の川柳や、川柳家なるものがいやになつて、いろんな議論をして罪もない人、しかも私とはレベルの違つた思想の違つた主張の違つた人達を苦しめたり、自分自身を苦しめたりして來ましたが、それは意義のないことだといふことを近來になつてさとするやうになりました。從來の川柳や川柳家がいやになつたと云へば感情的な言葉であるだけ多少の語弊があります。勿論これには相當の理由もあるのですがそれを一々お話する必要をみとめませんから省略します。たゞ感情的でなく相當の理由があるのだといふことだけを知つて置いていたゞけばそれでよろしいのです。それから例外もあるといふことを特に申あげておきたいのです。從來の川柳家の中にも私の心持を理解して呉れる程度の人もあるからです。しかも私と同じ方向を向ひて歩いてゐる人もあるからです。私と違つた方向に歩いてゐる人達のことばは申しません。申したからとて何等相互の利益にならないことはかりだらうと思ひますから、こんなことを長々とあなたに申あげてい、か悪いかそれさへ私は知らないのです。けれどもあなたと差向ひて座つてゐる時、ついで

ろんな話題が出たとしたらあなたも聞かずにゐるわけにはゐられないでせう、御迷惑でも私の云ひたいことをもう少し云はせて下さい。

私は川柳に對して多くの悩みがありました。苦しみ抜いた揚句の果てが實生活のうめき聲を川柳の上に盛らうとするとどこまで發達したのであります。それらの句は多くの川柳家によるこばれなかつたかも知れません。けれども私の川柳は入場料をとつてするお芝居ではありません、入りが悪るいからとて、止むに止まれぬものをひつ込める譯にはいかないのです。

どうしても、自分自身のものを押しひろげてゆき、底に深くきり下げて行くより仕方がないのであります。それは他の文藝だつて、みんなさうだと云はれるかも知れませんが、けれども私としては川柳が一番適切に、私のさうした心持を表現する事が出来ると思ふからさうしてゐるまでのことです。川柳が他の文藝から全くきり離された特殊の内容をもつてゐると思つてゐるのは川柳家の自惚に過ぎないと思ひます。たゞ、あゝした形式に於て、ああした内容を盛つたものは川柳の外にないといふ意見であればうなづけもします。川柳に盛られた内容、川柳に流れてゐる思想は他の作家の頭の中にも流れてゐると思ひます。夏目漱石氏にも、高島米峰氏にも三宅恒方氏にも厨川白村氏にも、荒畑寒村氏にも、白柳秀湖氏にも正宗白鳥氏にも發見

することは出来ません。その外スチープンソンにもチエスタートンにもバーナードショーにも、ニイチエにも、ドストウエフスキーにも、ストリンドベルヒにもあらはれてゐます。それを川柳の形式を藉りて發表するかせぬかの違ひだと思ひます。右に述べた人々は勿論從來の川柳に取扱つた内容以上のものを持つてゐられることは私が特にことわる必要もありますまいが、從來の川柳に盛られた内容以下の人々の如く誤解せられると甚だ敬意を失ふことと思ひますから一寸申添へておきます。しかし私はそれ等の文壇の人々を標的にしないまでも私が死んだあとで私の川柳が、それ等の文壇の人達の作品とならべて優つても劣つてはゐないといふだけのものを残しておかねばならないと思つてゐます。一川柳家を押し倒して見たり、一川柳家を標的としたり、古川柳（玉石混淆的に）を凌駕せんとはかりあせつたりすることは實に苦駄らぬ事ではありませんか。多くの川柳人が世間の人を相手に、どうですかんな川柳が出来ましたと云つて、フン、なるほど面白いですなア、仲々うまくうがつてありますなア、と感心されて、すぐに天狗になりますまし、ありもせぬ鼻をうごめかしてゐるほど滑稽で、しかもあはれなものはありません。そんな川柳をよろこぶ人達は要するに洒落のめしたり地口つたりして、よろこんでゐる市井の俗人です、商人が時間を待合はすために碁や將棋をさしてゐるのと何等かはりません。

いつまでもそんな川柳をもてあそんでゐられる人は太陽を拜んで満足の出来るお百姓と一緒に一種の幸福な人と云へるかも知れません。が、私は詰まらない氣がしてなりません。私だつて、二十年前には川柳を一つのおそびとして取扱つてゐました。その頃に若し活動寫眞があつたならば、そして活動寫眞を見るだけの金が自由に與へられてゐたならば私は川柳を平氣で棄て、活動寫眞へ走つてゐたかも知れません。いや屹度その方へ走つてゐたでせう。今でこそ私は活動寫眞を好みませんが、たんなる遊びとしてならば、活動寫眞はたしかに川柳よりも一般の人々をチャームする力を持つて居ります。だから私は川柳を棄てるといふよりも、川柳といふものを知らずに濟んだであります。勿論その頃の川柳の幼稚さ加減と來たら全くお話にならないものばかりでした、御大將の劍花坊さんや久良岐さんあたりの句でさへ今では明るみへ出して見ることの出來ないものばかりだつたから、あとの連中はおして知るべしであつたと思ひます。それが時の力といふものはおそろしいもので幾らかづ、育つて行きました、そして多少天才的作家もあらはれて來て、詩だとか藝術だとかいふことの範圍まで押しす、められました。けれどもそれは享樂的に、趣味的に成長したに過ぎないで、川柳を透して箇々の人間性を見るにはあまり貧弱なものばかりでした。私にはさう見へてならないのです。それが私自身としては「雪」の

句となり、「土團子」の句となり、「後の葉柳」の句となつて、やうやく川柳の中に呼吸も得られたと思つてゐます。けれども、こゝまで出て來るために、いかに多くの時を失つたかと思ひますと残念です。けれども、どんなものでもさう一朝一夕にいかないものだと思へば、あきらめはつく譯です。よしのがこの頃頻りにいろんな種を蒔いて、毎朝起きると裏へ出て、小つばけな畑をのぞき込んで芽の出るのを一日千秋の思ひで眺めて居ります。十數日經過して漸く目に見へるか見へない位な芽が出たのを發見して歡聲をあげました。私の川柳もこれからだと思つて居ります。歡聲をあげるにはまだく少し早いと思ひます。大いに水をやらねばなりません。肥料を與へねばなりません。太陽の恵みを與へねばならないのです。そして害虫を防いでやらねばなりません。夏の熱さを過ぎねばなりません。前途は實に遙かだと思ひます。

從來の川柳家（云ひ得べくんば）は實生活の壓迫に堪えかねて、川柳の諦めを持つた者か、到底他の方面に出られない低級な頭の持主であるがために、向上發展を望んでみたくところで、何處まで行つても趣味と享樂の埒外に出ないのであらうと思ひます。この言は多くの川柳家に對して甚だ面白くないことであつて、決してさうでないことを想起いたしたいと思ひますが、私の頭はどうしてもさうだ（これにも多少例外の人もあるが）と云ひ張ります。そして私

もその一人であることを思ひますと、大いに忸怩たるものがあるのです。

話を少し變へませう。「大正川柳」は段々、雑誌になつて行くやうです。編輯者をきめられた事は大變いいと思ひます。段々立派な評論家も出て来るやうです。新しい作家も生れて来るでせう。今一ト息ふんばつて下さい。そして川柳に生命を吹き込むことが必要だと思ひます。思はず長い手紙を書きました。これからもう寝やうと思つてゐるのです。今月は野口雨情氏が來鳴されたので、童謡や川柳で、うれしい日を過ごしました。苦樂園の六甲ホテルで夜の二時半頃まで川柳の話をしました。劍花坊さんの句も出ました。雨情さんは飯沼鬼一郎氏からすすめられて川柳を作つたと言つてゐました。多くの川柳家の名が雨情さんの口から漏れました。私の名も七八年前に大正川柳で選をしてゐたので知つてゐるとか、「懐手」も雉子郎氏か誰かに見せて貰つて讀んだといふ話も聞きました。野口雨情氏には昨年大阪の市民館で逢つたのですが、その時にはお互に川柳の話をしなかつたので知らずに済んでゐたのです。翌朝ホテルのバルコニーで記念の寫眞を撮りました。

大阪では「番傘」がもう一度息ひといきになりました。水府君は相變らず熱心ですが大勢なら仕方がないでせう。「小康」が出たので多少刺戟せられて又一梯段進むかと思つてゐます。

今度大阪毎日の方を辭しました。理由は頭が非常に粗糲

になるのを惧れたからです。もつと落つて暮らすことにしました。一度また關西行脚に來られては如何です。東京へも出かけたと思ひますが、さて尻をあげるとなるとその前後の用が大變なのでウンザリしてしまひます。四月三日金澤で大會があるから來ないかと久流美氏から案内を貰ひましたが外に差支があるので出掛けられません。この夏には野口雨情氏と滿洲朝鮮の方へ旅行せうぢやないかと約束をしました。今では行くつもりですが、實現するかどうか。

これからは少しは仕事によゆうが生じます。劍花坊さんや維想樓氏によるしくお傳へ願ひます。

三月二十八日夜 攝津鳴尾にて

麻生路郎

井上信子様

(大12・6「大正川柳」)

誤れる川柳觀を排す

▲現代人は刺戟に生きる

▲白紙になつて研究せよ

現代の讀物は私達にいろんな刺戟を與へて呉れます。こ

れを逆に申しますと私達の現代生活は讀物からいろんな刺戟をうけることを欲してゐるやうであります。私達が漱石などの小説をよるこんで讀むのも矢張りこの藝術的作品がもつてゐる刺戟を愛するのに過ぎないのだと思ひます。講談本でも、探偵小説でも、冒險小説でも、戀愛小説でも、其の他の新聞雜誌でも、何れも多少違つた意味で、私達に一種の刺戟を供給して呉れてゐます。それは瓦斯が必要な場合には瓦斯會社から、電燈が必要な場合に電燈會社から電力を供給して呉れると同であつて、一つは智識慾であり、他は物質的所有慾であるだけの相違であります。

しかしながら一方には、さうした讀物を落ちついた氣分で讀んでゐられない程、俗世間のことに忙がしい人達も居られます。

假令長篇小説の一冊や二冊は落ちついた氣持で讀んでゐられる境遇の方でも、自分でさうした作品を發表して見やうといふ方は至極稀であります。といふ譯は書いて見たいといふ材料が無いのではなく、それを専心に書くだけの纏まつた時間が與へられてゐない方が多いのでございませう。中には時間はどうにかあるけれども、文才の恵まれてゐない方もありませう。假りに文才のある方が一篇の創作を書きあげましたところで發表の機關を持たないといふ理由のために徒らに机上の一隅に積みあげてゐるに過ぎない方もあるのであります。

その他種々様々な理由の下に、遂に自分の心の底には何物か潜んで居るものがありながら發表もせず、闇から闇へ葬つてしまはれます。お互にこれ程遺憾なことはなからうかと存じます。

ところがこゝに、さうした色々な刺戟をうけることも出来れば、自分で創作も出来、至極簡單に二つの慾望を十分に充たすことの出来る一つの形式が有ることを諸君にお知らせしたいと思ひます。

そんな便利な形式が有るなら是非私にも知らせてくださいと直さま手をお出しになる方があるかも知れませんが、慌て、手をお出しにならなくても、ほつ／＼教へてあげますから、暫らく御讀讀を願ひます。

それは外でもありません、川柳を讀んだり川柳を作つたりすれば、いゝのです。

なあんだ川柳かと諸君はいふでせう。川柳なら君にわざ／＼教へてもらはなくても知つて居る。

さあことだ下女鉢巻を腹へ締めや、それから

居候三杯目にはそつと出し

の口だらう。あんなものでは、到底我々の複雑な現代生活を表現することも出来なければ、たいした慰めにもならないではないか。

我々の社會苦はあまりに大きい。あんな小つぽけな詩型

にどうして盛り切れるものかと一言のもとにしりぞけられます。

一應尤もつとものやうではありますが、それは貴方が未だ、眞實ほんとうの川柳といふものを御存じない證據であつて、あなたの知つてゐられるやうな川柳は眞實の川柳ではないのであります。それは人間に化けた狐のやうなものであつて如何いかに巧たくみに化けたところで狐は矢張り狐であつて決して人間ではありません。眞實の人間の方から云へば甚だ迷惑な話であります。それと同じで、川柳でも狐のやうな川柳のために、ほんとうの川柳がとれだけ誤られてゐるかも知れません。

私のいふ川柳は決してそんな安っぽいものではありません。さつきから申しております様に、現代人が讀物の中中から求めてゐる色々様々な刺戟を、てつとり早くうけ容れることの出来る川柳なのであります。おまけに現代人の心の底に潜んで居るものを吐き出すのに尤も好都合であるところの川柳をいふのであります。

なるほど、さつき私が知つてゐると云つた川柳は狐が人間に化けたやうな川柳であつて眞實の川柳はそんなものではないといふ話だけは判りましたが、果して眞實の川柳といふものが、そんなに私達の欲望を満足させて呉れるでせうか。私達には貴方のおつしやることは、なんだか我田引水のやうにしかうけとれませんとおつしやるかも知れませんが、誰でも始めはさう考へます。川柳なんか至極つ

まらないものだ、あれは閑人のひねくりまはす一寸のお道樂だ位にし考へないものであります。けれどもそれは全く食はず嫌ひのいふことです。

まあ、だまされたと思つて私達のすゝめる川柳を一度味はつて御覽なさい。私達の川柳は例へて云ひますれば、するめのやうなもので噛めば噛む程味が出てまゐります。一旦川柳の味を知るやうになりますと死ぬまで忘れることが出来なくなるのが私達の川柳の持つてゐる特色です。それほど私達の川柳にはチャーミングなところがあります。それに貴方のお考へになつてゐられるやうな奥の淺い、薄つぺらなものではないのであります。私達の主張する川柳の一句は一冊の長編小説よりも優れてゐる場合があります。勿論くだらない小説と比較しての話してはありませんが。それにお芝居のやうなものであれば、何時の間にか貴方の眼から、貴方の頭腦あたまから忘れられて行きますけれども、川柳の一句は記憶に便利なだけに、それから受けた刺戟はいつまでも忘れません。殊に貴方の思想を川柳の一句に纏めておかれたならば貴方の思想は永く後人の頭腦の中に生きて居ります。おそらく永久性を帯びるでせう。

私に言はせれば、川柳はその人一人の人格の發露であり、その人一人の歴史であります。率ては社會の縮圖であるとも云へます。川柳一句は個人の作であつても、その個人の作品の中に社會を見ることが出来るからです。

然らば君のいふ川柳とはどんなものであるか。例を示して呉れとおツしやるだらうと存じますから手近にある川柳雜誌の中うちから、私が佳句だと信ずるものを書抜いて御覽に入れますから御清讀を煩はします。

子の病氣亭主の方が先に知り

辭職して何をか云はん植木鉢

出前持生きねばならぬ顔でなし

女房の死は八百屋でも惜しがられ

手拭屋流すと見せて竿の先

ほうれんそうなどで母子の飯が濟み

蠟燭の焰のやうなものおもひ

牡蠣船の仲居行李と共に着き

電話口十五や六の沙汰で無し

歸さぬと物をかくすは初手の事

襷掛けの女房に悪い友と見え

障子閉め切つて世間と別にする

商用と答へて思ひある身なり

松の内屏風をたゝむ風をうけ

いま、でと違ひ淋しい酒ものみ

折れさうな處を踏んで手水鉢

何事も氣輕に立つは母ばかり

大阪と領くところは難波橋
廢兵の煙草を喫ふの憎らしさ

五葉

同

水府

同

同

同

松窓

同

蚊象

同

同

日車

同

同

佳汀

同

同

南北

某は笑ひ申さず國家老

悪人が榮えたまゝで初日果て

魂が抜けてるやうに駱駝立ち

柿の皮まで干からびた枕元

鶏へ輪替不意打喰はずなり

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

以上の句は皆私の主張する立派な川柳です。私はこれ等の尊うとい一粒撰りの川柳によつて私達の生命を永久に傳へたいと思つてゐるものであります。こゝにあげた作家の外に、こゝにあげた句の外にいゝ、句が幾らあるか知れませんが、一々列擧する紙數と時間とを持つてゐないので遺憾ながら右の二十有餘句をあげて其の一端を示したのです。こゝにあげた作家のうちには、既にこれ等の句に満足してゐられない方もありませうが名句であることには間違ひないので、勿論作句上の參考になること、信じます。

川柳にお馴染の浅い方には右の句の意味が、ハツキリお判りにならない方もあるだらうと存じますが、それをこゝで一々解剖してお話することが出来ませんが、それをこゝに思ひますが、句の解釋等うちについては更に別稿で説くことにいたします。こゝでは單に川柳といふものは決して世間で考へてゐるやうなつまらない、謎かけのやうなものでもなく、俗悪でお座敷にのほせぬやうなものでもないといふこと丈を知つていただければ、のです。そして今迄に先入

主となつてゐる曲解をさらりと西の海へすて、全く白紙となつて眞實の川柳を研究していただきたいのであります。私達が『川柳雜誌』を發刊することになりました主たる原因は世間の人達に眞實の川柳を知つていただきたいからであります。私達は私達の知つてゐるだけのものをぶちまけて諸君が川柳研究の水先案内をつとめたいと思つて居ります。

従來の川柳雜誌は申合したやうに初心者に不親切でありました。それは自分達の研究に忙がしかつたのにもよりませうが、初心者を導いたり、世間から誤解されてゐる川柳を釋明するために用ひるだけの紙面を持たなかつたのもよるのでせう。私達はさうした點を特に、この『川柳雜誌』で補つて行きたいと思つて居ります。

(大13・2「川柳雜誌」No.1)

一句を遺せ

北齋といふ人が、浮世繪風景畫の先驅者であることは私の説明を俟つまでもなく、先刻御承知のこと、存じます。

この北齋が、何故、世界的藝術家であるゴッホと多くの共通點があるまで、激賞されるやうな偉大な藝術家にな

つたかと申しますと、それは自己の藝術に對して非常に眞劍であり、しかも彼自身の修養と努力が尋常の苦心でなかつたと云ふことが北齋をして今日の名をなさしめたのであると思ひます。

彼の生活は生涯を通じて實に慘澹たるものであつたにもか、はらず、彼は彼自身の個性に隨つた觀方と工夫によつてあくまで突き進んだのであります。如何に彼が彼自身の藝術に對して尋常でない苦心を拂つたかは、彼自身の作品が時として、苦澁な感を伴ふほど嚴肅な筆致であつたことによつて看取することが出來ます。彼は構圖や設色において實に大膽でありました。しかし一面においてはなかなか細心なものがありません。そして、一筆をもゆるがせにしてゐないのであります。即ち彼は自己の藝術に對して少しもごまかしといふものがなかつたのであります。

彼は自分の觀方に隨つて、あくまでも眞を得やうとした、その謹嚴な態度は此の畫家にとつて著しくあらはれて居ります。彼は眞を摑むといふことにおいて全力を注いだのであります。

私達川柳家にとつても、彼のこの態度によつて進んだならば假令、現在におきまして、苦澁な感を伴ふ句をつくつてゐるといたしましても何時かは識者に認められるやうな句の完成期に達することが出来るのであります。

明治三十七年以來、作句に苦しんで來た私にも、未だ、眞

に後世に遺して、はぢないやうな句は一句も出来てゐないのであります。二十年の句の中から自分で捨てかねる句を選び抜けば或は十句位はあるかも知れません。けれども識者に見せれば一顧の價値もないかも知れないのであります。しかし私は川柳を棄得ないのであります。それは私の生命を永久に傳へるものは川柳の外にないと思ふからであります。

私は、北齋が如何に自己の藝術のために全力を注いだかを讀んだことがあります。

彼の苦心に對する挿話としては、彼の一門人が、その習技の未熟なのを歎じて筆を投げんといはしました際に、北齋の娘はその門人に對して笑ひながら『我父（北齋）は幼年より八十有餘歳の今日にいたるまで、日夜筆を採らざることなし、然るに過ぐる日、猶腕を組て『余は實に猫一疋をも畫くこと能はず』とて落涙し、自ら其畫の意の如くならざるを歎息せり』と云つて勵ましたさうであります。

この言葉によつて見ましても北齋は八十幾歳の老年になつても、猶ほ絶えず藝術的良心の下に此の刻苦をつづけて行つたのであります。彼は人物の解剖學的知識を得んがためには接骨術の名醫のところにもまで通つたさうであります。私達川柳家にも常にこの心がけがあつて欲しいのであります。

嘉永二年の四月十八日に彼は年九十で此の世を去りま

した。

しかし、死する時に北齋は『若し天が我に十年の命を長うせしめたら眞正の畫家になるを得たであらう、否五年永うしたならば』と云つたさうであります。

現代の川柳家の多くは、後世の識者を俟たず、團子細工に等しき拙悪な句ばかり作つております。いや私もその一人であります。

畏友小出檜重氏が、まだ有名でなかつた頃に私に對して『僕は死ぬまでたつた一枚でいゝから立派な畫を描いて死たい』と語つたことがあります。そして彼は有名になることを非常におそれて居りましたが遂に二科の審査員とまでなつても彼は矢張り昔の彼であるところに、彼の偉いとこがあるのだらうと常に敬服して居る次第であります。私も又小さな川柳に、甘んじてゐないで、せめて一句でも後世の識者に示しうるやうな立派な川柳を遺しておきたいと思つて居ります。本誌の讀者におかれましても第二の北齋となつて後世に遺し得る一句のために力作せられたのであります。

(三月二日夜二時過)

(大13・3「川柳雜誌」No.2)

新聞柳壇雜感

明治大正川柳發達史といふやうなものを書く人があるとしたならば、新聞柳壇といふものを見通すことは出来な
いと思ひます。

川柳が今日のやうに旺んになったのは全く新聞柳壇の
お蔭であると云つても決して過言ではありません。

劍花坊氏の日本新聞時代や、久良岐氏の電報新聞時代を
云々するまでもありますまい。おそろく明治大正年間の川
柳家で、新聞柳壇に關係が少しもないと云ひ得る人は一人
もないと思ひます。殆んど十中の九人までは、この新聞柳
壇から生れて來た作家であります。

例ひ文藝雜誌の柳壇や川柳専門雜誌から生れた人達で
も新聞柳壇に全く無關係だとは云へますまい。

それ位、我々川柳家の爲めに貢獻して呉れた新聞柳壇が
今日一般川柳家によつて重視せられないのは何故であり
ませうか。これは川柳家として是非考へて見なければなら
ない重大な問題であると思ひます。



新聞柳壇が一般の川柳家に重視せられない第一の理由
は、新聞柳壇の句は川柳として拙惡なものが多いといふ點
に歸着するやうであります。川柳家の眼から見れば新聞柳

壇の川柳は川柳の幼稚園であつて、よくもあんな拙い句を
作つて満足が出来るものだと云ひます。しかしさう云ふ川
柳家自身も曾ては其の新聞柳壇に投句して、自分の句が活
字となる歡びに血潮を湧かした一人ではなかつたでせうか。

それが何時の間にやら、川柳家として川柳専門雜誌に句
稿を發表するやうになりますと、新聞柳壇といふものは振
り願つても見なくなりませう。そして、僕も新聞柳壇の投句
家時代があつたと云はぬばかりに、それ等の作家に對して
先輩顔さへする有様であるやうに見受けませう。しかし、こ
れは大いに誤つた考へではありますまいか。



新聞柳壇は單に、川柳家から蔑視されてゐるばかりでは
なく世間の人達からも、新聞柳壇は詰らないと云はれて居
ります。否、川柳は詰らないとさへ云はれて居ります。

世間の人達は、ほんとの川柳を知りませぬ。彼等は皆、こ
の新聞柳壇の川柳を見て、あんなものは文藝的價値などは
少しもない。あんなものなら幾らでも作れる。と斯う罵倒
を浴びせかけます。

これ等の罵倒は川柳をほんとに愛する者にとつては忍
ぶことの出来ない屈辱であります。そして君達はほんとに
川柳を知らないからそんなことを云ふのだとやり返しは
いたしますが、世間の人達は決してそれに屈しません。な
あに、川柳を知らんことがあるものか。川柳を知つてあれ

ばこそ詰らないと云ふのだと更に云ひ返します。彼等の知つてゐるといふ川柳は即ち新聞柳壇の川柳を見ての話しであります。

ほんとの川柳を作つてゐる人達が、世間から川柳をみとめさせやうとして幾ら努力したところで、これではいつまで経つてもみとめられる時代が來ないのが當然であります。



そこで、ほんとに川柳を世間からみとめさせやうと思つたならば、先づこの柳壇の革新から圖らなければ駄目だと思ひます。

川柳家の多數が、紙面が足りなくて發表するのに困難を感じてゐる川柳専門雜誌にばかり立て籠らずに、どしどしその作品を新聞柳壇によつて發表することあります。そして世間の人達の誤つた川柳觀を打破することが、一般からみとめられるための捷徑ちかみちではなからうかと思ひます。

今日川柳専門雜誌が幾ら澤山あるからと云つても全國に於ける新聞柳壇の數とは比較にならないであります。そして専門雜誌の發行部數と日々にちに發行される新聞柳壇の發行部數とは更に比較にならないでせう。

その比較にならないほど多數の發行部數を有する新聞柳壇を川柳家が無視して、川柳を世間からみとめさせやうといふことは、餘りに愚かな話ではありませんまいか。

新聞柳壇には又新聞政策としての方針もあることであり

ますから、必ずしも川柳家の自由にはならない點もありませう。多數の讀者兼投句家を満足させるためには、主として滑稽な句を選ぶ必要もありませうし、又極く初心者はつしやうの句は添削してまでも載せなければならぬ必要も起るでありませう。

しかし、相當の作家の句が、それ等の句と共に發表せられたならば、川柳必ずしも拙ちやくづい句ばかりでないといふ世間の諒解も得られます。初心者にしましても、それ等の佳句を讀むうちには自ら教へられて句の上達を速かにもすれば、句の傾向を知るの便宜さへ與へられることになります。



果して、さうだとすれば一舉兩得だと云はなければなりません。新聞柳壇を今日の如く無視することは、世間の人達が川柳を蔑視するよりも、より以上に誤つた考へだと思ひます。

しかし、新聞柳壇の選者が必ずしも、川柳に忠實な川柳家でないことも考へなければならぬのであります。

たゞ新聞の編輯に従事してゐるが爲めに、川柳位なら僕でも選が出来るといふデモ選者が選を擔當してゐる新聞が少くないのであります。それがために相當の川柳家は、之に投ずることを潔しとしないのもあります。

碌な川柳があつたらぬとか、柳壇が一向奮はないといふ新聞社がありましたならば、選者について考へて見る必

要があります。川柳家の方でも、そんな柳壇に對しては、相當な選者を推薦し、應援的に投句して、新聞柳壇の隆盛を期しなければならぬと思ひます。

◇

新聞柳壇の選をされた方は、御承知でありませうが、いくら好きな川柳であつても新聞柳壇へ送つて来るやうな句ばかり繰返して讀まされることは選者としては可成りな苦痛であります。

それでも、それ等の投句家の中から、相當の作家が出てくれ、ばといふ期待をもつて、随分根氣よく選をつゞけて行きます。

そして、相當未來のありさうな投句家の句に接すると一種のよろこびを感じます。

しかしそれは長くは續きません。時々い、句を見せてくれると思つて、心ひそかによるこんでゐますと、川柳専門雑誌の方へ首を突つ込んでしまつて、新聞柳壇から全く影を没してしまひます。その時に選者は軽い失望を感じるものであります。

柳壇は再び團栗の背並べとなり、拙悪な句の集合地となるのであります。同時に世間からはこの時の柳壇を見て川柳は詰らないと云はれるのであります。

新聞柳壇を埋草のやうに考へてゐる新聞社の編輯局の人達にも、新聞柳壇はもう我々の出る幕でないと思へてゐる

る川柳家にも、ほんとの川柳が、世間の人達に認められるやうになるまでに新聞柳壇を活躍させるため、お骨折が願ひたい。

川柳家がその積りになつて少しく努力すること、新聞社の人々に少しく骨を折つていただきさへすれば、新聞柳壇の革新はさして難事ではないと思ひます。

(大13・4「川柳雑誌」No.3)

時事吟に就て

▼これは舊稿です。大正日日(大正九年十月四日)の文藝欄に一度載せたことがあるのです。時事吟は難句になり易いといふ例にあげておきます。しかし川柳の門外漢からは普通の川柳よりこの方がよるこばれます。興味的に句が出来てゐるからです。本誌の讀者には、あまり時事吟を作ることをおす、めしません。が句作の練習には面白いかも知れません。時事吟は矢張り新聞のもです。(路郎生)

川柳時事吟は川柳として更に一城壁を設けられた観がないでもない。時事吟は時の流れに依つて生命の稀薄を感じ

ずることが深いので従来川柳を詠む人々からは殆んど研究もせられず時に新聞の片隅に夜光蟲の如き光を投げてゐたに過ぎない。それにしても餘り精選されたものが少いので一般川柳家は時事吟を喰はず嫌ひの畑に追ひ込んでしまつてゐた。

自分が前の大正日日に時事吟を募集してみた處が仲々面白いものが集まつて新聞柳壇として普通の川柳を壓倒してゐる觀があつた。これは全く新聞そのもの、性質上時事吟の方が普通の川柳よりも適するといふことを語つてゐるものではあるまいか。

川柳時事吟が世間の人達から共鳴され歓迎された事は時事吟が主として活社會の動的方面の事象を描寫するにある。萬人の以て言はんとし言ひ得ざる處のものを易々としてつかんで見せる手腕に依るのである。川柳時事吟の採るべき材料は到る處に轉がつてゐる。多少の研究によつて之を捕捉することは敢て難事ではない。

これは春未だ寒い時分のことである。心齋橋筋の大丸呉服店が祝融氏の爲に烏有に歸した事があるが、その時分の時事吟に

大丸が焼けて十合の火の廻り

といふ句を發表した處が大丸の人達も十合の人達も一讀苦笑されたさうである。曾て三越が焼け、高島屋が焼け、大丸が焼けた時に、何人の心も次は十合の番だといふことを

物好奇でなくとも想像するのが人間の常である。

この句の面白いところは何人も言はんとし言ひ得ざる處のものを僅々十七文字に收め得た巧妙さにあるのである。

自分が先日所用で十合の横を通つた時に偶と請願消防の設備がしてあるのに氣づき、今度は十合の番だといふ群集心理の歸趨する處を必ず言ひ當るものであるが、十合の今日安全であるのは全くこの用意があるがためであると思つたと同時にこの用意あらしめた二句『大丸が焼けて十合の火の廻り』を想起して心中少からず快味を感じたのである。時事吟必ずしも漫罵するものではない。之が讀み方の如何に依つては處世上に一大警告を與へられるものである。

時事吟の多くは、その生命が利那的であり花火線香的である。捕捉し來つた題材が白熱化してゐる時に尤もその句の價値ある時であつて如何に大問題であらうとも一度その内容の事象が世間の耳目から遠ざけられた時には句としての存在はあり得るともその生命に於ては全く稀薄なものとなつてしまふ。俳諷柳壇中に多くの難句を發見するは全くこれが爲である。それ等の難句の多くはその時代に於ける時事吟であつて當時は尤も川柳として高い句ひのしたものに違ひないけれども時代の霧は之を遠くさへぎつて今日の我々には到底うかがひ得ない境地である。従つ

て色々な書物を通じて當時の時代世相を知り得るともそれ等の句に對する感興は當時の人達に及ぶ筈がない。この缺點あるが故に今日の川柳家には時事吟は無價値のものとして顧みられないのであらうが、まだこのことに言及した川柳家がなく又時事吟に對して深く研究してゐる作家もゐないのである。自分としても前の大正日日で時事吟の選をして始めて興趣を覺へ、種々研究するに到つて普通の川柳よりも或る意味に於ては川柳の眞の川柳たる所は時事吟にあるのではなからうかとさへ思つたのである。

時事吟は要するに穿ち、皮肉、諷刺と言つた寸鐵殺人的のものであるから或一面から見れば俗諺として標語として永久的に生命あるものもあるであらう。従つてその格調に到つてはきび／＼したものを採らなければならぬ。如何に内容が面白くとも格調を亂しただら／＼したものであつては駄目である。

今度大阪市で募集した國勢調査宣傳の川柳の如きは矢張り時事吟である。『調査洩れ十年間は亡者なり』あまり名句ではないが時事吟としては穿ち得た句であらう。『昨日來て明日立つ人も數に入れ』の如きは想といひ、格調といひ立派な句である。

時事吟の選は普通の選をするよりも更に難事である。取扱つてある問題の大小に依つて意味の不明なる場合がある。假令意味が明瞭であつても殆んど句としての生命のな

い凡句に陥つたものが多い。

次に前の大正日日に掲載された時事吟を少しばかり並べて小註し、時事川柳は事件を如何に取扱ふか參考の資料とする。

奥様になど、觀劇切手くれ 路 郎

女教員流石に惚たとは言はず 同

算盤を置いて遊ぶも其の當座 同

生活改造急に椅子から買ひ始め 同

愈々の愈々電話度數制 同

殿様で暮せる身をば十二年 同

迷宮に署長晩酌どこでなし 同

罪の無い者まで入れる寫眞班 同

崩落に身受もそれつきりになり 同

植木屋は今は何をかつ、むべき 同

以上の句で『奥様になど、』の句は松竹合名會社で始めて觀劇切手を賣り出したので女の好きな芝居菫蕪芋蝸南瓜の筆頭に位するだけに『奥様になど、』一種の賄賂に利用されることを諷刺したものである。女教員云々の句は同じく松竹が觀劇の勞働者デーをやつて社會から非常に歓迎されたので引續女教員デーをやつた處が鷹治郎丈のあてやかさを見て賞讃の辭を惜まなかつたのに曰く『世間の奥様達が大騒ぎをなさるのは無理もない』そこで川柳子は流石に惚れたとは言はずと婉曲に突つ込んだのである。

「算盤」は物價騰貴の餘映をうけて南地が藝娼妓の花代値上を實行したのでお客様の方から觀察を下したものである。「殿様で暮せる」は桑原子爵を詠んだもの「迷宮」は女學生殺しの句「崩落」は財界に一大變動を與へた四月を想起する句である。今にして思へば本町筋が軒を並べて討死にするから残るのは御堂さんと區役所と警察であると噂された當時南地五花街は火の消えたありさまであったのである。

右の外選舉騒ぎの時には

貴重なる一票鬼權おにごんなどと書き

半文錢

代議士とまで伊之やんも成上り

同

安藤は又も酒屋の借りが殖え

同

もの入りついでと板野思ふ也

同

中橋の宣言言文一致體

同

落選の味は木崎に判りすぎ

同

頼まれもせぬに嘉幸かこうに入れたがり

路郎

演説に清瀬講義の口調が出

同

奥様へ電話のかゝる總選舉

同

總選舉遠い縁家を思ひ出し

雪山

の如き皮肉揶揄至らざるなく興趣は汲めども盡きぬではないか。

(大13・5「川柳雜誌」No.4)

大正十三年を送る

大正十三年の十二月が来た。世間の人達は年末といふきまりきつた忙しさに、あはただしい足取りを見せて往きかうてゐる。が私には未だ本當の十二月が迫つて来ない。と言つて落ちついてものを書くだけの健康が還つて来ないので半ば諦めたやうな心持ちで其の日その日を送つてゐる。

しかし、川柳を社會的に宣傳すること、初心者を指導すること、川柳に對するいろんな研究を發表することの使命をもつて生れた本誌の過去十一箇月をふりかへつて見ると必ずしも無意義な月日が流れたものとは思へない。

これも多數の讀者の好意と、特別寄稿家の後援と同人の堅い結束とが、兎にも角にも今日の川柳雜誌社の基礎をかたちづくつたのであるといふ事を思ふと感謝の外はない。

従來の柳誌が兎糞的にポツリ／＼と發行されて來たのに反して、本誌は創刊以來一回の休刊もせず刊行して來たこと、選句に於ても非常な嚴選主義を斷行して來たこと、本誌の投句家並びに同人の句が號を逐ふて、めき／＼と向上したことを思ふと嬉れしさに涙ぐましくなる。

川柳の革新運動といふことも可成問題かなりになつてゐるや

うであるが私としては革新のための革新と言つたやうなことはしたくないと思つてゐる。しかし一部の人達のやうに革新運動を異端視するやうな狹量さにはくみしたくない。まして川柳を娛樂視したり、戯作的態度を採つて俗化せしめて行くやうな川柳家を見ると嫌きらたらく思ふ。例へその作品が過渡期的のものであつて多少の拙劣さがあらうとも其の純眞な態度には衷心から敬意を表してもよからうと思ふ。

が、しかし所謂革新川柳家をもつて任じてゐる人達にも革新川柳家を異端視する所謂既成川柳家と同様の狹量さが無いであらうか。自己の主張を急速に貫徹させうとするところには必ずその人達の氣づかない狹量さが流れてゐるものであることを思はせられる。共に俱にもう少し考へられたいものである。

私は革新川柳家といふ言葉も既成川柳家といふ言葉も好まない。好まないだけではなく餘り適切な言ひ表はし方ではないやうに思ふ。

川柳の内容を進化せしめることは川柳家の當然なすべきことである。進化させる必要はないただ變化さへさせてゐれば、それでいゝと思ふてゐる人達は社會といふものをまるつきり知らない人達のいふべきことであつて常に變

化と進化が巧みに交錯するところにそのもの、生命が躍動するのだと私は思つてゐる。

大正十三年を送るに際して、これだけのことは言つて置きたい。
〔大13・12「川柳雜誌」No.11〕

句作と評論

(一)

川柳に議論は要らぬ。黙つて作れ。議論通りの句が作れてはゐないぢやないか。斯かうした言葉が長い間繰返されて來た。

しかし、議論は相變らず絶えないばかりか段々多くなつて來た。黙つて作れと叫んでゐた人々でさへ時々沈黙を破つてゐるのを見うける。そして議論通りの句が作れてゐないではないかと嘲罵はしりまを恣まにしてゐた人々さへ議論通りの句が作れてゐないのを見うける。

果して川柳に議論は要らぬものか。黙つて作つてさへゐればいゝものか。議論通りの句が作れてゐなければ議論をしてはならないものか。私は否いな、否いな、否と叫ばざるを得ない。

(二)

従来、川柳に議論は要らぬと叫んでゐた人達について考察すれば、彼等には議論するだけの思想をもたなかつた場合が多い。もと／＼遊戯的立場から川柳を弄んでゐた人達に議論のあらう筈もなかつたが、少し毛の生えた人達も、少し手強い敵手を見出す時には、必ずこの川柳に議論は要らぬ、黙つて作れ、議論通りの句が作れてゐないではないか、といふ慥に身を潜めて僅に敵襲を脱してゐたのであつた。

そして彼等の應戦と云へば三行か五行か半頁足らずの揚足取的毒瓦斯を發してゐたのであるから心あるものは到底お相手は出来なかつたのである。

そんな状態であるがために、議論らしい議論は何時までも生れて來なかつた。さうした状態が川柳の藝術運動をどれだけ阻碍したか知れない。

(三)

川柳は今日、天保調の悪夢から全く離脱してゐるにもか、わらず、社會からは相變らず天保時代の川柳と同視されぬまでも蔑視されることに於ては大した相違を見ることが出来ないではないか。

これは果して誰の罪か、原因は何處にあるか。川柳家の深思すべき問題ではあるまいか。

(四)

ひとり、川柳と云はず、他の文藝に於てもさうであるが、研究なく、批評なきところに發達はのぞまれないのであることは私の言を俟つまでもあるまいと思ふ。

一つの名議論は他の多くの作家の句作態度の上に何等かの影響なくして止むものでなく、更にそれ等の句によつて新しき議論が生まれ、相互に刺戟されてそのもの、内容を價値づけるのであるから、眞摯なる議論に對しては寧ろ大いに歓迎せなければならぬのである。例令黙つて作る人達にしても必ずそれ等の議論には耳を藉さなければ句作上の向上はのぞまれないものであることは斷言を憚らぬ。

(五)

かく云へばとて、私は、あらゆる川柳家に大いに議論を闘はせよと叫ぶものではない。人自ら性狀を異にしてゐるのであるから作句の天稟を有する人々にして、議論することの拙なる人もあれば、それ等の作品に對して議論することの炯眼を有し、犀利なる筆を有するも自ら作句するときには、その技これにともなはぬものもあるのであるから自ら自己の素質につきて知るの要あることを思ふのである。批評家としての素質なき人々の議論は徒らに斯界を混亂せしむるに過ぎないばかりでなく自他ともに益なき業であると云はねばならぬ。

近時、大正川柳誌上に掲げられた、田中五呂八氏の『日

車氏の藝術』の如きは未だかつて柳壇に見ざる名論でなければならぬ。私は斯うした真面目な議論の續出を歡ぶものである。五呂八氏が謙讓するが如く自ら作句して名句を得ないからとて『日車氏の藝術』の一文が價值なきものとは何人が斷言し得やう。

(一六)

要するに、批評家は批評家として冷靜に、正鵠に眞摯に論ずることを忘れなければ一句を遺さずとも柳壇を益すること甚大である。作家も又作家としての天分を發揮することに努めなければならぬのは勿論であるが、彼等批評家の言に耳を藉し、自己の天分を發揮する上の榮養分を吸収することにつとめなければならぬのである。

従來の如く、作家にして評論家、而して柳誌の經營者であることはます／＼擴大しつゝ、ある柳界に對して頗る至難のことではあるまいか。この意味に於て黙つて作り得ぬ作家は大いに筆陣を張り黙つて作り得る作家はそれ等の批評によりて自己の人生を凝視する上の解剖刀となし、又柳誌經營の才ある人々は、それ等の作家、評論家のために大いに盡さんか。將來の柳壇が如何に發達すべきかは期して待つことが出来やう。

(大14・5「川柳雜誌」No.16)

かや 蛸の外にて

—— 半文錢氏の一讀をのぞむ ——

一 所謂革新に就て

前號で半文錢氏が革新派の上に所謂をつけられることをヒドク氣にしてゐるが、私も所謂をつけた覺えがあるのだ、その理由を少しく説明しておこう。これは、私の用ひた所謂の説明であつて他の人達が用ひてゐる所謂の説明ではないから、それと混同しないやうに願ひたい。日本語はどうも不便で同じ文字でも使用者に依つて意味が違つてゐるのであるから厄介である。

私の用ひた所謂は最近二三年間に革新派たることを自稱してゐるグループをさして呼んでゐるのである。だから勿論半文錢氏もその所謂革新派の一人と見てゐるのである。さうした扱ひ方を不當とされるならば取消してもいいが、僕は便宜上それを使つてゐるのである。と、いふのは『舊い川柳では、もう駄目だと悟つたら、ソレが革新なんだ。句の傾向を意味せずに、心の革新だ、心が革新すれば革新派ぢやないか』と君が云つてゐるやうに心の革新は、自稱革新派の人達ばかりが革新してゐるのではないからである。だから所謂革新派の名を與へて夫れ等の人々と區別する

必要がおこつて來るのだ。同じく革新と稱してゐても、主義主張を異にしてゐる場合には、同じ革新の名によつて一括して論ずることは論者として採るべき道でないと思つたからである。私は所謂革新派といへども、これを二三に分類して見てゐるのである。中には何處が革新なのか一寸見當がつかかねる所謂革新派もある。所謂革新派から所謂革新では駄目だと悟つて逆轉的に革新した觀が無いでもないものもある。斯ういふのは逆轉革新派とも云つて所謂革新派と區別しなければなるまい。中には模倣革新派と呼んだ方が適當ではないかと思ふ所謂革新派もある。君のいふ『舊い川柳では、もう駄目だと悟つたら、ソレが革新であり、心が革新すれば革新派ではないか』といふ論旨で行けば僕なんかは實に古い革新派でなければならぬ筈である。舊い川柳では、もう駄目だと悟つたのは明治の末葉であるからである。その後、私等の句は新傾向の名をもつて呼ばれたが、私等は自ら稱して新傾向派とは云はなかつた。たゞ私等と傾向を異にした人達が勝手にさう呼んでゐたに過ぎなかつたのである。革新といふ言葉も文壇から輸入した言葉であるが、使ひ方が非常に拙であると思ふ。僕は革新派と聞くと、政治團體や十三等俳優の一團などを思はされてイヤだ。だからある一部の自稱革新派の人々を呼ぶために所謂をつけたまでである。むしろ、短歌のアラ、ギ派のやうに氷原派とか大正川柳派とか呼ぶ方が適切さ

がありはしないかと思ふ。所謂をつけた私の理由は以上の如しである。

二 漸進主義の假裝と急進

これも、前號の所謂づき革新派を氣にした記事の續きに『川柳のためにでなしに、自己のために川柳があるのだ、だから主張を貫くためには急進する。むしろ漸進主義を假裝するよりは、さうしてゆく處まで行つて仆れる——それ等の方が何んなに藝術的であらう。私はこゝろで氣づきながら、感情の上で革新派たる事を避ける人々を卑怯だと思ふ』と書いてゐられるが、これも立場の相違といふことを考へれば何でもない話である。自己のために川柳があるのだから主張を貫くためには急進するといふ事と、自己のために川柳があるのだから主張を貫くためには漸進するといふ事とは、主張として同じでなければならぬ。だから、その一方が一方を非難することは出来ない。ゆく所まで行つて仆れる方が藝術的だといふが、それでは主張を貫くといふことはお留守になつてゐないか。主張を貫くためには途中で死んでも死にきれぬといふことの方が、どんなに人間的で、しかも悲壯で藝術的ではなからうか。藝術的と云ふ言葉を妙なところへ使つてしまつたが、花火線香のやうに闘つて死ぬだけが藝術的ではないと思ふことを云ひたいのである。要は立場の相違である。殊に君の説く感情の上

で革新派たることを避ける人々を卑怯だといふやうな言葉も己を強いることの甚だしいもので一種の愚痴だとかうけとれぬ。もう少し堂々と作句と評論で押しつけてゆき、あとは知らぬ顔であるのがよからうと思ふ。子供だつて強いられることはいやだから。

三 放哉に對する涙

半文錢氏は又『俳人放哉の安心を知つてヒドク心にうたれた。彼の井泉水氏に宛た手紙をみて、なぜか私は涙が落ちた。』『あの死を速める覺悟は決して逃避ではない』と讚美してゐられるが、僕は放哉の手紙を讀んでも涙も落ちなければ彼の死を讚美する氣にもなれない。彼の死は一種の贅澤である。彼の弱さから出立してゐる。僕はあゝ、した方面の人に少しの同情もない。一茶の立場などは全然違つてゐる。句に於てもあの生ぬるさでは董哉きんさいはおろか一茶の足元へもよりつけぬ。僕はむしろ、半文錢氏自身の『私も、なるべく悲惨な死に方をして社會制度の缺陷に酬ひたいと思ふてゐるが、どうも死ねぬ。なかなか死ねぬ』の數語にこそ同情の涙を禁じ得ないものである。

(大15・9「川柳雜誌」No.32)

川柳作家十五戒

川柳作家にとつては一戒でも事は足りる。百戒でも不足である。要は作家のあたまである。

(一) 多讀多作せよ

川柳作家にとつて、先づ多讀と多作が必要だ。多讀と云つたところで何んでも手あたり次第に讀めといふ意味ではない。多作と云つても無闇に文字を羅列せよといふ意味ではない。

(二) 選者を選べ

作家の持つよき特異性を跡かたもなく摘みとつてしまふものは凡庸選者の業績であるから、作家は又選者を選ばなければならぬ。選句は誰でも出来るが、選者は誰でも出来るものではない。

(三) 右顧左眊すな

一旦選者を選んだら、右顧左眊してはいけない。句が抜けるとか抜けぬとかいふやうなことを問題にすな。あたまのハツキリしない作家は右顧左眊してゐるひまに、句作に對する興味を失つてしまふ。他人が作るから作る。友達が作れといふから作る。といふ態度になる。結果は鑄型によつて句作する。墮力で作つた句に力があらう筈がない。

(四) 技巧に耽るな

作家が右顧左眄してゐる間に、歲月の幾ばくか、無意味に流れる。この期間が作家にとつて最も危険である。うちから燃えあがるものを持たずに、外部から肉づけやうとするからである。内容に何等の新味を見せず、徒らに文字の技巧にばかり駛りたがるからである。この弊は知らず識らずに新狂句を生むものだ。新らしい境地を、新らしい境地をと、あせればあせるほど横道へそれる。

しかしながら技巧を無視するところに詩は無い。所謂無技巧の技巧は作家にとつて最初のものであつて最後のものでなければならぬ。

(五) 自惚れは禁物

多少とも認められかけた作家の陥穽は虚無に魅惑されること、自ら思ひあがつて先進を意味なくへイゲイしたがることである。作家が自己の句を尊重するのは、當然すぎることはあるが、その多くは自惚れに墮するものである。所謂小主観に囚はれ、己れ一人を高しとする。一度そこへ足を踏込んだが最後一寸救ひ悪い。

(六) 器用で句作すな

器用と浮氣は友達だ。器用な作家は何んでもござれて手を出したがる。しかし一物をも掴まずに退却しはじめるのが定石である。折角の才能が自殺をする。

この意味から云つて、器用な作家は、人一倍句作に精進

しなければならぬ。まあこれ位でい、と思つてはいけない。器用は三年にして行詰まるが、鈍重の作家は底が知れない。句作に器用を排する所以である。

(七) 努力を忘れるな

作家は常に初心者の如き敬虔さで努力しなければならぬ。努力せずして、佳句は得られぬ。努力のないところに向上はない。句は人格をそのまゝに光る。或は濁る。

(八) 句を棄てよ

よき作家は常に、自選に於て嚴でなければならぬ。選者の勞を俟つまでもなく、自ら句を棄てるにやぶさかであつてはならぬ。出来た限りの句を發表する事に汲々として倦まない作家は名のみ知られて實が伴はぬ低劣な作家ではない。發表慾にのみ驅られてゐる作家は永久に川柳の堂にのぼる事は出来ない。曾ては多作家として知られてゐた作家が次第々々に寡作となつて行くのも、自ら棄てるからである。しかし詩囊の枯死する場合は別である。

(九) 句で争へ

川柳の作家は先進に對する禮を知らぬものが多い。先進の缺點をあげつらふ事にのみ腐心して、自己の缺點を見ることを知らぬ。先進の缺點を指摘したところで自己の偉さに何等變りのないことを思はない。常に先進の長所を見て、自己を磨くことに心すべきである。句に於て先進に肉迫すべきである。句に於て先進を凌駕してこそ、はじめて

自己の存在がある。黙つて作れとは誰でも云ひ易いが行ひ難いことである。

(一〇) 句なき作家となるな

常に川柳政治に没頭してゐながら作家顔をしてゐたい作家がある。僅に小片の雑誌を刊行してゐて、川柳作家を以て任じてゐるやうな口を利いてゐる。雑誌は雑誌の経営者にまかせよ。よき作家を歓迎せぬ雑誌はない筈である。柳誌経営を買つて出るのもいゝ、がいつしかアパートの持主としての忙しさになやまされて作句を忘れてしまふ。句なき作家——何んと淋しい言葉ではないか。

(一一) 識者をおそれよ

作家は亦識者をおそれなければならぬ。識者といふのは句に於ける先進の謂ではない。達眼の士は意外のところにあるものだ。識者をおそれぬ猪突者は必ずや井蛙の類と同線上に立たされるであらう。

(一二) 自己を掘下げよ

自らの句境を深く掘り下げて行け。そこに何物かを發見するであらう。自己の天地は自己の心のなかにしかない。他人の影を趁おふものは遂に自己の影すら見失うものだ。

(一三) 生命ある句を創れ

生命ある句を創れ——とは常に私の絶叫するところである。川柳の芭蕉たれ、良寛たれ、自己の人間的陶冶を思はずして何の句ぞ、何の川柳ぞと云ひたい。句の派を争ふ

はそもく末である。

(一四) 句の非凡を目指せ

非凡なれ——

とはいさゝか難しい註文かも知れないが、しかし私は非凡なれといふ。少くとも非凡を目指して句作せよと云ひたい。平句凡句は自他を剋するものである。

(一五) 一句を遺せ

一句を遺せ。一句を遺せ。これが私の云はんとするすべである。私は自分の主宰する「川柳雑誌」の第一巻に於て、既にこの事を詳説した。それほど私は一句を遺すことを以て作家の信条とすべきだと思つてゐる。生涯を通じて一句を遺し得ぬ作家こそ、永久に柳壇から抹殺されるべきである。柳友よ。一句を遺せ。——(一九三四・四・一四)——

(昭9・5「きやり」)

川柳
行脚 鮮満ところどく

連絡船徳壽丸で三月十日午前七時半釜山着

八時上陸、直ちに東萊温泉へ

東萊温泉の湯槽で、蛙のやうに兩脚を投げ出した私は落

人に似た軽い溜息をした。玻璃戸越しに眼に迫るもの蒼い空と白い雲。

東菜は一時預けで來てる客

東菜へ來て拐帶の一夜明け

午後釜山見物——夜行で京城へ

靴の底が傷むほど釜山の街をてくついたが、あまりに内地化してゐるので物足らなかつた。一瞥の釜山は小樽の街にそっくりだ。その人口が、その商店街が、市街の中央にある一丘陵龍頭山が、そこから瞰下した港の風光が——。南濱で往きすり合つた妓にはじめて植民地の匂ひを感じた。濱邊に沿うて鮮人の出し店も長閑だ。鮮人の日向はつこ、鮮人香具師の人寄せ、みちばたで蒸し芋を賣る媪腐りゆく彼等の生活。

思つたほどに寒くはない。昭和公園をよこぎつて、ま晝の線町をのぞく。

龍頭山内地を向けば涙する

龍頭山船は内地をさしてゆく

釜山釜山君も九州訛りなり

鮮人のあすをおもはぬひなたほこ

緑町泣いて來たのもあるだらう

十一日午前八時二十五分京城着、言也、麗月寇、

大口坊諸君の出迎えをうけ、朝鮮ホテルに入る

柳建寺、言也兩君の案内で新聞社歴訪、市中見物

京城の土を踏んで南大門はうれいもの一つ。これを廣告塔に利用せざる京城をゆかしく思ふ。

x

京城の街の屋根看板の文字は巧拙二様の懸隔があまりに甚だしい。巧いのは莫迦に巧くて拙いのは莫迦に拙い。巧いのは鮮人の筆になり、拙いのは内地人の筆になるものらしい。詳しくは知らない。

x

李王家所管の昌慶苑は静寂そのものだ。苑内に風呂屋のやうな、幼稚園のやうな喫茶店のあるのもうれい。

朝鮮ホテルで落合ふ約の春元紀太君が奉天

よりの歸途、午後九時二十五分來城

十時を少々過ぎてはゐるが、まだ眠るのには早いやうな氣がした。妓生を見せてやるといふ紀太君と一緒に雨具もなしに雨の街へ出た。自動車を拾ふつもりが、呼びとめてもく駄目だつた。二人は轂まじりの雨に頬をうたせながら繁華街へと足を向けた。旅なればこそである。

妓生を斷念して雨に濡れた外套の背をカフエーのストゥヴに向けた。

十二日の午後、紀太君と朝鮮料理の

明月館へ

明月館の晝は静だつた。大きいことは大きい温泉地の宿屋でぶつつかるガランとした感じだつた。部屋の天井は

高かつた。紀太君が飛びあがつて帽子をかけた。それほど高いところに帽子掛けがあつた。部屋には内地のやうに床の間がない。入口以外の三方が屏風を横げたやうな襖だ。いろんな繪や文字が書いてある。ゆかは油團が敷かれ、その下がオンドルになつてゐる。疊一疊敷位のお雛さんの敷物みたいなものが鈎の手に二つ置かれ、その一方の上には襖に接して、上半身をもたせかける大瓦型のもたれがあつて、その兩脇に四角な枕の如きものがある。これが内地の脇息にあたるわけだ。何れもドンスでつくられてゐる。これが主賓の席だ。家族であれば家長の席だ。

右の外に下座には坐布團が敷かれてある。料理は十五六種一度に出たが朝鮮獨特の味のものにはホンの僅しかない。刺身が一ト鉢あつたが、これなどは料理が内地人向きに轉向しつゝ、あることを示すものであらう。

曾て仁川の故矢田冷刀君が柳誌の名にしてゐた神仙爐なるものも出た。

×
次ぎぐと酒が運ばれた。

私は内地の酒より、朝鮮の藥酒を選んだ。たとへ僅かの時間でも土地に親しみを加へたいからであつた。妓生たちも酌すまゝ、にうけた。

金月色は清楚端麗の妓生だつた。俗悪さが微塵もなく、確かに一流の名を差かしめない。姜花仙も美しかつたには

違ひないが金月色とくらべては梅と桃の差があつた。金月色の特技は内地歌だつたが私は彼の女の内地歌を聞かうとはしなかつた。

簡単な朝鮮語を彼の女から教はつた。私は「累卵の遊び」の扉へ、ナーヌン、タンシーヌル、サラン、ハムニダー（妾はあなたを愛します）と朝鮮文字で書いてくれと云つた。彼の女は一寸はにかなだが、こゝろよくそれを果した。姜花仙にも書けと云つたら、二人も愛する譯には行かぬからと昭和九年三月十二日明月館記念姜花仙と署名してくれた。彼の女は同じ文句を要求したやうに誤解したらしかつた。斯うした考へ方がいかにも素人臭く感じられた。そして内地の古い型の婦人と同じやうな道德律をもつてゐることを知つた。

×
大阪へ遊びに来ないかと云つたら、姜花仙は何かの宣傳にでも使ふのかと訊いてゐた。さうぢやない、お友達として来ないかといふ意味だと云つたら黙つてしまつた。金月色は来るとも来ないとも云はなかつた。なんだか座敷がしんみりとしてしまつた。

×
私の歓迎會が京城驛前、共立無盡の樓上で四温吟社主催朝鮮新聞社後援の下に開かれた。仁川からも出席者があつた。（別稿會報参照）

會場の中央、縦列に二尺四方位な角の大火鉢が据えら

れ、炭火が地獄のやうに赤々と燃えてゐる。關西では見られない句會風景だ。柳人の一人々々が非常に緊張した面持ちで句會に臨んでゐた。

私自身も疲れを忘れて柳談を續けた。主客共に感激、句會は盛會に終つた。春元紀太君は時間の都合上散會と共に歸阪の途につき、私は花月での歡迎招宴に臨んだ。

南大門夜行の人も通り抜け

李王家を偲びて

昌慶苑櫻もすぐに散るものよ

妓生

内地歌よりうれしきは君が立膝

朝鮮ホテルにて

寢返へれば朝日のあたる總督府

十三日午前八時京城發平壤に向ふ

今、十二時十分前だ。汽車が汗浦といふ小驛を過ぎるところだ。

車窓から見る外は雪で眞ツ白だ。天氣は非常にいい。太陽は輝いてゐる。僕の周囲は鮮人ばかりだ。

私の席のすぐ前に、口をあけて眠りこけてゐる四十恰好の鮮人がゐる。相當の服装はしてゐるが、前腕に金春澤と文身をしてゐる。彼氏おもむろに起き直つて汽車辯をばくつきはじめた。私は黙つてそれを眺めてゐた。食事が済むと大げさに楊子を使つてゐる。食後の果物を僕が提供する

と、彼氏はつゝいろいろな話をはじめた。彼金春澤は自ら語るところによると平壤座の興行主で、京城へ鮮人の役者を買ひに行つたんだとのこと、さう聞けば向ふの方の席に女優たちを交じへた一行が乗り込んでゐる。

私が大阪を發つ前に、新世界で金龜子一行の日滿提携喜劇をのぞいて來たことを話したら、彼氏は大きくうなづいて、金龜子なら知つてゐる。あれは天勝の弟子で相當のところまで行つたのだが、今は別れてしまつたのだと談してゐた。赤玉で娘々祭を見て來たことを談した。

興行といふやつがなか／＼あたりませんでなアと獨言のやうに云つて彼氏はそろ／＼身の上話まではじめた。自分には妻子と妾とあるが、罪ですな。どつちも冷めたくていけません。もう子どもが、バクチをうつなとか酒を飲むなとか意見をしますので憂鬱ですわいと、金さんなか／＼の話好きだ。今日初日を出す積りが翌日になりました。平壤へ來たら見て行つて下さいといふ。僕も今日が初日なら觀て行つてもいい、んだが今夜の夜行で安東へ行くつもりだと談してゐるうちに平壤についた。

午後二時五十二分平壤着、野田錦魚君等の

出迎へをうけ牡丹臺や市中見物

平壤は朝鮮の京都だと云はれてゐる。飲むにいとところだと云はれてゐる。こゝは妓生學校の所在地だ。

牡丹臺への道は雪が氷になつてゐる。自動車を牧の茶屋

のところまで乗り捨てた。牡丹臺は日清戦役の傷痕を見せて旅人の心を奪ふ。原田重吉の玄武門は出張寫真屋のスタヂオ代用と云つた形だ。

見物のついでに博物館を見せて貰つた。なあに大したものではありませんと錦魚君が頭から否定してしまふ。なるほど大したものではないが、木柵館は古墳の内部構造を見せたもので私には珍らしかつた。

夜は歓迎句宴。人数こそ少かつたが、鎮南浦からの出席者を見たのはうれしき極み。句作に柳談に酒盃に興味湧く。こゝは若い人々よりは春魁、可敷と云つた老人側の熱が高さうだ。錦魚、柳也、夢月の諸君等に一層の奮起を期待したい。十一時ごろ散會。

私の豫定表には平壤出發が午前二時四十分になつてゐる。それまでの時間をすゝめられるまゝに春魁老のお宅へお邪魔した。再び酒盃を手にして柳談に耽つた。語るにつれて春魁老は老でなく、熱の人春魁なるを知つた。深更雪のちらつく中を辭した。

大同江あんなところに煙突が

大同江濯ぐ女が景になり

牡丹臺學校からも來るところ

十四日午前七時安東着、濱屋旅館に入

り窓外に高脚踊を觀る

無理解な警察人になやまされながら列車は鴨綠江を渡る。流す筏の情緒も何もあつたものではない。漸くにして警察人の手を放れたら今度は税關吏によつて煩はされた。

驛の構外では變な宿屋のポーターにつかまつて、汚ならしい老耄支那人の俚に乗せられた。宿は驛の極く近くとばかり思つてゐたら、かなり離れたところにあつた。朝湯にお這入りになつてお食事をなされたら如何でございませうと云はれたので、それもさうかとウツカリ乗つてしまつたのだ。さて宿へ着いて二階の部屋へ通るとストゥヴすら火を入れてゐない。女中がそろ／＼ストゥヴの準備をはじめ出した。朝湯どころの騒ぎではない。いささかムツとしたが何も經驗だ、辛棒々々としつと横になつた。ところが窓外で賑やかな囃しの音が聞える。チンドン屋かしらと思ひながら、二重になつてゐる硝子戸を開けて首を突き出して見ると、顔を彩どり異様な扮装を凝らした婦人達が細腰弱々しく細長い脚の上に乗つてあちらへ寄つたり、こちらへ寄つたり、街を練り歩いてゐる。それを眺める見物人が、背後から兩横からぞろ／＼とくつついて行く態が如何にも奇異に感じられた。女中に聞けば高脚踊ですと答へた。なるほど、これが高脚踊か。こんな宿屋に連れこまれてゐたばかりに、巧く高脚踊が見られたとは何が幸福か、世の中のこととは凡俗の豫測をゆるさないわけだ。

芎草君の案内で市中見物、阿片小賣

所や××書館へ

馬車に乗せられ、寒い風を肌を感じながら、阿片窟へと
いそいだ。云うまでもなくそこは支那街だつた。細い汚ら
しい街に馬車をとどめて、阿片小賣所の看板のあるバラツ
ク建へ這入つた。その家の二階の裏階段を降りて更に奥の
家の二階に昇つた。部屋は横に長く幾間かに區劃されてあ
た。いづれも内地のお花見のやうに赤毛氈が敷かれ、枕が
二つづつ並べられてはあるが何となく陰惨な感じがした。
殺されても判らないやうな一番奥の端の部屋に這入つた。
そこには若くて美しい、しかし蒼白い顔をした女があつた。
彼の女は共に寝轉んで阿片吸飲のサーピスをしてくれる
のである。私はかなり警戒をしながらも勇敢に阿片の吸引
を試みた。パツパツと女の教へる方法で煙を吸つた。
なるほどふーツとした陶醉気分になる。私が曾て病院の事
務長時代に支那歸りの阿片中毒患者N氏が入院してゐた
ことを思ひ出した。彼氏の談すところによると、おそらく
阿片を吸うた気分はどこころよいものはない。支那にある
羽化登仙といふ文字は阿片を吸うた時の氣持ちを云ひ表
したものだ。酒ではどんなにい、酒を飲んだところで羽化
登仙の気分にはなれないとのことだつた。しかし私は羽化
登仙の氣分を避けて彼の女から通れた。

×
阿片窟を通れた私たちは××書館のドアを排して階上

に昇つた。書館といふのは圖書館ではなくて内地の××樓
にあたる娼家のことだ。その一室で七八人の支那婦人が
ドヤ／＼となだれ込んで来た。アレとコレと指させれば他の
女達は何等不平さうな顔もしないでサツサと引きあげて
行つた。まことに簡単に取引が出来る譯である。私たちは
指さした女に伴はれて、其女の部屋に這入つた。部屋の中
には彼の女の箆笥があり、違ひ棚があり、茶器があり、時
計があり、ベッドがある。こゝで私たちは茶を啜りながら
暫く談して歸つた。カーテンを引けばベッドはかくれてし
まう仕懸けになつてゐた。彼の女は敷布やハンカチの洗濯
物を這入つて来た男に渡した。それ等の洗濯賃は彼の女の
負擔ださうな。彼の女たちは内地の斯うした種類の女より
も無智ではあらうが、それだけ素直で朗かなんじやなから
うかと思はれた。

×
夕べから満洲飯店で私のために歓迎句宴が開かれた。十
二三人の會合だつたが、二三人の人々をのぞけば川柳に對す
る熱は稀薄のやうに見受けられた。この人達にとつて、川
柳會は一緒に會食するために利用せられてゐる觀があつ
た。幹事の一人から、それは事實です。何か寄る機會が
ないかと待ちうけてゐる人々が多くて、川柳そのものは近
來あまり振はないのですとのことだつた。折角來東された
のであるから、これを機會として大いにやらうぢやないか

といふ一部の聲もあつた。私も大いに將來を期待するごとくした。

私は九時の夜行に見送られて奉天ほうてんに向つた。

新義州素通りされる夢を見る

安東で時計すられた事を知り

阿片窟身の振り方を頼むやう

十五日午前六時奉天着、夜行の

十一時四十分で新京へ

少しく早く着き過ぎたので奉天の朝は雪にふか／＼と眠つてゐた。

江戸みつる君を公衆電話で呼び出したが、幾回かけても通じない。トランクを一時預けにして雪の街へ出た。煉瓦造の洋館が押し並んでゐる驛の中央の大通りが千代田通りだと判つたので、ぼつ／＼歩いて見た。雪が珍らしかつたのである。

オフィース街であるのと、二重戸になつてゐるので訊くことも出来ぬ。たつた一軒満人が出て来たので早速その男に訊いて見たが、我不明白ウオアーミシバイと云つて、それつきりだ。まあ歩いてれば判るさと向ふへ／＼と出かけて行つた。大して風はないが寒いことは朝早いせいもあらうが非常なものだ。寒いといふよりは痛いと思つた方が適してゐる。耳が痛くて千裂ちちれさうだ。中耳炎にでもなつたら大變だと思つて襟巻を顔から耳へぐる／＼巻いて、僅に眼ばかり出して

歩くことにした。

忠靈塔を越してまだ向うへ行つた。遂々判つた。千代田通の一等端だつた。硝子戸越しに店をのぞき込んで見た。事務机がならんでゐるばかりで誰もゐない。電話に出ない筈だ。叩いて見たがこれ又通じない。もう家さへ判ればいゝ。もう一度驛まで引返さう。そのうちに起きるだらう。こんなに早く来たのはこつちの勝手なんだから仕方がない。昨日安東で打電するひまがなかつたのだから、誰に尻の持つてゆきやうもない。

まあ、ポツ／＼のんきにやれと、ソロソロ滿洲化して来た。驛の食堂でコーヒを注文した。飲んで見てたいしたことはないと自分でうなづいた。職業意識といふものはおそろしいものだと思つた（当時、路郎はキング喫茶店を蔑乃にさせていた―編者註）。それから朝の食事に移つた。食堂備付の新聞を一通り眼を通した。もうよからうと食堂から電話した。『へエ、みつるだす。どこにゐてはまんね』といふ大阪辯が聞えた。もう大丈夫だ。すぐにみつる君が来てくれた。

二人で鐵路總局や滿鐵用度や消費組合や大毎支局やヤマトホテルや堅いとこばかりを歴訪した。ヤマトホテルでは昨日来て今日もう立つといふ大連の大嶋清明君に會ひに行つた。夕方になるとグツタリと疲れた。

喫茶店の青い鳥をのぞいた。これも職業意識だ。職業意

識ばかり働かしてゐるのもいゝ、加減疲れる。

夜は権兵衛へ案内された。こゝは關東煮屋だが大阪あたりの關東煮屋とはいささか趣きが違つてゐた。

濤明君も昨夜はこゝへ來たんださうな。小座敷に柳人の短冊がかかつてゐる。私のもあつた。日本人はアメリカへ行つてお茶漬が喰べたくなる筈だ。僕はもうすき焼が喰べたくなつた。みつる君が『何か喰べたいものはおまへんか』と母親のやうに訊いてくれた。『僕はすき焼が喰べたい』とまるで赤ん坊や。云ひたいことをいふ。『そやあつたら』と権兵衛の女將に頼んで、すき焼をして貰う段取りになつたのだ。女將の部屋を片付けてくれてそこですき焼でお互の健康を祝福した。何よりの御馳走は女將が私の句をよく知つてゐたことだつた。『子澤山おれの枕はどこへいた』の句をほめてくれたのはうれしかつた。なんでもうれしくなつてくるところは赤ちやんの本領かも知れない。

うれしく飲んで鐵路新京へ向つた。

みつる君に

君既に箸の長さになれしころ

十六日午前七時新京着、

滿洲屋旅館へ

新京は滿洲國の首都で中部滿洲の最大農産市場であり、附屬地其の他を合せて人口十五萬、内内地人が二萬とある。

そこへ國都建設局が出來て、人口五十萬を入れる市街地をでつちあげることになり、廣つばといふ廣つばへ迎も鈍棒に大きな建造物を目白押しに押し並べる設計が出來上つてゐる。既にその三分通りは實現したと云つていゝ。新京驛から國都建設局へ一直線にあげつばなしの大道路が出來てゐる。私がこゝの處長を訪ねた時に銃劍を手にした衛兵が敬禮をして受付まで案内してくれた。

建設局の天井の高いこと驚くべきものがある。内地と違つてあけつばなしの滿洲である。この位高い天井でなければ釣合がとれないのであらう。私は處長の先客のあくのを待合はしてゐる間に、そのあたりを一瞥した。

私の眼の先一間ばかりのところ、一間以上もあらうといふ袖のある大机を据え、そこへ一人の滿洲人が悠然とまゑ込み、兩腕を伸ばして大亞公報といふ漢字新聞を靜かに眺めてゐる。

彼氏の前には書類入があるにはあるが、一通の書類すら這入つてゐない。國都建設局のお役人としてはあまりにも事務閑散に見える。内地人なら欠伸の三つ四つもして他人の仕事の邪魔でもしにゆくところが流石に大陸に育つた彼氏は欠伸一つしない。眺めてゐた大亞公報を靜にそこへ置くかと思へば又それを取りあげ、悠然として眺めてゐる。右方の壁には天井までとどく大亞細亞地圖が貼られてあり左方の壁には飛行機上から見た塗つぶしの圖面が貼

られてゐる。その外に何も無い。すべてスケールが大きい。處長に會つた時、この人の事を聞いてみたら、京大出の醫者ですとのことだつた。

×

建設局事務官の紹介で滿洲協和會の人たちにも會つた。滿人の風俗習慣、迷信などについて得るところがあつた。

×

新京の支那街、張氏二號邸跡なども見た。

×

滿洲屋へ泊まれば柳陽君に會へるとばかり思つてゐた私は迂濶だつた。柳陽君は所用で、昨日奉天へ行かれたが、今日は戻られるでせうとのことだ。期せずして昨日は奉天で濤明君も柳陽君も滞在してゐたわけだ。

×

翌十七日の朝、柳陽君と食事を共にし、滿洲屋の支關で記念撮影をした。それから八時四十分の哈爾賓行の列車に投じた。

車中の寢臺で虫を拾ふ

南京虫よこ、が新京いふところ

午後二時十分ハルピン着、旅館鶴屋に投じ

市中見物夜は立井登美坊君とその二令弟と

の案内で夜のハルピンを観る

新京、ハルピン間の汽車賃はペラ棒に高い。これが問題

の東支鐵道だ。滿洲國へ高く賣りつけやうとしてゐるので現在とはとれる限り高くとるんださうだ。

私は列車ナムバーや、カーナムバーや、シートナムバーを見て寢臺に乗つた。汽車が動き出す前に圖體の大きい露人車掌が来て私の切符を持つて行つてしまつた。一寸不安だつたが、考へて見ればそれでいゝ譯だ。私を哈爾賓まで運んでさへ呉れれば切符なんか、どうでもいゝんだ。ホントは切符なんか無くていい、わけのものだ。途中で、この車掌さんが私の顔をジイワリと眺めて行つた。これが内地の檢札にあたるのだらう。時々着劍の兵士や護路軍の兵士が腰に拳銃を提げて車中を往來した。

哈爾賓へ着いた。切符は乗車した時既に渡してしまつたので收札の必要もない。従つて收札口もなければ改札口もない。驛はあるが列車へは自由に乘れる。内地では見られない圖だ。實に羨ましい制度だ。

登美坊君はハルピンはインチキの都だと云つた。トランクを自動車の運轉手が攫へるやうにして持つて行く。それにすぐ飛び乗つて行かぬと、荷物は消えてなくなるんださうな。インチキの都へすこぶる餘裕綽々たる汽車が着くんだから世の中は何處までも面白い。

×

暮れゆく郊外、志士の碑は儼然と建つてゐる。沖、横川の血がハルピン在住日本人の體軀を流れて一分間も休ま

ないことを知つた。偉なるかな。

支那街と、その平康里^{ビシカリー}(遊廓のこと)、ロシア人街、日本人街と^{スシガリ}の匂ひ、松花江の春待つ姿に旅人らしい哀愁を感じた。

異國情緒の豊かな^{めたか}國際都市ハルピンの夜は旅人の多くによかれ悪しかれ、忘れ得ぬ印象を鏤刻みつけるものらしい。

猶^{ユダヤ}太系露人經營のチユーリン百貨店、名は知らないが露人經營の大衆的なレストラント、そのすぐ近くの映畫館、イングリツシユのオールトキーだつたがタイトルなどはすべて、露、支對照、入場者は各國人だ。私たちの外には日本人はゐなかつた。ハルピンには四十三種の人間がうよくしてゐるのだと聞かされた。その映畫館がハネてからキヤバレー・フアンタージヤーへ出かけた。

十時ごろからソロ／＼始まるので露人は明け方までも踊り抜くのなさうだ。ステージダンスのプロگرامを見ても十時頃から夜明近くまで踊ることがうなづかれる。ステージが一つ踊れば、必ず客とダンスのダンスが二回ある。周囲のテーブルにゐる人々は踊つては飲み、飲んで踊りして、歡樂の一夜を過ごすのだ。一時ごろにそこを出た私たちはロシア人の娼婦を見に行つた。

薄暗い扉^{ドヤ}ばかりのやうな家の、いづれかにある釦を探して押すと扉が音もせず開いた。そこでオヴァや帽子を渡して更に次の一室へと流れ込んだ。そこにはロシアの女性が七八人ゐて、頻りにウキンクを送つた。

大阪あたりでいふ二階廻りが、ひとりついてゐて交渉の衝にあたるのであるが、私はこの時、古川柳の

賣れ残りげに十目の見るところ

といふ句を思ひ浮べ、いかにも尖锐な穿ちつぷりに思はず微笑を洩らしたのであつた。

酔つぱらつて大きな聲を出すのは露西亞人と日本人で、支那人は酔つても決して高聲を發しないさうだ。その點支那人は感心だとのことだつた。何が彼氏をさうさせるのか、その原因が知りたい。

哈爾賓よさらば!

亡命に似て哈爾賓へこころざし

支那街のあれで金持とは見へず

スシガリー郷國^ニを忘れた戀もする

(續く)

三月十八日午前九時四十分ハルピン發、午後

十時三十分奉天着 松代さんの來奉

「一夜泊りのハルピンが私に何を教へたか」と、私は二等

寢臺？の上に寢轉んでスピヤをくゆらしながら自問自答した。

私のこの二つの眼が視たハルピン、それは一つの事實ではあらうが、眞實そのものであるか、どうか。私は美しい虹を觀て來たのではなからうか。そんなことを考へさ、れた程、一瞥のハルピンは異色異香の都會であつた。

今朝ハルピンにアデューした汽車は果てしなき曠野を走つてゐる。灰色の雲と凍てた土、それが私の眼に映るすべである。

私の向ひ側の寢臺？では黒い服にくるまつた老滿洲人が眠つてゐるのか、横になつたきりである。

私の寢臺？の下部は三人詰のシートになつてゐる。老滿洲人の下部も同じく三人詰のシートになつてゐて、床の窓際には一寸したテーブルが置かれてある。

車内の往來は片側に限られ、その窓際には滿員の時腰を降ろすに足る程度の取り外しの出來る腰掛がくつつけてある。

まだ／＼多少の危険状態におかれてあるハルピン新京間では夜行列車が運轉されてゐない。従つて上部の寢臺？が一人下部が三人詰になつてゐて、これは客の好みにまかされてゐる。

同伴者のない私は逸早く、上部を占據した。同じく二等セコンドでありながら往路はシートナムバアがあつただけに、七圓

弱の贅澤をしたことを經驗した。

この外に一等があることは勿論だが、三等に四等があるんだと聞かされた。三等はシートが板敷で、車内が汚いので、逆も乗れないし、四等は苦力専門ですとの話だつた。

下部の六人は何れも、何々議員の肩書を持つた視察團の一行である。暫くはハルピンで買つた奥様への土産の狐の襟巻をトランクへ押込みながら、その値段について話はずんでゐたが、驢ぶがが汽車が途中の小驛にすべり込んだので期せずして、各自の視線が窓外に向つたらしい。小驛を左右にして十數株の立樹たちきがパラパラと線路に沿うて立ち並んでゐる。

『アレはポブラだネ』

と一人が云つた。

『なアに、白樺さ』

と他の一人が應じた。他に意見を出す者がゐなかつた。彼等は白樺説を鵝呑みにしてしまつたらしい。私はこの立木について滿洲在住の人に訊いて見た。『それはポブラでも白樺でもありません。どろやなぎで、楊柳の楊の字です』と教はつた。議場では甲論乙駁こうろんおつぱくなか／＼譲合ふことを知らぬ強い一人に對しては恰も猫の如く柔順であることを思はされた。こんなところで、官費旅行の視察團なるものを

ハツキリと視せて貰つたことは有難いと云へば有難い。

私は彼等の錯覺だらけの視察談に耳を傾けなければならぬ。そして歸阪したら鮮滿の話をしなければならぬ私にとつても、五十歩百歩だと思つてすぐつたい氣持になつた。

漱石が、ある小説の中で、和歌の浦といふところは波の荒いところだと云ふ人と、イヤ和歌の浦は波の静かなところですよといふ人とがあります、前者は浪の荒い時に行つた人で、後者は浪の静かな時に行つた人であつて、どちらも楫の半面しか見てゐないのだと喝破してゐますが、私の鮮滿紀行にしたところで、それに近いものであることは云うまでもない。すくなくとも一年位ゐなければハルピンを語る資格はあるまい。

×
新京驛で再び柳陽君に迎えられた。こゝで新京發の汽車に乗替えた。これからは又三等旅行だ。

×
兵士が二三人同車した。かたいパンのやうなものを喰べてゐた。東京だと云つてゐたが、こちらはエライです、三十分も伏せエーをやらされると、身體からだの感覺がなくなります。ウツカリ手で彈き金を持たうものなら、そのまゝ凍つて放れないと、いかにも辛さうに話してゐた。國の親などに聞かせる話ではないと思つた。

×
私の前のシートに、ロシヤ人が乗合はした。そしてレツドブランケットの私を頼りに頼りにしてゐることを知つて、くすぐつたい感じがした。

彼氏のブローケン、イングリツシユが氣易く耳に響いた。ブラザーがムクデンほうてん（奉天）で商賣をしてゐるので、そこへ行くんだと談してゐた。包装された商品らしいものを七八個も携帶してゐた。

私の持つてゐた『週刊朝日』を貸して呉れといふので、彼の大きな手へ渡してやつたら、パラ／＼と擴げてゐたが、市川春代のあまつたれた顔の寫眞をジツと眺めてゐた。

私も負けん氣を出した譯ではないが、彼の持つてゐたハルピンの新聞を借りた。新聞には市川春代の寫眞なんか無い。世界戦争以後忘れてゐた文字の拾ひ讀みをはじめた。いかに景色のない車中とは云ひながら、そんなことをするほど退屈だつた。

×
彼氏はムクデンは未だかと頼しきりに訊いた。私も小驛の名は知らないで、モウ一時間半だとか、モウ一時間だとか云つて時間で教へてやつた。モウ十分で奉天に着くといふころに、何かの拍子に、露語で返辭したら、彼氏は名狀の出來ないよろこびを顔にあらはして、ベラベラと喋り立てた。さうなるとこちらが判らない。ヤ、ネ、ガバリーチエ、ボ、ルースキーと云つて直ぐに降参した。

こんな時に、滿洲語も露西亞語も、朝鮮語も、獨逸語も英語も佛蘭西語も何語も何語も學ばなければならぬ私達を悲しんだ。この點から云つて自國語と世界語の二つさへ知つてゐれば、時代が一日も早く來れば、と思つた。

×

奉天まで戻つて來たのは夜の十時半だつた。モウ勝手に知つた奉天だつた。急いで驛の表へ出ると、みつる君が秋山さんといふ友人と一緒に來てくれてゐた。随分寒くもあつたのですぐに出かけやうとすると、みつる君が、

『岩崎さんの奥さんが……』

と云ひながら、眼で私の出て來た方を探がしてゐる。私はハツとした。松代さん？と私は信じられないほど驚いた。そこへ松代さんが姿をあらはした。私は眼が熱くなるほど感激した。あまりにも突然に出て來たので、よく渡滿をすゝめてくれた柳路君にはすまないが、今度はとても柳路君には會へまい。熱河の奥にゐては奉天まで出て來てくれとも云へない。行程に縛られてゐる私としても出かける譯には行かない。私は滿洲まで來て柳路君に會へないのをタツタ一つ遺憾に思つてゐた。

そこへ夢想もしなかつた令閨の松代さんが顔を見せてくれたのである。私は妹にでも會つたやうな悦びと懐しさとを感じた。私はロク／＼挨拶もしないで柳路君のことを訊いた。

『妾では話の出來ぬことがある、すぐ來いと云つて電報をしたのですが、まだ何んの返辭も來ません。みつるさんと妾で五六通も電報したんですの。電報さへ手に入れば今夜にも來ると思ひますが……』と松代さんは息をはづませた。

みつる君の話では、松代さんは私の渡滿を知ると直ちに熱河の凌源を發つて奉天に來たが、生憎私は奉天を發つた直後だつたさうだ。

私が新京、哈爾濱から引返すのを待合はしてゐる間に以前住まつてゐた關係から撫順に出かけて彼の地の柳友達へ私のことを依頼しに出かけてくれたさうである。その熱情、その親切には思はず頭が下つた。

私は熱河々と云つてゐるが、どれほど遠いのか、それすら知らない。しかしながら距離と費用を意に解せず、熱河の奥からはる／＼と來奉されたので、私としては涙ぐましいよろこびがあつた。魂と魂との抱擁があつた。

×

夜の十二時頃から宿を出た。もうスツカリ馴染になつた秋山靜君と、みつる君と、松代さんと私の四人。

時間を超越した私達にはもう寒さ——といふものを感じなかつた。『權兵衛』の女將は私たちのよろこびに拍車をかけてくれた。私は珍らしくビールを飲んだ。

平康里の艶樂書館の一室で四人がお茶を啜つてゐたの

は午前二時に近いころだった。

奉天第一の娼家も時間が遅いので娼婦は観られなかつたが十五六の女の子が、椰子の實は繁るし、土人は首を斬る——とか何んとかいふ唄を唄つたり、踊つたりして感興をそへてくれた。

十九日奉天見物——奉天句會

宿のすぐ向ひに、奉天名物の人形屋がある。主人公は小倉圓平といふ自由人だ。みつる君と用たしの歸途をこゝへ寄つて見た。店内は洋風の陳列だが古風な柴折戸で區劃して主じの應接兼事務室が設けてある。

彼の友人と私の友人の多くが親しい間柄であることを知ると、すぐに舊知のやうになつた。『泥人の手際がすこしよすぎるネ』と私は無遠慮なことを云つた。

『素人にはホントの泥の味は判りませんからな』

と、彼にも趣味から出た商賣の悲哀を持つてゐた。

そこもあると思ふと私は口をつぐんだ。それから紀太君に言傳かつてゐた人形制作上の疑義を質したり、圓平さんの愛嬢の人形芝居の天才振りや、石原青龍刀君が支那芝居の研究家として、權威者であることなどを聞かされた。おひる近くから北陵見物に出かける積りだと話したら、『それだつたら僕が案内ませう、すぐあとから出かけます』と自由人を發揮した。

みつる君と私は一旦宿に歸つて自動車の用意を命じた。

そこへしづか君が来てくれた。しづか君の滿洲語のてなみは昨夜平康里で拜聴してゐるので心強い譯だ。

圓平さんはもと／＼畫家なので北陵保存のために盡されてゐる人だと聞かされては案内役としてコレ以上の人はゐない筈だ。『よく滿洲人と間違へられます』といふ。滿洲國大人の風姿をしてやつて來た。

北陵の前に滿洲國の巡查が七八人ゐる。何れも劍銃を持つてゐるが、少しのいかめしさもない。道傍の樹の枝に一羽の鷺を縛りつけて騒いでゐる。彼等の一人が退屈凌ぎに撃つたのであらう。臨時私設の秋山通譯官が早速彼等に談しかけた。

『タツタ一發で射とめたと自慢してゐます。實際あんな彈で撃てるものではありません』との話。それにしても滿洲國の巡查のノンノン振りを内地の巡查に見せてやりたい、さぞ羨ましがることだらう。一寸したことにも始末書だ、罰俸だ、諭旨免官だと騒いだり、騒がれたりしてゐる彼等が、いかにせゝ、こましい世界に生きてゐるかがハツキリするだらう。こんなところに七八人の巡查を鳩のやうに遊ばしておく滿洲國は流石に大國だ。そのノンビリさ加減、風のやうにやつて來た私にも羨ましいものがある。

北陵は清朝第二代太宗文皇帝の陵墓で境域の周圍約二

里、外壁九百間、内壁の高さ二丈餘とある、入口には華表（とら）に似た一大牌樓（はいろう）が立ち正門を潜ると松の緑、境内磚傳の兩側には石獸の獅々、麒麟、馬、駱駝、象等が立（た）んでゐる。内地の颯爽たる銅像の馬を見つけてゐる眼に、こゝの石馬の太くて、短い兩脚で、ボンヤリ立つてゐる姿は逆（と）もぶさいくで見られないかも知れないが、私にはこの方に多くの興味を覺えた。颯爽たる雄姿は見てる眼を疲れさせるが、ボンヤリと立つてゐる姿には何んとなく親しみを感じる。

次に碑樓（ひろう）、その次の三層樓の隆恩門（りゅうおんもん）を潜ると隆恩殿、これは廟の拜殿である。殿の背後に明樓があり、半圓形の壁に圍まれて寢殿がある。太宗文皇帝を葬つてゐるところだ。

要するに北陵の碧甍黃甍を支える朱塗の柱や石門石階石欄壁間に施された彫彩は佇立久しうせしめるものばかりだ。コレをてつとり早く紹介すると鯛や鮭目が泳いでゐない龍宮そつくりだ。

私が歸阪してから、畫家のO君に、『北陵は素的（すてき）だよ、あれを買つて来て、道頓堀でキヤヴァレーをやつたらよく流（は）行るだらう』

と云つたら、人のよいO君がホントに買へるものと思つたらしいのには顔負けした。

北陵から、喇嘛塔（らまたふ）のある法輪寺（ほうりんじ）へ廻つた。エロ佛（はとけ）の腰間（ようかん）にある黄色の布を取除いてもらつて本式の御開帳となつ

た。あみだも金とかで、奇怪な男女交歡の天地佛（てんちがはつ）もとり金次第であられもない御姿（おんすがた）をあらはし給うた。

次いで滿洲事變戰跡の一つである北大營（はくたいてい）を観た。五十萬坪を有する大規模な兵舎の殘骸に、戰禍の惨れをしみじみ思はせられた。今ではその兵舎の一部に日本國民學校が出来て、家畜の飼育や附近の耕作に従事してゐるが、學校の正門には生徒が劍銃を手にして警戒にあたつてゐる。一寸内地では見られぬ圖だ。

こゝから城内へ引返し、吉順百貨店（きちじゆん）（滿洲人經營）の屋上から奉天全市を俯瞰（ふかん）した。

街を歩いてゐたら、六つか七つ位な可愛らしい女の子が路傍（みちばた）から驅けて来て手を出した。この唐子（からこ）、美人の卵子ではないが愛嬌がある。一錢やりかけたら、

『やつたら幾らでも來まつせ』

と、みつる君が教えてくれたが、もう遅かつた。なるほど向うの方からバラバラツと驅け出して來た。

『一錢は多すぎます』とみつる君が云つたので、私はハツとした。

私は最初に手を出した乞食の子の顔が、いかにも朗らかな顔の調子をもつてゐるので、暫く振りかへつて見てゐた。

『買つたらどうです、アレで三圓なら賣るでせう』と、圓

平さんが私の顔を見て帽子でもすすめるやうにいふ。

三圓！三圓なら、私は持つてゐる。あの子が三圓、惜しく
ないと思つた。私はすぐにも買ひたかつた。しかし私の頭
にかんだのは私の家庭に今六人の子どもがあることだ
つた。一人殖えて、六人と七人では生活費は問題でないに
しても、妻の勞苦が容易でないことを思つた。私の家に一
人か二人の子どもしかゐらないのだつたら私はあの乞食の
子を買つて歸つたであらうが、北陵で欲しいものが持つて
歸れぬのと同じに、これも斷念した。

四人は小盜兒市場の方へいそいだ。私達は城壁から一旦
外へ出た。そして城壁に沿うてインチキ商賣が目白押しに
並んでゐるのを素見して歩いた。路の悪いこと夥しい。ウ
ツカリすると黒ずんだドロドロの泥の中へ踏込むのでア
ツチコツチと路を選つて飛び／＼に歩いた。

翡翠の帶止や、機械の狂つた時代ずれの時計や、何に使
用されるのか判らない古器物が並べてある店などは先づ
上の部だ。五階下（大阪市日本橋の雜貨屋が集まつていた
地域―編者註）のゴミ市で賣つてるやうな半端物が、ここ
でも巾を利かしてゐる。

圓平さんに、この案内を頼んだら、

『随分汚いですよ』

と駄目をおされた。

『イヤ、ああしたところは、汚い方がいい、んだ。そこに面

白さがある』と云つてゐたが、

『いくら汚い方がよくつても、コレではたまらん』と思ふ
ほどのところへ出て來た。大便も何も垂れ流した。ウツカ
り歩いて、大便の中へ足でも突込んだら大變だ。

少々降參してゐたが、一旦男が、どんなに汚くてもい、
と云つた以上、コノ邊で引き返さうとも云へず、變な顔し
て食つ突いて歩いた。

圓平さんは

『この横が五錢の淫賣窟です』と云ひながら、サツサとそ
の横へと曲つて行く。兩側に小屋が地氈りで落ち込んだや
うな物騒な家があつて、その家の戸口に女が立つてゐる。
それが哀れにも五錢の春をひさぐ女だ。

そして家の前を、往つたり來たりしてゐる男が、彼女達
の夫なのである。もつとわかりよく云へば稼いだ金の消費
者である。

『どうです、這入つて見ますか』

と、云ひながら圓平さんが私の方を見て、ニヤニヤした。幾
らニヤニヤされても仕方がない。こればかりは願ひ下げに
した。

x

夜は奉天の川柳家によつて私の歡迎句宴が公記飯店で
開かれた。（前號奉天句會報參照）

石原青龍刀君の肝煎りで十三人集まつた。數に於ては

豫想外に少かつたが談論風發まことに朗かな一夜を過した。田中連樂君も顔を見せてくれた。散會後、平康里でも御案内しませうといふ青龍刀君の好意を謝して別れた。

戸外は雪がちらちらしはじめた。

馬車に我が人生を托しゆく

夕陽あかあか汽車は直線

北陵に來て良心を疑へり

滿洲へ滿洲へ金の要るところ

二十日撫順炭坑露天掘見物

阿喜良、仙淚、矢車君等の案内

ひそかに柳路君の來奉を期待してゐたが、奉天句會には遂々間に合はなかつた。夜があけても、まだ姿を見せない。戸外は雪で眞ツ白だつた。

今日は撫順へ行く日だ。九時の列車に乗るつもりで、みつる君と、松代さんと私の三人が馬車に揺られて驛に向つたが、私等が驛につくのと、汽車が驛を離れるのと一緒だつた。一ト汽車遅れることになつた。次の汽車を待つてゐる一時間ばかりのうちにも、柳路君が姿を見せないかしらと、あたりに氣を配つてゐたのは私ひとりではなかつた。

『撫順の句會へは來るでせう』

と松代さんが突然云つた。同じ考へが彼女の頭の中を絶えず往來してゐることを知つた。

撫順への汽車が発車した。昨夜、露西亞人と滿洲人が何

者にか殺されてゐたといふ渾河の鐵橋を渡つた。沿線の田圃の中に小さな土饅頭が澤山あつた。アレは皆墓なんです。あ、して、滿洲にはそこら中に墓があります。雨でも降ると、手や足が土から出てゐます。と、みつる君はもう一トかどの滿洲通になつてゐた。

一時間二十分ばかりで撫順についた。撫順川柳社の日高阿喜良君と支那服を着た安武仙淚君が撫順川柳社の社旗を押し立て、出迎えてくれた。『月刊滿洲』の城島舟禮さんの代理の方が驛まで見えて、小倉圓平さんから電報がありました。生憎風邪でして私がまゐりましたとのことだつた。

阿喜良、仙淚兩君の案内で撫順の滿鐵地方事務所、晝食をすまし、同所の屋上から撫順の街の輪廓を知つた。

x

食後、私達一行は撫順炭坑専用の電氣汽關車に便乗させて貰つた。運轉の勞をとつてくれたのは、柳人石井矢車君だつた。同君は特に當日の運轉を志願して、私達を便乗させる許可をうけてくれたんださうだ。

『こんなことは全く例外ですよ』と阿喜良君が談してくれた。汽關車は石炭殻を再び炭坑に運んで、掘つた跡から、それを埋めるための役目を持つてゐた。私達は車上からやすくと露天掘の状況を視ながら、大山坑に向つた。

見渡す限り雪で眞つ白だつた。幾里走つたのか知らない

がぐる／＼めぐつてゐるうちに大山坑に着いた。石炭殻を穴の中へ落し込む作業をしてゐる間に私たちは、山の上の方に登つて見た。露天掘が一望のうちに見える。アチコチで自然發火による煙が立ちのぼる。私たちの足許からもプス／＼煙が立ちのぼる。私はそれへ用便を試みた。煙が一層まが旺んに立ちのぼる。これを見た私が

『昨夜のアルコール分の燃焼だらう』

と云つたので、みんなが笑ひ出した。小屋が乗せてある枕木がドン／＼煙をあげてゐる。馴れない者には安心してゐられないところだ。

炭坑の中へ下りて見た。石炭殻がガラ／＼上から落ちて来るのをおそろしいやうな水の力で坑の底へと押し流して行く。又、元のところへ戻つて恰度作業が終つたばかりの汽關車に乗せてもらつた。

x

大阪の半疊、大連の濤明の兩君から紹介名刺を貰つてゐたので、句會に出る前に城島舟禮さんの月刊滿洲社へ挨拶と見舞を兼ねて出かけた。

舟禮さんは、いかにも病人らしく頭髪を蓬のやうに亂し、髭が不精にのびたままで應接された。ものの十分ばかりし歡談をした。氏が情熱の人であることを知つた。

無理をしない方がいゝでせう、と云うのに

『イヤ大丈夫です、今夜は句會へ出ます。一ト足先へ出か

けて下さい』

云はれるままに私たちは好意の自動車を句宴場日の出館へ向けた。

x

日の出館は日本式の旗亭である。撫順の一流らしい。非常にゆつたりとした氣分になれた。定刻になると、柳人が續々と集まつて來た。松代さんが曾て在住の地だけに、松代さんを中心に朗らかな話が展開されてゆく。ポツ／＼作句をはじめ。又しても柳路君の話が出る。松代さんも私も一寸心がぐらくなる。松代さんは今にも柳路君が來るといふ意識が離れないらしい。時間は用捨なく經つてゆく。九時過ぎだ。舟禮さんの世話で寫眞屋が來た。記念撮影だ。私を中心にしてみんな並んだ。寫眞屋がしきりに焦點を合はしはじめた。凡そこれならといふところで、室内の煙草のけむりを追ひ出すことにした。再び寫眞屋がカメラの前に立つた。準備は出來た。まさにシヤターを切らうとしてゐた時に、廊下の方にあたつて、慌だしく駈け込んで來る音がした。寫眞屋はシヤターを握る手を離した。

駈け込んで來たのは待ちに待つてゐた柳路君だった。

『アラツ』と聲をあげたのは私の横に並んでゐた松代さんだった。

『先生ツ』と云つたまま柳路君は何も云ひ得ない。

私も言葉が出ない。二人の眼と眼がすべてを語り合つた。

早速私の横に席をつくつて、松代さんがその背後へ移つた。そして記念撮影のシヤターが切られた。

私の拙い筆は、この一瞬時に於ける劇的光景を細叙する力を持たない。

ボツ／＼と語る柳路君の話に私は眼をしばたいた。松代さんの最初の電報を手にするなり、私に會へるといふよろこびに胸を跳らして取るものも取りあえず熱河の凌源をあとにしたが、とても間に合ひさうもない日程と知つて楊栢樹から錦州までは飛行機で飛んだ。錦州から鐵路奉天へ、奉天から撫順へと乗り繼いで辛うじて間に合つたのである。

『會ひたい一心で、生れてはじめて飛行機に乗りましたが、着陸する時の氣持の悪さ、モウ飛行機に乗らうとは思ひません』

と語る彼の一語一語が私の心の奥にグ／＼響く。私は胸が痛いまでにうれしかつた。

思へば柳路君と私との交りはモウ十一（一か二か三か余か、活字が消えているので不明―編者註）年になる。彼が東京時代に私は二度ほど上京した。大阪時代には鳴尾の私の宅へ足繁くやつて來た。一度は高圓寺の彼の宅に枕を並べて夜遅くまで語り合つた。それを最後に彼は心に痛みを抱いて鮮滿各地を旅から旅へと渡り歩いた。しかし、川柳と通信は絶やさなかつた。松代さんと結婚をしたことを手

紙によつて知つた私は、彼が心の落ちつくところを見つけたことをよろこんだ。彼は松代さんに川柳をうゑつけた。聰明な松代さんの川柳がその後グ／＼と伸びたことは諸君の知る通りである。

この夜の撫順川柳社の句會は柳路夫妻にとつても私にとつても終生忘れることの出来ない句會となつた。

この歴史的な句宴の主客は、ともにともに感激した。旅人でなけりや立派な呑み仲間

これがその夜の私の軸吟だつた（前號撫順句會々報參照）

柳路夫妻、みつる、私の四人は撫順終發列車で奉天まで引揚げた。そして奉天一のダンスホール、ブロードウエーの扉を排し、次いでダンスホール、奉天會館の椅子に腰をおろした。乾杯！乾杯！ 私たちに踊り狂ふ男女の姿態はどうでもよかつたのである。

此處で死ぬつもりもないが採炭所

石炭か金か撫順に生き残り

旅行先あんなところに陽が落ちる

二十一日奉天を去る

さらば奉天！の日が來た。いよ／＼二十一日の朝、私は奉天の宿を發つことにした。

滞在中、何くれとなく、私の身邊の世話をやいてくれたみつる君は名残りを惜しんで、御主人の許しを得て、鞍山

の句會まで見送つてくれることになつた。柳路夫妻は大連まで見送ると云ひだした。私も暫くでも行動を一緒にしたかつた。

發つ間際になつて圓平人形の店先を借りて、記念撮影をした。

奉天の朝の街は冷めたかつたが、人々の心は飽くまで暖かつた。

みつる君の勤務先、寺庄洋行主の吉田さん、小倉圓平さん、日高元子さん、秋山しづか君等に見送られて私たち一行は午前八時三十五分奉天驛を離れた。

同日午前十時五十六分鞍山着、昭和製鋼所見物

鞍山では昭和製鋼所の永井草明、岩本善男君等に出迎えられ、すぐ様その足で製鋼所を視せてもらつた。

門外漢の私達にも膨大な三基の鎔鑪が、世界の鉄鋼作業へ如何に働きかけてゐるかが、おぼろ氣ながら判るやうな氣がした。全工場の作業期には、日本人二千人、滿洲人八千人、合計一萬人の従業員が活躍するさうだ。鞍山の街の生命線が一製鋼所の消長にあることは云うまでもない。

午後一時から天祐居で私のために句宴が開かれた。(前號鞍山句會々報參照)七八人の集まりだつたが、その多くは製鋼所の人々だつた。滿鐵の堤水叫坊君はわざ／＼大石橋から參加した。作句以外に、支那料理の圓卓を圍んで話があつた。話題の中心は昨夜雜貨商を襲うた匪賊射殺事

件だつた。

匪賊襲來と知つて、逸早く脱出した家族の者の報告で警官や軍人が包圍したため、二人の匪賊は各自兩手にしてゐたピストルの弾のあらん限り、亂射し盡したが遂に警官たちの射撃に斃れたんだと鈴木可鳴君が見て來たやうに談してゐた。次いで匪賊、馬賊の物騒な話で持ちきりになつた。

みつる君は作句がすむと同時に時間の都合で一ト足先に辭去した。臆て私たちも立つた。鞍山驛へ出て見たら汽車の時間を取違へてゐたので見送つて下さつた鞍山川柳家の人達と共に再び街のカフェーまで引返した。

ここで匪賊射殺事件の號外を見た。

生甲斐に菲胡の國に來る

馬賊には馬賊の仁義死んでゆく

同日夕べ鞍山發湯崗市着、對翠閣温泉

に入浴、同夜十一時二十六分で大連へ

鞍山を出た汽車は夕陽を窓にうけて走つた。三月の下旬と云へば内地では櫻が綻びてゐる暖かさであるが、暮れゆく空は内地の冬よりも陰慘だ。五十分とグ／＼薄暗くなつてゆく。「事變前には湯崗市あたりでも随分危険だつたので、汽車なども馬賊の襲來を避けるため、消燈して徐行したものです」と柳路君から、そのころの話聞かされてゐるうちに薄暮湯崗市驛に着いた。鞍山から湯崗市までの所要時間は僅に三十分弱だ。

温泉宿對翠閣の老ポーターにトランクを渡し、宿まで徒歩で行つた。驛を離れた道の兩側は瘦た竹箒のような姿をした樹がスク／＼立つてゐるばかりだ。宿は驛からそんなに離れてはゐなかつた。

對翠閣は満鐵の經營だ。流石に堂々とした洋風の温泉宿である。和室に入つて、すぐ柳路と二人で温泉に浸つた。入れば代つて松代さんが湯に出かけた。

湯上りの三人が女中をからかひながら一盞傾けた。

ビリヤードの部屋をのぞいたり、ホールで女中と泊り客の大阪音頭をしばらく見てゐたが、それにも飽いて部屋で寝轉ぶことにした。

私たちは、その夜の十一時二十六分の大連行に間に合ふようにネクタイを結んだ。

夜汽車はかなりたてこんでゐた。お互は分れ／＼に辛うじて腰をおろすところを見つけた。私は窓際に頭をもたせて、うつ／＼せうとしたところを柳路君に起された。

柳路君は私が疲れたらといふ心配からポーターに二等寢臺の交渉をしてくれたいらしい。しかし、自分一人が寢臺で、のん／＼と寝てゆくことは心苦しいので、私は大丈夫だからと云つて斷つたが、明日の大連句があるからと云つてどうしてもきかない。

實際、私は疲れもしてゐたので、たつてのすゝめにその好意をうけて二等寢臺に移つた。

二十二日午前七時大連着、瀧明、三福君等に 出迎えられナニワホテルに投宿、午後市中見物

滿洲の大玄關であり、隆々たる新興都市である大連の土地を、私は朝鮮から北滿へと逆コースをとつたために一番最後に踏んだ。二十二日の朝の七時のことである。

大嶋瀧明、佐々木三福、兒玉凡稚三君の出迎えをうけた。三福君の好意で、すぐ様ナニワホテルに投宿した。私は四階の三號室、柳路夫妻は隣室の五號室に入つた。

宿は商店街にあつた。地下室が食堂になつてゐた。エレヴエーターで降りると

は・か・な・き・い・は戀のさだめか・あーあ・あ・あ・あー、なんていふレコードが鳴つてゐる。私のうちに
あるレコードと同じものばかりが次ぎ／＼に鳴らされる。
なんだかもう家に歸つたようで、ちつとも旅にゐる氣持が
しない。

私は斯うしたのんきな旅を續けてゐたが、この日滿洲日報の函館大火の號外を手にして胸を刺された。青柳町の龜井晟修君の邸が火元の谷地頭町から程遠くないことを知つてゐたからだ。晟修君等の身邊が氣づかはれたので、着くか着かぬは別としてすぐに打電した。そして函館川柳家の無事ならんことを祈つた。

午後から、三福君の福昌会社の社員の案内で、市街見物をした。

内地で見られない圖は三泰油房の、身に一絲も纏はない裸作業だつた。絶對縦覽謝絶を福昌公司の關係で特に見せてもらつた。

豆のあぶら人のあぶらの尊くも

日給になる素ツばだか視察され

といふ句が出来た。その外露西亞町波止場、俗に小盜兒市場と稱ばれてゐる小崗子の露天市場、連鎖街などを見せてもらつた。夜は滿洲土建協會の樓上で開催された私の歓迎句會に臨んだ。句會前、地下室食堂で有志の歓迎宴が開かれた。

句會は二十有五名、頗る眞摯な集まりであつた。(前號大連句會報參照)三福君の紹介によつて起つた私は、瀋明君から與へられた『滿洲と川柳』の題下に約五十分、滿洲と川柳の人間陶冶を内容として語つた。例を列席せる岩崎夫妻に藉りた。そして川柳の人情味は各派を超越することゝ絶叫して私の談を結んだ。

席上終始水を打つたるが如く清聽を煩はし得たことは私の光榮とする所であり、又ひそかに感謝するところであつた。散會後、佐々木三福、井上麟二、川村宗嗣三君と柳路と私の五人がバー、吉永に歓談を交へた。

川柳以外に滿洲知識の多くを教示されたことを感謝してゐる。

x

翌二十三日は朝のうちに所用をすまし、午後から柳路夫妻と三人で旅順に遊んだ。流石に滿鐵王國の手で完成されたドライヴウエーだけあつて坦々砥の如しである。途中星ヶ浦の勝景を過ぎた。

x

旅順では戦利品記念館を觀た。日露戦争當時の兩軍の喧嘩道具一式が陳列されてゐる。砲彈除けの鐵板の楯がブリキのように、ひんまげられてゐるなど當時の苦戦が偲ばれて正視出来ないものがある。

第十一師團の決死隊が地中戦を演じて占領したといふ東鷄冠山北砲壘も觀た。旅順開城について乃木、ステツセル兩將軍が會見した水師營へも行つた。

更に旅順の新市街へ出て關東廳博物館を觀た。滿洲研究の多くの資料が私の眼をそばだてしめたが、飛脚旅行には時間の餘裕がない。館内を走るようにして觀た。

隋、唐時代の古器物や、佛像や、風俗資料や、中央亞細亞から發掘されたミイラの如き眞に博物館の名にはぢないものがある。

x

夕べ三福君が來宿されて、湖月に招かれた。堅く辭したのが既に瀋明君が出かけてお待ちしてゐるからとのこと、柳路君と一緒に子供することにした。

なんだか役所のような感じのする笹棒に大きな旗亭だ

つた。満鐵理事などの遊ぶとこだと聞いてゐただけに、美女又一流の名にはぢない。

興盡きて、ダンスホールペロケに、ペロケを辭して、おなじくダンスホールカイラクに赴く。三福君は女を擁して巧に躍る。

x

旅程通りに行けば明日は大連に別れる日だ。大連に別れる日は柳路夫妻にも別れる日だ。

『いよ／＼明日はお別れたネ』

『なんだか別れたくないですネ。是非歸らねばならないのですか』

『是非といふ譯ではないが、いつまでもゐて、みんなに迷惑をかけるのは心苦しい。それに歸れば、すぐきやりの會で上京しなければならぬし、これだけ留守をすれば俗務の山積もある』

『それはさうでせうが、いつ又會へるか、それも判らないので私たちのために一ト船だけのばしていただけませんか』

二人は口を酸くしてすすめてくれた。私も思ひは同じだつた。この次はいつ會へるか判らないと思うと、いかに行程があると云ひ條、これから先は海があるばかりだ。歸つてからのことはどうにでもなる。

『ではさういふことにせうかなア』と廿四日の正午ごろ、

ナニワホテルを引揚げて、麟二君に聞いてゐた海の香高い老虎灘の千勝館へ移つた。

ここは星ヶ浦の反対側で、大連の街から自動車で二十分を要するところにある。景色は内地式で漁火點々として詩情頻りに湧くところだ。

千勝館は別個の家が庭内のここかしこに散在させてある。私等の家は海へ入り込みさうな尖端にあつた。ここまで来てはじめて柳路君としみじみとした話をした。夜は活動でも見ようと云つて、街へ出た。中央館で松竹映畫『愛の出船』を見た。映畫そのものは大したことはないが、のび／＼と映畫を見るような時間が與へられたことは愉快だつた。

そこを出て三人でミス・ダイレンへ行つた。そこでは子を持つて働いてゐる女給を見た。私にはどうしたことか子のあるなしがすぐに判つた。その女のこと、その女の子どものことなどが胸に來て、酒が理に落ちてしまう。

私は『もう歸らう』と云ひ出したが、松代さんがもう一軒だけ寄つて見ませう、と麗人揃ひを賣物にしてゐるカフェー・ワカナの二階へ押し上つた。

x

翌廿五日は雪が降つてゐる。私たちの家が眞ツ白だ。向うの島も眞ツ白だ。朝から酒にする。對手がなくて淋しいだらうと云つて松代さんが、千代鶴といふ女を大連から招

んでくれた。十七だと云つてゐたが色氣なしの妓だ。

名をすて、十七八の戀もせむといふ氣にもなれない。

家は大阪の住吉だと云つてゐた。私の家から七八町しかない。掘り炬燵にあたつて、チビチビ呑んだ。

夜が来た。三人で街へ買ひ物に出かけることになつた。千代鶴は同じ自動車で歸らした。

商店街へ出て、支那緞子屋や、寶石屋や本屋や、それからそれと見て歩いた。満洲人が經營してゐる錢湯ものぞいた。二階まであがつて見ただけであつた。旅なればこそである。又、ワカナへ寄つた。昨夜の麗人たちに會つた。すつかり馴染になつた。もう今夜が最後だと、すゝめられるまゝ、にグラスを傾けた。千勝館に歸つたのは十二時ごろだつた。

僕未だ五十を過ぎず老虎灘

惚れられず惚れずに歸へる老虎灘

x

朝の十時のうすりい丸に出船を報らす銅羅が鳴つた。

大連波止場はテープの波、聽て一ト筋の煙を残して消えゆく黒點、誰れしも感傷的にならざるを得ないではないか。

私は高く帽子を振つた。柳路夫妻の顔、三福君の顔、濤明君の顔、その他の人々の顔、顔、顔が見送りの顔、顔、顔の中に消えた。

甲板の風よ大連よいところ

わたしひとり内地の春へ歸へる船

うちは

天狗が團扇を持つてゐる。アレは木の葉から思ひついた畫家の創作らしい。大空飛翔の天狗が汗だくになつたので木の葉をちぎつて風を入れたに違ひないと想像を逞しうした所産かも知れない。桐の葉や無花果の葉や蓮の葉などは、みな團扇の代用になりさうだ。

今でも不景氣を代表したようなサラリーマンがカンカン帽をうちらに向けて煽いだり、女は息ぎれがしちやうわといひながらハンカチで胸のあたりを煽いだりしてゐる。ソレもコレもみな團扇の代用である。

動物園の象だつて、アノ偉大な巨軀きよくにたかる蠅の煩はしさから遁れるためにバタバタと煽ぎちらしてゐる耳の恰好が團扇の型に似てゐて、しかも團扇の役目を果してゐるんだと思ふと何んだかくすぐつたい。

x

私は煽風機といふものをあまり好まない。あの廻轉のスピードアップが、モツト大げさにいへばあの音響が、あの

匂ひが、恰度工場のアトモスフィアを想起させるからだ。それに均一的なあの生温^{ぬる}い風が憂鬱だ。

その點、團扇には清風一過、涼味一掬といふ風を孕む力がある。ことに繊弱な女の手からやはやはと送り出す風には情味や艶味さへが加味される。

手にとれば栖鳳^{せいほう}の錦魚一尾、蛙一匹などの一筆描きが眼を樂しませてくれるのも團扇の持つ魅力であらう。

いはゆる古い型の女は自分が暑くてやりきれなくても、手にした團扇でまづ相手方へ風を送るものだ。これは日本の女に限られた常識でもあり美風でもあつた。ことに玄人筋の女は十人が十人さうしたものである。近ごろでも丸鬻をのせた女はさうしてゐるが、それがサーヴィス意識の發動とばかりいへないほどの自然さでなされてゐる。

これに反して女がグエイツと煽風機の頭を振り向けてくれる荒荒しい労働工作にぶツ突かると、労働工作そのものがチップを要求してゐるようで、折角の好意？がケシ飛んでしまふ。ことに自分にはかし向けられた煽風機には涼味が無い。

×

以前は夏となると、錢湯の天井に大きな横長の團扇を吊るして、みんなを煽いでくれたものだ。紐を引ツ張りさへすれば自分で煽ぐことも出來た。手拭で前をおさへた男や、禪一つの男が、大團扇の下に突立つてゐて、湯上り氣

分を満喫してゐたものだ。さうしたノンビリした風景は床屋にも見られたが、いつの間にか、煽風機にお株を奪はれてしまひ、團扇はこの方面で失業した。

病院などの頭の上で、キリ／＼回轉してゐる煽風機ぐらゐ、間の抜けたものはなからう。黴菌をバラまくのには効果があらうが、涼味は索然たるものである。これこそ機械化の惡趣味だ。モット心を中心にした、しかも眼を樂しませる設備がして欲しい。

×

私の小學校時代に、船場に吉野といふ有名な鮭屋があつた。薄暗い奥のほうで、そこのお婆さんが大きな盥のような容器に、鮭の御飯を移し、それを酢で濡らした大杓子で掻き混ぜ掻き混ぜ大團扇で煽いでゐたが、時代は移つても鮭屋の御飯に煽風機は不向きのような氣がする。

×

團扇の靜脈、そんな言葉がゆるされるかどうか知らぬが、今の世の團扇の多くは円竹^{まど}を細く割つてならべた上に紙を貼つて作られてあるので、表面に筋が浮き出している。アレが團扇の身上ではなからうかと思ふ。

×

廣告に呉れる小さな團扇がある。黻だらけの老婦が孫へのみやげに大事さうに抱へて電車に乗つてゐるのを見掛けるが、コレくらゐ魅力を持たぬ團扇はなからう。

夏瘦の女が持つ團扇は妖怪じみる。涼み台に置き忘れた團扇からは浮名が立つ。

團扇では憎らしいほどたゞかれず

こんな川柳がある。(昭9・6・2(土)「大阪毎日新聞」)

秋と酒

酒量は減つたが呑めば御機嫌がいい。夏よ、サヨナラといふかはりに

ビール、ビール秋が来たとして秋が来たとして、麥酒にさへ愛惜の情をやる私である。

「おい少しコレを呉れ」といつて指で輪を描いて口へ持つて行く真似をする。台どこにゐた娘がレイシユをコップに一杯注いで持つて来た。私の横にゐた女房が「妾にも……」といつて娘の方へ顔を向けたのでさらにワンカップのレイシユが運ばれた。夏のための冷酒ではあつたが私達の味覚はすでに秋の第一線に這入つてゐる。肴は何もないが、これが煙草一本の味だ。女房もなか／＼つきあひがい。

女房は小さい時からのクリスチャンだったが、神様よりも、宿六の影響の方が強かつたのか、それとも性來の酒ずきが私といふ伯樂に打つつかつて眞價を發揮したもののか、婦唱夫和で小さな酒盛りをすることさへある。私は陶醉の氣分を愛し、女房は味覺による酒の信者である。

女房と買物に出たついでに、百貨店の地下室で、さして呑んでゐるところを時々友人に見つけられて「ずるぶんのんきやなあ」とぞめかれる。澤山の子どもがあるのにはんばかりである。一體他人といふものは要らぬお世話を焼きたがるものだ。國家をひつくりかへす相談をしてゐるわけではなし、棄て、置いても懐ろと相談をして引揚げるときには引揚げられるのにと腹立たしくなる。

呑んで欲しやめても欲しい酒を酌ぎ
これは女房が詠んだ川柳である。こんなことをいはれて呑まずにゐられるものか。

落着いて呑むのにレイシユは不向きだ。杯で呑むとお神水をいただいでゐるようだし、ガラスの杯やコップでは氣が出ない。第一味覺が承知しない。

冷酒は朱塗の大杯か土器のものだ。ガラスの杯やコップは冷酒でも熱燗でもびつたりこない。洋食の宴會で呑む氣にならないのは原因が其の邊にあると思ふ。湯呑でビール

を呑むと婦人薬を呑むより不味いのとおんなじだ。

x

このごろ郊外電車では客を呼ぶのに、いちじく狩やぶどう狩で胡麻化してゐるが、いちじくやぶどうでは酒が呑めない。酒のないところへ人が寄らぬ。松茸狩の酔歩蹣跚と比較して見ればすぐわかる。空の蒼さや山の匂ひが杯に漂うてこそ人類に夢があるのだ。

x

酒の呑めぬ人達や、多少は呑めても呑まない人達は女給の手からキツチリと剩錢まで奪ふ。享樂が事務化する。そんな人間を私はひからびた鮭のように思ふ。

x

酒呑の心は酒呑でなければわからない。帽子も呉れてやろ、ネクタイよし来た、財布よし、何んでも持つてけ、欲しいものみんな呉れてやるぞツといふ氣持にはなれるし、停留場のベンチへ夜明けまで寝込んで風邪一つひかないとしたら酒の力も大したものだ。

x

朝夕は大變凌ぎよくなりましたといふ挨拶は、またそろく呑めますねえと同意語だ。上爛屋の腰掛趣味がサラリマン階級へ年とともにジワ／＼食ひ入つて行く。

なあちろりこれから秋に親しまう

この句を世の上戸黨に送る。

(昭9・9・6(木)「大阪毎日新聞」)

劍花坊を悼む

——柳翁忌句會の夜に——

毎年一回開催されます柳翁忌に際しまして「物故川柳家を語る」と云ふ題下に私がお話をする事になりましたがもと／＼この題は案内状を貰つて初めて知つたやうな譯であります。たま／＼東京から川柳三人旅の高須啞三味、品川陣居、山川花戀坊の三氏をお迎へし、そのおあいてをいたして居りましたので「物故川柳家を語る」事に就きましては深く考へる時間を持たなかつたのであります。

演題そのものから云ひますと至極く廣い意味になつて居りますが僅かの時間に日本全國の物故川柳家を語ると云ふ事は不可能でありますし、同じやうな理由で關西だけの物故川柳家すら語ることが出来ません。結局我が「川柳雜誌社」の物故川柳家を語るのが穩當かとも考へられたのであります。それすら前述のやうに時間がなかつたので秩序のあるお話をする譯にまゐりませんので、本年の十二月が三回忌にあたる木村晃卓君一人の事を少しくお話しして見やうと思つて居たのであります。

しかるにこの席にまゐりまして本日の夕刊を見せられ

てはじめに知つたのでありますが今朝鎌倉で井上劍花坊氏が亡くなつてゐられます。氏は明治柳壇の中興の祖として弘く天下に川柳を唱導された方でありますから、木村晃卓のお話は他日に譲りまして今夕は井上劍花坊氏の事に就きましてお話し致します。

井上劍花坊氏は名は幸一、柳樽寺劍花坊と號され、柳誌「川柳人」を主宰されて居ります。我々の川柳が明治に復興いたしましたのは阪井久良岐、井上劍花坊、その他の人々の努力もありましたが劍花坊氏の健闘に俟つところが大きかつたことは誰人も否むことが出来ません。關西の川柳家で劍花坊氏と一番深交のあつたのは斯く申します私で明治、大正時代には手紙の往復をよくやつたものであります。劍花坊氏が始めて來阪されたのは大正四年、今から二十年前であります。私の長女純子が生れて間のない頃のことでありまして私が上福島中一丁目に住まつて居た時でした。驛へお迎へに行くと、劍花坊氏は劍客のやうに堂々たる風采で羽織袴に紺がすりの足袋をはいて居られました。劍花坊氏の説によりますと家庭で作られたものさうです。その頃大阪で紺がすりの足袋をはいてゐる人は見かけませんでした。それで梅田の驛の向つて左側の出口へ迎ひに行つた私は直ちに劍花坊氏を発見する事が出来ました。之が私と劍花坊氏との初めての會合でありました。それからすぐに私の上福島の宅へ行き大阪が見物した

いどの事でしたので市内見物に出かけたのです。今でも靜かに考へますとその頃の事が判然と思ひ出せるのです。そしてその當時あつた樂天地へ行き記念撮影をしました。私は浴衣でまるで國木田獨歩の様な風をしてゐましたし、劍花坊氏は紋付姿で寫眞を撮りました。それから飯をたべるのに丸万へ案内せよと云はれました。今はビルになつて居ますが大體丸万は田舎者殊に團體の行く所で、もとは木造ではありましたが堂々たる構えでした。それで地方的にはよく知られてゐたので劍花坊氏の頭にもあつたものと見へます。その頃店は小さいけれども料理のよい二鶴へでも案内するつもりで居ましたが、お客様の注文とあればこちらは何處でもよいので丸万に行く事にしました。そしてたしか魚鋤で一杯傾けたと覺えて居ります。

その時句會をしたかしなかつたかは明かではありませんが、しなかつたやうに思ひます。劍花坊氏は萩が故郷で、故郷へ歸られる途中大阪へよられ私にだけ會はれたのです。

その當時「雪」と云ふ雑誌を發行して居たのでありましたがその時「雪」が出て居たか出る少し前か判然といいたしません。劍花坊氏との句會は私の江戸堀時代に柳誌「土團子」を刊行し、大阪川柳社の名で南堀江の大阪出版組合の事務所で句會をしました。その頃劍花坊氏のお迎へや歡迎に走りまわつてゐる時、私の二女が患ひ死にました。私の阪神時代には苦樂園に泊られた事もありました。句會は天

王寺逢阪の廣田家で雨の日に句會をいたしました。二度目に劍花坊氏が來られた時には宗右衛門町の多喜の家に泊られました。そして日車、柳珍堂、游二郎等と多喜の家の裏から舟を出して藝者をつみ込み、大川の夕涼みに出掛け劍花坊氏を歓迎したのでした。劍花坊氏は随分はしやいでゐました。その時の歓迎が東京の文壇人が大阪へ來て一番旺んな歓迎を受けたのだと云つて居られました。今夜の私の兼題が「中之島」であつたので、劍花坊氏が亡くなられたとは知らず三人旅の方々に劍花坊氏のお話をしてゐたところでした。その後私は東上の際に劍花坊氏の高圓寺の宅に泊めてもらつた事もあります。その後、川柳以外の物件で來阪され、私に紹介の勞をとれと云はれたこともあり、ました。昨年秋、我が「川柳雜誌社」の十周年句會を東京で開催した時にも、東京の各吟社の句會から離れて活動されてゐた劍花坊氏も特に出席せられ好意を寄せられたのであります。又今春きやりの十五周年句會が四月の三日に淺草の本坊で行はれました時にも劍花坊氏が出席せられたので遠隔の地にあるにか、はらず比較的近々に會ふ事が出来ましたが、これが同氏との最後であつたのであります。その時の事を少しくお話しませう。

きやりの句會へは我が社から六名出席致しまして山雨樓氏が會場で我社を代表して挨拶を述べる事になり、私は選を依頼されましたので別室で選句致して居りましたが會

場の方は大變賑かでした。その時その別室に残されたのが劍花坊氏と久良伎氏と私の三人でした。どんな拍子に出た話か知れないがその時に劍花坊氏が私に

「路郎君、僕が死んでも金を集めて碑を立てる様な事はして呉れるな」

と云はれたのでした。私が私は選をしながらも私の持前の答へ方で

「そんな事を云つても死んで了うたら僕がどんな事をしやうと止める事が出来ないだろう」

と私は云ひました。そうすると久良伎氏は

「僕はそんな金があるのなら今僕に呉れ」と云はれました。こんな事をお話するのはどうかと思ひますが兩氏の性格の片鱗がこの短い言葉のうちに窺へると思ひます。今から考へると死を豫感されてゐたやうな話だと思はれますのでお話したのであります。

句會も終り神田明神内の開化樓で七十餘名が祝賀懇親宴を張る事になりました。別室で開會を待つ間に劍花坊氏に色紙短冊雅帖などを持つて行つて書いて貰つて居た人がありましたが、大抵劍花坊氏はことわつて居られたが是非といふ希望者もありましたので止むなく筆をとつて、一字々々書き並べるといふ氣の毒な揮毫振りでした。しかし劍花坊氏は手が振うて巧く書けない、私が傍から見てゐて以前の豪放な筆力が見出せない、全く何時もの字ではない

ので手が振はなくなつてから書かれてはと私がとめたので中止された。

そして呉れなくも健康をとりもどす様云ひましたら、劍花坊氏は私の顔を眺めて路郎が又いらぬ世話をやくと云つた風で淋びしさうに笑つてゐました。

今夕我が社の柳翁忌に際し時を同じうして（勿論柳翁忌の實際の日は廿三日ですが）劍花坊氏の死を知り感慨無量のものがあります。行年六十五、柳翁の年にはまだ八年もあります。劍花坊氏は實に古きを温ね新しきを知ると云つたやり方で我々としてはまだ一／＼元氣で居て貰ひたく思つて居たのでした。

劍花坊氏は私が昨秋、本社東京句會で力説いたしましたやうに川柳のためには尠からざる犠牲を拂はれた人であります。この大先輩の徳を欽慕し最後のお別れをするために私は明後十三日葬儀に參列の爲明夜行で鎌倉へ立つ事を述べて故人の靈をなくさめたいと思ひます。

柳翁忌に際し「物故川柳家を語る」と云ふ題下ではからずも劍花坊氏の死に遇ふ事は何等かの機縁によるものと思はれます。衝撃が餘りに大きいので充分に意をつくさない點がありますが、突嗟の追懷を遙に故人の英靈へ捧げて弔詞としたいと存じます。（日野華水筆記）

（昭9・10「川柳雜誌」No.141）

ぢくざく問答⑥

女秀頼・中村芳子嬢

中村芳子は、岸本水府の（頬かむりの中に日本一の顔）に詠まれた初代中村鷹治郎の末娘である。中村鷹治郎は、昭和10年2月1日（金）に亡くなり、号外まで出た。それほど大阪の人に愛されていた役者であった。これは、路郎が中村芳子にインタビューした記事である。（編者）

舞台は新町——對手は亡くなつた鷹治郎丈の愛娘——

まだ涙の乾かない芳子さんは私の前にキチンと坐つて、兩の手を反り氣味に膝頭のところでかう組み合はせておられる。中はん（扇雀）の初舞台そのまゝの可憐さである。私は芳子さんの年を勝手に十八にきめてゐたが、會つて見るとまだ十六の花の蕾、そのあどけなさにまづホロリとさせられた。

名をすて、十七八の戀もせむ

私はかうした若々しいころもちで會ひたいと思つてゐたが急に叔父さんのやうな態度に變つてしまつた。

「私はタツタ一日の臨時記者です。それで甚だ失禮なことばかり訊くかも知れませんが辛抱して話して下さい。」
「エ、」と芳子さんは素直になつた。

「あなたは色氣といふものを知つてますか？」

敷から棒の一言を發したが、一體鴈治郎の家へ來て色氣のことを訊くなんざあ、野暮の骨頂かも知れない。

當の芳子さんよりも、介添に坐つてゐた番頭さんの方が「さあ」といつて頭をひねつた。

「あなたのお父さんは舞台の色氣にかけては天下一品だつたんですよ。お父さんが亡くなられたのでこの世から色氣といふものが消えてなくなつたように私は思つてゐるんです。そのお父さんの舞台を見られて、あなたはどんな氣がしてゐました？」

彼女は舞台の父を追想してゐるらしかつたが、

「父の紙治はすきでした。エ、と思ひますわ」となか／＼田滑に色氣を肯定してくれた。矢張り父の子である。

「それに父はエ、人でした。」

「さうでせうとも、あなたにはホントにい、お父さんでしたでせう。だがあなたの家族關係はずるぶん複雑ですね。」

「エ、でもアタシは學校などで兄弟のことを聞かれても一人子だといつてます。」

「私は今のあなたを太閤さんが亡くなつたあとの女秀頼のような氣がしてならないのです。だからずるぶんイヤなことがあらうと思ひますが、すべてを忍ばねばいけませんよ。」

「ありがたう。アタシは鴈治郎の子だと思つてゐません。神山あさ（芳子さんの母）の娘だと思つてゐます。」

なんといふいぢらしい言葉であらう。彼の女の小さな胸のうちには早くもかうした覺悟が秘められてゐるのである。

こんな話をしてゐる間も、絶えず御用で座敷を出たり這入つたりしてゐられたお母さんの神山さんは

「この娘はわたしのことなんかいつたことがありません。父ばかり慕つてたのですよ。父はまた父でこの娘を抱きか、へてずるぶん面倒を見てくれました。部屋入りでも、人さんにお目にかゝる時でも、差支へのない限りは傍に置いてゐました。こんなことになるんだつたら、もつとわたしが母と娘らしくしてゐたらと思ひます。まるで主人がこの娘の母でした。」と口を添へられた。

「舞台の方は？」

「一昨年から舞台に立つたのですが、日數にしますと一年と廿日あまりです。小さい時に弱かつたものですから。」

「これからも。」

「エ、父の遺志もあることですから続けようと思つてゐます。」

「映畫は？」

「映畫より歌舞伎が好きです。ダンスなど嫌ひ。映畫は父に連れられて松竹座へ行つたくらゐです。外人の表情がとても巧いといつて父はお芝居の切れ目によく見に行きま

した。」

「映畫のスターでは誰がお好き？」

「飯塚敏子さん。あの眼が好きなんです。とても色つばいいわ。」

話がまた色氣に戻つて來たので私はおツ母さんの方へ向き直つた。

「神山さん、成駒屋さんがむかしヒイキ連の女たちからでも貰つたといふようなラヴレターが残つてゐませんか。あつたら欲しいものですな。」

「おまつしやる、探しときまつさ。」

と安請合をされてしまつた。

こゝで芳子さんと私とがカメラに入れられる段取となつた。

新しい佛壇には頬冠をしない鴈治郎の寫眞がこちらを向いて微笑んでゐる。部屋の隅には紙治を偲ばす炬燵が置かれてあるのもうれしかつた。

(昭10・2・15(金)「大阪毎日新聞」)

變遷を思ひ出すまゝ、

大阪も随分變つた。俵の帳場があつたり辻待俵夫が、神

田伯龍や石川一口の講談本を股倉の中で讀み耽つてゐたころから思ふと隔世の感がある。

「オーイ俵や」と呼ぶと、黒い角いポストの横から俵夫が二三人位出て來て、行先と値段がきまると、ジャンケンをやつてジャンケンに勝つたものが客を乗せて走り出したものである。それが巡航船といふ敵があらはれて、深里橋から俵夫たちが石を投げて巡航船の營業妨害をしたが時代は移つて、そんなことがありましたかネといふやうに、亡びるものは亡び、興るものは起つて三十錢タクシーやモーロータクシーが千日前の電車通を埋めつくし、ゴー・ストツプで人間を整理しなければ道も満足にあるけぬほどに人人で埋つた大阪になつてしまつた。私等の子どもも時分の明治三十二年頃には自轉車が珍らしかつた時代で、堂々たる紳士でなければ自轉車に乗れなかつた。それを一時間、一圓から六十錢位で時間貸しするやうになつたのを覚えてゐる。

私が高商豫科にゐたころ、大阪のハイカラと云はれてゐた荒木和一先生が自轉車で學校へ通はれてゐたので、みんなそれを話題にした位だ。

その自轉車の末路は今日のありさまである。十圓や十一二圓出せば、新車を買へる時代、自轉車が何百圓した時代と斯くも世の中が移り變るものかとただく首を振るばかりである。

先日も、堂島の方を迂路々々してゐて、つくづく感じたのは、蜷橋や櫻橋の電停が、その昔ホントに橋があつたことである。私は櫻橋も小櫻橋も蜷橋も渡つた人間であるが、今はこのあたりに蜷川といふ川があつたことを夢にも知らぬ人が多い大阪になつてしまつた。櫻橋の北詰を西へ這入つたところに福井座があつて、新派の福井茂兵衛が立て籠つてゐたことや、毎日新聞のあたりに堂島座があつたり、阪神前に歌舞伎座があつたことなども今は全く昔のことになつた。

中之島の剣先が、東へ埋立て、續いてしまつたり、道頓堀の川幅が狭くなつたり、大阪の變遷などは、書けば界限がないし、年代をあきらかにする必要もあるがそんなに紙數がないので、ホンのちよつびり、心にうかんだまゝ、を書いて見たに過ぎない。(二月二十日四男洋の誕生日に)

(昭10・3「上方」No.51)

掲載内容の擴大化

有保證の新聞紙法に由る

川柳は社會批判、人生批判に由る人間陶冶の詩であり、超穿ち、超リリツクの詩であり、形から云へば十七音字中心の短詩であるなどと今更こゝで川柳の定義めいたこと

を述べようとするのではない。が、さう云つた意味のホントの人間詩を建設するためには現在の如き無保證新聞紙法に據る法的絆縛の下に刊行してゐる柳誌では萬全を期し難い。

ホントの川柳は詩や短歌の如く純正リリツクの範圍を出なかつたり、俳句の如く、隱遁的叙事詩であつたりしてはいけない。生きた社會を知らなければならぬ。人生の何物たるかを知らなければならぬ。人間自らの剔扶に忠實でなければならぬ。そのためには凡俗溷濁の中に投じて眞の人間を琢き上げねばならぬ。眞の川柳は人間陶冶の完成にある。これが資料の提供並びに體驗の發表は何んとしても有保證の新聞紙法による機關誌たらざれば不可能である。

十三年以前逸早く川柳の社會化を提唱して起つた本誌は既に創刊當初に於て、この事を痛感してゐたのであるが、社内外の事情に於て容さざるものがあり、隱忍これを久くしてゐたのであつたが、遂にその時期が到來した。

來るべき三月一日發行の本誌より愈々掲載内容の擴大を約束されることとなり、時事報道の自由を有し、我等の生活を直接支配する政治經濟、さては人生享樂の演藝映畫の方面にまで論及する權限を有するに至つたのである。

斯く云へばとて直ちに柳誌變じて政治經濟誌となすかの如く解するは早計である。名匠の寶刀は猥りに抜くべき

でない。

特殊文藝誌としての本誌が如何にこの特権を利用するかは今後の編輯振りに期待されたいのである。

(昭11・2「川柳雑誌」No.145)

川柳職業人宣言

私はいよ／＼川柳で飯を食ふことにした。

イヤ喰べさせて貰うことにした。この問題についてはかなり以前から考えてゐた。曾てそのことを鳥山一步君に談したこともあつたが、その當時の川柳家の誤解を避けるため私がプロフェシヨナルな川柳人になることを同意されなかつた。しかしこれは時期の問題でいつかはさうしなければならぬし、いつかはさうなるものだと思つてゐた。ところが川柳雑誌社のお家騒動が、はしなくも私を職業川柳人にしてしまつた。

×

と云つたところで、今のところ、すぐそれが實現するものとは思つてゐない。今日の米代が直ちに私の川柳から生れるとすればそれは奇蹟に近い。

しかし、世の中のこととは能はざるに非らず、爲さざるなりである。非職業人としての私の苦闘はあまりに長かつた。

×

私が「職業川柳人として起つことの發表を見てオヤあの人は職業川柳人ではなかつたのか」と事の意外に今更のやうに驚くのは世間の人で「そんなことが出来るものですか、私たちは川柳を楽しみに創りさへすればいいので、川柳で飯を食はうなどとは思つてゐない」と變な眼使ひをするのが所謂川柳家ではあるまいか。

×

私が「川柳雑誌」を出して間のない話だが、西宮稅務署が雑誌發行による所得稅を課して來た。私は彼等の認識不足をひそかに笑つて釋明これつとめたが、遂に容れられなかつたことを記憶してゐる。私は日本で唯一人の趣味の課稅を甘受した。

私はある種の人たちからある種の用件を依頼された。別に謝禮をすべきである場合にも、その人達は私の營業であると信じてゐる「川柳雑誌」の購讀を以て謝禮に代へた。私は有難いやうなくすぐつたいやうなことに度々ぶつ、かつたが、釋明はしなかつた。しかし私を知る多くの人は私が「川柳雑誌」の刊行で衣食してゐるといふ誤つた認識の下に、私に最適の仕事があつても私に與へやうとしなくなつたので、私の職業戦線は日に月に縮小された。そして私は生活に窮すると、首を賣るのを常とした。折角伸びやうとする「川柳雑誌」のためにみす／＼不利益であると知

つてもそれは止むを得なかつたのである。

x 私に恒産がない限り「川柳雑誌」の刊行と私の家庭生活とは不可分の難行苦行を続けねばならなかつた。

社業を伸展させやうとすれば、家庭生活は極度に壓迫され、家庭生活の補充を劃策すれば社業は微々として奮はない。又しても孝ならんとすれば忠ならずの苦楚を嘗めざるを得なかつたのである。

x 私はこの矛盾を指摘して、経済的確立を基礎とした社業發展策を同人諸子に圖つたことは一再にして止まらなかつたが、もとく非營利的事業の事ジゼン今日に及んだのであつた。

非營利的柳誌經營を棄て、私と私の家族を中心とした生活、そこへ行かうとするならば、今の私は絶好のチャンスだと云はねばならないが、それを取えないのは私によつて川柳を呼吸してゐる多くの人達のあることを想ふからである。

私は萬難を排して「川柳雑誌」の箇人經營を應諾し、茲に斷然職業川柳人として起つに到つたのである。しかも前述の如くこれによつて口に糊することはあまりに薄いのであるから、例へ職業川柳人を標榜するとも其の完成を遂ぐるまでは著述業者としての麻生路郎をお忘れなく御後援

を仰ぎたいのである。

x 本誌七月號で「川柳雑誌」を今後麻生路郎の箇人經營とする旨を發表したところ、二三の柳誌では路郎氏の箇人雜誌になつたと報道されてゐたが、「川柳雑誌」は決して路郎の箇人雜誌になつた譯でなく、箇人經營になつたのであるから誤解のなきやうにお願いしたい。

x しかし今更、月並宗匠の轍を踏んで「この句もあの句も誠に結構でへい」とツルリと額を撫でる藝當は出來さうもないので、選句に執筆に就いては今迄と何等變らないから、その點は御心配御無用である。たゞ選句に講演に、出張に際して特に御高配が願へれば小生のからだのあいである限りはお使ひ下さつてい、といふことを御承知ありたいのである。
(昭和11・8「川柳雑誌」No.151)

川柳人協會と私

前號で「川柳職業人宣言」にのべた様にいよ／＼私が從來の職業を廢止し川柳専門に働き出すと今迄よりもゆとりが出来るので多年考へてゐた川柳人協會を創立し柳界の爲に一肌ぬぐ事にしたが私が川柳雑誌社の社主であ

るといふ理由から色眼鏡で見えてゐる人が居ないとも限らない。

併し私が立案し私がお世話しようと思ふから、理事長の椅子についただけで私はそんな人達には一切お構ひなしにグン／＼やれるだけやるつもりだ。誤解し易いうるさい連中も相當に多いので、川柳人協會には會長も副會長も置かない事にした。かうした仕事は小さな野心や名譽慾のためにやれる事ではない。従つて急速に完成し得る事とも考へてゐないので、根氣よくやる積りである。理解ある柳人の應援と鞭撻をお願ひしたい。

私が曾て川柳の社會化を提唱し、これが機關誌として「川柳雜誌」を刊行した際も川柳の社會化なんてそんな事が出来るものですかなんの爲にそんな事をするのですかと各方面を抑えてかかつた人もあつたが、一切お構ひなしに私は私の主張の實現に奔命したやうに今後も反對なしかしてより素直に手を繋いで共に斯界の隆昌を計つた方がよからふと思ふが合點がゆかねば日和見もよいと思ふ。疑點があればどし／＼質問され、ばお答へもするし、必要があれば支那亞米利加は言ふまでもない歐洲までも押しかけてゆく覺悟であるからしつかりとあと押しをして頂きたい。

私が従來の職業を放擲してまで柳界向上、柳人相互の交驩こうかんについて微力を盡す事は、一朝一夕の考へではないので

ある。どつちみち柳界に骨を埋める路郎である。その爲には時に無遠慮な言辭も弄するであらうし、出すぎた行動もするであらうと思ふが、その點路郎のイゴイズムとして葬り去らずに一臂の力をお貸し願ひたい。川柳人協會の趣旨から言つても決して喧嘩腰になる様な事はしないから反對する人は遠慮なく反對して頂きたい。左顧右眈してゐては死ぬ迄に何一つ出来つこのない事を昔から知つてゐるので反對者はそのまゝ、にしておいて自己の信ずる道に勇往邁進する計りである。従つてこの路郎の精神を愛する人々から先づ握手してかゝるつもりだ。

川柳人協會の仕事について誤解する第一のものは、「川柳雜誌」を川柳人協會の機關誌とする點にあるのであらうと思ふ。これについては私は左記の辯明を以つて御諒解を願ひたいと思ふ。

その第一は「川柳雜誌」を刊行した上に、例へ薄つべらなものでも川柳人協會の機關誌を刊行することは容易でない。それよりも協會の目的はもつと外にある。協會は協會らしい仕事をはじめねばならぬ。徒らに費用ばかりかゝる機關誌を出してその繼續に苦しむよりも「川柳雜誌」の一部を間借りする方が樂々と仕事をやつて行けると思ふ。仕事の内容については次號あたりからポツ／＼發表する考へである。第二は「川柳雜誌」も川柳人協會の會員が増加すれば多少とも經營上にお蔭を蒙ることになる。しかしこ

のお蔭を蒙る點にケチくさい反感があれば何をか云はんやであるが協會のために又私費を投ずることも考慮に入れていたかねばならないのである。

私の經營する「川柳雜誌」が間貸しをして多少とも稼いだと解釋されても私が川柳界に働くと稱して自己の生活を保證せうと解釋されても何等はづるところはないのである。それは日本帝國の爲に一身を犠牲に供して戦ふ軍人にしても彼等は俸給をもらつてゐるのである。恩給さへももらつてゐるのであると言ふ事を考へて頂きたい。私は自己の從來の職業を放擲して柳界の爲に働く以上私が辛じて生活し得るものは當然柳界によつて與へられるものと確信してゐるものである。「川柳雜誌」の刊行によつて或は私の貧しい柳話や選句によつて或は私の自由な揮毫によつて生命の保全を期したいと考へてゐるのである。

右にのべた私の言辭が御承認願へれば軍人が一死以つて國にむくゆると等しく私が川柳人協會を創立して柳界の爲に骨を埋める覺悟を御理解願へる事と思ふ。何分の御聲援が願ひしたい。

× ×

終りに川柳人協會の仕事は川柳人の意志の總和によつて行ひたいと考へてゐる。従つて協會の總會の如きも先づ大阪や東京から始め、全國の理事や評議員の投票決議によつて總會地を決める事はオリソピックのそのの如くやら

うと思つてゐる。私をお信じし下さるならば或は川柳人協會の創立が柳界にとつていゝ事だとお考へになるならば出来るだけ勇敢に即刻入會の申込みをして頂きたい。

(昭和11・9「川柳雜誌」No.152)

川協と其の事業

川柳人協會の組織や、その目的については前號、前々號、前々々號で發表した通りであるが、本號へは其の事業の外廓を描いて参考に資したいと思ふ。川協の事業は川協でなければ出来ないやうな事業を撰みたい。

(一) 年刊句集の刊行

私達川柳人のバイブルと云はれてゐる「誹風柳樽」は明和以後の年刊句集であるが、斯うした句集が、現在の私達にも必要ではないだらうか。曾て年刊句集の刊行を企劃した吟社がないでもないが、斯うした事業の繼續はよく一吟社の能ふところではない。假りに多少の困難を排して刊行し得るも、經費、選者、作家等が限られたる範圍となるため、權威ある年刊句集とはならない憾みがある。

これを川・協の手で刊行するとすれば、すくなくとも如上の欠點を補ふことが出来ると思ふ。

若し全國的に出句せしめ、出句者は勿論、出句しない者

にも之れを頒布するならば一部當りの原價は割安となるため刊行が容易である。

全國を幾つかに分割して、其の地方々々の理事がこれをまとめ、その地方の評議員會にかけ、名譽會員の賛同を仰ぎ之れを川・協の事務所で一括整理して刊行すれば各地方に於ける句風も尊重せられて誹風柳樽以上の權威ある年刊句集を刊行し得られると思ふ。出句數については分割區域内に於ける會員の按分比例に依れば比較的公平を保つことが出来やう。尤もこれが實現を見るためには知名の川柳人は擧つて協會員の資格を獲得しなければならない。

(二) 公認選者

選者公認問題については多少の異論があるかも知れないが、選者の人物識見が直ちに柳界の向上發展に影響するものとすれば一部の反對はあつても、この問題の解決を一日もゆるかせにしてはならないと思ふ。これに附隨して選稿料の事にも及ぶべきであらう。

(三) 川柳會館の建設

會館の建設に伴ひ、柳人宿泊並に歡送迎についても特に一考する必要がある。

前述の各項は川柳人協會の事業中二三の例を簡單に提示したに過ぎないので如何にせば柳界の向上發展に資することが出来るかは諸賢の御垂教に俟つ次第である。

(昭和11・10「川柳雜誌」No.153)

バツト異變

君も知つてるやうに、僕はバツトを一日に六ツから八ツ喫つてゐたが、しまつをしる貯金をしろといふ掛聲を聞くときと贅澤をしてゐない僕はバツトでも少し減らして見るより仕方がない。大體僕のバツトは自分の仕事と正比例して能率があがるのでコレを減らす事は凡そ意味のない事なのだが傍から見れば無駄な様にも見へるので、一日に四箇位に減らそうといふ決心をして實行にかかつたが、なか／＼實現が困難で、今では四箇乃至六箇位の間を往來してゐる。それでも幾らか減つたが貯金帳へはちつとも響かない。僕の貯金帳はよほど貯金にかけては鈍感らしい。

そのくせ僕の貯金帳は町の郵便局長に奇異の感を懷かせてゐる天晴れ名譽の貯金帳だ。なんしろ通帳番號の上に「勤」の一字があるんだからな。君も知つてる通り僕は近眼で兵役は丙種だ。しかしこれでも世界戰爭に従軍したことになるので、その時の御褒美が忘れ得ぬ「勤」の貯金帳だ。

少し自慢話になりそうだからこの話は止して、元のバツトのことに及ぼう。近ごろのバツトは吸ひ口が無くなつた。それだけ函の幅が狭くなつたよ。これは國策にそつて紙の節約なんだ。僕の懷ろでは、これつばかしの紙を節約

したところだと思うが、これが大したしまつになるらしい。いつそ函を止めにして十本以上の數賣りにして、銘々が煙草ケースを持つて買ひに行くやうにしたらどんなものぢやろと思ふ。昔へ戻つて腰へ蓑入をぶら提げて歩くのもいい。何んしろ、洋服に下駄履き時代が出現してゐるんだからな。今、たばこ屋では吸ひ口をあげまへう？ と云つて別に呉れるが、それをポケツトにそのまま放り込んだんでは衛生上どうかと思ふので、吸ひ口無しで吸ふか、昭和九年滿洲へ出かけた時、柳路君が呉れたパイプで吸ふことにしてゐる。まだ以前のバツトが残つてゐるのを見つけると知らぬ他國で友人に會つたやうなよろこびを感じてゐる。それでも買占はしない。世間には僕のやうな愛煙家も澤山居るのだから、いつものやうに一度に三箇しか買はないことにしてゐる。云ひ忘れたが函の色も少しく變つたよ。

(昭和13・9「川柳雜誌」No.176)

大時計の下で (雑感)

大きな柱時計の振子が夢のやうに動いてゐる。同じ間隔をおいて右へ左へ。

私は彼に教へられねばならない多くを持つ。幾十年を蹴

蹴いたり、馬車馬的に駛つたりして來た僕だけに――。

ロンドンへ落下傘部隊が下りるといふ記事が出はじめたころ、流石のバーナード・シヨウも沈黙したと新聞紙が報じてゐたが、……したのかさせられたのか想像に難くない。

誰でも云ひたいことは云ひたいのだ。沈黙を惧れよ。

近ごろの日本人は從來の日本魂にプラスすべきものを感じ出した。

▼音曲十年の稽古を積んでも初心の域を脱せず、二十年練磨したとて中々玄人になれるものではない。これに比して柳界の現状は如何。眞の先輩は尠し。

といふ記事を「昭和川柳」で讀んだ。玄人とアマチユアとの差がハツキリすれば川柳はもつと向上するだらう。今の川柳界がふるはないのは、アマチユアがアマチユアの立場を知らないからだ。イヤ、アマチユアが玄人の顔をしてゐるからだ。釋飄齋なら詳しくは考ふべしと云ふところだ。

▼川柳生活二十年三十年もの先輩を不相變、編輯や經營の第一線に立たしめるのは柳界の恥だ。川柳の社會進出など大きな口を利くよりも先づ先輩を第一流の社會人たらしめよ。

と同じ筆者が書いてゐるが、過渡期の川柳界では、アマールチユアのすさびに生活といふ文字を慣用して來たのであつて、眞の生活でないから、それ等の先輩の多くに權威のないのが當然だ。

その人の眞の生活は外にあるのである。その証據に、仕事が多忙かつたのでスツカリ川柳を忘れてゐたやうなことや、仕事が多忙かつたので、雑誌の發行がおくれて濟まなかつたといふやうな編輯後記をそれ等の同人雑誌ではザラに讀まされるではないか。その場合の川柳生活の川柳を畫家といふ文字と取替へて見れば、どんな點が違つてゐるか説明の必要がなからう。

その先輩が、眞の川柳生活をしてゐるとすれば、雑誌の編輯や經營にいつまで携つてゐやうがチツとも恥でもなんでもない。

文士生活の菊池寛が「文藝春秋」の經營に携つてゐるからと云つて文士仲間の恥でもなんでもないやうなものだ。畫家が畫家の道を切り開いてゆくやうに川柳家も努力して自己の道を切り開いて行くべきものだと思つてゐる。

前述の筆者は川柳界の現状があまりにも無氣力であり、無自覺であり、イゴイズムであることを慨嘆してゐられるので、その點、同感であるが、もう一步突き進めて考へれば、結局私の説になるのではあるまいか。今、眞に川柳生

活をしてゐるものは私たち夫妻の外にはないのぢやないかと思ふ。

斯ういふと少し偉らさうに聞へるが私たちが川柳マニアの醫師の聽診器を取り上げに行かないのと同様に私たちの立場を理解して貰ひたいから敢てこの言をなしたのである。(路)

(昭和15・7「川柳雜誌」No.198)

僕は思ふ

大分以前のことであるが武者小路實篤氏が新らしい村を宮崎縣の山奥につくつて同志をあつめたことがあつた。私は「白樺」時代の武者小路氏には非常に好感を持つてゐたが、この新らしい村には全然共鳴出來なかつた。人道主義のトルストイが、無料宿泊所の人間に金錢を與へると、その金が無くなるまで働かうとしないことを發見して、彼等は遂に救ふべからざるものであることを悟つたやうに、武者小路氏のこの新らしい村も要するに、華族のお坊ツちゃん機の机上計劃を實現化しやうとするのに過ぎないだらうと思つてゐたのである。果して、暫くすると、新らしい村は同志にまかせて自分は奈良へ來て住んでゐた。そして

新らしい村は遂にどうなつたのか、世間からは忘れられてしまつた。その頃私は云つた。私だつたら、新らしい村を山の奥に建設しないで、むしろ大都會のド真ん中に創りたといふ云つた。即ち社會と四ツに取ツ組んだ新らしい村を創りたかつたのである。それは新らしい村と呼んでもいいが、新らしいビルと名づける方がもつと適切であつたであらう。

私は武者小路氏の偉らしいことも知つてゐるし、敬服もしてゐるが、俗悪な世間から逃避する態度は私のとらないところであつた。従つて芭蕉の偉大さも認容はするが、かれの隱遁的であり、逃避的であることは嫌きたらないのである。

私は何處迄も俗世間の中にあつて、超脱俗的でありたいのである。私が川柳してゐるのはその境地への突撃を目標してゐるに外ならないのである。私の舊作の

子澤山僕の枕は何處へいた

の境地にあつて、超脱俗的に生きぬきたいのである。

従つて世の多くの川柳人が川柳することによつて、現代化された良寛になつて貰ひたいのである。川柳する世界へまで、俗世間で通用するやうな變な工作をしたり、妙な名譽慾を持ち込んで貰ひたくないのである。お互ひは俗世間の煩はしさから超越したいために文學し、川柳する悩みを持つのではないか。要するに川柳することによつて、現代化された良寛になることが、のぞましいが、それが出來な

ければ、せめて

ただたのめ花もはらはらあの通り

の一茶ぐらゐになつて貰ひたいものである。

川柳人協會は斯うした高度な川柳人をつくることを最終の目的として、川柳人の一人一人の魂が結びつきつゝ、あるのである。

でなければ、川柳が人間を陶冶する詩などとは云へないだらう。
(昭和16・5「川柳雜誌」No.208)

戦争と川柳

短詩型文学の中で川柳ぐらゐ社會相があらさまに表出されてゐるものはないだらう、それは神經の尖端をかすめ去るやうな最小限度の刺戟すら決して見遁さないのであるから。従つて戦争の如き、刺戟と云ふには餘りにも大きな刺戟をどうして見遁すことが出來よう。

支那事變が、昭和十二年に蘆溝橋畔に勃發して以來、大東亞戦争に擴大した今日に至るまで、事の大小を問はず、常に川柳に脈打ち續けてゐるのである。

川柳にあらはれたさうした反映は單に戦争に限らない。戦争がもたらした直接間接の政治的經濟的變動は勿論、社

會のありとあらゆる動きが潑刺として川柳に表出されてゐるのである。

殊に銃後國民の眞實の聲が澎湃として迸出することは現代川柳の一特徴だと云へるであらう。現代の川柳は或る意味において戦争の其の日の其の日の歴史を綴りつつあると云つても過言ではないだらう、少しく例句を擧げてその證左としよう。

私は昭和十三年に一文字山の戦跡を訪れて

一文字山雲の去來へ歩哨立ち

と詠じ、蘆溝橋では

蘆溝橋以來晝寢のひまもなし

と支那事變による國民の覺悟をうながし、通州では

通州は曇り興亞の人柱

と慨嘆久しうしたものである。

尤もこれらの句は戦争が川柳にどんな形で表白されて來るかといふ、ホンの一例に過ぎない。(つづく)

戦争を取扱つた川柳について、「誹風柳樽拾遺」の戦場之部を編いて見たが、遠い過去の戦争を徳川中期の寶曆、明和、安永、天明時代に想像力で創作したものだけに、眞に、迫眞力のある句は見られなかつた。現在大戦争の渦中にあるの創作と斯うも違ふものかと驚くほど、のんびりした客観的な戦争川柳である。たとへば

能登どのは蚤を逃した顔ツつき
ふところに抱いてゐたのにほろぼされ

飛車角のみんななり込む一の谷

注進のたびに平家は後家がふえ

楠はたてかけて見ておかしがり(藁人形のこと)

楠に歩三兵にてなぶられる

清正は人參ばたけ踏みあらし

日本勢一人奇南の目利をし

首張のよせ算するに小西が出

などがそれで、その多くは滑稽に皮肉に第三者的な戯弄を恣にしたものばかりである。

これは時代を隔てて詠出したために戦争そのものに對する實感がともなはず、一つの物語として詠出したからに外ならぬのである。しかし人間的な、本能的なものが戦争を通して表現されてゐる句

降參がすむと一度にひだるがり

勝いくさむかうで炊いた飯をくひ

と云つた風のもののあることも見過せない。白旗を掲げて來た米英軍が、降參を許容されて一度にひだるがつたことであらうし皇軍の勇士たちがチャーチル勅定で御馳走のパンに舌鼓をうちウキスキーに咽喉を鳴らしたことは、とりもなほさず「むかうで炊いた飯をくひ」なのであると思ふと微笑を禁じ得ないものがあるのである。

道具屋にあるのは逃げた具足也

といふのもあるが、これなどは従來の川柳の持つ辛辣さを遺憾なく發揮した句で、本土を襲撃した米機が見世物になつてゐるのと好一對かも知れない。(つづく)

徳川末期のどさくさ時代に、すべての文化が凋落したことは人の知るところであるが、川柳もまた衰退して句振りも甚しく低調になり、全く世人から顧みられなくなつたのである。ところが明治三十七、八年の日露戦役と共に、銃後國民の敵愾心爆發の具として關心を持たれたものか、従來の川柳家や、その一派の手から全く別派に、新聞柳壇を通じて勃興した。

しかし無暗矢鱈むやみやたらに敵愾心を發揮し敵國を嘲罵したために、それ等の句の内容は露骨すぎるほど露骨であり、表現の技巧の拙劣低調であることは従來に比して兄たり難く弟たり難いもので現在から觀て全く非詩的であるといふ非難は甘受しなければならぬものばかりであつた、次にその例を二、三擧げて見よう。

減るは軍人殖えるは後家とロシヤ云ひ

(黑白坊)

艦隊に牡蠣がつきケチがつき

(香 樽)

ロシヤでは石に花咲く春を待ち

(頰冠樓)

五十歩百歩だと仕舞まで負け通し

(骨抜坊)

降伏は心強くも數百騎

(陽丹坊)

バルチツク死出の浪路のはかどらず

(不覓子)

ざつとこんなものである。(續く)

戦争によつて川柳が旺さかんになり、戦後においてはさらに一段と飛躍するといふ事實は、日露戦争に次いで、大正三年の第一次世界戦争の勃發とともに殷盛を極め、その戦後においては遙に目覚ましい發展ぶりを示した事によつて實證し得られよう。

しかしながら、第一次世界戦争までは、單に戦争によつて川柳が旺になり、戦後は一層これに拍車をかけ發展をしたと云ふだけであつたが、今次の大東亞戦争(支那事變を含む)に至つては川柳そのものの興隆と云ふよりも寧ろ戦線の慰問銃後の激勵といふ使命を帯びて短詩型の寵児たるの觀を呈してゐるのである、多數の川柳人の出征は直ちに戦線川柳となつて銃後に、銃後川柳人の川柳は慰問文中に挿入また柳誌慰問となつて戦線へまた白衣勇士の慰問句會、戦捷祈念川柳會、陥落祝賀川柳會等々と全く報國川柳の域にまで進出してゐるのである。

次に出征川柳人二三の餘裕綽々とした陣中吟を擧げて、その心情に觸れることとしよう。

共々に明日は散る身のかくし藝

(酒井美和夫)

行き違ふ部隊も負けぬ汗をかき

(同)

稻光り敵も味方も浮出され

(同)

日本の水が一杯だけの慾

(月原 宵明)

激戦をけろり忘れてシヤツ洗ふ

(同)

彈道低し噛みつくやうに伏せの聲

(市場没食子)

戦争に負けてアイウエオも覚え

(宮岡 白峯)

銃後川柳人の句も紹介したいが私に與へられた紙面が
盡きたので女性川柳人米本貴志子女史の

皇軍にすまぬと思ふ湯があふれ

といふ、女性らしい心づかひの一句を掲げてこの稿を結ぶ
こととする。(昭17・6・18(木) 21(日)「大阪新聞」)

不朽洞山房徹夜句會

冬の日脚は早い。五時を過ぎるともう眞ツ暗だ。幹事の
竹青が不朽洞山房の提灯をブラ下げて、三本松の停留所へ
出迎えに行く。

大阪の一行がドヤ／＼とやつて來た。まるで学生の修学
旅行のやうに、はしやいでゐる。一人も乗り遅れがなかつ
たらしい。集るもの二十三名。幹事役は天手古舞だ。

会場は山房に隣接した頓光寺だ。午後七時すぎ川柳不朽
洞会の理事長、中島生々庵博士の挨拶によつて徹夜句會の
幕が切つて落された。続いて私が、「徹夜句會の辯」を簡單

に述べた。次いで一同記念撮影。撮影が終ると直ちに、別
室で晚餐にうつつた。幹事の努力は一同をしばし夢幻境に
追ひやつたが、十時半一齊に盃を伏せて、再び句會場に戻
つた。

席題が三つ出でゐる。「薄情」「炭」「夜中」。自分の好む
題を選んで一題百句を作ることと規定されてゐる。一同驚
くまいことか、こんな筈ではなかつたがと云ふ顔をしてゐ
る人もある。もう大阪へ引返へすには電車がな。さあさ
あ腰を据えて作つたくと作句奨励のむち。第一次締切が
十二時、第二次締切が午前六時。十二時から午前一時まで
は、豆秋、白柳子、里十九、小松園、鮎美、生々庵の六人
が十分間随想を語つた。それ／＼の職域からの話題だけに
何れも面白く聞けた。こゝで私も「薄情」の百句吟に参加
した。火鉢と云ふ火鉢に炭火があか／＼と炎をあげて寒さ
をふせいだ。そろ／＼蒲團の中へ滑べり込むもの、第一着
の名乗りをあげるもの、しばしは緊張の作句三昧、斯くし
て夜はしら／＼と明け放れ、六時に句稿を全部締切つた。

「薄情」の作句者は没食子(二〇〇句) 竹莊(一〇〇句)
小松園(一〇〇句) 香林(七八句) 鮎美(五五句) 籌彦(五
三句) 瓜平(四四句) 蔑乃(二二句) 錦風(一六句) 梨里
(二二句)「炭」の作句者は星登(七〇句) 白柳子(五九句)
方正(五〇句) 翠光(三二句) 白香(二〇句)「夜中」の作
句者は靜一路(六三句) 栞(五〇句) 文蝶(三九句) 里十

九(三八句)生々庵(三二二句)豆秋(二十五句)であつた。

選句は後日私がした。その結果を検討して見ると、作句数の多いものが必ずしも佳吟を多く生むといふ訳でないことが次のページの入選句数について知ることが出来る。同じく多く作句してゐても同様の句があるために、入選数がウンと減少したのもある。翠光、錦風のやうに、幹事役を引うけた人たちや、葎乃、白香、梨里のやうに、炊事や会場の世話係をつとめた人たちの作句数が比較的少ないこともうなづける。栗のやうに、ねむたがり屋はいつもの腕前を發揮せずに、夜が遅くなるにつれて作句價值がハツキリと減少してゐる。他にも徹夜にたたられたものもあつたかも知れない。竹莊は、どうした加減か、いつもの色ツばい句が出なかつた。豆秋は頭の中で自選する癖があるので今夜の寡作も不思議ではない。没食子はなかく佳吟を吐いた。「薄情とそしらはそれ我貯めん」「薄情をうらみ子供を味方にし」などは名句だと云へやう。句数も第一位に一〇〇句をものしたし、徹夜句会の殊勳者である。小松園には「薄情な男の家はもう宵寢」の名吟がある。瓜平は句を作るより樂だと云つて、出席全員的首実檢をして漫画(表紙参照)を描いてゐたが、作句にも相当に力を發揮した。

選句を終つて、入選句を一瞥した私の一等うれしかつたことは、全員が、それ／＼の異つた観点に立つて簡性を發

揮してゐることだつた。私の句を摸した作家は一人もゐなかつた。誰もがそれぞれの環境から、それ／＼の句を創つてゐることを知つた。今回の徹夜句会はこの点から觀ても成功だつたと云ひ得る。いつまでも／＼この調子ですすんで作家自身を完成して貰ひたい。

一同、朝食が済むと、職場へ急いだ人もあつたが、大半は赤目の四十八滝へ吟行を試みた。外は寒い風が吹いてゐる。幹事や私たちが、不朽洞山房を引揚げたのは午後の五時頃だつた。

(昭24・1「川柳雜誌」No.261)

鑑賞 川柳の味に就て

川柳の味は主として穿ちにある。どんな句でも、大なり小なり穿ち味を持つていない句は稀れである。批判文學だと云われる所以である。他の短詩型文學との差違もそこにあると云えよう。

次に句例を掲げて見よう。

輝くや元より金に嫁せし身の (劍花坊)

閉めた戸が四五寸戻る男の子 (櫻ン坊)

貰うても淋しきものは御靈前 (飯山)

むかしむかし稼げば樂になりしとか (豆秋)

従うてゆかねば犬の首しまり (雅幽)

一本の外はどうでもよいテープ (橙 倉)

蟬取つた一人へみんなついて行き

(大夢子)

これ等の句はそれ／＼に特異の句境を詠んでいるのであるが、それ／＼に何かしら人の肺腑を衝くものを持って、いることに氣づくであろう。その何かしら人の肺腑を衝く作用を要約して穿ちと稱しているのである。この穿ちの迫眞力の量の多少や強弱が、その表現された句の内容とマッチしたところに、川柳の味が出るのである。従つて川柳の味は多種多様となる。

しかし、初學の人々には前述の句を一讀しただけでは何處に穿ち味があるのかと反問される方が、あるかも知れないので簡単に解説しておこう。

「輝くや」の句は金權結婚、政略結婚が蔑視された時代に、金權結婚、政略結婚をした女性を詠んだ作者の批判である。金權結婚、政略結婚の常として身分の相違、年齢の相違は云うまでもない。そこには愛情のカケラすらも持ち合さないつまり生きた人形としての結婚なのである。しかも社會からは蔑視されたのである。そうした女性の心の憂さのハケグチが錦繡綾羅を身に飾る物質慾へと走るのも當然と云えば、あまりにも當然なのであるが、社會の眼は彼の女の虚榮でしかないとして冷たい批判を浴びせたものである。世の中には、そうした事件が度々繰り返されてきた。そこを捉えたのがこの句であつて第三者の胸を強く

打つたことは云うまでもないであろう。そうした人の肺腑を鋭く衝いた句を指して穿ち句と云うのである。

次の「閉めた戸が」の句は、四五寸戻ると云うところに、男の子らしいハツラツさがあつて、第三者の共感をよんだのであり、そこにこの句としての穿ちがあるのである。

「貰うても」の句は、何かを貰うとなれば、必ず、それはよろこびでなければならぬが、貰うても淋しいものは御靈前であると逆な場合を捉えて、第三者をうなづかせたところに穿ちがあるのである。

「むかしむかし」の句は、「稼ぐに追いつく貧乏なし」と云う古諺や啄木の「はたらけどはたらけど猶わが生活樂にならざりちつと手を見る」の歌を思わせられる句であるが、昔は稼げば樂になつたそうであるが今は稼いでも稼いでも樂にならないと云う、今の世相のせち辛さをなげいたところに穿ち味があるのである。

「従うてゆかねば」の句の作者は市電の運轉手をしていたが、勞資の對立が今日とは違つて、組合はあつても労働者に不利な時代であつたので、犬を藉りて來て、労働者の立場をなげいた諷刺句なのである。従うてゆかねば首がしまると云う強靱な諷刺に穿ちがあつて第三者の共感を誘つたのである。この句を讀むと筆者などはジャック・ロンドンが、狼を藉りて社會主義の宣傳をした頃のことを想起させられるのである。被壓迫階級は斷壓が強いと必ず、斯

うした諷刺に隠れ去るものである。徳川時代の落首や川柳にも、そうしたものを感じさせられる。

「一本の外は」の句は、舷側に立つて澤山なテープをつかんではいないが、その中で、愛人が持つているタツタ一本のテープの外はどうでもよいテープだと云い切つたところに、穿ちがあるのである。まことに人の心の中に飛び込んだ赤裸々な叫びであるだけに何人も共鳴しない譯にいかないところに、この句としてのよさがあるのである。

「蟬取つた」の句は、餓鬼大將に、みんなが、くつついてゆくところに、誰もがうなづく穿ち味があるのである。たつたこれだけの表現で、共感を呼ぶところに此の句の味は大したものである。

以上の解説で、大たい穿ちと云うものが、どんなものであるかと云うことを知悉されたことと思うが、それではその穿ち味だけで、すべての川柳の味を云々してい、かと云えば、それは早計であると云わねばならない。穿ち味は川柳の特性ではあるが、その量が稀少であり、穿ち味としての迫真力が微弱である場合には、句を構成している形式と、その形式にふさわしい内容から、穿ち味外の他の味が強く押し出されて、川柳の味の複雑さを示すことになるのである。例えば

守り札もろともチボにとられたり

(豆 秋)

知事代理府廳に訪へば庶務の隅

(自由朗)

おそろしき豚兒愚妻をオイと呼ぶ (同)

などを一讀すると、思わず苦笑をする。なるほどこれ等の句にも穿ち味があるので、それによつて胸を打たれるには違いないが、それと同時に思わず苦笑させられるので、こんな句を指して川柳では「おかし味」の句と呼んでいるのである。従つて「おかし味」も川柳の味の一つだと云えよう。ところが、

ほろほろとして小兒科のドアをあけ (零骨)

嬉れしさは手紙の中にまた手紙 (雅幽)

酔はねば言へず酔へば悲しき (松郎)

子を呼ぶ聲に外聞もなし (飯山)

などの句を讀んで見ると、軽い穿ち味はあるが、おかし味はない。人間の眞情をそのままおちまけたところに眞實味が溢ふれ、情にうつつたえるものが強いので、こんな句を眞實味の句と呼んでいる。これも川柳の味の一つである。次に、自然を詠んだ句の味を吟味して見よう。

ほととぎす節季を逃げて來た男 (滿潮)

海岸の松は逃げ出す姿なり (しげる)

もう歸れ歸れと花の寺は鳴り (青明)

これ等の句は自然を詠んだ句には違いないが、人間の臭味が非常に強い。ほととぎすを聴く風流を詠んでも、海岸の松の風趣を詠んでも、花の寺の黄昏れを詠んでも、そこには作者の批判があつて、俳句などとは全然違つた味を出

していることに氣づかれるであらう。

同じく自然を詠んだ句でも、

冬の農家を平和となづけたる寫眞 (有爲郎)

になるとウンと皮肉味がある。冬の農家は、とりいれも濟んで眠つていような静かさである。そこを撮影して平和と名づけてはあるが、それは物の表面を見ただけである。そのウラには炎天下の草取、とりいれの多忙その他の労働の苦しみや、その労働に對する報酬があまりにもむくいられていないみじめな生活のあることを一切棚上げして、冬の農家に、平和となづけたる寫眞と題しているのに作者は軽い憤りと強い皮肉味を感じているのである。皮肉味も又川柳の味の一つとして數えることが出来る。次ぎに皮肉味の句を掲げて味讀して貰うことにする。

千慮の一失萬引の忘れもの (電象)

信用があつて集金人で果て (一光)

竹ニヨウで鰻食はうと歌仲間 (樂齊)

あけにくい障子は地震からでなし (二柳子)

玉の奥羨やむ様な顔かいな (靜雲)

方針を問はれて女給とも云へず (スエノ)

これ等の皮肉味の句にも穿ちがあることは改めてことわるまでもなからう。句の味はその持ち味によつて畫然と區別することも出来るが、二つの味、三つの味が一つになつて一句を構成している場合も尠くないのでそんな場合

には持ち味の多量に含まれているか、いないかによつて分類しているに過ぎない。

皮肉味の句は一讀しただけでは、どこに皮肉味があるのか解しかねる方もあらうかと思われるので簡単に解説をすることにした。

「千慮の一失」は他人の物を掠めようと云う人間が忘れ物をしたと云うところに皮肉味を感じるのである。「信用があつて」の句は、信用されるような人間であるから、もつと偉くなりそうなものであるが、集金人のままで死んでしまつたのに皮肉を感じたのである。「竹ニヨウで」の句は、竹葉の葉の字をヨウと讀まず、萬葉のニヨウと讀んだところに皮肉を感じたのである。

次に感覺味の句を少しくならべて見よう。

夕櫻とんぼがへりがしてみたし (路郎)

樽曳や葡萄酒なる闇もよし (町二)

我母の一生を風の音がする (莢豆)

秋さらり銀の襖の物思ひ (路郎)

などの感覺味の句は詩情の豊さを特徴とするだけに穿ち味は非常に稀薄である。従つて、天麩羅や鰻のような濃度の強い穿ち味の句が川柳だと思つている人達にとつては全面的に共鳴し得られないものがあるらしいが、一部の川柳人からは感じの句として相當に高く評價されているので、斯うした句の持つ味も川柳味として見遁がせない。

又、或る種の川柳の味を云い表わすのに軽味の句と云う言葉がある。軽味の句を説くためには、先づ、軽味と云う言葉の意味からきめてかからねばならない。

軽味の軽と云う文字は軽卒とか、軽薄とか、輕佻とかの熟語となつて、いかにも安ッぽい皮相な感じを表わしているが、川柳の軽味と云う言葉には、そんな意味は全然ふくまれていない。よく世間で、あの人の筆はかかっていると云うが、あのかかっているに近い意味なのである。つまり枯淡と云う言葉が一番適切なのではないかと思う。例えば美食に飽いた人のお茶漬の味だとも云えるのである。お茶漬階級のお茶漬の味でないことは云うまでもない。従つて軽味の句は軽快であり、洒脱であり、すらすらとよどみなく詠まれていて、しかも、汲めどもつきぬ枯淡な持味を出している點、全く頭の下る句なのである。

待ち合せ帽子の型を折り直し

(かほろ)

美しきにかかず子の鼻つまんどき

(丹路)

開戦

もやもやがいちどに晴れたみことのり (豆秋)

などが、それである。軽味の句は一讀した時に、ただすらすらと詠みツばなした句のように見えるが、決して決してそうではなく、實によく洗練されていて滋味掬すべしと云う味があるのである。斯うした味のある作品が生れるまでの作者の勞苦は並みだいてではない。多年の勞作によつ

て遂に達成し得られた枯淡味なのである。つまり軽味の味とは内容そのものからうける感じと云うよりは表現形式の輕妙さからうける感じの方が強いのである。

次に深刻味の句について述べることにする。川柳は僅々十七音字中心の短詩ではあるが、それ等の句の中には深刻なる人生の一斷面を描寫してあますところがない。

仕舞風呂一本足がとんで來る

(大門)

死ぬまいと手を變へ品を變へて死に

(叱咤郎)

此の人出みんな生きてる恐ろしさ

(紅太郎)

貧しさは時に罪なき子を叱り

(鉢朗)

蘇生して藝者の道をまた歩む

(有爲郎)

こんな傷ぐらいと指は無かりけり

(沐天)

とう／＼醫者も安心立命を説き

(雅幽)

寝る時間さへ惜しみなく贈賄か

(明珠)

肺だからよるなと言へば涙ぐみ

(晃卓)

七轉び八轉びつかんだものも風

(滿潮)

病人も頭をあげて禮を云ひ

(同)

盜まれる何物もなし夏嬉し

(同)

等々々、幾らでも例句を擧げることが出来る。これ等の句は何れも身邊から生れた句で、作者が、いかに人生流轉を凝視しているかが判る。

「仕舞風呂」の句は表現は滑稽だが、内容には涙がある。仕舞風呂に來る心理を考えたら、こんな場合には眼を伏せ

たくなるのが人情であらう。「死ぬまいと」の句は生に對する執着を詠んだもの。「此の出入」の句は人間一人一人の集積の持つ力に非常な恐怖感を懷いたことを詠んだもの。

「貧しさは」の句は、時に罪なき子を叱るほどの生活苦がにじみ出ているところがこの句のいのちである。「蘇生して」の句は弱き女性の人生航路、斯くしても生きねばならぬことを示唆した句である。「こんな傷ぐらいと」の句は労働者が生きながらための機械禍の犠牲を詠んだものである。今と違つて労働者を消耗品の如く取扱つた資本主義時代の作品である。川柳の多くは創作された時代を反映しているものであるから、その時代の風俗、習慣、制度等を知悉しないでは、眞にその句の味を知ることが不可能だと云えよう。「とう／＼醫者も」の句は醫者から安心立命を説かれたことによつて、暗に不治の病であることを宣告されたことと悟つた病者の淋しい心境を詠んだものである。淡々とした表現ではあるが、それだけに一層深刻味を感じないではいられない句だ。「寝る時間さへ」の句は贈賄者の心境を鋭く衝いている。「肺だから」の句は患者の心づかいが、反つてみとりするものを涙くませたのである。近ごろはマスクさ

えないで、肺患者であることの社會への遠慮や慎しみを持たさない人達がかかり多くなつたので、この句の深刻味が痛切に感じられないかも知れないが、それは時代感覺のズレであつて、必ずしもこの句の味を減殺するものではない。

い。「七轉び八轉び」の句は作者の深刻な生活苦の心境を卒直に詠んだものであるが、句の表面には、案外樂觀的な空氣が流れている。それだけその裏の深刻味は深められている。「病人も」の句も、「盜まれる」の句も、「七轉び八轉び」の同じ作者の句で、何の奇もない表現をしているが、内面には多分な苦惱を包んでいることがうかがわれる句である。

同じく心境を詠んだ句でも戀情を表わした句の味は又違ふ。

二三日新聞も見ず遇ふてゐた (日車)

戀人を逃すまいとて嘘をつく (一文字)

戀なのかしら見送りもしてみたく (柳秀)

ひばり鳴いたとてまぎれましょかね赤椿 (莢豆)

戀しさは風にも聞いて見たうなり (白蝶)

身一つを任せば男白々し (春三)

初戀の河をはさんで淋しがり (悠々)

行末はどうあらうとも火の如し (路郎)

名を棄てて、十七八の戀もせむ (同)

戀の罨あの眼だらうか眼だらうか (同)

一々解説はしないが、味讀されたならば、それ／＼の句の持ち味に親しみ深いものをうけとられるであらう。

この外に、慶弔の句としての味、旅の句の味、詠史の句の味、口語體の句の持つ味、方言を用いたためににじみ出

る特殊な味、對照句や疊み句や引用句による味、擬人法で表現したため特異な味、句の生命は短い時事を詠んだ寸鐵殺人的な味などがあるが、一々例示することは徒らに讀者の眼を煩わすに過ぎないと思うから省略することとした。

斯うしていろ／＼と説いて來たが、川柳の味は主として穿ちを基調として複雑な變化を見せているのに過ぎないと云えるのではなからうか。そして各人の肺腑を鋭く打つものが、珠玉の句として尊重せられるのである。

(追記) 新假名づかい以前の句は原句のまゝ、發表したので諒とされたい——筆者

(昭28・7「國文學 解釋と鑑賞」No.206)

植物痴

音について音痴と云う言葉があるが、そう云う言い方をすれば、私は植物痴だと云えよう。木篇の字は随分沢山知つているが、実物を示されたら何んと云う樹であるのか知らないが多い。ボクで判るのは梅や松や桜や桐のようなありふれたものばかりである。製材にしたら更に判らなくなる。杉や檜や桜やホーなどは判る。ホーやつげは判木に使うのでいつのほどにか覺えたのである。判らないと云えば木ばかりではない。草についてもそうである。

私は生れて一年あまりで母を喪つたので、天地自然になづまずに、人間の愛情を求めるのに急であつたらしい。学生時代に川柳へ走つたのも、川柳の持つ人間味に魅せられたのであらうと思う。そして人間探求に一生を打ち込んだために、植物痴と云えるほどに植物を知らなくなつたのだと思う。

しかし、音痴が必ずしも音楽嫌いだと云えないように、私も植物が嫌いなのではない。私の日常生活が人間探求であまりにも忙がしすぎるので、植物へそそぐ愛情が足りなだけである。私はシヤポテンが好きである。あのマの抜けたような、ヘウビヨウとした姿を見ていると、こころが何んとなくのどかになるのである。シヤポテンは随分うちやらかしておいても、平気で花もつけるし、株も殖えて、私のような植物の面倒を見る時間を持たないものにとつて、まことに都合のよい植物である。今私のうちにあるシヤポテンは千石莊の句会の時、河楊梵鐘君の病室の庭先に沢山あつたシヤポテンの中から一株もらつて来て鉢植にして愛玩しているものだが、何分忙しいので、たまにしか水をやらない。肥料などは勿論やらない。それでも、別に枯れもしないで、花もつけるし、株の尖に、株が出てくれば、私の眼をたのませてくれるのである。

玄関にある棕栢竹は、飾り気のないシヨウシヤな姿がうれしい。これは富岡淡舟君が、鉢植のまま、さげて来て呉

れたのである。前栽の燈籠の横には、小さな棗の木と小さな山椒の木がある。サンシヨウの木は去年の梅雨の頃、大和の宇陀郡の上田翠光君を訪ねた時二株もらつて来て土におろしておいたのが、二株とも枯れたようになっていたが、ことしの梅雨期に一ト株だけ生き／＼して芽を出し葉をつけてくれたものであり、おかげで汁のものに木の芽をうかせて、その香を愛玩した。

そして棗の木は、今年の正月に岡山県の大原町へ荊妻蒔乃と出かけた時、恵二朗居の句会へ、大野村の土井耕花君がお土産にと云つて持参してくれたものである。これは随分トゲがあり、持ち運びに不便なので枝をなるべく短かくポキ／＼折つて汽車で持つて帰つたのである。多分ダメだろうと思つていたが、これもことしの梅雨に芽を出して生き／＼と育つてくれた。この棗は日露戦争の時、旅順で乃木將軍とロシアのステツセル將軍が会見した記念に植えた棗の木の子孫なのである。と云う訳は第二次世界大戦に出征した耕花君が、旅順の棗の木に石を投げて七つの棗を落し、その種子を持つて帰つて三本の棗の木が育つた。私の家へ移つし植えたのが、その一本である。乃木さんも、ステツセルも全く過去の人となつたが、棗の木は私の庭にゲンゼンと実存している。

初代川柳は「木枯やあとで芽を吹け川柳」の句を遺して（初代川柳の作かどうかの確証はない―編者註）寛政二年

の九月二十三日に他界されたが、私たちはこの川柳を育てるのに懸命である。柄井川柳は歴史のカーテンに遮ぎられたが、私たちへ残された川柳は今もなおゲンとして実存している。植物痴の私のこの柳ばかりは永遠に枯らしたくないと思つている。

——川柳忌を前にして——
（昭28・9「川柳雑誌」No.316）

一枚のはな紙

「君、そこらを散歩しようじゃないか」と、Kさんは私を戸外へ連れ出された。家から一二丁出たところで、道ばたの草の上に腰を下した。そこは土堤どてのようになっていて、すぐ向うには甲山かほりやまが手にとるように見えるところだつた。もう三十年以上も昔のことなので、季節がはつきりと記憶に蘇えつて来ないが、晩秋のころだつたかとも思う。空気が澄んでいて、何んとなくすが／＼しかつた。二人並んで足を土手下の方へダラリとさげてから、Kさんは静かに袂をさぐつていられたが、皺だらけのはな紙を一枚出され、それをひろげながら、「今日は持ち合せがないから、これを明日でも会社の窓口へ持つて行つて下さい」と云われた。そして皺だらけのはな紙へ金額を書かれ何の某君なにがしくんへお渡

し下され度と私の名を鉛筆で走り書され、その下の方へKと御自分の姓を書かれただけであつた。それには日付も他の文字は書かれなかつた。私は「有難う」と云つて其のはな紙をポケットに入れたが、まるで二号さんが旦那からお手当をいたゞいてるようで、何だか変な氣持がしなでもなかつた。いつもなら午前中に何つても、夜遅くまでお座敷でお酒のお相手をして、帰りにお金をいたゞいて来ることになつていたのだが、此の日に限つて散歩に引張り出され、土堤ではな紙へ記るされた支払の司令書のようなものを貰つたのである。毎月いたゞいていた此の金についてはKさんの奥さんも御存じはなかつたらしい。

私は翌日、Kさんが所長をされている会社へ出かけ、そのはな紙を窓口から突き出したのである。ところがすぐ現金が私の手に渡されたので、さすがに私も驚いたのであつた。おそらく私は一寸お待ち下さいとか、一寸お這入り下さいとか、コレへ領収証をおかきなさいとか云つて書類でも渡され、本人であることをたしかめられ、ハンコの一つも押さされることを予測していたのであるが、相手の顔もロクに見えない窓口で、そのはな紙一枚がすぐ様、現金になつたのである。しかも、それが私の一ヶ月の生活費でもあり、研究費でもあつて、私にとつては大金だつたのである。私は此の時ほどKさんの偉大さにうたれたことはなかつた。会社でも机上には何一つ置かれていないし、手紙な

どは読むとすぐ、机の下に置かれたクズ籠にすてられ、机にいられる時はいつも居眠つていられ、技師長などが仕事の報告に来て、聞いていられるのか、聞いていられないのか判らぬが、机によつて居眠つていられる前に立つて報告だけしてサツサと引揚げるのだと聞いてはいたが、その全人格が所員に徹底されていて、所長の筆蹟であれば、はな紙に書いた命令でもサツサと処置されている事実にはブツ突かつたからである。

私は永い人生の旅路に於ていろんな仕事をして来たので、随分多角的に各方面の人物に接触したが、未だにKさんほどの偉い人には会つたことがない。Kさんは背の低い、ポテツと太つた達磨タイプの人で、なか／＼の酒豪であつた。某大会社のニューヨーク支店長時代には、ニューヨークの何十階のビルがゲル／＼眼の前で廻つたと云うほどの酒豪だつたが、某社の社風に合わないと云うので其の社を退かされたのであろう。その後、私が窓口に立つた会社の大坂営業所長になられたのであつた。勿論この会社も日本の産業界に雄飛した大会社である。私がここにKさんの姓名を伝ええないのは、Kさんは既に此の世にいられないのと、いかにも大人物扱いして人に伝えられることが、Kさんの本意でないことを知つてゐるからである。Kさんは四十一才の若さで亡くなられたが、日本の財界にも、労働問題にも偉大な貢献をされた方である。私が学究の世界を断

念したのもKさんが亡くなられたからである。おそらく私の生涯を通じて忘れ得ない人である。

(十一月十九日BK「ラジオ絵葉書」放送原稿採録)

(昭28・12「川柳雑誌」No.319)

外から見た堺

堺市民として考える場合、堺市の政治家として考える場合、堺市の経済人として考える場合に、自分の立場を考慮に入れずに公平無私に考えると云うことはおそらく不可能に近いことは云うまでもない。イヤ、ワシはそんなことはないと考えていられる人も、本当にあると思われるが、そうした人でも、無意識に多少は我が田へ水を引いているものである。私はむしろそれでい、のだと思つてゐる。無

色透明であることが絶対にい、とも云えぬ場合のあることは、蒸留水よりも、井戸水の方がうま味があつてい、場合があるようなものである。たとえば堺市の交通機関である。私たち外から観ていると、幾十年の間、南海に頼つて、自分の力で、自分の都合のいい、交通機関を持たなかつたこととはどんな理由はあるうとも、堺市が市の立場から云つて、まことに腑甲斐ないことのように思われる。他人のフ

ンドシで相撲をとるのも一つの方便には違いないが、そんなことがいつまでも続くことでもないし、又少々続いたとしても、そんなことで、市の前途が明るくなる筈はないのである。堺市の交通が、南北はそれでよかつたであろうが、東西の不便さは、おそらく市民の誰一人でも感じない人はなかつたであろうと思われる。

しかし、コレが堺市に自転車が発達した原因でもあり、又自転車産業が東洋的となつた遠因であるとも云えよう。この意味から云つて堺市が独自の交通機関を持つことを阻止した先輩の罪は軽減されるであろうが、だからと云つて、いつまでも新しい交通機関を持たないでもよいと云う理由のないことは今日、自転車の不足を補うのにバスが通つてゐるのを見ても明らかであろう。

堺市が、世界的産業都市大阪に南接していることは、あらゆる面において、いろ／＼な圧迫になやまされることは想像に難くないが、又一面から観れば他の地方都市の享有し得られぬ便宜を得ていることも疑いの余地がないのであるから、堺市は堺市としてあらゆる面において独自の立場から立ち上つてゆくべきである。消極的な立場で物を考える人達は必ず堺市の現在の赤字を云々するのであるが、個人の立場と、市としての立場と同一に論ずることの無意味であることは私が説明するまでもなからう。要はコレを断行するか否かにある。しかしながら常に他人のフンド

シで相撲を取ろうと云うケチ臭い考え方の人たちに断行し得られる筈もなく、断行非断行は人にあると云わねばならない。そして現在その人がないかと云えば無いことはないと私は思っている。ただ政治的に他派に名をなさせたくないと言う一部の人の反撥が、そのことの成否に繋がる問題だと思っている。堺市百年の計を考えるなら、大いに協力して、インジユニ姑息な態度から立上るべきだと思ふ。どうです、堺市の政治家諸君。近く近畿が、堺市へ乗入れる計画があると聞くが、コノ問題にしても他人のフンドシには違いないが、堺市にとつてこんな好機はないのではないかと思ふ。多少無理な注文があつても、うけいれるのに、やぶさかでないことをのぞみたい。そんな話はお前の知つたことでないと言われればそれまでであるが、大阪は堺市に北接していて、しかも私の住んでいる土地は市の中央部へ出るよりも電車で通えば堺市へ近いのであるから、マンザラ他人のような気がしないので、一寸おせつかい申上げるのである。

交通機関については、コレ位にしておいて、私たち文化に携つているものにとつて、もう一つ申述べて御参考の資としたい。

南大阪新聞の伝えるところによると、堺市が生んだ歌聖與謝野晶子女史のために記念事業が企画されていると云うことであるが、コレについて晶子女史に面識を持つ一人

として、いささか卑見を述べて企画委員の考慮にまつこととしたのである。

普通に歌人の記念事業として歌碑建設を企画されることは定石のようであるが、私としては、明治、大正、昭和を通じて、歌人として声名をほしいままにした晶子女史の歌碑を堺市に持つと云う誇りだけでは、巨費をあつめて建設したところで、今更堺市にとつて大したプラスだとも思えないと愚考するのである。

それよりも、私としては市の中央部のある一角に、晶子スクエヤー（あきこひろば）を設け、その広場にたえず市民の集合し得られる娯楽センターとされたいのである。夜店の出ることもい、だろーうし、昼店を出すこともい、だろーうし、その周囲部に一大商店街を展開させるのもい、だろーう。歌碑のごときは広場の中央部の樹下に、至極清楚な感じのものを建設しておけば充分であると思う。

これ等の注文は私の夢かも知れないが、しようと思えば出来ない相談ではない。幸か不幸か堺市にはまだ中央部に民家が復興していない個所が相当にあると思う。真に堺市を愛し、堺市の将来を憂うる有志が、こうした企画の下に立上られたなら、ひとり私だけの歎びではなからうと思う。

（昭和29・2・5（金）「南大阪新聞」）

麻生霞乃川柳句集『福壽草』の序

明治末葉の女性川柳家で今日まで続いているのは僕の記憶では霞乃ぐらいのものである。霞乃にしても僕と結婚していなかったら遠うの昔にやめていたのに違いない。

明治時代には大たい女性は短詩型文学では短歌へ走った。霞乃と同郷の与謝野晶子などもその一人だ。次は俳句、詩という順序で、川柳を作る女性と言うと変な眼で見られるような気がして手をつけるのを惧れたようだ。と云うのは川柳は例の三要素時代で、嫁や姑の対立した句を見せられていたし、何れはその嫁にならなければならぬ女性が、人間の機微を穿つと云う川柳に手出しをして、世間を白眼視したような句を発表しようものなら、その前途がどうなるくらいなことは想像に難くなかったからである。川柳は面白いには違いないが、作らずにはいられないと云うほどの欲求もないから、やめておくにこしたことはないかと敬遠されたのである。そんな理由で蘭秀作家は百人に一人もいなかったと云つてもいい。少し作れるようになり、多少名を知られるようになったところで、結婚と同時に消えてしまった。兎に角二三年で飽きるか、結婚によって後を絶つか、何れにしても永続しなかつた。今日でも矢張り斯うした傾向はある。

霞乃はそんな時代に生れた作家である。父の河盛芦村が俳句も作れば川柳も作っていたので、一緒に句会などへも出たのであった。従つて私と結婚するまでは世間並みに柳樽に近い句風の句を作っていた。私と結婚したのは今から四十二年前の大正三年の春であるが、私は明治四十二年頃からは新しい傾向を目指して作句していたので、大正四年に私が刊行した「雪」の作風にはなかく／＼なじんでくれなかつた。

「雪」の作風と云えば

Sōbō が欲しという妻のうらわかく
や

妻や待たん靴音を高めんか

と云つたように、新婚当時の私の心境をズバ／＼と詠んだもので、柳樽の客観句とは全く趣が違つていたのである。そして柳界からアレは川柳ではないとか、新傾向句だとか云われて異端視されていた。霞乃にしても、はじめは私等の句風に近づかなかつたが、いつのほどにか私等の流れに投じて来た。有名な

呑んで欲しやめても欲しい酒を酌ぎ

や

福寿草松に従いそろかしこ

ヒヤシンスの音沙汰でなしパンのこと

等々々、自己の環境や思想を忌憚なく句に反影させて来た

のである。

大たい私は川柳が男性だけのものないことを早くから説いた。川柳の社会化を提唱した立場からも、私の主宰する「川柳雑誌」で、早くから女性作家のために、葎乃の選で女性作家の欄を設け、女性作家の養成につとめたものである。そして今日では女性と男性の間の一線を排してしまつたほど「川柳雑誌」では女性の進出を見ている。従来、女性作家の雅号と云えば何女とか何子とかであつて、女性であることが大たい判明したが「川柳雑誌」の女性作家は既にそうしたマンネリズムの雅号から脱出した人たちが多い。葎乃、梨里、白香、湖月、茶々、若菜、ひさみ、梨花、阿茶、風の子、千代美、定美等々幾らでもある。「川柳雑誌」の近作柳樽欄を見ても、男性を圧して多数の女性が活躍していることを思えば、川柳に於ては既に男女の知性の問題は解決されていると云えよう。

次に、この句集を読まれる人達のために極く簡単に葎乃の性格や句風について述べておこうと思う。

葎乃の性格は内剛外柔である。だから誰にでも一応よい奥さんとして認識されている。従つて敵というものが無い。時にはキリスト教の殉教者のように、彼の女の持ち味だと思われる内剛すら、教養の力で抑圧しているようである。このあらわれが、私に対しては「福寿草に従いそろかしこ」になつたのかも知れない。しかし、民主主義がど

うの斯うのとも云わないし、男女同権も振り廻わさない。ただ牡蠣の如く黙りこくつて我が道を行く彼の女は、それで充分に幸福を感じているらしい。一見東洋的な諦観的なげやりの態度にも見えるが、それは彼の女の無口のせいであつて、彼の女自身の創造する神様への忠実な奉仕者であることは、彼の女の句に親しく接したら氷解するであろう。彼の女は常に目立たない存在ではあるが、いつか峠を越している蝸牛のように、一分刻みの前進をたゆみなく続けているのである。

葎乃の近來の句風にはフィクションのない叙情詩的な作品の多いことが、その特徴だと云えよう。

彼の女の生活は私を防波堤として、港の中の静かな日日に安住し切つていて、社会に対する抗議とか公憤とか云つたものを持ち合わさない。従つて句の上に、そうした嚴びしさ、激しさと言ふものはない。その点、すべてに於て私と対蹠的である。私が彼の女と、私の人生の大半を共に歩むことの出来る根がそこにあるのかも知れない。

終りに彼の女の健康を祝福し、この句集の句の永生を祈つて筆を擱く。

一九五五・六・一七日

川柳雑誌社編集室にて

(麻生葎乃川柳句集「福壽草」、昭30・7・1発行)

窓口談義 机上雑然

階上の四畳半の隅にある椅子に凭る机と、その次の間八畳の隅にある坐る机と、階下の八畳の隅にある坐る机との三つが私の机である。何れも大机であり、何れも机上はどれから手をつけていいか分らないほど雑然としている。これでよくも、何かと片づいてゆくものだと自分でもあきれている。

階上の机二つは主として執筆に使う。どんなに親しい人でも、ここへは通さない。光線の関係、気温の関係、昼夜の関係、その時の気分で、この机のどちらかを使うことにしている。

階下の机は私の応接が主になっている。ここでも選句や執筆をしないことはないが卓上電話によつて阻止されることが多いので、なるべく事務的なものしかやらないことにしている。色紙や短冊の揮毫にはどの机も使わない。軸や額は畳の上で書くことにしている。

「いつになったら、紫檀の上に本が一冊しかのつていないという生活が出来まんのや」と荆妻がなげくが、おそろく、そんな日は私の生涯には来ないのではないかと思う。私は雑然とした中に生きてゆくのが好きなのである。

紫檀の机の上に本が一冊しかのつていないという生活

は、たまに行つた田舎の美しい景色に憧れるようなもので、日日がそれだったら、とても辛抱出来るものではないのと同じではなからうか。でなければ文化功労賞をもらつた喜多村縁郎氏など、あの年であんなにゴミくした舞台にたてるものではない。要するに文化というものは、雑然とした中から生れるものだと思う。(昭30・11「川柳雑誌」No.342)

歳末一筆

自家用車

歳末のあわただしい中で、新大阪ホテルでの結婚披露宴に招かれた。川柳の門下のK医博の二男坊の結婚披露である。

今日からは複数でするうけこたえ

という祝句は出来ていたが、さて色紙をかくとなると大変だ。デパートで買って来た金、銀の色紙へ一杯傾けて書いても書いても巧いかな。そのうちに色紙がタネ切れになつた。デパートへ使を走らし、出掛けるギリギリにようやく書きあげた。上の部ではないが、まあまあごしんほう願うことにして色紙を抱えて出た。

宅から自動車で出かけたんでは貧乏詩人にとつて大きな負担である。というて、てくつて行つたんでは先方様に

失礼である。第一ホテルの案内係に変な眼で見られるのもいやだ。そこで考えたのが、マサカ七十円のタクシーも拾えないから、地下鉄で淀屋橋まで出かけここから出来るだけ素派らしいタクシーを拾うことにした。ここからだとなんにも高くても百円の距離だと測定したからである。コレでとにかくカツコウはついた。オバーを預けて、エレベーターで三階へ駆けつけた。私もモーニングだけは着込んでいたので、百名ほどの来賓に交って大した恥もかかずに盛宴に列した。帰途はホテルの出口へ自家用車がスーッと私の前に止った。「サアどうぞ」といわれてそれへ乗った。もつとも、コレも川柳の門下のN医博夫妻の自家用車である。コレで宅まで送りとどけてもらった。私も自家用車を一台欲しいと思うが、コレばかりはオモチャの自動車を買うような訳にはいかない。

過日も、文楽座を出た私たち夫婦に、お送りしますといつてU医博が自動車のドアを開けてくれ、近ごろお求めのもので新品である。運転手がいないと思ったらご自分で運転して下さいのだそうである。お互いに酒が入っているし、こりゃア大変だと思ったが、いままら辞退するわけにもいかない。全く命がけである。ブルブル、ブルブルと音はするが、なかなか発車しない。ちよつと機械が冷えるので、このまま発車出来ないこともないが、それではガタガタゆれるとのことである。一生懸命に車にしがみつ

て、前方をにらんでいた。天王寺西門のところで、あの信号で行つていいのかどうだか判らぬがいいながら行つてしまった。いよいよ大変だと思つたが、無事わが家へ生還した。私たちにはやはり七十円タクシーが性に合うのであろう。こんな話を息子にしたら、ボクなんか人に乗せてもらうか、荷物がある時に荷物と一しよに乗るしか、自動車には乗らないよといったが、まあまあそれがいまの庶民生活の実相だらう。通勤でも、お買物にでもドシドシ自家用を走らしているアメリカとはくらべものにならない。

御堂筋に立つて、自動車の疾走しているさまをながめていると「モシモシ、なぜそんなに先をいそがなければならぬのですか」といいたくなるのは私だけであらうか。

自動車の運転手がよく殺されるので、かつて私は

霊あらば化けて出てやれ運転手

と詠んだことがある。ある運転手に聞いたら、一ばん安全なのはアベックと酔っぱらいだそうである。しかし酔っぱらいにはときどき八百屋の掃除をさされるので、くそでたままりまへん。こまるのは二十才前後で、何を考えているのかサツパリわかりまへんといつていた。いまの世の中は運転手にとつてもなやみは果なしだと思つた。(毎日柳壇選者)

(昭31・12・25(火)「毎日新聞」夕刊)

川柳五十四年

三円五十銭の黒字
朝日会館の思い出

七十になった。(西曆一八八八年七月十日生)

川柳にも檜山があつてもいいような気がする。しかし誰も背負いに来てくれない。

古稀や、古稀やと云う声は私にとっては檜山節の響をもつて迫つて来る。それがみんなのためならなんでもないと云うおりん婆さんの心に通じるものがあるのであろう。

川柳に手を染めたのは明治三十七年であるから、ここらで若い頃に、と云う言葉を使つても不自然ではないだろう。その昔、松山へ出かけた時の話だが、道後の公会堂で、講演をするのに、「ワレ柳壇の子規たらん」と云う演題にしたらドヤと云つたら、「そんな偉らそうなことを云うたらアカン」と蔑乃が反対した。

「オレは子規よりエライとこも持つてるんだぜ」と云つたが、

「それでもアカン」と反対した。

「そんなら、子規を通して川柳を語るではドヤ」

「まア、それぐらいならエエやろ」と、賛成してくれた。

なんしろ、子規を神様のように思っている俳句王国の松山で、こんな演題でやろうと云うのである。新聞が書きたててくれたので、路郎と云うヤツ、何をしゃべるか聴いてやれとばかりに多数の俳人が押しかけて来た。下手なことをしゃべれば袋叩きにされたかも知れない。会場は超満員で、世話役の伍健君が大満悦だった。こんな元気がその後にも全国から朝鮮、満洲、北支、蒙疆まで押しかけさせたのである。雪の満洲を防寒具もつけず、内地の姿のまままでハルピンまで出かけたことを思うと全く熱の塊だったのに違いない。

話は前後しているかも知れないが、「川柳雑誌」の百号記念には朝日会館で開催した。短詩文学の会を、この会館でやったなどと云うことは空前の出来事だと云われただけにいまだに誰もやらないから絶後となるかも知れない。

俳人の月斗が驚いて路郎と云うヤツ無茶なことをやっりよる、どんなことをやるのか見て来ようと云つてキップを求めて若い細君を連れてやって来たほどである。あの時の入場者は千名を越したし、この種の催しとしては大盛会で税金をとられたが、それでも三円五十銭の黒字だった。若い元氣でからだを張つてやった結果に外ならなかったのである。

引続いて、東京句会をやったが、これを発表した時には東京の各柳社が道場荒らしでも来るように感じたらしい。平素句会を持たないような会までが、その月の土曜日曜祭日を埋めつくして開会の予告をした。

その当時、川柳雑誌社の社友だった川上三太郎君から時利あらずだからやめたらどうかと云うて来た。大阪でも、やめた方がエエだろうと云う意見のものもいたが、私は断固としてやることにした。

そして亡くなった山雨楼君を会場を借りるために東上させた。会場を借りるためには社友の三太郎君や前田雀郎君に相談をして来い、両君がことわつたら朝日新聞社へ行くように名刺を持たせてやつた。ところが、会場まで借りに東上する熱にうごかされた雀郎君が、沢田正二郎が新国劇の旗上げをした浅草の劇場を借りてくれた。詳しいことは省略するが、この川柳雑誌社の東京句会も各社各派が全部出席してくれたので、東京柳界空前の大盛会だった。ここから私は大正十三年以来十年間叫びつづけた川柳の社会化運動に一ト先ずピリオドを打つことの声明をしたのだった。

しかし、それがために、川柳の社会化について手をゆるめたわけではなかった。川柳の指導、川柳の研究、川柳の発展向上等々々について「川柳雑誌」や新聞雑誌を通じて微力のかぎりをつくした。

(中略) 中略の部分は、「麻生路郎物語」(19)(23)に引用されている。

斯うした難行苦行を続けていたが、三重県に疎開後もガリ版刷を刊行し、職域句会を指導するなどして川柳的活動は寸時も廃さなかつた。

昭和二十年八月十五日に終戦、その後進駐軍によつて刊行物の取締が行われることとなり、朝日ビルの三階に検閲室が設置された。こゝに派遣された検閲官がハワイの門下、前山北海、古川魔花麗の両君だったことは予想外の倅せだった。

両君の斡旋で逸早く「川柳雑誌」が刊行されることとなつた。仙花紙で僅にB5判四ページのみすばらしい姿ではあつたが、それでもホツとしたのであつた。

その後の川柳活動については多くを語る必要はあるまい。

昭和二十二年、田中大阪府知事から文芸賞を受賞した祝賀句会なども物資の少ない頃ではあつたが盛大に開催してもらつた。その後私の川柳生活の五十年を記念するため川柳不朽洞会から寿像が贈られたり、阿倍野の近鉄百貨店で短冊展を開催して多年の労をねぎらっていた。この間に、私の句集「旅人」が刊行された。葎乃の句集「福寿草」が出た。門下の句集「私達」が続いて出た。東京の至文堂からは「川柳とは何か」が上梓された。過去の幾多の著書やこれ等の著書が柳界のためにどんな役割を果し

て呉れるかを想像することは私の大きな欣びでなくてはならない。

この機会に、私の斯うした非営利的な文化事業に常に好感を持ち俵援を惜しまれない知人や柳友や門下の人達に衷心から感謝の意を表したい。

(昭和32・7「川柳雑誌」No.362)

一行詩人

約手の仕事もなかなかしんどい、らしいが、芸術に携わる者はずっとしんどいのであるまいか。どうしたらいい作品が生れるか。その生涯を打ち込んで、必ずしもいい作品が生れるに限らない。はじめから、ダメだと判っていたら、打ち込んだり、やんだりしないで、のほほんで暮らした方が、その人の人生にとつてどれだけいいか知れないのだが、それがハッキリしないので、お互いになんぞ悶えたりするのである。

考える秋が来た。今の作品について、これからの作品について——この場合、他の人たちが、どんな悪作に耽溺していようと、そんなことについて考える必要はない。どこまでも自分の作品について深思しなければならぬ。

これでいいのか。これ以上伸びる可能性はないのか。どうしたら現在の苦渋な作品から脱することが出来るか。それが問題である。よかれ悪しかれ、現在に停顿してはならない。それは芸術に携わる者にとつての自殺である。

川柳は一呼吸の一行詩に過ぎない。いずれは滅亡する。それは間違いない事実だ。しかしと私は云う。その短い一行詩に私のいのちを捧げつくして、燃やしつくして、悔いない魅力を持つことが何故いけないのかと反問したくなるのである。

だからだと長い小説を描いて満足が出来る人たちはそれをするのもよからう。しかし、私はくだらない会話でつなく、娼婦の手紙にも等しい小説を読まされる苦痛には堪えることが出来ない。まして私がそんなものを書いて他人をなやます勇気などはこれっぽかしも持ち合わさない。曾ては私も小説のようなものを書いた時代もあったが、それは食わんがための一つの手段に過ぎなかった。ただ食うために小説を書くのであれば、路傍で他人の靴を磨いているのと何等変りがないのである。その点一呼吸一行詩の川柳はたとえ短い十七音字中心のものであろうとも私の生命を刻み込むのに尤もふさわしい木石だと云えるのである。

今の私はその木石に刻み込む私の川柳を誰れが見てくれようが見てくれまいが、コツコツと刻み込むだけである。山上の墓碑がいつのほどにか海底に沈む日のあること

を思えば、私の刻み込んだ一行詩が、忘却のかなたへ押し流されたとしても、それを悲しむ必要はない筈である。

永遠の旅人と云うのは旅人その人の夢でしかない。私は遂に一個の一塊の物質にすぎないのではないか。

考える秋は私にそんなことを考えさせた。

私の旧作に

子よ妻よばらばらになれば淨土なり

と云う句のあることを思い浮かべた。——一九五七・九

(昭32・10「川柳雑誌」No.365)

髭

旧臘十二月二十二日の午後十一時四十分から、BK第一放送「お休みの前に」で電波にのったものを、要望に応じてここに誌上放送をすることにしました。編集局——

髭のことを少し談してみたい。私のヒゲは明治三十八、九年頃の学生時代に生やしたので、生やしてからもう五十二年ぐらいになると思う。近ごろはヒゲを生やす人が尠なくなつたようであるが、私はヒゲが流行つても流行らなくつても、いつこやおかまいなしに生やしている。ヒゲを生やしているからと云つて別に費用がかかる訳でもなく邪

魔になる訳でもない。私のヒゲはあんまり濃い方ではない。顔の装飾としては見馴れている加減かも知れぬが、無いよりは有る方が少し落着きを示してくれるように思う。今では学生でヒゲを生やしているのが、あるか、どうか知らないが、私の学生時代には学生でヒゲを生やすことが流行したように思う。もつともクラスに五、六人か、多くて七、八人ではなかつたかと思う。もう半世紀も以前のことであるからハッキリしたことは覚えていない。まだ二十歳はたちになつていない頃のことであるから、なかなかうまく生えてくれない。云うまでもなくシヨボシヨボヒゲなのである。そこでヒゲを生やすために相当に苦心をしたもので、先ず卵の黄身を皿に入れ、それを火鉢にかけて真ッ黒な液体をつくり、それを一本二銭の毛の至つて剛こちい齒ブラシにつけて、ゴシゴシと鼻の下をこすつたものである。鼻の下が真ッ赤になるほどこするので、随分と痛い、それを辛抱してゴシゴシやつたものである。はじめのうちは散髪屋に一々ことわらないと、うっかりすると剃り落されるほどの薄いヒゲだったが、熱心と云うものは恐ろしいもので、それがとうとう物になつてくれたのである。今ではもう散髪屋に剃り落されるおそれはないが、黒い部分はホンの僅かしで、スツカリ白髪がになつてしまつた。イヤ、白髪と云うよりも、タバコの煙りで大半は黄ろくなつてしまつた。いろいろな職業をした私には、ヒゲを生やしているのにふさ

わしくない職業もあつたようにも思うが、そんなことには頓着なしに、ヒゲを生やしたまま、この年まで押し通して来た。

この十月の六日の晩に、私は突然発病した。そして一切言葉を出すことが出来なくなつて、用件はすべて筆談でする身になつた。原因は睡眠不足と過労の積み重なりだと云うことであつた。アメリカのアイゼンハワー大統領より五日早く同じ病気にかかり、大統領よりも私の方がだいぶ重態だったが、私の場合はニュースにもならなかつたし、株に変動も来たさなかつた。そのうち言葉も取り戻したし、熱も無いし、食欲はいつも増したようである。ところが病臥しているうちに、私の口髭は箒のように、前へ垂れ下つて唇をふさいでしまつた。それから下唇の下からアゴへかけて、アゴ髯が生え、両横の耳の下から頬ヒゲが生えた。僅か一カ月ほど病臥している間に、私の想像もしていない顔が出来あがつた。私は寝つく一カ月前に觀た「東北の神武たち」と云う映画を思ひうかべた。東北の神武たちと云うのは東北の寒村の二男や二男坊が風呂にも這入らず、ヒゲも剃らないので、ヒゲがボウボウと生えて神武天皇の容貌に似ているところから、そう呼んだのであるが、私もそれに似通つて来たのである。こいつは面白い。このままのばしたら、どこまでのびるものかひとつのばして見て、私もズンムの一人になつて見ようと思つた。そして

毎日、ヒゲののびるのを楽しんだ。しかし、のばそうとなるとそうやすやすとはのびてくれないものである。明治天皇さまのおヒゲは頬ヒゲは云うまでもなく、口髭からアゴ髯までが実に大したものであつた。私はこどもの時分に明治天皇が大阪へ行幸された時に、拜したので、いまだに深く印象づけられている。私が今日、いくら氣ばつても、東北のズンムたちや、明治天皇のおヒゲの足下へも寄りつけないことを知つたので東北のズンムたちとのヒゲの競争は諦めることにした。しかしこのまま剃り落してしまつては、折角の努力がムダになるような氣がした。そこで門下のT君が写真が巧いので記念撮影をしてもらうことにした。何故、そんなことを思いついたかと云うと、昔、新升と云う歌舞伎役者が病氣の時にとつた写真が、まるでキリストそっくりに見えたので、私も東北のズンムたちの弟ぐらいには見えるだろうと思ひ、記念撮影を思いついたのであつた。そして記念撮影が終つてから、口髭をていさよく刈り込み頬ヒゲはスツカリ剃り落し、アゴ髯はアゴのところを十円銅貨ほど残し、丸みをもたせて刈り込むことにした。これで病人らしさとヤヤ縁が切れたような氣がした。そして再びT君を煩わして記念撮影をやつてもらつた。それから十二月一日に、からだの調子もだいたいよくなつたので、アゴのヒゲともお別れを告げ、いつもの皆さんともおなじみの口髭の麻生路郎になつた。

こん度のヒゲの談しから考えさせられたことは、ヒゲにかかわらず何んでも、のびるところまで行ったら、あととはなかなかのびるものでないと云うことであつた。私のヒゲも、ズムムたちの弟ぐらいまではのびる可能性があるとしても、神武天皇まではとて／＼及びもつかぬことを知つたのである。それは特定の人のみにゆるされるものであつて、素質のないものは、いかにあせろうが、努力しようが、ある段階以上はムダであることを知つたのであつた。十二月に押しせまって、どうにも斯うにもならないのに、もがきにもがいているようなことをしなくなれば、人の世は幸福に違いない。よそのボーナスの計算をするようなことはしないに限る。

自分のヒゲは、いくらのはさそうとしても限度のあることをハッキリと知つたら誰でも幸福になれるのではないかと思う。
(昭和33・2「川柳雑誌」No.369)

阿部佐保蘭句集『鶴の姿』の序

川柳譚訳研究会の阿部佐保蘭君が、私の渋谷の宿舍に来て、句集『鶴の姿』を上梓するから、私にも序文を書くようにとのことだつた。それは昨年の七月だつた。いつ頃出

すつもりか知らないが、とにかく承諾しておいた。それから間もなくと言つても、今年の早春のころだつたと思う。句集をまともに、夫婦で伊豆の温泉に来ているという便りをもたらつた。その後、佐保蘭君からの通信にはきまつたように序文のことが書かれてあつた。そして五月頃だつたか、句集『鶴の姿』の原稿を携えて、はるばる陋屋へ来訪された。日々多忙に暮らしている私も、その情熱には動かされざるを得なかつた。

私の仕事の日程表には早くから、句集『鶴の姿』の序文の文字が書き込まれてあるので決して忘れてはいるわけではないが、日ぎりの原稿に追われている身には、なかなか役に果たせない。日程表が改まる度に、『鶴の姿』の序文も、その方へうつされていたのである。

句集の原稿は見せてもらったが、句については私よりも、もつと適当な人があると思われるので、私は佐保蘭君の人柄や川柳譚訳研究会の世話役として不断の情熱を傾倒されて来た大きな功績を、この際たたえておきたいと思う。

フランス語のサポタージュは怠業の意味で、ストライキの場合と違つて就業はするが故意に能率を低下させることによつて要求の貫徹をはかろうとするものであるが、このサポタージュを略してサポという。世間ではこのサポに「ル」をくつつけてサポルと言つて怠ける意味に使つた。学校をサポるといふような使い方をしたものだ。ところがサ

ポランと言えば、その打ち消しで怠けないことを意味する。阿部佐保蘭君の雅号の佐保蘭は、このサポランへ彼自身の好きな漢字を当て嵌めたもので、仕事を怠けないことを象徴させたものだとは私は思っている。それほど佐保蘭君は仕事を怠けないばかりでなく、趣味のことに關しても、よい意味のがめつさで立ち向って行く。その現れが、川柳齣訳研究会という、まことに厄介な仕事を背負い込んだのであると思う。

佐保蘭君が神田一ツ橋の如水会館へ明大教授の宮森麻太郎先生を迎えて、川柳齣訳研究会を創立したのは昭和十二年七月であつたが、それより四年程前の昭和八年に、私は私の主宰している『川柳雑誌』の九月号と十月号に「五七五の齣訳」と題するエッセイを発表している。このエッセイを一読してもらえば、短詩型文学の齣訳がいかに至難な事業であるかが判ると思うが、当時齣訳に關して有名な人の卓見が雑誌に発表せられたことは、私の「五七五の齣訳」の中にも書かれてあるので、その一部を抜萃して参考に資することとする。

——楚人冠氏は英文を日本語に翻訳することの到底人間業にあらざることを力説され、八月の『文芸春秋』で発句翻訳の可能性を疑った小宮豊隆氏のこと言及されてゐるが、ひとり発句に限らず、短歌に於ても厳密な

る翻訳の不可能なことは云うまでもない。まして川柳の如き特異な味、趣、深さ、強さ、句語による約束等々の短詩に至つては、容易にその翻訳の可能性を信じることは出来ないとは私は思っている。

大体発句の翻訳せられたことは過去に於てその例尠なしとしないのであるが、それ等は何れも問題視されずに看過されてしまつた。

例えば一九二一年にジョン・パリスの著わしたKIMONOの第一章の劈頭に、加賀の千代女の句だと云われ、又そうでないと云われている「渋かるか知らねど柿のはつ契り」の句が左の如く英訳されている。

Shibukaro ka Whether the fruit be bitter,

Shiranedo Kaki no Or Whether it be sweet,

Hansuchigiri. The first bite tells.

このKIMONOの各章が必ず日本の詩歌俳句俗謡等の英訳ではじめられているが、それ等の翻訳が単に興味本位に過ぎなくて、真に適訳であるとうなずき得ないのは自分が語学の才に乏しいからばかりではあるまい。著者ジョン・パリスは是等の歌の出所を扉の頁でA.WaleyのJapanese poetry: The Uta (Clarendon Press) から採用したものとことわっているが、私はワレイの『日本の詩歌』という本を未だ手にしたことがないので、その本の全貌がどんなものであるかを知り得ないが、ジョン・パ

リスの採択したのを見ればその一半を想像し得られるような気がする。兎に角、推奨に値するものではないが、大正十三年の十一月に出た成見延亀氏と上床新助氏の共著 SENRYU (Short odes) 『英訳川柳名句選』などから見ればまだまだ優れた翻訳だと思われる。しかしながら右に例示した千代女の句でも、柿を *umi* と訳したのは洪かろかが利かぬので日本人の我等には物足らぬ。はつちざりにしても、あのもじりが全然出ていないし（もじりは詰らないものだが）、なんと云つてもこの程度の翻訳では楚人冠氏の「反訳か反逆か」に終つてしまふことは誰人も否定し得ないであらう。

確かアメリカ版の小泉八雲全集の中にも蕪村などの俳句を紹介してあつたと記憶しているが、何れも似て非なる翻訳である事は疑うべくもない。近時拙吟の川柳を阪大の笠原博士が独逸訳されつつあるが、殆んど近いものに訳せるものと、どうしても翻訳し得ないものがあるとのことである。氏は単なる医学博士でなく、寧ろ文学に行くべきをあやまって医博になつたと云われるだけに文学上の造詣が深く、殊に川柳に於ては路生の名によつて既に一家をなして居られるので、その独逸訳がかなり優秀な点まで翻訳されていることは想像に難くないが、外人が句意について、句語についてどの点まで感受し得られるかは疑なきを得ない。

——近時、発句翻訳問題が盛んに論議せられるに至つたが、ことの起りは昭和七年十二月二十六日に宮森麻太郎氏が「AN ANTHOLOGY OF HAIKU ANCIENT AND MODERN」なる発句の英訳書を刊行されたので、笠原博士は『川柳雑誌』三月号に「川柳の翻訳に就て」を執筆され、川柳の翻訳が俳句のそれよりもなお一層至難であることを指摘された。

ところが『文芸春秋』の四月号に文学博士井上哲次郎氏が「俳句の特色と英訳の俳句」と題して、宮森麻太郎氏の「英訳古今俳句集」の紹介と所感とを述べられたが、その多くは宮森氏の所説の受売的であり提灯持ちであるに過ぎなくて、井上博士自身俳句川柳の如き短詩型に対しては所謂教育者の鑑賞眼しか持つておられないように思われた。而して該書中に於ける宮森氏の川柳観、井上氏の川柳観が全く時代遅れと誤解の甚しきものであることには啞然たらざるを得なかつた。

笠原博士は『川柳雑誌』の七月号に「再び川柳の翻訳に就て」を執筆されて、川柳のために気を吐かれた。

次いで『文芸春秋』の八月号に小宮豊隆氏の「発句翻訳の可能性」となり、『改造』九月号に於ては杉村楚人冠氏の「反訳か反逆か」の一文となつたのである。以下少しく宮森麻太郎氏の『英訳古今俳句集』中にある氏の川柳観に就て検討して見たい。(以下略)

右に述べたように、翻譯問題は盛んに論評されたが、その後も川柳翻譯はあまり頻繁に行なわれてはいない。(地方柳友の二三が翻譯していたと思うが、それも試作程度のものだと言つていいだろう。)ところが、前述の如く、この難事業に対して雄々しくも阿部佐保蘭君が立ち上つた。もつともみずから川柳を翻譯するというよりも、川柳翻譯研究会の名の下に川柳翻譯運動を起こしたのであつた。このことは川柳翻譯史上に特筆大書すべきであると思う。

佐保蘭君が、川柳翻譯研究会を起こした動機や、その当時の模様を昭和十二年八月号の『川柳雜誌』に発表されているので、少しく長文だが転載することにした。

懸命の努力で準備、三日前に無事川柳翻譯研究会創立記念句会を量的には少なかつたが、質的には成功裡に終了した。僕は今、本会顧問路郎先生へ寄稿の約を果すべく、傍に二世の年昭の顔を眺めつ、この稿を起し始めたのである。それは丁度去年の今時分のことである。私は牛込の遠い親戚を訪い、和洋折衷の応接間に待たされていたのである。初めて通された人が誰でもする如く、僕はその部屋を見廻し始めたのである。ふと壁間に映つた額、それは和紙に墨痕も鮮かに "Be just and fear not" Inazo Nitobe と書かれてある。Inazo Nitobe

と云えば新渡戸稲造博士のことらしい。そこでやがて姿を現わした叔母さんにこの事を訊いた処、主人在世中に博士に書いて貰つたのを表装したのだとの事だつた。その額が和洋折衷のその応接間にピタリとあつているのも面白く、今から十何年も前に勇敢になされた新渡戸博士の先見の明に敬意を表したのであつた。これから時勢が進むにつれて日本文明と西洋文明とは接近して行くばかりだ。男がオールバックになり、女が断髪になるように、そして川柳も世界的に進出する時が必ず来る。又そうしなくてはいけない。我々の心の糧となる文学たる川柳が日本内地丈にくすぶつていたのでは勿体ない。

"Be just and fear not" の代りに、「娘を売つた金稻妻のよ
うに消え」即ち宮森先生の訳を借りれば、

"The price of daughter he sold. Has vanished like light
ning."

のような句が筆勢も鮮やかに書かれ、どかりと表装されてがんばつていたら、さぞ愉快だろうと一寸思ったことでした。そしてこの間、床屋で思い立つた川柳翻譯熱が一層頭をもたげ出したのでした。これはまだ誰もやっていない仕事だぞと、これは大いに研究して然るべき仕事だぞと、その日の晚餐に僕はもう川柳翻譯の完成の大事業をなし遂げたような亢奮で、狐につままれたような顔をしている女房に頓着なく説き聞かせるのであつた。そ

れもこれも今はなつかしい思い出となった。そして今や皆さんの御後援の下に川柳翻訳研究会は、その輝かしいスタートを切ったのである。(以下略)

こうして、その当時青年佐保蘭君は張り切つて立ち上り、川柳翻訳運動に一切の情熱を傾けたのであった。そして、宮森麻太郎教授は言うまでもなく、元慶大の堀英四郎教授や堀口九万一氏やアール・エイチ・ブライス教授等を歴訪して、川柳翻訳を懇請し、同氏等また興味をもつて翻訳せられ、川柳翻訳史上に一つのエポックメイキングを作られたものであった。

ここに佐保蘭君が、次ぎ次ぎにそうした大家を歴訪したとき、彼は羽織、袴の正装で、頗るいんぎんな態度で川柳翻訳を懇請して廻つたというのである。そして一たん接見し得た彼は誠実と努力で、転んでも放さないがめつきで押し進んだのである。いつもニコヤカな態度で人に接する彼のどこにそんな力がひそんでいるかと思わせられるのである。しかし、その結果が輝かしい川柳翻訳研究会となり、川柳翻訳運動への実を挙げ得たのだとすれば、同君の労を多ししなければならぬであろう。アール・エイチ・ブライス教授の「前田雀郎自選三十五句」の英訳は『川柳雑誌』の昭和三十五年の九月号から十二月号までに続載されている。その他については多くを述べないが、『川柳雑誌』は

川柳翻訳に関する限り惜しみなくスペースを割いて来たのであった。

川柳翻訳の可能不可能は限度の問題である。私は三十パーセント可能説であるが、その限度を短縮する意味に於ての翻訳のエキスパートが続出することも、川柳翻訳研究会の活動如何にかかっているとと思われるので、阿部佐保蘭君の今後一層の奮起を切望してやまない。

句集『鶴の姿』の序としては、いささか駄文を弄した嫌いがなくてもないが、佐保蘭君の川柳翻訳運動の功績を思うて、黙し得ないまま、ここに到つたのであるから諒とされたい。

一九六三・初秋 川柳雑誌社編輯局にて

(阿部佐保蘭句集『鶴の姿』の序、昭和38年12月1日発行)

窓口談義 婚後五十年解消説

私等夫妻は大正二年に恋愛によつて結ばれたので来春四月には五十年を迎える。世にいうゴールデンウエディングだが、私はそれを特別に芽出度いとも思っていない。むしろこの二人三脚が、よくも破綻も来たさないで今日まで続いたものだ、驚きもし、呆れもしているのである。

私は自分のしよとすることしかしないし、彼の女も又

したいことしかしかない性質なのに、こうも続いたということとは珍しいといえまいもない。

この半世紀の間に、世の中は素晴らしい速力で回転して行った。その変転し変転する渦巻の中に溺れもせずによくも生きて来たものだと思う。

そこで私は、池田首相が、自分の政治力の是非を民意に問うために、衆議院を解散したように、私等夫妻も婚後五十年がお互いに良かったか、どうかを妻の忌憚のない意見を訊くために一たん解消して見たらと考えている。

若し、解消するとしたらすべての所有物は一切二分するということを前提とする。それは評価額によってもいいし各自の必要さによってもいい。

そこで、現在のまま存続した方がいいと意見が一致した場合には、第二人生への一步を踏み出すための新婚旅行からはじめることにしたいと思う。よしや肉体は若さを取り戻せなくても、精神力にカツが這入るだけでも有意義ではないかと思う。私は昔から何事をするにも情力を怖れ、全身全力主義でやって来たし、これからもそうありたいと願っているからである。

むしろ、この際、解消して、僅かな余生をお互いにホントの自由に生き抜きたいというのであれば、それもいいのではないかと思う。こうした夫妻の世話を福祉協会あたりが、うまく面倒を見て呉れれば更にいいと思うが、そんな

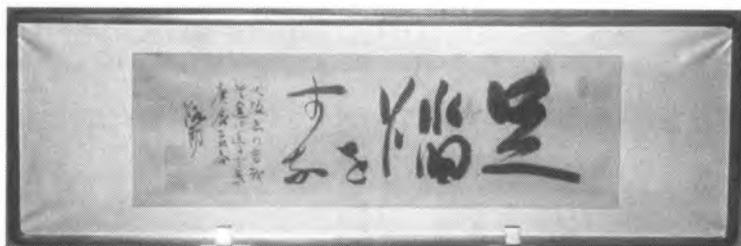
ことは社会党でも考えては呉れまい。

この外、別居その他の方式もあるろう。こんな話がある若い女性に話したら、「外にいい人があるんじゃないやあありませんか」といった。この言葉は一応世間的な人の言葉として受けとることが出来るが、私の場合、婚後五十年での解消説はそんな常識的なものとは違う。考えても見給え、同輩の女性を求めたところで、五十歩百歩の女性しか得られないのではないか。仮に十代の女性を求めようとすれば、向うから逃げ出すにきまつている。これは彼の女の場合でも同じではなからうか。この話はそんな浮ついた話ではないのだ。晩年をいかに生きるかという人生の大問題を提出しているのだ。

私達夫妻には九人のこどもたちがあったが（内四人は遠い昔に死亡）、今はいずれも巣立ちして自分等の生活をエンジョイしているので妻と私とは自由に余生の企画を立てられる立場にいるのである。世の人の多くは老後により大きな家を建てることに希望をつないでいるようであるが、私達夫妻はそうした物質欲には至って淡いので、世間の人達から見れば世にもバカらしいと思われることを真剣に考えているのである。

ここへ、私の旧作一句を記しておく。

幸福は金庫の中になかりけり



「足踏をすな」の扁額。昭和15年独立営業を開始した大坂形水に贈った言葉。昭和28年10月号「川柳雑誌」の「足踏すな」に、「『足踏すな』は私が心から形水君の前途を祝福して贈った言葉には違いないが、同時に私自身へのいましめでもあつた」とある。

麻生路郎語録

「八面鋒」(夙第五號)に花の介氏が募集吟の句數無制限を難じて居るから、それに就て一寸書いて見やう。氏は句數無制限は眞から嫌いだと言ふ、好き嫌ひのメジユアで物を計れば多くの場合正論を失する、好きと嫌ひは其人々の勝手である、甲が好きだと言つた處で乙も好きだといふ譯にはいかない、要するに募集吟は群集心理の趨く處によるものだと思ふ、募集せられた課題に對して一句でもい、五十句百句でもい、出来る範圍で應募させてい、筈だ、五句など、制限する必要は新聞などの特殊の懸賞募集ならいざ知らず川柳専門の雑誌に就てはまあ、無と思ふ、應募は各作家の自由である様に句數に於てもフリーであらしたい。尙又句數無制限故に僥倖を恃む野心が起きて推敲する力がなくなると説いて居るが懸賞募集なら知らぬ事僥倖などの野心を起す理由が至つて薄弱である、例令一部の

作家が僥倖を恃んだ處で選句眼ある選者ならば句數の多い位に迷わさるべきものでない、反つて多くの句數から選するといふ事は選者にとつては甚愉快である、僥倖などを願ふ様な作家なら寧ろ止した方がい、川柳を専心にやる氣のない人間に、一方では選者を侮辱した言である、僥倖で抜句されるといふ様な考は初心者 of 謬見であるから再考を願ひたい。應募句は出来る丈け多く作つて欲しい、が研究の場合には一句に就て深く考ふべきものである、推敲する力がなくなるといふ事は作家自身の頭惱の明晰でない事を表白するに過ぎない、暗合や剽竊は自ら問題を異にする、類句といふ事はあるが之は初心者には免れぬ次第で多く作り多く讀む内に自然に判つて来るものだ。吾々番傘同人の句に於ても再三節にかけたものを番傘で發表する、だから一題三十句や四十句は少くも作る、一題百句以上作る事は珍しくない、それが御承知の番傘誌上では二三句しか發表されないうまくて五句位なものだ。要するに私は句數無制

限を主張します、いくら無制限でも一題千句二千句應募して来る人はない、何となれば締切日が無期限でないからである。〔大阪より〕、大2・7「夙」No7

* * *

懸賞屋だからと一概にけなすのは愚だね。懸賞屋だつて皆が皆欲張りだといへない。それに懸賞屋の作品だからとて當込計りでもない。矢張りい、句はい、のだ。毛嫌ひをしたり懸賞屋の作品は見るに足らないと頭から排斥するのは自己の頭の空ッぽを表白するやうなものだ。

そりや五十錢や一圓儲けるのに頭の百遍程もひねつてやうくにして入賞した杯は憐れな話さ。けれども考へて見給へ、懸賞屋だつて矢張り相當の犠牲を拂つてゐるとすれば努力對報酬の問題ではないか。けなしてる時間があれば縱令五十錢でも儲けて見給へ、中々當るもんぢやあないから。といふと僕自身が懸賞屋のやうだけれど、まあ儲けた人は儲けさしておき。人の事に青い筋を立て、騒ぐに

も當らんから^不。

僕をして言はしむれば川柳に力瘤を入れて居るのも一つの趣味だからね。俳句が好きだつたら川柳は俳句よりつまらないものだと思ふだらう。要するにどつちでもいゝのだ。川柳を専門にやつてゐて、尙餘裕があれば懸賞もやつたつて差^さ間の無い話だ。しかしながら専門にやつて居る人々の迷惑になるやうなことをやつては困るから其邊の注意が肝要だ。

懸賞屋だつて賞を得る爲めにするのもあれば、賣名手段にするのもある。病後などの徒然に投ずるのもあれば、單に興味上からのもあるから、誰が懸賞に投じたから莫迦だの骨董だのと罵倒したり揚足をとつたりするにはあたらぬ。人の疝氣を頭痛に病むよりも自分の編輯して居る雑誌の誤植でも訂正する方が餘ッ程氣が利いて居る。

以上懸賞屋さんの爲に聊^{いささ}か辯じて置く。が、別に懸賞金を幾割よこせとも申しませんが、其點は御心配なく……。

(大正三、五、十)

〔蛙曰く、大3・6「凧」No17〕

* *

自分の好きな句と言へば戀を中心としてひろがつてゆく。

カナリヤを覗いて今日も逢ひに行き

日車

諦めのつかぬ二人に飯となり

同

商用と答へて思ひある身なり

同

思はじと椿の花を火に焙べて

同

經節投り出してあり誰もみず

同

二三日新聞も見ず逢ふてゐた

同

されし日の晝の暗さを忘れかね

同

物干をして呉れといふ望み也

柳珍堂

遊一郎

自分は慙^かうした句によつて事務に疲れた頭をやはらげられることが少くない。

静に讀んで行けば嬉れしいやうな悲しいやうな光景にひとと突きあたる。思はず知らず涙がにじみ出る。

更に自分としては生活状態がハツキリと眼に浮ぶ句が好きである。さうした句

には何時讀んで見ても生命がある。

〔戀を中心として、大8の2号「番傘」〕

* *

私は川柳家以外の友人を澤山持つてゐる、それ等の友人が他人に私を紹介する時に、この方は有名な川柳家ですと云ふ。その時の私の心は何時も暗かつた、私はさうでないかと否定もしないけれども、エライことを云つて呉れたものと友の顔を見返すことがある、そして何んだか前科者だと云はれたやうな心持に襲はれるのであつた、それ程私達が卑下せなければならぬ理由が何處にあるのであらうか、私は川柳家ですと立派に名乗つていゝわけではないか、然るに私は未だ自分から私は川柳家ですと立派に名乗るだけの勇氣を持たないのである。そんな時には私はたゞ黙つてゐるより仕方がなかつた。私は川柳家ですと立派に名乗れない理由が何ツ處^かに潜んでゐるに違ひないと思つて考へて見たけれども之と云ふ大きな源因^{源因}を發見しなかつたのである、川

柳がくだらぬ駄洒落や穿ちの範囲を出ないので川柳などは誰にでも作れる至極つまらないものだと世人に思ひ込まれて居るので、川柳家と呼ばれるのを心良くとせないであらうか、然し深く考へて見れば他人は怎うか知らないが私にはさうは思へない、川柳は決してそんな詰らないものでもなく、そんなに作りやすいものでもない。

駄洒落や穿ちばかりが川柳の畑ではない、耕してさへ行けば川柳の畑は幾らでも廣がつて行くに違ひないと私は思ふ。此の問題を私は川柳作家の人格の上に乗めたい、人格の低い人には人格の低い川柳しか生れない、これに對しては何人も異論はあるまいと思ふ。人格の低い人が幾ら聲を囂らして叫んでも集つて来るものは人格の低い人に限られてゐるに違ひない、この意味に於ても決して川柳の畑が悪いのではない、之を耕す人達が悪いのであらうと思ふ。

私達はお互に注意して善良な耕人とならなければならぬ、そしてこの方は川

柳家ですと言はれた時に赫い顔をししないで、私も川柳をやつてゐる一人ですと立派に言ひ得る日の實現を計らなければならぬ。

〔耕人として〕、大10・3「百萬石」No25

* * *

私は目下の川柳界は大宣傳時代であり、大研究時代であると思ふ。然らば宣傳を主として活動した方がい、か、研究を主として活動した方がい、か何れかの一方さへすればい、の問題が起つて來るのであるが、それは要するに人の問題である、宣傳に適する性質を持つてゐる人達、宣傳に適する境遇に置かれた人達は大きい宣傳をするが、研究に適する性質の人達や、研究に適する境遇に置かれた人達は大きい研究をするが、双方ともなし得る能力のある人達は双方に對して活動を續ければい、であらう。

〔耕人として〕、大10・3「百萬石」No25

* * *

大正13年1月号「忍路」〔函館川柳社〕の

募集吟「輕口」の選を路郎が担当している。集句百十七章のうち、入選は鞍馬の次の2号のみ。(编者)

輕口の顔までそれに出來てゐる

輕口もさて演説は困るなり

輕口といふ題に輕い口やら口輕の句が多

いのはどうしたものか、もつと目をあけて課題を見て而して後作句すべしと云ひたくなる。かう云はれて腹が立てばもつと勉強することく

二、二五 路郎生

〔募集吟「輕口」の選評、大13・1「忍路」

* * *

川柳の畑にはまだく未墾の地がのこされてゐます。

お互ひに一畝を肩にして出掛けませう。

〔卷頭言〕、大13・6「川柳雜誌」No5

* * *

柳書の散逸、それは川柳家としては誠に遺憾に思ふものであるが、川柳家の子

必ずしも川柳家ではないから、つい散逸するをまぬがれぬ状態にある、柳壇にあつて柳書蒐集熱は大いに奨励していゝ。

印紙や、燐寸のレットルに高い犠牲を拂つてあつめる、ひまと金があるなれば川柳家は、よろしく柳書をあつめて、川柳文庫を作るべきである。

それ等の文庫は、同時に川柳家が箇人として、所有するものでなくて、川柳家共同の所有物たらしめるていのものでなければならぬと思ふ。

蒐める人、研究する人、それは一人の人であつてもいい。別々の人であつてもいい。要はたゞ、川柳文庫を尤も有意義に利用しきへすればいい。

(「柳書に就て」、大13・7「大大阪」No.5)

* *

川柳の内容を古川柳よりも一層廣く、一層深くすることは、いつまでも怠つてはならないことである。

が、しかしそればかりではない。眞珠を眞珠として世の中から認めて貰ふ必要はあ

るまいか。

現代の川柳家が自惚れてゐるにもかかわらず目下の川柳は社會からその割に認められなさ過ぎると思ふ。私に云はせればもう少し認められてもいいと思つてゐる。そこで私は川柳の社會化運動を提唱したい。(「川柳の社會化」、大14・4「川柳雜誌」No.15)

* *

古い句には古いくさみがあり、所謂新しい句には新らしがつてるくさみがあゝる。鼻もちならぬ点は同じである。深思すべきである。要するに我々は生活に即して眞實の句を作りきへすれば、それでよし。

眞實でさへあれば、味も素つ氣もない句であつても、平々凡々たる作であつてもいいといふ意味ではない。そこに詩としての韻律、形式、内容の豊かさがなければならぬ。

常に潑刺たる句でなければならぬ。非凡でなければならぬ。永久に光るもの、け

だし、非凡の外にはない。

(七月十九日夜
「非凡であれ」、大14・8「川柳雜誌」No.19)

* *

鳴尾へ移り住んでから既に四年の歳月を経た。最初の二年はどうしても自然になづまなかつた私が、後の二年の間に漸く自然に對する目がひらけて來た。「君見給へ波稜草が伸びてゐる」が生れたのは、それを證據立てゐる。ところが近來の私は自然に對する親しみがますます深くなつて行くやうである。そして夫れが決して川柳にならないものでないことを知つた。

私は毎日新淀川の鐵橋を阪神電車で渡るが、その時は必ず本から眼を離して大自然に接する。自然は毎日のやうに私の眼に新らしく映つて來る。決して同じものは映らない。川柳家が川柳は都會詩であるなどと獨斷的にきめてかゝることの危険さを想ひ微笑を禁ずることが出來なかつた。川柳は人事詩であると同時に又叙

景詩であることも忘れてはならない。

(九月二十日)

〔川柳と自然〕、大14・10「川柳雑誌」No.21

* * *

柳友よ

川柳の畑を耕す男

一本の燐寸が

燃えつくすまでに寒さや空腹が

せまつて来る迄に

わたしたちは

一句を遺しておかねばならぬ。

〔巻頭言〕、大14・11「川柳雑誌」No.22

* * *

* * *

従來の川柳が社會から認められないのは従來の川柳家が川柳を弄びすぎてゐたからである。その罪は社會に無くて川柳家にあつたのである。私はさうした川柳家から遁れて眞面目に川柳を研究し、生活に即した川柳に生きんとする人々のために指導することゝなつた。(編輯後記)、大14・12「川柳雑誌」No.23

「漫書家だから頗る洒落のめして暮して居るだらう。斯ういふ風に考へる人が世間に以前數多くあつた。書に文に僕等の必死の闡明せんめいによつてこの頃は大に少なくなつた。けれどもまだある。こつちがふざけて暮して世相の眞實が掴まるものか」と二平書伯はおつしやる。全くその通りだ。川柳家だつて、世間からはふざけて暮らしてゐるものだと思はれてゐる。けれどもそれは大きな間違ひだ。考へを入れ替へて貰ひたい。そりやあ、一部の川柳家にはふざけて暮してゐる人達がないでもない。そしてさうすることがほんとの川柳家だと思つてゐるらしいから全く始末がわるい。斯ういふと君達はいつでも、にがり切つてゐるのかといふかも知れぬ。そしてほんとの川柳家は、にがり切つてゐなければならぬものと屹度きつと反問するであらう。然り多くはにがりきつてゐる。それは、にがり切るべき多くの原因があるからだ。ふざけた川柳家に對して、川

柳を誤解せる世間に對して、自分自身の汚穢に直面した時に對して私達はにがり切るまいとしても、にがり切らざるを得ないのである。私はそれ等の問題に對して随分多くの言葉を費して來た。従來のふざけきつた川柳家も、川柳を誤解せる世間も、もういゝ加減に私を、にがり切らさないやうにしてくれてもいい、と思つてゐる。(何故私は、にがり切つてゐる乎)、大15・3「川柳雑誌」No.26

* * *

〔川柳雑誌〕が初心者しんしやの指導をもつて任じてゐながら、その巻頭の路郎氏の句はあまりに新しすぎるとか、難解すぎるとかいふ言葉を最近耳にしたが、これについて私は少しく筆序しんじゆに書いておきたいと思ふ。

いくら初心者しんしやを指導する雑誌であるからと云つて、その句を徹の生へたやうな古川柳まがひの句にしたり、又、誰にでも必ず分るといふ句にすることは出来ないことである。殊に川柳を社會に宣傳する

使命をもつてゐる雑誌においてをやである。

初心者を指導する雑誌であるからと云つて、畫家自らが幼稚な畫を描き自己の名によつて發表すべきものか、どうかを一考されたい。「明窓漫筆」、大15・6「川柳雑誌」No.29)

* *

文字を知るは苦のはじめなりで、僕はなまなかの文字を知つたために、その文字によつて家族を養はなければならぬ。川柳を立派な藝術として天下に普及せしめなければならぬ。それは大それた考へかも知れないが、僕にとつては、大それた考へだとも思つてゐない。是が非でもやつて見せる。それが青洞門を穿つことよりも幾層倍の難事業であらうとも、それは今の僕には問題ではない。ただこつ／＼と穿つのみである。どこでハタと突きあたらうとも、それは問題ではないのである。案外早く青い碧い大空が見えるかも知れない。いや僕自身の死を前

にして必ず大空を發見するであらう。それを求むることのみによつて生きる今の僕である。「大空を求む」、大15・7「川柳雑誌」No.30)

* *

僕の子福者であること、その名が今の世から見て變天古である事とは、新聞雑誌でかなり宣傳してくれたために、今では僕自身の名よりも、ロンドン（長男）やアート（次男）の父として知られてゐる。その父の句に、子どもに對する愛から生れた句の多いのも、敢て不思議ではあるまい。

奈那（四女）がうまれた頃は經濟界に一大打撃の來た大正九年の十一月で私の生活も亦尤も險惡を呈し子どもが多數にあるので、女中には逃げられるし、蔑乃の母體の恢復も思ふやうにいかないことを思はせられたので

天井のひくさも知らず子は生れといふ句が、未だに、その當時を回想せしめてゐる。

その後阪神沿線に落ちついた私の生活は心にだけでも少しくゆとりを生じ、子どもの多いことも以前ほどには苦しめられなくなつて、遂に子どもは夫婦の間の藝術的作品なりとまで思ふやうになつたのである。アートの名の出た所以である。その後リリ（五女）の名の音樂的なものによつて知られるであらう。

ロンドンが生れ奈那が生れるころまでは非常に暗い、しかも争鬪的な句ばかり吐いてゐた私は、近來非常に地味な句となり、一方では子どもを詠んだ句が多くなつて來た。

裏へこいソラいちぢくをとつてやろ
畫のふる泳ぐ氣にさへなる父よ
子煩惱がつたん／＼してくらし
子を泳がせて沖の景色は目に入らず
どの子どもどの子も息災でお元日
すべりんこ親は涼しいとこで待ち
俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

など數へれば數かぎりなくある。私は斯くして老いてゆくのであらう。私の句に子どもの句の多いこと、そして子に對す

る愛着が深い事などを、酒を呑み遊びもやり議論もする私から發見したのは實に萬よしの妻君だつた。流石に客商賣のヒロインだけあるとは思ふが、彼の女も又子煩惱に外ならないのだ。子ども達は實にあけすけで自由で、雀のやうに御機嫌がい、から私の句の多くに影響を及ぼさないではおかないのだ。私も當分はい、お父さんだ。近く出來た句に

箸紙を父おちついで書いてやる

といふがある。(暮の十九日)

(「川柳 父と子」、昭2・1「川柳雜誌」No.36)

* *

川柳の作家でもさうである。その作家の句風を靜に觀てゐれば、どつかに長所を持つてゐるものである。その長所をのばすことが選者のなすべきことのすべてでなければならぬと私は思ふ。しかし、さうするためには随分と骨が折れる。眠つてゐる作家に對しては先づ、その眠りから覺してか、らなければならぬ。摸倣作家に對してはその作家の句が摸倣句であ

ることを、自らさとするやうにしむけなければならぬからである。君の句は摸倣だから駄目だと頭からしりぞけてしまつては、その作家は永久に埒外に去つてしまふ。

先輩の句に憧憬するところに、摸倣がはじまる。これは川柳を學ばんとするものにとつて決して悪いことではないが。しかし、その摸倣から一步抜け出る處にその作家の生死が決定されるのであるから一時的の模倣が容さるべきことであるにしても、作家自身さうした點に思ひをいたさなければならぬ。選者も又さうした點に心してか、らなければならぬ。これでい、のだといふ安心を作家に與へてはならない。若しさうした安心を作家に與へる選者があるとすればその選者は作家を殺すことになる。又巧い句を作らうとして腐心した結果、文字そのものの、言葉そのものに支配されてしまつて心の扱ひ方を忘れてゐたならば、決してい、收穫があらう筈がない。作家の心すべき點もそこにあるが選者の選句に定見

がなく、作家の心を觀るの明を缺くならば、勢ひ作家を混沌たる世界へと追ひやつてしまうものである。一句抜けた、嬉しい、二句抜けた、嬉しい。二句抜けるよりは三句抜ける方が更に愉快だといふ、さうした投句家心理を私も知らぬではない。が、さうした選がいつまで作家自身の侮蔑を買はずにゐるであらうかを思はざるを得ないのである。私自身は常にさう考へてゐるのであるから血の氣のない句が何句抜けたところで、それが何んのたしになるであらうといふことに、作家自身、毛少し氣づいて欲しいのである。

(前後左右(一)、昭和4・1「川柳雜誌」No.60)

* *

私が本に、二千圓の保險をつけてから、もう十幾年になる。焼けたら二千圓はおろか一萬圓でも買へない本もあるのに、一體これはどうしたことかと考へるとおかしくなる。命にさへ保險をつけてゐないくせに。(「私と本」、昭7・1「川柳雜誌」No.96)

* *
舊冬から三三年へかけてあまりにも無理をした結果、僕は今、病臥してゐる。

×
緑雨と杏三と葎乃が僕の枕許で泣き出しさうな顔をしてゐる。僕が涙を流して叱るからだ。

×
疲労から遂に下痢をはじめたのでスツカリ絶食療法をやつてゐる。全く腰が千裂れて飛びさうだ。しかし僕は天井を凝視めたま、編輯變への指圖に全力をあげてゐる。

×
僕は飽くまで無理を愛し、極力墮力を憎む。そこによき詩が生れ、よき雑誌がある。

×
その外に何もなし。
その外に何もなし。

—この短き言葉を若くして逝ける愚陀

晃卓の靈に捧ぐ。

〔僕は今〕、昭8・2「川柳雜誌」No.109

* *
愚陀は一見寂びしい男であつたが、うちにはいつも、とろとろと燃えるものもつてゐた。

どちらかと云へば無口の方であつた。そのために議論ばつたことは云はなかつた。時々皮肉をいふことはあつたが、どうでもい、といふ投げやりな、物臭さな態度を見せた。それでゐて月評などの筆記を引きうけたり、清記してくれたりする熱心と親切さがあつた。

彼の顔からうける感じは、どことなく子どもらしいところがあつたが、態度からうけとる感じは親父くさかつた。あの若さで學生に不似合な大人びたところをもつてゐた。藤田嗣治を思はせるお河童頭が、子どもらしさにしんにうをかけてゐたし、ロイドの黒縁の眼鏡は彼をより以上に大人びさせてゐた。

彼の感覺は新らしかつた。そして鋭かつ

た。それは彼の川柳を見れば判るが、彼は空想と現實を巧みに織り交せて縹渺とした句を創上げてゐる。私は彼の將來に多くの望みをつないでゐた。彼が學業を終へたら、『川柳雜誌』の編輯を彼の手に委ねたいと心ひそかに期待してゐた。

彼自身は職業として映畫の監督を希望してゐた。彼は常に映畫の研究を怠らなかつたらしい。談たま／＼映畫のことに及ぶと彼の無口がかなり辛辣な批評を浴びせかけてゐた。彼の監督した映畫が遺されてゐることを彼の歿後に聞いたが、それもこれも今は空しき思ひ出となつた。

昭和八年の三月には關西學院の英文科を出る筈の彼が多くの希望を將來につないで、十二月二十七日に病歿してしまつたのである。愚陀の死は新興の柳壇にとつて尠なからぬ損失であつた。殊に私にとつては大きな傷手であつた。

しかし、彼の川柳が彼の墓標として永遠に光りを放つであらうことを思ふ時、多少の慰めとならぬこともない。

愚陀の死によつて、私以上に寂寥を感じた亂耽は、愚陀の靈を慰めるべく、彼の句集編纂を思ひ立つた。

愚陀と亂耽とは幼稚園時代からの親友であつた。長じて愚陀が關西學院に、亂耽が商大高商部に這入つてからも二人の交友は變らなかつた。川柳に於いても二人は肩を並べて進んだ。亂耽と愚陀の名は何人にも切離して考へられぬほどの親しみを感じさせてゐた。「川柳雜誌」の編輯を手傳ひに来るのも二人づれだつた。句會にも、そして麻雀を打つにも彼等は常に人生のよき道連れであつた。亂耽が學業を終へて結婚してからも二人は以前の交りを少しも變へず、寢食を共にさへしてゐた。

編輯室での二人は、仕事を與へられると、ヨイシヨとばかりにすぐ、他の人達にそれを譲つた。そして二人は籐椅子に凭つてタバコをふかしてゐた。編輯室では誰いふとなく、二人に重役といふニツクネームを與へた。二人はそれを甘受した。他の人達も彼等の自由な態度に反感を持

つものはゐなかつた。それは彼等の愛すべき我儘として憎めなかつたからである。

愚陀歿後の編輯室には所謂重役が放散してゐた事務外にかもした餘裕が見られなくなつた。

この句集『潮騒』は亂耽が今は亡き愚陀を追慕するのあまり、限りなき友情の美しさから上梓したもので、同時に亂耽篇を合纂したことも意義深い。

亂耽の川柳に就ては特にこゝでは述べないが、彼も又愚陀と共に新感覺に生きる新川柳壇の一異彩であることを附言すれば足りるだらう。

表紙の題字は亂耽の希望によつて私が書いた。文字の巧拙よりも、前述のやうな美しい事情の下に刊行された著書の一部を手傳ふことによるこびから引受けたのである。

一九三三年初秋 不朽洞にて

(伊藤愚陀・住田亂耽川柳句集『潮騒』の序、昭8・9発行)

私の川柳を獨逸語譯されつゝある笠原博士は私の

元旦だせめて眼鏡を拭きましよう

といふ句を譯するのに、元旦といふ文字もある、せめてといふ文字もある、眼鏡といふ文字もある、拭くといふ文字もある、拭きましようといふ表現も出来る、が、「元旦だ」の「だ」の表現が困難である。「だ」を「である」といふ意味の言葉であらはしただけでは原句の味が出ない。「―」で表はしても原句の意味の出ないことは同様だといふやうなことを云はれた。私はそれに斯う答へた。

さうですとも、それだけであればただ逐語譯に過ぎないので、文字の翻譯は出来るかも知れないが句意がその文字からは出て来ない。

原句の「だ」には私の過去の三百六十五日の苦闘が泌じみ出て来なくては立派な翻譯とは云へません。それを出して頂かねばいけませんといつた。

笠原氏もこの言には同感であつた。そ

して適譯完成を約された。そして、私の

戀の毘あゝの眼だらうか眼だらうか

なども、戀の毘といふ語もあるさうだし、

ただ「あの」といふ言葉に充分の意味をふ

くめることが困難であるだけであるか

ら、これもいくつか譯して見て完全なも

のにして見ませうとのことであつた。そ

して私の句から譯せさうなものを選んで

四五十も譯される筈である。これは私ひ

とりのよろこびではなく、川柳を海外に

紹介する意味に於て非常な功績であるこ

とを思はされる。私は氣永くその完成を

期待してゐよう。(五七五の繙譯、昭8・

10「川柳雜誌」No.117)

* * *

近ごろ、年賀狀を年末に出したことが

ない。いつでも春になつてから、ポツ／＼

出すことにしてゐる。一時は年賀狀に擬

つた時代もあつたが、あれは若さがさせ

た業である。一種の遊びにすぎぬ。近ごろ

はスツキリした賀狀に敬虔さを感じるや

うになつた。

政治家や實業家の代筆賀狀位ありがた

くないものはなかつたが、これも止むを

得ないものとして宥すやうになつた。そ

れだけ人に對する熱を失つて行くのかも

知れぬ。世の中が判ると云ふことは灰色

の悲劇に生きることだ。赤い悲劇、青い悲

劇、そんな時代からだん／＼遠ざかつて

行くことを思はされる。(新春雜筆)の「賀

狀」、昭9・1「川柳雜誌」No.120)

* * *

何れにしても、人間の魂に點火する川

柳でなければ、十七音字工作がいかに巧

みにほどこされてあらうとも、それは沙

上に描かれた閑文字に過ぎない。

(「病閑」、昭10・2「川柳雜誌」No.133)

* * *

藥學博士の木村彦右衛門さんが死ぬ前

に、僕が死んだら、ワグナーの葬送曲で式

をやつてくれと遺言をされたさうだが、

人間は死んでから後の夢まで楽しむ者で

ある。

×

編輯室で、霞乃が寒うおまんアと火

鉢を抱えてゐる。

酒でも呑んだらどや、手をたたけと料

理屋のやうなことを僕がいふ。

洋酒は食欲を増すと新聞に出てゐまし

たと、某人君がいふ。

確かに食欲を増しますと與三郎君がこれ

に和した。

確かに食欲を増しまんなアと霞乃が同ん

なじ言葉を繰り返へした。

さうだ確かに食欲を増すと僕も思はず言

葉を繰り返へしたので、四人が顔を見合

はしてうれし／＼に笑つた。

(「夢——酒」、昭10・3「川柳雜誌」No.134)

* * *

店に出入りの植木屋から、鉢植の小さ

な蘇鐵を買つた。鉢の表面に小さな株が

三つ親子のように押合つてゐて、それ

／＼青い葉を出してゐる。ソレを机上に

置いてジツと眺めてゐると極小のものが

持つ特異な愛着を感じさせられる。只ひとりある時、私のよい話相手である。

〔金色蝙蝠〕、昭和11・4「川柳雑誌」No.147

* *

★藤村誠一君が、隨想集「詩人複眼」を上梓することになった。

★「序文をたのんまつせ」「よしや」と、すこぶるアツサリと引きうけてしまつた。

★サラ／＼と駄文を綴つて、「これでどや」「おほきに」といふ具合に事が運ばば、何んのこともなかつたのであるが、ここで僕の悪い癖が出た。

★机に向つて序文を書いてるうちに、一體序文といふものは——と著者をすて置いて序文の本體をハッキリさせたいといふ欲望がムク／＼と頭を擡げて來た。そうなるとなか／＼、筆がすすまない。二三枚書いては、ああでもない、斯うでもない。これでは序文にはならないと書く尻から否定してしまふ。

★世の多くの序文は著者よりも一步自分を高處に置いて、著者の提灯持をつとめ

てゐる。ひどいになると、そこで自分のプロパガンダをやる。も一つひどいになると俺は偉いといふことを知らせる手段として著者の頭を一寸押へたことを書く。

★斯くして出來た序文を著者がよろこびそうな筈がない。著者は澁い茶を飲まされたやうな顔をする。しかし頼んだ序文を義理にもボツにすることは出來ない。

★こんな經驗をした人はもう序文を人なんか頼まない。自序で出すか、ものによれば序文ぬきで出す、膝を崩づさずに御馳走になるより、自宅でお茶漬の胡坐を愛好する方が餘ッほど好ましいからである。

★その意味から云へば僕の如き野人の序文などは蛇足かも知れない。

★「詩人複眼」は僕の主宰してゐる月刊「川柳雑誌」へ一つのホルモン劑を投じてやらうと云ふ好意から、詩人藤村誠一君が高鷲亞鈍のペンネームに隠れて奔放と飄逸、且つは諷刺美ゆたかな麗筆を揮ひ、多數讀者を魅了し去つたといふ曰く

つきの隨想集なのである。

★従つて高鷲亞鈍君の把持する思想は所謂詩人性の單純さではない。一脈川柳人への交流と、多くの示唆を與ふべきものを有つことが實證されたのである。

★僕のこの悪文が序文の體をなす、なさぬは別として、婦人服の飾り卸位な役目でも果たせるとすれば望外の倖である。
(藤村誠一隨想集「詩人複眼」の序、昭和15年3月1日発行)

* *

矛盾は人生の美しきリズムだ。私は矛盾を愛し矛盾を憎む。それは憎むが故に愛するとも云へやう。

★

川柳のフラスコには多量の矛盾を抱擁する。その故に私は川柳を極度に愛するのかも知れない。

★

川柳の血液は私の青年時代の血管に奔騰し、三十有七年の長きに渡つて激動してやまない。

★ 私私の舊作

正直がなんのたしにもならず死に
といふ句をふと思ひうかべた。

それと同時にこの句を實踐したやうに
死んで行つた武藤山治氏のことをフト思
ひうかべた。

武藤氏は實業家としても政治家として
も、おそらく氏の右に出る人がゐないほ
どの正直さをもつて人生を終つた。

その故に私は武藤氏が好きだつた。今世
にあらばの感が深い。

★

有恒俱樂部の食堂でクラスメートの雨
月氏と夕食を共にした。友は私の生活を
案じてか、何か不自由なものはありません
かと聞いて呉れた。私は何もありません
を答へた。米は外米を喰べてゐる。誰も彼
もが喰べてゐるのだ。私ひとり喰べられ
ない筈がない。内地米を手に入れるため
の努力は今の私にとつて無駄な努力であ
る。

砂糖がないと炊事をうけもつてゐる娘

が報告した。

そうかと私は云つた。そして私は娘に
砂糖がなければ無くてはよろしい。人間
には糖分が必要である。糖分を含んだ總
菜を、醤油が無ければ鹽を、鹽分を必要と
すれば目刺のやうな塩物をと云つたまで
である。

斯くすることによつて私の日常生活に
は何等の不安も何等の不自由もない。

幸福は金庫の中になかりけり

であるとともに、物資の不足がそれほど
に私の生活を脅かしてはゐないことを談
した。

そうですか。結構ですなと友は私のた
めによるこんで呉れた。

★

ある人が私の急激に白化した頭髮を視
て、染めたらどうです、染めてあげませう
かとまで親切に云つていただいた。有難
うござぬますがと云つた私は其の後も、
そのままである。あるがままの生活とい
ふことを考へてゐたからである。

私は絶えず染めねばならぬ時間の不經

濟と、染めるがために要する藥品購入の
煩瑣を想ひうかべてゐたからである。

しかし、生きるために染めることの必
要も、近ごろになつて判るやうな氣もし
て來た。單にぬかすと云ふ意味以外に。

それでもこれが實現は難しいのではな
いかと思つてゐる。そうした方面に至つ
て物ぐさな私だから。

〔窓のある風景（雜感）〕、昭和15・6「川柳
雜誌」No.197

* * *

民郎君の川柳生活は昭和五年にはじま
つてゐる。はじめてその處女作を私の主
宰してゐる「川柳雜誌」に投じて來たころ
は「らつぽ」と號してゐたが、幾ばくもな
く本名の民郎をそのまゝ、號として、眞摯
な態度で作句に臨んだ。その後、川柳雜誌
社同人の列に入つて、郷土色の豊かな異
色ある作家として全國に知られ、川柳雜
誌社の改組後、不朽洞會員の一員として
「川柳雜誌」で重きをなしてゐる。

君は單に作家として異色あるばかりではなく、古句に好尚をもち、民俗方面に於ても一見識を有してゐる。又藏書票に關しても造詣が深いと聞く。特にこの方面の機關誌として「川柳しなの」を刊行してゐたが時局に鑑み昭和十五年十月限り廢刊してしまつた。

民郎君は瘦身長軀である。その性格は外部から見るほど單純ではない。溫順ではあるが盲従はしない。聰明ではあるが冷徹ではない。寡黙ではあるが時に敢然として語る。

君は家業に専念する外は孝養と讀書に時間を消すことをもつて人生至上の幸福としてゐる。

君は無口の人に珍しい世話好きで、常に同志のために勞を惜しまないし、新體制下の地方文化人として奔命しつゝある。一貫しての親切は彼を今日あらしめた所以である。

別府の木村晃卓君の闘病生活句集とも云ふべき「僕を語る」を、死ぬ以前に上梓したその友情を私は決して忘れることが出来ない。印刷は家業ではないかと云ふ人があるかも知れない。然り、家業であるからこそ、むしろ至難な立場にあつたのを敢然として惜しみなく友情を傾けつゝした民郎君を忘れ得ないのである。

君の句は至つて地味である。地味ではあるが暗さはない。信州の土からにじみ出た生地なりの句である。今よりも若かつたころの句を見ても決して絢爛な句を吐いてゐない。そうした句風の持主が昭和五年一月から十有餘年間、一句一句と吐きすて、來た川柳の集積を一帖として茲に公にしたいと云ふのが、川柳句集「大空」の世に出る動機となつたのである。

地方文化の喧しく叫ばれてゐる際、郷土色の濃い個人句集が上梓され、地方文化の昂揚に資することは、まことに時宜

に適した有意義な企劃であると思ふ。茲に惡筆を弄して、君が處女句集の門途を祝福すること、した。

昭和辛巳初冬 不朽柯にて
（石曾根民郎川柳句集「大空」の序、昭和16年12月20日發行）

* *

川柳とは人間及自然の性情を素材とし、その素材の組合せによる内容を、平言俗語で表現し、人の肺腑を衝く一七音字中心の人間陶冶の詩である。

〔初等川柳講座（二）川柳とはどんなものか〕、昭17・3「川柳雜誌」No.218

* *

近ごろ、ある派の人たちの句がまるで標語のやうな句になつて、川柳をつくつてゐるのか、標語や提灯持ちの句に終始してゐるのか判らないと思ひますがあれでいゝのでせうかと七號室をたゞきに來る人があるが、私はその人たちに、君よ。川柳をつくれ。いのちある句をつ

くれ。標語をつくる人たちには標語をつくらしておけ。常識人の世界には標語が

睡眠剤の一ト役を果すのだ。私は、近ごろ、佛像のまなざしのなみなみならぬひかりに永久といふものを教へられてゐる。川柳もそこまで行かねばならないのではないか。雑草は棄て、おいてもはびこるが、いつまで経つても雑草である。雑草と雑草でないもの、見分けは誰にでも判かる。案ずる勿れである。世の中を盲千人だと思つてゐる人はその人自身が盲なのだ。私たちはさうした盲になることをおそれなければならぬ。雑草は雑草の中で背くらべをしてみればいいのだ。私たちはわざ／＼雑草の中へ立ちまじつて、優越感を感じる必要はない。そんなことを考へるやうではまだホントに灰汁が抜け切つてゐぬ證據だと思つて、一段と精進を要する。と答へることにしてゐる。

〔七號室雜記〕、昭和17・6〔川柳雜誌〕No.21〕

* *

奈良にKといふ畫家がある。私はふと

したことからこの畫家を訪ねた。その時の談に、

「近ごろ珍しい、いい額縁を手に入れられたので、それに自分の畫を入れて見ました。この額縁だと畫が素派らしくよく見えるだらうと内心得意で、その畫を眺めました。ところが期待は全く裏切られて、私の畫が見劣りするのです。そして額縁の方は憎らしいほど光つてゐます。先輩や友人も、いい縁だねと一見して額縁を誉めました。が畫については何も云つて呉れないのです。私は私の畫をとりはづして、そのあとへ×××の複寫を入れて見ました。ところが複寫でも×××の畫は燦として光つてゐます。額縁に負けた私は考へさせられました。私はなぜもつと早く立派な額縁を手に入れなかつたのであらうと残念に思ひました。私は今、その額縁へ生地のカンヴァスを入れたいと思ひます」と云つた。

斯く云ふ彼の作品は相當なものである

が、小さな成功に満足しないで、額縁への挑戦は將來の彼を約束づけるに充分であらう。自分はこの若い畫家の描く畫が、その額縁を壓倒する日の一日も早いことを祈りながら奈良を辭した。

〔不朽洞雜筆〕の「額縁と畫家」、昭和17・7〔川柳雜誌〕No.22〕

* *

從來川柳と云ふものは世態人情の機微を穿つものだと云はれて居りました。ところがこの穿つと云ふ言葉から川柳の三要素の一つに數へられる穿ちと云ふ名詞が出来ました。大體穿ち、本來の意味は穿撃すること（ことばの泉）といふ名詞なのでありますが、それとは別個の意味を持つ川柳語彙の穿ちと云ふ名詞が出来たのであります。英語にインサイト（Insight）といふ語がありますが、この語の持つ意味の方が、川柳の穿ちの意味に近いのであります。穿つといふ語を單に穿撃すると解するところから、理屈ツばいとか非詩的であるとかの非難の聲も出る譯であ

りますが、川柳の穿ちといふ語には穿鑿するとか、ほじくるとかの意味はないのであります。寧ろインサイトと同じ意味を持つてゐるのであります。このインサイトの語は、内を見、奥を見、本質を見るといふ意味を持つて居りますので、「川柳は世態人情の機微を穿つ」と云はれてゐる穿つの語と、このインサイトとを置き替へて「川柳は世態人情の機微の奥を見るもの、本質を見るもの」と解するのが妥當ではなからうかと思ふのであります。

又、このインサイトといふ語は看破する、洞察するといふ意味を持つて居りますので、「川柳は世態人情の機微を看破するものだ、洞察するものだ」と解することも出来やうかと思ふのであります。

又、川柳を評して寸鐵殺人的の詩であるとか、人の肺腑を衝く詩であるとか云はれるのも穿ちの持つ迫眞力を指してゐるものだと解することが出来るのであります。（「初等川柳講座（七）穿ちの句に就て」、

昭17・8「川柳雑誌」No.23）

* * *

▲菊池寛氏が「日本の母」といふ訪問記事を新聞に書いてゐるが、新聞記事を一つも出てゐない。出てゐないどころか、あんなものは新聞記者に書かした方が遙かに巧い。母を書くこと云ふより菊池寛自身に顔を出すからいけないのだ。菊池寛が書くからいいのだと云ふ人がゐるかも知れぬが、それは一つの迷信で今時そんな催眠術に罹る人はゐない筈だ。菊池寛には菊池寛の畑があることを知るべしである。私の町會で大金を出して双眼鏡を買つた。何にするのですと、訊いたら、飛行機の襲來にそなへるのだと云ふ。誰が見るのです。あなたは経験があるのでですかと訊いたら、無いと云ふ。その眼鏡で飛行機を捕えることが出来る時分には肉眼でハツキリ見えますよと云つたら、成る程なアハハと笑ひ出した。笑ひ事ではない。そんな無駄をしていいのかいと反問したくなる。私は何んでも餅は餅屋主義である。（廻★轉★椅★子、昭17・9「川

柳雑誌」No.24）

* * *

私は植物ではシヤポテンが好きだ。そして動物では象が好きだ。牛は象ほど好きではないが、嫌ひでもない。シヤポテンや象が好きなのは何んとなくとほけたところがあるからだと思ふ。牛は象ほどにとほけたところがないが、一見してその重厚さにはうたれるものがある。どつしりとしたあの體軀で、黙々として働いてゐるさまを見ると、何んだか敗戦日本人たちに、「俺を見ると、俺を見ると」と云つてゐるやうに、思へてならない。

* * *

〔牛の句を拾ふ〕、昭24・1「川柳雑誌」No.26〕
私の選が嚴選だと云うことは私も認めるが、私は好んで嚴選してゐるのではない。誰でも自分の作つた句が、皆すぐれた句だとは思つてゐない筈である。この言葉が正しいとすれば、その中で、特にその作家の箇性の出た句でしかも優秀な句を

抜くことは選者の責任ではないかと思ふ。

或る人から、選をするのに一定の水準があるのかと訊かれたが、たしかに、それはあると思ふ。しかしその水準は絶対的ではない。

例へば、不朽洞會の作家達の句を選ずる場合に比較的年数の浅い作家や精進の足りない作家の句は一定の水準から少々レベルを下げて選をしておくが、豆秋などの句になると水準を下げる位なら没にしてしまう。豆秋の十句はい、悪いは別として、十句が十句とも川柳になつてゐるのである。それを川柳になつてゐるかると云つて、アツサリ十句採るのでは指導性はない。それ等の十句から、彼が今何を目指して進んでゐるか云うことを先づ観なければならぬのである。そして、その線に沿つて彼の句をよりよく活かすやうに選をしなければ、選者に指導性がないと云うそしりを甘受しなければならぬであらう。試みに彼の最近の句を検討して見給へ。彼が意識してゐるか、ゐな

いかは疑問であるが、「早よ帰らなはれや誕生日だつきかい」間違ふて拘りなや金のない財布」などの句に見るやうに、日常語をふんだんに駆使して句に生命を吹込まうとしてゐる。この点を見逃して彼の句を選する資格はない。「窓口 選と私

(二二)、昭24・2、3合併「川柳雑誌」No.262)

* *

句集——と云つてもいろいろある。個人句集もあれば同人句集もある。一社の句風を一望のもとに愛玩したいと云う目的の句集もあれば全国の柳人の句を編纂して後進の参考に資したいと云うのもあるが、句集「吉備團子」は一つの郷土に芽ぐんだ川柳を一処に蒐めて、一つは作句上の参考に、一つは郷土のつながりによる川柳人の風交の一環にしたいと云う希望らしい。

◇

岡山縣と云へば、度々句会へ出かけてゐるので、縣下の柳人の大半は顔馴染でもあるし、殊に私は隣縣の尾道の産であ

るし、祖父は福山の奥の方の出身なので、句集「吉備團子」が刊行されることは大きなよろこびである。

◇

句集「吉備團子」は現在活躍されている作家の作品集であらうが、鉄羅漢や宝年坊のような物故川柳人の句を附録にされたなら一層意義の深いものになりはしないかと思う。それが出来なければ他日第二輯として上梓されることを期待したい。明治、大正、昭和にかけて多少の消長、起伏はあるとしても随分沢山の柳人が岡山縣から輩出しているし、殊に私にとつては忘れ得ぬ人々が相当多数にあるので、こんな希望も、この機会に述べさせてもらつたのである。

(岡山県川柳人句集「吉備團子」第一集の序、昭24・8・1発行)

* *

私は従来、ムヤミに投句をす、めない方針で来た。作句と云うことは何処までも自発的なもので他人からす、められて

作る程度の作品はしれたものである。止むにやまれぬころから、作句した作品なら、敢えてこちらから投句をすゝめなくてもすゝんで投句されるものである。

従つて作りたいた人は大いに作れ、作れない人は大いに読めと云う態度でのぞんで来たのである。本誌が他のように、読者即投句家でない理由がそこにあるのである。(「編輯室にて」、昭24・9「川柳雑誌」No.268)

* *

句を評する場合に句主が何を言はんとしているかと言うことは一應誰もが考えなければならぬことであります。然し批評もまた創作なりと言う点から考えてみますれば批評家がその句に対して句主の氣持を付度せずに表示されたる表現そのものを自己が感ずるまゝに批評しても、それは差支えないと考えられるのであります。これが添削であります場合は句主の何を言はんとしているかと言うことを外にして添削すると言う手はないの

であります。然し添削でなくて批評の場合には各人各様それは自由に批評する処に、句主も句主以外の人達も得る処があると思われます。

(「坐談 弓削の一夜——路郎氏を囲んで——」、昭25・11「川柳雑誌」No.282)

* *

「川柳雑誌」は傳統として心境を詠むということをいつている。古句のように嫁、

姑の關係を詠んだり、皮肉を詠んだりしなくてもよいといつていたので、「川柳」では女流作家が育つのである。家庭で詠める川柳であるから、会員の奥さんも作るようになるつたのである。

(「岡山縣の女流作家を語る」、昭26・11「川柳雑誌」No.294)

* *

新進作家の作品と所謂古豪の作品と比較して見ると、新進作家の作品には非常にムラがあり、出来、不出来に甚しい差のあることは争えない。それに反して古豪

の作品には総じてムラが尠い。しかも新進作家の作品が古豪の作品を飛び越して高く評價されるのはその作品が高度の感

激によつて生れている場合が多いからである。古豪新進に限らず、作家として何物に對しても感激し得ない状態に陥入ることとおそろしいことである。(「窓口談義」、昭27・3「川柳雑誌」No.298)

* *

はじめて東京へ行く人には東京地圖を持たしてやりたいと思う。イヤ、はじめてでなくても、二度三度行つた人にも地圖や案内記を持たしてやりたい。比較的時間をムダにせず、行きたい處へ行けるし、知りたいことを知ることが出来るし、それこそ東京へ行つた目的が充分果たせると思うからである。

地圖を持たなくても、歩き廻れば、行きたいところへ行けるし、聞きさがせば、知りたいことは判ると云う人もあるうが、それはムダな時間を計算に入れない人の云うことであると思う。これと同じで、川

柳を知るための地圖、川柳を作るための地圖が必要であることを知つてもらいたい。ムヤミに作るばかりでは悪る達者にはなろうが、いゝ作家にはなれない。何十年暮を打つていてもザル暮の域を脱しない人のいるのがいゝ証據だ。

パチンコに百円捨る金があつたら、自分所屬以外のいゝ柳誌が二冊は読める。

川柳家の敵は柳書柳誌を讀まなすぎる
ことだと云えよう。(實行して欲しいこと
の一つ、昭27・6「川柳はこだて」No11)

* * *

私は物を直截に云う癖がある。ソレが時々祟る。一例をあげると、昼時の来訪者に「飯は？」と聞く。「喰べて来た。」「そう。」と云つて重ねて聞かない。ところが世間ではそれではいけないらしい。「喰べて来た？ それでも少しぐらい喰べられないことはないだろう。喰べろ〜。」とムリに食卓に引据えなければエチケツトでないらしいが私にはそれが出来ない。

私にはそれは一つの暴力としか思われな
いのだが、そうしないと満足をしない世
間人のあまりに多いのに常にウンザリさ
せられる。一つの真理を掴むための論議
なら相当ネバル必要もあるうが、飯を食
うたか、食わぬかと云うこと、まだなら喰
べないかと云うことに対して、ムリに何
回もすゝめさせてから喰べる必要が何処
にあらう。飯を喰べたか、喰べていないか
を聞くことはまだなら提供してもいいと
云う一つの好意であつて、決して虚礼で
はないのである。ムリにすゝめる方がよ
つぽど非礼であると私は思う。単に飯だ
けでなく、世間にはこんなことがザラに
ある。

私に斯うした直截の習癖？ があるの
は、少年の頃、親戚へ使にやらされた時、
ぜんざいを喰べさせられたことが原因だと
思う。私はこの時から間食を殆んど
やらないし、殊に甘いものは嫌いだつた。
それが一碗のぜんざいをすゝめられたの
である。私は箸を取らうとしなかつた。と

ころが、遠慮をしているものと思つたの
かムリに喰べろ〜とすゝめられたがイ
ヤなもの喰べられる筈もないので困つ
た挙句、「きらいです」と正直に云つてし
まつた。しかし、先方はその正直を買つて
は呉れず「嫌いなことがあるものか」とし
つこくすゝめる。私はどう云つたら喰べ
ずにするのがわからないのでなさけな
くなり、とう〜涙がポロ〜頬を伝つ
て落ちた。しかし正直は強かつた。私は遂
に喰べなかつた。そしてこの正直は私の
一生を貫いた。「喰べて来たか、そうか」と
云う直截な私の態度はこの正直が生んだ
のであるが、日常の多忙は更に直截に拍
車をかけているようである。

しかし、この直截は、まわりくどいこと
の好きな人達によつてしばしば誤解を招
き、そのこと以外のことにもまで祟ること
がある。正直に暮らすこともなか〜面
倒くさいことである。

正直がなんのたしにもならず死に
と云う私の旧作があるが、何れはそんな

ところへ落ちつくのであろう。

〔直截の崇り〕、昭28・1「川柳雑誌」No38

* * *

云いたいことが云えないのも苦痛だが、云いたいことを、みんな云つてしまつたあとの淋しさは、句に余韻がないのと同じで、まことに味気ないものである。ではどうしたらいいかと云えば、云いたいことをクンと圧縮して句にして遺すことである。その句には勿論余韻余情がなくはならないし、その余韻余情がその句をして永遠性を帯びるものでなければならぬと思う。〔大空に描く言葉〕、昭28・2「川柳雑誌」No39

* * *

リリの描いた「こけし」を床の色紙掛けに入れて見た。一寸観られる。床と云う形式、掛軸と云う形式がこの画の眞價に附加されたため、一寸観られるようになったのだとすればその價値を少しでも高め

た形式と云うものを全然無視することの

非を悟つてい、筈である。しかしこれを

句作の場合に就て考えて見るのに、ムヤ

ミに形式にこだわるとマンネリズムな作

品しか創れないことになつて藝術性が稀

薄になつたり、喪失されたりする。時に形

式を無視した作品に藝術性の躍動が見ら

れるのも周知の事実だ。しかしながら、こ

れは天才にしてはじめてなし得るところ

であつて、多くの作品は何処までも形式

の範囲内で最大の効果を収めるより外に

手はないようだ。私は極端なフオマリズ

ム論者ではないが、卵の殻の形式によつ

て卵の名があることを思われるもので

ある。しかしながらその卵の殻によつて

包まれた内容の良否については別問題で

ある。卵の殻がいかに美しかろうとも、そ

の内容が腐敗しないまでも悪質であれ

ば、卵としての生命がないように、内容そ

のものが貧弱であつてはお話にならない

からである。〔眼の散歩〕の「リリの画を觀て」、昭28・6・No33

* * *

芝居や映画を觀て句を詠む作家がいるが、多くはそれを事件的に取扱うか、感傷的に詠んでいるのに過ぎない。作者はその劇の中に新らしく人生を發見するのになければ、その作品が第三者を動かすに足らない句に終つてしまうことを知らねばならない。〔この雨に〕、昭29・6「川柳雑誌」No35

* * *

郷土の年刊句集「吉備団子」の第六集が編まれ、近く刊行される運びとなつたそうである。そこで第一集から引続き序文を書いて来た私に、又々序文を書けと云うことである。

もう第六集か、早いもんだなアと思う。なんでも永く続くと云うことは結構なことであるとは思ふが、ただ続くと云うことばかりが能ではないとも思う。幾ら綿々と続いていても情力で続けているの

では高い処から観ると大きなムダの堆積に過ぎない。

その点から云うて、この句集に参加された作家たちや、この句集の編纂の衝に当られた人達はこの句集が刊行されると同時に大いに反省して見る必要があるのではないかと思う。

過去一年間の收穫の中から自選した発句が第五集に掲げた句と比較して進歩のあとがあるか、どうか。万一進歩のあとが見られないとしたら、その原因がどこにあるのか、深思検討して見るべきではなからうか。参加をす、められたから出したままでであると云うような甘い考え方だつたら、それこそ大きなムダをしているのに過ぎない。

次に、発表した、それ等の句に、自己のカラーが十二分に發揮されているか、どうか。これは作家にとって最も大きな問題であると思う。それがただ川柳らしい川柳の羅列に過ぎないと知つたなら、これも又大変なムダをしていることになる。

最後に編纂の衝に当られた人達にも一言を呈したい。

本句集編纂について腐心のあまり、本句集本来の趣旨から逸脱してはいないか。これはなか／＼重大な問題であると思う。徒らに量の増大をはかるために、質を低下させてはいないかと云うことにも考えを及ぼさなければならぬと思う。

ムダな記事を掲げてはいないか、これも一考を要することである。斯うした句集の性格から編纂に従う人達は何処までもよりよき句集を世に送るための忠実な世話人であることを三思しなければならぬと思う。

以上の苦言が、妥当であるか、どうかは本句集の草稿を手にしていないので断言することは出来ないが、もう第六集にもなるので、徒らに提灯を持つばかりでなく、斯うした苦言を呈するのも徒爾ではなからうかと思考したまでである。

(自選句集「吉備團子」第六集の序、昭29・10・10発行)

* * *

私は川柳の選を年中やっているの、社会のあらゆるもののABCぐらいは知っていねばならぬので、私の書架は何が専門か判らぬほど雑書がある。産婆学の本から鳥居博士の蒙古に関する本まで読んだ。しかしそのことごとくが役に立つわけではない。すばらしい本はなかなか私の血や肉にならん。私の役に立つのは案外ヤクザな本である。そのために随分ムダな時間を空費したかもしれないが、そうした読書で夜店を漫歩しているようなよろこびを感じている。

私は虫食い本はあまり持っていない。群書類従などは索引だけ持っている。読みたい時には図書館へ行くことにしている。クズみたいな本を大事そうに持っているが、それにほこりがたまるので家内にはやかれるが、一向捨てようとは思わない。本は私のいのちでもあるといえは少し大げさだが、每晚枕元に本を置いて

子守唄のそれにも等しい役目をしてもらっている。「本と私」昭29・10・17(日)「毎日新聞」

* * *

ユーモアの血は川柳人の誰の血管の中にも流れている。川柳人にとつてこの血ぐらい尊いものはないと私は常に思っているのであるが、作家豆秋ぐらいこの血を多量に持つている者は弘く作家を見渡してもそう沢山は居ないようである。それも奔流となつて溢ふれ、ほとばしると云う激越さはないが、一つの流れの中にあつて、あちこちで溜り、淀んでいて、何かにあつつかると、至つて静かに、のんびりとユーモア味を多量に放散してすぐれた社会詩を生んでゆく手際は何人の追隨もゆるさないものがある。しかもそうした血の流れた作品の持つユーモア味は豆秋自身が、世相を観たままのものであつて、面白く詠みこなそうと云う色気などは微塵もないのである。これこそ私たち

が愛好措かないところのものなのである。彼の句に

降りる客いとのおんくつづくなり

と云うのがあるが、豆秋の持つユーモア味は、このデグリーに於て、むしろ最高潮に達したものであろう。古くから柳壇の一茶と云われてはいるが、俳人一茶ほどのあくどさのないのもそれがためである。(須崎豆秋川柳句集「ふるさと」の序、昭29・11・10発行)

* * *

○近ごろの川柳は余りに散文的だ

○内容が平易にすぎた物足らぬ

○モット 技巧に苦心してはどうか

○人生をみつめよ、野介の句に学べ

(大阪市立中央図書館蔵「野介句抄」の見返しへの書き込みから、昭30・7・14発行)

* * *

秋の雲、冬の雲、春の雲、夏の雲それぞれに私のところをとらえてくれる。

私がTOBACCOの煙りの輪をこよなく愛するのはそれ等の郷愁かも知れない。ベッドの中での煙りの輪、原稿机の上での煙りの輪、夜の料亭での煙りの輪、映画館の休憩室での煙りの輪こそ、私に思うぞんぶん仕事をさせてくれる一ト時の煙りなのである。

煙りの輪病む身の我れにまつわれり

(「短詩街 プロミナード」、昭32・11「川柳雑誌」No.366)

* * *

忘れるということはいいことだと思つているが、忘れようとしても忘れ得ないことのあるのも現実の世界である。

若本多久志君が昭和八年に愛児雄作君を喪つた悩みは、その後、忘れようとしても忘れることが出来なかつた。彼はその悩みを川柳に転嫁しようとして、それが本書の出来る素因となつた。

(中略)

亡くなった子を懐う親ごころというも

のは、まことにせつないものである。私も幾たびか愛児を亡くした経験があり、その当時は仕事も手につかなかつたものである。

長男ロンドンを喪つた頃には、学校の横に住んでいたが、校庭で遊び戯れる多くの学童の姿を眺めては、あの中にはうちの子どもより低脳な子どももいるであろうし、中には生れなかつた方が倅せな子どももいるであろうに、それ等の子ども等が亡くならず、特にうちの子が亡くなるのはと、思つても詮ないことを思つて、なげき悲しんだものである。

その時に、

子を死なし学校に子の多いこと

という句を詠んで自らを慰めたものだ、そして、それ等の学童の遊び戯れる声を聞くに耐えられなくなり、とうとう宿替をしてしまつた。

そうした経験も遠い昔になつたが、矢張り忘れられないものと見えて、敗戦後の今でも、戦争があれば赤紙ものだし、不

運なあの子だつたからキツト戦死しているのに違いないなどと老妻と語り合う夜もあるのである。

私は雄作君の在りし日の姿は知らないが、仮に本書刊行の強靱な親ごころを發動させたことを思うと、非常に優秀な子どもだつたに違いない。

本書が子を亡くした人たちの悲嘆を慰めるための力ともなり、親と子の愛のつながりがいかに深いものであるかを知ることが出来るとすれば、まことに有意義な書であると言わねばならない。

〔川柳句集「親ご、ろ子心」若本多久志編の序、昭34・5・5発行〕

* *

六十余年を短詩界に生き抜いて来た私として、その晩年を日本短詩界のために、余命を燃え尽くしたいと考えて、短詩文学文庫の創設を思い立つたのである。これ又第二誇大妄想狂として歯牙にもかけない人もいるらしいが、右顧左眄して、巧

みに世渡りをすることは私の柄でないで、そんな連中はこちらで歯牙にかけない。ある程度出来上つたら、そんな連中こそ真ツ先に文庫を利用して少しは妄を啓らくよすがにして欲しいと思つている。

私が、三月号で「眠っている本を」の一文を公表したところ、新津市の柳誌「柳都」をはじめ、あちこちの柳誌で有意な企画として賛意を表してくれたことは感謝の外はない。

この文庫は一大阪市民のものでなく、オール日本の人たちの洗脳に役立たせるためのものであることは、大原孫三郎氏の創つた倉敷美術館が一倉敷市民のためのものでないのと同様である。

〔窓口談義 再び「短詩文学文庫」のこと、昭37・6「川柳雑誌」No.42〕

* *

句の発表の手段として、新聞、雑誌、放送、柳誌が主たるものであるが、それ等はいずれも歳月とともに散逸してしまう可

能性が大きい。殊に放送はすぐと忘れられるおそれがある。その点から箇人句集として句を遺すことは、今のところ最良の方法だと云えよう。

従来箇人句集は作家の還暦とか、古稀とかの箇人的慶事や、故人を追憶する意味で刊行されたもの、又は何等かの記念に上梓されたものが多かった。しかし、箇人句集は自己の作品の足あとを回顧反省するためのもの、つまり自己の句の成長振りを知り未来への飛躍を約束するものであつてこそ、最大の意義があるのではないかと思う。従来もその意味で上梓されたものが皆無だとは云えないが、たいの箇人句集は右に述べたように、自己の作品の終止符的刊行に終わったものが多い。

今回、橘高薫風子君が、句集を出したいからと云う話を持ち込んで来た。この句集は右に述べた記念的出版ではなく、自己の作品の一段階としての発表だと云うのであるから、大いに賛意を表し、出来る

だけ出版に関する援助を惜しまなかった訳である。(橘高薫風子川柳句集『有情』の序、昭37・9・23発行)

* *

浜田久米雄君は岡山県の産だが三十年という永い歳月を国鉄一路で頑張り続けているし、趣味も又柳歴三十年を数え少しも倦むことを知らない。そして川柳不朽洞会員の古参株の一人だ。

とうとう、個人句集を遺すところまで漕ぎつけた。題して「凡人」。しかし、ただの凡人でないことは、この句集の特異な発表振りを一見すれば、すぐにもうなずきうるであらう。句は数千句の中から僅に百句を選び出したものであるが、その一句一句に、作者としての感興を喚んだ作句当時の詩情を簡単に、平易に、記していることである。そこに作者自身の環境や性格が余ますところなく描出されていて、私たちの胸底に、ひしひしと春の日射しのように穏やかに迫り、知らず知

らず作者の句境にとけこまされるからである。

ここまで来ればたとえ作者が凡人であろうとも、俗人でないことだけは確かだ。非凡人というのは、そうザラにあるものではない。作者が凡人であることを自ら悟るところに幸福な人生のあることを思えば、君のために祝福せざるを得ない。(浜田久米雄句集『凡人』の序、昭38・11・3発行)

* *

視野無限

この言葉に尽く

昭和四十年初夏のころ

不朽洞の病室にて

(橘高薫風子川柳句集『檸檬』の序、昭40・7・

11発行)

麻生路郎物語



仲むつまじい路郎と葭乃

麻生路郎物語

(1)

東野大八

1 「麻生路郎物語」は、「川柳塔」昭和50年1月号(572号)と昭和52年7月号(602号)に掲載された。また、平成14年1月号(896号)と平成16年7月号(926号)にも再掲載された。

2 最初の掲載時には、第1回・第24回を除いて各回に写真が掲載されたが、今回も掲載した。最初の掲載時、第5回は路郎が、第10回は野口雨情がそれぞれの写真から省かれていたが、今回は補った。第13回の「当時の川柳雑誌」の写真は、「川柳雑誌」創刊号に改めた。また、写真の説明を改めたものもある。なお、今回は第1回・第24回にも新たに写真を加えた。

3 筆者の本文(地の文)は、原則として現代仮名遣い・新字体に統一し、明らかに年代・事実の誤りや誤植については訂正した。引用句・引用文は、可能な限り原典に当たり、原典の用字・仮名遣いに直した。なお、引用文については、その内容がより分かるように、掲載時のものより長く引用したものもある。「麻生路郎先生傳記資料 福田山雨樓記」「麻生葭乃書簡」は現存しないので、用字・仮名遣いは、原則として掲載時のままにした。

4 註は、それぞれの回の末尾に付した。

(編者)

まえがき

八十余歳の宝寿を生駒市の寓居に自適されている麻生路郎先生夫人葭乃さんを、一度お訪ねしたいものだと思願してから久しい歳月がたつ。それが思わぬ機会からかなえられ、*1秋も十月の最中そのデートは成功した。

日時を双方定めあつての十年近い再会であったが、玄関先の出会いはいとも気軽なご近所なみの挨拶ですんだ。このことは月毎の川柳塔誌上のおなじみに加え、日ごろの文通繁き余徳に由来しよう。葭乃さんから私あての書信は、すべて四百字詰原稿用紙で、現在までに左様いうに二百枚は超えていよう。その文体は

情思こまやかで簡潔明快、筆勢流麗、適度の風刺やユーモアもまじえられている。

批文のたびにこれが八十余歳の老女の手になるものかと感銘しきりで、もしわれ彼女の適齢におよんだとき、これ程の達意の文筆が保てるであろうかの危惧の念を抱かしめられたことである。

ともあれ、葎乃さんが寄寓先のご当主、令息の麻生アトさん御夫妻へのご挨拶のあと階上の彼女のお部屋へと招じられた。部屋中央にひときわ眼にたつのは、路郎先生の赤銅色の大きな胸像である。そして部屋一方には

—その日暮しも軒に雀がこぼるゝよ

路郎

の見事な大幅が眼を奪う。

「私はもはや路郎に殉死した身体——」とある葎乃さんの書信の一節が忽ち胸に甦るたはずまいである。これらの遺品を見上げる部屋中央のこじんまりした長火鉢の座につくと、その中の南部鉄瓶が温かく湯気をはらんでいる。見回すと、あたりの壁や小さな書庫のあたりには、画家、

俳人、芸能人、川柳人の大モノ、小モノの額や色紙や短冊が風雅なムードをかきかきしている。

板敷一枚を加えて横長七畳、面白い部屋でしょう——と微笑しながらお茶をいれて下さる葎乃さんと、やがて雑談しきりの一ときだが、総じて路郎先生生前のお話ばかり。その茶話も一きりのあと

「路郎に関する門外不出の、とっておきの好資料があります。お見せしましょうか」

と葎乃さんがおっしゃる。願ってもないことと大きくうなづく私の前に、やがて古色蒼然たる古文書の一冊がとり出されてきた。黄色な故紙に変じた、それはコクヨ罫紙が背クロス表装でとじ込みになった部厚いもの、表に「麻生路郎先生傳記資料 福田山雨樓記」とある。

書かでものことながら山雨樓といえ、柳界熟知の川柳評論家で、路郎門下の高足、晩年は川柳雜誌副主幹となり、その活躍が期待されていたが、昭和三十年六月十六日惜しくも宿痾昂じて死去され

た。本名福田義達氏、享年五十七。私の手にしたその古文書の一冊こそその山雨樓先生の貴重な遺品の中の一品に相違ない。襟正す想いの卒然たる私へ葎乃さんが

「御覧になるなら御貸し申し上げてもよろしいのよ、川雑に因縁浅からぬ、ほかならぬ貴方の事ですから……」と仰有る。実のところ、私は二の句がつけず呆然となった。歎喜偷躍ちゆうとくとは正にこの事だ。

午前十時過ぎから午後二時まで、アト御夫妻の心のこもる昼食の膳に、葎乃さんとおふたりで箸をとる光栄に浴して、私の長つちり訪問もやがて時間とはなったが、訪問の収穫たるやまことに絶大である。山雨樓先生遺品の資料に加え、葎乃さんがとっておきのこれ一冊という麻生葎乃句集「福壽草」まで強引に拝借しておいとました私だから——。

ここまでくれば「麻生路郎伝」を——帰りの車中でかく決意した私は、早速に帰宅すると同時に、この旨を葎乃夫人に伝えた。折返しのご返事はつぎの通り。

「実録麻生路郎伝のような伝記風にすればよほど年月日も正確に調べてかからねばなりませんから、その辺はあまり肩の凝らないタイトルがよいと思います。もの忘れのよい私に、しかも時間の観念のない私に、あれこれについていつごろのことかと訊かれても困るのです。(中略)まあ、貴方のいわれる『路郎物語』をあなた様のご企画通りにお書きになって結構です。大変御世話になります。よろしくお願いいたします」

まさに身にあまり過分なお言葉と、そのお便りが心にしみた私である。

右手に貴重な葎乃書簡、左手に山雨楼メモ、補足は山なす川雑のナンバー、加えて手持ち資料に路郎先生門下の諸賢雲の如し、意を安んじて筆がとれる。かくて大胆不敵にもこの「麻生路郎物語」をスタートさせることにした。

葎乃夫人もご指摘の通り、私はこの路郎先生伝は、卒直にいつて実伝というより一篇の物語と名付くドラマに仕上げたいのである。すなわち「川柳」なる特殊な

ジャンルの文芸にその生涯を燃焼しつくした一川柳人の人生——いいかえればその川柳なるものに悔いなく殉じていったある夫妻の物語——といってもよい。随ってこのストーリーの主人公は路郎その人だけではない。ある場合には葎乃夫人その人の物語でもあるともいえる。むしろ私にとつては、ある川柳人の妻に捧ぐ……とすらサブタイトルにつけ加えたい想いでいる。

なお、本稿は進行の構成上、すべて文中敬称を省かせて貰うことにした。御諒承願いたい。(昭40・10・25)

尾道の風

麻生路郎は明治二十一年(一八八八)七月十日、尾道市十四日町に生まれた。路郎は柳号で、幸二郎が戸籍名である。父善七三十四歳、母くに三十一歳の折の出生である。

十四日町(地元の呼称はジユウシンニチチヨウ)は、尾道市西部の本町筋に続い

ていて近くに尾道郵便局(本局)があった。幸二郎が産声をあげたとき生家は陶器商を営んでいた。この稼業は祖父久助の代からのもので、父善七は通称久七で親しまれていた。

出生した幸二郎だが、*2どうしたわけか生後程なく尾道市の対岸にある向島の漁村に里子に出された。母くにはその翌年に他界している。数え歳十一歳まで父母の愛も知らぬまま彼には里子の生活が続いた。「写真でみると、母は明治初期型の面長の美人だが、麻生家の嫁にきてから晩年は病身で、海岸通りの寺で養生する生活であった由だが、この母の兄は三条小鍛冶なんかという刀鍛冶だったときく」(山雨楼メモ)

里子に出された相手方の育ての親の名も、部落の名も、山雨楼メモには記載なく、関係者の間でも全く記憶されていない。小宮豊隆著の『夏目漱石』の出生のくだりにつきぎの要旨のことが記されている。

「漱石がなぜ里子に出されたか、それはよくは分からない。然し漱石の母が「こん

な年齒としをして懷妊するのは面目ない』と言つたといふ以上、漱石の出生が、両親から歓迎されてゐなかつたことだけは、確實である。既に言つたやうに、漱石には腹違ひの姉が二人あつた。同じ腹からでも、四人の兄と一人の姉とが生れてゐる。そのうち二人は、漱石の生れる前に亡くなつたとは言つても、劇しい渦を巻いて、あつたつきりした一つの方向へ向つて、刻々に動きつつある、當時の社會情勢の中で、一人でも荷厄介が殖えるといふことは、少くとも父親にとつては、大變な重荷に感じられたものに相違ない」

漱石自身、作品の『硝子戸の中』でつきのように書いている。

「私の両親は私が生れ落ちると間もなく、私を里に遣つてしまつた。其里といふのは、無論私の記憶に残つてゐる筈がないけれども、成人の後聞いて見ると、何でも古道具の賣買を渡世にしてゐた貧しい夫婦ものであつたらしい。／＼私は其道具屋の我樂多と一所に、小さい笹の中に入られて、毎晩四谷の大通りの夜店に曝

されてゐたのである。それを或晩私の姉あねが何かの序に其處を通り掛つた時見付けて、可哀想とでも思つたのだらう、懷へ入れて宅うちへ連れて來たが、私は其夜どうしても寝付かずに、とう／＼一晚中泣き續けに泣いたとかいふので、姉は大いに父から叱られたさうである」

漱石の出生は慶応三年（一八六七）で、彼が二十一歳のとき、路郎が生まれてゐる。この間二十年だが、時代環境と親、とくに父親意識には、往時漱石の父のような家庭感覚が多かつたらしい。明治初年生まれうまれの筆者の父親も、かつてそのような処生談義を試みていたのを記憶してゐる。

夜店の寒いザルの底で眠つていた漱石に対し、路郎はどうか。

「七歳のとき学校へ上る年齢からか、生家なまがに引き取られることになつた。だが、家へ帰るのははいやだと駄々をこねるので、兄が背に負ぶつて海岸通りを慰めながら、長いこと説得していたが頑として承知せず、ついに家の方ではあきらめて島

へ返えした。私はその島の小学校へ上り四年生になるまで通うことになつた」(山兩樓メモ)

薄情な生みの親に対する里子のどこか本能的なレジスタンスみたいなものが、漱石にも路郎にも感得される。荷厄介な幼児を里子に出した親側の身勝手さも、ともにこの両者の話の底に漂つてゐるのも心にくる。

駄々をこねる強情な弟を背負つた兄の名は福太郎、路郎にはこの兄と、二人の姉がいた。上の姉は神戸へ嫁し、下の姉は大阪の嫁ぎ先で年若くして死亡している。(名は不詳)

「私が二十四歳のころ、岸本水府君と二人で神戸の姉のところへ立ち寄つたとき、若い二人を前にして姉から、若いのに川柳をやつたりしてはいけない、そんなことは老人になつてからやれときつく叱られた。然し私は老人になつてはホントの恋はできない。僕が川柳をやるのもそれと一緒だ、と言つてきかなかつた」(山兩樓メモ)

壮年期の路郎が、ひところ漱石に熱中して、句会にまで漱石の著作のものを携え読みふけたと、山雨楼メモにも記されているが、漱石の生い立ちや、その家族関係などが、ひどくわが身に似通つての上の、それは親近感からもきている、そのようにうけとれぬこともない。

この辺で路郎が出生し、里子の一時期を過ごした尾道という町についてふれておこう。なぜなら路郎の父母が住んだ、いわば彼の故郷の土と海でもあるからだ。

尾道市は海と山との接点に東西へ細長く伸びた町である。すぐ前に向島という大きな島があるため天然の良港を形づくりに平安時代から瀬戸の良港として栄えた。

建武三年(一二三三)足利尊氏が九州征伐の際、ここに立ち寄り浄土寺観音に戦勝を祈願した。この際、尊氏の募兵に応じた多くの尾道の漁師たちが船出に随った。そして死者も出た。この因縁からかこの町には寺が多い。

江戸期に入ると北前船がこの港に出入

りするようになり、北日本の物資をどんどん陸上げた。このため尾道は時の豪商で埋つた。思えばこの頃が尾道港の最盛期であつた。

明治四年の廢藩置県後、近代港湾の面目を発揮する広島周辺に船は片より、尾道港は次第にさびれ、小振りの商港化し漁船の舟だまりとなり、向島に日立造船が根を下ろしたことにより港内ムードは一変していった。

ところで尾道という町だが、奇妙に政財界文化関係の名のある出身者が皆無である。路郎が生前よく口にした法曹界の名物男花井卓蔵にしてからが尾道出身ではなく実は三原市である。とにかくどの人国記をみても尾道市はアルカリ地帯で、強いて探せば頼山陽の愛人玉蘊ぐらゐのものだ。

観光尾道の金看板千光寺の山頂から、少し下つたところに、文学のこみちといふのができている。ここには尾道の地に関係のある作品をものした作家たちの文学碑や歌碑がずらりとだらだら坂の道ぞ

いに建つている。数えてみるとなんと二十前後もある。

尾道に旧宅を遺した「暗夜行路」の志賀直哉の碑文より、筆者は林扶美子の「放浪記」の自然石の文字の方が好きだ。「海が見えた 海が見える」にはじまる碑の文字は、彼女の短篇「風琴と魚の町」を筆者は憶い起す。魚油のしみついて汚れて光る尾道の石畳にオイチニの薬の手風琴が流れていく。その筋骨のついた古びた軍服姿の父のあとから、みすばらしい親娘が風に吹かれてついていく。

「オイチニの新馬鹿大将の娘じゃ」

と蔑まれる美美子のこの作品のあとに「市立女学校」がつづく。漂泊の養父母と



林美美子の詩碑

(尾道市立東高等学校)

暫くここに止まつて卒業した尾道高女
(現東高校)には、つぎの彼女の詩碑が建
つている。

「巷に來れば憩ひあり 人間みな吾を
慰さめて 煩惱滅除を歌ふなり」

筆者はこの詩碑のさびた面を憶うたが
に川柳詩人路郎の幼き日の姿を想い浮か
べる。くろずんだ夕焼雲の弓型の渚に、ぼ
つんとふところ手でひとりたたずむ男の
子——独りよがりで片意地で、ひたむき
な直情さである癖に、どこか人の世に泣
き虫で——後年の路郎の性格を織りなす
生成の片鱗は、尾道の里子の暮らしを吹
き抜けていった潮風にもあつたことはま
ざれもない。

「寺や鯛で名高い故郷の土を、もう二十
幾年も踏まない私である」(わたしの生れた
處、昭9・1「きやり」)

そう述べ懐したのは昭和九年、路郎四十七
歳のときである。

*1 昭和49年の10月だと考えられる。

*2 母くのに体調の悪さから里子に出
された。

麻生路郎物語 (2)

——十七歳の出会い——

尾道から単身上阪して、船場に働き口
をみつけた麻生善七は、二年間の大阪の
暮らしにも自信がついたとみえ、郷里か
ら家族を大阪へ呼び寄せた。里子の路郎
もこうなつてはいつまでも駄々をこねて
いるわけにはいかず、島での里子の生活
も十一歳の齡を迎えて終止符を打った。
そして船場尋常小学校四年に編入され
た。時に明治三十一年春である。

さて、麻生一家が根を下ろした大阪船



路郎のこの
写真の時の3月25日、
路郎先生17歳の時、
このころから川柳をはじめる。

場だが、ここは商都大阪のどまん中、世に
いう浪速商人の大小問屋の密集地帯で、
老舗の名門ものれんを競うところだ。か
つてテレビの評判ドラマの「せんば」は、
この船場という特異な土地柄を舞台とし
たもので、いわば大阪商人の土根性ぶり
のモーレッツぶりが見せ場の一つでもあつ
た。

江戸中期における上方商人勃興のこ
ろ、大阪商人が如何に骨身を削つて身代
蓄積に精励したか、チリも積もれば山と
なる式の細々とした暮らしに徹しつつ、
いかに商機を捉えることに異常な努力を
傾けたか、儲けがケチの凄じいばかりの
「のれん」を背にするその土根性ぶりにつ
いては、井原西鶴の町人文学の、町人もの
三部作(『日本永代蔵』『世間胸算用』『西
鶴織留』)に詳しい。船場とは、正しくそ
うした大阪商人が土根性のメッカそのも
のといつてもよい。

麻生善七が四十も半ばといういい齡
で、選りに選つて大阪といっても並外れ
たこんな船場へ、はるばる尾道くんだり

から出てきて、どういふ伝手でここに住みつき、一家を呼びよせる暮らし向きになったものか。詳細は不明である。山雨楼メモにつきのくだりがある。

「尾道は花井卓蔵、山口玄道さんらを生んだところ。衆議院議員橋本左吉氏は亡き父の甚友達であった。玄道さんも父の知人であった」

この記述からすれば、善七の大阪での就職は、メモに出てくる尾道の知名士の関連する会社か、それともその伝手による縁故就職のようにも思われる。

「会社員であった父は、明治四十二年九月二十日私が二十二歳のとき、脳溢血で五十五年の生涯を終った。私には厳格な方だったが遊びは相当にやっていた。この父の挿話は、他の機会に譲ります」(山雨楼メモ)

路郎の父はサラリーマンであったことだけはこれでわかる。だが一体どのような勤め先の会社なのか、一切ふれられてはいない。他日機会をみて語るといふ亡き父に関しての話も同様で、山雨楼メモ

にはこのあと一行の記述もない。

明治三十七年、十七歳になった路郎は、この春、出入橋にあった高等商業予科(商大の前身)に入学する。この学生生活の中で、路郎は運命的ともいふ、川柳との出会いがはじまったのである。

「明治三十七八年、自分が高商の予科に入学した時、クラスで新聞や雑誌を取った。その中に読売新聞があった、当時読売新聞では、田能村朴念仁、後に朴山人が柳壇の選をして居られた。そして読んで見て非常に興味を感じて作句しはじめたのが川柳を作り出した動機と言えは言える。その時分には今の窪田而笑子も投句家の一人であった。

読売新聞に載ったのが始めてでしょう。切抜帳とか控とかいうものを持って居ないので年月日と其時の句はどんな句であったか記憶しません。その頃から幾度も改号をしたので勿論路郎では載っていません。そのときの柳号は路郎ではのっていない。路郎という号を使用するようになったのは明治四十三年頃からです」(大

正八年発行の柳誌「絵日傘」五月号所載のアンケート)
ト)

この辺で路郎が宿命的ともいえる川柳との出会いをみせた、往時の新聞柳壇について述べておこう。路郎のこころの底から川柳なるものを触発させた重要な役割を果たした新聞柳壇でもあるからだ。

川柳が新聞に柳壇の形をとって掲載されるようになったのは、明治二十七年の日清戦争のころ、篠原春雨が時事的なものを十七字によって発表したのがそもそものはじまりとされている。それ以前は、明治十年代に出た滑稽雑誌の柳欄が先行した形であった。川柳欄の雑誌の第一号は団々珍聞(まるまるちんぶん)である。創刊は西南の役が起きた明治十年の三月、東京神田稚子町団々社の発行である。念のため申し添えておくが、日本の新聞のハシリは文久二年に出た通称バタバヤ新聞がそれである。シナ式の和綴本で美濃紙二つ折。いわば江戸化政期の瓦版の特集号の体裁とみてよい。発行も明治の

初年は三日に一回が圧倒的に多い。当時の新聞名は「中外新聞」「崎陽雜報」が一流どころで木版活字使用、あとの新聞の題号は「此花新聞」「海陸新聞」などはややまともな方で「浮世風聞」「もしお草」「そよ吹く風」といった人を小馬鹿にしたようなものが氾濫している。明治五年に「東京日日」「報知」の二大新聞が出現して、はじめて今日の活字マスコミが軌道に乗った形だ。

読売新聞の名が出たのでついでにこの新聞の題字の由来を書いておこう。創刊は明治六年十二月、日就社といつて英和辞典の発行元だったが、副業に当世流行の新聞事業に眼をつけた。諸般の準備整ったがかんじんの紙名が決まらず社員間で大いにモメた。まず俗談平話を旨とする故「通俗新聞」と出て、いやふりがな付だから「ふりがな新聞」「かな新聞」「やわらぎ新聞」「をみな新聞」などとてんやわんや。思いあまつて漢学者に相談したら「京華流影」と命名してくれた。こんどは英文学者にきくと「東西南北」まるで麻雀

屋である。新聞紙は全国の早便なれば「あきつすのはゆまぶみ」(秋津州の駅)という舌を噛みそうな題名にどうやら落ちつきかけたところ、その席上で瓦版というのに気付いたのがいて「よみうり」と出た。今日の天下の「読売新聞」の発刊時における以上が正真正銘の実話である。(昭和十年刊「日本勃興秘史」一元社版)

閑話休題。団々珍聞もまた往時の日刊新聞変じて雑誌形態となつたしろものの一つであった。川柳はその第二十六号から姿を現わした。その歴史的第一句は

—朝敵も昨日は東、今日は西

この雑誌は十六年間も持ちこたえたが、感心なことに毎号川柳数句は欠かさなかつたものの、遺憾ながら徹底した狂句であつた。この雑誌の川柳に眼をつけたのか、団々珍聞から少しおくれで、明治十年八月発刊した「驥尾団子」も川柳を掲載し続けた。

—穴なくば何んのおのれが二等親

これが創刊第一号の句

これにつづいて翌、明治十一年十一月

に創刊された「月とスッポンチ」も川柳を忘れなかつた。創刊号のサンプルの一句

—風呂の尻で究理をしたか水雷火

以上三誌の川柳の点者は、風也坊雪舎—すなわちのちの七世川柳である。正しくいえば七世風也坊川柳 山県氏広島久七 初号雪舎。明治十六年社中推薦により七世を継ぎ、同十九年隠退柳翁と改め、同二十四年九月六十七歳で死去。

まだある。あけて明治十二年一月「我楽多珍報」が創刊された。発行元は京都日日新聞社。さきの三社はなべて江戸は東京なのに対し、関西から似たようなのが出たわけだが、点者にこと欠き、そのためかわざと川柳を意地悪くひねってその柳欄のタイトルは「洗流」

—こりや猫だ鯨かしくの針で釣れ

—創刊号のへき頭の一句がこれである。

川柳とは名のみ、骨の髄まで悪フザケの狂句に爛れ切つた活字マスコミの横行ぶりに、やがてマナジリ決して登場してくるのが井上剣花坊と*阪井久良岐の兩人である。

本山桂川編の『川柳久良伎全集』に拠るとそもそも久良岐が川柳との馴れ染めは「平田篤胤の講本によつて、川柳の興味あることを知り、明治十六年ごろ団々珍聞の狂句に応募した」

とある。久良岐は明治二年生まれだから十四歳で川柳に手を染めたことになる。時の点者は前述の通り七世風也坊川柳である。久良岐の川柳入門はこうみると狂句というわけだ。

この久良岐が剣花坊とともに「狂句百年の負債を返えす」べく狂句追放運動に起ち上がるのだが、久良岐が新川柳運動への活眼を開いたのは、正岡子規の感化によることは今井卯木著の『川柳江戸砂子』の序文の中にあきらかだ。子規と久良岐は共立英語学校の同期生であつたが、在学中は没交渉のままであつた。ところが世に出て子規の俳論にふれたのが久良岐二十七歳（明治二十八年）の時であつた。久良岐の新川柳確立のための柳論『川柳梗概』を生む素地はここに生まれた。もつともこの久良岐にしても剣花坊に

しても、渤海として高まる往時の俳句、短歌のめざましい革新運動に刺戟されてのことだが、剣花坊は狂句を純正川柳の場に戻し、川柳詩をそこに加味する近代的川柳の確立を図るべくまず王道川柳を唱えた。これに対し久良岐は、初代川柳の柳魂に還るべしと主張したのである。ともに狂句追放への意図に他ならぬが、この両者のライバル意識がやがて、明治三十年代における新聞柳壇時代となつて花開くのである。

剣花坊の日本新聞における「新題柳樽」は明治三十六年七月三日の創設となり、一方久良岐は電報新聞に「新柳樽」の柳壇を開始したのが明治三十七年四月二十九日付からである。このほか岡田三面子が東京日日に市村駄六がやまと新聞に、田能村朴念仁（のち朴山人）が読売にと時を同じくしてそれぞれの柳壇をもつて活躍した。

「岐氏は江戸趣味を唱導し古川柳の穿ち軽味可笑味の三要素を更に明治の新時代に寛めんとし、剣氏は一般文学に駆け

たる滑稽が川柳の主要なる素と主張す。斯る時しも朴念仁（後朴山人と改む）氏は讀賣紙上に俳句趣味より出でたる寫生を生命とする一風を唱え、爰に三氏鼎立の狀を呈するに到つた」（明治川柳の傾向及將來）六極庵（中島紫痴郎の別号）、明44・1「矢車」No.22

往時の新聞柳壇はこのようにして久良岐派、柳樽寺派（剣花坊）、読売派（田能村朴念仁）の三流てい立を主軸としていた。明治三十八年八月紙上のこれらの柳壇選者の作風はつぎの通りである。

—殿様頬かぶり奥様編笠海水浴 剣花坊
—賞與金書入れにして質を置き 久良岐
—萩の徑またぼんぼりが一つ見え 朴念仁

—御長命會申し候閻魔判 駄六

明治三十年代の世相は、政治、軍事、思想、社会各方面にわたり騒然たる事件が相ついでいる。憲政・政友両党の結成。日露戦争の勃発。足尾鉍毒事件で軍隊出動。ロシア第一革命起る。片山潜・幸徳秋水社会民主党結成。ポーツマス講和を不

満として東京全警察焼打ち事件。孫文東
京で中国革命同盟結成。平民社解散。南満
州鉄道株式会社設立ETC。

一方、詩壇では藤村が『若菜集』を発表
したのにつづき、雑誌「明星」(明33)が
創刊され、星とすみれの新抒情時代の幕
は切つて落とされた。若き天下の俊秀、与
謝野鉄幹の新詩社にむらがるなかで、き
らめくその星座に一しお輝く明星こそ鳳
晶子(与謝野晶子)である。それに相拮抗
するかのよう、石川啄木が二十歳にし
て『あこがれ』(明38)を公刊して世を愕
かせた。新浪漫派のけんらんたる銀河を
想わせるこの新短歌時代に対し、俳壇で
は巨匠正岡子規が死去(明35)したが、そ
れと同時に虚子・碧梧桐の二大勢力が俳
壇を左右した。明治三十六、七年に「温泉
百句」を通し両者の一大論争が展開され
たあと、碧は世にいう全国行脚三千里の
旅のわらじをはくのである。時に明治三
十九年。

読売柳壇にはじめて川柳を見出し、そ
の魅惑にかりたてられた路郎十七歳の多

感な青春を押しつつ明治三十年代――
それは路郎の十代のすべてでもあった。

つりがねマントに朴歯の下駄を鳴らし
たその十七歳の学生路郎の上に日露戦争
の妖雲がおしひろがった。その硝煙の彼
方からきこえるのは、人間愛の叫びを三
十一文字の短詩型のロマンにこめた与謝
野晶子の「君死に給ふことなかれ」の絶唱
であった。

* 『川柳総合大事典「人物編」(雄山閣)
によれば、昭和4年に久良岐を久良伎に
改めた。

麻生路郎物語 (3)
――川柳開眼は六厘坊――

「路郎は御存知の通り、素浪人肌の人間
で特に師弟の関係を結んだ方はありませ
ん。ただ十四、五歳の頃から川柳、川柳と
云うて暮らしていたことは事実でありま
す。自からを「天才六厘坊」と称していた

若き六厘坊から文学的な刺戟を受けてい
たようです」(霞乃書簡)

小島六厘坊との運命的な出会いは、大
阪高商予科の金ボタンの制服をつけてい
た路郎十七歳(明37)のころである。*1
柳号は天涯。大阪日報柳壇浪花樽の投句
が機縁である。

この時点で、往時の川柳界はどのよう
な環境なのか説明しておく必要がありそ
うだ。

まず本格の古川柳畑の生成だが、初
代柄井八右衛門が寛政二年(二七九〇)に



左は井上剣花坊・右が麻生路郎両先生
(大正14年9月16日※・六甲苦楽園にて)

七十三歳で他界したあと、二世無名庵川柳(初代の長子)が父の没後十三年目(文化元年)に二世を襲名した。折柄江戸は化政期の庶民デカダンス時代の世相を反映して、誹風柳樽も狂句色を帯びざるを得なかつた。二世が立机十五年で他界すると、三世(初代の五男)柄井宗達が襲名したものの七年で隠退。後世柳界で悪名高き狂句川柳の本格的宗匠人見周助が登場し文政七年(一八一四)四世川柳を襲名、

点者生活の暮し向きもあつて柳多留も狂句オンリーで塗り潰した。八丁堀の町同心の出で十三年後隠退、柳翁と称し六十七で死去。

五世は佃島の魚屋出身の水谷金蔵。四世のバトンタッチを受け二十二年間、狂句一辺倒で初代川柳が世に残した川柳の詩たる価値を完全に喪失せしめた。安政五年(一八五八)没、享年七十二。六世は金蔵の長子謹。初号ごまめ。父の死後直ちに和風亭川柳水谷金蔵名を踏襲。明治十五年没、享年六十九。

七世は風也坊川柳広島久七が明治十六

年中推薦で立机、三年後隠退して柳翁と改め、五年後六十七歳で死去。八世は任風舎川柳児玉環、初号柳袋、明治十九年一府三県の投票で八世襲名。このころから狂句界も宗匠公選制に切りかえたらしい。六年後七十二で没。

九世は万治楼義母子こと前島和橋、どうした魂胆かこの人物柳祖の無明庵川柳、緑亭または柄井川柳と潜称している。句柄は物堅くどうも神職くさい。明治二十六年全国社中投票で立机、同三十七年七十歳で没。

十世は正面切つて狂句堂川柳、平井省三。明治四十年十月立机したが、二年後社中の勧告を容れ隠退。しかし十一世が大正二年病氣引退のため、十世名義で最引墨。昭和三年八十歳で没。九世以降、この伝統川柳の正統派も、時のうつりかわりとともに台頭する新川柳派の勢力にかなり動揺のいろは隠せないようだ。(十二世以降は本稿と関係なく省略)

いずれにせよ、狂句百年の負債のツケを貰う形になったのがこの十世狂句堂平

井省三であつたことになる。

剣花坊が百年のツケの筆下ろしは、初代柄井川柳が持つ、柳多留の初心に還すことであつた。もつとも川柳詩探究の柳多留研究といつても、明治三十年代はもはやこの江戸川柳の古典の風格は、狂句の海に埋没し去つて柳多留といつても世間の人達にとつては皆目その正体が知れなかつた。

しかし、柳多留の持ち味に関心を持つ、ほんの一部の有識者や好事家が小冊子の類でかなりの種類のものを出しているが、所詮この試みは趣味的嗜好の域を出なかつた。ところが明治三十三年三月梅本柳花が『川柳難句評釈』で専門的柳樽研究の正統的くさびを打ち込んだ。これに続いて二年後に鶯亭金升が数篇の評釈を手がけてのち、柳史上価値ある一石と認められた阪井久良岐の『川柳梗概』が世に出た。時に明治三十六年九月二十二日のことである。この中で久良岐は「文學の何ものたるかを解し得る青年に、其研究を望むのである、(中略)よく寶曆明和安永

天明の昔に復活せしめ、更に一步を進めて明治の新狂句を作り出すに務めたいのである」と呼びかけたのである。

こうして明治三十八年、久良岐はそれまでの新聞柳壇にあきたらずこの年五月に「五月鯉」と「下毛江」の二つの柳誌を出し、剣花坊もまたこの年十一月「川柳」を刊行した。このなかで小島六厘坊もまた久良岐と機を同じくしてこの年五月に「新編柳樽」を出している。世にいう明治柳誌時代第一期の開幕である。

久良岐も剣花坊も初代川柳の直系が、年を経るにつれラチもない狂句一辺倒にもの狂いする姿を、まずは初代柄井川柳の手がけた古川柳の原点に還ることを力説したのである。だが、この両者の主張は同根異質であった。久良岐が川柳の三要素に立脚した江戸趣味を提唱するのに対し、剣花坊は文学に欠けている滑稽を新川柳のモチーフにすべきことを主張する。六厘坊は明らかに後者の剣花坊の側に立ち、文芸的川柳の確立をめざした形でこのことはやがて後に路郎に継承さ

れ、反久良岐、親剣花坊的傾向を帯びることになる。

六厘坊は明治三十八年五月「新編柳樽」を発刊し三号まで出したあと、翌年六月「葉柳」と改号している。この新柳誌は彼の後進者向けの小誌「柳道」を包括したもので、その第一号は第二巻とつけている。発行所名は大阪西柳樽寺社としている。剣花坊の柳樽寺社に対し「西」と付名した点が注目される。

路郎が六厘坊との出会いは大阪日報の浪花樽の常連投句者の立場にはじまり、六厘坊の「新編柳樽」に参加している。路郎の柳誌初登場がこの柳誌というわけである。年齢もともに十八歳前後、このことも両者のくさびを深くしていたようだ。

「新編柳樽」当時は、単に柳樽の句を新感覚で凌ぐという単純な目標であったため、作句も気楽であったが、葉柳になり号を重ねるにつれ、六厘坊はその作風になん傾向を深めはじめ、悩みも進行していったが路郎も同じ苦しみを感じはじめるようになった」（山雨桜メモ）

（「六厘坊は」何しろ言ふ事が實にテキパキして一步も譲らず、相手がギヤフンと言ふまで論戦してへこたれない實に徹底した剛腹な男でした。麻生君にもその傾向はあるやうに思ひます）（六厘坊の思ひ出）木村半文錢談、昭8・6「川柳雜誌」No.23

「先生と激論した事が一度あります。社中の或る同人の進退問題に就てでありました、一本氣な僕は所信のありたけを真向から打ちまけて痛論したのであります。が、雄辯を以て鳴る先生には足許にも寄り付けません、到頭ぐうの音も出ぬ迄に言ひ込められ説服されてしまひました、ほんの一時間許りの心算であたのが、遂に四、五時間もかゝり、僕は刀折れ矢盡きた形で、足を傷ついた犬のやうにすく〜と歸つたのであります」（麻生路郎論）福田山雨樓、昭9・6「川柳研究」

六厘坊が肺患によつて死去したのは明治四十二年五月十六日で「天才六厘坊死ぬ・享年二十二」と自ら山雨桜メモに力をこめて記している。相当のショックであったことは言うまでもない。六厘坊が晩

年の作風を掲げよう。

—後添は足袋の嫌ひな女なり

—いい役者でしたと話す繪草紙屋

—十日程噂を残す旅役者

—煙草を捨てて「したいことするさ」

—さる程に秋の扇となりにけり

—淋しさは交番一つ寺一つ

—病む我に此の頃母の物忘れ

—此の道やよしや黄泉よみじに通ふとも

—世をおおう狂句増長慢の明治も末ごろ

—に、このような詩情漂う作風をものした

六厘坊はたしかに才能ある異色の川柳作家であつたことは疑うべくもない。路郎

自身も、彼の名につねに、天才の名を冠した傾倒ぶりは、後年の路郎の作風へ

大きく作用している点は、六厘坊の性格

まで酷似している点とともに注目してよ

い。さらに路郎に限らず、一閃した火花の

ような六厘坊の束の間の才氣に心酔して

か往時き錢ぜに関する柳号が流行したと路

郎がさるところに書いている。いわく七

厘坊、八厘坊、半文錢、当百ががそれである。

「漱石が子規と知り合ひになつたとい

ふことは、藝術家漱石にとつて、殆んど運

命的なことだつたと言つてよかつた。漱

石が子規と知り合ひにならなかつたら、

漱石は或は文學研究家として、一個の學

究として、その一生を終始してゐたかも知

れない。勿論漱石の藝術は、子規の刺激

がなくとも、自分自身を爆發させる機會

を、いつかは持つたには違ひない。然し漱

石に文章を書かせ、俳句をつくらせ、(中

略)結局漱石をして小説家たらしめるに

至つた原動力が子規であつたことを考へ

れば、藝術家漱石の一生に於いて、子規が

勤めた役割は、重大な(中略)ものだつた

と、言つていいかも知れないと思ふ(小宮

豊隆『夏目漱石』)

路郎にあつては、六厘坊が子規の役割

を果たしたといえげさだが、川柳へ

の刺戟を与えた人物であつたということ

は明らかだ。路郎が十七歳の高商予科の

みぎり、上級への進学に文科を志望した

ものの果たせず、その想いが川柳への関

心をたかめ、さらに積極的に意欲を昂進

させる役割をおび、人間一人の生涯を「十

七字に魅入られた人生にした」(北川巢

春・路郎弔辞)その口火に、天下の役目を

おびた人物、それは小島六厘坊であつた

ということがいはいえるのではない

か。

六厘坊の死とともに、実父善七の死と

重なつたこの年の次の年、路郎は大阪高

商を卒業、徴兵検査も近視のため兵役を

免れ、いよいよ世間へ一本立ちの人間と

しての第一歩を踏み出している。明治年

代も末期のこのころは、日露戦争直後の

一大恐慌の嵐が吹き荒んでいた。造船所、

軍工廠、鉱山などでは大規模な争議が瀬

発し、農村では地主対小作人の農民階級

闘争運動が過熱の度を加え、これら労働

知識人一体の社会党の結成禁止を契機

に、暴動、弾圧、流血の反覆はついに世に

大逆事件と称される幸徳秋水事件とな

る。

このような世情を背景に短詩型の世界

は、伝統に対する革新の火蓋が俳優では

河東碧梧桐、中塚一碧楼、荻原井泉水の自

由律俳句が頂点に向かつており、歌壇では与謝野晶子、石川啄木が社会派の新傾向で世の若人たちの心を魅了していた。明治新抒情詩時代の爛熟期である。

これに対する柳壇は、狂句に挑戦して勢いのよかつた久良岐は「五月鯉」を、剣花坊は「川柳」を資金難と内部相剋から休刊中で、窪田而笑子と田能村朴念仁の読売派が分裂し「矢車」がその産物として出版され、「滑稽文学」と競い合っていた。この東京側に対し六厘坊とともに「葉柳」

(十七冊で廃刊)を失った関西の柳人たちは、直ちにこの年——明治四十二年九月関西川柳社を設立した。当百、卯木、虹衣、百樹が発起人で蚊象、奇峯、五葉、水府、路郎、半文銭らもこれに加わっている。俳壇、歌壇のけんらんたる実勢にくらべ、柳界はまるで磨きぬいたランプの光芒の中の線香の火のような存在ともいえた。しかし、この関西川柳社が五年後には「一番傘」誕生の母胎ともなるのである。

「十月八日(明43)句会の帰り当百、卯木、虹衣、墨湖、千松(路郎)の五人と一

六庵でそばを食う。*2千松の路郎と話したのはこれが初めてなり。千松君は「葉柳」廃刊後川柳を休んでいたらしいが例会は久し振り」(水府記)

路郎・水府という後年のライバルの出会いが日付を明記してのこの記録は甚だ貴重というべきであらう。

この両者の初顔合わせの翌年四十四年七月、「轍」が発刊されている。青明の一、五葉の林之助、半文銭の三郎、緑天の由三、水府の龍郎、千松改め路郎、それに蚊象が加わるといった顔ぶれだ。

「柳号を本名で短詩と正面から取り組もうとしたのがミソ、然し二号で潰れた。」(水府記)

*3天涯から千松そして路郎——柳号を正式に路郎と定めたのは、実にこの「轍」からである。

(昭33・7「番傘」)に、「浄雲寺の例会も創立から第十二回目の夏八月、障子をあげ放してある縁側に陣取った私のとなり、今まで見たこともない、私より三つ四つ年上の近眼鏡の作家がいた。さつきからしきりに入選する。これは初めての人ではないと思つてあとで聞くと、六厘坊時代の天涯君、今日千松の名で出席したとわかつた。この人こそ後の路郎君だつた。乙鳥会にも顔を出した。やがて青明、五葉、路郎、半文銭君、私との間にはお

互の行き来がはげしくなり、当時の誰かの句にあつた通り、「われ彼をかれ吾を訪う日曜日」のように、日曜どころでなく、すれちがいが盛んになつた。半文銭君が木津の方で路郎君が東区、五葉君が堀江だつた。青明君がおなじ九条にいたので一番会う機会は多かつた」とある。

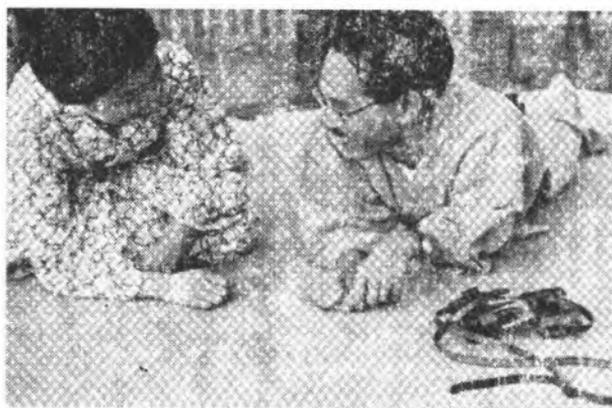
*3 「路郎の人と作品」の「路郎先生の初心時代」(清水白柳)参照。

*1 柳号は天涯ではなかつた。天涯は「葉柳」時代の号。

*2 「水府自伝」11 さらわれた懐古趣味——明治四十三年ごろの大坂柳界」

麻生路郎物語 (4)

—つつまじき川柳結婚—



路郎先生と葎乃先生（昭和7年の夏、南海線高師の浜・米本貴志子さん別邸にて米本儀助氏撮影）

路郎が上京したのは明治四十四年八月十五日である。ときに二十四歳。勤め先は学校の友人の生家である樋口金屏風店であった。もともとその東京生活も足かけ三年で終わる。

このころの柳友で最も親しかったのは、浅井五葉である。路郎より六つ輪上で銀行員だけに、如才なく世事に長けた人柄が、学生路郎にとっては、からめてから肌のぬくみを感じさせたのであろう。

—糖袋いはくあんたはお妾か

—行倒れ成程といふ姿にて

—大仏の鐘杉を抜け杉を抜け

といったいわゆる五葉調が仲間内でも評判の好作家だった。

「彼と初めて顔を合わせたのは、明治三十九年夏、平野町五二館楼上の川柳大会で隣り合わせてからである。私の市岡町時代（上京直前ころ）は、五葉君は、市岡中学前に住んでいたため、気軽に行き来しあった。上京してからも毎日のように通信しあったものだ。彼の虫メガネでみるような細字が懐かしい」

「矢車に出句をすすめたのも五葉君で、おかげで東上した際、矢車の荷十君の世話で下谷の下宿屋に落付くことができた。その息子が一時川柳を作った河野京雨だった。京雨は三太郎君の従兄弟だとも聞いた」（山雨楼メモ）

その「矢車」も路郎の東上した年十一月に廃刊。このとき「滑稽文学」（読売派而笑子）もこの年七月に廃刊し、東京の柳誌は完全にその姿を消滅させてしまっていた。「矢車」廃刊のころは、青明、五葉、半文銭、水府、緑天、地神佐竹、路郎が主力同人で、いわば大阪の柳人が東京で柳誌を出しているような形になっていた。若い路郎にとってこんな東京の空は、ひどく侘しいものに思われたことにちがいない。在京中、折をみては大阪へ馳せ帰っていたようだ。因らずもこの帰阪の一とき、運命的な河盛よしの（のちの麻生葎乃）との出会いとなるのである。

「葎乃さんは大正元年ころ、当百庵の句会に父河盛声村氏とともに姿をみせられ、当時の若き川柳仲間には相当な渦をま

き起していたものであった。当時、霞乃さ

んは二十歳、まだ肩揚げもとれていなか
った。おさげ髪にしたり、桃割に結ったり
していたが、みるからにミツシヨン風の
地味な女の子だった。若い連中は作句ど
ころでなかつたらしく相当な悩まされ方
であった。父君つきつきりできりとど
うしようもなかつた」「大阪だより」、昭和
6・5「むさしの」

「*大正元年路郎は東京からひよっこ
り大阪に戻ってきて、当百さんの二階で
開かれている小集句会へ突然に姿を現し
たのです。

出席のみなさんとは顔なじみのよう
でした。この時が私との最初の出会いでも
あったのです。当時、当百居での小集句会
のメンバーは十人足らずで、俳人鬼史柳
号柳珍堂という川柳のうまい作家も出席
されていきました。そのほかに浅井五葉、木
村半文銭、川上日車、岸本水府、藤村青明、
蚊象さんもおられたか、覚えていません。
まだ俳人で宗右衛門町のお茶屋の主人だ
った藤原遊魚さんも時々見えていますし

た」(霞乃書簡)

「はじめて彼と出会った時の印象です
が一口に申しますと、まるで、おじさま
みたいな感じで、齢より相当に老けて見
えました。父芦村に、私を妻にと申し込ん
だのは、初対面からしばらく経ってから
だと思います。

私の条件としては、父と一緒に暮らす
ことができれば、お受けしてもよい、とい
うことでした。娘一人、親といえはずで
母はなくこの父だけでしたから、父と離
れて暮らすことは当時なんとしても厭だ
ったし、若い私としては考えられない事
でした」

昨年、生駒市で直接筆者が訊いた、これ
が彼女の結婚当時の感想であった。

結婚式は大正三年四月九日、西田当百
夫妻の媒酌で、河盛芦村、よしのの親子二
人で暮らしていた朝南通りの家で、日ご
ろ顔なじみの当百家に入ります川柳人
や、双方のわずかな縁故者を招いてつつ
ましく挙式されたのである。新郎新婦の
新居となったのもこの家だった。

この路郎が句会の女王クイーンを射止めたとい

うことは、その時点でかなりのやつかみ
やそねみが当然のように発生している。
その根拠もない憶測の中に、路郎が水府
と、霞乃に、恋のサヤ当てを演じ、結局
路郎がライバルの水府を蹴落とし、恋の
勝利者となったというデマがとび交った
ことである。このデマは愕いたことに今
なお旧柳人の間では、伝説的の話題とし
て生きながらえていることである。そこ
で筆者は、この点について真相を生駒市
のご当人に訊してみた。直ちにつきの如
き返事が到着した。

お訊ねのデマの震源地について、私の
知っている範囲のことを申し上げます。そ
れは遠い遠い昔のことですので、私にも
ハッキリはしていません。

たしか北方の地方柳誌「猫柳」だったと
思いますが、もしまちがっていたら、他の
柳誌であるかも知れません。調べてみな
いとわかりません。とにかくこの柳誌の
消息欄(川柳塔からいえば柳界展望のよ

うなところ)に二、三行ほどの記事が掲載されたことがあります。

何が書いてあったか、私は馴れぬ家の仕事で忙しくしてましたから読む暇とでなく、くわしいことはわかりません。或日水府さんはその柳誌をもって私たちの新居(鞆南通り)へ来られました。そして問題の記事のあるページを路郎に見せながら「これどう思います。僕はこれを見て第一今後この家とはどうなるのかと思うと心配になったので、やってきたのです」とさも困ったように前額部の髪の毛を、右手の親指と人さし指でつまみました。これは水府さんが困った時に必ずする仕草なのです。

「僕どんな冗談を言うたか知らんけど……」

と水府さんは、そう言葉をつぎました。

「こっちは教育者の娘なのだ、これは困る——これは訴えよう」

と路郎はムツとして言いました。

「そんなむつかしい事はやめときまひようや、僕が辛抱しといたらええのやか

ら……」

と水府さんは答えました。

実のところ、当時の私としては水府さんと、句会のために顔を合わすだけで、別に個人的おつきあいをしたことは勿論ないので。ですから私自身、この二人のやり取りをそばでできながら、路郎がそんな大仰なことを言うのに内心おかしく思っただけです。

こんな遠い昔のことが、今だに私の知らぬ人たちの間で尾をひいているのかと思うと不思議でなりません。

その後のことですが、水府さんの結婚式の日、花嫁さんの中宿を私方でいたしたぐらいいです。お互いに住居は近かつたものですから、絶えず行き来していました。水府さんのお母様もまだご健在でしたから、私はご近所づきあいをいたしました。路郎も水府さんとは川柳人のお友達でありました。半文銭さんのお宅も

半丁たらずのところにあつたのでした

告訴する、いや、やめときましようという路郎と水府さんのやりとりには、よく

このふたりの男性の性格が出ています。路郎と水府さんとは、性格的には何もかも反対でした。

水府さんは人が不快に思うようなことは、直接自分の口から言うことは避けていられました。それに反して路郎は、正しいと思つたことはきらわれようがどうしようがズバズバといいくいことを主張するので、誤解もされ易く、多くの敵を持つていました。強い味方もありましたが、それはごく少数であつたでしょう。従つて柳誌の運営につきましても、主義主張を異にしていました。そんなわけで、仲の良い柳友でありましたが、ことごとくに提携しにくい点があつたのです。第三者の眼からみれば、互いに反目せねばならぬ感情のもつれがあるかのように邪推されていたかもしれせん。私から申し上げる事はこれぐらいいしかありません。

結婚後三年目のことになるが、山雨楼メモにつきの路郎夫妻の句会報が記されている。(結婚とともによしのは直ちに柳

号を葎乃とした）年代順からはみ出るが紹介しよう。

「『番傘』の大正五年八月号を見ると、麻生夫妻に一頁を提供し、優遇している。ここでは葎乃・路郎と並べお睦まじいところを見せている。その中の主なる句を紹介しよう。

—罪の値は汗なりと歎をとり 葎乃

—アダム・エバ猿股といふ智慧がつき

同

—キリストは今日も手品を一つやり

路郎

—私生兒だのに聖靈にしてさひ

同

—サロメにも困るとヨハネ堅いこと

まだ路郎調は完成していないが、進むべき道が番傘とは異なっているのがほの見える。

このころから路郎は『番傘』から遠ざかり『土団子』や『雪』が生まれた。『川柳雑誌』の創刊はそれからずっと後のことである（『川柳雑誌の句』近藤貽ん坊、昭和6・

3「むさしの」

基督の句が出ているので、ここで路郎

夫妻の洗礼名をあげておこう。路郎のクリスチャンネームはヨハネ。葎乃はルツである。路郎が図らずもこのようなイエスの輪環の下についたのはもとより花嫁の影響である。

葎乃は奈良県立桜井高女の二年から大阪に移り、大阪私立相愛高女に転校し、ここを卒業後、大阪川口町にあったブル女学校の英語専修科に学んだ。相愛高女は御堂さんが設立した仏教学校だが仏教色はうすい。生徒は島之内や本町の問屋

すじの娘さんが多かった。それだけにちと贅沢なエリート女学校であった。一方、ブル女学校のスペシャルクラスは、生徒が五、六人だが教師は外人でカナダやロンドンの宣教師格の人達が入れかわり

たちかわり教壇に立つという風で、修道院なみの教育ぶりであった。毎朝三十分は礼拝、半時間はバイブルクラスで、毎日聖句を一句ずつ暗誦させられていて「あの人はハンサムだなあ」と心に思うだけでも姦淫罪を犯しているのだと訓育された。「人右の頬を打たば、左の頬もこれに

向けよ」と無抵抗主義を教えこまれた。このため、腹立たしさも、人を疑うことも知らずに青春期を過ごした、と述懐のあとに――。

「学生時代には毎日曜日にかかさず京町堀の聖台会へ行っていました。結婚後は俗事に追われてひまのない生活でした。今はその教会も戦禍でどこへ行つたかも知らずに過ごしています」（葎乃書簡）

仏門を経てクリスチャンに、神仏への奉仕を誓ったはずのこの妻にやがて思いもかけぬ川柳人としての洗礼？ が生涯のものとしてその身を押し包んでしまうことになるのである。

ツルゲネーフの「女の一生」やチェホフの「可愛い女」にも似た葎乃の「女の一生」は、路郎という型破りの男性を夫と定めたことよって、はからざる運命の波濤に翻弄されることになる。麻生路郎・葎乃夫妻のその人生への門出は、まるで十字架の刑柱を重たく背負ってゴルゴタの

丘に向かうあの聖画にも似ていよう。そのキリストの頭髪をからみつけたその荆冠——それこそが川柳そのものなのである。本名河盛ヨシノ——その前世もまた数奇をさわめた家門のドラマがそこにあったのである。

* 路郎の「妻を語る」(昭39・5「川柳雑誌」No.444)によると、大正2年の頃。「麻生路郎物語」(16)参照。

麻生路郎物語 (5) —河盛仁平噂ばなし—

私(麻生葎乃)の父河盛彦三郎と云う人は非常に金銭に淡々とした人で、無口な人だったから、私へも私の先祖のことは一言も話しませんでした。私がこれから書き綴ることはみんな私がまだ生れていないころに堺の人達が語り伝えていたわば他人様の噂ばなしであります。

私の曾祖父は河盛仁平といつて、屋号は河内屋という木綿問屋でありました。河盛の姓を名乗るまでは垣崎といったそうですが、なんだか武家筋のような気がするのです。多分明治維新の頃だったか



〔写真〕昭和40年3月31日(水、肝炎のため大阪赤十字病院に入院。左から麻生ア一卜氏、葎乃・路郎両先生、林宏子氏)

ら、御家人くすれか、どこかの浪人だったのが、新時代のくるのを見越して侍(さむらい)みきりをつけ、商家に奉公したのでしよう。これは私の勝手な憶測です。

さて、木綿問屋河内屋は和船三十何艘を所有し、木綿を船に積んで日本海に航路をとって、北海道へ航行することを業としていましたが、その帰りには鮭、鱈にしん、かずのこ、昆布などの松前ものを積んで帰りました。時には船が遭難したことも幾度かあったときいています。

河仁の屋敷には倉が七つあって、そのうちの一つは薬師倉といって、色々の仏像や金の灯籠や、その他仏事に関するさまざまなものが納めてあったそうです。

(この事は私のお友達の父上(おやじ)がさる大和のさる寺の住職をされていて、この蔵をみせて貰ったとの話をその友人からきかされました)また、河仁が繁昌しているころ、河仁の積荷の荷抜きをしていますが大きくなっている人もいるそうです。(これは堺市の元市長だった河盛安之介さんが路郎に話されたことです)

そのほか、河仁を語る豪勢な話は沢山にありますが、私の覚えてるそうした話のなかにはこんなこともあります。神仏合体の時、大寺神社の境内にある塔が売りに出たとき、それを時価で買うてそれをまた大寺さんに寄付した話もききました。(このことは八木摩太郎さんも知っていられました。当時、河仁さんには勝てんなあと堺の人は噂したそうです)

また、にわか雨が降ったら河仁さんへ行ったら傘を貸して下さると堺の人は言っていたそうです。貸傘の番傘が何本も用意してあったのでしよう。堺の町家へ雨どころか、首が降ったりおふだが降ったりしたこともあったそうです。これは母方のおばあさんからききました。世の騒々しい有様から考えますと多分明治維新前後の頃だと思われれます。

堺へ明治天皇陛下(明治十年)がお越しになると云うので、河仁はそのお宿をすることになりましたが、そのため浜寺から松をひいてきて庭をつくり、立派な石段のある門構えの行在所を自宅の向い側

に建てたときいています。明治天皇陛下の御一行は、その夜遅くまで御前会議があり、お泊りにならず何かことがあるのか急に伏見へおたちになったそうです。あとの行在所は堺市民の皆様へ公開し、見に来られた方々へ折詰のお土産を出したそうです。この行在所は、河仁の家が倒産してからも、堺の遺跡として保管されていましたが、第二次戦争の堺空襲の折に灰燼に帰しました。

河盛仁平の噂ばなしは、どれをとりに取っても真似のできないことばかりです。河仁へはいつも相撲取りが出入りしていたとか、法事とか何かの時は綺麗どころが何人も揃いの前掛をしめて手伝いにきたとか、しかし、こんな話のところは二代目の時代ではなかったのでしょうか。みかん船でお大尽になった紀文が、吉原でお大尽遊びをしたような話になっていますが、私は二代目説だという意見に納得いたしません。河仁もそうですが、紀文にしても淀屋辰五郎にしても一代で豪商になるような人物は、金の値打ちをよく知って

いますから、そんな馬鹿な金は使わない筈です。

河仁の屋敷には日本舞踊の舞台もあって、母屋の娘たちは「石橋」^{いしはし}ものの許しものをお稽古したとか。私が八歳か十歳頃踊りが御飯より好きでよく稽古屋の表に立ち見して動かなかったことを覚えていますが、河仁のうちの誰かの血を受けていたのかもしれない。

そんな贅沢も何でもない河仁が潰れたのは、堺にとらや銀行というのができて、その責任者にまつりあげられたのが原因です。

「あんたはじつとしてはつたらよろしいのんや、私等があんじょうしまつさかに……」という具合にそそのかされたのでしょうか。とうとう取り立てを食う破目になったのです。どの世界でも二代目、三代目は初代の苦勞を知らなすぎます。これから見ても財産というものは、子孫孫に譲るべきものではございません。富を築くのは親の力量であつて、子供腕でもなんでもないのです。

家も倉も人手に渡した河仁の人達は堺に居ることができず、いずこかへ蒸発したのですが、未だに私達も行衛知らずにいます。姿を消す前に、住吉神社の神主になつてゐるという噂もありました。でも住吉さんは格式の高い神社ですから、何でもない平民が神主になれそうもありません。私が思いますには初代は仏神に志篤く、その七光りで暫くかくまつて貰つていたのだらうと思ひます。河盛家に属するものは、競売に付されましたが天皇陛下から拝領の銀杯はそういうこともできず、堺から立ち退きざわに住吉神社へおあずけしたと申します。今も宮内省から使者のみえた時にはその銀杯で御酒をおすすめしてゐるさうであります。

さて、私の父河盛彦三郎(俳号芦村)は、河盛家初代仁平の分家筋に当たるのです。河盛初代仁平には後とりの息子と、娘の二人の子があり、その娘が大和出生の庄七(私の祖父)という男を婿に迎えて分家しました。家業は油問屋でした。彦三郎はその二人の間に生まれた後とり息子で

すが、彼には一人の姉がいたのです。その姉が二代目をつぐ河盛家の嫁ときまりました。昔よくあつたといふ同士の縁組みというわけです。十二荷の荷ごしらえで、蚊帳のつり手まで純金だとの噂とりどりの輿入れでありましたが、夫婦仲がうまくいかず不縁となつて戻つてきました。

父河盛彦三郎は本家の河仁の孫娘と許嫁の仲であつたらしいのですが、姉の不縁から母屋との折り合いが悪くなり、彦三郎は両親の見立てで堺の林という医者(二万石のお殿様の侍医)の娘と結婚いたしました。その嫁が私の母の「しげの」であります。器量も人並みすぐれ、裁縫料理も器用な手を持つていましたものの、姑(彦三郎の母)は、出戻りの娘(彦三郎の姉)が可愛くてならず、出来のよい嫁とはいへることと辛く当たるのでした。その辛さにこらえかね、母は袂に小石を入れて入水しようかと考えたことが何度もあつたらしいのです。(これは林家のおばあさまからききました)こんなトラヴルが家に起こつたため私の父彦三郎は家督

の権利を放棄して、母と私を連れて大阪へ出てしまつたのです。父の貧乏生活はそれからはじまつたのです。

大阪へ出て貧しいながら親子三人の水入らずの生活でしたが、そのうち母が私の弟(名はよしゆき、生後暫く存命して死亡)を産んでから産後の日たちが悪く、余病も併発して私の六歳の時にあの世の人となりしました。(明治三十一年十一月十四日没・戒名釈貞行)

母は臨終の枕辺へ、林家のおばあさん(私の祖母)を呼んで

「この子が十五になるまで、どうぞ面倒をみてやつてください。それまでは草葉の蔭から私を見守つてやります」

といつて息を引きとりました。おばあさまはその約束通り、私の十六の秋に亡くなられました。小さい私をお寺詣りによく連れていつてくれましたが、こんなことから私の心に宗教心が植えつけられたものと思ひます。

父は生前から母との誓いを守つたのでしようか、三十前後の若さで一生涯もめ

で通しました。父は旧家育ちながら新しい考えの持ち主で、貧しくとも自分の思い通りの気楽さで小説を書いたり、月二回は私を連れて芝居見物に出かけたりしました。私に八歳の時から英語を習わせたりから、万事フリーな民主主義者だったわけです。私が登校するとき、髪を結ってくれたり、ここから面倒をみてくれますので、成長した私と二人で外出すると誰もが兄と妹だと思つた位です。

父と私はまったく一対一の友達づきあいでした。秋の夜は同じ電燈の下へ机を向かい合わせ、私は近松や伊勢物語などを読み、父は正宗白鳥や田山花袋をよんだりしました。三十歳でやもめになった父に、時々後ぞいの話もありましたが、父はいつもキツパリと断っていました。その都度私は「それ見たことか」と心ひそかに叫びながら、再婚をすすめた人を見返しました。そして、父は私一人の父であることを心から誇りに感じていたのでした。私は父の寂しさにちっとも同情のな

いエゴイストな娘だったのでした。もし父が再婚していたら私はひがみ根性の強い、いやな女にきつとなつていたことかもしれません。

父の嫌いなのは蜘蛛と金持ちです。そんなわけで堺を離れた父は堺に親しみを持っていませんでした。そのため私は河盛仁平の名を知っているだけで、母屋の人達の名も知らず父のおばあちゃんの名も知りません。大阪に久しく住んでいても初代の建てた行在所さえ見に行つたこととはありません。父の頭の中には堺といふところは、いやなイメージしか残っていないのです。分家のおばあちゃんが亡くなった時も父は帰りませんでした。河盛庄七(私の祖父)の亡くなった時は、死目にはあわなかつたが帰りました。その時、父の生家は油問屋の店をたたくので大和高田に移り住んでいました。居食いの生活でしたが、私のいとこを京都へ下宿させ工芸学校を卒業させる資産はあつたのです。父は家督の権利を譲つた甥(私のいとこ)の後見役を引きうけていたので

した。おじいさんの遺言によれば、そのいとこと私を夫婦にして、河盛庄七の後目をつがせたかつたらしいのです。

私とこのいとこは八歳から十歳ころは、よく大和高田へ遊びにゆき、いとこも大阪の私たちの家へきて仲もよかつたのですが、成人してからこのいとことフトした事から喧嘩をしまし、庄七おじいちゃんの計画は見事に失敗となりました。

父彦三郎は生家を出て大阪に住むようになつてから師範を出ていたので、教鞭をとるかたわら、渡辺霞亭の門に入り、先生の代作で時代物をかいたこともあり、でもとうとう河盛蕉亭の名は、ひのめをみる事ができませんでした。三文文士では世渡りのできない事を知り、アルバイトに数学の塾を開きましたが、文学への未練があるのか、私の女学校時代には毎週一回作品の批評会を開いていました。定年退職の前頃は都島工業の数学の教官をしていましたが、学校を辞めてからはコツコツと筆一本の高等数学の研究

をしていました。

私は実のところ一生自分の好きな事をして暮らしたかったです。路郎に望まれて結婚生活に入りましたが、もし結婚していなかったら脚本作家になって芝居畑でくらししていたかも知れません。それが川柳の方に入るとは……。

夏目漱石が何かの作品の中で直接に興味の遺伝ということにふれているが、私が老年になってから役にも立たぬ英文学研究や古文学に頭をつっこんだりしているのは、鉛筆一本で高等数学にかじりついていた父の姿に似ています。次男アトにしても無口で金に欲がなく自閉的なところまさしく彦三郎型で、三男一歩は誰も教えない数学に才があり、代数や幾何の成績はいつもよいのです。我武者らな意思表示はしませんが結局自分の目的通りにすると、他人のすることにいちいちごてつかないところはみな彦三郎型なのです。

梨里の闘志満々たるところ、持論は決してあとへ引かないところは路郎の遺伝

です。血は争えぬということのおそろしささを、しかと思ひ知らされます。(以上全文・麻生霞乃書簡)

麻生路郎物語

(6)

—「番傘」発刊のころ—



左から岸本水府・麻生路郎・食満南水諸先生 (大正6年3月25日)

堺の豪商河仁の外孫である河盛彦三郎は、慶応二年八月二十五日の生まれで、ヨシノ(霞乃)はその二十七歳の折の出生である。霞乃の生年月日は明治二十六年二月二十四日である。路郎の五つ歳下になる。

霞乃と結婚した路郎は、当然この彦三郎とも一つ屋根の下に住むことになった。

「父は慶応二年生まれのトラの歳で、人には寛大でしたが自分には厳しい人でした。昼二時に帰ると家を出れば、必ずその時刻には帰宅しました。父の脱いだ下駄は、右左キツチリ揃っていました。父の机の抽出の中は、鉛筆やペン、筆にノート等はきちんと並んでいました。その点、路郎ときたら、一旦家を出たら何時御帰館やらわかりません。午前二時になるやら翌日の昼すぎになるやら。鉄砲玉のニツクネームがあり、私も眠たければさつさとお先へ寝てしまうのです。もし、夜更けに帰ってきて私が知らなかつたら、父が戸を開けにゆきます。何一つ文句を云わぬ父です。で、いつべんに酔いがさめてしまふ、と路郎はよく言っていました。こんな性格のちがう人間同士が同じ屋根の下にいて、よくもトラヴルが起ころぬものだと感心したものです」(霞乃書簡)

彦三郎は当百郎の川柳小集会のメンバーに常に顔を出していたものの、実のと

仏名・釈諦順。

ころ川柳人というより俳人蘆村で通つていたようである。教師としての彦三郎が数学の拘束から開放される趣味は、自由気ままな文学、芸能の世界であつたわけで、蘆村なる号はそうしたムードからする象徴的雅号と受取れる。

「蘆村の雅号は文学好きのメンバーが集まつて短篇小説を書いてお互いに批評し合つたりした時のもので、俳句なども碁でいえばザル碁仲間て互選句を楽しむ態のもので、句は全々残されていません。第一俳人として名乗りをあげるような俳人ではなかつたのである。俳句はこの人にとつてはほんの暇つぶしのなぐさみものであつたわけです」(霞乃書簡)

小説の方は、渡辺霞亭の時代ものの代作をやつていたとあるが、小栗風葉の代作者から世に出た真山青果ほどの気力も、手づるもなかつたらしい。第一そんな氣もなかつたようだ。こうして彦三郎は、晩年は路郎夫婦とその生活をともにし、昭和五年十一月十四日、奇しくも亡妻の三十三回忌の日に死去した。享年六十四。

さて、筆者はこの辺で明治から大正へと移りかわる、一種の時代の大きな転換期における柳界の現況に眼をおくことにする。

路郎が十代から二十代へと成人期へ移行する明治四十年(路郎二十歳)の時点で、柳界は「葉柳」(明39・6発行・小島六厘坊主宰・大阪「滑稽文学」(明40・1発行・窪田而笑子主宰・東京)「新川柳」(明41・1発行・久良岐社中)の三柳誌鼎立時代となつていた。だが、柳誌の盛衰変貌よりは猫の目さながらで、二年後には「滑稽文学」に拠る東京柳界は「獅子頭」「矢車」に分裂する。そして六厘坊の死とともに「葉柳」も休刊してしまふ。そうかと思えば、岐阜市から「青柳」(明42・8・田中蛙骨主宰)が出た。劍花坊、久良岐、当百、三面子らの多彩な執筆陣を動員した菊利60頁の堂々たるものだった。

しかし、大正という新世代を迎えた当初には、東京では「大正川柳」大阪は「番

傘」に過ぎず、岐阜の「青柳」も大正二年に休刊し八年間の冬眠に入ることになる。

東京の「大正川柳」(大元・8創刊)は、劍花坊の柳樽寺が奮起一番のスタートで、やがてこれが大正期の新興川柳運動への輝かしい旗手の役割を果たすことになる。この時、劍花坊四十三歳。まさに脂の乗り切つた盛りである。

「この時々刻々変化し、流転し進展し突発してゆく実在即生命の刹那の観察、連続の状態を捉えてこれを詩にしたもの、それが川柳である」(大3「大正川柳」26号)

—消えてゆく我世の悲しとろとろ火

劍花坊

—京で抱くものいふ難は哀れなり 同

—子を負ふて夕刊売にみぞれ降る 同

川上三太郎、森井荷十、吉川雉子郎ら有力新人数を擁した柳樽寺派は、大正十二年の関東大震災まで東京柳壇に君臨し、全国的にも黄金時代を満喫するのである。大正から昭和の年号改称とともにこの「大正川柳」は「川柳人」へとうけつがれる。

劍花坊のライバルで、明治期にはその偉勢を誇った読売派は「新柳眉集」を、また久良岐社は「川柳文学」をともに創刊したが、いずれも程なく廃刊し「大正川柳」の独走に委ねる形となった。

明治期以降の柳界において終世のライバルと目された劍花坊、久良岐の二人の先覚者は狂句追放「初代川柳の柳魂に還す」目途はともに同じであったが、久良岐は宝暦・明和期の柳樽が帯びる江戸趣味に抱泥し、明治期にはそのことよってひところは、江戸ッ子久良岐のエリート意識に浸り切った。

これに対する劍花坊は、過渡期ながら明治末期における新聞人らしい政治感覚と長州人たるの気骨に溢れた覇気をこめた新世代相応の新川柳を志した。明治維新は薩長の藩閥政治で一切をろう断したが、その藩閥政治は第四次伊藤（博文）内閣まで持ち越され、大正初年の第三次桂（太郎）内閣においても払拭し切れなかつた。明治末期の自由民権思想はいずれこの藩閥意識への反逆がバックボーンをな

していた。劍花坊の新川柳もその例外ではなく、その明治氣質を遺憾なく示したのが「川柳」（明38・11創刊）であった。だが、「大正川柳」の劍花坊の新川柳は、無産者運動の渦巻く大正デモクラシーの思想の奔流については敗退していくのである。久良岐も劍花坊もその衰退期はともに関東大震災であった。

大阪では、大正二年一月に番傘川柳社が「番傘」を刊行した。出句者は当百家の小集句会メンバーが顔を並べている。西田当百、浅井五葉、木村半文銭、川上日車、杉村蚊象、藤村青明、馬場緑天といった顔ぶれで、発刊趣旨はなにかわりに第一号の巻頭吟に

——上燭へいへいと逆らはず 当百
堀口塊人は「ふあうすと」の明治川柳考でつぎのように書いている。

「へいへいへいは、その接客態度の描写であるが、姿を写して心に至り、さらに店の雰囲気まで匂わせる表現力を持つ一句である。これが我々の大阪の川柳であり

『番傘』はこんな風に行くことを巻頭に表示した一句でもあった」

柳誌『番傘』の本質をずばりと解明した見事な適評というほかはない。

堀口塊人はまた同誌の『昭和前期の関西柳界（4）』においてつぎのように記している。

「『番傘』創刊当時、路郎は東京に居た。『葉柳』以来の柳友、浅井五葉からも、岸本水府からも、何の相談もなく突然、創刊号が手もとに届けられた。この時二十五歳、彼の若き血がおだやかでなかつたのは言うまでもない。

『番傘』が何處から舞ひ込む。お前のやうな人間には到底解りもすまいが一寸見せびらかしてやるといつた風に。詩人の私には番傘より晩方の方がどれ位感じがい、だらう。今に梅雨が来れば番傘は破けてしまふ。さつと破けて了ふ。ドス黒い色になつてサ。番傘の奴等俺を鳥流しに合したな。覚えてゐろ、覚えて居ろよ。今更あやまつたつて誰れがきくものか遅い遅い。」*1

これは『番傘』2号の『樂屋落』に載っている路郎の手紙で、もちろん親友に対する冗談と思われるが、それにしても、だしぬかれたくやしさが表明されているではないか（『路郎の『番傘』時代』、昭48・9「ふうすと」No507）

いずれにしても東京で、島流しの寂寥感を嘯みしめている路郎の憤懣ぶりが、この樂屋落ちの手紙の文中によく示されている。さぞかしこの一文をポストに投げ込んだあと、機をみて大阪の当百居に直行した路郎の姿が思われる。だがそこは顔なじみの屯する当百居の連中だし、先輩の当百が新柳誌のリーダー格でいることとて、まあまあ話のあと、河盛ヨシノとの結婚という素晴らしい佳日にもめぐりあうという段とりとなる。

明治三十八年五月に大阪から発刊された「新編柳樽」が翌年六月に「葉柳」（小島六厘坊主宰）となったが、その十一月号に斎藤松窓が「西田當百論」（約三頁）を書いている。

「當百は常識の人である、無理をせぬ人

である、其作品に於て所論に於いて、常識の範圍を脱せない、當百は天才と言はれる男ではない、と云ふて凡倉でもない、至極眞面な川柳家である、（中略）眞にして美ならず」との評は、當百の句の一面を穿つたものとして聞くべき價值がある、彼れの句の欠点と云へば「美」と云ふ感念の欠乏である、然しこれは眞ならんとて知らずの間に美を忘却したものである、

（中略）

當百は世故に通じた人である、已に一家をなして居る人である。我党に尤も多く浮世を知るものは當百也、予や六厘坊と雖も只だ、坊つちやんとして商家に人となつたに過ぎぬ、苦勞と云つても學校が厭やさに腹痛を起した位な罪のないものにすぎぬ、隨つて年少氣鋭世間知らずの無鐵砲と言ふことは或いは免れぬかも知れぬ（中略）

——鶏を乗せて漕ぎ出す傷はしき 當百
——見ぬ母の年忌勤める廻り年 同
——次からは兄の幟りで濟しとき 同

（中略）當百の句は殆んど家庭川柳と言

つて可なりである、（中略）實世間に觸れた句が多い、而して彼れの句にはヤマがない、嘘がない、同情がある、哀れがある、深みがある、彼れは、順禮が地藏堂で時雨を避けながら子供に乳を吞ませて居る、と言ふやうな句が好きだろ、六厘坊の大なく、千二の洒脱なしと雖も、彼れの句はみな「眞」である、而して彼れの句には叙景よりも叙情に於て多く見るべきものがある、彼は常に何物かを穿たう／＼として居る、言い替ふれば眞ならんとして居る彼れの句にして穿ちなく、眞なく只美ならんとのみ考へた句には余り佳句が見當らぬ」

まことに世長けて八面れいろ、平淡雅趣に富んだこの當百の人柄には、六厘坊、日車、半文銭、松窓、路郎など一種の才走つて毒氣の多い連中も、根つから歯がたたなかつたという感触がある。梁山泊氣取りの當百居常連の気ころを抜けば目なく見通し、緩急自在のその手綱さばきの程のよさに、路郎夫妻の仲人役もごく自然の形でとり出されてきたのである

う。発刊された新柳誌「番傘」の性格もまたこの当百流のムードそのものであったといえる。

「路郎は『番傘』の2号から同人に参加した。そして猛烈に作句をはじめた。2号発表の彼の句数は七十五、3号では百八。その頃の『番傘』は同人も少なく、月刊でもなかったから、日頃の作品がたまっていたのかもしれないが、現在の各同人誌とは比較にならない句数の発表である」

〔路郎の『番傘』時代〕塊人、昭48・9「ふあうすと」No507

発刊当時の「番傘」の部数は約二百部で、*2何号目かに誤植がみつかったので、水府がそれを抱えて路郎夫妻の宅を訪れ、訂正を手伝って貰い発送期日間に合わせた事がある。

「新婚十日かそこの路郎君の家へこんなヤボ用を持ちこむのも、僕が路郎の悪仇なんて？ わかるだらう」

水府が友人にそういつて話したとい

う。

—鬼灯を鳴らす雛妓の懐手 よしの

番傘三号にこの句がある。河盛の姓であるから路郎と結婚直前の句とみている。同誌に

—肩上也よし立矢の字更によし 路郎

この句が初々しい河盛よしのをモデルとしたのなら、路郎の彼女への関心ぶりがしのばれてほほえましい。ともあれこの河盛よしのの川柳の*3処女作がやがて、麻生葎乃として路郎と同じいばらの川柳人生の幕明けとなるのである。

*1 続きは、「ウン當百か當百だつて當千だつて許さねえぞ。ナニ五

葉だと貴様のやうに頼りない奴に用はねい。氣まぐれ半文だつて妻を賣うのか。い、災難ぢやねいか。

水府か、えお前が、お前の清い清い心は何時の間に無くなつたのぢや。何時とはなしに皆んな吸ひ取られましたと、フ、ン藝者にかい、ざまア見ろ。」

*2 「番傘」(昭39・8)の「水府自伝19」に、「三年の一(通巻五号)は

五月三日に出た。この発送は路郎の新居で、むろん私も加わって川柳一家らしい風景を描きながら、宛名書き、袋入れ、のりつけと忙しいことであつた」とある。

*3 処女作ではない。

麻生路郎物語 (7)

—新短歌運動の雪、発刊—



「雪」大正4年11月号の表紙

*1 結婚した翌年の大正三年第一次世界大戦が勃発したので、路郎は東京を引揚げ大阪中央電信局の外国電報の検閲係になった。だが、この職も戦争終結とともに

に終わりを告げ、大正四年、大阪市北区上
福島中一丁目で素人臭い古本屋の店を開
いた。店の名は葵書店。

—南無葵 俗名小島善右衛門 青明

これは六厘坊に傾倒した藤村青明の六
厘坊追悼句の一句だが、路郎も六厘坊の
家紋の「葵」を店名としたようだ。そして
大正四年八月路郎生涯の川柳生活にとつ
ては、最初の重要な関門ともいふべき
「雪」を刊行したのである。年来の盟友川
上日車は書いている。

「古川柳には、古川柳独特の味いと響
きをもっている。私たちは久しくそれに
浸って川柳作家としての揺籃期を過ごし
た。だが少年期はやがて迎える青年期の
前提である。少年期に、紅い」と映ったも
のそれは、伝承的、紅い、であって自己の
発見した、紅い、ではなかった。ここに少
年期と青年期との間に一つの曲り角があ
る。その曲り角を意識にとめず一直線に
歩みつづけるのも、透徹した一つの道で
はあるが、自己に厳しい執着をもつ者には
それができない。そこに青年期の浮氷

が横たわる。路郎と私が手を携えて『雪』
を発行したのは、まさに此の曲り角に立
った時であった。

*2 くらぐろと道頓堀の水流る 路郎
行く末はどうあらうとも火の如し

同

こうして路郎の眼は次ぎ次ぎと人生の
あらゆる角度に拡がっていった。

道頓堀の水の流れは誰の眼にも映る。

だがその印影はただ事象そのものに過ぎ
ない。いまここに示した路郎の句には、水
の流れに秘められた人生の謎を、究明し
ようとする自己の意識が擡げる。この意
識こそは文字の枠外にあつて、句そのも
のを深く味う者へのみ与えられた捨棄の
恩沢である。事象を意識の上に深く捉ら
えるか、捉えないかは自己認識の深浅に
よつて定まる。これが作家として起つ場
合、最も重要な楔だ。

かくて自己の内攻の推移に棹しつつ、
路郎と私とは『雪』編集に心を砕き、異な
る二人を一人格に結晶せしめたのであ
る。これが『雪』創刊の動脈であつた。『雪』

の頃—路郎と私—川上日車、昭32・7「川柳雑誌」
古稀特集号・No.362

「雪」創刊号は本誌と同じサイズの上
質アート紙八頁。日車が句四十二句と六
厘坊書簡（日車宛金剛山登山の記—六厘
坊はこの登山の無理で発病、死因を作つ
たらしい）このほか日車作のコントが二
頁、まさに日車の完全な独立舞台で、まる
で日車特集号だ。

同誌二号は藤村青明の急死追悼号であ
る。

—天才が攫徒か瞳の落ちつかず 日車

—一杯の冷水捧ぐものもなし 同

—浴衣掛一寸いて、くる旅なりし 路郎

—絶命ときに落日は瞬けり 同

—タンクステンの破裂が青明の死か 同

同誌三号には、はじめて路郎が巻頭に
十五句を発表している。店頭より事務室
へ

—晴 友去れば又あきんどとなり 路郎

—他人ごとにあらず賣れぬ日の續くとき

同

—SOF Aが欲しといふ妻のうら若く

—妻や待たむ靴音を高めんか 同 同

この号から「雪」もがぜん生彩を帯び、誌面も一種のけんらんさを帯びはじめた。そして雪同人の顔ぶれが裏表紙に載りはじめる。それによれば伊藤鯉魚・小穴隆一・中谷義一郎・信時潔・加藤静児・塩谷鶴平・宮林董哉・松村鬼史・藤原游魚・小出楯重・牧野虎雄・兼崎地橙・孫・石浜純太郎―雪幹事・斎藤松窓・麻生路郎・川上日車。

画家・俳人・歌人・作家・大学教授など往時A級の学識者文化人を一堂にあつめ、學術随想論文スケッチと多彩豪華な誌面構成で、同誌十二号には、梅屋おせんの特集号を出し吉井勇・水島爾保布・喜多村緑郎・岡田八千代が寄稿している。本誌の絶頂期である。

「路郎君(中略)君は飛行機の著陸式也、白秋氏に觸れ、浪六氏を解し、長唄を知る。相撲に猛なりしは昔日の高商時代なり。今はダブルカラーに替チヨッキ、而して五匁のゴールド―チエーンは新たに

購求せられたるなり、三分の粗髯を試みに一時間寫眞に撮る。聞説近く洋行の準備なり。旅行免狀は正に君の胸間に収められてあり」(「番傘の人々」JKL生、大2・

8「番傘」No.3)

これが大正初期の路郎のハイカラスタイルで、いかにも「雪」幹事にも相応しかろう。路郎は若年から一種のスタイリスト(心身ともに)であつたことが窺いそれよう。

さて、「雪」刊行に当たつて注目すべき傾向として見る人を捉える事は、路郎も日車も川柳という呼称を一切用いず「新短歌」の字句をもつてし「雪」全刊十九冊をすべてこれで押し通している点である。

「八月一日(大正四年)日車とともに『雪』を刊行し、新しい傾向の句にひたむきに押し進んだ。それがため、新傾向派と呼ばれ、既成派からは嫌悪された」(山雨楼メモ)

そうした新傾向の句とはどの様なものか。

―膝に足のせて一人の力なる 日車

―果太鼓今や鰻を裂んとす 同

―葬ひの雑音街の底よりす 路郎

―微風の吹くまゝ光りに歩む 同

「路郎と日車が『新短歌』と云うて十七字型の短歌風のものを作つて発刊したのが『雪』でしたが、同人にはなりたくてもなれませんでした。各方面のエリートを選んでいたからです。発表の作品も多様でバラエティに富んだ綜合雑誌でした」(葎乃書簡)

そういうえば「雪」には、のちの画壇の重鎮牧野虎雄や小出楯重がカットやスケッチを描きまくり伊藤鯉魚が独特のタッチで絶妙の筆を揮い、吉井勇の一頁組の短歌もある。

ところで筆者が注目したいのは、塩谷鶴平と宮林董哉の「雪」紙上における活躍ぶりである。なぜ、この二人は「雪」同人なのか。

鶴平は河東碧梧桐門下の重鎮である。

虚子の「守旧派」に拮抗する碧の「新傾向派」を支えたのは実に鶴平である。大正四年三月に発刊された碧主宰の「海紅」は鶴平の全面的な経済的援助で出た。編集は滝井折柴(孝作)中塚一碧楼ら碧門のそうそうたる顔がずらりと並ぶ。鶴平は碧の右腕と注目されていたという。鶴平は岐阜市郊外江崎村の大地主で、政治に関係して家を潰されるより俳句の方が家は安泰というので、家人がむしろ積極的に俳句を奨めた。彼は若年から新聞日本の碧俳壇に傾倒していた。本名塩谷熊威。

鶴平は伊藤観魚とは同じ明治十年生まれで、碧門を通して親交を深めた。鶴平は崇拜する子規を観魚の兄に伴われ伊予松山の子規堂に訪れたりしている。観魚は名古屋市の料亭金直の二男で、俳句に熱中して義絶になりかけた程で、雪同人は大阪の藤原游魚の紹介による。観魚がまた鶴平を誘った。鶴平は「海紅」のパトロンであると同時に「雪」のパトロンでもあったらしい。

宮林董哉は長野県生まれで本名弥吉

(明治20生まれ)若年から思想的なことで特高につきまとわれ、職業も転々とし大正三年碧門の縁で鶴平を頼って岐阜に來住し、鶴平経営の梨畑の人夫で三年を過ごした。「雪」終刊号(大6・2)は、牧野虎雄の二頁のクロッキート、あとは董哉が俳文二頁と、作句五十句で埋めわずか八頁の「雪」終刊号は消えていくのである。誌数十九冊の終刊である。路郎と日車もここでは完全に筆を絶っている。

路郎が川柳を新短歌と銘打ち、川柳における新傾向を目指したのは、鶴平をバンプに碧梧桐を信奉したのだとの説があるが、誤りである。現に路郎は「雪」誌上で碧の講演に反発し、碧の俳壇制圧の態度を激しく非難したあと、彼自身の新短歌観を次の様に述べる。

「今後の自分は何處迄も自己の作品の上には、眞と新との尺度を用いる計りではなく、自己の藝術、自己の生活に對しては飽くまでも眞摯な態度であり度いと思つてゐる。自分は常に藝術を職業としてゐる藝術家や藝術を模倣する水平線以下の

藝術家がするやうに一種の隋力によつて創作を續けしかもそれ等の作品を何等の苦痛もなく發表して行くやうな輕舉を甚しく惡むものである。少なくとも自分自身は自己を欺くやうな藝術に生きて行かうとは思はない。此意味に於て自分は何處迄も新短歌の上に不斷の努力を續けて行かなければならないのである。新短歌は要するに自分の日常生活の呼吸其ものであり更に自分の信仰が把持する所の祈禱なのである」(「雪新短歌會記事」、大5・1「雪」No.6)

この主張は子規が明治三十一年短歌革新に手を染めた頃の主張を背景としている。路郎の「雪」における新短歌運動は、子規に焦点を定めていたことは明らかだ。(「川柳雜誌」昭32・7・5古稀特集号)

路郎が大正四年三月「番傘」同人を辞退し、その五ヵ月後に「雪」を出している。「彼が「番傘」を去つたのは、よしの夫人との結婚問題が動機となつたように噂する人もあるが(筆者註——本連載(4)参照)、それはたまたま契機となつたまでの

ことであつて、むしろ創刊当時に参加し得なかつた不満をはじめとして、編集に介入し得なかつたもどかしさや、所謂、学校出としての孤独の淋しさ等が、累積した結果と想像される。

斯くして、昨日の親友は今日のライバルとなり、互いに関西柳界への翼を伸ばして行く運命の人となつたのである〔「路郎の番傘時代」塊人、昭48・9「ふあうすと」№507〕

このような見方が往時も現在も一般的な観測のようだが、山雨楼メモにはきわめて重大な一項が以下のように記されている。

「雪」は第四巻第二号(大6・2)で廃刊した。一年半で二巻で十九冊を正味出したわけだが、この廃刊の理由は文芸的日刊新聞を計画するために廃したもので、日刊新聞はついに諸種の都合により出なかつた」

塊人の観測によると、水府が路郎に相談なく「番傘」を廃刊したことが、結果的には路郎の「雪」をひき出した、といった

ごく単純な観測のようにもみられる。だが実はもつと底の深いものが路郎側に潜在していたということが言えると思う。

筆者にいわせれば、塊人の指摘する路郎と水府の「ライバル意識」は、新短歌志向の路郎と、伝統川柳志向の水府の、作句上のモチーフの異和感に伏在する、と断定したいのである。*3番傘誌上に路郎が執筆した「川柳講座」を水府が鋭く批判している。路郎はここにおいて番傘同人を下りざるを得ないと感得した、少なくとももそういうことが考えられるのである。

ともあれ文芸的日刊新聞の発行という途方もない夢は、二十八歳の路郎らしい発想だが、このニュアンスは後年の「川柳雑誌」の発行へとうけつがれたことはたしかである。

閑話休題、路郎を「雪」時代に還そう。

「雪」が勢いのよい時点では、路郎は翻案もの、小説、散文を手がけ多彩な才能ぶりをみせてはいるが、卒直にいつて稚拙そのもので再録に耐えるものはない。その中で、*4「雪」終刊の前夜の十八冊目

(大5・11・25)に、不死鳥の筆名で「庖丁と大根と葱」という注目すべきエッセイがある。

「はつ冬の陽の光りが玻璃天井から流れ下だる。臺所は今眩惑の明るさである。／庖丁がスカツ、スカツと大根を切つた。白い血がタラタラと流れた。大根は別に痛さうな顔もしなかつた。かくあるべきことを豫測でもしてゐたやうに静に俎上に横つてゐる。／聽やがて葱が引き出された。葱は悲しさうに眼をあげて庖丁を見た。庖丁は知らぬ顔をしてゐた。葱はおどおどしながら、もう一日でよろしいからと命乞ひをした。／庖丁は耳をかさなかつた。何の用捨もなく切り捨てた。青い血がとめ度なく流れてひとしきり悪臭を放つた。／莫迦な奴だ、之れが俺の日々の仕事ではないか。庖丁はさびしく笑つた。くる日もくる日も惨劇が繰り返された。／いつしか庖丁の腕が鈍ぶつて来た。一寸したことに疲れを感じるやうになつた。俺もとうとう錆さびのくる日が近づいた。永遠のために俺は怎どううし

たらい、のであらう」

新短歌運動に絶望するそれは路郎のうめきともいえるのではないか。切字の多い路郎作品が*5同じ誌面につきのように掲げられている。

—とむらいのしづしづといくひなたかな
—大根さげて婢こなのもどるひなたかな
—かうがいの銀はさびしくひかりけり

*1 路郎が東京から帰阪したのは大正2年で、海外流出許可願の申請と姉の看病のためである（「麻生路郎物語」(16)参照）。葎乃と結婚したのは大正3年。同年8月23日、日本はドイツに宣戦布告し、第一次世界大戦に参戦した。路郎が大阪中央電信局に勤務したのは9月1日からだと思われる（「麻生路郎年譜」参照）。翌大正4年には、まだ戦争は終結していないが、大正3年11月に青島を攻略し、同4年1月18日には、中華民国に対華21ヶ条の要求を出すに至ったので、電

信局での仕事も一段落して退職したのかもしれない。

*2 「くろぐろとうき川竹の水流る」の形で「雪」には収録されている。「行末は」の句は「雪」には掲載されていない。初出については、「路郎の人と作品」の「人物像」（橘高薫風）の註参照。

*3 「川柳講座」を「番傘」に執筆したのは、大正7年7月号と8月号。

「土團子」2号（大7・8）の「喫煙室」に、「水府氏が路郎氏と樂天地の横を歩きながら『ばん傘』の川柳講座は段々新しい主張に這入つて行くんですか、なるべくさうでない方がいい、のですがと不安さうに例の髪の毛をいぢりながら聞いた。さうですな、い、加減で打切りますと路郎氏は答へた。あれは川柳をはじめ人の地圖ですと路郎氏はつけ加へた。それでその話は「しまい」とある。

*4 「庖丁と大根と葱」は、「雪」16

号（大5・11）に掲載された。

*5 この三作品は、「雪」18号に掲載されている。

麻生路郎物語 (8)
—古マントと土團子—

「土團子」第一巻第一号



「雪」は大正六年二月に十九冊目を出して廃刊した。その全巻に目を通して筆者の眼を捉えた一つのコントがある。僕のマントと題するもので大正五年一月号（六冊目）に載っている。人間路郎の一面

を伝える消息として以下、主要部分を抄録しよう。

僕は冬が来ると、きまつたやうに叩いたら埃りの立ちさうなマントを引ずり出して平氣な顔で着て歩く。以前はみつともないと思つてそつと押入に突込んで置いて夜遅くか餘ツ程寒い時でなければ着て歩かなかつた。それがいつとはなしに平氣で着てあるくやうになり此の頃では反つて感謝して着て歩くやうになつた。暫く僕をしてマントの由來なるものを語らしめよ。

大體僕のマントなるものは、僕の死んだ親爺から兄へ、兄から僕へ譲られたもので、親子三代に仕へてよく忠なるものである。僕に男の子でも出産れば譲つてやりたい位まだまだ健康状態にある。スタイルなどはそもそも末のこと歴史は永久に光を放つて居る。

僕がまだ小學校の門を潜つて居た十幾年の昔に、島之内あたりの或る洋服屋で進水式をしたのがこのマントである。し

つかりした記憶はないが勿論名のある洋服屋ではなかつた。なんでも或る人のついでで羅紗を安く買つて貰ひその洋服屋には五圓ばかりで仕立てさしたのだと思ふ。その時分の親爺は、ある合資會社の一番番頭で月給は僅かしか貰つてゐなかつたが相當に廣く交際をしてゐたので會計は兎角足らぬ勝ちであつたらしい。半期の配當がそつくり自分の手に落ちるやうなことはなかつた。それにもかかわ

らず遊び好きであつたから自然着類の方は手がとまかなかつた。マント代の三拾幾圓はそんな苦しい會計から支出されたのであつた。それでも親爺は借りやうとはしないで三拾幾圓を綺麗に拂つて現金の價値を我等に示して呉れた。それ以來、新しいマントの冬が幾度か巡り巡つた。明治四十二年の夏、大阪に未曾有の大火があつて間もなく親爺は腦溢血で亡くなつた。引續いて人のいゝ兄が戸主になつたので自然マントも兄の手に移つた。兄はその後萩の茶屋の郊外に安い家を借りて會社員生活を續けてゐた。西風をま

ともうけて毎朝葱畑を抜けて行く兄はいつもこのマントにくるまつてゐたが、会社を退いて自分で商賣をするやうになつてから殆んどマントの必要がなくなつたので僕に呉れることになつた。

兄でも僕でも段々と親爺に似て、背はすらりと高くはなるし、肥つてゐた肉は自づと落ちて了つたので寸法の上からは左程見苦しくもなかつたが、扱貰つてみると聊か迷惑でもあつた。その頃の僕は高商出のチャキチャキで、一ト角の青年紳士になりすまして居たんだもの、月賦の洋服やオパークートは着ても三十年式の古マントは御免蒙りたかつたのだ。それからの數年間は僕の野心が東京へ走つたり、大阪へ舞ひ戻つたりして夢のやうに暮らしてゐた。幾度か病魔のために纏弄されたのもその間であつた。それから結婚もすれば金錢問題の苦痛も現實に知るやうになつた。そのころに僕の病軀をしつかり抱き締めて僕の心的革命を助け呉れたのはこのマントであつた。僕は毎日平氣な顔で舊世紀のマントを着て歩

くやうになつた。

僕に第二の心的革命が起つた時分には僕は一人の兒の父になつてゐた。此の調子では僕に二人目の子が産まることがあつてもマントの新調はとても覺えない。

僕は天の恵みの甚大なのを思ふてこの古マントに深く感謝してゐる次第である。僕等は既に社會から勞力對報酬の問題は聞き飽きているが、僕に與へられた一着の古マントは永久に報酬を求めてゐない。

「土団子」が「雪」にかわつて発刊されたのは大正七年七月である。上質アート紙八頁からスタートした「雪」にくらべ、こんどは新聞用紙のザラ紙二十四頁、いかにも「土団子」らしい体裁である。同人は川上日車、斎藤松窓、松村柳珍堂、服部ふくべ、麻生路郎の五人。表紙は小出楢重画伯描く二色刷だ。

創刊号目次を眺めると「雪」同人だった藤原游魚、兼崎地橙孫、宮林董哉の作句には、ゴシックカッコ入りで（俳句）。路郎

ら五人の作品にはこれもいちいち（川柳）という肩書のカッコ入りである。「雪」誌上には全くみえなかつた川柳の文字が、正面切つてここに登場する。かわりに、新短歌の文字はカケラも見えない。本文のはじめに掲げた古マントの感触を、角張つたゴシックの川柳の文字の底に感じざるを得ない。「高商出のチャキチャキ」が「心的革命」の第一次試験に精神陶冶され古マント（川柳）に還る象徴とも受け取れぬこともない。

新柳誌「土団子」の誌名は、*六厘坊が「葉柳」を創刊する以前に発刊した同名の柳誌（一号で廃刊）を路郎が復元したものとみられる。（葉柳Ⅱ第三卷九号にも「土団子」の標題で六厘坊作品七十一句が掲載されている）

「土団子は六厘坊の句および、彼の想い出を載せる目的で出した。これは丁度トルストイ研究の雑誌があるように、六厘坊を研究しまた彼に関する材料蒐集に資するためであつた」（山雨楼メモ）

余談だが、右のメモの中に出てくる「ト

ルストイ研究」は大正五年九月創刊号を出し、大正八年一月終刊号で閉幕全部で二十九冊。ロシア文学研究家を中心に、大正文壇を担う作家がすべて網羅されていた異色A級文芸誌であつた。

この本が出た大正五年は、第一次大戦勃発の三年目にあたり、ロシア十月革命の前年で経済界は戦乱の余波をうけて利権あざりに狂奔していたが、同時に大正デモクラシーが国内において頂天に達しようとした頃である。白樺派の理想主義が世間の注目を集めたいわゆる民衆芸術の台頭期である。その時点で思想家トルストイは人道主義のシンボルであつた。路郎らがこうした文芸誌に着目したことは、いかにも彼の青年期を抱きかかえた往時の文芸復興期が、ロシア文学を焦点づけて推移していたかがよく看取されよう。もつとも彼の場合、六厘坊がトルストイであつたわけでもないが、「土団子」には翻訳もののトルストイの家出より臨終までをのせ、センターウイッチの短篇を収録するなど、路郎

のロシア文学への傾倒ぶりがうかがえよう。

だがそうした「土団子」も結局、四号をもつて終刊する。時に大正七年十月。この辺で「雪」から「土団子」で再スタートした作家としての路郎の気組は一体どのようなものであったか、その創刊号の巻頭の言葉を要約してみよう。

▼現代の柳界は例せば青い玉と赤い玉の時代である。

▼青い玉は静的である。池の中の水である。水底に沈澱せる黒い土である。その土に壓せられたる朽葉である。彼等は遂に自己の流れ行く運命をさへ知らないのである。

▼赤い玉は動的である。天上に燃ゆる太陽である。世にありとあらゆるものを焼かんとする火である。この故に頗る危険である。しかしながら此の危険のない處に眞の革命はない筈である。

▼(略) 青い玉は完成の藝術である。完成した藝術の模倣は藝術の墮落である。

▼寶曆明和の川柳は、此の意味に於て青

い玉である。江戸趣味の謳歌者は青い玉を憧憬して現代に死せんとするものである。

▼赤い玉には未完成の藝術を完成した藝術にせうとする努力がある。怎うしたらこの藝術を完成させることが出来るかといふ煩悶が横つてゐる。

(中略)

▼茲に我等は青い玉の上に赤い玉を建設することを宣言する。我が「土団子」は、柳界の平和を打破して、新しい川柳王国を築くために放たれたるピストルの一弾である。(路郎生)

このような意気込みの中で路郎作品とはどのような傾向か。同誌創刊号に「須磨雜觀」と題し、一句三行組で新作十一句がある。

○ ひるのふろ

あを葉のかけの

おつところ。

○

いひたいことは

風に吹かせて
海へうみへ。

○

右のようなスタイルの句で、「土団子」四冊に計三十八句を発表している。

— 手紙を書いてゐれば朝顔の花

— よく来てくれましたと髭がのびてゐる

— 泣き顔をみせずお茶漬だけはたべ

以上の路郎作品は、いわば「雪」の新短歌後遺症? ともしうべき傾向のもので、後年の彼の作品系列からすればとるに足りない句が多い。

「土団子」は菊版24頁だが、これが廃刊の直後の大正八年六月、路郎の印刷発行人で「後の葉柳」が出たが、厚紙二つ折四頁の一見ハガキ通信を拡大したような体裁のものだ。その創刊号に川上日車が次のように書いている。

「子子が湧く」

ゾラは自分の書いた物に自然主義といふ名をつけてゐた、そして其主義のもとに自分の作品を公にしてゐたが、了ひには主義そのものの爲に束縛されて、終り

に書いた二三部は極く窮屈な物だつたさうである。私は遂に窮屈で終つたゾラ其人をほんとうの自然主義であつたと云ひたい。

私等が曾て雪といふ雑誌を出してゐたのも矢張り主義の爲であつた、それから『雪』を廢刊したのも主義に縛られて動きがとれなくなつた結果である。此頃では斯う思つてゐる。人間は餘り主義とか主唱とかを持たない方が結局世の中が大きく渉れて面白い、鮮くとも自分だけは自由であるけれども主義のない行動は往々動かされ易い缺陷が生じる、それさへ氣をつけてゐれば主義なんかは拵へぬ方がよいかも知れぬと。

元來川柳に主義はない筈だと思ふ、川柳そのものが既に大なる主義である。和歌俳諧の踏込めぬ領地を全部川柳が拓いてゆけばよい、それを川柳であるののではないと自ら狭くする必要は更にないのである、自覺して新しい道に進む者も認めてやれば、江戸趣味を研究してその道に止まつて居る者も認めてやるがよい、所

詮は皆川柳のために力を盡してゐるのである。邪道だからと言つて新しい道を塞いで了へば、残る水の中には屹度才子が湧くに違ひない」

筆名は日車だが、あきらかにこの主張は路郎そのもののそれと考へてもよさそうだ。

この「後の葉柳」の同人は木村半文銭、川上日車、麻生路郎の三人である。エリート意識を満喫した形の文芸誌「雪」からみれば、はたまた故六厘坊をめぐつて活氣横溢の「土團子」に較べれば、寂寥そのものの同人三人との感慨は深い。わずか三枚のこの二つ折の楨形の柳誌から、その三人の作品を抜き書きしてみよう。

一人に使はるゝ身のともすれば腹立ち

日車

水に逆らふとはせぬ船の親子ぞ

藏の戸前はかたく鎖されて三味の音色

同

親となる其日くの手の脂

貧しさの素直に生れ來りし子

貧しければ此人間のもつ力

同

天井の低くさも知らず子はうまれ

路郎

踏ん込めば卵が風に吹かれてる

正直がなにのたしにもならず死に

三人三様、川柳を闘いとる氣のその同

人の三つの貌の貧しさが、こうした句の背後から次々と浮かび上がる。彼等はそろつて貧しかったようである。特に、ことあれば柳誌、柳誌、印刷屋としない古本屋渡世の身でありながら、ちと並はずれた道楽でのたうち回る主人を抱えた、その一家の暮し向きとは……。それを「後の葉柳」三部の当主路郎自身の句に眺めてみよう。

一つ蚊帳にさかなのやうにならぶ夜ぞ

思ふまいとすれど月給はたりず

酒のめぬこのかなしみを捨てにゆき

食ふだけもないのに今日の手がよこれ

溜息となつて出て來るものがあり

「娘（二女―筆者註）の死、米の騒ぎ、百

度に近い暑さが頭の中に渦まいてゐる」

（MEMO、大7・9「土團子」No.3）

「時計が夜の一時をうつ、世間はしんと

して、終電車がカーブに軋る音が微かに聞える。寝返りをうつと長女が掛布団を盥廻しにして居る。三男坊は我威力を見よと計り枕外の第一戦に乗り出してゐる。これも親のつとめかと、三度目の布団を掛けに起きて行く。寝顔はあらゆる此世の罪を父に委托したといふ軽さが現はれてゐる。こんな夜、こんな時、吾々は川柳や、俳句どころでないといふ頭上の壓迫を感じる」(「喫煙室」、大7・10「土團子」No 4)

* 「葉柳」は明治39年6月に発刊されたが、その刊行は途切れがちであつた。その穴埋めとして、明治41年8月1日に1号だけ発行されたのが「土團子」である。六厘坊が書いた「大阪より」に、「葉柳は當分のうちは休刊する事にした、別に大した理由はない、同人が本業に忙しくつて不生産的の事業に掛つて居られぬからだ、それとも一つは葉柳を一層完全な雑誌にしたいと云ふ希望があるので

この計畫の熟する迄つまらぬ物を出すのは感心せぬからと云ふのだ、その間のつなぎに小生の「土團子」を發行する、これはほんの間のくさびだ、極く愚劣なものだが選句其他すべてによく注意するつもりだからよろしく頼みます、例に依て葉柳購讀者には本誌を送ります、押付まがしい所置だが悪しからず。原稿は澤山ある、「土團子」のも「葉柳」のもはつ／＼載せて行くつもりだ、眞逆雪隠行きも命じませんからそのつもりで」とある。「葉柳」復刊号は、明治42年1月1日發行された。

麻生路部物語 (9)
—同志の人々—

「土團子休刊のあとをうけて、大正八年六月「後の葉柳」を出した。「轍」「矢車」「雪」「土團子」と生命的な川柳の新しい運動に没頭していた私は、その頃日車君と

「日車句集」昭和31年刊



ともに、句だけを遺しておく意味から「後の葉柳」を出すことになり、それへ半文銭君も引ずり込んでしまった形である」(山雨楼メモ)

「後の葉柳」は、枡型四頁の小さなものを三部だけ出して止めた。理由は小島紺之助君が出した「楊柳」の応援を頼まれたので「後の葉柳」を犠牲にして句や柳論を「楊柳」に発表したのであつた」(山雨楼メモ)

「楊柳」は「土團子」の誌名を変えただけの体裁で二十八頁建ての堂々たるものであつた。創刊は大正八年二月、その第六

号あたりから「後の葉柳」は同誌に吸収された形で、日車だけが同誌同人となり、路郎、半文銭は松窓を加えて社友となっている。なお顧問に劍花坊と柳珍堂の二人を迎えた。

「楊柳」の編集兼発行人の小島紺之助（本名市松）は、大阪府泉北郡大津町に住む地主の息子で、劍花坊の「大正川柳」の系列を標榜して紺前楼、紺前懸などの筆名で埋め草も手がけているが、柳文は生硬で句も

—見わたす限り海の柱にもたれけり
—斗はずして勝つあけがたの雲

といった傾向のものが多し。

この紺之助が「楊柳」誌上で*1^{古川}柳抹殺論の一大論陣を張っている。その中で久良岐を「宝曆六代の江戸つ子を負し、その陳腐的川柳」のくだらなさを正面切ってコキ下ろしている。路郎もまた^{先輩無用論の前提}（「楊柳」No.4）で久良岐川柳に大ナタを揮い、若き作家に與ふるの言葉^{を書き、暗に久良岐流に筆誅を加えている}。時に彼、三十二歳——短文

なので全文引用を試みよう。

「柳樽はお前の求むるもの、影に過ぎないと思へ。

それが怎^どんなにお前の心をひきつけやうとも、いつまでも柳樽に頼つてはいけな

い。

頼るときにお前の句には命がない。そして柳樽の句よりも小さいものにならぬ。

常にお前自身の力で、お前自身の句で柳樽を覆ふてやれ。

しかしながら柳樽を読むことを忘れてはいけない。眼で讀むことは避けよ。心で讀め。讀んだら直ぐに捨て、了へ。（「若き作家に與ふるの言葉」、大9・1「楊柳」No.7）

こうした論陣に頭にきた久良岐の手紙も「楊柳」に載せられている。要旨次の通り。

「兄等の態度の卑怯なのはなぜ川柳界に向つてグズ／＼云はずに、俳句や短歌に向つて戦争しないのかにあり升ワレラから云へば兄等の行動は短歌俳句のマワシ物のやうにも見えるといつて可なるも

のであります。

死んだ六厘坊はソレ迄に卑怯な男ではありませんでした。私とある點において共鳴しましたが私は川柳家として江戸趣味を保存し宣傳するの合理的なのを知つて六厘坊と別れました。

（中略）

道を信する上は二つはありません。都市享樂の美に渴仰するワレラです。ケチなアリキタリの短歌や俳句でやつている思想を（寧ろソレ以下の）只川柳に移して新しがる連中ソシテ古川柳にケチを付ける連中に反對するのであります。川柳に江戸趣味を再現する。大兄は「思はない」小子は「思ふ」の二つであります。様式の新古は問ふところにあらず。私等は古川柳に對して侮辱を加ふるヤツラは進んで刺し違へて死せんとする位の意氣を有してゐる。

（中略）

小子は兎に角郵船株一百株を川柳に擲ち、献身的に川柳を宣傳するもの故、ヘンな事をいつて川柳を阻害するのはドシ

く「反對します。機關雜誌がない小子一人の事故ハガキで申上升。小子の手紙即雜誌であります。(日車宛)」（阪井久良岐氏より）、大8・7「楊柳」No.2)

劍花坊流の新川柳を遵奉するその門流にとつて、古川柳一辺倒の江戸っ子川柳の久良岐流とはもともとその肌合いを大いに異にするわけで、紺之助も日車もその争点をふりかざし、相手を名指しで罵倒する。その様を横合いから冷静に凝視しながら、わが道を往く柳界の一異材がいた。俳人鬼史こと松村柳珍堂である。路郎と柳珍堂の風交は「葉柳」以来で、「雪」「土團子」の同人から、路郎が「後の葉柳」を出した頃にも、路郎が持ちつづける結社大阪川柳社同人でつき合つてくれた路郎の同志の筆頭格でもある。

柳珍堂は明治十三年生まれ、路郎の八歳年長で、死去したのは大正八年九月十四日享年四十であった。「楊柳」の終刊はその翌年二月で八号で終止符が打たれた。柳珍堂の死が原因だとされている。日車は「楊柳」六号で、柳珍堂の臨終と題

しつぎのように書いている。

「八月七日、柳珍堂は私に左の遺言をした。一、句集を出さぬ事 二、追悼會を営まぬ事 三、追悼号を出さぬ事 尙家族に對しては 一、香奠を受けぬ事 二、葬式は血族のみにて行ふ事 三、短冊類は一切焼棄の事

(中略)

法號は死ぬ三四日前自分で『黙操洞鬼史居士』と命け只管死期の到るを待つてゐたやうである。其後坊主が来てこの法號は法にないと言つたさうだが、この坊主こそ坊主でないと思つた。『黙操洞』とはたしか四五年前、碧梧桐氏が柳珍堂に贈つた洞名のように記憶して居る。

(中略)

柳珍堂が川柳に指を染めたのは、明治三十八年であつたが、句集は三十九年の『葉柳』第一號から順次抜いて『番傘』『雪』『土團子』を経て『楊柳』で終る事になつてゐる。(中略)

句風は古川柳を基礎とせる自然の順路から這入つて、『雪』時代にや、變調を來

し、『土團子』時代に於て最も柳珍堂の個性を發揮した故人獨特の境地に進み、『楊柳』に於てその全人格を表現して、我が畏友は寂滅した。今日の大坂柳壇の人々は、大なり小なり柳珍堂に刺戟せられ、啓發せられた事は私が言ふまでもない事である。特に私を始め當百、半文錢、力好、常坊、路郎の諸氏は故人に負ふところが多かつたやうに思ふ」

路郎も大要次のような悼文を書いている。「柳珍堂氏の死は日本の新らしい柳壇のために致命傷であらうと思ふ。思想の非常にすすんだ、しかも表現法の最も巧みな同氏を失つたことは遺憾千萬である。やくざな川柳家を百人失つてもいい、千人失つてもいい、ある意味から言へば殆んど全部を失つてもいい、から柳珍堂氏一人は生かして置きたかつた。柳珍堂氏を或る時は友とし或る時は師とも仰いでゐた日車氏の落膽は想像に餘りあるものである。

(中略)

同氏の舊作で

—きれし日の晝の暗さを忘れかね

は私達を怎^どんなにか唸らし、嬉しうがら
せ、刺戟したことであらう」(開ふ者の爲
に、大8・11「楊柳」No6)

日車はまた、酒すこし飲めば淋しくな
るものぞ(「楊柳」No5)の題名で柳珍堂
の死を書いている。

「(前半略) 忘れもせぬ今年の六月、雨
のドシャ降りの日、これが最後の別れに
ならうも知れぬといふので、観魚と二人
見舞つた時の事である。柳珍堂は瘦せ衰
へた身軀を腹這ひにしなうがら、しげしげ
と私と観魚との顔を見比べながら、こん
な話をしてくれた。

今日は幸ひ観魚君も居る事だから、日
車君の事について少し話しておきたい。
それは僕の命もどうせ永くはあるまいと
思ふにつけ、氣残りになるのは日車君だ、
(中略) 日車君は僕の知つてゐる人間の
中でいつちよい素質を持つた男だが今一つ
頼りない所があるので困る。それに第一
自惚心が強い、第二に野心から免れ去る

事が出来ない、第三には輕はずみでいけ
ない。これは今後とも、僕の亡くなつたあ
との観魚君も氣をつけてやつてくれ給へ、
(中略)

柳珍堂はまだ何か言ひたさうであつた
が、疲れが出たのか、暫く失敬するといつ
て横向きに寝て了つた。話はとう／＼そ
れきりで二人はこゝを辭し去つた。柳珍
堂と観魚とはこれが最後の別る、日であ
つた」

「楊柳」(No6・8)に掲載された、柳
珍堂句集より

- 風呂場から胡瓜を揉んでおけといふ
 - 執達吏藏へ這入つて目が利かす
 - 十四の春剃刀が欲しかつた
 - 鮎は焼かれ氷は鮎に似て残り
 - 馬おのゝきて橋おのゝきて渡り
 - 水引は掃き残されて膳が出る
 - *₂ 脂手といふを姑が先に知り
 - 酒するて女は蘭の花を見し
 - 茶をかける時にみだらな目を遣ひ
 - 北の空より我に迫りては消え去り
- 日車は明治二十年生れで路郎より一つ

年長である。路郎と六厘坊は同い歳だが、
日車は六厘坊とともに大阪の市岡中学の
第一期卒業生である。日車が一年落第し
たからである。日車の父は、この落第は川
柳のせいにしてこの趣味を厳禁したた
め、その柳名七厘坊を日車と改めた。この
七厘坊は、六厘坊より一つ年上だからそ
うしたまでだといふ。

天才六厘坊と自称し、当百という出来
のいい先輩すら手古ずつた六厘坊に対
し、日車も似たような才子肌の男、二度も
絶交を宣言しあい、そのたびに路郎と斎
藤松窓が仲裁役を引き受けている。日車
も六厘坊とともに商家に生まれ、中卒後
は、任時の仕事着である厚司姿で、川柳に
血道をあげ「葉柳」誌上ではともにその筆
鋒を競い合つたものである。

筆者は本稿を纏めるに当たつて、必要
資料を数多く眼を通す立場におかれたわ
けだが、次々とその資料を手にするたび
に、眼をみはる思いにさせられたのは、川
上日車という人物の多彩かつ迫力に溢れ
たその作句論と柳論の凄じさであつた。

自らを天才に擬した六厘坊すら影をひそめ、路郎とても茫乎としてその画中には無いのである。「竜眼よく鳳眼に点ず」で、柳珍堂としてその死の床で、若き日車への戒告に馳られたのであろう。

日車は昭和34年11月9日に死去したが、それに先だつ三年前に『川上日車句集』（昭31・1・1発行）という小冊子を出している。^{*}大正三年から昭和三十年までの作句の中からわずか一一九句を抜きだした唯一の遺品である。その自序に言う。

「人生の果てに辿りついた私は、これになにもすることは無い。ただ、峻烈な世上の批判は、やがて一句も遺さず削つてくれるであろう」

この自らへの峻厳さに、筆者は死の床の柳珍堂の遺言や、彼への遺訓の陰をみる訳だ。

—思はじと椿の花を火に焙べて 日車
—土ほれば土 土ほれば土と水 同
—賽銭も手にあるうちは只の金 同
この日車に見合う、若き日の路郎の同

志がいま一人いる。木村半文銭である。

「萩の茶屋のころ、つい目と鼻の先に半文銭君がいてくれた。毎日のようにお互いが往来し合つて、暇さえあればわれわれの主張について語り合ったものだ」（山兩樓メモ）

木村半文銭（本名三郎）は路郎より二つ年下で六厘坊に兄事して柳号三厘坊。萩の茶屋のころは砂糖の仲買人をやつていた。

「木村半文銭氏は貧乏と川柳を一緒にしてゐる。惜しい男である」（喫煙室「路郎、大7・8「土團子」No.2）

「葉柳」のころは、清新の気溢れる古川柳調であつたが、「土團子」から詩川柳の傾向を強め、「後の葉柳」では生活苦が句の前面に押し出され、その廢刊とともにプロレタリア川柳とも称すべき悲惨な人生に没入する。

「大正十二年度の所謂川柳革新運動に参加して以来、窮迫せる生活のドン底に沈みつゝ、精神的にも、物質的にも、幾多の難關に直面し、或は家主より家を逐は

れ、金貸より封印を受け、妻とは別れ、住み馴れた土地を去り、三人の幼な子を伴つて幾度路頭に迷ふたか知れないのだ。

この間、尙屈せず所期の目的を貫徹するため、同志の陣營に據つて惡戰苦闘を文字通り續けて来た」（木村半文銭句集「自序、昭8・7・10発行）

—九尺二間の家の砂漠に秋の風
—机——お前も明るい家に行きたいか
—杖から死は一二寸さきにある

—死の梯子をかけおる——ひとり

第一次大戦後の一大經濟恐慌にさらされ、無産階級運動の吹きあれる中に、米騒動や、関東大震災、アナキストの虐殺、プロレタリア革命運動をめぐる弾圧、暴動の流血や、護憲運動をめぐる政局の混乱、農村では凶作飢饉、売られ行く娘達、奸商汚官の横行——そうした大正デモクラシーの暗い面皮の裏側で、谷底で、川柳というかほそい灯を掲げて必死で暮しの怒濤と斗いぬく人々たち。

正常な世間の眼からすれば、正しくそ

れは風狂の狂の字が、やけにきわだち妖奇とも感得しているのかもしれない。だが、ひたすらに、川柳人は歩む、歩む。日車と半文銭はこうして、路郎の視野から遠ざかり、ついにかつての日の路郎の傍らに還ることはなかったのである。この二人によって新興川柳誌の旗手の「小康」は生まれた。時に大正12年2月。同誌に現われた二人の作品傾向は次のとおり、

—元日——喜る 半文銭
—錫鉛 銀 日車

*1 「古川柳抹殺論」は、「楊柳」7号（大正9・1）に掲載。
*2 この句は、柳珍堂句集にはない。
*3 昭和31年の「日車句集」は番傘川柳社刊。昭和8年10月21日、川柳叢書刊行会からも「日車句集」は刊行されている。

麻生路郎物語 (10)
—こども地獄—

路郎夫妻は、その五十二年間にわたる結婚生活で、四男五女の九人の子供に恵まれている。

—子煩悩がつたんがつたんしてくらし

路郎

—あるときは子をだんばしでくひとめる

同

—浴槽へずらり立つたは皆わが子

葎乃

ロンドンの一周忌

—まぼろしであつたか死んだ児の裸

同

—一周忌こんな蒲團で寝てゐるたか

同

九人の子供は、結婚生活の前半二十年間に集中した形である。結婚した翌年四月に長女純子、その翌年の大正四年に二女御世子（かぞえ三才で死亡）翌五年に三

女御幸（かぞえ三才でこの子も死亡）と年子の出産で、大正八年に長男ロンドン（昭和二年死亡）翌年四女奈那。大正十一年次男アト。大正十四年五女リリ。昭和四年三男一歩。昭和五年四男洋（三才で死亡）と年子の出産歴で続いている。以上の九人のうち二男二女を幼くして失っているが、最も愛惜多いわが子の死といえは、長男ロンドンの場合であつたようだ。可愛ざかりの男の子であつたことが、三つの子供ばかり死なせた夫婦にとつては、最



大正12年3月21日（水）鳴尾遅日荘玄関横にて莢豆氏撮影。葎乃女史と長女純子さん。後は、野口雨情先生

も心に残るのもムリはない。

「長男にロンドンと命名して、その名を英文で区役所に届け、戸籍係と激論したという珍話もある。彼は家庭にあつて夫人と子供を叱らない。むしろなすがままの自由である。ロンドン君の発音が英語に近いとて他愛なく笑う素直な父親である。」〔大正川柳〕大12・安川久流美

世に「死ぬ子みめよし」というコトワザがあるが、路郎夫妻にとつては、長男出生の喜びに加え、九歳まで元気に成長をみた愛児だけに一しおの愛着ぶりであつたことは、両親の断片的メモや、母葭乃の追悼句にもよく示されている。

ロンドン、アート、リリといったカタカナの名を、戸籍に登録することについては、当節ならいざ知らず、大正時代としては誰しもこのことに奇異な想いを誘つたことはあきらかである。以下は葭乃書簡に示された、母としての葭乃の感慨である。

「子供の名前は、呼ぶ時の符牒のようなものです。ですから何であつてもよい

のです。私は万事が路郎まかせですから、

よしんば嗜みの名を苦勞して寄せ集めたところで、結局、路郎の好きな名に落ちつくのですから、一人でできることにした方が手数もかからなくてよいと思うのです。子供の生年月日と亡くなった日をきかれますと、私のような子沢山には生まれてきた順番さえ忘れているのですから、いずれが姉やら弟やらと、実におぼつかない記憶をたどらねばなりません。ただ、私の脳裡にハッキリ植えつけられている事は、小児科の先生を島の内の本院や、九条の分院へまで病児を抱いて居眠りながら街を歩いたことです。

ロンドンの死後などは、何を見ても思ひ出の種で、車に乗つていても道を歩いていてもわけもなく泣けてくるのでした。幾日も幾日も、私はだまつていました。言葉を忘れた人のように――。そんな氣づまりの時、いささかでも、私の心を慰めて呉れたのは、門下の関本雅幽という

人の弔句でありました。それは
一砂手本 さぞはげむらんはげむらん

と云うのでした。

常安橋の古本屋時代には、通いの子守さんを二人雇うていました。鳴尾時代には五十恰好の所帯盛りのおばさんがお台所をきり回してきていました。アートなどは、静岡のおばちゃんと呼んで、大層なついでいました。そのおばさんが、のつびきならぬ急用で、暫くひまを取つて帰国している間の出来事なのですが、五人の子供が流感で枕を並べて寝込みました。お手伝いさんもなく、私は帯も解かず、二十日間は座つたままの看病でした。水枕や胸の湿布の取り替え、服薬と一睡もできませんでした。西宮の主治医へ電話をかけて相談をする暇もないうちに、ロンドンの病状が悪化してきたので、鳴尾のお医者様と看護婦さんを紹介して貰いましたが、四人の子供を二階の部屋へ隔離しましたが、ロンドンはなにかにつけて条件が悪く、とうとうジフテリアで亡くなりました。

ロンドンの葬儀のあと、間もなくリリが中耳炎が悪化して、阪大病院へ入院し

ました。阪大川柳会の尾崎方正先生の手術を受けたのですが、三才の子供が頭蓋骨を削り取らねばならぬ大手術でしたので、可愛そつで、私は昼夜リリのベットの傍らで世話をしました。

ところがこんどは路郎が腸チブスで入院してきました。私はリリを鳴尾へ帰し、そのまま路郎のつきそいで入院を続けました。リリは毎日鳴尾から祖父芦村に抱かれて、耳鼻科まで処置を受けにきておりました。私は路郎の入っている別館から脱け出し、こっそりとリリと父芦村の姿をよそ目ながら眺めてはわずかに心を慰めていたことでした。

このころ路郎の友人たちは、私達一家が、一家心中をするのではないかと案じたそうです。私の子育ての間は、一度落ちついてゆつくり食事がしたい、一度ゆつくりと眠りこけたい、こんな単純な欲望に毎日、毎日とりつかれたことでしたが、その望みはながい間、叶えられる日はなかったのです」

著者が、昨年生駒へ葭乃夫人を訪問し

た際——談たまたま子供の話になったとき、この老女は、慄然とこうつぶやくのだった。

「沢山の子を抱えた若いころの私は、いま思えばこども地獄のこの一語につきます」

葭乃書簡は、まだ続く。

「永い人生の紆余曲折を、考えただけでも私などはぞつとします。門下の一人がいわく、これだけ毎日寄せて貰っているのですが奥さんはいつもおんなじ顔ですなあ」

私の感情はそれほど動くことはなかったのです。私は幾度も子供を亡くしましたが、人の前では決して涙をながしませんでした。父芦村も言いました。女というものは、葬式が出てからも、いつまでも泣いているもんだが、その点お前は、よいなあ」と。

私は軍人の妻にふさわしい、情強わな人間なのでしょう。人前も恥じずに手はなしで泣くのが私にはどうしてもできないのです。そこまで取り乱した自分の

おろかさを人に見せたくないのです。こんな非人情な根性でいる私ですから、明日はあすの風が吹く式で、景気がよくて、わるくても気持ちの上の動揺がないのです。子供達はよくわたしに言いました。「お母さんは無神経だ」と。然し誰の眼からも無神経だと思われる程、何事にも抵抗を感じない姿勢にはよほどの訓練が要るのです。私は永い間にその修練を経てきました。

——今日の私の心に嵐立ちそびれ

〔福壽草〕より

父芦村は、私の母の死後いつも母の命日には、納骨をした天王寺の一心寺へお詣りをしていました。一度も缺かしたことはないのです。家へお詣りして貰う菩提寺、つまり檀那寺がなかったからです。御世子も御幸も、お骨はすぐ一心寺へ納めましたから、戒名もなく俗名のままであつたと思います。(葭乃書簡)

葭乃書簡に眼を通していろいろうち、筆者は、いつとはなしに与謝野晶子のイメー

ジが、その達意のペン跡につねにたちまどつてゐるのを強く意識した。晶子は葎乃と同じ堺市の出身である。晶子の娘で、里子に出されてゐた与謝野宇智子の出した『むらさきぐさ』は、世に秘められた歌人晶子の人となりやを冷たく凝視した母を語る手記である。それによると晶子は十三人の子を産んでゐる。

晶子と夫の寛との生活は貧しく、その上、子供がつぎつぎと生まれた。双生児や死産、数人の子は里子に出す。晶子にとつても、まさに子供地獄のあけくれであつたらう。

—胎の児は 母を嘔むなり影のごと
無言の鬼の手をば振るたび 晶子

—その母の骨ごとごとく碎かるる
呵責の中に健き子の啼く 同
—生きてまた帰らじとするわが車 同

刑場に似る病院の門

同

晶子は明治三十四年に結婚し、翌年長男が誕生してから、大正八年六女の出生をみるまで十七年間に十三人の子を生んだが、これだけの子の保育に、女中の手を

かりようとどうしようと、母親としての厳しい現実には毫もかわりはない。

晶子の生家は羊羹屋であつたが、父鳳宗七は、文人肌の読書家で、漢籍に造詣深く、俳諧に通じていた。晶子はこの父の感化をうけ、十二歳から家業を手伝いその仕事の中の唯一の楽しみは読書で、源氏物語もその齢で読破するという才氣ぶりであつた。

晶子が「明星」から新詩社時代の『みだれ髪』へ、そして「青踏」時代へと、その生涯を浪漫主義の色鮮やかな朱色のタテ糸で貫き通した彼女の文学思想とは、簡潔にいえばそれは「生む」という女の肉体を通して知つた地を這うような身の重い生活現実からふりあおぐ空想領域。天翔ける想いそのものではなかつたか。晶子の性の強さはここにあり。

昨年十二月十四日付の葎乃書簡にこうある。

「家族の者が病気になる日といえば、一カ年に一カ月もあれば上々だつたのです。もし私が晶子さんのように双生

児でも産んでいたら、とうの昔に私という者は消えてなくなつてゐます。晶子さんは根性の座つた強い女性ですけど、私にはそれがちつともないのです。人目からはさも暢気そうに見えてます偽善者なのでしょうか。

この世の中に生を得て悩みのない人はおそろく無いでしょう。悩むなという事は、死ねということに等しいのです。拙句

—舞扇もてば霞も十重二十重

という心境で暮していきたいのです。だから私は人生の暗い面は、なるべく覗かないようにしてゐるのです。すべて悩みの素因となるものは、気前よく切り捨てて終います。いわば体裁のよい隠遁者なんです。鼻持ちのならぬ卑怯者なのです。だけどそれが私の性分なら仕方がないでしょう。路郎が私によく言いました。お前ぐらい人の言うことを真面目に受ける者はない、楽屋丸出しにするものはない。と。私を一番よく知つてゐる者は、路郎です」

筆者は晶子の娘の書いた『むらさきぐさ』

「さ」を生駒へプレゼントしたわけだが、彼女はその後感をつぎのように寄せている。

「到着の本、夕方から夜中へかけて読み終りました。あれを読んでいますと、私も子供に何も言わないところなど、一寸晶子さんに似ているような気がします。実際に夫から言うてくれたようなことを二度くり返さなくてもいいわけですから、私も人にしゃべらせておいて黙っている方です。家のものにいわせると、たとえ一言でも母の言葉があれば子供（里子で育てられた）が満足するということです。血を分けた子供にそんな形式的な社交辞令が要るのでしょうか」

「葎乃もまた晶子のように、二人の子供を里子に出している。四女奈那、四男洋である。」

「葎乃の性格は内剛外柔である。だから誰にでも一応よい奥さんとして認識されている。従って敵というものがない。時にはキリスト教の殉教者のように、彼女の女の持ち味だと思われる内剛すら、教養の

力で抑圧しているようである。このあらわれが、私に対しては『福寿草松に従いそろかしこ』になったのかも知れない。（中略）ただ牡蠣の如く黙りこくって我が道を行く彼の女は、それで充分に幸福を感じているらしい。一見東洋的な諦観的なげやりの態度にも見えるが、それは彼の女の無口のせいであって、彼の女自身の創造する神様への忠実な奉仕者であることは、彼の女の匂に親しく接したら氷解するであろう」（葎乃句集「福壽草」序文・麻生路郎）

麻生路郎物語

(11)

— 三日路亭・遅日莊繁盛記 —

— 一合の土もために子がうまれ

路郎

— 子のために買ふだけ錢をもつてゐず

同

— くもる日に米の騒ぎの夜をしのび

同

奈良に遊ぶ路郎・葎乃先生

（昭和18年雑誌奉還の年）



米の騒ぎ II 大正七年八月米騒動のこと

（「人後」10句より、大8・9「揚柳」No.4）

子沢山のしがない古本屋渡世の中に、路郎はしかし「雪」を出し「土団子」を出した。

この間、葎乃も三人の子供を二人の子守にまかせ、知人のすすめる俵に「婦女世界」（大阪市西区土佐堀裏町）の婦人記者になった。

「私の娘時代のフリーな生活を知っていた路郎は、私に年中子守とお台所の仕事ばかりさせたのでは寂しかりうとの思いやりからだろうと思います。婦女世界

の記者というのもパートタイムの仕事なのです。生花の家元や社交界の花形の訪問というのを記事にする仕事でした。世間の事は何一つ教えて貰えず、几帳の蔭で暮してきたような私には不向きな仕事でした。古本屋のおかみとしての仕事は別口にあるし、手のかかる子供もいた事ですから大変でした。この仕事も結局は、

二、三カ月も続いたでしょうか(霞乃書簡)

大正時代も後半の頃は、世は不況を画に描いたような冷え込み方である。そのため、道頓堀筋でささへ貸家札が眼につく有様である。路郎の古本屋葵書店も、この機に盛り場へ店を移すことも考えたことだが、先だつものが不足に加え、子沢山の病氣貧乏、霞乃も出産つづきで病弱、さらに親戚筋の老女を引き取る破目になるなどとして、ついに道頓堀進出どころか折角有卦に入りかけた古本屋の商売をたたみ、一家は萩の茶屋三日路へ移り住んだ。大正八年である。

路郎は*その次の年の秋、大正日日新聞社経済部主任として就職している。こ

のためのふんぎりのつけ方とも考えられる。この新聞社への入社を記念した形でもないだろうが

「大正九年十月二十五日『川柳懐手』出版。大阪および東京の奎文堂発行で四六判二〇二頁、大阪柳壇の寂寞を破った刊行物であった」(山雨樓メモ 時に路郎三十四歳)

この萩の茶屋三日路六六三番地の、隣り番地六六四に岸本水府が住んでいて、木村半文銭もつい眼と鼻の先の町内に入れた。「大正八年三日路に住みつくと同時に『番傘』の客員に迎えられた。斎藤松窓、相元紋太両氏も同じ客員で一緒であった」(山雨樓メモ)

「路郎の新聞記者生活、作家生活はこゝで始まった。路郎の交際範囲の人々は昼と夜を間違えたような人ばかりであった。三日路の私達の家は三日路亭と呼ばれた程、午前十時過ぎから、かしわのすき焼や季節物の小鉢で一盃を傾ける面々が毎日のように揃った。夜は夜で、其頃は道頓堀のカフェーでも、料亭でも徹夜営業

だったから、五座の前は昼をあざむくネオンとジャズの交錯した街であったので、路郎の帰宅は首尾よく戻っても、午前四時であった。(筆者註—九軒の梯子のお供をしたのはこの頃だと思ふ)だから午前五時から悪友のおとずれる午前十時頃までが路郎の睡眠の時間であり、又執筆の時間であった。其当時の若い作家の作品はみんな神経衰弱の傾向があったのも尤もと頷けるのである。奈那(筆者註—四女)は三日路亭で生れたが母体がもたぬと云うので、紀州紀の川のほとりへあずけられた。長男ロンドンの生れたのもこの三日路亭であった。

三日路亭時代の後半期に路郎は外国為替の研究に没頭した。研究費を出して呉れるパトロンがあったからである。不幸にして其パトロンは急逝した。路郎の仕事はパトロンと共に殉死した。路郎の研究は当時財界でも大いに参考になる点があったので、若し此パトロンが長命であつたら、恐らく川柳界から路郎の名は消えていたかも知れない。路郎が外国為替

の研究を止めてから桃谷順天館の広告文案の仕事をした」「嵐を怖れぬ路郎」葎乃、昭 32・7「川柳雑誌」古稀特集号・No.362

「桃谷順天館研究所ならびに本社工場は大阪市南区鰻谷仲之町（本誌発行所付近）にあつて営業部は信濃橋にあつた。私

（島田兼好）は、大阪薬専第一回卒業生で、大正九年卒業と同時に、大槻式校長のご推薦で桃谷順天館に入社した。そのころの同社鰻谷工場は、貧弱な施設ながら昼夜兼行の活気溢れる操業ぶりであつた。

やがて鰻谷から市岡五丁目の夕風橋に広い土地を求めて順天館は工場も営業所も研究所も一つになつてそこへ移転した。職工が五十人、女工が四百人、研究所員は八人でみんな不平もいわずによく働いたものです。岸本水府、麻生路郎両氏はともに広告部に勤務していられたましたが、私達技術家とはほとんど没交渉で、あまり話し合う機会もありませんでした。とにかく広告部の連中は出勤が不規則で実にルーズでした。水府氏は大正十年ごろ退社され、福助足袋に就職されました。

一方麻生さんは、川柳の趣味があることなど誰も知っていませんでした。ご自身も会社では川柳の話など一度もされたことはありません。よく私たちの研究室にこれら、胃剤をわけてくれといわれまして。

私は学生時代からスポーツに関心を持ちながらもこなしていたことから、会社に剣道部や相撲部、ランニング部を設けることを奨め全社員の体位向上に資するようにしました。私は剣道四段の免許を持つていたので、剣道部の指導に当たりました。麻生さんは相撲が得意のようでしたので、数度土俵に上つてとり合つたが私に歯がたなかつた。

食満南北氏の御令兄が順天館本社支配人であるため、時折来社されていたようですが、食満支配人は私を何かと可愛がつて頂き、道頓堀の歌舞伎見物にもよく連れていって貰いました」（以上は島田兼

好「愛媛県大洲市本町二八」著者あて書簡）

「路郎が桃谷へ入社したのは、夕風橋へ移転してからのことです。紹介者は時の

広告部長長野晴浜氏でありました。広告文案というのは、単なるPRの文句だけでは充分ではない、小説でも詩でも随筆でも書きこなす才能があつて、しかしこれを按配する融通性がなくてはならぬというのが、長野氏の意図でありました。それでご自分の補佐役を求めていられたのです。この方は各新聞紙上の広告欄一ページ全部を順天館製品の化粧品を材料にして歌劇をかいて発表されたこともありました。路郎の入社は、この方のアシスタントとして入社したのであります。

このころの路郎の失敗談をご披露します。桃谷順天館の社員慰安会として曾我廼家五郎一座の観劇会がありました。路郎も社員の一人だから行つたのですが、あまり早くから入場させたものだから、開幕までに大変永い時間があつたのでした。

『何もこんなに早く入場させなくてもよさそうなのだ』と思うと急に面白くなくなつてきて、チビチビ飲んでいた酒がどう回つたものか、酒顛童子と異名

ひのかみ

をとつた路郎は、簸川のやまたの大蛇みたいのにびてしまったのでした。五郎が登場するころには、出るたびに「五郎ひつこめ」と大向うからどなるものだから、芝居の係の人達が困つて、酔いつぶれた路郎を戸板で表へ運び車で拙宅まで送つて下さつたのでした。後で「あんた、五郎になんぞ怒みでもおますのかいな」と人にきかれたそうです。もつとも路郎は五郎の芸風より、ごく自然な十郎の芸の方が好きであつたのですが、何も大向うから野次るほどの毛嫌いは決してしていなかつたのでした。こんなに前後不覚になつた路郎をみるのは私をはじめででした」

(霞乃書簡)

やがて路郎一家は鳴尾に移り住んだ。

この頃の転居転宅はしきりのようだ。

「其頃私達は阪神沿線の鳴尾に住んでいた。空を覆うような大きな柳の木がおもて前栽にある家で、裏庭は当季々々の野菜や、観賞用の草花を栽培するには十分な面積があつた。

門下一同は此大きな柳の木のある家を

遅日荘と呼んだ。大阪から電車で約三十分の距離ではあるが、『遅日荘留守で三十九銭損』と松郎氏の句の通り、門下の人達は絶えず此遅日荘の門を叩いた。遅日荘主人の路郎は快漢路郎だのブルドッグだのと呼称されていた程性格に烈しいところもあつた。仕事に追駈けられている時などは世間並みの会話のやりとりはまどろこしいようでもあつた。元氣な路郎は午後九時頃からでも、道頓堀や新世界あたりまで出掛けて行つた。子供の鎖に繋がれて居た私は、そう手輕には出て行けなかつたが、夏の夕暮などは子供づれで涼みがてら駅の柵の外へ立つた。往き來する電車の灯りには都会の匂いがした。

歓楽地帯へ人々を運ぶ灯りは次々と立樹の影へ消えて行つた。其灯りが消えた時の淋しさは暗の空へ火花が消えたより淋しかった。

私が草花栽培に熱中していた鳴尾の家でアトトが生れた。梨里が生れた。そして長男ロンドンが死んだ。私達には何も彼もが悲しい思い出の種子である鳴尾の家

を引揚げて岸の里へ移つたのは昭和二年だった。そしてロンドンを亡くして神経衰弱になつた路郎は店(筆者註)桃谷順天館を辞めた。少しからだがよくなくなってから著述をやつていた」(「嵐を怖れぬ路郎霞乃、昭32・7「川柳雑誌」古稀特集号・No.362)

—その日暮しも軒に雀がこぼる、よ

路郎

路郎夫婦にとつては、この句は哀歎多い鳴尾のころの記念塔かも知れない。川柳雑誌創刊号が出たのもここである。

葛飾北斎は生涯百回以上もの引越の記録を持っているが、路郎一家も少なくはない。川柳雑誌が軌道に乗つたころの住居、万代西五丁目に落ちついた時が、数えて十四度目という勘定になる。食満南北も路郎に劣らぬ記録の持主で、性格的な一種の「転宅魔」だつたらしい。

「私が南北さんに弟子入りした頃は笠屋町だつたでしょうか。何しろ南北先生はよく転宅された人ですから、先生がお亡くなりになられた時も、宿替も今度は番地ないところ」という路郎の申句があ

るくらいですから……」(葎乃書簡)

右の書簡にもある通り、葎乃は父芦村譲りの演劇趣味への関心の強いまま、南北に師事して劇作家を志した一ときがある。婦人雑誌記者になった当時の事である。その処女作は「ある日の地獄」(一幕)だが、もつともこの労作も長さが故に、「土団子」から敬遠され、陽の目もみずに終わっている。

「今その事を申されると冷汗が出ます。誰でも一寸思い付きそうな筋で、芝居の約束ごと何も知らぬ素人が、一幕ものを書いてみようとした厚かましき、穴でも這入りたい気持で、どうぞ忘れてしまってください」

との便りが書かれている。この頃のことを彼女は「土団子」創刊号に、南北さんの二階(大正6年春)として発表している。玉屋町の扇湯のあたりに住んでいる南北居を路郎夫妻が訪問するリアルな文体的ものである。二階が六畳と三畳で、三畳の部屋で「水府さんが番傘の編輯をして居られた」という一節がはじめの方にある。

「南北先生の最初の奥様は物しずかなやさしいお方でした。その奥様のところへきていられた可愛らしい娘さんがありましたが、その娘さんが水府さんの最初の奥様なのです。お二人は仲のよい御夫婦でしたが、奥様は若くしてご長男を残しあの世へ旅立たれました」(葎乃書簡)

「今死ぬというのにシヤレも言えませずこの辞世をもって風流人食満南北は死んだ。昭和三十二年五月十四日が命日。齢七十八。」

玉屋町の水府は、どうやらこの最初の結婚(大正8年4月)のころの若い彼らしい。食満南北は明治十二年生まれ、大正五年以来松竹合名社の座付作者で劇作家として著名。その交友範囲の広さは関西の各層の有識者に浸透していて、昭和三十一年の南北翁喜寿会誌の豪華な執筆者の顔ぶれは、今だに南北を識る人の語り草になっている。南北は生まれながらの川柳人と往時の柳人間でもてはやされ「番傘」は彼を同人に迎えたことよって創世期の基盤を築きあげたといわれている。水府も翁の喜寿会誌に「私の恩人」と公私にわたる翁への恩義を心をこめて記している。

* 大正日日新聞は、野田廣次により大正2年11月25日に創刊されたが、同年9月会社を解散した。その後、大本教の出口王仁三郎が引き受け、阪急梅田駅東側で発行を続けたが、同12年3月、米田誠夫が買収した。(『大阪の新聞』昭11・11・4、岡島新聞舗発行参照)

麻生路郎物語

(12)

—童謡流行と新興川柳の台頭—



若き日の川上日車

路郎が著述業として本格的な文筆活動を開始したのは大正十一年の三十五歳である。山雨楼メモに「童謡の森」出版、著述業として本式に手を染めることになった——とある。

「路郎さんが古本屋で見付けたという路郎生、大正十一年春秋ノ茶屋の遅日荘にてと序文にあります。それを今、書棚から出してみました。童謡の編纂したものです」(夙乃書簡)

昭和四年の改造社刊「現代日本文学全集37篇、現代日本詩集・現代日本漢詩集」で、北原白秋が、明治大正詩史概観のなかに次のように書いている。

「まさしく時は大正に入つて新民謡の氣勢が昂つて来た。一つには七年七月童謡雑誌『赤い鳥』の創刊によつて以来自覺の上に立つた新童謡の作家の簇出雲のごとく、その童謡の普及日に隆んにして、新時代の民謡も愈々確實性を帯びて來つ、蒐集、研究、論戦もまた愈々に詩壇的となつた。この期に於て白秋の作も最も多かつた。雨情も民謡童謡に復活した」

新童謡の大正中期後の興隆は「學校に家庭に、または音楽會に、ラヂオにレコードに、今や滔々として浸潤しつつある。この運動に従つて既に左記の件々が興隆した。

一、詩壇の諸家、有名なると無名なるとを問はず、俟ちこの新運動に相應し競ひ加はつた。

一、新進童謡作家が頻々として輩出し

た。

一、「赤い鳥」以外に模倣雑誌の頻々とした刊行。

(中略)

一、國定唱歌に對する童謡の代唱。これは漸次にその勝利を確實にした。

一、兒童自身の自由詩集發行等である」

路郎の童謡関連の編集は、*1面識ある白秋やその関連者たちによるものと想像される。しかし、大正末期の新童謡の爆發的興隆ぶりも

「眞實者には困惑と苦笑とをさへも催さしめるほどの俗惡な流行とまでに墮ちんとしつつある。藝術兒童雜誌の濫行、童謡童曲集の頻々たる出版、和洋童謡踊の試演、レコードの吹込、ラヂオの放送。遂には無理解と亂擾と僭童謡との混雜と喧騒とが、眞の正しい藝術童謡をも、猥りに冒瀆し、眞の兒童自由詩の向上をも却つて徒に阻止しつつある。追従者と雷同者の過つた模倣と利用とは實に童心の思無邪境をして、刻々に俗情の地獄たら

しめむとしつつあるのである。物極れば凡て亂れる。大正の童謡運動にも早くも衰頹の芽ざしが現れ初めた。衰頹すべきは衰頹さした方がいい。眞の傑れた童謡は、而もなほ本質の光輝を光輝とするであらう」(北原白秋同上)

白秋も指摘する如く童謡は童心童謡の歌謡である。童謡もまた詩の中の一つの道であるわけで、路郎もこれを認め、欣然とその編集に熱中したのであることは想像に難くない。だが、路郎は大正日日新聞や、毎日新聞のマスコミ畑に身を置いたことによるジャーナリスト的感触が、絶えず心証の底辺にわだかまっていたことは否定できない。童謡関連の編集に当たる以前にも「商業の大日本」(大正八年)主幹として一時期を過ごし、「土団子」創刊号にもその編集後記「土団子當座帳」に「變な雑誌で、愉快な雑誌で、賣れる雑誌で廣告の利く雑誌を出すことにした」と書いているし、「川柳雑誌」の創刊号も「売れる雑誌」に徹底し、のちに新聞社並の「有保証紙」の権利さえ取得していること

である。壮年期における数々の出版刊行物を手がけた実績もまた以上の著述者的感覺によるう。

余談だが、さきの「商業の大日本」主幹時代「同じ社に机を並べていた『工業の大日本』主幹、風見卓が第二次近衛内閣の司法大臣になる。二むかし前の仲を思えば……」と昭和十五年の頃の山雨楼メモにある。(同一の社が経済関連のシリーズ刊行物を数種発行していたらしい)

「路郎は大変放送を嫌っていましたが、朝のお茶の間の時間か何かで、放送もしています。講談倶楽部の柳壇も担当していて、句稿を飛行機で送っています。」

*2またサンデー毎日か週刊朝日か、どちらかの懸賞川柳の選をしていたこともありました。投句数は講談倶楽部の比ではありません。曲尺で一尺四方、厚さもそれに近いものでした。私が葵素女の匿名で「結婚前後」とかいう題で、サンデー毎日々週刊朝日へ書いたことがあります」(霞乃書簡)

大正十一、二年の頃の山雨楼メモには、

断片的に路郎の手になるつぎの記述がある。

「『番傘』に——『ホトトギス』六月号の俳句、川柳比較論について——短篇小説のエッセンスのようなきつい人間性のあるふれた句を作りたい。人間味のハチ切れそうな句、川柳家は社会批評家である——」

「尼崎市の図書館の楼上で、武藤山治氏にはじめて会ったとき、新聞人のSが僕を武藤氏に紹介して川柳家だといった。ところが武藤氏は言下に、隠れたる天才ですね」と僕にささやいた」

「傘百句会、鮎ン坊の旅情を慰め旁ら、一人百句会を蚊象居で催す。鮎ン坊、水府、蚊象、緑天、佳汀、五葉、路郎で、路郎は三十六句入選第一位を占む」

「番傘へ、五葉足下」と題した松窓(斎藤)いわく——森の家は、新生を個人雑誌にした、ソレが本当である。川柳を革新しようと思えば道連れが多いのは障害が多い。往年の新傾向派鉄羅漢君は川柳に飽き、路郎君または考え中という形である」

この辺で川柳界にとつては、刮目すべき新興川柳の台頭について触れておかなばなるまい。

新興川柳といえ、たちどころに想起されるのが田中五呂八、森田一二の名である。新興川柳なる呼称の名付け親は五呂八で、その呼称に先だつのが新生川柳であった。一二が手がけた革新的な新川柳誌「新生」からによる。時に大正十一年六月、この川柳史上、画期的な柳誌の発刊は、意外にも東京でも関西でもなくて一二の住む名古屋市であつたことだ。

「まづ第一に傾向主義の森田一二氏の作品を鑑賞させよう。氏は、革新運動の極左傾にある人で、四年前に『新生』といふ個人雑誌を創刊して、川柳家の自覺に對つて大きな爆彈を投じた唯一の先驅精神に富んだ思想家であり又創作家であります。氏は其の『新生』の創刊號に左のやうな想片を掲載して居られます。

神になるべからず。佛になるべからず。何所までも人間たるべし。人間性の完成

が神に非らず。佛に非ず。人間たることの息苦しさに堪え得ずして逃避する者は多く偶像をつくる。偶像の下に眞劍なる川柳の生れたるためしなし。善惡美醜の交錯する處にのみ新しき川柳は生れる。

氏の主張は此の想片で、その一端は窺はれるやうに、飽くまで現實生活を一元的に進めやうとする川柳家としての強烈なる要求と理想とをもつて時代の民衆と共に生きやうとし亦時代の思想界へ何等かの交渉と反映も實現しやうとする積極的態度であります。(中略)

蟲ケラと云はれて紙幣を握らされ 一二

審判の不機嫌な日に刑をうけ 同

十二時に重なる針の夜と晝 同

一本のマツチを持つてゐる強さ 同

*₃斯うした作品を、ちつと心の底で噛みしめてゐると、そこには現在の社會組織に對する不合理を指摘する苦惱と憤りが看取されませう。(中略)これらは川柳を古川柳としてのサンプルより脱し切れない人々には異様の川柳ではあります。が、そこには人間としての己み難い要求

から、眞實に生れたものであります」(木村半文錢著「川柳作り方新研究」昭4刊)

一二の「新生」に刺戟を受け、大正十二年二月には、期せずして二つの新興川柳誌が力強く誕生した。北海道から五呂八が「氷原」を、大阪から川上日車、木村半文錢による「小康」がそれである。

「田中五呂八氏は、川柳雑誌の『氷原』を主宰する思想家であります。そして川柳界に於て、唯一の評論家であり、その本質的批評は目下獨歩の勢で進んで居られます。氏の川柳上の主張は一言して申しますと、生命主義の立場から、自己の哲學を、より深く進めるに就て川柳の形式にまで表現する事でありませう。故に氏の創作の多くは、自己發掘の哲學的過程を踏んで居るのは當然の當然であります。故に氏の作品は思索的でありますから、哲學の何ものかを解してゐない人々には、一寸理解する事は難しいと思はれます。それほどに氏の創作は一般詩壇と雁行して進んで居るのであります。

——鞘の奥深く言葉が死んでゐる 五呂八

—地の底の佛陀の針が天をさし 同

—圓みさへ知れぬ心の壘を抱く 同

—白露のまろさ二つが抱きつくし 同

*4右の諸作に見るがやうに、その内容は慎しく思索的で、時間と空間を織り込む生命の本流は、無限の深奥帯にまで突き進んでゐます」（木村半文錢・同上）

一二と五呂八は、人間の主観の深層表現を主張し、必然個性尊重の強烈さを表面化するため、その理論的革新詩論の行く手には、もはや伝統川柳の存在さえ認めない態のものである。したがってその理論闘争の凄じさは、伝統既成川柳を真っ向から粉碎する気魄に溢れ、一二、五呂八すら互いに論詰しあい、あたかも第三者をして仇敵の間柄とすら感得せしめたほどである。

この一二、五呂八の理論的革新派の屹立状態に対し、日車や半文錢の「小康」をはじめ白石維想楼・井上信子の「大正川柳」や、古屋夢村の「影像」や、岡田東魚の「影」や、村井潮三郎の「黎明」などは、伝統川柳からのいわば革新的進歩派の形

で、若干迫力を欠くことになる。

半文錢は自著『川柳作法』（大15・6・15発行）で「小康」の趣旨をつぎのように述べている。

「革新川柳と申しますと、その川柳家の内部的要求に依つて生れる短詩でありまして（新興川柳とも申して居ります）が、過去の一切の川柳とは其の立脚點を異にいたして居ります。それは既成川柳では自己の已み難いものから生れる川柳の生命がありませんが、今日現れつ、ある處の新興川柳は、他の一般藝術と齊しく、その内容は自己の已み難い衝動から生れますから、その表現せられたものは、自己の生活であり、自己の心の記録であります。（中略）其の作句動機や衝動は、過去の娛樂氣分を全く抛棄してゐるので一つは破壊的に見へるのであります。それは川柳を作る手段や形式を破壊して居りますが、歸するところは自己の川柳の建設であります。と同時に自己の生活の建設となるのは當然であります」

日車・半文錢の「小康」における作品を

参考までに掲げよう。

—芭蕉去つて一列白き浪がしら 半文錢

—釈迦の左手に握る一切 同

—机上より一尺低き民衆よ 同

—天井へ壁へ心へ鳴る一時 日車

—群衆の口みな動き澄める空 同

—夜具を敷くことが此の世の果に似つ 同

このような新興川柳の台頭を織り込む川柳界の大きな変革に遭遇して、路郎は果してどうこの動きに反応を示したのであろうか。

「日車氏は半文錢氏と共に『小康』を出したが、私は日車の強請を斷じてしりぞけ、これには参加しなかつた。（中略）

私は靜に考えた。柳界は麻の如く亂れて全く收拾するところを知らない。何人も川柳を愛してゐるには違ひないが、何れも自派獨尊であり、兄弟牆にせめぐの類である。これではいけない。お互ひ川柳家同志がいかに、可なりとして褒めちぎつたところで、一步社會へ出て見れば、まるで社會から川柳の存在が認められてゐ

ないではないか。これではいけない。こゝに眼をつけた私は日車氏等の強請懇望これつとめてくれた友情をも振り切つて、社會的な柳誌、社會を對象とする柳誌刊行の計畫をすすめたのであつた。

これは私にとつても、全柳界にとつても一大異變であつた。舊同志は私が墮落したかの如く歎じて悲しんだ。金澤へ出掛けて私の意見を發表した時など、翌日同志が私の宿へ押しかけて来て『アレは本氣で云つたのですか』と眼の色を變へて膝詰談判を食つたものである。

私は當時の柳誌が豆本式の範圍を出ないこと、兎糞の刊行であること、お互ひ間での寄贈本位であること、内輪同志で摩擦ばかりしてゐること、これでは社會に認められる筈がないことなどを列擧して、私としては俳誌『ホトトギス』を目標として經營をやつてゆくつもりだ。『ホトトギス』が内容的にどんな地位に置かれてゐるか云ふことは別として、この誌の社會的存在價値は見逃すことが出来ないと思つたからである。そこで新らしく出

す雑誌は、柳界を代表させる意味と、寸時もなく社會に知らせる便宜上、普遍的な『川柳雑誌』といふ名を選んだのであることをつけ加へた（『苦闘四十年』路郎、昭18・2「川柳雑誌」雑誌奉還号・No.239）

*1 北原白秋と面識があつたかどうかは未詳。野口雨情とは交際があつた。

〔麻生路郎文集〕の「麻生路郎氏の書翰」照。

*2 「週刊朝日」の選を担当していた。

*3 全部で17句引用している。

*4 全部で14句引用している。

麻生路郎物語

「川柳雑誌」の誕生

(13)



川柳雑誌創刊号

「川柳雑誌」が創刊されたのは、大正十三年二月であつた。盟友日車と半文銭の新興川柳誌「小康」への参加を厳しく拒否した路郎の脳中には、すでに川柳雑誌への構想が潜在していたことは明らかだ。

「愉快な雑誌で、廣告の利く雑誌を出すことにした」という「土団子」発刊当時のモチーフが、いぜん彼のころに強くわだかまつているのはジャーナリストに加味された経済センスがそうさせたとも思える。もともと路郎は、経済畑の学識素養のうえに育つてきた人柄でもある。

柳眼を六厘坊によつて開かれ、この人物に兄事し古典川柳の中におのずと短詩型部門での詩眼を開いた若き路郎は、柳界の子規たらん（『川柳雑誌』古稀特集号参照）との作句志向を、新短歌、川柳の道に求めたが成らず、古典川柳を近代化した庶民の中の新川柳に活路をみた、少なくとも川柳創刊の背景には、こうした意識が色濃く漂っていたことは否めない。日車、半文銭の「小康」への誘いに対し冷たく袂を分つたのも、路郎の新短歌運動

の敗退が大きな要因を成しているからだ。

亭々たる堂前の柳の大樹を見上げた暈日荘の当生路郎は、清貧の風趣に決して甘んじてはいなかったのである。時に彼、三十七歳。

「川柳雑誌」の創刊号は、大正十三年二月十五日の発行目付で、菊判三十六頁。兵庫県武庫郡鳴尾村字寺ノ後四番地・編集兼発行印刷人麻生幸二郎（発行所川柳雑誌社）一部三千銭——十二部三円、振替大阪三二五一四番で、裏表紙の川雑社同人は主幹麻生路郎の下に同人岩崎柳路はじめ二十四人・支部は十一（大阪七、神戸三、山口二）である。創刊号のトビラには、つぎのような短い発刊の言葉が記されている。

「現代人の思想にびつたりと觸れた詩と云へば、川柳の外にはない。我等は此の川柳によつて人生を的確に批評して行きたいと思つてゐる」

内容を眺めてみると、まず巻頭に特別活字で、誤れる川柳観を排すとあり、傍

見出しで▲現代人は刺戟に生きる▲白紙になつて研究せよ——とあり、本文は二段組総ルビ付で四頁にわたり、標題の絵解きを試みている。一口に言えば、それは庶民大衆への川柳の啓蒙認識に尽きるだろう。川柳には無関心な一般社会人へのこの川柳PRのための語りかけには、路郎の烈々たる川柳愛が熱つく紙面にとばしり出ている。この巻頭言の終わりのくだりに路郎はこう結んでいる。

「單に川柳といふものは決して世間で考へてゐるやうなつまらない、謎かけのやうなものでもなく、俗悪でお座敷にほせぬやうなものでもないといふこと丈を知つていただければいいのです。そして今迄に先入主となつてゐる曲解をさらりと西の海へすて、全く白紙となつて眞實の川柳を研究していただきたいのであります。私達が『川柳雑誌』を發刊することになりました主たる原因は、世間の人達に眞實の川柳を知つていただきたいからであります。（中略）／從來の川柳雑誌は申合したやうに初心者に不親切であり

ました。それは自分達の研究に忙がしかつたのにもよりますが、初心者を導いたり、世間から誤解されてゐる川柳を釋明するために用ひるだけの紙面を持たなかつたのにもよるのでせう。私達はさうした點を特に、この『川柳雑誌』で補つて行きたいと思つて居ります」

作品欄は、近作柳梅、路郎選（三頁）があり、募集句には、仲人・井上劍花坊、花輪・岸本水府、があり、一頁を埋めて麻生路郎の名によるつぎの十句がある。

- ひるひなか蠅とる用があるばかり
 - 疑ふたまゝで一週間は過ぎ
 - 暇な日は三味張替へる氣にもなり
 - 平凡の幸福豚へ話しかけ
 - 豚の子へ續く豚の子ばかりなり
 - 時計にまでうつる神經衰弱症
 - される氣かこの頃鬻に結はぬ也
 - 踊子へ雲でも降りて來そうなり
 - 青いソフト東京の夢巴里の夢
 - 初戀の思ひ出になる夏蜜柑
- 初心者指導、古句研究の發表、並びに川柳社会化運動の機関誌として刊行に踏み

切った「川柳雑誌」は、まず経済的確立、月刊断行、量的発展、それから質的完成への方針を定め、その第一巻第一号を世に送ったのである。こう述べたあと、路郎は川雑239号の戦時の雑誌奉還、終刊号の苦闘四十年の稿でつぎのように川雑発刊時の思い出について記している。

「勿論その反響の大きかつたことは云ふまでもなかつた。久良伎氏は『川柳雑誌』と云ふ名は僭越だと云つて来たが相手にしなかつた。しかし『川柳雑誌』が

てから川柳の雑誌を川柳雑誌と云へば混同の惧れがあるので柳誌とか、川柳の雑誌とか云はねばならないことになつた。その不便さは他誌に對して氣の毒ではあつたが社會を目標に刊行するためにはやむを得ないことであつた。これも一つの反響には相違ないが、それよりも大きな反響の幾つかがあつた。『川柳雑誌』の月刊断行は他誌の脅威となり、『番傘』の如きは年三回乃至四回位の不定期刊行であつたが、しどろもどろになつて追隨して來た。合併號まで出して漸く三年目に月

刊誌になつた。他はおして知るべしと云へやう。型についても、『川柳雑誌』の菊版型が、従来の豆本式や四六横綴にどんな影響を及したかは紋太氏が度々書いて居る位であるから手前味噌でないことが知れるであらう。『きやり』の豆本、『番傘』の四六横綴などをはじめ、全国の柳誌と云ふ柳誌が、『川柳雑誌』にならつて遂に柳誌菊版時代を出現するやうになつた。我社では従來の寄贈本位を改めて定價賣を断行した。それには面白い話がある。

私が東京へ出かけて、内幸町の旅館に泊つてゐる際、宮尾しげを、川上三太郎の兩君が訪ねて來たので、三太郎から一ヶ年分の購讀料をまき上げた。しかしただまき上げた譯ではなかつた。一ヶ年分は、社の會計へ繰入れたが、三太郎君にはピールを半ダース吞ませることにした。ピール代は勿論私のポケットマネーであり、その金は私の勤勞によつて生れたものであつた。川柳雜誌社へ多年つき込みこそすれ社からビタ一文の収入もないことは云ふまでもなからう。私は私の理論

を徹底させるために、運動費持ちで、駆けずり廻つたものである。路郎はオレから購讀料をとつた。誌代(柳誌)を拂はされたのは生れてはじめてだと三太郎はよくこのことを誰彼に話してゐた。當り前ではないか。私が着服する誌代ではなし、川柳を愛すればこそ誌代の請求をするのだ。呉れてやることはイトやすいことであるが、それでは購讀者が殖えれば殖えるほど、社は廢刊に近づくことになるのだ。それでは發展は遂にのぞまれない。發展どころか潰れる外に道がない。

これが私の所論だつた。柳誌の多くが兎糞的刊行に陥入り栄養不良となつた主たる原因はそこにあつたのだ。私は友人であつても決して無代ではやらなかつた。無代で送つた友人の誌代は私自身のポケットマネーで支拂つた。辯護士をしてゐる友人が麻生君は偉くなつたネと云つて、快よく誌代を拂つて呉れた。この友人は二十年後の今日でも誌代を拂つて呉れてゐる。しげを君には購讀をすすめた。當時は漫畫家であつて川柳家で

はなかつたからだ。

その當時の柳誌は、何れも発行部數の一割か一割五分位しか誌代の入金はなかつたものである。あとはみな呉れてやつたものである。呉れてやると云へば聞きなれはい、が、誌代を請求するだけの値打のある雑誌を發行してゐなかつたとも云へるのである。そこで私は常に誌代に値する立派な柳誌を出すやうに心がけた。月刊斷行もその一つ、絶えず内容の充實に留意したのもその一つであつた。句の上にての主義主張には一步も譲らない私も、社の經營に於てはつとめて摩擦を避けた。斯くして『川柳雜誌』はグン／＼伸びて行つた。

「飛行機に、競馬に、全國中學校の野球試合に、全國のファンを熱狂させる鳴尾から『川柳雜誌』が生れたといふことは、何んだかい、意味でかつぎたくなる。『川柳雜誌』によつて天下の鳴尾にしたいと思つてゐる。ところが創刊號の發行部數とその賣れゆきは、斯うした専門雜誌のレコードを突破したので同人一同歡聲

をあげて、更に活躍を期してゐる。この調子で行けば『川柳雜誌』の鳴尾が出来あがるのも遠くはあるまい。(路郎生)」「編輯 太奥里」大正13・3「川柳雜誌」No.2

ここで路郎が川雜創刊に踏み切つた、いわば引金となつた一つの事柄について述べておこう。当時大阪に川柳以交吟社というのがあり、柳誌「みをつくし」を出していた。路郎はその顧問格であつた。川雜の出る前年、結成三周年を迎えた以交吟社の連中が

「柳誌みをつくし、の在り方にあきたらず、その同人連がそろつて私を迎え、私が主盟となつて大改革をして貰いたいと要請してきた。もし腰をあげて頂ければ、この柳誌を廢刊して、新柳誌を改めて刊行したいという。私はそれを受けることにした。同柳誌は直ちに廢刊が実行され、私の手によつて『川柳雜誌』が生まれた」(山兩樓メモ)

*このとき路郎は大阪毎日新聞社の經濟主任の職にあつたが、右の事件とともに直ちに辭職届を出している。かねて抱

懐する新柳誌發刊の夢に、片手間仕事ではモノにならずと判断した、とみる向きが強い。

このような事情から「みをつくし」同人であつた吉川啞人、高橋古城山が宣伝担当。竹田蘆穂が編集、橋本二柳子が會計、太田一声が広告、といった川雜發行のため部署が定められ、他の同人は住居地域中心の川雜支部責任者となつてゐる。したがつて川雜のスタートは、既刊三年の柳誌(四六版横綴二〇頁の実績をもつ)スタツフが主柱となつていたのである。そのため路郎はひとり全力投球の筆陣を張り、作句の一方純正川柳の社会普及の講演や指導に馳せ回つてゐる。活力に溢れた川雜のスタートであつた。

川雜二号には口絵写真がある。二月十八日(大13)川雜第三支部(酒井零骨)主催の下に觀梅吟行を金熊寺一目千本に催す。その際の一行の記念撮影とある。鳥打帽子に背広ネクタイにオーバー姿の、壮年期の路郎の微笑を囲んで、マント襟巻、中折帽子や毛皮帽子の一見三十代の連中

二十九人の楽しそうな貌が並んでいる。

また、この二号には本社創立川柳大会（一月十九日於大阪南堀江書林倶楽部）の盛況ぶりを特集した総ルビ付六頁にわたる一大デモストレーションがある。路郎は本誌に「一句を遣せ」と二頁にわたる論説を発表している。

「明治三十七年以來、作句に苦しんで来た私にも、未だ、眞に後世に遺して、はぢないやうな句は一句も出来てゐないのであります。二十年の句の中から自分で捨てかねる句を選び抜けば或は十句位はあるかも知れません。けれども識者に見れば一顧の價値もないかも知れないのであります。しかし私は川柳を棄得ないのであります。それは私の生命を永久に傳へるものは川柳の外にはないと思ふからであります。（中略）せめて一句でも後世の識者に示しうるやうな立派な川柳を遺しておきたいと思つて居ります。本誌の讀者におかれましても（略）後世に遺し得る一句のために力作せられたいのです。（三月二日夜二時過）」

後年の有名な路郎の川柳訓「生命ある一句を遣せ」のこれがその原典である。

* 大阪毎日新聞社を辞したのは、大正十二年3月だと考えられる（「麻生路郎文集」の「麻生路郎氏の書翰」参照）。

麻生路郎物語 (14) — 躍進と試練の川雑 —

大正十二年二月菊版34頁で意欲満々スタートした「川柳雑誌」は、地元関西はもとより全国的な川柳関係者の間に、さまざまの反響と注目を浴びたことは、路郎自身が事あることに記述している通りである。（前稿参照）

この川雑創刊号のへき頭四頁を飾つた「誤れる川柳観を排す」という堂々の論旨が、いわば路郎がかねてから抱懐した「川柳社会化運動」の実践要綱を意味していた。

「川柳といふものは、決して世間で考へ

てゐるやうなつまらない、謎かけのやうなものでもなく、俗悪でお座敷にのほせぬやうなものでもない。（中略）私達が川

川柳の夕		五月四日午後七時
司會	高尾亮輔	庄 河よし
評	川上三太郎	岸本水府
	麻生路郎	森生裕郎
A 川柳を語る	女性は躍る	人間力の藝術
B 長 唄	新曲 浦島	毛のゲンヌ
C こども舞踊	毛のゲンヌ	エリ ジョット
D 古今俳句を演説	水兵さん	全 員

カットは当時の朝日会館のプログラム。表紙に「川柳の夕—川柳雑誌—創刊百號記念」とあつて¥1.00とある。「C」の中央に山根壽子の名が見える。「D」に「戀の巽」の句。川柳座の役と名がある。

柳雜誌を發刊することになったのは、世間の人達に眞實の川柳を知つていただきたいためにはかならない」

この路郎の川柳本願の素地には、当然、世間に親しまれ、愛されて売れる大衆川柳誌の夢が伏在していたことは当然である。経営の成り立つ発行部数を誇る広告の効く雑誌……それはもはや趣味一筋のいい加減な豆本式柳誌では話にならない、川柳發行の夢を路郎にかわつて代弁すればこのように要約できよう。

「川柳雜誌」No.239（昭和十八年十二月号）の「雜誌奉還」号で、苦闘四十年」と題する路郎の回顧録には、つぎのように記されている。

私は川柳雜誌社の草創時代に三十年計畫を發表した。ところが誇大妄想狂だと笑つた連中もあつたが、第一期の川柳社會化運動も、十年目に、東京で社の句會を開いて社會化完遂の聲明をした。この時には大阪から多數の同人を引き連れて上京、東京で空前だと云はれた各派網羅の

大會を開催した。

第二期は量的發展並びに質的完成を目指したのであつたが、これ又、最早何人が繼承しても繼續し得るだけの基礎をきづき得たので、後繼者を物色中たま／＼大東亞戰爭勃發、戦局の緊迫に鑑み本年末をもつて、雜誌奉還の擧に出ることになつたのである。

第三期は私を自由な立場に於て川柳の研究に没頭させて貰ひたいと云ふのであつたが、雜誌を放れることの自由はこゝに得られたが、國難に背を向けての自由さはない筈であるから、私自身の研究が、これからの十年間にどの程度の進展をみせるかは疑問である。

（中略）

話を再び前に戻すが、東京句會以前のことである。川柳の社會化運動を徹底せしめるために「川柳雜誌」の百號記念の大會を朝日會館で開催した。この催は俳人月斗を一驚させ、物に動じない朝日新聞の計畫部の人さへも唸らせたのであつた。未だ曾て短詩型文學で朝日會館の席

を埋めたことがないからである。しかも講演と講演との間に音楽すら入れず、三人ぶつつけに講演をやつたことも會館はじまつて以來のレコード破りだと云はれた。しかも入場料一圓で千人以上の人々を蒐めたのである。この時にも面白いエピソードがある。第一は社會事業としての興業税を支拂つたことであり、第二は入場料を一圓・五十錢の二種類にして欲しいと云ふ一部同人の聲を蹴飛ばして一圓で押切つたことであつた。第三は餘興に拙吟

戀の眞あの眼だらうか眼だらうか

を喜劇に脚色上演したことであつた。俳優はアマチュアの各派のスターばかり引き抜いて来て、「川柳座」といふ名稱とされただけに二度と見られぬ劇團であつた。しかしこの劇はその後朝日會館と新町演舞場で上演されたさうである。其の一つは犬養木堂翁の追善會に興行されたらしいが、二回とも筆者は見ることが失つた。つまり原作者に無斷興行が行はれた譯である。その四は今では亡き東京の杵

家彌七師が長唄「新浦島」、その五が現在東寶で活躍してゐる山根壽子嬢が我々仲間、あ一坊と呼ばれてゐた頃に新舞踊を踊つてくれたことである。樂屋にカン張つて總指揮をふるつてゐた私が、タツタ一夜の大會のために、前後三十日間一滴の酒も口にしなかつたことも特筆大書すべきものであつたのである。

この大會以外、朝日新聞社社會事業團後援の下に、同社三階大廣間で、歴年同情週間醸金のための師走川柳大會を舉行、常に三百餘名の川柳人を蒐めて川柳界のために大いに氣を吐いたものであつた。其他三越八階に於ける川柳大講演會では講演以外に、照明を使用して川柳句會を實演した。おそらく句會の實演はこれをして嚆矢とするであらう。

「雪」「土団子」「後の葉柳」の高踏な短詩型の世界を経て、いふなれば川柳詩を大衆性への開放によつてわが真実の「川柳」のジャンルを打ち樹てようとした路郎は、創生期の川柳雜誌を足がかりとし

て、戦前のある時期には時の社會環境の特殊ムードも幸いして彼が夢想する川柳社會化の成果は、ある程度實現化されたともいへよう。終生「川柳雜誌」にわが川柳人生を賭け、それに燃焼しつくして生涯を終わった路郎——だが、その川柳人生はもとより平坦なものではなかつたのである。

「川柳雜誌」は路郎三十七歳の発刊で、發行所は兵庫県武庫郡鳴尾村字寺の後四四。柳の大樹を前栽に、裏庭は広い畑に恵まれ、遅日荘と名づけたこの路郎居には、四季の草花や当季毎の野菜類が食膳を賑わせていた。壮年期の路郎は張り切つていた。路郎の代表的名句の一つとして挙げられている

——君見たまへ蒨穠草が伸びてゐる

は川雜第一巻十一月号を飾つた一句で、初冬の陽ざしの土をおしわけた力強いみどりの結晶のようなほうれん草の葉と根元の紅い色どりは、朝日の陽ざしに若さそのものを象徴していた。健康で今日の自信と明日への期待を存分にはらんだ生

命の、それは路郎の人生への賛歌でもあろうか。君見給え——その叫びは愛妻へか、わがこころにか。

路郎篇「大正傑作二万句(俳句)」(四六横判四百八十二頁藤谷崇文館刊)がこの年に世に出ている。執筆者は花菱、東魚、久良岐、紋太、松郎、柳雨、省二、五呂八、美々作、路郎らで往時の柳界の一翼を担う人々だつた。つづいて新撰傑作一萬句集(俳句)も編集準備に入つていた。また、庶民俳句集のこうした依頼編集もののか、「川柳ふところ手」(柴舟画、四六判二百頁田村書店出版の改訂版)も世に出ている。

「大分以前のことである。ある古書展で路郎著『川柳漫談』を手に入れた。昭和四年八月一日刊。大阪の弘文社発行の菊版本で四百頁。定価一円五十銭とあり『路郎』の奥付もある。この本の序文はつぎの通りであつた。

私の半生は川柳の生活であつた。私は私の好きな川柳が、いつまでも謂れなく、社會からは誤解され、文壇では下積にさ

れてゐるのを慨し、ここ六年間はその縛から解放されることと、弘く社會に川柳を浸潤せしめて、ほんとの川柳がどんなものであるかを知つて貰ふため、川柳の社會化運動に發頭して來た。そのためには雑誌「川柳雜誌」の刊行を續け、機會を捉えては東西南北に足を運んで、體驗が生む力強い川柳に就いて説いた。近ごろ漸くその曙光が見えて來た。しかし前途はまだ遠い。撓まずにその道に精進したいと思つてゐる。この小著がその運動の一助ともなれば幸いである。／＼

岸の里の寓居にて／著者識

とある。読んでみて面白いのは『川柳染ちがひ』鳥平画と『ト昔前の大阪見物』紫舟画でした。いつか先生にご自分の本は全部おもちですかとおききしたら、いやなかなか持てないんだよ、と答えられたことがある（本多柳志書簡）

川維が創刊された時点で、大阪の柳界は先行の「番傘」と川維発刊に刺戟されてか、二月遅れて「大大阪」（本田溪花坊主幹・大阪市北区老松町三・大大阪川柳社

発行・菊半截判六十頁）が出た。川維第二号にその一頁広告が出てゐる。「由來、浪花の地は平民文學の發祥地であり享樂地である。拙齋や山陽のやうな學者が大福帳を繰り、算盤玉を弾いてゐた時代もあつた。西鶴にしても巢林子の戯曲にしる不朽のものとなつてゐる。私等は大正聖代の佳吟を後世に傳ふべき尊き使命の下に生れたのである」

溪花坊は、さきに「絵日傘」を単独発刊したこともある路郎の川柳仲間であり、友好吟社でもある。いわば大阪の久良伎流の風流人で新人獲得に乗り出したもの。こうして大阪は「番傘」「川柳雜誌」「大大阪」の三誌で立期がしばらくつづくことになる。

こうした大阪柳界のムードを反映したのかどうか。川維発刊に程なく一つの試練が路郎を見舞つた。川柳以交吟社の柳誌「みをつくし」を刊行し、路郎に助力を依頼してきた、いわば川維発行のきっかけを作つた吉川啞人、竹田蘆穂らの同人辞退であつた。創刊年余もまた各支部

を形成してゐた啞人一派の大量脱退はよくよくの理由によるものと思われるが、詳しい内容はわからない。

創刊間もなく啞人氏などの脱退で非力になつた「川柳雜誌」を応援すべく、翌十四年塚崎松郎、井上刀三、林田馬行の「灰」同人三人が、「灰」を廢刊して川維に馳せ参じ同人に加わつた。この加盟は河野春三の推薦である。春三は明治三十五年堺市に生まれた。大正十二年に路郎選の日日柳壇（大阪日日新聞）水府選の「今日柳壇」（大阪今日新聞）の投句から川柳への接觸がはじまり、水府選の特選が奇縁で「番傘」の投句の常連となり、水府の世話で堺市の福助足袋株式会社に入社——同社広告部（大阪市）の岸本広告課長の下で文案係にもなつた。時に彼二十三歳。

春三は大正十五年堺川柳会を結成。「番傘」編集に携つたが、翌年ごろから日車・半文銭・路郎の作品に共鳴。川柳の革新をめざし「番傘」を脱会、路郎に私淑する形となる。松郎・馬行・刀三の川維加盟も、春三の働きかけであつたことは明らか

かだ。(彼自身の参加遠慮は、対「番傘」の気兼ねからか)もつともこの三人は、川雜同人正味三年のち脱退して、黒木鶴足(もと、みをつくし)派で莢豆を改号)に春三の五人で「川柳使命会」(松郎命名)を結成、革新川柳運動の実践活動に入るのである。

「人は彼(路郎のこと―筆者註)を狷介で、人を容れない頑固で偏狭な性格の持ち主であるという。それゆえ有為の青年が彼に近づいても、すぐ反撥して背いてゆくことを繰り返しているという。そういえば、塚崎松郎、井上刀三、林田馬行、黒木鶴足、松丘町二、若井たけし、川合舟々、岩本素人、松盛琴人、水谷鮎美ら優秀な作家たちも路郎の『川柳雜誌』にはいつて日常をとにもすると、すぐまた路郎を離れて行くという事実は事実として否定できない。

しかし、まことに片意地地いい出したら損得を考えずに、青筋を立てる彼ではあるが、心の底は常に孤独であり、常に友情や愛情に飢えていた人間であったとボ

クには思える」(麻生路郎作品 詩性と大衆性の中で「河野春三、昭48・11「川柳平安」二百号記 念特集号)

しかし、こうした川柳雜誌創生期の人材異動の中に、ただ一人の異材がいた。みをつくし派の一人である橋本二柳子(川雜第一支部長)である。この人物こそ、創生期の川雜を、ほぼ中期までの川雜の土台骨をささえ、路郎のかけがえのないアシスタントとして活躍した二柳子改め橋本緑雨その人である。

麻生路郎物語

― 同人の集散と橋本緑雨 ―

(15)



橋本 緑雨

「みをつくし」の啞人一派の脱退。そこから居残った橋本二柳子(後の緑雨)に「灰」を廃刊して新同人となった塚崎松郎、井上刀三、林田馬行らで川柳雜誌も再スタートを開始した大正も昭和と改元された頃の路郎は、作句に川柳行脚に多忙な毎日を送っていた。

― 俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

の路郎の代表句は、大正十五年七月十一日に開かれた第五回柳談会で生まれた。この柳談会は毎月の第一日曜を定例会と定めて、この年からスタートしていた。井上剣花坊が大連の帰途、路郎宅に一泊したり、新興川柳の論客として地力をあらわした田中五呂八の論旨に一矢を報いたり、和歌山の柳陰社を訪れたと思えば、上京して雀郎、○丸、柳路、千代、二鯛坊(のちの村田周魚)と柳談に花を咲かせたりしていたが、あけて昭和二年三月一日長男ロンドン(九歳)を失った直後、路郎は愛児の死のショックも加わり罹病して阪大病院に入院した。診断は悪性の腸チブス。

「診察が終わって路郎は病室へ運ばれましたが、名誉教授長崎仙太郎博士（柳号柳秀）のおことばによれば、こんどの路郎の病状は大分悪質とのことを私は暗にきかされました。病室へ見舞いにくる人はさまざまでした。心配そうな顔付きで来る人、長居をせずに早々に帰る人、病室でビールを飲んで帰る人、大声でばかばかしをして行く人、なかには路郎の病状をきいて帰る人もあつたでしょう。医師の言葉では、回復はおほつかないと思つて帰つた人もいるでしょう。しかし幸か不幸か路郎は奇跡的に死線を越えて退院いたしました」（葎乃書簡）

「松郎・馬行・鶴足（旧号莢豆）・美乃作の連中、路郎の病後ある要求を持ち出し、訣別す」（山雨楼メモ）

「私は松郎さんにして、刀三さんにして、馬行さんにして個人的には何んのわけだかまりも持っていないません。刀三さんは奥さまの御病氣の時、しんみりと私に御相談もあつたし、刀三さんの句は私も好きでしたから好意は持っています、いや

な感じは毛頭持っていないませんでした。他の方々に對しても同様でございました。それならば、何故路郎との間に出来たヒビの修理をしないのか、とおつしやるかもしれません、そういう場合、私個人としては許せない嘘を双方に言わねばなりません。私にはそうした芝居は一切うてないのでございます。たとえ強靱な接着剤でついでみたくころで、壊れるものには壊れる因縁がすではらんでいるのですから、人間業ではどうしようもないのです。

—雲雀啼いたとまぎれましようかね赤椿の句を作つていられた頃の莢豆さん（路郎の友人で写真好き、のち鶴足と改号）は、よく私の家へ遊びにきていました。野口雨情さんが遅日莊を訪ねて来られた日も、莢豆さんは遊びに来ていました。そして中庭で私達の記念写真を撮つて下さいました。（第10回カット写真参照）

その莢豆さんがいつ松郎さんのグループにおはいらになつたか、その辺はハッキリしません。後に鶴足と改号なさつて

から盛んに十二字詩を作つていられます。その短冊は、今も私の手許に残っています。

駒井美乃作さんは文壇人に多くの知己があり、たしか「土団子」に路郎は「白粉の花咲く家」というのをかいていたと思いますが、あれは美乃作さんの家なのです。美乃作さんは愛人と私たちの家でお泊りになつたこともございます。鳴尾ではじめた柳談会を毎月開いていた頃、ある夏に体験のある怪談ばなしをしたことがございます。美乃作さんは自分の体験談をされましたが、実にうまいもので、まるで高座の人情話をきいているようで、身の毛のよだつ思いをしました」（葎乃書簡）

「『川柳雑誌』にとつて橋本緑雨氏は國寶的存在であります。首と胸程の密接な關係のもとに創刊以來堅忍不拔全く献身的努力を續けて來られたのであります。爾が、抑々この緑雨氏（当時二柳子と號す）を見つけたのが路郎先生であります。爾來兩者は駿馬と騎手の間柄をもつて、

益々相信じ相敬しつゝ、^{かは}滄るところがありません。昔の武士は「己れを知るもの爲めに死す」といふ氣魄を持つてゐたものですが、緑雨氏にはそれに似た心持があるやうに思ひます。(中略)

路郎先生が嘗て鳴尾に住んで居られた頃、社の用事を帯びた緑雨氏は大阪の築港方面の宅から、電車に三、四度も乗換えて月の中半數以上も通はれたさうであります。それが一月や二月でなく、幾年も續いたと聞いたときに僕は思はず臉の裏が熱くなつて來ました。古い『川柳雜誌』を見る毎に、それが先生や緑雨氏の血と汗の賜である事に思はず頭が下るのであります。

その緑雨氏の熱に痛く感動されました、仕事も家事も經濟も忘れ一路川柳の爲めに闘はれた路郎先生でありました。

(中略)

先生は他人の原稿に就ても、穴の開く程よく眼を通されますが、自分の原稿には一層嚴格で、一字一句と雖、^{ゆるが}忽せにせず、句の選なども慎重に慎重を加へて居

られます。雜誌の編輯日が迫つて尙先生の句の選が濟まぬ時など、緑雨氏は大晦日の借金取みたいな意氣込で催促に行かれます。でも先生の慎重な選句振りを信じてゐる緑雨氏は、二時間でも三時間でも傍で待つて居ます。斯うした努力は氣の短かい者には一箇月も續かぬのであります(昭9・6「麻生路郎論」『川柳研究』福田山柳樓)

「橋本二柳子(後の緑雨)さんの本名はたしか与作と思ひます。緑雨さんは川柳以交吟社『みをつくし』のメンバーでありましたが皆が川雑を離れて行つても後へ残つて、路郎を補佐した唯一の人であつたのです。

この方は事務的な人物で、公務の傍ら毎日のように遅日莊へ足を運んで、路郎の原稿のおくれそうな時はあつちの抽出や、こつちの抽出を開け、材料を探し回り路郎の前へ置きました。路郎の虫の居所の悪い時は、激しい言葉も出たでしょうに、ムツとした顔もせず、実に忍従そのものの姿をみて、私はねばり強い北国の

人の根性をハッキリと認識いたしました。ひとつには、社を出ていった仲間の人達に代つて責任を果たさねば、という面もあつたかとも思ひます。それにしても川雑の運営に常に頭を働かせた人でありました。

こうした路郎と緑雨の仲をさくため、時には中傷する人もありましたが、路郎と緑雨はただき流す程度で、二人の仲はなんの疑念もなくにすんだのです。緑雨さんの手紙は電文のようで、一切ムダな言葉は省略されていきました。お互いの会話もその通りで、単刀直入、味も素気もないので、緑雨さんという人柄を知らぬ人には傲慢にもぶしつけにもみえたことでしょう。だから緑雨さんは初対面の人には口をききません。

緑雨さんは小器用な作家ではありませんが真面目に自然を見、社会情勢にも正直なメスを入れました。こうした彼の性格が句に反映して無技巧な技巧を構成することもあつたのでした。

川柳雜誌の事務所が杭全町の緑雨さん

の自宅にあった頃のことです。発行日前になると編集部員は、彼の家へ寄つてきました。彼は馳けつけてきた柳人へ持ち前の口調で「君はこれや」と仕事を突きつけ、汗をふく間も、茶をすする間もありません。それでも誰も文句は言いませんでした。言葉を飾ることを知らない彼を知っていたからです。また事務的に動く彼を知っていたからです。この理解があればこそ、お互いに気まずい思いもせず、編集部は波風もたたずにやってこられたのでございます」（葎乃書簡）

緑雨は昭和四十五年四月十六日七十七歳で死去した。晩年は愛妻と愛嬢の死で川雑からすっかり身をひいた形だが、路郎を追悼し「川柳雑誌」の廃刊を見さだめて他界していった彼の感慨は、さてどのような追想があつたことであろうか。

長男ロンドンの死去、そして路郎も病氣入院、加えて松郎、馬行、刀三らの有力同人との訣別など、そのような鳴尾から昭和二年六月岸の里に移つた。そして川柳雑誌も、この年八月号から同人制を廢

し社友制をとり、賛助員、客員制とした。「合名會社が株式會社になつた形である」と路郎は「編輯室から」で述べている。

こうして講演に、川柳脚に、新聞雑誌の柳壇の選に活躍する傍ら、川雑では川柳漫画を毎号とりあげ、その一つの『累卵の遊び』を刊行し、月評を毎号試み、社内漫談会を催しそれをまた『川柳漫談』と題して刊行したりした。この昭和三、四年のころには雑誌刊行の印刷費を捻出すべく「広告売文社」（昭和四年・大阪文案社と改称）を興したりしている。そして昭和五年十一月には葎乃の父、河盛彦三郎の死去に遭うのである。

「不朽洞の大掃除が九月四日に行はれた。この日から僕は階下の表六疊に移つた。親のスネかじり時代、二階借り時代、居候時代は勿論のこと、一家の小さな主となつても階上でなければ落着けなかつた僕が、階下に自分の部屋を持つことは僕の生活様式の上に非常な革命である」（川柳雑誌）昭5・10・編輯後記

「私は前号で階上生活から階下に移つ

た事を報じたが、僅に一ヶ月足らずで再び階上生活へともどることゝした。それは葎乃の父、荻村翁が十月五日の夜天下茶屋の某家で卒倒したため、階下の子供室が翁の病室にあてられ、僕の部屋が子供室になつた關係からである」

（同11月号「不朽洞から」）

路郎の句にある

―二階を降りてどこへ行く身ぞ

は川柳雑誌第三巻四号に載つたものだが、彼の二階好きは

―見上げれば二階に椅子の端が見え

の作品とともにこの頃の彼の心証や気分がよくにじみ出ている。

「昭和五年十一月十四日河盛荻村翁逝去す。行年六十五歳。俗名河盛彦三郎、堺の木綿問屋河内屋の外孫。ほとんど生涯を教育界のために尽す」（山雨樓メモ）

「荻村翁の長逝について水府いわく、関西川柳社創設当時奮つた人、文字の美しい謹厳な士であつた。半文銭からも僕も寂しい」との悼みの便りがあつた」（同）

「路郎は其の後（筆者註・昭和6年路郎

44歳)、たのまれて堺市民病院の事務長の職に就いた。当時の院長から「君は川柳の第一線を退くか、それとも事務長をやめるかどちらかハッキリしたらどうか」と膝詰談判を喰った事があった。これは路郎が事務長としての手腕を買っての院長の要望だった。元より事務長の職は其頃の院長がむつかしい人であったので、路郎君ならうまくやってくれるだろうと、さる人の紹介でなったのだから、強いて囓り付いていなくてもよかつたし、何時止めても家庭では文句を云う人が一人もいなかったから、「それだつたら今日かぎり事務長を止めます」とあつさり答えたので、当ての外れた院長は、「まあ、そんなに云わんでも」と熱りを戻しにかかつた事のあつたのを憶えている。院長は或日、お供を連れて私の家へ訪ねて来られた。そして私に「こんな家に住まなくても、もつと良い家へ、住めばよい」と暗に、事務長の職に本腰を入れるなら優遇するぞと云わんばかりの色気をほめかして帰られた。私は万事路郎の意志の働く範

囲で暮しているのだから、院長の親切は唯聞き置く程度で済んでいた。病院へ帰られた院長は、「あの妻君は馬鹿か」とあつたりの人に云うていられたそうだが、人間は馬鹿と云われる位気持の楽な事はない。利口に見えるために苦労したり、煩悶したりしている人が世間にどれだけ沢山いることか、路郎は生さんがための職業と、川柳とを天秤にかけて、常に均衡を保っているが、どちらかを選べと云えば、一も二もなく川柳と答えるであろう」(嵐を怖れぬ路郎) 葭乃、昭32・7「川柳雑誌」古稀特集号・No 362

麻生路郎物語 (16)
 路郎の妻を語る

この辺で路郎は妻の葭乃をどのような眼で眺めていたのであろうか。その恰好の資料が「川柳雑誌」(昭39・5・6・7月に連載)の「妻を語る」である。葭乃書簡に少々おんぶしすぎた不公平さをここ

で均等化する意味で、その愛妻記のダイジェストで今回は文字通り埋め合せをしておこう。以下は全文、路郎が書いた。

(略)

葭乃と私が大正三年の四月九日に結婚してから、この四月九日が来たら丁度五十年になる。五十年と言えば半世紀だ。しかも激しく移り変つた世代であつた。幾ら恋愛結婚にしても、飽きも飽かれもせずに、よくも今日の日まで続いたものだ、自分でも呆れている。しかし振り返って見ると、続いた理由がないこともない。その当時の私は肺炎を患らつていたので、妻を娶るなら第一は健康であるこ



珍しい路郎・葭乃先生の相合傘

(昭和31年4月8日(日)、川雑婦人友の会と篠山支部合同同の観桜句会、於篠山小学校)

と、第二は嫉妬心のないこと、第三は愛嬌のあることという三条件を目標にしていた。

自分が病人でありながら、妻の健康を第一条件にしたことは、今にして考えると、随分自分勝手な条件であるが、それには大きい理由があった。私の母が肺結核で私が生れて一年三カ月の時、郷里尾道で亡くなった。(中略)それから私はかなり厳格なおばあさん育ちで、母の愛情というものを知らず、学友の母から可愛がっては貰ったが、母の無い淋びしさを身をもって体験していたので、妻を持ったから、私の生きる限り、妻の命を護ってやろうと考えたのであった。

葭乃の母も、葭乃の六才の頃、肺結核で亡くなり、おばあさん育ちで、おばあさんが、まもなく亡くなってからは父と親子一人一人で育ったのである。

(中略)

私が蘆村(筆者註―葭乃の父)にはじめて会ったのは、西田当百の二階で句会の晩だった。大正二年の頃のことである。若

い女学生と並んで座っていたので、妹を連れて来たのだとばかり思っていたが、それが彼の娘であった。それほど彼は若く見えた。この娘が後に私の妻となるなどとは夢にも思わなかった。

(中略)

私は大正二年に、海外へ流出の許可願のため、東京から帰阪、姉の病気を看護しながら、川柳を創っていたので、葭乃との交際がはじまり、私が指導的立場で、ロシヤ文学の英訳本と一緒に研究したりした。葭乃は学校で英語の古典ばかりやっていたので、アップトゥデートの英語や思想的な文学は私に教わる立場にいた。斯うした交際からいつか、葭乃は私に魅力を持つようになり、私は葭乃を愛するようになったのである。彼の女は伝道の生涯に生きようとする意志を醸成して私との結婚を受け入れることになった。

そこで私は葭乃の父に、妻にいただきたいという手紙を出した。その返事は「さし上げないことはないが、条件があるの一度お越し願いたい」ということであ

った。どんな条件があるのかと勇敢にかけて行つた。

父蘆村の注文というのは次の通りだった。

「私は長い間、この娘一人を力に生きて来た。が、娘さへ承知であれば差し上げてよろしい。しかし、一人娘をあなたに差しあげると私の家は絶家になる。それも差支えはないが、あなたの方の籍に入れることが出来ますか。それからもう一つ条件がある。私は今も言ったように、この娘一人を力に生きて来たので、今更女中をおいて暮らす淋びしさには堪えられない。二人が結婚しても一緒に住ませてもらいたい。私は現在教職にあるので、経済の方は心配かけないが、働けなくなったら面倒を見て欲しい。私の言いたいことはこれだけです」

と言うことであつた。そこで私は、

「籍の問題は私がすぐに解決します。あなたと同居も結構です。若い二人より、少しでも早く世渡りに経験を持たれるあなたと一緒に暮らせることはいいことだと

思います」

「それでは仲人はどうしますか」

「それは、あなたもご存じだし、私も親しい、西田当百に頼んで来ます」

ということ、この縁談はトントン拍子に運んだのであった。二人が既に愛しあっていることは打ちあけなかったが、蘆村はそれと気づいてるようであった。二人に顔を赤らめさすようなことは言われなかった。当百は

「ホンマかいな、担ぐのと違うか」と、はじめは信じなかったが、

「よし、承知した。しかし、うちの家内はそんな席へ出るのはイヤだと言うがどうする？」

「じゃ、仲人は君一人でもいい、野合だと言われても困まるから、君をたのむんだから、結婚当夜の謡だけを君の名調子でやってもらえばよろしい。万一の場合は私の責任だ。君とこへ尻は持って来ない」と言うことで芽出度し芽出度しと簡単な結婚式を挙げたが、籍を入れる難問題も一ト月のうちに解決、すべての約束を履

行して、翌年には一人の姫を儲け、次々と、四男五女の親となり、四人の孫が出来て今日に及んでいるのだ。そして葎乃は九人のこどもを生んだ顔もしないで、年よりは若く見えますと言われている。

(中略)

葎乃は無口で、必要以上のことは言わなかった。声を出して笑うようなことはしなかった。喜怒哀楽色にあらわさず式のお嬢さんだったのである。

私の結婚条件の三番目には愛嬌あることとなつてゐるが、この条件だけは外ずして結婚したのであった。

私は私の娘等によく言つた。結婚の相手は大学出であること、スマートであること、家は相当の資産があることなどと、いろいろと条件を持ち出すのいいが、先方が同じように数多くの条件を持ち出して来たらお前の方がパスしないことは明白だろう。結婚条件は必ず割引することだ。で、なければ、いつまで待つても結婚なんか出来るもんじゃアない。それで私自身も第三の条件を外ずして

結婚したのであった。

新婚当時、

夕食が済むと川柳三句出来

という楽屋落ちの句で、ぞめかれたものだった。(中略) この句は誰れが作つたか知らないが、多分楽屋落ちの句の巧い五葉の作ではないかと思う。斯くして幸福な日日が過ぎて行き新婚のよろこびを満喫していたことは世の常の新婚夫婦と同じだったと言えよう。

その頃の葎乃の句に、

繋ぐ手の羞しいほど月が冴え

と言うのがあるが、おそらく実感を詠んだのであろう。押売りに凄こまれて、変な売葉を高価に売りつけられたのも、夫の健康を祈る純情のあらわれたと思えばバカだなアと一喝するわけにもいかなかった。

(中略)

葎乃は主婦の座にあつても、世間的な奥様よりは發揮しないで、いつまでも女学生型で、来訪者があつても、ただお辞儀するだけである。

絶えずやって来た柳友の川上日車にもアタマを下げるだけなので、私が、

「何とか言ったらどうだい」と言うのと、「言ってます」と言うが、声は少しも口から外へ出ない。それほど無口だった。

(中略)

しかし葭乃の無口は私にとつて困まる場合もあるが、ムシロありがたい場合の方が多し。私が何をしようが一切干渉しないのである。徹夜で原稿と取っ組んでいる時に、「あなたお茶をいれませした」とか、近所のニュースを聞かされたり、もう遅いからお休みなさいとか何んとか言われたのでは、気分が殺がれて、折角の原稿が滅茶苦茶にされてしまうが、その段、飯の時間が来ても、飯を運ばないので私の創作的な仕事には世にもありがたい良妻なのである。

そんな時には彼の女はハワイの柳友古川魔花麗が贈つて呉れたアメリカのヘルストという雑誌を読んだり、ドラマの脚本を耽読して、私の筆を擱くのを待っているか、机にもたれて眠っているかである。

何ンどきでも眠られるし、何ンどきでも眼を覚ます芸当を持っているので、夜更しもやるし、早起きもする。疲れたら三日でも四日でも眠むる。それが彼の女の健康法でもあるという、まるで猫のような生活を平気でやつてのける手際は一寸真似が出来ない。この習性は九人の子どもたちを育てて来た彼の女の特技であるう。

(中略)

よその奥さんたちは、宿六のポケットを探つて、女性の名刺があつたり、広告マツチがあると、すぐに根掘り葉掘り訊問されるそうだが、葭乃は幾ら名刺が這入つていようが、あつちこつちのマッチでポケットをふくらませていようが、そんなものには眼もくれない。キモが太いというのか、その方面の神経が少し足りないのか。彼の女のいうしよが、ない、哲学没法子の実現に徹しているのであるうか。では嫉妬心のカケラも持ち合わさないのであるかと思つと、

お帰りにならず刺身も色変わる

という句を創っている。この句には、妻の折角の心づくしも、夫の帰宅が遅いので変色して、「もつたないわ」という経済観念から詠んでいるのではサラサラないし、料理の変色をなげいて報告しているでもない。句意は嫉妬の炎を婉曲に燃やしたものと解すべきである。

若いサラリーマンを夫に持つ時代の妻が夫の帰宅が一刻も早くありたいという共通の悩みは、この句に巧みに表現されていると見ていい。しかし句の底に潜んでいる嫉妬心を見通してはこの句の価値は半減してしまう。

ある夏の朝だった。出勤前の食膳に、掻き水を載せただけで何一つ運んで来ないので、

「飯は？」と言つたら、

「これで」と水を指さしたから、

「オレは出勤するんだぜ。朝ッばらから水を喰べて働けるか」

「暑いやろ……思つて」と、さしうつむ

いた。

「オレは今後、よそで飯を食ふことにす

る」

と宣言した時、葎乃のアタマには閃めくものがあつた。それは私が給仕なしには食事をしないし、お酌なしには盃を手にしないことを知っていたからである。

そして、彼女の膝にバラリと冷たいものの落ちたのを見て、私もそれ以上を言わず、あわてて出勤してしまつた。今でも暑がり屋で有名で、首のあたり一面にアセモを出し、家では殆んど裸に等しい薄着をしているし、ルームクーラーをしてやる資格のない夫は、彼の女が毎日のように昼日中をデパートに避難して、日舞を鑑賞し、午後五時ごろに御婦館あそばすのを寛容するより手がないのである。若妻の頃すでに、そんな暑がり屋であつたらしい。自分が暑いので、夫も暑いだろうと、食事の代りに氷を喰べさせようとして、一トもんちやくが起きたのであつた。今でも、これを延長したような自分本位の親切さは持ち合せている。

(中略)

葎乃は無口のせいもあるが、若い奥さ

んがよくやるように、他人に宿六ののろけを言つたりしなかつた。私が「商業之大本」の主幹をしていたころに、葎乃は次のような歌を詠んだ。

ヘルメット冠れる君の年少し
老けて見ゆるも頼もしきかな

これが彼の女の紙の上でののろけだと言つてもいいだろう。クリスチャンの彼女は鳴かぬ蟬のような存在だつた。

(中略)

葎乃は金銭に執着を持たない。浪費癖と云うのでもないが、どつちかと言えばありづかいの方である。なければないで平気だ。その昔、電車に乗つたが、財布に金がなかつたので、四ツ橋で市電から降ろされ、車掌の集合所へ連れて行かれた。幸い車掌の中に川柳家が居て、証明してくれたので、キップを借りて帰つたことがあつた。市場へ出かけても、エ工海老があつたと予算外の買いものをすることはあるが、しゃれの方へはカネを捨てない。

スフにしてあとは梯子で消える金

という句がそれを証明している。芝居へ

行つても帰りに料理屋へ寄らぬと、行つた気がしないというのである。それも小さい子どもを荷物のように横抱きにしてのれんをくぐつたものだ。これも見ようによつては、私に打つてつけのベターハーフだつたのである。

麻生路郎物語 (17)
――爆弾を抱えて来たる事件――

川柳雑誌終刊号 (昭和40年9月号)



川柳作家麻生路郎が、その全生涯を川柳に賭けた。城は「川柳雑誌」であつたが、その創刊号は大正十三年二月号でス

ターゲットし、昭和四十年九月号のナンバー四六〇号でそのタイトルの幕を閉じた。この間、戦時体制に協力して、二年七カ月の休刊冬眠期があるが発刊継続実数は実に三十八年四カ月間に涉っている。勿論このながい歳月の底には、人間路郎を押し込んだ風雪のなみなみならぬ試練の一とときが数限りなくあつたことは言うまでもない。

そのながい歳月が川柳を介して、路郎の身边に去来した人間像——あたかもそれはグラントホテルの回転ドアの景観にも似ていた。人來たりまた去り、その集散離合の時の因縁は、路郎生來の性格を反映して、哀感多い川柳日記を倦むことな^く浮彫りにしてい^つた形である。

「昔の路郎の性格の非常に激しかったことは今ここにおられる方は一人も知っておられないでしょう。情熱そのもの人で自分が思っていることをちよつとも味つけなく、水増しもせずに他人に云う人でした。非常に感情家でもあつた為に、言葉に飾り気がなく、腹が立つた時には

まるで犬か猫のように私達に云われることもありました。亡くなられた福田山雨楼さんが執筆された文章の中で、『失礼ですが先生はちよつと子供のようなところもあります。』と書かれたように感情の高ぶっているときは、ちよつと駄々っ子のようなどこがありましたな。それも自分の主義主張をあんまり潔癖に考えるからだと思つてます」（ありし日の思い出を語る——葎乃先生を中心にして——葎乃、「川柳雜誌」麻生路郎追悼号・No.460）

「路郎の癩癩^{かんじやく}は、正義を押し通さんがため的情熱の發露である。（中略）路郎の情熱もし豆炭の輪切りとならば、たとえ八人の子をなすとも、私は離婚を申し込むであらう——葎乃記（昭和七年五月「川柳雜誌」この山雨楼メモの同じ頁に、

「昭和七年一月十六日八宮神社の神戸支部新年句會に講演。爆弾を抱えて來たる樞元紋太氏、社規により客員名簿から抜く」

とある。関西地元柳界の古參柳人の間で今も語り草のエピソードである。

ときに四十七歳の路郎自身にとつても、この件は生涯のうちでも忘れ難いワンカットであつたらしく、「川柳雜誌」奉還号（昭和十八年十二月号）での「苦闘四十年」の中でかなり長いスペースを割きつぎのように記している。

多くの句會へ出席したが、ただ一つ今でも遺憾に思ふ句會があつた。それは當時健康を害してゐたにもか、はず、押して神戸支部句會に出席した時のことである。その時の演題は今でも覺へてゐるが「爆弾を抱へて來る」であつた。當時「ふあうすと」誌の創刊間のないことであると思ふが、紋太君から、それより少し以前に神戸支部を廢して支部の人々を呉れないかと云ふことであつたので、「ふあうすと」創立の趣旨を訊いて見た。それが我社の方針と一致すれば、支部の人達が行くと云へばやつてもいゝと思つたからである。

ところが刊行の理由は單に雑誌がないと淋しいから出すのだと云ふのであつ

た。だから大阪へも支部は設けないと云ふことであつた。その後そんなことを忘れたやうな顔をして大阪へ支部をつくつたが、それはどつちでもいゝとして、たゞ淋しいからと云ふやうな理由では神戸支部を廢止することは出来ない。支部の連中で、「ふあうすと」へ行きたい人があれば自由だが、我社としては「ふあうすと」以外の人たちが相手に川柳の社會化運動をやつて行く必要があるので、支部は廢止しないと云ふ回答を與へた。これは勿論支部の人達を通じて談したのである。こうしたいきさつのあつた後の句會であるだけに、紋太一派の神經が尖つてゐたのかも知れないが、神戸支部の句會へ出席した紋太君が私に食つてか、つた事件が惹起した。

尤も危険な時期に遭遇してあるとも云へる。従來川柳を社會が認めなかつた反面には川柳人自身の不勉強も勘定に入れなければならぬ。今や川柳人は結束して己れに嚴でなければならぬ。折角認められて來た今日、川柳人の増加によるレベルの低減によつて、再び文化文政時代の墮落期へ墜ちなければならぬと云ふことは、寒心すべきである。警鐘を亂打したのであつた。そして川柳への精進は死ぬまで續くのであるし、殊に至つて地味な努力を續けて行くのであるからその覺悟でやらなければならぬことを説いたのであつた。然るに紋太君はこの言葉をどう聞き違へたのか、食つてか、つた。そして、その後の「ふあうすと」誌上で讀むに堪えない罵詈雑言を敢てした。支部同人はこれに對して大いに憤慨した。そして反駁文を書いてこれを發表して呉れと迫つて來たが、私はその支部同人が紋太君と目と鼻のところに住んでゐるので、今後の摩擦を思ひ、支部同人をおさへてこれを葬つてしまつた。ところが支部

同人の幹部は私の親心が判らず遂に支部を去つてしまつた。

私はこの事件直後、試みに金澤でも同じ講演をやつて見たが、金澤では何等の事件を惹起せず、寧ろこゝろよく聽いてくれたのである。私の手許には今でも支部同人の書いた反駁文が残つてゐる。私は何處までも柳界の平和をのぞんで、このことは發表しないつもりであつたが、「ふあうすと」誌に残るあの一文が後世の柳人を誤解せしめるのを惧れるため、こゝにこのことを書いて置くことにした。

由來紋太君は謙恭な人として知られてゐたがこの事件に對してあの下劣極まる言辭を弄されたのを見てその謙恭について疑ひをさしはさむやうになつたのである。人間は誰でも慣れると先輩に對する禮を忘れ勝ちになるものであるが、従來川柳人の一部にはことにそれが甚しかつた。紋太君の如く、誰にでも謙恭な人であると思はれてゐる人でさへそれがあるのであるから他にそんな人があるとしても不思議ではないのかも知れない。

路郎の紋太観はこのあとも続いているが、冗長にわたるので割愛する。とにかく路郎の苦闘四十年の四頁にわたる全文中、この爆弾事件の回顧がかなりの比重を占めている点を注目したい。話に筋目を通ず路郎の烈しい気性を示す好資料とも筆者は考える。

高鷲亜鈍(藤村青一)あてに楳元紋太が昭和三十五年八月八日付であつた原稿紙十三枚(四百字詰)の手紙が筆者の手許にある。支障なき部分を、所持者の許可を得たので紹介しよう。ただし、路郎の発表した上記の爆弾事件については直接何もふれられてはいない点が首尾を欠くが、紋太と路郎両者の心情的ニュアンスの相反するところが興味深い。長文にわたるので、必要個所の抜すいに止めておく。了承願いたい。

——まず最初に路郎・水府両氏のお言葉ですが、川柳雑誌社の門下だ、ということとは私も意外です。門下でも会員でも社友でもなんでもありません。(筆者註——)

これは紋太書簡の冒頭にある字句で、この件の質問に対する回答のための執筆のようだ。原稿用紙のマス目は活字発表に備えてのあとが明らかだ。

ただ親しく接近した時期はありません。昭和四、五年前後だったと記憶しますが、二、三年間に亘つて句評会に出席したのですが、その頃の川柳雑誌に毎号連載していますから外見上殆んど内部の人間に見えたかも知れません。当時、水府氏も紋太は川柳側だと私を警戒していたかも知れぬほどでした。

けれど、句評会への外部からの出席者というだけの関係で、他に何んの意味もなかったのです。こう云つてしまえば、大変臭いことになるので私は好みませんが、門下か会員かと関係を問われるところの言い方になる。

ただ私としては、路郎氏を尊敬し、川柳を愛し、私自身の勉強になることも多大であつたので、何や彼やをこめて、他意なく神戸から手弁当で毎月休まずに通つたことでした。

その頃までの関西柳界は、只今と違つて主幹だの会長だのと云う制度的なものがなく、至つてのんびりしたものでした。東京柳界が先輩を先生と敬称しているのを内々笑っていると言つた状態で、関西には先生の呼び方をしなかつた時代で、至つて平民的だった。

(中略) 私は時々書いていますが、私には誰某の門下だとか、何門の出身とか、誰先生に師事したとか云うことがなく、多くの人の文章や句が先生であつただから、今から始める人も自分で読んだり見たり聞いたりして自分で道を開くようにしてくれというております。そんなことで特に路郎氏の門下だとか番傘に師事したとか云わなくてもいつも両氏を尊敬し、私の方が後輩であることを念頭においておりますので、改つて門下ではない、会員でないが無関係を云いたてることも私の本意ではありません。(中略)

川柳界の最初の先達である久良伎、剣花坊その他当時の人たちは、柳多留を唯一の教典としモデルとし、師として始め

たのです。そして庶民的な味を尊重して、それを川柳の誇りとしたものです。それが東京では、以前からの雑俳界の風潮や氣風が断ち切れずに続いていましたから、宗匠的な慣習も同時に抜け切れませんので、忽ち先生だとか門下だとかいう觀念が結びついてそういう制度が自然に植えつけられたものと私は思っています。

このあと紋太の川柳人生の自己経歴が綴られている。それを手短かに要約しておこう。

大阪の菓子店に丁稚奉公中の十七、八のころ投句などでひとり楽しんでた。十六歳で父を喪つたので小学校もろくに出ていない。そんなことから、初めて句会に誘われ、その庶民的な空気が味がわが身にしみ、「番傘」が創刊されたころ、当百さん宅の句会によく通い、出席率もよく、句も文も「番傘」へ発表し「ある時は客員といった名をつけられたが先方の好意によるもので、つけたりやめたりが二

度ほどあった」大正十六、七年ごろ「つばめ」が廃刊したので、一枚もの二つ折を印刷したのがきっかけで「柳太刀」を創刊する。

「そのころには神戸にも四、五の柳社が出来、柳誌も出ていてお互いに競争意識を張り合っていました。私が、私ほどの句会にも出ていた。それが四、五年するとだんだん疲れが出て、どの柳誌も氣息えんえんといった状態となり、各社の有志や浪人組がなんとなく、気分一新を望むようになったのです。

そのほか、いろいろの原因や動因がありまして、昭和四年六月から「ふあうす」が出たわけです。私が四十歳の齡でした」

「この私が神戸柳界で最年長者であったことと、いつも世話を焼いていたということが親しかつた番傘へも入らず、川柳と親しくしても会員にもならず、終つたのではないでしようか。古參の青岸(仲間の)が熱心をやっていたころ、神戸は大阪の力をからず独立してやろうと、いつ

も云っていました。これは私が大阪の句会へ出ることを嫌っていたのかもしれない。その言葉が私の頭に植えつけられているのか、大阪に限らずどこでも何んでも頼りにしてはいかん。川柳人は独立独歩自分の力でやるべきものというのが私の主張です。ですから私は、弟子だの門下だのと——もし私を師のように云う人があれば説教するつもりです」

路郎も紋太もともに事業欲に燃えた四十代である。一方が三十年計画をたて川柳の社会化運動を川雑を拠点に日本中へ拡大しようと氣宇雄大に構えれば、一方は十六歳で世間に出た庶民的人間川柳派の師弟制度をあくまで否定する、神戸中心の文字通りの「ふあうすと」という握り拳主義。爆弾事件とは帰するところ、その両者の異和感が、導火線の役割を果たした、剛と柔の対決——それもいえるのではないか。

麻生路郎物語 (18)

— キング喫茶店 —

庶民大衆の誤れる川柳観を正し、純正川柳の啓蒙を目指し「川柳雑誌」は巻を重ねた。

句席における熱っぽい路郎の川柳講演は、東に西にの川柳行脚をもって拡大され、川柳一筋に燃焼する路郎の川柳メモは、昭和四年以降過密の度を加え、昭和六年以降戦争まで山雨楼メモは真黒に塗り潰されている。

〔昭和五年〕 筆者注・主要メモのみに限定した Ⅱ

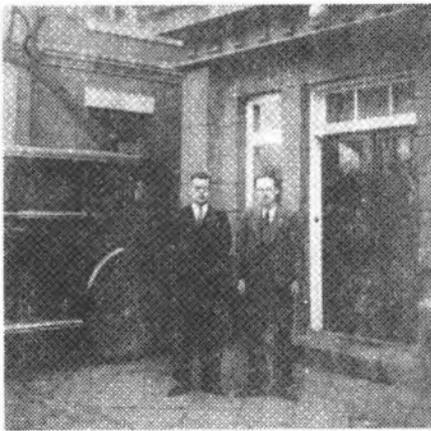
○二柳子、緑雨と改号・山雨楼同人参加。
○裏日本から函館へ川柳行脚・第二回海峽親善大会出席。三太郎、錦浪らと帰途白河、東京、横浜に寄り多くの柳人と歓談、西念寺の柳雨忌に出席。

○十一月十四日河盛芦村翁逝去、行年65歳——水府いわく「関西川柳社創設当時

奮った人、文字の美しい謹厳な士であった」半文銭からも「僕も寂しい」との便りがあった。

○十二月十六日三太郎来訪、徹宵痛飲。
〔昭和六年〕 一堺市立公民病院事務長。

— 文学を軽んじ馬で裾野ゆく
— 恋の罘あゝの眼だらうか眼だらうか
— 酒とろりとろり大空のころか
— 十二月うれしい風も少し吹け



於新京満洲屋旅館玄關路郎先生と中野柳陽氏・昭和9年3月17日（土）

○四月中入院・病気は私の肉体的慰安也
○『川柳のぞき漫画 浮世さまさま』出版・路郎選句鳥平画

○八月三日付朝日新聞「天声人語」に川雑の句を全段でもって紹介される

○十月四日京都川柳社創立二十周年記念大会に出席。畝傍、飛鳥に遊ぶ

○*1松丘町二・三好革郎同人辞退
〔昭和七年〕純喫茶キング開店（玉出本通り三）

○新年号巻頭に「われ子規たらん」と題し一大抱負を語らんとしたところ、タイトルをみて妻が愕いてとめた。葭乃女史本社新春句会で「情熱の句に就いて」処女講演

○神戸新年句会で講演「爆弾を抱えて来る」樞元紋太氏社規により客員名簿より抜く

○四月金沢の産業観光博記念大会出席
○『川柳漫画行進曲』湯川弘文社より発刊

○関東・関西を一行四十名で行脚
○川雑百号記念「川柳の夕」朝日会館で開催。講演三太郎・水府・路郎。聴衆一千余

人

○六月号より武玉川研究輪講。省二・東魚・秋農屋

○関東川柳団歓迎大会で挨拶し「詩としての川柳の向上。事物にとらわれた川柳を遂うことを排し、生活感をとりに入れた、自分の将来の指針はそれだ」と叫ぶ

○七月六日浅井五葉逝く

○九月青田代議士秘書を兼務（一年後辞任）

〔昭和八年〕

○一月号川雑創刊十周年記念特集・一三

○頁の豪華版。光頭会支部（永田里十九）川雑奉天支部（江戸みつる）八束支部（平塚乱笑）野山支部（野山修）玉造支部（清水白柳子）今治支部（渡辺暁童）今里支部（吉田水車）いづれも新設

○六厘坊25回忌記念大会（道頓堀クラブ）

○八月「喫茶新聞」毎月一回発行・麻生幸二郎（路郎）主宰（洋飲機関新聞）これは

路郎が同業組合の副組合長および大阪府料飲業組合連合会役員の立場で企画された

た

○十月川雑東京句会開催（浅草並木俱樂部）

○九月二十六日愚陀、乱耽句集「潮騒」刊行記念句会（端の坊）不朽洞発行

○十一月川雑同人社友会で従来の社友制を廃し一列同人とし、旧社友を社務進行上評議員と称し、旧同人を理事と称することにした。（理事・翠夢・紀太・草葉・水車・かおる・里十九・二南・琴人・新水・閑生・雅幽・万よし——編集局緑雨・丹路・町二・山雨楼・鶴峰・霞乃・乱耽）

○路郎先生玉出洋飲食同業組合の組合長に推薦さる。また玉出衛生組合評議員当選

乱耽

○「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」「文藝春秋」一月号川柳名吟の中に選ばれる

〔昭和九年〕

○*2川雑事務所住吉区平野町西之町八

三・橋本緑雨方に移す

○大毎にさかに随筆を寄す

○新居浜支部（越智虹子）大鉄支部（植山

九天）伯耆支部（湯原美笑）鯉川第二支部

〔尾添好郎〕いづれも新設

○JOBKから「二千六百年前の大阪座談会」に出席。（大阪市財界代表等）

○三月九日鮮満地方へ川柳行脚・京城・平壤・安東・奉天・新京・ハルピン・鞍山・大連・撫順を巡歴・三月二十九日帰阪

○四月きやり創立十五周年記念大会出席・四国支部聯合川柳大会（今治）出席

○五月きやり十五周年記念号に「川柳作家十五戒」を寄稿す

○六月BKから「川柳披講と合評」の放送

路郎、草葉、乱耽、新水、豆秋、山雨楼、水府、雲雀、小太郎、舟人、夢路、文久等が出席

○十一月川雑事務所移転、大阪市天王寺区上汐町一の五一増位汀柳方。「たまむし」（通刊81号で終刊）川雑と合流。「漫画と川柳」富永興文堂から出版

〔昭和十年〕路郎四十八歳

○三男一步学童に上がる。四男洋死去

○山雨楼東京鉄道工務局へ転勤

○四月大阪朝日に「川柳の親心」執筆。近

近

刊の「大阪人物誌」に私が両親にとまわ
れて大阪に出たように書いてあるが……

○二月号から日本名所名物川柳連載・雀
郎選しげを画。十一月号にとんで四国の
巻に五健選ならびに画

○一月前総務橋本緑雨祝賀の夕功労章授
与

○行人会支部（平井春光）十三支部（浅野
牧人）開設

○三月二十六日満洲凌源の岩崎柳路夫妻
帰国。四月七日歓迎句会、南紀白浜に招待

○三月路郎主幹大阪時事新報広告副部長
として入社さる

○森東魚株式会社間組入社

○七月路郎指導で阪大川柳会から「大川
端」（不朽洞版）刊行。BKから全国中継
で「川柳の夕」放送。久良伎、三面子、水
府、雀郎、路郎らが講演

○十月東京支部開設。福田山雨楼支部長

○十二月川雑京阪神支部連合忘年川柳大
会を日本橋クラブで開く。一八〇名出席。

講演「歳晩の味」路郎。「柳樽の精神」山
雨楼

翌年の昭和十一年（路郎四十九歳）に

は、路郎の川柳一筋の生涯にとつて画期
的な一大転換を示す「川柳職業人宣言」が
行われるのであるが、次回にそれを詳記
することにする。ともあれ以上のごとき
川柳日誌が、山雨楼メモに詳記されてい
るが、年毎に綴られたそのメモは、前記要
約の量を大幅に越えている。路郎自らの
執筆もあるが、山雨楼の筆蹟によるもの
がほとんどのようである。

こうしたメモを通覧していくと、路郎
の川柳生活がかなり明確にみとれる。
その事件の中から葭乃書簡をひらいてみ
よう。

「父芦村は岸の里の家で、昭和五年十一
月十四日私の母の三十三回忌の日に亡く
なりました。それから私達は、玉出本通り
へ移ってキング喫茶店を開業しました。
これは決して家計の足しではなかったの
です。世間を知る為の私の修業の場所と
路郎が決めたことです。

人間嫌いの私が客に接することの難し

さは川柳家の誰でもがよく知っていられ
る筈。店をあげる前には、何杯かの洋酒を
あふつてからにします。勿論、女給も二、
三人は雇っていました。まずお客の先
手をうって、いい気分になっておかない
と話のやりとりがスムーズにいかないの
です。

業者が配達してくる洋菓子ほとんど
が子供のおやつになってしまいますし、
洋酒の消耗もばかにはならず、こんな営
業ぶりでは、路郎のプラスになるところ
ではありません。路郎にすれば、とにかく
世間知らずの私を、ほちほち教育してい
こうという腹づもりであり、そのための
思いつきであつたのです。このおかげで
私も世間の裏をちよびりのぞき大人の
嘘のいやらしさも知らされました。この
喫茶店は七年程でやめました。

この店のおかげで、少しは無駄口もき
ける様になつていた私は、店をたたんだ
ら、またもとの木阿弥で、一言も口をきか
ぬ、そして声をたてて笑わぬ葭乃になつ
てしまいました。生来の根性というもの

は、どうしてもなおらぬものだどハッキリわかりました。

私は昔から四方八方からのサービズなくめで育ってきたので、路郎はそれをため直すために苦勞をしたことでしょう。私がおかげで世間の裏というものも、世間の苦勞というものも、チョッピリ覗いたかの様でございます。

「どうしてあんなにのんびりした気持ちになれるのだろう」と

と思うのが路郎が私へ対する興味の第一歩でありました。私は食いけ一本の娘で、身を飾ることも知らぬ女でありましたから、人からプロポーズされる様な事件は何一つ持っていなかったのです。唯一本ぬけたようなのんびりさがあつた事は事実です。烈しい性格の路郎には、心をほぐす中和剤であつたでしょうが、また派手に喧嘩のできる相手ではありませんでした。

路郎は『福壽草』の序文の終りに

「彼の女の生活は私を防波堤として、港の中の静かな日日に安住し切つてい

て、社会に対する抗議とか公憤とか云つたものを持ち合わさない。従つて句の上

に、そうした戯びしき、激しさと云うものはない」

と書いています。実際私は幼いときから、誰かに寄りそうて生きていました。そのため、何くそ、という気概は少しもありませんでした。ですから私には内助の功などは業にしたくもないのです。うるさくもない代りに、痒いところに手の届くような世話もやかないと云う不甲斐ない女に生れついでいるのでございます。拙宅に「鬼灯の赤きは人のためならず 井泉水」の軸がございます。(葎乃書簡)

路郎の鮮満の旅は、宿屋住いをして執筆したルポである。鮮満とどこどころにまとめられ好評だつたが、この旅で、満州鉄道の優待バスを贈つた大嶋濤明は、つぎのような一幕のエピソードを川雑(路郎追悼号)に寄せている。

「先生は朝鮮経由で満洲に来られたが、国境の安東税関で所持品の検査があり、その姓が麻生とあるので安東警察に連絡

され、嚴重な取調べがあつたそうである。

その頃日本では社会主義の取締が厳しく、当時の社会主義者の大物級に麻生久という人があり、常に私服警官が尾行する程の要注意人物であつた。安東の警察でも先生の姓が麻生なので神経を失らせて所持品は勿論身体検査まで行つたそうである。夫れが*3 本田名義のバスを発見され、別段迷惑はなかつたが、折角のバスの使用が不能となつた、との事であつた」(路郎先生の思い出、昭40・9「川柳雑誌」No460)

*1 松丘町二は、この年には同人を辞退してゐない。昭和9年1月号まで編集部に所属した。

*2 昭和7年8月号から、この住所の緑両方に移っていた。

*3 大嶋濤明が、友人である満日新聞記者の本田濺花に頼んで、本田名義の満鉄バスを貰い、路郎に送つていた。



昭和18年6月14日(月)、川雑西宮支部創立句会

川柳人麻生路郎にとって、最も劇的なまでに悲壮な生涯の一大転機は、職業川柳人宣言のそれであった。いかにこのことが、彼自身にとっても畢生の決断力を要したかは、彼自らが筆を執った二つの記録にも明らかだ。

昭和十一年六月には一舉にして、社を深淵に投げ込むやうな事件が起つた。私は監督の責任上、主幹辞退を同人會に申出た。どんな事件であるか、發表の限りではないが、それがために同人會を開いて社運の挽回策を講じることとなった。しかし同人の誰もが社を背負うて立たうと云ふ人はなかつた。結局、私に善後策の質問があつたので、今後の経営に對して三案を提出した。その結果、最後の一案である路郎の個人経営に落ちついた。

九分九厘まで倒壊した塔を引き起す作業は容易なわざではなかつたが、私は奮然として起つた。家庭に重病人を抱へてゐた際、私自身も氷囊を頸筋にのせて、七月號の編輯にかゝつた。そしてこれを一

轉機として敢然として川柳職業人を宣言した。

これは以前から考へてゐた「専門家なき世界發達せず、能はざるにあらず、爲さざるなり」と云ふ自己の所論の實踐に外ならなかつた。そして同時に斯界の隆昌と交歡のため、内地は勿論海外柳人までも網羅した川柳人協會を興した。

同人制を廢して社が私の個人経営となると同時に直接門下のみによる不朽洞會が生まれたことは周知の通りである。川柳職業人宣言は全柳界の問題となつたことは云ふまでもない。「そんなことが出来ますか」と笑つた人たちもあつた。川柳人外の知己からも無暴の舉ではないかとひそかに危ぶまれ、私に新しい職業を斡旋せうとされたが、私はその厚意を謝して自己の信ずる道へひたむきに突入した。(苦闘四十年、昭和18・12「川柳雜誌」戦時雑誌奉還号・No239)

私は今まで外部から見れば無暴に等しいことを随分とやって来た。しかし私自

身は決して無暴ではなかつた。私の実行して来たことはすべて、十年間位、練りに練つて断行したものであつて、成算のない企画は一つもしていなかつたのである。

真似をすることはやさしい。しかし創作にしろ、事業にしろ、未踏の地を開拓するとなるとなまやさしいことで出来よう筈のないことをイヤと云うほど知つていた自分は、自分一人で練りに練ることを辞さなかつたのである。

私が専門家なき世界発達せずと号して、職業川柳人宣言を発表したのもその一つである。そんなことが出来るものと真ツ先に反対ののろしをあげたのは柳人であつた。川柳外の友人知己も驚いてそんな無暴なことをして、食えるかと云つて、衷心から引き留めてくれた。いい職業を押しつけての忠告さえしてくれた。それ等の厚意に感激したが、私は私の意志を少しも譲さなかつた。ハワイの未知の柳人から、あの宣言は実に悲壯である。甚だ失礼な云い分であるが万一生活にお

困りの時にはお知らせ下さい。応援がしたいからと云つてくれた。

この提言には私も感泣したが、そうした提言に甘えるようなら、こんな宣言はしないので御心配御無用だと誌上で答えたにすぎなかつた。この一柳人こそ後年、門下となつてハワイ五島に『川柳雑誌』の根をおろしてくれた高沢一浪老である。

これは昭和十一年のことである。ビルの一室を借り、新聞記者の入社を求め、妻子を引き連れて毎日、ビル通いをして、専心柳界のために東奔西走をしていたが翌年から日華事変が勃発、紙不足のために、割当を貰うための東上がはじまる。(『川柳五十四年』、昭32・7『川柳雑誌』古稀特集号・No. 362)

路郎は川柳の社会進出と、質的向上を思ふのあまり、遂に本職を捨て、金にもならない川柳一本で立つことを決心した。一読者の多い大衆雑誌でさえ、如何にすれば読者にアトラクティブであるかを競うが如く、多種多様の雑誌は書店の

店頭で、濃厚な色彩によつて、或は新鮮味なタツチによつて購読者の眼を捕えようとしてゐる。此競争の烈しい中で、薄っぺらな短詩型専門誌の発行と、川柳に関連ある仕事などで安心の出来る所得のある筈はなかつた。加うるに路郎には其当時五人の子供があつた。きまつた職に就いて、孜々として働いても、子沢山の渡世は決して楽ではなかつたのだから、路郎の此企ては、恰もコロンブスのアメリカ発見に類するものであつた。此のアメリカ発見の舟は、みすばらしい荒莫塵を敷いた和船なので、絶えず天候に気を配らねばならなかつた。乗組員は私達夫婦と、子供達である。勿論子供達は目当があつて乗船したのではない。父が乗つたから続いて乗つたのである。いつまでも浜で遊んでいた子供もあつたらうし、山手の住宅で残つていたい子供もあつたであろう。然し太陽を中心に廻つて星は軌道はずす訳にはゆかなかつた。行けども行けども、島は見えず、水や空、空や水なる真只中を、船は木の葉のよう

に揺られて行つた。子供達の一人は舵をとつた。他の一人は櫓をこいだ。時化を喰つたら、皆さんで、かぶつた水を船から外へ掬み出した。路郎は舳に立つて動かなかつた。パロメーターであり、パイロットでもあつたからである。私はおとなしく両手を膝へのせて、舷にもたれていた。路郎が川柳職業人を宣言した時は折悪しく、私は心臓を機能的に弱めて半病人の状態であつた。よしんば、達者なからだであつても、私はアクティヴな人間ではないのだから、永い航海には何の役にもたなかつたであろう。私がアクティヴでない事は、持つて生れた性格でもあろうが、幼少の時から培われた第二の天性とも云えば云えないこともなかつた。(嵐を怖れぬ路郎) 茂乃、昭32・7「川柳雑誌」古稀特集号・No362)

昭和十一年七月、私の主宰する川柳雑誌社にとつて運営上の一大転換期が来た。それは従来の同人制度を脱皮し、社は私の個人経営となり、私自身は職業川柳

人を宣言し、名実共に社会的柳誌としてデビューすることとなつた。(下略)『句集』私達の序文より)

いつかは誰かがやらねばならぬことではあつたが、その頃の川柳に対する社会的認識の度合を考慮すればこれは冒険であつた。時期尚早であつた。川柳によつて衣食の途を求めるとは狂人沙汰である、と評する者もあつた。路郎の苦闘はこの時からはじまつた。

太平洋戦争中のこと、乱耽(住田)筆者(註)は路郎に一軸の揮毫を求めたことがある。これに対し路郎は二百円を要求した。当時の塊人の俸給二ヵ月分に相当する金額であつた。乱耽は「先生、正気ですか」とたしかめた。「ずんと正気だ」と答えたので、それを支払つたとのことであつた。食満南北であれば、おそらくその十分の一で求めに応じたであろう。路郎はこのような態度で自己の職業川柳人としての立場を誇示したのである。その晩年、*自筆の肉筆句集の予約前金を募集した

が、病を得て執筆不能となり、そのままにして他界したが、予約金のみは別封にして各申込み者に返金するように整理されてあつた。彼は職業川柳人としての、けじめを社会に要求したのであつたが、それはなかなか一般人に理解されなかつた。

戦前、日華事変のはじまつた頃の大阪川柳人協会結成以来、戦後現在の大阪文化祭川柳大会に至るまで、大阪川柳界が一致して行動せんとする場合に、路郎、水府の二人はその首席について争いつづけた。個人としてではなく、吟社の主幹としてそれを求めざるを得ない立場ではあつたが、その場合特に、路郎は尖鋭に執拗に代表幹事、委員長等の地位を要求した。世間的に見れば、川柳雑誌社よりも番傘川柳社の方が歴史も古く、全国的な分野も強大であつたにもかかわらず、路郎は断じて譲歩しなかつた。その心の底には——俺は職業川柳人である。君達はアマチュアではないか。団体を結成して社会的に行動せんとする場合、プロに席を譲るべきが常識ではないのか——という路郎

の一貫した主張があつたのであろうが、誰もそれを理解しようとはしなかつた。

筆者の如きは常に同席していたにもかかわらず、両者の調停斡旋に口を出すばかりで、その心境までも忖度するゆとりをもたなかつた。現在、自ら雑文屋渡世を名乗る身となつてから当時の路郎の心境に思いをいたし、自己の不明を泉下に謝するのみである。(昭和前期の関西柳界(一)よきライブル)塊人、昭48・5「ふあうすと」No50

3)

どだい川柳で飯を喰う、なんて無茶な話である。それも現在のことではない。戦前三、四十年も前の話である。

「川柳雑誌は同人誌とちがうで、しかも営業雑誌やさかいなあ」と豪語していた。何が彼をそうせしめたか。それは路郎氏の叛骨精神である。

彼は、関西短詩文学連盟理事長の職を固守した。それは個人的野心であるかのように見られた。しかし、川柳が、短歌、俳句、詩と同列に、社会的地位を得ること

は、ある時代の川柳人の悲願ではなかつたであろうか。連盟はその夢を実現し、さらにそれを拡大しようとする運動の一つであつた。しかし、柳界では、路郎氏の理想を理解する力に乏しかつた。彼の叛骨精神があまりにも、世に先んじていたからである。従つて短詩文学専門の図書館建設の如きも、はかばかしく進展しなかつた。

川柳界にはいろ／＼新しい運動が行われている。しかし、前衛俳句の後塵を押しながら、川柳の枠内をはみ出し得なかつたり、川柳の伝統を否定しながら、伝統吟社同人の地位を去り得なかつたり、いずれもコップの中の嵐にすぎない。然るに路郎氏の眼はいつでも川柳の外に向けられていた。彼の叛骨精神にとつて、川柳界はあまりにも狭すぎたのである。(すばらしき生涯)塊人、昭和40・9「川柳雑誌」麻生路郎追悼号・No460)

川柳職業人宣言の昭和十一年に、「川柳雑誌」三月号から有保証の新聞紙法によ

る発行となり掲載内容の拡大化を図る、と山雨楼メモにある。これは今でいう新聞、雑誌社系列の週刊誌形態のものと考えればよい。路郎は川柳の対社会的認識普及の一段として、従来の如き柳界内部の豆本式回覧形式の柳誌形態を一洗しようと思つたのである。このことは、大正六年に廃刊した「雪」当時のモチーフである。文芸的日刊新聞の発行という夢にも、二十年の歳月をおいて一歩近づくとでもあつたようだ。

そのようなスケールの大きい営業柳誌川雑の基盤には、往時の柳界あげての柳界トップのスクラムが当然必要な要件であつた。本稿初めの川柳人協会の創立の項はそれを指す。宣言と同時に同協会の発足を明らかにしたのは同年八月で同協会の名誉会員に推薦したメンバーは次の通りである。久良伎、周魚、三面子、天民子、不浪人、久流美、紫痴郎、濤明、省一、紋太、鶏牛子、東魚、塊人、三太郎、雀郎、正光、五花村、晟修、珍竹林、五健、可宵、南北、福造、溪花坊の二十四名。翌年夏、

水府、鶏牛子、溪花坊が会員を辞退したが、同協会は戦局が苛烈化するともにいつか自然消滅の形となった。

ともあれ路郎は、川柳のプロとして苦難のその第一歩を踏み出した。敢然と嵐に向かつて起つた彼はついに死に至るまで、凄絶なまでにその意志を貫き通したのである。

* 肉筆句集ではなく、軸・色紙・短冊など。「麻生路郎著作解題」の「川柳雑誌」昭和39年の項参照。

麻生路郎物語 (20) —信濃の旅と松坂倶楽部—

昭和十一年九月二十日路郎は信州松本市を訪れ、石曾根民郎らと旧交を温めた。この年八月に川柳職業人を宣言したばかりの路郎にとっては、はげしい毀誉褒貶の渦中に身をさらした直後だけに、この信州信濃の旅は、ここらからの解放感

松坂倶楽部「川柳講座」出席者
左から—路郎先生・中島生々庵・戸田古方・川出美根子・石井白面人・戸倉晋天・奥村丹路諸氏。



にひたる憩いのひとときであったようだ。

この信濃への旅は、九月十七日に上京

し、川上三太郎宅を根城に東京柳人の有力者たちと懇談、横浜にも立寄り川柳人協会の足固めとプロ川柳家として起つ旨の態度を表明する宣言の挨拶も兼ねたものであった。それだけに心身ともに落ちつかぬ在京三日間だったようだ、

昭和十一年秋（九月二十日—筆者註）、路郎師は松本を訪れた。雨であった。

雨の松本にて

—遠く来て信濃に山のない日なり 路郎

—朝空に雨は無帽の師を迎へ 民郎

この句が生れた。私（石曾根民郎—筆者註）は松本で川柳展覧会を開き、路郎師にも観て貰い、松本の川柳家と座談会を開くことにしていた。大勢集った。終始、にこやかに川柳を語り、雑誌を語った。

浅間温泉に案内した。ゆっくり信濃の秋色をたのしんでおられたようだった。

〔足跡〕石曾根民郎、昭和40・9「川柳雑誌」No.46
0)

松本に着かれると、早速に家へ寄って

頂き二人連れで傘をさし、ほんの百米ばかりの松本城を訪れました。雨に濡れながら感慨深そうでした。城から当然見える山は雲に隠れてみえず、そこであの句ができたわけです。

路郎師と浅間温泉一泊

―わざわざ湯の香の窓へ師をさそひ

民郎

浅間温泉に一しよに一泊、ここで語りあつて翌日松本に出て展覧会をみて貰いました。会場は鶴林堂書店三階ホールで、ここは私の町内にある本屋です。この展覧会には、路郎さんにもいろいろ出品して頂きました。石膏でできた句のレリーフみたいなものも出した。

―だしぬけに鐘が鳴るのも旅の事 路郎
の横額はそのまま私がゆずって貰い、私の居間に飾ってあります。

路郎師と別れる

―師の汽車よひとしお秋を縫つてゆけ

民郎

(石曾根民郎書簡)

路郎にとつて信濃は、こころのくつろぎをあたたく抱きとめてくれる唯一の旅情の天地であつたらしい。川雜奉還を断行した直後にも信濃を訪れている。夫の信濃への深い関心に誘われてか、葎乃夫人もながい間の憧れの地であつた。そして昭和三十四年九月、夫婦そろつて湯田中の中島紫痴郎の無心庵にゆつくりと滞在。やがてそこから松本へ出て、民郎とともに浅間温泉に遊んでいる。

民郎は「川柳雑誌」No.460の麻生路郎追悼号の「足跡」でつぎのように書いている。

「湯田中の中島紫痴郎さんの無心庵に長く滞在、こよなくも信州の風物に接されたのであつた。その帰途、お二人で松本に立寄られた。早速、浅間温泉におつれし、よもやまの話に花が咲いた。そのとき『川柳雑誌』の後継ということをしみじみ語られた。重大なことで、とかく私の口巾つたいことを洩らすべきことがらではなかつたが、私を育んでくれた『川柳雑誌』の遠い将来についていささか関心をよせ

ないわけにはいかなかった。

深刻な話のほかでは、信州路へ入った一休みを木曾福島でおちつき、その宿屋で講習のあつた木曾踊を早速、葎乃奥様は熟得なされて一ト自慢されたり、信州の漬物のうまさなどが二人して口を合わされたことであつた」

話を再び昭和十二年(路郎五十歳の時)に遡そう。以下、山雨楼メモ抄録。

この年四月十八日第四回全国川柳人交歓大会が名古屋市で開かれ、路郎は関西側を代表して挨拶を述べた。関東側は周魚。(大会の内容は未詳)

前年夏から重態をつづけた葎乃が、秋十月には床上げしたものの、いぜん半病人生活をつづけていたが、この年六月には市電に乗るだけの体力を回復した。

名古屋支部創立句会、支部長吉田水車。

川雜六月号に藤村垂鈍が「川柳壇無能論」を書く。青年詩人であり、新進川柳人である同君の偽らざる告白、相当な反響あり。

七月七日日本社例会に安川久留美来阪、

散会后、竹葉亭で歓談。翌日路郎と共に神戸、舞子などに遊ぶ。九月キング喫茶店廃業。

十月二十五日事務所開設、西区土佐堀筑前橋停電前、昭和ビル二〇一号室。

十一月松坂屋松坂俱樂部の趣味道場で、毎月二回路郎川柳講座を開くことになった。俳句は青木月斗。

この松坂俱樂部の講座は、その後の「川柳雑誌」をささえ、「川柳塔」を担う路郎門下の有力同人多数の加盟を迎える記念すべき催しとなった。「川柳雑誌」No. 460号麻生路郎追悼号の座談会「ありし日の思い出を語る」の中につきぎのような記事が載っている。

古方 私が松坂俱樂部へ初めて伺ったのは昭和十三年の夏です。春から中島生々庵さんが一足先きにお弟子入りをしてられて、私がひっぱられました。松坂屋の七階で……。

好郎 松坂俱樂部があつて、その中に川柳講座があつて、その指導が路郎先生であつた。その特徴は席題が出て作句し

ておる間に各々が作つてきた研究句を先生の前に提出する。そして一人一人先生の机の前に呼ばれ、そして、その句について、実に厳しい批評ご指導があつた。(當時の一枚を大切に保存されていて持参、見せて下さる) こうしていちいち朱筆で添作して下さつた。生々庵氏が、今頃まだこんな句を作っているのかと叱られて、

平身低頭していられた姿は今でも覚えております。併し、その教導によつてその当時の会員達に優秀な作家が生まれた。戸倉普天、中島生々庵、故武部香林、故宮田不二、小川恒明、新川博也、戸田古方、故米本貴志子の諸氏らで末席を汚したのが私です。

古方 私も根よう参りましたが、先生はとても私共の及ばん程の根気のよさで私達を導いて下さいました。

好郎 月二回で会費が一円。

栗 その当時の普通の例会は三十銭だつたのです。だから今云うてはる一円だつたら良い作家も輩出するでしょう。(笑声)

古方 紺の毛氈を敷いてその上に銘々硯を置き、短冊の紙に席題を書くのです。夏にはおしほりも出ました。

好郎 松坂俱樂部の会員で北野劇場の古川緑波一座の観劇句会をやつた。その時に得た句を次の句会の時に披講され、おおかたの人の句が緑波の劇を見たものでないかと判らんような句が多い。吟行ということは何材を新しく求めに行くのでその劇の中から新しい境地を発見して作句せねばならんと教えられた事を、私は今でも忘れない。

古方 私の川柳を始めた頃うれしき様に、あつちこつちの句会へ誘われて顔を出したところが先生に見つかつて、「まだ早い。わしがうんと云うまで行つたらいかん。」と叱られました。併し二十何年経つた今日から考えるとそれは誠に正しいお導きであつたと思います。

栗 先生は句の上では一歩もゆずらず妥協されなかつた。阪大川柳会の、長崎柳秀博士は若い頃には、「金魚屋に舞妓袂を教えられ」やら「心中へ明日のお発ちを聞

きにくる」とか良い句を作られていまし

たが、老齢になられたためか、時には平凡な句も作られるようになりました。併し

ご本人は熱心なあまり自分の句が抜けないと凄くご機嫌が悪く、自信満々で「何でこの句とらはらしませんのか。」と路郎先生に訊ねられても、先生は一言の下でし

たね。商売気のある人なら一句ぐらいはと云う気になるのですが、決して決して

……。それが阪大川柳会と云うのは句集を出すにしても句会をするにしてもすべ

て柳秀先生と路生先生とお二人で経済面からすべてお世話して頂いてたんです

が、そんなことはかもてはれしません。い、ものはい、悪いものは悪いと、少し

も妥協されませんでしたね」

松坂倶楽部の指導スタイルは、どこか江戸の点者様式に似ていると評した人も

いたとある。有恒倶楽部の有恒川柳会も同じ十一月にスタートしているが、これ

も松坂同様の指導様式をとっていたらしい。プロ川柳家として世に立つ路郎の矜

持がよく示されているよう。「川柳雑誌」No

313(昭和28年6月)所載の『眼の散歩』に高鷲重鈍に誘われ、住吉の日本将棋連盟関西本部へでかけ、高段者の対局を観戦したあと、つぎのように書いている。

「こ、で川柳のこととうつる。川柳に於ても、玄人と素人では作句態度が違わなければならぬ。川柳で玄人だと云える

人は幾人もいないかも知れないが、玄人のいないところに、その道の発展向上を

期待することは木によつて魚を求めるよりも、なおむづかしいことだと私は思つ

ている。

川柳に長く携つているからと云つて必ずしも玄人だとは云えない。と云うのは

隠居のザル碁に等しい川柳家が、そこらにいないとは云えないからである。と云

つたからと云つて私は決して、玄人を尊しとし素人を卑しとしているのではない

。玄人は玄人としての鏤骨彫身の修業をし、素人は素人としての立場に立つて

道を樂しむ態度を明らかにすべきではないかと云いたのである。玄人顔をして

いて一向勉強しないのと、素人が玄人顔

をしてノサバルのとは共に鼻持ちならぬと云うのである。

将棋の一駒動かす毎に一考、又一考すること、川柳の作句に於ては推敲又推敲に当たる。碌に推敲もしないで名句の

出来る筈がない」

川柳の玄人を自任する路郎の意欲を示す例につきぎの一文がある。「川柳雑誌」No

425(昭和37年10月)の『作句以前』と題する吉川雉子郎について語つたもの

だ。抄録しておこう。(全文掲載する―編者註)

明治末葉のことである。

東京の柳界に喜音家古蝶、平瀬鳶雄、吉川雉子郎と云う巧い柳人がいた。この雉

子郎が後の大衆作家吉川英治であることは一般には知られていない。

それが証拠には吉川英治が横浜ドックで働いたこと、行商人、活版工と転々として苦学したことは書いても、彼の文学熱

が、苦勞を母胎として川柳に芽生えたこととは誰もが書こうとしない。大衆作家以

前の彼はすぐれた川柳作家だった。

彼が原稿料らしい原稿料をとったのは講談倶楽部の懸賞募集に応じ、落語の一等に当選、金五拾円也を手にしたのがはじめである。そのころの五十円と云えばサラリーマンの二カ月分の給料であった。川柳では金にならぬが、講談や落語を書けば少しは小遣いになろうと、食指が動いているのを見てとった川柳人の矢野錦浪が、雉子郎の落語の当選を機に、講談社へ売込んだのであった。これは錦浪から直接聞いた話だから間違いはないだろう。

矢野錦浪と云つても知らぬ人が多いが、後年谷孫六のペンネームで当時のベストセラーであった「岡辰押切帖」の著者だと云えばウムあれかと昭和の読書子なら、大ていの方はうなずいてくれるだろう。

その矢野錦浪が、東京毎夕新聞の支配人だった関係で、多くの川柳人がこの社に集つたのも理由のないことではない。剣門の故近藤鮎ん坊をはじめとして、川

上三太郎外二十数人位はいたようだが名前は忘れた。漫画家の宮尾しげをもいた。大ていは剣花坊の門下だった。鮎ん坊も雉子郎も三太郎も剣門だった。その当時柳界では剣花坊の柳榎寺派が、今日の自由党のように巾を利かしていた。しかしライバルの久良岐派(後に久良伎)にはインテリが多かった。剣花坊は日本新聞の柳壇を、久良岐は電報新聞の柳壇を担当していた。

雉子郎の吉川英治の大衆文学がソロソロ売れ出し、先生の剣花坊よりみりがよくなり、剣花坊の世話で土地を手に入れたと云う噂が立つたが、その頃にはもう雉子郎の句は柳誌には見られなかった。大衆文学に脂が乗るとともに忙しくなり、川柳を作るひまなどはなかったものと云つていいだろう。柳壇から云えば大きな鯨を太平洋へ逃がしたようなものだったが、文化勲章にまで漕ぎつけた吉川英治には文句の云いようもないし、フレーフレージ川と、彼の成功を祝福するより手がなかった。ここで、古蝶・萬雄・

雉子郎の三人の句を挙げて比較批評をするといのだが明治時代のこれ等の柳人たちの文献が十分に整理されていないので、それは他日に譲ることにしたい。古蝶は古調に通じるし、萬雄は写生を得意としたが雉子郎は彼が若い頃になめた苦勞の結晶とも云うべき心理的な作品だった。おそらく彼の才が縦横無尽にほとばしっていたものだと思う。

しかし、彼が大衆文学に趁つてからの作品を何一つ読んでいない私は彼について語る資格はない。すこしひまでも出来たら、せめて「親鸞」や「宮本武蔵」や「新平家物語」「私本太平記」ぐらいは読みたいと思つているが、いまの忙しさでは、それもいつ果たせるか判つたものではない。今はただ在りし日の雉子郎を偲び——その延長として大成した吉川英治の計を悼むばかりである。

私が吉川英治の作品を一つも読んでいないと云えば嘘のようだが吉川英治の作品だけでなく、終戦以後、イヤもつと以前から日本の小説は耽読しないことにして

いる。(二三の例外はあるが、それは何かの参考のために、読んだので耽読した訳ではない)その理由は簡単だ。自分のことに忙がしいからだ。それに、小説の地の文や会話などを読んでみると、こんなことなら、川柳では一呼吸で済むのと思うとイライラして来て読んでいる気がしなくなるのだ。これは真面目な作家に対して少し云いすぎかも知れない。しかし作家を侮辱している訳ではない。私としては作家に対して、その努力に対して敬意は表しているのだが、私の場合、右に述べたような感情が動くのを、どう圧さえるすべもないのだ。彼の作品を読まなかった弁明が自分の心境を語る破目になったが、彼が彼の道を行つたように、私は私の道をまっしぐらに行つていたので、彼の作品をのぞき見るひまがなかったと云えば判りがいいだろう。

今東光氏が「吉川さんと私」を朝日に書いて、用意を表された言葉の中から、少しく拝借させてもらつと、

「吉川さんの句に『元日や今年もどうぞ

女房どの』というすばらしい句がありませう。吉川さんという人は大変な苦勞人でも苦勞たるや学問的にも、人間的にもありとあらゆるものを含んでの苦勞でありまして、この名句に見られるように、最も女性を知っている作家だと思つてゐる。」(以下略)とある。私はこの句を読んで、柳人雉子郎が永遠に生きてゐることをうれしく思つたのである。

今年の正月に彼から年賀状をもらつた。どうしたことかと思つていたが、今になつて思うと、新年の挨拶に、併せてお別れの言葉が含まれていたのである。

麻生路郎物語 (21)
—蒙疆北支の旅—

昭和十三年九月十八日神戸から黒竜丸で路郎は北支蒙疆の旅に上つてゐる。この頃の北支・蒙疆の現況を参考までに述べておこつ。

事件が突発し、日中戦争の火蓋が切られた。八月八日日軍は早くも北京、天津を占領。この作戦と併行し東条英機を総司令官としてチャハル作戦が展開され八月二十七日張家口を占領、五日後に察南自治政府が成立。十月十七日蒙疆西北の要衝包頭が陥落してその十日後に蒙古連盟自治政府が樹立された。(満洲国はこのとき建国五年目を迎えている)

路郎の京津蒙疆方面への旅は、こうした戦塵いまだ収まりやらぬ、日軍占領下一年余の旅で、一地方人が簡単に割り込めるはずのものではない。徳王を盟主とする蒙古連合自治政府が成立したのは、昭和十四年(一九三九)九月一日で、路郎が帰国し一年後に発足するのである。(ハノイを脱出した汪精衛は日本政府と南支新政権について協議中)

路郎のそんな華北・蒙疆への旅は、川雑同人岩崎柳路が一切の面倒を見た。さきの満州・朝鮮の旅も、この柳路が肝煎役であつた。彼は路郎帰国後は川雑蒙疆支部を作つてゐる。

張家口に本社をもつ蒙疆新聞社に筆者が赴任したのは昭和十八年であったが、その彼とは再会赴任で殊のほか喜んだ柳路は、盛大な筆者の歓迎宴を張ってくれた。内地直輸入の娘子軍七十人を擁するキャバレー東亜会館(旧名オペラ)を経営



(小川静観堂氏から―岩崎柳路氏は戦後伊丹へ帰り死亡、私が主治医でした。路郎先生にお目にかかったのは張家口の柳路氏方と北満ハイラルでした。―写真は路郎先生と静観堂氏―編集部)

し、駐蒙軍や政府の大官要人を手玉にとる柳路は、まさに飛ぶ鳥も落とす実勢を満喫中であった。

「わてと路郎師とは川柳を通り越した人間的にも格別な間柄でつきかいな。さきの満鮮旅行も、今回の旅もわてが箸の上げ下ろしまで面倒みてますのや、これがすんで南支の方も落ちついたら、上海あたりへもう一度大名旅行して貰うつもりでいますのんや」

と意気昂然と柳路は自慢のチョビ髭をうごめかして語る。駱駝の体臭溢れるカルガンの輝く陽の下で、なめらかな関西弁を駆使する得意の貌を、筆者はただア然と眺めていた。

大阪―東京―遼源―山海関―北京―張家口―それが彼の大陸経倫のコースであった。路郎と格別の間柄とは、路郎夫婦の長女純子を柳路が預かったという指すらしい。なぜ路郎一家がその長女を彼に委託したのか、その事情はくわしくはわからない。

余談だが、川柳雑誌旧刊到北京川柳会

に関する雑文を寄せたとき、その会場であるナニワホテルと経営者の和田黙然人にふれた時、その掲載誌の編集後記で

「あのナニワホテルは、私が蒙疆・華北の旅でお世話した建物である」

と路郎は記している。柳路の存在を筆者はそのとき強く意識したのは成行きである。

ともあれ、この柳路との風交は、張家口で応召の赤紙を手にするまでの一年間にわたって続けられた。この間、駐蒙軍の軍医少佐であった小川静観堂(川柳塔同人)と酒席をともし、山崎小鮎(当時番傘同人・酒販業)と接触した筆者である。

かくて路郎はつつがなく華北・蒙疆の旅を終わって十月二十一日帰阪している。

その月余の旅について、彼は川雑に、北支蒙疆の印象を執筆。大同石仏の露天仏と路郎を捉えた柳路の写真が、その年の十一月号の表紙を飾っている。(終戦直後の柳路は松乃夫人と着のみ着のまま帰国。大阪市内の上六付近で小さな喫茶店を夫人が経営し、彼はさるキャバレーの

一事務員で苦闘をつづけるどん底の海外引揚者だった由だが詳細は不明)

この年は「柳務に多忙」と山雨桜メモにある通り、BKから戦線と銃後の川柳の放送をはじめ、薬石新報社(大阪)創刊五十周年記念川柳大会で講演と選句、『新川柳評釋』を発刊。北支・蒙疆の旅のあと、婦朝講演。そして「川柳雑誌」が十五年を記念し菊判から、菊二倍判の大型に改め「全柳界の度胆を抜いた」(山雨楼メモ)のもこの年の新春一月号からであった。そしてこの年の暮には、阪井久良伎古稀記念祝賀として川柳人協会有志による「金二曲屏風」を路郎が贈呈している。

昭和十四年、路郎一家は堺市出島海岸通り二丁目一八二番地へ居を移した。

「玉出から堺みなどへ移ってからは、路郎と私は土佐堀にある川柳雑誌社の事務所へ通勤しました。

この堺みなどの家は、有恒倶楽部川柳部の橋本破夢造さんの御紹介でお借りし

た家で、細棧の窓障子を右に見て、植込みから玄関にあがると、みがきのかかった廊下が奥庭まで続いているので、一寸料亭のような感じがありました。

階下は茶の間、座敷広い土間のあるお台所と浴室化粧室などもゆったりとしていて、階上は書院体の床ちがい棚のある日本座敷と女中部屋と十畳の洋室、ポンプ井戸のある一間ばかりの幅のたたきは、木戸をへだたてて高野槇が周囲に植つてある空地に出られました。戦時とあつて子供たちはここへさつま芋を植えたりしました(葎乃書簡)

「昭和十四年八月十六日渡辺暁童入社、営業部主任。健康すぐれず十二月二十三日退社帰国」(山雨桜メモ)

「渡辺暁童さん(現川柳塔同人)は、堺みなどの家に入ったところ、四国から来て雑誌の仕事を手伝って下さいました。

——妻も子も無事かと秋の虫にきこ——という暁童さんの句を路郎が見て、国元から奥様とお子達をお呼びして、近くに家をお借りしたこともあったのでした

が、私はほとんど家にいず奥様を訪ねてあげられず、また配給もののお世話もしてあげられなかったのです。暁童さんも奥様も故郷へ帰る決心をなさいました。今にして思えばその方が暁童さんの将来の為によかったと私は思うています。世間なみの常識に欠如していた私は、行き届かないことばかりで申訳がなかつたと悔んでいます。しかし、暁童さんのお作は、いまだに共鳴するものが多く楽しんで読んでいます。たとえ暫くでも同じ屋根の下で暮らしていたからでしょうか(葎乃書簡)

前田雀郎の「せんりゆう」は、このころ名句鑑賞を連載していた。紋太を乱取、三太郎を未六、周魚を砂人、水府を太郎丸、雀郎を右近がそれぞれ執筆した。路郎は古谷盈光が書いている。昭和十三年の同誌一月号で、現代名家作品鑑賞——熱情と吐息——麻生路郎氏の名句鑑賞——のタイトルによる。往時の路郎の代表句を一瞥する意味で、その本文を以下抄録しよう。

盈光の句評も味がある。

—お元日座るところへ座らされ

新年を一家心から壽ぎ、天地の恵みに感謝しようとの氣持がこの短句の中に渾然として窺はれるのである。

—酒とろりとろり大空の心かも

心憎いまでの修練である。時あたかも戰勝の年頭、遠慮氣がねは更々無用。

—だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと

—貫しさのながながしくも四十一

旅人の物さびしき心へ、不意に鐘が鳴つた。しかもまだ旅路は前途なほ遠し。あゝとなげく路郎が目あたり見えるのである。そしてこれを「だし抜けに金が必要のもの」として人生苦難の旅を思はば後句のいよ／＼身を切る様な四十一が同情されるではないか。

—子を死なし學校に子の多いこと

句主の動靜に全くうとい私だが、この句境には共鳴出来るのである。

—ひとり居ればひとり限りなくさびし

ほそぼそとした佳句である様に思ふ。

さり乍ら、「名を捨てて十七八の戀もせ

む」(これは名句とも佳句とも思はぬ)の

様な句のあとを承る句であるならば、路郎氏のムラ氣を責めると同時に、句の品位も半減するであらう。

—その日暮しも軒に雀がこぼるゝよ

この句に接して一茶の句を思ひ浮べるのは、只に私一人のみではなからうと思ふ。萬事を知りつくした人間のあきらめにも似た吐息には一種の尊さがある。

—君見たまへ波稜草が伸びてゐる

すでに先輩諸師の毀譽交々の評に盡きて居るので盲評は差し控へて置く。

—ふと眼をやれば煙突にけむりなし

水瓶に水の絶へたにひとしく、煙突に煙りの絶へたのも、一抹の淋しさを知らぬものである。わけて童心に返へれる詩人の或る日の心境には、一層満たされぬものがあつたであらう。眞から生れる句とは、この様に人をうつ何物かをもつ。

—お互の世にせうとしてかどがたち

長々しき五十年の間には、一社の主幹として苦心經營もし、或は熱情進るままに他を排した事もあるだらうが、所詮は、

生物の儂いあがきでしかなく、路郎氏の詩心が涙して居るのがこの句である。

—戀の眞あゝの眼だらうか眼だらうか

—時雨れるる銀座に龜屋五郎

—二階から降りる音さへマルキスト

これらの句は、氏の半面を詠へるものであるかも知れないが、安易を追ふ淺薄さのみ目に残りあまりぞつとしない。やはり氏は一人靜かな冥想にふけり、門弟諸君の等しく讚美する詩的稟質をあくまで發揮して貰ひたいと念ずるものだ。

—なあちろりこれから秋に親しまつ

この境地を行く氏のうしろ姿を嬉しく眺める私である。どこ迄も衒はず、地味に、地味にと物に親しむ心、この心こそお互に抱いて居たい心であらう。

それにしても今より十數年前に、生田蝶介氏の歌に

「カットがどうのさし繪がどうのと

日日を繰り返えし年やとるらむ」という一首があつた様に思ふ。路郎氏にして月月の柳誌刊行に費す勞苦はなみなみならぬものがあらうかと思考する次第

であるが、それはあくまで作句精進に對する餘力であつて愆しいと考へるのは無理であらうか。

―子澤山僕枕は何處へいた

―天井の低さも知らず子は生れ

―子を泳がせて沖の景色は眼に入らず

餘白は盡き様とする。斯く詠み來れば、子煩惱の氏がまごまごと影じ、冥想の中にも天井の低さを詫びる人間路郎が思ひ出されるではないか。それにも増して

―俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

と人の親として最高のなやみを詠つたとつて置ききの句が路郎氏にはある。十七八の戀もせむなどは夢寐にも云へた義理ではあるまい。いつの日か句碑建立の議でも起た場合は、この句などが詮議にのぼるのではあるまいか。亂筆深謝

昭和十四年三月二十五日西日本鉄道川柳大会（尾道駅前松風館）に出席。「旅と川柳」を講演。懐かしの郷里とて父母の眠る福善寺に墓参する。四十年ぶりなり。

昭和十五年、建国二千六百年特集を前

線將兵の活字飢饉に「川柳雜誌」大量慰問・不朽洞会委員（任期二年）委員長戸倉普天・委員里十九・白峯・春巢・孤蓬・紫香・申仙・六月七日広島大会・大本営跡拜観・宮島回遊一行某人・久米雄・市多樓・柳石・風見卓第二次近衛内閣司法大臣となる。そのかみ「商業の大日本」主幹の際、机を並べた仲なり・九月創刊二〇〇号記念、皇紀二六〇〇年奉祝三越大ホール川柳大会・十一月堺市の婦人団体に「戦時婦人生活確立講演会」に熱弁を揮い笑いのうちに川柳の趣旨を貫徹し好評を博す。

「こ」としもよく働いた。働いて働いて働らきぬいた。すり減るのぢやあないかと東魚氏や省二氏に案じられたほど働いた（昭15・12「川柳雜誌」No.23）

麻生路郎物語

(22)

― 葎乃書簡の文学素養 ―

本稿に随処に引用させてもらっている

「葎乃書簡」は、大きなファイバーの手文庫二つに溢れるほどになっている。八十余歳の老女とはみえぬ、しつかりとした筆致の一枚、一枚には並々ならぬ教養に培われた文学素養の香気に溢れている。たとえそれが何気なく思いつくままに記されたハガキ一枚の文面にしても、にじみでる才能に託された女性の奥深い年輪といったものが感得され、時には感動の吐息すら流れでてくるのである。

路郎もこの妻の文学素養を認め、高く賞揚していた節が、川雑の彼の文章の随処にうかがわれる。川柳雜誌No.444、446（昭39・5・6・7）の妻を語る。のなかに、大正三年五月発行の「番傘」五



不朽洞会員から、川柳の母として慕われる麻生葎乃先生

月号誌上「みなみ」という短編の一部を再録している。明治期の自然文学の影響を受けたとみられるその筆致には、リアルな風景描写はよく対象が捉えられている。

忙しい／＼と口癖のように言うていながら、毎晩のように出掛けて行くのは道頓堀である。と言っても別に役者にヒイ

キがあるのでもなく、出雲屋の匂ひが殊更に好きだからと言うのでもない。とにかくあの辺をブラブラおねりのように行きかへりすることが好きである。

バーの白壁に高くかかっている赤銅のラントーンや、前茶屋の板敷の大火鉢や、それを囲んだ舞妓の美しい、白い襟脚や、黒づんだ道頓堀にうつるやわらかい灯の色などを見ているとかえることがいやになる。もし私が男だったら紙治ではないが魂ぬけてとほとほと我家ながら高い敷居を越えたでしょう。私は南向に寝なければおそわれる程宗右衛門町あたりや、道頓堀の憧憬者である。道頓堀と千日前

は目と鼻の近きにあるけれど私は玩具箱のような千日を歩くことを好まない。

又あの活動写真真小屋の無数の電燈は恰も安物の後櫛に鏤めた新ダイアのようなだ。

そして千日と言えば掏摸を聯想する。花宗の薬玉の簪や、水に濡れた法善寺の敷石道をひきづる下駄の音などは流石に忘れられぬが、私にはそれ以上千日を鑑賞する力がない。

私は南へ行くと必ず橋屋で鱧頭を買う。私の十二三の時は一個五厘だったが近頃一銭になった。値段のわりに味がよい。煙草屋の別嬪さんより有難い佃であると私は思った。

葭乃書簡(その一) 以下要点のみ

正月もすぎ二月を迎え南紀、大和、京都の梅の便りを耳にしながら、どこへもゆかず家にくすぶっています。女とは生命のある限りお台所とは縁切にはならぬ宿命を持っています。男が外に七人の敵があるのと同様です。

私はまず一日のうち午後三時頃まで

は、家庭内のパートタイム、午后四時頃からは完全フリーの身になります。「武玉川」は昨日午後から晩までに残らずよませて頂きました。みな参考になることばかりで面白く拝見しました。でも破れ袋みたいな頭ですから、すぐにこぼれ落ちて終いますが、必要な時には又思い出す事もあるでしょう。ありがとうございました。

私が住んでいる生駒から大阪の方へ、山ひとつ越せば石切、その次の額田ぬかたという駅でございます。その昔、萬葉第一期の女流歌人で天智天皇の弟君にあたる大海人の皇子とは恋仲の額田女王は、多分このあたりに住んでいられたのであろうか、などと思ひながら、近鉄で難波まで行くことがあります。去る日、若草山の山焼を見に奈良雲雀ヶ丘にいる奈那を訪ねました。雨あがりの後であったので、消防も出揃っているのに美事な山焼はみられませんでした。昔奈良公園で野外川柳会を催し打ち上げ花火で路郎揮毫の川柳を空高くたたよわせた事を思い出しました。

大和平野はあられ降るような寒い日でも
速く山々は霞んで見えるところでは。
先日メ女さんが訪ねて来られまして一泊
どまりでどこかへ行きますようにとお誘い
下さったのですが、近頃はホテルへ泊る
にしても、ロープ携帯でないと危い世の
中です。街を歩けば交通地獄で「としより
はひっこんでいろ」といわれそうです。レ
ジャーで月ヶ瀬の里へ行つても昔のよう
な風雅な梅見は出来そうにありません。
まあテレビで、高原の花や小鳥でも見て
諦めることにしましょう。(後略)

想い出の昔

大ジヨツキ並べ道頓堀の夜 葎乃旧作
サクラン坊乙女ごころをギヤマンへ盛る

同

君と僕そしてビールと櫻ん坊

路郎旧作

みな飲んでるぞビールが散るぞ夏 同
眞夜中もネオン流れる戎ばし 葎乃
久留久さんの残した猪口は九谷焼 同
梯子酒最後誰かの顔で飲む 同

南のさかり場を思う時、私はいつも豆
秋さんの「橋筋は春の句いのこうこ巻き」
の句を思い出します。橋筋は戎ばし筋の
ことですが今は、その頃的情緒さらにな
り。

葎乃書簡(その二)

私は永い間ミッシヨンスクールに居て
毎朝半時間は礼拝、後の半時間はバイブ
ルクラスで毎日聖句を一句づつ暗誦させ
られました。

「あの人はハンサムだなア」

と心に思うだけでも姦淫罪を犯している
のだと訓育され「人右の頬を打たば左の
頬もこれに向けよ」の無抵抗主義にも馴
れ、腹立たしさも烈しさも人を疑うすべ
ささも知らずに青春を過してきました。

その為かいまだに現代の社会に対して抵
抗も義憤も感じていません。感じたこと
ろで仕様がなないのですもの。もし私の句
にそう云うものがありとすれば「世は進
化せりああ愧らかいとなりし我等」位なも
のでしょう。「四面楚歌ひがむ心がそ

わす」「三猿でゆけばうららかなる眺め」
のようにカレンダーの下に一日一善の修
養録として印刷したらよさそうな句はか
りです。

句の鑑賞を書く時には「川柳の叙景句
には人間の存在を忘れません」と人には
言うて置きながら、自分の句には自然を
賛美した句が多いのです。私は川柳の鬼
子かもわかりません。近頃は季なしの俳
句が多くなり、人事も盛んに詠むでいら
れますが、俳句の人事はどうも気が抜け
たビールのように感心いたしません。「喰
うてチヨンギす飼いおり」と云う句を詠
んだ人がありました。私達はこれは面白
い川柳だといいましたら、その人はこれ
は俳句だと主張するのです。

俳人が詠めば俳句であり川柳人がよめ
ば川柳だとい得る程、両者は互いに接
近して参りました。もつとも俳句も川柳
も昔は同じ母胎から生れたのが、ある地
点から袂を別ち俳句は花鳥風月賛美の道
をとり、川柳は人間くさい娑婆への道を
とつたのですから、後の世で相寄ること

も当然でございましょう。

私は最初から川柳というものを非常に広義に解釈していました。「十七字われらの国語なるぞかし」と『福壽草』の巻頭へも書いたのですから、十七音字のスタイルで詠むことに変わりはありませんが、その内容は昔の和歌の贈答歌のようなものでもよく「蜜柑山お伽嘶にある日向」の童謡の境地であつてもよく「父は飲み家出の母は美しく」の如く、小説を圧縮したようなものでもよく「火葬場へ続く桜の並木道」のように幽明境を異にする人と桜花の現世との対照による技巧もよろしく「病人も頭を上げて礼をいい」の人情の描写でも、又「焼場です否応なしにおいであれ」の諧謔味ある句でもよいのです。

「ふだん着で来たのがいつち泣いてくれ」の古句調の穿ち、（これは小松園さんの句）「零零が零からの財布が二つある」の表現上の工夫のある句もよいと思えます。

を追わなくても老人は老人らしく、ヤングはヤングの意気で川柳すればよいと思うのです。川柳も永年作句していると、何か将来のものとは違った新感覚のものが欲しくなるもので、ある一派の若い人の作品は、こうした意欲のあらわれでございませぬ。然し五分も十分も、或いは半日考えてもなお判つて貰えないような川柳は、結局ひとりよがりの句であつて、共鳴度が少ないという事になるのです。

嘗つて戦争たけなわであつた時、統制という題である俳人が

—統制やあてのひらに降る霰

と詠みました。その時、私の句は

—統制統制だまつて日向見ていたり

というのでした。この二つの句を較べて見ますと俳人の句は純情な心の叫びでございませぬ。

いつわらぬ感情の吐露、私はこの気持を高くかいます。それにひきかえ私の句はやはり川柳人の素質にたつています。

無言の反抗が感じられます。権力によつて物資の統制があつても自然は惜しみなく

くわれわれに太陽のあたたかみを與えてくれるのではないかとというすね者の意思表示でございませぬ。

藤村亜鈍さんが「僕は川柳をやるようになってから根性が悪くなった」とよく私に言われました。なるほど川柳は、すなおな表現ができない、一応はひっくりかえしてものを見なければいけないからでしょうか。

葭乃書簡（その三）

「武玉川」お送り下さいましてありがとうございます。川柳のバイブルであるとうございませぬ。「柳多留」も「武玉川」も、私は子育ての生活に追われていたのであんまり読んでいないのです。その理由は江戸時代の風俗習慣を知りつくしてないからで、受ける感度がうすいと思つたからです。あまりに名高い句は知っていますけれど、古句の知識はまことにおはずかしい次第です。

しかし、私は「柳多留」の句より、「武玉川」の句に私の好きな句が多いように

思います。「武玉川」の叙景句は感覺的に印象が深いと思うのです。

—横丁に一つづつある芝の海（柳多留）よりも

—闇の途切れるうどん屋の店の武玉川の方が好きですし

—鶏の何かいいたい足づかいの柳多留よりも

—鏡にせいてかかる鶏の武玉川の方が好きです。

—投げられて鉄の心かわりけりこの句は武玉川にある句と思うのですが、句主の感情を鉄へ移して代弁させたところに技巧もあり女心がいたく酌みとれます。

—死で願いの叶う書置

の武玉川に対し現代の句に

—断固ゆるさず戒名にして拌み 一瓢
—というのがあります。

私は句の調子と云うものは、句主が自分の思想や情念を詠む時の呼吸にまかす可きものだと考えます。十二字詩、十四字詩が好きだからとて、いつもその枠をは

ずさずに作句しては、また調子のマンネリズムに陥ってしまいます。二十字でも、二十二字でも二十五字でもよいと思います。内容とマッチしたリズムでありさえすれば……。

麻生路郎物語 (23)
—「川柳雑誌」戦時奉還—

「川柳雑誌」昭和18年12月・雑誌奉還号



五十台に入った路郎の耳にやがて戦争の軍靴の響きは次第に高まりをみせはじめ。

昭和十五年、路郎五十三歳、時に建国二千六百年記念の年に当たる。「川柳雑誌」

もその記念号とし、前線将兵の活字飢饉に慰問品として大量に寄付。またこの年の九月号は川柳創刊二百号記念にも当たっている。建国二千六百年奉祝・創刊二〇〇号記念を九月十五日三越八階大ホールで開催。盛況を極めたところ。また十一月十二日堺市の婦人団体に「戦時婦人生活確立講演会」で熱弁をふるい笑いのうち趣旨を貫徹好評を博す。以上を中心に路郎の川柳活動を真黒になる程、詳記した山雨楼メモにはつぎのように記されている。

「ことしはよく働いた。働いて、働きぬいた。スリ減ってしまうんじやあないかと森東魚氏や蛭子省二氏が案じてくれるほど働いた」

「私の無帽時代はかなりながく続いたが、十五年の暮、娘が帽子を買ってくれたので、無帽時代に別れを告げ、戦闘帽を愛用することになった」

戦斗帽に国民服、いわゆる川柳報国をスローガンに、雑誌編集も講演日程も塗りつぶされる銃後の緊迫した毎日。昭和

十六年に入り川柳の全国支部も、統廃合が続いていく。

「五月七日大阪府警察部特高検閲課から指示があり、柳誌統合問題は『川柳雜誌』と、『番傘』を残すことを容認され『昭和川柳』『川柳春秋』『東煉瓦』『天守閣』『つるはし』は統合または廃刊することが決まった」

この年のことかと筆者は記憶しているが、森鷗牛子主宰の「三味線草」が井上信子主宰「巻雲」中の鶴彬の

一手と足をもいだ丸太にしてかへし 彬
一 方歳と必死に叫ぶ自己欺瞞 同

などの一連の作品を反戦川柳と指摘している。この消息を筆者に伝えてくれたのは和田黙然人で、そのときの言葉を今も明確に記憶している。(往時、筆者は在北京)

「川柳人同志が非国民呼ばわりで争いを起すなどとはもつてのほか、それまでは俳句弾圧一辺に達した特高の眼が川柳にも光り出すことになる。川柳受難の幕があいたわけだ」

この話のあと北京川柳会の席で某から
一 王将は一番色の白い駒 (詠者失念)

がその筋にひっかかったことを耳にした。

「川柳雜誌・四〇〇号記念特集」の座談会につきの個所がある。

古方 雑誌奉還はいつでしたか。

路郎 私の肚は昭和十八年の十二月号

ときまっていたので募集課題も十二月号でキチツとおさまるよう編集にも苦心しました。

紙やインキの欠乏からとはいえ、雑誌奉還を発表したときはみんな暗然とした。

それまでには柳誌にも合併という統制時代があつたが、わが「川柳雜誌」はその憂き目を見なかつた。しかし物資の欠乏には勝てず、ついに奉還することになったのです。

それまでには川柳塔の句が検閲にひっかかたり特高へ呼ばれたりしたが、最後まで始末書を書けといわれても書かず頑張りとおした。

古方 私の句もひっかかりました。一寸だけ喋るに役人供をつれ。 たったこれだけの句ですのになア。あの時は先生にえらいご迷惑をかけたものです。

路郎 検閲にひっかかった川柳塔の

ページを破いて発送したりして苦心をした。戦地へ送つたものまで返送させよと言うのだから手のつけようがなかつた。

短詩型の雑誌で有保証は「川柳雜誌」以外にないのだから自由に書けるのだが、進駐軍が来るまではやはり言論の自由はなかつたわけです。

大東亜戦争はすではじまっていた。戦局の様相は、一段と深刻の度を加えていった。先の座談会の記事にもう一度還そう。

栗 昭和十七年十二月の本社句会は

大東亜戦一周年記念川柳大会」として、御津八幡宮で開催、その翌年の創立二十周年記念南方動物川柳会を天王寺動物園で四月にもち、翌十八年六月に「食べられる雑草の吟行」を南海高野線郊外で催し

たころには戦局も香ばしくなくなつていました。

「川柳雑誌」雑誌奉還は昭和十八年十二月号であつた。その終刊号のナンバーは二三九で、岩崎柳路のカメラによる蒙古人の少女の微笑がその表紙を飾つていた。路郎にとつてはそのあどけない微笑をへだてて千万無量の想いが、その全誌にこめられている。文中の圧巻は、苦闘四十年と題するわずか四頁に圧縮された川柳生活四十年の回顧である。この一文は、すでにこれまでの各篇に適宜抄録したので重複を避けるが、路郎にとつて「川柳雑誌」の終刊はまさに劇的な体験であつたことは言うまでもない。

その終刊号の開巻へき頭にこうある。

戦局は一寸刻みに緊迫して行く。雑誌なんかにおら下つてゐる時ではない。文化は第二陣だ。雑誌なんかは潔く投げ出して直ちに戦鬪配置につくべきである。それこそ我々に課せられた重大使命であると観ずる。

ここに本誌は自發的に巻を閉ぢることとした。

——終刊の辭——

みたまわれ 大君にすべてを捧げまつらんとした。この号に、これまで絶えることのなかつた路郎の作品は全誌を通じて一句も見当たらないことが注目される。

この終刊号のなかの「廻轉椅子」（編集後記）に、路郎生でつぎのように記している。

★「川柳雑誌」のために、私自身が終刊號と云ふ文字を書かうなどは夢にも考へてゐなかつた。「川柳雑誌」に終刊號と云ふものがあるとすれば、おそらくそれは私の死後だと思つてゐたからである。

★しかし、その時期が豫想以上に早く到來した。しかも私自身の手で終刊號を世に送ることとなつた。眞に感慨無量である。

★私のガンバリズムをよく知つてゐられる社關係の人々並びに愛讀者諸賢が、本誌を手をされたならば、事の意外なのに

驚かれるに違ひない。たしかに、私は頑張ることにかけては人後に落ちない方である。殊に幾度か死に直面し、妻子の衣食を削つてまでも「川柳雑誌」の刊行を續けて來たことを思へば、創刊以來滿二十年後の今日しかも社運隆昌、最高峰の柳誌として、何等後顧の憂のない時に於て、さうムザ／＼と廢刊すべきでないこと位なことは百も承知、二百も承知ではあるが、あらゆる事情を超越して廢刊の舉に出なければならぬ場合が只一回ある。それは國家興廢の時、すべてを國家に殉じて皇恩にむくゆる時の謂である。

★本誌は今、その只一回の廢刊の時期に遭遇したのである。諸賢又欣然として諒恕されることを疑はない。

★本誌は例月の倍大號とした。しかも殆んど私一人で筆陣を張つた。それは横暴心からではない。後かたづけの意味からである。これまた寛恕を請ふ次第である。

終刊号のなかの「飛燕往來」は、全国柳人の來信の報告だが、三頁におよぶその

通信による廃刊についての会合の議事録が送付されていたようだ。

★伊古田伊太古氏より（川口市）

不朽洞總會議事概要「川柳雜誌」奉還（一同無言、暫時靜寂）私も奉還の字を見ただで唾をのみました。刊行を續け得られる實情にある事は紙の問題、部數の量で「川柳雜誌」が第一線に立つてゐる事を示されて居ります。だのに奉還を決意されました事に先生の並々ならぬ御心情を窺ひ知る事が出來ます。（中略）存續に對する力の限りと沸きたぎつて來た熱情は身々が灼ける想ひでした。其等は總て先生が身を以て幾度か耐へ、噛みしめて崇高な奉還の決意に到達せられた事を落着いてから始めて知りました。お國の爲先生良くお決心下さいました。唯々頭が下るのみです。

★住田亂耽氏より（兵庫縣）

噂に聽けば、此の度「川柳雜誌」もおやめになり専ら川柳講演に御盡しの由、山口草平先生より洩れ承り、まことにその悲壯なる御決心に打たれ、紋太さんとも

相談の上われわれの會合へでも御出席の上、一場の御教話を拜する事が出來るならば非常に結構と存じます。御意向は如何で御座いますか。小生も正月五日より節酒（斷酒に近い）を實行、大いに人間らしき生活をいとなみ度く決心致しそんな事より何より一度しみじみ二人でもお話し出来るならば魚崎へでも御來駕下さるやう、御願ひ申上げます。奥さんはじめ皆さんよろしく。

★梶元紋太氏より（神戸）

柳界の轉變に心のいたむ時です。小生も今年から魚崎町役場へ勤務する様になりました。一度御來遊下されば幸甚です。もめんの運命も殆んど絶望で目下推移に委す外ない状態です。斯うなると何だか人懐かしい氣が起ります。

「大阪時事の社長の好意で、新聞の特

派員として北支蒙疆の旅をやる。費用の面倒はすべて張家江にいた門下の岩崎柳路君が見てくれた。帰阪後も、紙の割当は減少するばかり、生産的なものの出版を

すれば紙はやると云つてくれるが、私は文化の仕事をしているので儲かりさえすればいいと云うのではないから、紙がもらいたいためにその方面の刊行へ転じると云うことは思いもよらないことであると云つて断固として応じない。そのために、配紙は蚊の涙ほどしかくれない。やむなく紙の闇買ひをして刊行をつづけた。

男の子は皆、応召したので、五女の梨里が、闇紙をリヤカーで印刷屋へ運んで、一ヶ月も遅刊もなく刊行を續けたが、国内事情がますます緊迫して來たので、遂に発行をやめたらかと云う勧告さえもつけた。主婦之友のような大雜誌すら、みる影もないうすつぺらな貧弱な雜誌になつてしまつた。ガン張り通してきた「川柳雜誌」も昭和十八年十二月号限りで潔く廃刊を決意し、堂々たる「奉還号」を出して影を没した」（川柳五十四年「路郎、昭32・

7「川柳雜誌」No.362・古稀特集号）

雜誌奉還号から右の古稀特集号まで、十四年の歳月が経つてゐる。この老齡の感慨の眼が痛苦にみちた川柳の廢刊とい

う生涯の一大試練をふりかえったとき、川雑の停刊は、雑誌発行の上で最大の資材である用紙不足が最大の壁となっていたことを物語っている。いわば川雑はその糧道を断たれたことによって廃刊に踏み切らざるを得なかったのである。

奉還号の、苦闘四十年の血を吐くような川柳生涯の回顧の中で、路郎は「紙」不足が原因だとは一言も触れてはいない。戦時下だけにそのようなことは活字ではタブーにちがいないが、その回顧録のしめくくりには彼はこう書いている。

「最後に近衛内閣の新體制當時、大阪における柳誌の整備統合に就て慫慂をうけたが、我社だけは唯一の有保證新聞紙法に據る刊行であり、識業人として立つてゐるのでアマーチャーの柳誌とは全く別箇に考慮された當局の措置を今もなほ感謝してゐることを附記したい。そして本誌が日本唯一の有保證新聞紙法によつて刊行された柳誌であることを、今もなほは、えましく思つてゐる」

廢刊に当たつての彼のプライドと気性

の一端がよくにじみ出ている。

麻生路郎物語

(24)

—戦争と路郎一家—

疎開先の奈良県宇陀郡三本松頓光寺
小さく写っているのは、路郎先生



に輝くB29の雄姿？が、疎開荷物を運ぶ私たち親子のすぐ頭の上を東方をめざして飛んで行つたこと、はじめて知つたジャガイモのあまき、タニシのすき焼。魚釣り、泥鰌掬い、柴拾い、百姓の真似ごと、何から何まで、すべては原始生活への逆行であつた。

疎開の決行に就いてはしゅんじゅんしなかつたが、そんな遠隔な地へどうして荷物を運ぶかと云うなやみはなかくに大きかつた。大阪から三重県まで疎開荷物を運んで来れるようなトラックはいなかつた。仮令運んで来れるとしても、彼等の申出る莫大な資金と多量の白米の要求には、応じたくも応じられなかつたのである。遂に私は当時十六歳の三男（筆者註＝麻生一步。次男アトは徴用で呉市へ）を相手に、私たちがその白米を喰べることによつて私たちの手で運ぶ決心をした。私は一台のリヤカーを手に入れ、焼失したら、もう二度と手に入れられそうもない書籍や家具を二回に運んだ。それは朝発つて三日目の午後二時でなければ、

昭和十九年九月十五日、私たち一家は三重県へ疎開した。毎年九月が来ると疎開した頃の事が脳裡でうづく。それは一つのあますすばい懐しさでもある。陽光

行きつかぬ距離ではあつたが、足にまかせて、大和川を目あてに王子へ出て、奈良県を北へ突きぬけ、京都府に出た。木津川沿いに木津、加茂、笠置、大河原、島ヶ原を経て伊賀の上野に出た。疎開地はそれから東方一里の山の中腹であつた。とう／＼それを断行して友人をあきれさせたものである。私はこゝに生活の一時的の根拠を見出し、四、五日分の食糧をリュックに入れて、セツセと大阪への芭蕉の旅をつづけたのであつた。私や三男が大阪へ戻つてからも妻は疎開地に残つた。その後、妻の疎開は三転四転して遂に奈良県宇陀郡に疎開荷物をあずけたまま終戦四、五年して引揚げて来た。

はじめて疎開してから十年の歳月が流れ、昭和廿九年八月四日を期して疎開荷物を全部引きあげて来て再びあきれられている。箸と茶碗、イヤ茶碗がなくともカレー皿一枚あれば生きられることを骨身に徹して知らされながら、小さな慾望が捨てきれず、金と時間を費やしてまで疎開荷物を引きあげて来たのである。人生

は簡単には割切れない。そこに川柳が永遠性を持つのかも知れない。(「疎開荷物」路郎、昭29・9「川柳雑誌」No.328)

路郎一家は、大東亜戦争勃発の際の住所は堺市出島海岸通り二丁目一八二番地で、ここから大阪市西区江戸堀上通り二丁目四六の昭和ビルに通つて川雑の編集に当たつていた。路郎一家が、堺みなとと懐かしんだ堺の家は、有恒倶楽部川柳部の橋本破夢造の紹介であつたが、入居の際の約束により昭和十八年五月ここを引き払つて大阪市住吉区万代西五丁目二五番地に転宅した。

この万代の家は、日本楽器(株)の大阪店の支配人であつた川柳人村松夢裡が住んでいたところで、急転転の辞令を受けため、路郎一家がそのあとに住みつく形となつた。路郎が葭乃と結婚以来、転宅転居の連続で、この万代の家にたどりついた時が実に十四回目の勘定になる。ともあれこの家は、路郎一家にとつては終生忘れ得ぬ思い出の住居となつた。

この家から「川柳雑誌」奉還号を出し、終戦とともに復刊号で再スタートし、そして昭和四十年麻生路郎追悼号をもつて、その輝かしい誌齢と四六〇号の幕を閉じることになる。「川柳雑誌」と巨匠麻生路郎終焉の地こそ、この万代西五丁目二五番地の陋屋であつた。

「堺みなとの家にいるとき、アート(次男)は呉へ徴用にとられ、程なく大阪の師団に入營することになりました。

戦争ははげしくなつてきて「川柳雑誌」もとうとう奉還号を出し、私達は伊賀上野市から四キロへだてた一の宮の妙慶寺へ疎開いたしました。この寺の住職が出征したので、その留守の寺をお借りすることになったのです。これは、有恒倶楽部川柳部の立川さんの紹介です。立川さんは伊賀上野に立川ペン先の工場を持っておられましたから、便宜を図つて下さいました。

疎開先も私達は四度も住居を変えました。第一が一の宮妙慶寺、第二が伊賀上野

市桑町、第三が奈良県宇陀郡向淵の川柳家上田翠光氏宅、第四が宇陀郡三本松頓光寺です。

一の宮のお寺の生活の後半ごろから、路郎は大阪の万代の家に戻り、赤目芋やほうれん草などの私の手づくりの野菜を大阪へ運びました。

上野市へ移つてからも荷物と共に、私は疎開地へ残りました。路郎は絶えず往復しました。上田翠光さんのお世話で奈良県へ移つてから、北川春東さんのお力添えでトラックを回してもらい、ようよう私も大阪の万代へ戻りました。静子（アートの妻）に、大阪の市内の地図を借りて見当をつけましたが、昔あつた橋はなく、堀は埋められたのもあつて、おまけに交通網が入り乱れてサツパリ見当がつかずダメです。

木津川と安治川が合流するあたりに「はたてくら橋」というのがあつた筈なのに見当たりません。グレンシヨウ氏が、昔の川口町のことを詳細に英文で紹介している『なにわのあし』という本を、中島小

石さんから借りて読んだことがあります。だが、それには昔の街のありさまが鮮やかによみがえつてくるように描かれていました。

木津川を渡つて居留地へ行くまでに大阪府庁があつたと静子に説明したら、そんなところに府庁がおますかいな、大手前だんがな、といいました。（霞乃書簡）

「あの戦争で五女の梨里は、会社の寮が戦火に焼かれ、京都山崎まで時限爆弾の中を走つて避難した経験を持つていますし、奈那（四女）は、和歌山で空襲にあい、紀の川で半日以上つかつていたと申します。中国のような広い国ならば、戦争はどこでしているのかも知らずに暮らしている人もいるでしょうが狭い日本の空の下で、戦争のときも平和に暮らせたことは嘘のようでございます。敵も相手にできぬような山村僻地に私はいたのでから……」（同）

「私が第四回目の疎開地大和頓光寺の別棟に居りました時は、朝も昼も鶯うぐいすの声がきこえました。雷鳴はげしい夜などは

宇陀川の流にそつた山々へ稲妻の走る壮観は、キネオラマでも見ている様でした。平素は何の物音も聞えぬ静けさでありました。

「こんなところで一日いたらさちがいになつてしまふ」と亜鈍さんがいわれたことがありました。

——鬼あざみ 無縁の墓を淋しうす 霞 乃
この旧作はここで生れた句なのです」（同）
「回顧すると、太平洋戦争の苛烈な昭和十九年九月十五日に私一家は上野市の東方一里余、一の宮の妙慶寺へ疎開した。終戦になつてから、私は大阪へ立戻り、荆妻霞乃は上野市桑町へ移つた。其後連絡上かなり不便を感じたので、上田翠光氏のあつせんで霞乃は奈良縣宇陀郡三本松村字中村の頓光寺の離房へ三轉した。昭和廿年十一月十六日のことである。こゝは非常に景色のいゝところで、山又山に取囲まれているし脚下には宇陀川が流れている。こゝへ移つた時、私は障子を押し

開いて前方に折り重なっている山又山の美にうたれ思はず、くちずさんだのが「名も知らぬ山の起伏をうれしがり」であった。葎乃は廿四年の十一月に帰阪し、荷物には三本松村向淵の翠光居の二階へあづかつて貰つた。向淵は頓光寺から二里余(約十キロ)筆者註)の山上であり、近鉄の室口大野駅下車、北方へ一里余(約五キロ)筆者註)である。

今回そこへ句碑が建つことになつたので、同じ三本松村ではあるし、眼界は何処までも山の起伏しているところであるから「名も知らぬ」の句を選定した訳である。「句碑の句に就いて」路郎、昭25・9「川柳雑誌」No.280)

この句碑建立については、路郎句碑の項についての稿で後述するが、ともあれ路郎一家の戦時疎開に、よくねんごろに面倒をみたのは門下の上田翠光であった。

翠光は大阪で工場経営を行なっていたが、応召のため廃業。復員後は戦死した実弟にかわり三本松で百姓をする決心をす

る。こうしたにわか百姓の生活の中に路郎を招き、夜半までよく川柳を語りあつたという。こうした縁から、翠光は「先生のための一庵建立」を思いたち、路郎に相談したところ

「庵などと云うものは、聞いただけでも隠遁的な響を持つている。同じ作るなら積極的なものにして大衆に役立つものにしたまへ」(句碑建設の事ども)翠光、昭25・9「川柳雑誌」No.280)

と一蹴され、結局、恩師への記念に句碑建立を発願したのだという。路郎句碑では二番目で、昭和二十五年八月三日不朽洞会員多数が集まり句碑除幕式をこの山上であげている。

昭和二十年の終戦の年は、路郎五十八歳であった。この年から路郎は、それまで愛用していた戦闘帽を捨て、本来の無帽主義にかえつてゐる。

「戦時中には、私たちまでがよく挙手の礼をさせられる機会が多かつた。しかも平氣で、それをやつていたものである。今から考へると一寸滑稽に感じられる挙

手の礼ではあつたが、不自然と云うよりも、その頃の生活状態にビタリと調和していたのである。近ごろは挙手の礼の存在すら忘れて暮らしていたが、最近S消防署へ講演に招かれ、帰る時、サイドカーに乗せてもらった私へ署員が一せいに挙手の礼をもつて見送られたので、私も思はず反射的に挙手の礼を返した。無帽の私は天皇陛下のように帽子をさしあげて答礼する訳にかなかつたのである。

しかし、考へて見ると、サイドカーの場合、お辞儀をするよりも、挙手の礼の方が、ズツと、その場の雰囲気合致していたように思う。(中略)

作句にしても素材の調和、語彙の調和、音調の調和などが巧みに塩梅されて、はじめて佳吟が得られるのである。時に破調の佳吟がないでもないが、これとても厳密に云えば調和を破ぶつて第二の調和を形成しているのであつて、乱脈を意味するものではない。

私たち一家が、三重縣へ疎開していたころの経験に、農家へ有形(衣料用品)を與

えると直ぐさま有形(食料品)で返えして来た。ところが無形(知識)を與えても何等返えしてはくれなかつた。私は有形を與えても、無形を與えても、返えして貰うことを予期して與えたことは一度もなかつたのであつたが、有形の場合には必ず返えすことを忘れなかつた。

(中略)

無形の價値を評價し得ない人たちが、

過小評價される人たちからうける損失は小額とは云えない。文藝人の多くが富裕でない原因はこんなところにあるのである。しかしその罪が一方的でないことを認めないわけにはいかぬ。文藝人の思いあがつた無形財が眞に無價値である場合もあり、又有價値であつても、所謂猫に小判である場合もあるからである。特に恒産のない限り右に述べたような理由で文藝人の多くは清貧に甘んじなければならぬのである。殊に短詩文学で生活することの容易でないことは云うまでもなからう」(窓口―拳手の礼と報酬―路郎、昭25・8

「川柳雑誌」No.279)

麻生路郎物語 (25)
川雜戰後復刊号

戰後復刊第1号 (昭和21年8月号)



日本敗れたり——モロアの「フランス敗れたり」はまだロマンが漂っていたが、日本の敗戦の現実はまだに非情な現実そのものであつた。怒みは深し昭和二十年夏八月。
瓦礫の山の廢趾の底で、だれもかれもポロ軍服に戦鬪帽で、女はよれよれのもんぺをはき、薄汚いワンピース姿はパンパンたちで、ねだつた洋モクをふかす姿も哀れだつた。

ゆらぐ幣原内閣は退陣し、後継内閣が決まらぬ中で、東京では五十万を数える参加者によつて、食糧メーデーが、赤ハタと革命歌の怒濤で描き出した。進駐軍の後ろ楯でようやく出現した吉田内閣は、やつとの思いで、戦争放棄主権在民の憲法改正案を通過させた。時に十一月三日。公職追放の嵐の中である。

翌二十二年、吉田首相の「不逞の輩」から二・一ゼネスト不発の末、四月総選挙で社会党内閣が出現し、極東裁判は大詰めにさしかかつていた。

終戦翌年五月の、米よこせデモはアカハタが皇居にだれだれ込み、「汝臣民飢えて死ぬ」のプラカード事件をひき起こした。しかし当時の天皇は国民と同じ耐乏生活を続けておられ、御飯は七分搗きの米七に麦三の割でそれに代用食もあわせ食していられた。お菜も里イモと大根の煮付が主であつた由。

この頃の両陛下下の食事は大体一日千五百から六百カロリで、一日の御生活費は六十五円五十銭から七十五円見当とい

われていた。国民も衣食住に困っていたが、農村ではヤミ成金が続出し、食糧をヤミに流し百円札が高さ一尺たまる毎に「尺祝い」をやらかし、フスマに百円札を貼るばかりの振舞いをやる農家もいて、巷にはヤミ成金が横行した。

—これやこの行くも歸るも米をさげ

水車

—腹に巻く米は冷いものと知り 弓削平
—猫今日もお粥のしづくだけ貰ひ 葎乃
—我々が今食ふ米へ閣議也 路郎

「共産党が無闇に跋扈して、当時の国民感情に反し天皇と皇后をヒロヒト及びその妻と「アカハタ」に書いていた時

古くとも僕には仁義禮智信

と僕は詠んだが、此の句は作ろうとして作つた句でないから生命があるが、新聞社から頼まれて、どんな句を詠まうかと思つて詠んだ句は、そうは行かぬ」（時事川柳に就て語る」、昭29・3「川柳雑誌」No.322）

路郎はこうした敗戦直後のころ衆議院選挙に打つて出た。「かつて私は、二合三勺問題のために、代議士に立候補したこ

ともある。私は物に熱を持つたちなのである」（『旅人』出版記念会謝詞より、昭和29・4「川柳雑誌」No.323）

「待つたなしの歩に刺されたる犬養毅

これは当時の時事吟であるが、これを今作るとすれば詠史川柳と云う訳だね。

人類は悲しからずや左派と右派

（前略）ソ聯と米国とは恐らく一本にはなるまい。『世界聯邦』は夢だ。（中略）『古くとも』にしても『人類は』にしても私の思想が句になつた訳で、時事を詠むつもりで詠んだ訳ではない。

釈瓢斎氏は本人は俳句だと云つていた

（釈瓢斎氏が天声人語に川柳とも俳句ともつかぬものを書いていた、という某発言を受けて一編者註）が、一般の俳人から云つたら大したものではないと云われていた。彼が雑誌を出す三云うので、相談を受けたが『下手よ集れ』と云う旗の下に集つた人も相当あつた。逆効果を狙つたわけで、彼はこんなキャッチフレーズがう

まかつたね。天声人語の欄全部を『川柳雑誌』の川柳で埋めたこともあつた。川柳もかくの如く変つたという意味だね。

新聞に時事吟を詠もうとすれば、少くとも五、六種の新聞も読まねばならず、自分の興味のない記事も読まねばならず、中々大変だ。時事吟の選をするのは、普通の選より至難だ。（中略）

議員歳費が値上げされたので私は殴り合いもせずに歳費は値上げされ

と詠み、引揚げて来た女に二人の夫があつた悲劇を知つて

二歩ですと将棋のように片付かず

と詠んだ。

出火頻々の時に、

漏電と云えば落度でない如く

と云うのも詠んだが、なるほど巧くつかんでいると云う位なところで、それが時事吟のしんしようだろう」（時事川柳に就いて語る」という座談会で、路郎の発言のみを抄出したもの一編者註）

麻生路郎句集『旅人』出版記念会（昭29・2・17）での謝詞で、戦時中の句集出

版のことについて触れている。路郎の句集作製に対する意欲の一端が覗かれるので抄録しておこう。

「私の川柳生活四十年の折に、不朽洞会から出してやろうと云われ、私もその時には出す気になったが、出すならば変つたものを出したいと思つた。丁度十年前のことであるから、戦争の最中で、然も日本の状態の怪しげな時であつた。それでも出してやろう、と云われ、緑雨君が信州の松本まで行つて紙の見本を持つて帰つてくれたが、気に入つたのがなく、私の手で群馬県から、帝室博物館に納めていると云う一枚きざぎの和紙を手に入れ、それを大阪へ送つて来させて、丹路君の勤務先の山本鋼業倉庫へ保管してもらつていた。型はB列5号で絹糸で和綴じにしたいと考えていた。しかし絹糸も手に入らない時であつたが、これも戦死した銃人君の手で集めていただいた。表紙裏の色仙歌も気に入つたものが手に入り、最後に紋表紙が大阪になかつたので京都へ探しに行こうと思つている時に、山本

鋼業が戦災に遭い、全部が灰燼に帰した。いろ／＼と世話をして下さつた方には申し訳のないことではあつたが、私としてはホツとした気持であつた」

物資窮乏の戦時中といえども、プロ川柳家の自負襟持にかけて、それにふさわしいわが身の句集に懸命に打ち込む路郎、いかにも彼らしい性格がうき彫りにされている。

こうした敗戦直後の瓦礫と飢餓線上の中で路郎はやがて再び川柳の業火に身をやく再出発を開始した。そのかみの筆号不死鳥を地でゆく柳魂という人もいた。

「川柳雑誌」の戦後復刊号は昭和二十一年八月一日発行で「第一巻第一号・創刊大正十三年・通巻二百四十号」を肩につけ「麻生路郎*主宰」を大きく肩に揚げ「川柳雑誌・八月号」とあり、B5判八ページ。新聞用紙のザラ紙でびつしりと誌面を埋めた活字は、全頁すべてを路郎が書いている。

題字横の「再刊の辭」はつぎの通り。

飢餓線上に立つも我等に川柳あり

昭和十八年十二月號(通巻三三九)で、一ト先づ終止符を打つた「川柳雑誌」が日本の文化建設を目指して再登場するなどは私自身考えてもゐなかつたことである。もうこの年で雑誌の編輯でもあるまいと思つてゐたので、これからの餘生を象牙の塔に立籠つて、研究に専念する心算であつたが、終戦後、日が經つに連れて川柳不朽洞會員は云ふまでもなく、柳友諸君からは非再刊して欲しいと云ふ切なる望みを聴かされてはそうそうむげにもしりぞけかねて、驚馬に鞭つて隘路の多い出版事業に、再び携はることにした。一ト度再刊と決意した以上、どんな難關にぶつつからうと、尻古垂れるやうなことはしない積りだ。しかし非營利的な仕事だけに、現實の厳しさはなかなか容易ではない。平和を冀求され國民の飢餓を深憂される天皇の下に、進駐軍の朗らかな歌謡曲のラヂオを聴きながら、「川柳雑誌」再刊の辭に筆を執つた。「川柳雑誌」の生みの親は私であるが、育ての親は一つ

に諸君の手でなければならぬ。頼むぞ諸君！(路)

そしてこのあと「不朽洞句抄」麻生路郎のタイトルの下に、七十九句の作品を発表している。路郎にとつても、「川柳雑誌」

にとつても、空前絶後の量産的作品群といえる。いかに路郎が、川雑復刊に気負い立っていたかがわかる。まさにうつつ積された川柳熱の爆発ともいうべきか。堂々七十九句のうちから主なるものを参考までに掲げておこう。

翠光居を訪ふ

—この炭も僕が焼いたともてなされ

路郎

—請賣りの多い天皇制を聴き

—供出を知らず蝗が飛び違ふ

—インフレに割切れぬこと日に多し

—丹前だ餅だ故郷はよいところ

逐鹿陣營より

—志士として花の散るのも知らぬ也

—新圓で陣中見舞とゞけられ

—落選へはや葉櫻の候となり

これは路郎の衆議院立候補の体験句と

思われる。この前の方に

—捨石の一つたらんか立候補

同

の句がみえるが、この一句は印象に残る。復刊第一号の編集後記いろいろにこうある。

「昭和十八年十二月號限りで終刊とした本誌も、社はそのまゝ、存置し、句會は空襲下も續けて來た。いかに集りが悪くなくても川柳の火を絶やさぬために最後まで頑張つた。殊に内容の低下せぬやう指導には全力を傾倒した。そして我が社では御用川柳やモツトのやうな川柳は作らぬやうに絶えず嚴戒した甲斐あつてウワタイムにも可成り優れた句を残すことが出來た。そのためには特高課へ呼び出されてお小言を頂戴したり、一旦發送した雑誌を返還して貰つたり、難行苦行をさせられたものだ。それに大阪文化協會の世話役から衆議院議員の立候補、各句會の指導、市立高女での川柳講演、川雜サービス部の開設等々々私自身も目の廻る忙しさだつた」

そしてこのあと、正味一頁にわたり川

柳人の戦後消息欄がびつしりと書かれてゐる。まさに戦争と川柳人とも呼ぶべき一篇の間ドラマがそこに描き出された形である。主なるものを抜き書きしておこう。

▼小川靜觀堂氏は南方からまだ復員されない。消息杜絶▼長崎柳秀博士夫妻は昨年六月御影の自宅の壕で戦災死された。(中略)「金魚屋に舞妓袂を教へられ」の一軸が記念として私の手許に残つてゐる▼加川泉泡氏は今津の戦禍で焼痕彈のために傷つき四日目に亡くなられたとのこと▼水谷鮎美氏は勤務先の阪神電鐵が戦災▼出口夢詩朗氏は廿三年の在外生活で築いた七千六百萬圓をすつかり置いて小倉へ引揚げてゐられる▼岩崎柳路氏も巨財を打ち捨て張家口から北京へ出られたさうであるが、終戦後同氏に出した通信が九ヶ月振りに舞戻つた▼中島生々庵博士は大阪の診療所を戦災で失はれ、堺市濱寺諏訪森町の自宅に診療所を移された▼西田艸樂氏は大阪府の囑託で食野草の指導に當られることとなつた▼井村寒

浪氏は戦災で家を失ひ痛ましくも母堂を亡くされた。引續き父君、令閨を病魔にさらはれ、氏は入院中である▼石曾根民郎氏(松本)は舊居へ戻つて印刷所再開、「川柳しの」の再刊をされた▼前田五健氏(松山)は自宅戦災▼蛭子省三氏朝鮮光州から山口縣へ引揚▼岸本水府氏(京都)は目下出版屋を始めるので忙しさうだ成功を祈つてゐる

終戦直後の出版事業は、印刷工場施設はなんとかなつたが、問題は紙でこれの入手こそは難事中的の難事だつた。占領軍用は別格として第一は新聞用、第二が教科書用で、新聞とて地方紙はタブロイド判二頁の有様。いわゆる割当用紙時代で「マル炭」「マル木」という名の裏取引が横行したものだ。川雜がこの用紙地獄の二十一年夏に刊行されたのは、大阪朝日ビル三階の進駐軍物行刊検閱室に、路郎門下のハワイの前山北海、古川麗花麗の二人がいたことだ。この斡旋でいわば川雜復刊号はいち早く陽の目をみたのであ

る。川雜も古稀特集で路郎は望外の僥倖だつたと、この事に悦びの回想を書いてゐる。

麻生路郎物語 (26)

—六十一歳の情熱—

「川柳雜誌」復刊号(No.240)は、日本敗戦一年目の昭和二十一年八月号で世に出た。焦土の中の趣味的刊行物としては戦後第一号と自負してもよさそうであ



麻生路郎先生(右)と岩崎柳路氏 大連の露天市場にて(昭和9年3月22日(木))

る。

戦後のいわゆるカストリ雜誌時代は、終戦直後、チリ紙同様の仙花紙(仙貨紙とも泉貨紙とも書く)でエロ・グロオンリーのラチもない卑俗な悪本が世に氾濫した。

見るからに粗悪で下卑た記事や印刷のB5版であるところから、粕取焼酎同様にマガイモノ、ニセモノの意をこめて、カストリ雜誌と呼称された。このカストリ雜誌は、昭和二十四年にピークを示し、二十六年におよんで消滅していく。この愚劣な大衆雜誌は、戦後日本のいわば恥部の象徴とされた。

昭和二十六年のこの種の雑本の消滅は、印刷用紙の生産が軌道に乗り、用紙の配給制が撤廃されたことが転機となっているが、川雜はそのころすでに大型柳誌として本紙三十余頁を維持して本格軌道に乗っている。戦後復刊号のザラ紙八頁が嘘のようだ。復刊号より

笑ひの復興運動(豫告篇)

笑ひを忘れた國民の顔をジツと見てあ

ると、何んだか淋びしくなつて来る。曾ては苦駄羅くだらないことにもケラ／＼笑つて、その輕薄さに顔をそむけさしたものであるが、戦時中の猿轡さるわしが利き過ぎたのと、口をきいても腹が空くといふ現實に直面したのとで、相變はらず笑はない。イヤ笑へないのかも知れないが、この儘捨て、置いたら、人間の影を見てゐるやうな國民になつてしまふだらう。

そこで私はお互ひに、大きく口を開いて笑ふ運動を近くおこすことにしたいと思つてゐる。無理に笑ふことは莫迦まかげてゐるかも知れぬが、柔道でも型から這入つて眞技を發揮するところまで行くことを思ふと、求めて笑つてゐるうちにホントに笑へるやうになるに違ひない。人間の心の底には必ず笑ひの水が満々と湛たえられてゐるに違ひないから、私は地面へ穴をあけて井戸水をポンプで吸ひ上げるやうに國民を笑ひの世界へ誘導する役目をつとめやうと思つてゐる。(昭21・8「川柳雑誌」復刊号)

路郎が戦前から唱導しつづけた、川柳

の社会化運動の主旨がここにあり、路郎は戦後の虚脱し、退廃と夢のない敗戦国日本に、彼自身、川柳の夢の拡大をそこに思い描いていたことがわかる。敗戦日本こそ、新しい笑いのエスプリに溢れた土壌でもあることをみてとつていたのである。

とにかく戦後は、文化に飢え新知識を渴仰し、心のユトリを求める國民の欲求が、活字に向かつて奔騰した観がある。実のところ、新聞、雑誌、一般刊行物とみれば、人々は眼の色を変えて殺到してきた。川柳復刊号の、川柳出版部と称する社告には『街の雑音』(売切)『大空』(売切)『人の一代』(売切)『累卵の遊び』(売切)『詩人複眼』売切の活字が眼につく。

こうしたなかで、終戦直後の資料難と欠乏生活の中にもかかわらず川柳は、『麻生路郎著・新川柳講座』(定価一〇〇円)『戸田孤蓬、麻生路郎鑑修・川柳二千六百年史』(定価八十錢)『戸倉普天著・普天隨筆』発刊の予告を出版部の名で出している。

「昭和二十一年八月不朽洞会理事長戸倉普天氏丹波へ帰郷のため辞任、後任は中島生々庵氏就任」(山雨樓メモ)

「昭和二十二年二月十日麻生路郎・岸本水府・中島生々庵三氏に大阪府知事から、なにわ芸賞、授与せらる。四月二十三日蟹の目川柳社の一周年記念に招かれ金沢市へ行脚、西本三笑居泊・金沢放送局から「手をさしのべる川柳」を放送。六月一日文芸賞受賞記念大会を不朽洞会主催で住吉の生根神社で。八月九日大阪府主催の文化夏期大学の講師として貝塚市で「川柳と生活」講述。川柳十月号に「三つの苦言」柳界の新鮮味を待望して——全国川柳大会私案、事後承諾について、中堅作家の脆弱性を執筆。十二月二日名古屋市で開催の「すげ笠社主催の全国川柳大会」に出席。三日新東海新聞主催の座談会に出席。BKから十二月二十九日「歳末のユーモア」を放送。霞乃夫人十一月十六日大和の三本松村に移らる、不朽洞山房(山荘) (山雨樓メモ)

こうして川柳は着々と、戦前の面目を

とり戻し、路郎の活躍も次第にあぶらが乗ってきた。昭和二十三年路郎は六十一歳になった。

―六十一まだ情熱は燃えに燃え 路郎と詠んだ。

「ところが石井寿一氏（大阪日日新聞社長）が、ニンマリと笑って、

『相手は二十七か八か』と云われた。それは終戦後マのない頃だったと思う。

私はこの思いがけない新解釈に一寸戸まどうたが、とつさに否定していた。

『この句は最近、私が還暦を迎えたので、今後の柳界に対して、いかに生きるかを句にしたのに過ぎない。この句の構成には恋情の意味は微塵も含まれていないのであるから誤解のないように』と私は大マジメで答えた。きょうこの頃なら『まあそんなところかな』と多少余裕のある言葉で受け流すことも出来たであろうが、何んしろ、その頃の私は言葉にペールを着せることを知らなかった。それは、いまでも持ちつづけた私の若さである』（二つの流れ）路郎、昭和39・10「川柳雑誌」No.449

「戎橋筋のオメガで御還暦祝賀の集りが持たれたのは昨日の様な気がするが十年になる。予想を遙かに上廻つた盛會に

世話係が目を白黒さしたり当時の電力事情で懇親会の最中停電となつてロソクの灯で祝盃を挙げたり、その雑然たる中に参会者一同の親しみと愛情がみち溢れてほんとうに心から御健祥を寿ぐ雰囲気（がひし／＼と感ぜられた事が今日でもはつきりと脳裡に浮んで来るのである。真っ白い麻服の先生の後につ、まじやかに霞乃奥様が続かれて会場に入つて来られると満堂破れるばかり、やがて『六十一まだ情熱は燃えに燃え』と云う世紀の名句が発表せられてあれから十年である）（愛の鞭は厳し―恩師を語る―中島生々庵、昭和32年7月「川柳雑誌」No.362・古稀特集号）

不朽洞会永年の理事長中島生々庵は、昭和十四年の松坂倶楽部川柳部に入門、路郎門下の筆頭としてよく路郎逝去の日まで、形影相伴う労苦をともにした人物だが、昨年四月小石夫人とともに、柳道三十五年の名跡をつづる華麗なその作

品と彩筆による『生々楽土』を刊行している。

路郎句碑の第一号は、この生々庵医博経営の、中島小児科診療院後庭に建てられている。同院新築に祝意を表しての不朽洞会有志の手で昭和二十五年五月二十八日に建立された。小児科院にふさわしくその句は

―すべりんこ 親は涼しいとこで待ち

路郎

しかし、木碑のため破損甚だしく現存していない。

筆のついでに路郎の他の句碑についてふれておこう。路郎揮毫による句碑は四基で、その建立は昭和二十五年に三基、その翌年の二十六年に一基で、この両年に集中している。いわばこのことは、路郎と川雉の最盛期を示しているように思える。

路郎句碑第二号は、昭和二十五年八月三日奈良県宇陀郡三本松村（現室生村）上田翠光宅に建てられた。海拔五百米の山村で、霞乃の戦中疎開先で、麻生一家は

大和の山荘と呼んでいた。

「こゝへ移つた時、私は障子を押し開いて前方に折り重なっている山又山の美にうたれ思はず、くちずさんだのが『名も知らぬ山の起伏をうれしがり』であつた」

〔句碑の句に就いて〕路郎、昭25・9「川柳雑誌」No.280)

句碑は地元の石に彫られた。建立者は上田翠光で、その句を刻んだ碑も現存している。

第三の句碑は、岡山県久米郡久米南町、国鉄弓削駅前に建立された。

—俺に似よ俺に似るなと子を思ひ 路郎
除幕式は昭和二十五年九月十七日での日西日本川柳大会が開かれ、百四十人が集まり盛況で、地元の浜田久米雄の活躍が目立つたとある。建立のキモ入り役は丸山弓削平。

第四の句碑は岡山県和气郡吉永町福満の大森娘句楽居の前庭に建てられた。

—古くとも僕には仁義禮智信 路郎
「この句に盛られた思想が古いの新しいのと言つて見たところで、それは口頭

の論議に過ぎない。むしろこの句境に沿うて、その生涯を貫くことが出来るとしたら、人生の幸福これにすぎるものはないからうと今も信じる私なのである」

建立されたのは昭和二十六年四月二十二日。

話をもとに還そう。

路郎還暦祝賀川柳大会は、昭和二十三年七月十一日大阪市心齋橋筋戎橋オメガハウスで不朽洞会主催で開かれた。参加者三百九十一名(山雨楼)とある。稀有の盛況である。

燃えに燃える川柳への情熱に、路郎の活躍はつづき、山陽筋や九州一円を川柳行脚し、十一月には不朽洞山房(頓光寺) 葎乃夫人疎開先で徹宵句会(23人)まで行なっている。

この年、年来の公私にわたる柳友岩崎柳路が逝つた。命日は十月三日。

「路郎氏は川柳仏と題し追憶を語られたが、痛惜の情は川雑紙面に溢れた」(山雨楼メモ)

柳路は、路郎の北支蒙疆の旅を斡旋した人物で、松乃夫人とともに不朽洞会々友として格別の間柄にあつた。門下で柳号の中に路郎の「路」を用いているのは彼だけである。

もつともこの柳路は、麻生家とは別の意味で深い間柄にあつたようだ。

「純子は早くから岩崎柳路氏につられて北支へ渡り、私達とはほとんど別な生活をしておりました」(葎乃書簡)

この長女純子は、大阪市上福島の本屋時代の大正四年四月十七日の生まれ。

「私の結婚後、河盛彦三郎の後を継ぎ、河盛純子となる。河盛純子のちに杉生家に嫁して子無し、河盛彦三郎の家は絶家となる」(葎乃書簡)
昭和二十四年、葎乃はながい疎開生活を打ち切り十月末帰阪した。

「北川春巢さんの御力添えで、トラツクを回して貰いようよう万代の家へ戻りました」(葎乃書簡)

「私は六十ぐらいで一応私の従来の仕事を切りあげるつもりでいたが、それが

出来ずに七十になってしまった。このく
いちがいはたしかに戦争が責任を持って
くれる筈である。その戦争も敗戦ではあ
つたが、私の人生に附加するものすく
なくなつたことは疑う余地がない。そ
れを考えると私の仕事の予定表の上に十
年の延長があつたとしても悔いることは
少しもないと思つている。

とは云うもの、ここらで一応はじめ
がつけたい。そうした考え方が毎朝眼が
覚めると私のアタマを占領する。

ではどうしたらいいのか、現在の煩わ
しいいろ／＼の糸を断ち切る手段は――
これは容易なワザではない。漂然と家を
捨てる訳にも行かぬとしたら、どうなる
のか。いろんな仕事を断ち切る英断さが
ないとしたら、どうなるのか。

三十余年前、私は

二階を降りて何処へ行く身ぞ

と詠んだが、自殺もせずに七十の今日ま
で生をむさぼつて来た。どう考えても、こ
こらで多少の角度を変えたい。イヤ改め
て出直したい。それには作家としてのも

つとく孤独性が欲しい。しかし、雑誌を
経営している限り、常にそうした心境に
ありたいと云う考え方にはムジユンがあ
る。私のなやみはそこにある。

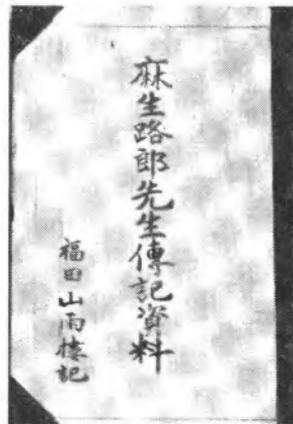
私はもう少し解放されたい。そして、私自
身の芸術に生きることと、短詩界が少し
でもよくなることに微力をつくすことに
私の仕事を絞つて行きたい」(「窓口談義 私
はもう少し解放されたい」路郎、昭32・8「川柳雑誌」
No363)

麻生路郎物語 (27) — 福田山雨楼メモの終結 —

この麻生路郎物語も、昨日手をつけた
ばかりと思えば、既に第二十七回目を数
えた。ともあれ、頭初予定した通り、本稿
をもって筆者のタイトルである「麻生路

郎物語」は終結する。路郎時点における年
齢は六十五歳。麻生路郎は明治二十一年(一
八八八)に生誕し、昭和四〇年(一九六五)
に他界したのであるから、路郎生涯のス

古びた一冊の帳簿「山雨楼メモ」とは、
左の写真がそれである。



トリーを追うとすれば、あと十四年の
晩年の春秋が残されている勘定になる。
しかし、この期に拙稿を閉じる理由は、本
稿を構成するに当たりその重要な主軸と
もなつた山雨楼メモ、すなわち福田山雨
楼記「麻生路郎先生傳記資料」が、昭和二
十七年路郎六十五歳をもって杜絶してい
るからである。

また、この終稿に当たつてのいま一つ
の理由には、路郎門下三百余名という諸
賢が、今なお柳界にあふれ、本誌上にも健
吟健筆中であることだ。そのなかには中
島生々庵本誌主幹をはじめ、数多の不朽

洞門の高足は、師の壮年期から風雪苦楽をともにし、師を知悉することその腹背の如くで、筆者づれの遠くおよぶところではない。したがって路郎師晩年の身辺の動静については、もはや筆者が一知半解の秃筆を弄するまでもないとの考えによる。願わくばこの諸賢各位の活写される本稿への補記によって、麻生路郎師晩年の歳月に有終の美を飾られんことを筆者は衷心より祈念してやまないとこころである。

山雨楼メモという貴重な路郎月旦の記録に対し、つねに才氣馥郁たる書簡を綴られた葎乃夫人には、本稿を閉じるに当たって心から深甚な謝意を表する次第であるが、本篇起稿に当たり寄せられた一昨年十一月の葎乃書簡を掲げよう。

「あなたに路郎のことを書いて頂くのは私年来の希望でありましたから、お心の赴くままにお筆の運ぶがままにおかき下さい。

内容につきましては、私達へのご遠慮

はさらさら御無用でございます。如何にあなたが精根こめておかき下さいましたも『路郎物語』を他の人に伝える人が今仮りに十人あるといたしましたら、十人が十人ともめいめいのカラーを出して語られます。芥川龍之介の作品（註Ⅱ藪の中）で或る若い旅の夫婦が山中で追剥ぎに逢い、三人とも死んで終つたのです。後程、巫女の口寄せて三人の死者に語らしめたところ、三人ともみんな言うことが違っていました。当人の口から直接にきいたことでは、こんな当たらぬのです。作者は人間の告白というものには、多少嘘もあることを指摘しているのだと思います」

最後に初稿以来、このストーリーの基盤を成した「麻生路郎先生傳記資料」の作者福田山雨楼について、筆者はこころからの謝意をこめて記述しておこう。

「川柳雑誌」No.340（昭30）九月号は、山雨楼追悼号にあてられている。巻頭文

「山雨楼逝く」要約。

▼多年闘病生活を続けていられた山雨楼・福田義達氏が六月十六日午前六時四十分に横浜市保土ヶ谷区岩崎町十番地の自宅で永眠されたことは寔に痛惜に堪えない。行年五十七歳。

▼氏は明治三十一年十月一日生。出身地は岡山市牟佐百三十九番地である。その一生を鉄道人として人一倍刻苦精勵されていたため遂に病を得て退職。晩年国会図書館に職を奉じられたが、これ又宿痼のため退職のやむなきにいたり、自宅にあつてひたすら療養につとめていられたが遂に起たなかつた。

▼氏が川柳に手を染められたのは大正十四年一月頃であり、その柳歴と識見とにより路郎門の高足として昭和二十九年二月一日川柳雑誌副主幹に推されて今日に及んだことは周知の通りである。

▼氏は死期が迫つてもなお宗教にすがろうとはしなかつた。川柳による安楽死を希望し、

何負けてたまるか目にも見えぬ藪

と、最後まで菌と闘い続けられたが遂に菌のために敗れたのであった。

この悼文は路郎が書き、一頁を痛惜哀悼の悲痛な言葉でつづられ、不朽河句帖に

片腕を千切られた思いして焼香す

川柳松山蒼白き月に入りし

オ、山雨楼と呼べば一ト筋のけむり

しかし奥さんという声をもう聞けず

絶筆も一糸乱れぬ君なりし

と「山雨楼を悼む(五句)」を載せている。

この号「悼 山雨楼」の特集記事が各人の追悼記で埋められている。その中で富士野鞍馬はこう記している。

「川柳の定義」——これは、誰でも欲しながら、それを言明するとなると、なかなかむずかしいのである。その難しい川柳の定義を、福田山雨楼さんは、立派に、論文として、発表した。その論文は、岸本水府さんの『川柳の書』に採用されてある。

この論文も、たしか、山雨楼さん病中の作と、記憶する。永い、病床生活の、その

間に、克明な調査や、研究的文章を、いつも『川柳雑誌』に発表されていた。それを讀むたびに、俳句の正岡子規と、思いくらべて、敬服していたのであった。

(中略)

路郎さんが、東上の時には、必ず、山雨楼さんを見舞っていられたことを知っている。そして、川柳雑誌副主幹として期待されていたであろうに、嗚呼……。以下略) (川柳の定義はのこる)

山雨楼の路郎観は、一口にいえば教祖的絶対帰依の敬虔さで一貫している「川柳研究」昭和九年六月号の「麻生路郎論」が伝記資料に再録筆載されているが、その断片中の一、二は本稿にも再録しておいた。

また山雨楼の路郎観は、吉田水車の『山雨楼氏を偲ぶ』(昭30・10「川柳雑誌」No.341)にもよく出ている。

「山雨楼氏と私の柳縁は二十数年にもなる。そして私の号を今の水車にしたのにも一つのゆかりがある。それは川柳雑誌社の句会へ初めて出席した折は私の名

「二郎」を朗としてそのま、使って居たのでその夜何かの句が抜けて名のりの時『ジロウ』と答えたが丁度幹事に出て居られた山雨楼氏がこれを聞きとがめて「路郎先生と同じような号を名乗るのは誰か」と半ば叱られたような事があった。斯うした所にも氏の先生をおもわれる念の厚かった事がしのばれるのである。勿論別に氏から改号を促された訳でも何でもなかったがその後自発的に今の号水車に改めたのである」

昭和二十七年「川柳雑誌」六月号(No.301)に「山雨楼居の二時間」と題する巻頭一頁にわたる路郎の記述がある。山雨楼の死に先だつ三年三ヵ月前の注目すべき一文である。長文にわたるので要点のみを抄録しよう。

「静岡の大会がすんだ翌日の五月十二日の早朝に私は静岡を發つて、横浜市保土ヶ谷区区岩崎町に闘病中の福田山雨楼君を親しく見舞つた。(中略) ベツタリ寝込んでいるとばかし思つていた私は思いがけなく玄関でその姿に接したので、多

少の安慰感を懐いて、奥の間の病室に入つたがそこには矢張りベッドが設けられてあり、今の今まで、床の中で私の來るのを待ちあぐんでいたのである。この部屋はその昔私が上京した際に泊めてもらつたことのある思い出の部屋である。彼は部屋に戻るなり、十数年会えなかつた感激が咳となつてとまらない。「まあ、静かにやすんでいたまえ」と云つて私の方が主として談すことにした。彼はマスクをはめて、静かに横になつた。そのうちに咳がおさまるとポツ／＼談し出した。そして一冊の本を私に手渡して「コレを持つて帰つて、間違つているところがあれば訂正して下さい」と云つた。それは一冊の古帳簿を利用したもので、背文字に「麻生路郎先生傳記資料」とある。表紙の中央にも「麻生路郎先生傳記資料」と達筆に書

し、左手の下の隅には福田山雨樓記と書かれてある。キチヨウメンな山雨樓君の性格がこんなところにも見られる。なか／＼大部のものである。私はバラ／＼と開いて見た。扉ページには、私の壽像の模

写が一ページ大に描かれてある。それを見くると、序文とはしてないが、次の文字が読まれる。

『路郎先生の傳記を編むことは一大事業である。須らく遠大なる計画と周到なる用意を以つてかゝらなくてはならない。先生の足跡獅子吼はあらゆる方面に亘つてゐるからこれを発掘し誤りなきを期することは実に容易なことではない。この資料は山雨樓がこころをこめて折にふれ、時に随つて記録したもので先生の全貌に対しては九牛の一毛に過ぎぬが同志と共に漸を追うて補して行きたいと思う』

その次をめぐると私の顔が、いろんな写真から随分沢山摸写されてある。大正四年頃、大阪の樂天地の地下室で劍花坊と一緒に写した時の私の顔、大阪日日新聞の催しで水府君と対談した時の私の顔まで、新聞から摸写されているのは驚いた。いろんな雑誌に掲載された『麻生路郎論』も根氣よく蒐集採録されている。私の一才から数え年の六十五才までのいろ

／＼な記事が年別に綴られてある。そして六十五才の頃の最後には昨日の觀光靜岡全國川柳大会に出席したことまでを記して筆を止めている。これからもまだ書き続けると云うことであつた。そして、もう一人、この仕事をやつてくれる人が欲しい。私一人では完璧を期し難いと云うのである。私が果して傳記を遺すに足る人物であるか、どうかは別として、山雨樓君がこんなにも精神力を傾注して傳記資料を蒐集して居ようとは私の夢想もしなかつたことであるが、斯うして私の傳記資料をつきつけられて見ると、私の勉強ぶりの不足を、ひし／＼と感じると同時に後進に対する責任を痛感したのである。「麻生君はい、弟子をお持ちですね」とどつからか云われそうである。この一冊の本を山雨樓君の手からうけとつた麻生路郎こそ以て瞑すべしであると思つた」

この「麻生路郎物語」に毎号登場した山雨樓メモ、こそ、他ならぬ山雨樓が病む手で路郎にさし出したその伝記資料の

「古びた一冊の帖簿」そのものなのである。筆者は、この両者が、山雨楼の病室でとり交されたその銘記すべき一瞬を脳裡に思いうかべながら、一種の名状しがたい因縁ごとと考えざるを得ない。山雨楼も路郎も、この一冊の古帖簿をことある毎にひろげながら、らちもない「路郎物語」をせっせと書きつづける、筆者というまざれもない第三者の介在を、その時夢想だにも考えなかつたことにちがいない。病床の山雨楼に対して筆者は麻生路郎先生伝記をこんな形で活字にし続けたことについて今更ながら忸怩たる想いとらわれ、答えるべき言葉もない想いである。

「山雨楼さんをわしの養子にしてくれないか」と川上三太郎さんが路郎にいわれたことがある。養子というのは「川柳研究」という柳誌でのアシスタントという意味である、と、葎乃書簡の一節にある。路郎がそれに応え、山雨楼がそれに対しどのような反応を示したかは、もとより論外の事項に属するだろう。

筆者はこの「路郎物語」の結びをかく時点において、今は亡き福田山雨楼副主幹に対し、ただ一筋に、多年の労苦による貴重な資料たる「麻生路郎先生傳記資料」を単なる「山雨楼メモ」によって処理した冒瀆と非礼について、ただわけもなく叩頭九拜をくりかえし罪の意識にさいなまれる想いで心からの謝罪の言葉を贈りたい。なお、この稿に対し、あと二回「路郎物語」の総括追補と脱落した挿話等について記してみたい。御了承願いたい。(昭51・4・29)

麻生路郎物語 (28)
—資料雑記から—

前号をもって「麻生路郎物語」は、そのストーリーの幕を閉じた。暇さえあれば大きな机いっぱい資料をひろげて、同じようなことばかり書きつづけてきた私は、実のところホッとした解放感を味わった。出来のよくないそんな私の悪文に

ついてきて下さった皆さん方も、やれやれどうやらこれでケリがついたか、と一息ついていられる顔も眼にうかがふ。

毎号、貴重な本誌上を三頁も割いて貰って二十七回にわたって掲載して頂いたわけだが思えばそのストーリーはメインストーリーだけで息をつく横丁がなかつた。また思わず息をのむエキサイトした一幕や、一読ギョツとさせるような秘中の秘話もなかつた。いうなればヤマのなしいキレイごとに終わつた、という感触がしきりにするわけだが、内心はそれでよ



ありし日の日車氏

かったんだと、自分自身で納得させている。実伝作家の杉森久英あたりなら、素材を八方から拉しきったって、仮借なき完璧の伝記に仕上げたであろう。しかし、私の場合、そこまでは追い切れなかった。

人間路郎をなりふりかまわず裸にしてやるう、そうした気負いは、頭初なくもなかったが、やがてそうした非情さは、川柳界という特殊な環境や、路郎の血をひく川柳誌という立場などから、さまざまに判断や、制約が生じて、ついに裸身を求めたはずの相手は、いつのまにか下着をつけ、普段着をまとい、場合によってはネクタイまで結んでしまう破目になった。いわばこれも成行きである。

この退屈な長講一席を終わった私の感概は、一ジャーナリストの端くれとして、新聞でいえば、これは普通の日刊紙でなくて、業界紙なみの形だったという結論をかみしめている。(ちと新聞人の女人的感觸だが……)

さて、つい余計な無駄口を書いてしま

ったが、これからこの号と次号につづく二回分のまとめは、歩いてきたストーリーからのこぼれ話の資料雑記である。本稿といわば前号からの延長なので、以下敬称を省かせて頂く。

大阪の高商予科(明治二十八年ごろ)にいたころ、路郎は尺八も熱心に習っていた。尺八の都山流の流祖中尾都山の死を悼む記事に路郎はこう書いている。

〔前略〕実は私は都山師の古い弟子で、明治三十七、八年頃だったか、都山師が旧難波橋筋の今橋を西へ這入った南側(北側は鴻池邸、東隣りは鴻池銀行)で尺八指南をされていたころに入門している。大げさに云えば、いささか前歯が飛び出し、右親指のかっこうが変型になったほど吹きまくったものである。

★その頃は玄関が稽古所だった。まだ譜本が発行されていなかったの、習うだけずつ、師が半紙に譜を書いて渡されたものだ。譜が少しずつ溜ってゆくのが習う方にとっては、とても魅力だった。その頃玄関番をしていた上田と云う少年が、

後年上田流の流祖となったのである。

★私が高商予科にいたころのことで、柔道の寒稽古へ出かける時でも、尺八を携帯することを忘れなかった。出入橋の学校まで、六キロほどあったので、夜半の三時に家を出て五時に学校へ着き、まだ仄暗いころから八時ごろまでドタンバタンをやり、その合い間合い間には尺八の吹奏をやったものだ。それから井戸水をかぶり、お粥で腹をふくらませ、九時から授業を受けたのであった〔不確定の記憶、昭37・10「川柳雑誌」No.425〕

筆者はこの古い川雑のナンバーを眼にして、その昔、筆者とさしの路郎酔談で「わしのアゴの大きいのは、尺八もやったからだよ」

の一口があったのを思い出した。

「先生の上あごの大きいことは、大阪警察病院の歯科の患者の三人のうちの一人であるそうなど(司会の上田翠光が一編者註)素ッぱ抜く。先生以外の二人と云うのは講談師旭堂南陵師と、今はなき名優実川延若丈とであるそう。あとで先生

に、アノ話はホントですかとお聞きしたら「俣夫の足が発達するようなものさ」と云つて否定はされなかつた。柳界のため幾十年の獅子吼がそうさせたのであらう」(文化は輝く 壽像贈呈の式典——川柳生活五十年を前にして——戸田古方、昭26・12「川柳雑誌」No.295)

獅子吼もさりながら、アゴの強さの初手はどうやら尺八に起因するようだ。

——南無日車さよならとも云わなんだ

路郎

昭和三十五年一月十日路郎は、かつての日の遠いむかしの盟友川上日車の終焉の地、近江八幡市を訪れている。随行したのは、岩崎愛二、正本水客、橋高薫風、不二田二三夫、久米奈良子、林宏子の六人。この訪問の模様は、「川柳雑誌」(No.393)に要領よく不二田二三夫がまとめている。

川上日車については、本稿にも詳報した通りだが、死去したのは一行が訪れた前年の十一月九日である。三十三年に中

風を病み、実妹豊さんに見守られて、その不遇の生涯を閉じた。七十二歳。

日車の晩年は、こと夫人とも別居し郷土史の研究著述という日陰のあけくれであつたという。「葉柳」のなかに十代末の若き日の日車の写真があるが、まるで絵にかいたような美少年ぶりに愕かされたことだが、晩年の老翁と変じたその写真も、ありし日の匂うばかりの眉目清秀の面影をとどめていた。

「小島(≡六厘坊)の家は北堀江にあつて、心齋橋北詰西側に小島洋服店陳列所を出していた。厚司にそろばんという六厘坊君や日車君らと私(≡路郎)もその倉庫の中で句会を催していたほどの熱心さでした。その後、六厘坊君が結核で魚崎へ転地療養に行ったときなど、さびしかりうと、日車君は六厘坊君と起居をともにして友情の厚さを示したものでした」

「翁の奇行の一つとしてこんな話もある。編集会議を南地一流のお茶屋でやり、きれいでこの芸妓をときには二十人も侍べらし、そこで次号の企画をし、文学を語

り、川柳発展に心をくだくのだが、せっかく呼んだ芸妓はほつたらかして、呼ばれたほうの芸妓は芸妓で仕事のじやまをしてはと、すこし離れた後方で勝手なおしやべりに余念がない。成駒屋がどうの、河内屋がどうのと厲治郎や延若の話をしておれば花がついてるといふ風変りな散財であつた。つまり一つの座敷で、編集会議をする数人の一団のかたまりの後方に、二十人ものきれいでこの一団が別々にいたわけである。この芸妓衆の一団を屏風とよばれていたそうである。脂粉ただよふ女人群屏風の前で柳談を咲かせた、このデラックス編集会議を、

「よき時代の、よき人たちよ」

とは愛二氏の明治への郷愁であろうか」(日車翁終焉の地を訪ねて、昭35・2「川柳雑誌」No.393)

六厘坊と路郎は同じ歳で、日車がこの二人よりも一歳年長だった。明治も末の新しい川柳をささえたこの三羽鳥、しかし、三人のリーダー格は六厘坊で、句はもとよりその人格についても路郎は極めて

大きく影響されていたことは否定できない。

「井上薊花坊さんの記憶中の六厘坊をよみました、十四歳ぐらいの少年にしては、句が大変おとなびています。そのころの句風からすればたしかに尖端を行く天才児だったのでしよう。薊花坊さんの六厘坊の記事の中に新派歌人と謝野夫婦を大将とせる明星派が芝居をするというをきいて六厘坊は

- 鉄幹が貢晶子がおこんなり 六厘坊
 - 新派の歌に倦み珍派の芝居なり 同
 - 馬の足になるは地方の誌友なり 同
 - はるかに引幕を贈る六号活字連 同
 - 文士劇韻朗讀で幕を開け 同
- とからかったそうです」（霞乃書簡）

堀口堯人が「川柳雑誌・古稀特集」（昭32・7、No362）で、わるさ帖から「鬼才路郎の句風」と題し、大正初期の路郎作品を十句とりあげている。若き日の路郎作品の素地を物語るものとして興味深いので、この名文を失礼ながら要約して採

録させて貰うことにする。

堯人のいう「わるさ帖」とは「その人すら忘れていよう古い作品を、ひそかにひかえておいて、あんたにはこんな句がありますよ」と、びつくりさせて喜ぶくせがある。わるさ帖と名付けている」（以下略）という次第。

氣短かに驥を取つて若旦那

大正二年の作、今の人々に、しつけ、がわかるであろうか。

立話宿替をした事も言ひ

先生の作としてはあまりに平淡なようであるが、立話の外がわやかたちを写したのでなく、話の中味をあらわして暗喩をつけた、きめのこまかいところが、わかりますかお立会。

千日を後戻りする懐手

いまの歌舞伎座のところに乗天地と称する明治趣味ゆたかなる建物があつて、（中略）これはその頃浅井五葉先生激賞の作品であるが、絵看板をちらとながめて後戻りする若き日の作者はいささか酔う

ていたのかもしれない。

思ひ切らせた箸が心中

十四字調の鋭どきに鬼才路郎のある一面が出てくる。だが、どうして、どのように、納得さしたのかしらないが、世間体や義理の重庄に対する抵抗が、たったこれだけの中に現われている。近頃こんな句風は少ない。大正三年の作。

鉛売は何処の子供か抱き起し

その頃まだ紙芝居はなかった。鉛細工はあつた。市井の風物と人情のある句、お人好し路郎が出てくる。

私生児は母の繯織と父の才

私生児の性格をチラとみせてその父母のロマンスにまでさかのぼった十七字の力はおどろくべきものである。四十五年後の今日と雖も通用する作品である。

一番の渡しを渡る豆紋

山崎と水無瀬宮との中間の淀川堤から出る渡し船は今でもやっている。中州で一つべん乗りかえて、再び舟にのらねばならぬ。この中州は谷崎潤一郎の小説「声刈」によつて有名であるが、サイクリング

流行の今日、たづねる人もあるまい。むかいは橋本である。仮の小橋を渡れば遊女町のまん中に出る。以前は、この渡船でわたつて一夜の夢をむすんだ若い衆が、ふたたび船の中の人となり、土堤の遊女とさぬぎぬの別れをおしむありさまは、珍しくもなかつた。

その時の頬冠りの豆絞を詠んだものかどうかはしらない。大阪松島遊廓も川に面した家があつたから、そこらあたりの早朝の風景であつたかもしれない。どちらにしても路郎先生が若かつたことだけはたしかである。

履歴書に楷書で書くも久し振り

大正四年の作。(紙数がない、あと略筆者)

粉煙草にいゝ智慧の出る筈もなし

さざみと言えば、刻み煙草のこと、(中略) 刻み煙草ものこりすくなくなれば粉ばかりになる。火付もわるいし煙管もつまる。何だかわびしい気持がする。

抱車夫先の女房が逢ひに来る

今の自家用自動車運転手、昔は人力車

が多かつた。その俵夫には極道者も少くなかつた。捨てたのか、別れたのか、離れたのか、そのいきさつは、わからないが、逢ひに来たのは、未練か、金か。複雑な人生内容は、泉鏡花に書いてもらつたらはつきりするかもしれない。

これ等はいずれも大正初期の作品であるが、どうしても明治の匂いがする。しかも、それぞれの作品にしっくりした情緒が、感じられるのは、単に私のよき時代への感傷のみであろうか。それとも路郎先生の人情味がこもっているからであろうか。

麻生路郎物語

(29)

— 葎乃書簡ダイジエスト —

「私が、川柳というものにそもそも関心を持ち始めたのは、昭和のうんと始めの頃で、ある寒い冬の夜、今、伏見町にある、『与太呂』が新町でやつていた頃、麻生路郎、多喜健一、高尾楓陰と私が、ふぐをつ

ついた時に始まる。その時、路郎先生大いによつばらい、興到り、短冊、色紙を買いにやつて、随分書きなぐつたものだ。それでも足らぬか、ついに、『与太呂』主人のカツポウ衣の背中を、こちらに向かせて『酒ごろりとり大空の心かも』とやつつけてしまつた。

今年の冬は、『与太呂』に出かける機会が比較的多かつたが、いつかも、主人が、当時をじゅつ懐して、カツポウ衣は、わたらのフロツクコートだす。あたり前やつたら、カツとしまんねんけど、何やら、やつぱりあの人のえらさがピンときて、じつとされるままにされてしまいましたん



雜誌奉還の年

(昭和18年・奈良公園で麻生葎乃先生)

やと云つていた」(路郎を語る)岩崎愛二、昭
28・5「川柳雑誌」No.312

路郎と酒は切り離せない。しかし、本稿
連載以前に、路郎忌にちなみ「路郎と酒」
と題しくわしく書いたので割愛した。こ
こにとりあげた話は、その酒の話にとり
あげていなかったたので、代表的本稿での
酒の上の路郎とみて採用した。

この種の路郎のゴシップ的挿話は数限
りなくあるわけだが、枚挙に暇のないこ
とになるので端折る。

この稿がいよいよ終章に入ったこの段
階で葭乃夫書簡の名をもつて、ふんだん
に活用させて貰った感謝の意味合いもあ
つて葭乃夫人の書信で、有終の美を飾ら
せてもらうことにする。

「高島易断の曆を覗くと、八白の女と
四緑の男では相性がよくないそうだ。悪
妻だとも書いてある。

葭乃は長流の水で、私は霹靂の火だそ
うだ。長流の水はスローモーションで、
悠々と流れて末は大海にそそぐ。霹靂の
火は雷鳴の時のあの峻烈な光を放つ火で

ある。本来火は水に消されるが、霹靂の火
は水には消されない。私はその昔、霹靂火
という別号を用いていることを思うと、
そういうことに興味をもっていたらしい
が、それがために結婚を左右されるほど
易に頼っていたわけではない。

結婚後の葭乃の句に、

夕立は小気味よし君が叱咤も

というのがあつて、私の性格の霹靂の火
を一時的に激げしい夕立に比しているの
もおおましい。ここが長流の水の悠々
たるよさであろう。たとえ悪妻であつた
としても私たちの分身を九人までも儲
け、五十年もの永い歳月を、二人三脚でゴ
ール近くにまでやつて来たのであるか
ら、今更異議を申し立てる筋合いのもの
ではあるまい」(妻を語る)(二)路郎、昭39・
5「川柳雑誌」No.444

この易は路郎にとっては甚だ妙という
べきである。水にも消えないいかづちの
火のごとき四緑の男に、この長江の水の
如き八白の女は、悪女どころか理想的良
妻であつたはずである。世に相縁奇縁と

いう言葉があるが、この夫婦にとつては、
これがピッタリする。

箸にも棒にもかからぬ川柳という得体
の知れぬ化物に魅入られて、その生涯を
賭け、貧窮と病苦と子供地獄に責めさい
なまれたこの夫婦の生活を支え切つたも
のは、この型破りの伴侶の力にあつたこ
とを、この変り者の亭主は果して知るや、
知らずや。

堺の豪商、河盛仁平の嫡男と生まれな
がら、母と妻の折合いの悪さをみかねて
家を捨てた葭乃の父、彦三郎は間もなく
その愛妻を失つた。葭乃六歳の時で、それ
以後、彼は三十になるやならずで、生涯や
もめ暮しに入った。

「父は慶応二年の生れで、人には寛大、
おのれには厳しい人でした。生活の立居
振舞も誠に厳しい人で、二時に帰るとい
えばきつちりその時間に戻り、脱いだ下
駄も右左きつちり揃え、机の上、抽出の文
房具類はいつも整然として整頓されてい
ました。(中略)路郎ときたら、一度家を
出たら何時御帰還になるやら、鉄砲玉と

いうニツクネームがありました。私も眠たければサツサと寝てしまいます。路郎が夜更けに帰ってきて、私が知らねば父が戸をあけにいくが、何一つ文句をいわぬ父ですので「いっぺんに酔いがさめる」と路郎がいつていました。こんな性格のちがう人間が同じ屋根の下にいて、よくトラブルが起ころぬことだと不思議でした。(中略)私は感情を素直に表現できない女なんです。うれしいのやら悲しいのやらさっぱりわからぬ人間に出来ていません。だから喧嘩の相手にならないのです。いっぺんでもよい花火の散るようなけんかがしたかったらうと遅ればせながら路郎の気持ちを読んでいます」

「私のペンバル」という愛称を頂戴した筆者あての葎乃書簡は、文箱二杯に溢れるほどだが、本稿の随処に活用させて貰ったもの。まだまだ馥郁たる玉章は山のごとし。支障なきところをピックアップしてお別れの謝辞にかえる。

「いつか川柳塔へ、告白の巻と題して禁

酒を宣言したように思うのですが、相変らず左利きの喜ぶ品が届きますので、どうしたことかと考えてみましたら、正月の朱塗りの盃にも未練がある。九谷の猪口にも愛着があると文章を結んでいるので、折角の禁酒の宣言もすっかり帳消しになって終っているのです。これからは実行のできぬことは大層にいわぬことにして、からだの事も考え折にふれて少々たしなむでいます。然しアートの云うように二、三杯ではおさまりません。まあ二合が丁度よいところでございましょう。

路郎は五才で五勺ばかり飲んだそうですが、私は八才位の時にお酒の移り香のある盃で水を飲むのが好きでした」

「昔千日前に見世物小屋が軒を並べていた頃、娘浄瑠璃の小屋がありました。上下をつけた若い娘さんが、入りかわり立ちかわり房の垂れ下った黒塗りの見台へ身構えるのです。

その小屋へ毎日のようにくる常連がありました。そのおっさん達を『どうする

連』と呼んでいました。題したものはみんな、なじみの深いものばかりでした。『朝顔日記大井川の段』に『石になったたる松浦渦、ひれ振る山のかなしみも……』という文句があります。

これは松浦佐用姫という美女が契りを結んだ男の舟出に別れを惜しみ、領巾(ひれ)振りながら悲しみのあまり石になったという伝説によります。そんなことを知っていると思われなにかみしもの娘さんが、見台へ両手をそえて伸び上りながら「ひれ振る」と声を張り上げる一瞬間に「待ってました」と大向うどうする連のおっさんの声がかかるのです。(中略)しかし、子育てのころの私には、そんな想い出も夢幻に等しく、それどころかいつべんゆつくり御飯をたべたい、ぐつすりと思いたいそれはつかかりの二等兵の生活でした。それもいつか遠い昔になりました。

—タイムイズマネー 鯛やいてるまの読書

葎乃

—寶石も愚痴も地上に舞う塵埃ほこり

霞乃

「『ふあうすと』に掲載された堀口塊人様の『南北をめぐる』は、忘れていた人が出てくるので興味深く読みました。南北先生の玉屋町のお宅へは私もちよいちよいお邪魔しました。その時に頂いた色紙は『夕霧伊左衛門の紙子姿』『暫』『八重垣姫』でありました。

先生の画筆のさが色紙の上をすべるとみれば、三枚位の色紙は電光石火でした。

当時の柳人五、六人程で千日前の写真屋でシャシンを撮ったことがあります。それがある日番傘に出たことがあります。不二田一三夫さんが私にそれを見せてくれました。私は桃割れに結うていました。その中に緑天さんもいられました。南北先生の最初の奥さまはもの静かなやさしい方でした。その奥様のところへきていられた可愛らしい娘さんが、水府さんの最初の奥さまなのです。おふたりは仲のよいご夫婦でしたが、奥様は若くし

て御長男を残してあの世へ旅だたれました。塊人様は、あの古い時代の材料をよくも保存していられたことだと感心しています」

「このごろ眼に見えて記憶力が減退しているようです。芝居の話をしていても、ヒイキにしている役者の名がどうしても口に出てこなかったりすると、私の脳細胞のどこかが毀れてるのかしらと心配したり、失語症の初期かと案じたりします。そうなると思地でも思い出さねばすまぬ気になり、他の仕事はうわのそら、そればかり気をとられて一日たち二日たちしている和三日目にヒョッコリ思い出すことがあるのです。それは丁度、線の切れた電球を振つたらバツと灯のつくのに似ています。

こんな忘れつづけても一人居るのにはさし支えないのです。お能の面のように無表情でも傍らに人がいなければ気を使わなくてもすみます。私は声を出して笑ったことがありますから、どの位おかしいのか、またどの位うれいいのか人に

わかつて貰えないのです。

人が傍にいないければそんな気苦勞もなく裸の私でいられるのです。云いたくなければ云わないですみます。こんな気持ちでいる私の前へもし初対面の人が座ったらどうなるでしょう。きつと相手の気持ちをこわしてしまいます。それを知っている私は、なるべく人に逢い度くないのです。このごろは誰に誘われても句会へは一切出席しません。しゃべらねばならんからです。この非社交性は、父の氣質に似ています。

—この癖を捨てたら形見何もし霞乃
「貴方の柳珍堂さんの最後を読んで、なんと思い切りのよい遺言だと感心しました。

ファンの人達には、どこを捜しても柳珍堂さんの句が一句も見当たらないとなると、一寸寂しい気がしますが、句集と云うものは、毎号各柳誌へ広告しても五百冊がみんな金になるのは何年もかかります。それに加えて追悼会だの追悼号だのと物要りが続いては困るのは家族だけで

ございます。血縁だけのささやかな葬儀であつても喪主のうしろから飼犬がほそほそついていくのも私の供養でしょう。

南海電車の重役さんに、池沢楽居という川柳人がありました。この人も変りもので、路郎と親しい仲でしたのに、亡くなられたのは誰も知らなかったのです。柳珍堂さんと同じお考えであつたのでしよう。この方の短冊が「葉拙宅にありません。『川柳の眼にどの罪も美しき』というのです」

いよいよ紙数が尽きた。結びに麻生葎乃句集『福壽草』（一九五五）の玉吟多数の中から、筆者が特に感銘した句抄で飾らせて頂くことにする。

十七字我等の国語なるぞかし 葎乃
福壽草にしたがいそろかしこ

飲んでほし やめても欲しい酒をつぎ

浴槽へずらり立つたは皆わが子

* 睡蓮の如く淋しく思案せむ
さらばくと散るはずすかけ

娘まだ帯へ縫込む智慧も出ず
十合 大丸 帯一本にくたびれる

デパートを出たら灯もつき雨も降り

女さまさま猫の頭を皆持てり
明暗をうらう如き籠の火

交渉に邪魔な正直者を連れ
墓に水かけに海越え山を越え

* 「睡蓮の」の句は、『福壽草』には収録されてない。

麻生路郎物語 (30)

路郎作句語録(上)

私は常に、後進を導くのに疲になつた句は、いさぎよく捨てよと申して居ります。今その一句を捨てたところで、その詩想が、その作家から霧の如く消えてなくなるものではない。必ず他の素材を藉つ

て更に新しい句として生れて来るものであると申して居ります。そして私自身句を捨てるに用捨しないのであります。しかし、その詩想を再び生かすことには随分と苦心をいたします。作つては捨て、作つては捨て、遂に七年間を要した一句さへあるのであります。

羊羹のごでもめてる老夫婦(路郎)の句がそれであります。葎乃の* 蔓珠沙華の句にしても、幾ら作つても、私が捨てるので遂に三年餘を費して一句を得たのであります。作家は潔く句を捨てることによつて一進歩を來たすものであります。徒らに自己の句に愛着を持つことは、そこに墮落の一步があることを知らねばなりません。心すべきであります。(「横川柳講座(二) 没になつた句は潔く捨てよ」、昭21・9「川柳雑誌」No241)

豆秋君の一番優れた処は飄逸さ、脱俗さにあつて四角のものを三角の目で見ていふような処に味が出ていふのであるが、一つやりぞこなうと誠に変哲もない

句、馳け出しとあんまり差のない句となつてゐることが往々にしてある。これは



北国川柳大会（昭和32年9月8日（日））金沢市北国新聞社の講堂で講演する路郎先生

亡くなつた浅井五葉が写生句の名手であつたが一步やりぞこなうと、まるでゴムを噛む様な句を作つたのと同じである。一線を限界に拍手と侮蔑と隣り合つた句を作る作家である。（圓座句評、昭27・10「川柳雑誌」No305）

川柳に於ても、玄人と素人では作句態度が違わなければならぬ。川柳で玄人だと云える人は、幾人もいないかも知れないが、玄人のいないところに、その道の発展向上を期待することは木によつて魚を求めよよりも、なおむづかしいことだと私は思つてゐる。川柳に長く携つてゐるからと云つて必ずしも玄人だとは云えない。と云うのは隠居のザル碁に等しい川柳家が、そこらにいないとは云えないからである。と云つたからと云つて私は決して、玄人を尊しとし素人を卑しとしてゐるのではない。玄人は玄人としての鏝骨彫身の修業をし、素人は素人としての立場に立つて道を楽しむ態度を明らかに

すべきではないかと云いたいのである。玄人顔をしていて一向勉強しないと、素人が玄人顔をして、ノサバルのとは共に鼻持ちならぬと云うのである。

将棋の一駒動かす毎に一考又一考することは、川柳の作句に於ては推敲又推敲に当たる。碌に推敲もしないで名句の出来る筈はない。（「眼の散歩」の「将棋の対局」、

昭28・6「川柳雑誌」No313）

ある寺の魚板に

無常迅速

時不待人

と書いてあるのを思い出した。

菜根譚には

天地有万古

此身再不得

とある。私は三十年前に、「一句を遣せ」と書いたが、もうその一句が出来たであらうか。（「川柳も亦然り」、昭28・12「川柳雑誌」No319）

私は時々碁を打つ。私はどツちかと云うと勝負には強い方であるが、勝負は問題にしていない。それがツバぜり合いのような試合であり、どツかで、非常に妙味のある局面が見られれば、たとえ一敗地にまみれたところで、問題ではないと云うのである。

川柳に於ても、同じようなことが云えると思う。私は他人よりもまい句を作ろうなどと云う野望を持つたことは一度もない。ただ川柳一ト筋に溶け込んで、自分の思想に出来るだけ忠実であるだけである。従つて表現技巧に引きずられて自分の思想から埒外に出ることをむしろ怖れているのである。

私の句は寂しい。しかしムリに派手な句を作ろうとしないのはそこにある。一貫して自分の性格が流れていることを一路目指しているのである。(私の目指すも
「」、昭29・2「川柳雑誌」No321)

川柳とは斯んなものであると云う、或

る型にあて嵌めて作句している作家の作品には巧拙は別として、文人画で先生のお手本を忠実に模写している作家と大して違わないと思う。

○
アマチュアにはアマチュアの世界がある筈である。徒らに川柳の概念に囚われないで、自由に、大胆に、個性を生かした作品を創つた方が、作家も愉快ではないかと思う。

先生のお手本と形の上で多少のズレがあつても、自由に、大胆に筆を運んだ絵の方に、アマチュアらしくて好感が持てるとしたら、川柳も亦そうだと云えないことはないでしょう。イヤそうあつて欲しいと思う。そこにこそ真に川柳することの大きな喜びがあるのだと思う。(樂しんで自由に作ること、昭29・7「川柳雑誌」No326)

私のかんりの厳選をもとせず、幾十年の間、句を寄せられている作家のあつたことは私の大きな喜びである。そう云

う作家は、もう抜けるとか、抜けぬとか云う境地から脱して、作らずにはいられないから作り、作つたから私のところへ寄せられるのであるらしい。そんな作家の句を見ていると、生活環境と、その心境の動揺によつて、句の水準が高くもなつたり低くもなつたりしているようである。しかしそうした作家の句には、どツかに筋金が這入つているように思われる。

時には新進作家に押されているように思える時もないことはないが、それは新進よりも時に、抜ける句が尠ないと云うだけである。たとえ句が尠くとも、怠けな限りは、句のデグリーはある水準を下らない。これは全く年季の力に外ならないと私は思っている。私は斯うした作家と句を透して思想の交流を楽しんでいる。いつまでも健在であつて欲しい。(作家にII、昭29・3「川柳雑誌」No322)

川柳を作りはじめた頃には、作句に対して、非常な情熱をそそぐものであるこ

とは人のよく知るところであるが、初心者の悲しさは力の不足から、なか／＼佳吟を生むことが出来ない。しかし、作句に

対する情熱さえ失わなければ力の方は勉強により、歳月と共にゲン／＼加つてゆくものである。ソコでソロ／＼佳吟が生れて来る。他から少し認められるような

佳吟が生れると、更に作句に対する情熱が燃える。その情熱が、更に佳吟を生む力を培養する。斯くして押しも押されぬ作家になるのであるが、こゝで多くの作家は中たるみが来るものである。中たるみが来ればそれでおしまいである。と云うのは、熱も力も逆コースをたどりは

じめるからである。所謂大家と云われている人たちでも、作句に情熱を失えば、その句作力が眼に見えて低下することは、大家であるからと云つて例外ではない。

多年の作句技巧で多少胡麻化することは出来ても、要するにそれは胡麻化しの句で、情熱を喪失した作品に迫真力があるう筈がない。斯くしてカオの大家のみじめさ

を味わ、されるのであつて作家として堪えられることではない。

私が還暦を迎えた時に、

六十一まだ情熱は燃えに燃え

と云う句を吐いて、自己反省の資としたのも、情熱の涸渇をおそれたのに外ならぬ。

情熱は熔鉱炉の火である。決して消してはならない。イヤ、大いに燃やさねばならない。永遠に燃やし続けねばならない。そこに短詩型川柳人としての生命があるのである。(情熱、昭29・12「川柳雑誌」No.3)

松井先生の方を見ると、静かに茶をたて、いられるが、私たちが常に茶席の奥さんやお嬢さんから、しば／＼見せられるような、いかにも茶をたて、いますというような手つきではなかつた。すべて至極平易に運ばれていて、少しの不自然さもないのであつた。川柳でも、川柳らしい川柳を作ろうとする人の川柳には何ん

となく臭さ味があるが、その人の生活から自然にじみ出たような作品にはイヤ味というものが無い。私たちは特にうまい句を作ろうなどと思わず、常に川柳に溶け込むという心がけが必要であろう。そこまできかねばその道に這入つたとは云えないのではないか。(窓口談義 自然のよき、昭30・8「川柳雑誌」No.339)

全国の柳誌を見渡すと、投句マニアのごきげん伺がいに雑誌を出しているようなものを見受けるが、せめて柳誌を出す以上は、出すだけのメリットを持ちたいものである。どこの雑誌か判らぬようなものもあるが、もつと地方色を出してもらいたいし、句の上の主義主張も堅持する必要があるし、文学としての川柳の向上にも意を用いてもらいたいと思う。その点、忘れても青竜刀君の云い草ではないが、紙とインキのムダ使いはしないことである。(柳樽室、昭40・1「川柳雑誌」No.4)

○葭乃の句に、

うそうそうそ木魚の音もそう響く

と、いうのがある。葭乃の個性がよく出て
いる。

○巧い句を作ろう——と、アタマをひ
ねって、ひねりあげた句が、よりによつて
拙い句になっている場合がある。その句
には作為が巾をさかしているからだ。

○前衛派とか称する人たちの句に消化
不良の句が多いのは狭い部屋の中で、ナ
ギナタを振り廻わしている感が深い。自
分にふさわしい武器を早く発見し、自分
らしい句を作ることである。

○中間派と称している人はいないが、
他派からそう目されている人たちの恐る
べき敵はむしろ悠々として型の如き句を
作ることである。従来の花の如く、美し
くとも、えてして生気に欠けるからであ
る。

○本格川柳を自称する人たちの句は句
そのものが本格でなく、昔、薬屋が本家・
元祖を唯一の守本尊としたように、本格

という文字に傾倒しているようにしか思
えぬ。論議と作品とが一致していない点
では前衛派に劣らない。社会党が一部の
労働者を代表するように本格派もそれに
似た感じがするが、どんなものであろう
か。私などはむしろ前衛派の将来性に期
待したい。

○没句を気にする人がいる。没にした
人を、とやかくと批判や、非難をする人が
いる。何故没になったかを真ッ先に検討
して見るべきではなからうか。

○同人雑誌で刊行される、自選句集が
大変歓迎されるようであるが、それは雑
誌経営者が没句の再生にお辞儀するのワ
ザに外ならない。没にならないのを唯一
の頼みにワンサと詰めかけるのである。

○作句は趣味であっても選は慰さみに
すべきものではなく厳肅に慎重に真剣に
すべきものである。他人の優れた労作を
ヤミからヤミに葬むることは恐るべき罪
悪である。

○選者無用論を称える人がいる。その

意気大いに壮なりと言えよう。そうした
人には一人で一冊誌の刊行をすすめた
い。ただしハガキ刊行はダメ。(「新春雑感・
嘘其他」、昭38・1「川柳雑誌」No.428)

* (曼珠沙華子の命日に毒々し) の句の
ことか。

麻生路郎物語 (31) 最終回
——路郎作句語録(下)——



筆者

○……選者が自分の好きな句だけをと
るのはよくない。個性のある句なら少々

キズがあつてもとつてやる。その人であれば作れない句があるものだ。それを伸ばしてやるのである。私は句を選ぶよ
り人を選ぶ。そうすることによつてかつ
ての私の門下で川柳界の一茶といわれた
須崎豆秋君のような作家が出てくる。

○……近ごろの川柳家の川柳は、笑い
から遠ざかつている。これはよくない。し
かしこれも時代といえよう。なぜならば
ほんとに心から笑えない時代だからだ。
なんでもスピード化してしまつてい
る。

あんなオートバイのようなものに乗つて
は、周囲が見えないのはあたりまえじゃ
ないか。笑いたくても笑う余地がない。

○……ガガーリンは「地球は青かつた」
といつたが、あれは私にも一つの感激と
なつた。もし二番目のだれかが行つて「地
球は赤かつた」というかも知れないし、三
番目の人は「黄色かつた」というかも知
れない。このように川柳家は人の感じない
ものを感じてつかまえないければいけない。
○……川柳一筋といつたが、一筋にも

いろいろある。太い、短い、細い、長い、
価値のあるもの、ないもの、まっすぐなも
の、曲がつているもの等々。それをいかに
やつていくか。自己の生活、人間を作る
ことに考えをおよぼしたら川柳も本物に
なる。

○……川柳は人間をトウヤする手段
だ。句の上に自分の悪い点を出してみせ
る。「君もそうか、おれもだ」と同じよう
に人間同士が胸を打たれる。お互いに反
省していい人間になるようにすべきだ。

○……人に通じない句なら作る必要は
ない。自分のアクを出しきると人の句に
なる。いい句を作つて共鳴し合うとい
うことが大切だ。(北方の感激師を青森に迎え
て)より、昭和37年7月22日、青森県川柳大会の
講演要旨・整理工藤甲吉、昭37・9「川柳雑誌」No
424)

川柳を創るのには発見ということが大
事だ。勿論それだけですぐれた句が出来
る訳ではないが、新しいものを見つけ

ることは必要条件の一つだと云うのであ
る。

それは絶えず奇抜なものを見つけると
云う意味ではない。そこらにゴロゴロし
ているものでもいい。誰もが、まだ気づか
ないものを発見しろと云うのだ。

はじめて、海鼠を食つた人のように、は
じめて西瓜を割つて、あの真紅の中味を
食つた人のように、社会から、人のアタマ
の中から、誰もが発見しなかつたものを
発見しろと云うのだ。

発見ということとは、なかなか難しいこ
ともあるが、案外やさしい場合もある。
本人が少しも気づかないのに、第三者が
何んの苦もなく発見する場合もある。(新
春・窓口談義)、昭36・1「川柳雑誌」No404

私の門下の若い川柳人が別に何々記念
というのでなく、自己の作品を世に問う
ために勇敢にも句集に踏み切つた。そし
てハツラツたる作品が好評を博し、我社
の刊行した柳書中で、一年間の売上率で

はトップを切ったのであった。この青年

の魂の顯現」、昭38・11「川柳雑誌」No.438)

は、既に第二集刊行に向つて前進を開始しているのであるが、彼曰く、「私の母は私の第二句集刊行の一助にと、毎月五千円宛貯金をはじめました。素派らしい句がたまるまでに、刊行費の方が先に行くのではないかと心配しています」というのである。私は思わず熱い涙がまぶたを濡らした。この母の愛情、この子の幸福、川柳人は多いが、そうした親子なんて、そうザラにあるものではなからう。句を作ること、句会へ行くことさえも、親が反対したり、妻が不満だったりする話はチョイチョイ聞かすが、この青年のような話は、永い川柳生活をしている私にとつても、

新聞が時事吟を募集するのはいいが、川柳になつてゐるのは雨夜の星ぐらいで、選者泣かせに過ぎない。一般から募集するより選者に作らせたらどんなものがあるう。

はじめてのことである。

昔、大正日日新聞で、半文銭が素晴らしき時事吟を發表したことがあるが、新聞へ投句するアマチュア川柳人にそんな放れワザは出来っこない。私も大阪新聞で二カ月間、山陽新聞で三カ年ほど、毎日放送で半カ年余り時事式のものを作らされたことがあるが、予想外にむずかしいものだ。

句集を何等かの記念に刊行する時代はもう過ぎたようだ。私は必ずしも記念出版を否定してゐるのではないが、句集はその人の環境によつて、経済力のゆるす範囲に於て、自由に刊行するのがいいのではないかと思う。(「窓口談義」句集は作家

締切りまぎわの時事では、事件の予測までして作らねばニュース性を失うので、作家であり記者である素質のあるものでなければ、素晴らしい作品は出来ないとと思う。すくなくとも横山泰三氏の社会戯評を向うに廻わして闘うほどの時事吟でなければ、時事吟としての価値はな

いのである。

ある新聞記者が自分の社の新聞の時事をみて、こんなのが川柳ですかと、ついでに川柳まで軽蔑していたが、尤もだと思ふ。(「新聞と時事吟」、昭38・3「川柳雑誌」No.422)

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

の句を、

俺に似よ俺に似るなと子を育て。

と、あちこちに引用して呉れたものだ。こんな具合に不用意に改作されては褒めてくれていても、おかしな苦笑しないではいられない。他人の句を引用する場合には必ず、原句を照合して見るだけの用意をしないと、エチケツトに外されるだけだ。論理が徹底しないことになる。

私の「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」の句はよく、引用されるが、近ごろでは新仮名遣いで「思ひ」を「思い」と書くことにしているが、揮毫の場合には「思ひ」や

「おもひ」と書くこともある。最近、「親に似よ親に似るなと子を思い」と引用された柳人があつたが、ここまで来ると滑稽だ。

うちの雑誌への寄稿であるなら訂正も出来るし、ワハハハでも済むが、他誌の場合、編集者が原句を知らずに、そのまま載せたとなると、寄稿者だけの恥では済まないことになる。他人の句を引用する場合は面倒でも、一応原句の所在を調べてみるべきだ。(「窓口談義」引用句は照合を「、昭36・12「川柳雑誌」No415)

生前八十回ほど宿替した食満南北が亡くなった時に、四天王寺の本坊で告別式があつた。

その時、私は南北の霊前に向いて、甲句を二句詠んだ。その一句は、

宿替もこんどは番地ないところ

だった。告別式に列席した多くの人たちは何れも、南北に親しかつただけに、この句に接して思わず声をあげて笑つた。暫

らくは南北の告別式らしい朗らかな空気が漂つた。私の句は勿論、南北の死を茶化したわけではなく、彼のために借金とりの来ない浄土の安穩を祈つたのであつた。

ところが、この句が他誌に無断で掲載されたが、誤記されてゐた。勿論、悪意で誤記されたわけでないことは判るが、作者の私にとっては遺憾であつた。あとで聞いたら、柳人でない人が、短冊から写したとのことであつたが、編集者の不用意はまぬがれない。その後、南北の句碑建設の時にも、同志を募る一文の中にも引用されたが、これ又誤記されてゐた。その誤記は他誌に誤記された句とも違つてゐた。僅々十七音字に身も削る思いで一字もゆるがせにしない短詩人の心はそうした、心ない人々によつてたやすく踏みにじられてしまつたのである。

敢て、私の句が名句だと主張してゐるのではない。私の句にしても、誰の句にしても、その人、その人の血の流れた句を、心ない人々によつて、粗末に扱われるこ

とを心外に思うものである。(「窓口談義」引用句は照合を「、昭36・12「川柳雑誌」No415)

現在日本の柳界をリードしてゐる人達の大半は年齢的に云つて還暦前後である。齡い六十、頭に霜をいただいてなお、川柳々と叫び続けている点はいかにも悲壯であるが、それ等の指導者のすべてが、果して思想的に、創作的に、飛躍しているかどうかは疑はしい。

(中略)

現在の柳界をリードする人達にしても決して経済的保証があつた訳ではない。イヤ現在でも、なお大半は経済的保証がある訳ではない。しかし止むに止まれぬ川柳創作の魅力は、遂に柳界の指導的立場に立たざるを得なくなつたのであるし、又立たされたのである。

それだけに彼等の努力が、——それ自体絶大の努力を拂つてゐると思つたとしても、全柳界から観て、思想的に、創作的に微々たる漸進にすぎないことはいな

めないのである。靜に回顧する時、或る者は思想的にも創作的にも、一時は熱狂的に革新を称えたこともあるにはあるが、兎糞の革新は單に異を樹て、一時柳界を騒がし、兄弟かきにせめぐの醜態を演じたにすぎなかつた。或る者は作品第一主義をとらず、單に党派的、集團的勢力で、僅に虚名を勝ち得ていたにすぎない。今日、指導者の立場に立つてみると自負する人達の中にも、この種の人々の墮力的な存在であつたり、又偶像的存在であつたりする人達もいないとは云えない。

私はそうした人々を徒らにむちうちつことを以て拙文の本旨とするものではない。むしろ、そうした人達にしても、彼等は彼等として柳界に貢献? をしたもので、又しつゝ、あるものと思考していることを思うものである。しかしながら彼等の思考する柳界への活動は火災の際、風下へ荷物を運ぶようなものであつて、よしや彼等自体どんなに懸命であつても、何等柳界にプラスするものでないことは

云つておきたいのである。(「窓口」昭27・2「川柳雜誌」No297)

★川柳の世界は芸術的に観てどれだけのびたか。ふりかえつてじくじたるものはないか。

★しかし、親が子を思うような眼で観れば、全国の柳誌のそれぞれが、幾らか上向けになつたように思う。中には思いがけなく背たけがのびたような感じのするものもないことはないが、それが果して今後どれだけのびることか疑わしい。

★ここ数年を顧みると、明治から大正へかけて活躍をほしいままにしていたベテランが、秋の落葉のように散つて行つた。それは私たちにとって無限の淋びしさを感ぜさせるが、自然の法則は私たちの世界にだけ甘いわけではないからあきらめるより仕方があるまい。

★とりのこされた私達は残照として最後の努力を惜しまず、次代への礎石を築かねばならないし、これをうけ継ぐ若

い人たちは真冬の厳しさに、たえしのんで春の芽生えに、躍進又躍進を続けてもらいたいと思う。

★私たちは若い人たちの、奔馬のような躍進を期待すると同時に、行き過ぎだと考えたら、これまた引き帰えずに、勇敢であることをのぞむものである。

★芸術の世界に於ける足踏みは禁中であることを、歳末にあたつて特に警告したい。(歳末に、「昭35・12」川柳雜誌No403)

麻生路郎がその柳魂をこめて世に贈つた、「川柳雜誌」は、四百六十号の麻生路郎追悼号をもつて終結するが、その全巻を貫徹した路郎作句語録は、今なお熱く鋭くわれわれの胸に迫るものがある。この情熱こもる言葉をもつて本稿を完結させた。多年にわたる御愛読を心から深謝したい。

(おわり)

麻生路郎の人と作品



路郎氏の顔

柴舟寫

『漫画漫文 川柳ふところ手』の口絵より、
柴谷柴舟スケッチ

麻生路郎論

福田 山雨樓

柄井八右衛門の文献が爪の垢程しか残つてゐない日本の柳壇にとつて、今日の聖代は何といふ恵まれた事でありませう。柳誌五十幾種、著の轉んだ事まで載つてゐるものもあります。

全く今日程結社を通じ、印刷を通じ、噂を通じて柳人の消息が分明されて來た事はありません。創作、評論、感想、隨筆は申すもがなでありまして、總ゆる角度から川柳家の全貌が物語られつゝあるのであります。

で、人物評論といつた試みも殆ど月並的にデビューしてゐるのであります。又かといふ感じをもつ場合が多いやうであります。うつかり書いて樂屋落の謗を受けるやうな事は慎しまねばならぬと思つてゐますが、人物評論の重要さは飽くまで忘れたくないと思ひます。

亡くなつた著名川柳家の評傳などもどしどし現はれて來さうなものです。その實皆無の有様であります。僅かに句集の隅に故人の履歷書を寫した程度しか出てゐません。これは川柳家の努力と奮起が足りぬのだと思ひます。

わが麻生路郎先生は過去を語るのが嫌ひであります。先生は何時までも子どものやうにピチ／＼してゐられます。青年のやうな情熱がその血脈の中に漲つて居られます。將來僕は先生の評傳を畢生の事業として完成したいと思つてゐますが、茲で先生の過去を語る意思はありません。又その主張や柳論や所説を紹介する事も避けます。それ等は毎月の『川柳雜誌』を見て頂けば直ぐ解る事でありませう。

僕は先生を通じて、先輩といふものを何う見るべきかといふ問題に觸れて見たいと思ふのであります。尤も抽象論は出来るだけ避けて事實に即した生々しい印象を取材にしたいと思ひます。

○ — 月評會の或る夜の事でありました。僕の述べた柳論が端なくも論議の中心となつて、相當緊張した應酬が重ねられた際、人氣者のB氏は幾分空氣を和らげたいといふ考もあつたものと見えて、凡そ文學と縁のない世間話のやうな事を言つて、彼の所説を補つたのであります。ところが路郎先生はこれを黙過されないのであるのみか、坐り直してB氏を叱責し、その句評態度を難じました。僕はその太刀風に寒氣を覺えると共に、先生の言葉で小さくなつたB氏を氣の毒に思ひましたが、この事があつて以來僕は句評に眞劍味を失つてはならないとつく／＼感銘させられたのであります。

——『川柳雑誌』の或る特輯號編輯の夜の事、彌が上にも好い雑誌にしたいとの熱意に燃えて居られる路郎先生の傍で二時の音を聞いて僕は切りに眠氣を催しました。口が裂けるやうな欠伸が又しても出るのであります。編輯はでも却々捗りませんでした。倦く事を知らない先生の編輯技術工作は高段者の碁を思はず入念さで、二時も三時も見殺しにしてゐました。さうして先生は欠伸どころか、益々冴えた眼光で僕を鞭撻するのです。五時近くなつてやつと眼鼻が付きました。明日の勤務の事を言つて一先づ寝かせて頂くことにし、先生と枕をならべて眠つたのも、思へば楽しい追憶の一つであります。

でもその朝の七時、先生の床からそつと脱け出し、何食はぬ顔をして何時もの通り出勤した僕は、職務に忠實なと後で褒められた事を忘れては居りません。と同時に編輯の仕事に對する先生の熱誠さには、入墨のやうな刻印をスタンプされたのであります。

——先生と激論した事が一度あります。社中の或る同人の進退問題に就てでありました、一本氣な僕は所信のありたけを眞向から打ちまけて痛論したのであります、雄辯を以て鳴る先生には足許にも寄り付けません、到頭ぐうの音も出ぬ迄に言ひ込められ説服されてしまひました。ほんの一時間許りの心算でゐたのが、遂に四、五時間もかゝり、僕は刀折れ矢盡きた形で、足を傷ついた犬のやうにすく／＼

と歸つたのであります。

然し言ひ負けても僕は決して腹が立ちませんでした。否寧ろその強靱な男性的魅力に觸れて、明朗な快味をさへ感じたのであります。尙先生の猛烈な攻撃精神とそれを裏付ける確固たる自信力とも舌を巻いて驚いた次第であります。

○

以上三つはほんの一例にしか過ぎませんが、先生に常に接近してゐる僕がそのお近付を得てゐる故に感じた收穫なのであります。人が人に近付くのはよい事ではあります、が、やゝもするとそれが悪い結果を招く事があります。それは近付いた人のよさを見ずしてあらに眼がつくからであります。狎れ過ぎて禮節の埒を乗り越えるからであります。巨像は近づくにつれてその大が迫るのであります、一面また離れて展望することも必要であります。目の長さが三尺九寸ある奈良の大佛は、傍で仰向いて見る時初めてその巨大に三嘆しますが、高さ四七米ある大佛殿は遙か離れた關西線の車窓から眺める事によつて、益々その豪壯さに驚くのであります。

○

『川柳雑誌』にとつて橋本緑雨氏は國寶的存在であります。首と胴程の密接な關係のもとに創刊以來堅忍不拔全く献身的努力を續けて來られたのであります、抑々この緑

雨氏（當時は二柳子と號す）を見つけたのが路郎先生であります。爾來兩者は駿馬と騎手の間柄をもつて、益々相信じ相敬しつゝ、滄^かるところがありません。昔の武士は「己れを知るもの、爲めに死す」といふ氣魄を持つてゐたものですが、綠雨氏にはそれに似た心持があるやうに思ひます。人を信ずるといふことの如何に大切なかを沁々と味つたのであります。人を疑ふ事を屁とも思はぬ世の中に、現代離れのした美しい情景ではありませんか。

——路郎先生が嘗て鳴尾に住んで居られた頃、社の用事を帯びた綠雨氏は大阪の築港方面の宅から、電車に三、四度も乗換えて月の中半數以上も通はれたさうであります。それが一月や二月でなく、幾年も續いたと聞いたときに僕は思はず臉の裏が熱くなつて來ました。古い『川柳雜誌』を見る毎に、それが先生や綠雨氏の血と汗の賜である事に思はず頭が下るのであります。

その綠雨氏の熱に痛く感動されました仕事も家事も經濟も忘れ一路川柳の爲めに闘はれた路郎先生でありました。さうしてそのよりよき内助者として働き尚働きつゝ、ある綠雨氏が、如何に先生を信じ切つて居られるかは蓋し想像に難くないところでありませぬ。

——先生は他人の原稿に就ても、穴の開く程よく眼を通されませんが、自分の原稿には一層嚴格で、一字一句と雖、忽^{ゆるが}せにせず、句の選なども慎重に慎重を加へて居られます。

雜誌の編輯日が迫つて尙先生の句の選が濟まぬ時など、綠雨氏は大晦日の借金取みたいな意氣込で催促に行かれます。でも先生の慎重な選句振を信じてゐる綠雨氏は、二時間でも三時間でも傍で待つて居ます。斯うした努力は氣の短かい者には一箇月も續かぬのであります。然し又氣の長い者では、路郎先生が如何に懸命に選句して居られるかを解することも出來ますまい。先生は病氣で寢て居られる時など床の中で投句をめぐつてゐられます。

——京都から句會の歸り、先生と綠雨氏とは夜の一時過ぎ天満橋から自動車拾はれました。料金か何かの間違ひで運轉手と喧嘩が起りました。僕はこの時の噂を聞いて、先生が輕はづみをされたものと臆斷し、早速先生に手紙を出したところ、それは綠雨氏と運轉手との口論を先生が仲裁されたのだと聞いて、赤面したことがあります。先生は昔高商時代に柔道の選手をして居られたさうですから腕を揮はれたであらうと想像したのが僕の輕卒でありました。

先日キング喫茶店（先生の奥様が經營してゐられる）へ醉漢がやつて來て始末におへませんでした。恰度そこへ綠雨氏が來合はしてゐられたので、突然表へ引つぱり出してこれでも喰へとはかり鐵拳を二つ三つくらはしてやつた、と綠雨氏は朗かに語つて居られました。とは言へ綠雨氏は決して喧嘩好きではありません。正義を愛する血の氣が多

いのであります。

○ 先生は三男三女の子福者であります。この外に一男二女を儲けられました。長男のロンドン君と共に夭折されました。子供の多い事は精神的富裕であります。苦勞は尠くありません。葭乃奥様のお骨折は一通りでないとお察ししてゐるのですが、僅か三人の子に手を餘してゐる僕は、九人もの子供を育てながら東奔西走席の暖まる暇もない程川柳の爲めに盡されてゐる先生を思ふと感激の涙を催さずにはゐられません。と同時に先生に對する感服の度を深めずにはゐられません。然し一面には苦勞をして子供を育てながら川柳に精進するところに、川柳家としての本當の修行があるのではないかと考へて居ります。獨身時代に華々しく活躍した作家が、結婚し、子供が生れると何時の間にか、川柳を廢業してゆく例を餘りに多く見て居ります。然し先生の場合はこれと反比例で、子供が殖えるに従つて川柳に對する熱が加はるのですから尊い事であります。子供に對する愛が深いと共に川柳に對する熱愛が深まるといふ事は理屈を超過した、大なる意味のある事に氣付かねばならぬと思ひます。

芭蕉には子供がなかつた。一茶には度々生れた。生れたが育たなかつた。それは一茶が最も氣に病んでゐたやうであります。それだけに人間味の漲つてゐた一茶でありま

す。川柳はどうしても子供と離すことの出来ない機縁があるやうであります。

路郎先生が子供を叱つて居られるのを見た事がありません。奥様もさうであります。恐らく平素もさうであらうと思ひます。それでゐてどのお子達も素直で、天真爛漫であります。朗らかなものです。そして夫々異つた個性の芽を發揮しつゝ、すく／＼と伸びて居られます。この點誠に羨ましき限りでありまして、ともすれば手を出して傷め付ける僕などは好きお手本としてゐるところであります。

○ 路郎先生は亦筆の人であります。翻譯もされ、小説も書かれ、著書も澤山あります。又生活の爲めには色々その他の職業にもつかれましたが、矢張り先生は筆の人として最も眞價を發揮されるのであります。近來先生の筆致は老練圓熟の巧味が横溢して居られます。『川柳雜誌』五月號に出て居ります『川柳行脚、鮮満ところ／＼』など大變好評で各方面から讚辭が舞ひ込んで居ります。然しあの原稿などは態々宿屋住ひで苦心して書かれたものを、これでは餘り長くて雑誌の頁が許さぬといふので、再び書き直されたやうな次第で、その苦心は一通りのものではありません。

最近は大坂朝日、大阪毎日などの文藝欄へも度々執筆してゐられますが、將來益々この方面殊に文藝雜誌などへ書いて頂きたいと切望に堪えません。

先輩が文壇に飛躍して頂く事は、延いてわれ／＼後進の進路開拓となるばかりでなく、川柳それ自身のより正しき認識に資する所以でありまして、我々はその爲めに先輩の力をセーブして、先輩のさうした努力が容易に拂はれるやう、力添えをしなければならぬと思ひます。

○ 先生の雄辯も亦定評があります。先達も鮮満川柳行脚から歸られましてその講演會が催されましたが、堂々二時間に亘つてその所見を話されました。その中には先生の人生觀もあれば哲理もあり、ユーモアもあれば皮肉もあるといった調子で、話術の巧妙さと聲調の明快さでぐん／＼聴くものを引付けて行きました。もつと聴きたいといふ空氣が一ぱいでありましたが、時間が遅くなりましたので切り上げたのであります。

其の後川柳雜誌社例會の席上でも鮮満の話を約一時間に亘つてして頂きましたが、幾ら聞いても飽かぬ面白さと妙味に感服しました。殊に後の講演では先生の觀察が頗る行届いて、鋭敏であることに氣が付いて、流石は川柳家として鍛鍊された結果であると感嘆した次第であります。

先生は機會ある毎に川柳の講演をされ又川柳以外の講演も澤山されて来たのであります。もつと／＼先生に講演を盛んにやつて頂きたいと、その機會の多からんことを只管念ずるものであります。先生のお話は必ずそれだけの

感銘と効果を殘して居られるのであります。

○ 先生は元來強健な身體の持主であります。飽くまで男性的な氣概を包藏してゐられます。負けじ魂即ち攻撃精神に富んでゐられます。ところが先生はよく健康を害されません。それは無理をされるからであります。僕等がこの事を御注意するのであります。無理を愛さるゝ先生には仕方がないのであります。そして先生はいつも言つて居られます。

——僕は健康になる方法をよく知つてゐる。それは運動でも食物でもない。只太陽と睡眠を得ればそれでいゝ、と。全くその通りなのであります。先生はいつも二時三時に寝られるのであります。さういふ時間を最も愛されるのであります。

僕等は先生の健康を祈り、その雄飛を希ふ爲めに、尠くとも川柳に關する限りにおいては、少しでも先生の考慮を煩はさぬやう、雜念に妨げられぬやう、お互ひはお互ひの役目と分野と責務を、忠實に果さなければならぬと思ひます。これより外に道も方法もないと思ひます。

○ 思へば先生のこれまでの経路は惡戰苦闘の歴史でした。過去を語るのが嫌ひな先生ですから、それには觸れませんでした。そこには幾多の血涙を以て書き綴られてゐることは事實であります。

われ／＼は先生によつて川柳の正しき芽を育くまれました。川柳を一生の仕事だと云ふ信念を植付けられました。これから少しでも先生の爲めに、そして川柳の爲めに働かなくてはならぬと思ひます。

自分の爲めの川柳であると共に、先輩に酬ゆる爲めの川柳としても、先輩の期待に背かぬやう努力する必要がある事を銘記しなければならぬと存じます。

路郎先生を通じて我等の先輩が如何に川柳に對して、努力と犠牲を拂つて居られるか、如何に川柳の爲めに奮闘を續けて來られたかを、振返つて見ることに必要さを少しばかり述べました。

麻生先生を語る文章としては頗る斷片的でその片鱗にも觸れ得なかつたことを先生並に讀者諸兄に深くお詫する次第であります。
(昭和9・6「川柳研究」)

路郎先生の初心時代

清水 白柳

今年の七月七日が來ると、路郎先生が逝かれてから滿三年になる。その間先生のために何をしたらどうかと思うと申訳の無さに身の縮まる思いがする。あの時葎乃先生から頂いて歸つた古柳誌の中から路郎先生に關係のあつた

ものを整理しているうちに眼についた文章や句を書き抜いて置いたのが少し溜つたので年代順にまとめて見た。

路郎先生の名句は句集「旅人」に網羅されているが、先生の初心時代、或は若かりし頃の作品を読むと、あの偉大な近寄り難い嚴肅な先生にもこうした時代があつたのだという近親感が湧いてくるのである。いらぬおせっかひをするなど、あの世で苦笑して居られるかも知れないが、現在の初心者も努力次第では立派な作家になれるのだという安心感のようなものでも与えられるとしたら望外の喜びである。

川柳塔昭和四十一年一月号に、すゝ氏が「水府・千松の百句会」という一文を書かれて、路郎先生の前の雅号が「千松」であつたということにふれられて居る。そしてその文中に*1「先月は曾て天涯として知られた千松君が現れ」と当百先生が書かれた一文を引例して居られる。これによると、天涯・千松・路郎となるのだが何年に天涯を千松に変えられたのかは判らないが、*2千松から路郎に変えられたのは、明治四十四年四月頃という推定が出来る。それは「水府・千松の百句会」が同年三月十九日千松庵に於て催されているのでその時はまだ千松と言つて居られたのだが明治四十四年七月一日発行の「わだち」創刊号には麻生路郎で、作品、評論を発表し、編集後記も書いて居られるので、四月以降であろうと思う。

雅号のことについては、大正八年五月号の「絵日傘」三卷三号に興味のあるアンケートがのつているので全文を御紹介したい。

質問書

- 1 貴下が川柳に親まれました動機を簡単に。
- 2 最初に自句を掲せられました雑誌又は新聞名と其年月日と其時の句を一句。
- 3 最近御自信ある句を一句。

麻生路郎

1 明治三十七八年、自分が高商の子科に入学した時、クラスで新聞や雑誌を取った。其の中に読売新聞があった、当時読売新聞では、田能村朴念仁、後に朴山人が柳壇の選をして居られた。そして読んで見て非常に興味を感じて作句しはじめたのが川柳を作り出した動機と言えは言える。その時分には今の窪田而笑子氏も投句家の一人であった。

2 読売新聞に載ったのが始めでしょう。切抜帳とか控とかいうものを持って居ないので年月日と其時の句はどんな句であったか記憶しません。その頃から幾度も改号をしたので勿論路郎では載っていません。路郎という号を使用するようになったのは明治四十三年頃からです。

3 最近に自信のある句と言えは

上方をさして行くのが大工の子 です

大正八年四月七日

以上のようにのせられて居りますが、この他に、力好、鉄羅漢、半文銭、百樹、紋太、当百、五葉、水府、蘭華、青岸、大吉、蔦雄、久良岐、寛汀、の諸先生がのせられています。

さて路郎先生が切抜きも控えも無いと言って居られるその切抜が一枚「青柳」の二巻十号にはさんであったのである。それは「毎日柳壇」の切抜きで*3年月日は判らないが左の句がのつて居る（毎日柳壇の選者は当百先生）。

百科全書飾られた儘譲られる

千松

筆の軸噛むもうつつや物思ひ

同

惚性の飽性と見えてもう虐め

同

関西川柳社八月例会の句報は明治四十三年八月号の「青柳」二巻八号にのつている。

呼鈴の烈しさ恐る／＼出る

千松

仁丹を噛みながら書く旅日記

同

同じ例会句報が同年九月号「獅子頭」二巻九号にもある。八月十四日関西川柳社例会。

力石やう／＼にして地を離れ

千松

切れ手紙妙な事をば口走り

同

「青柳」二巻九号

募集句 題「笛」

百樹選

針の手を止める會社の笛が鳴り

千松

霧の中助けて呉れる笛がなり

同

雑吟（一人一句選）

久良岐評

土堤降りて石摺る人に散る柳

千松

関西川柳社十月例会十八日「獅子頭」二卷十一号に

別れの場琵琶の悲曲のくささり

千松

行く雲と水の流れに琵琶抱いて

同

「青柳」二卷十号

浪花ぶり

黙讀の書に敷島の灰が落ち

同

「青柳」二卷十一号

*4 嵐峡保津川に遊ぶ

大阪 麻生 千松

岩の名は竿の先にて教へられ

*5 歸阪后病を得て萩の茶屋にて静養致居候

檢温器捨てゝ寝かへり斗り打ち

同

萩の茶屋芒の中に貸家札

同

萩の茶屋萩に芒に黄昏れる

同

萩の茶屋花に三脚据え惑ひ

同

*6 紅葉狩吟行 十一月十三日 京都

温泉の道の紅葉は無駄に折取られ

千松

戻り駕紅葉の雨にぬれて来る

同

べからずを無筆は反古にしてしまひ

同

べからずの下に錢龜甲を干し

同

明石川柳社例会 十一月十日

大阪で昔名を呼ぶ人に遇ひ

千松

名を襲いでから角帯を締め

同

「獅子頭」二卷十二号

明石川柳社例会 十一月十日

改名をして欧米をこゝろざし

千松

「獅子頭」三卷一号明治四十四年一月号

関西川柳社十二月四日例会

國境に小手がざし居る様の人

千松

「青柳」三卷一号明治四十四年一月号

*7 年賀狀

ぼつべんに初手はこわく息を入れ

千松

関西川柳社新年句会 正月二十二日

友もない工女 貯金を樂める

千松

「獅子頭」三卷二号

関西川柳社新年句会 正月二十二日

藁蒲團日向に干せば牛乳の香や

千松

通帳他の工女にそねまれて

同

豆腐屋の竹筒鳴らし濡れた剩錢つり

同

「青柳」三卷二号

関西川柳社例会 二月五日

應接の盆畫に壁の生々し

千松

蟹の穴竹ざれなどの差したまゝ

同

磯傳ひ眼のとゞくまひ蟹の穴

同

「青柳」 三卷三号

*8 神戸共進會々場にて

疲れし眼 疲れし脚への風

千松

関西川柳社三月例会 三月十一日

編みさしの靴下に針錆びたまゝ

千松

超然たる處我れに似しか鼻

同

放課後の塗板に残る鼻の畫

同

物にすねたる癖父母なき身には

同

*9 三月十九日、千松庵に於て水府千松の二人百句會を開く。五十句宛發表。川柳塔の昭和四十一年一月号に既掲参照されたい。

(以下次号)

「青柳」 三卷三号

浪花ぶり

疑の晴れて短刀持ちあぐみ

千松

博士の計畫肆は遺稿を争ひて

同

諧謔を交へて博士一講話

同

*10 雅号千松としての句は以上までしか手許にない。

番傘昭和四十年八月号に水府先生が書いて居られる「ああ、路郎君」の中に「はたち代の者五、六人が寄つて雑誌「わだち」を出した。むろん路郎君も僕も加つて——たのしかった」とある、その「わだち」は明治四十四年七月一日

発行で創刊号が出されている。

菊版で内容四十八頁、消息欄は龍郎の署名で編集後記は路郎の署名になつてゐる。発行所は短詩社。同人十一名の名前がある。藤村青明、浅井五葉、岸本龍郎(水府)、麻生路郎、馬場由三(緑天)、杉村歌三(蚊象)其他五名である。評論は「短詩概論」二頁麻生路郎で、句は全部短詩として發表されている。水府先生十九才、路郎先生二十三才の時である。

路傍より(短詩)三十六句

麻生路郎

前の人の前に人ありはらだたし

自働電話ここにも人は先にあり

絶え絶えの戀想う日のやるせなさ

弱い男が強い女にほれられし

勤めたり勤めなんだり五月雨

けだるさにふとんを抱いて寝たりけり

君とありし日は一合の酒に唄ひぬ

ものうくて電車を待つにうづくまる

消息欄には麻生路郎氏西市区岡町五十七番地に転居せられた、とある。尚卷末広告には「矢車」二十七号内容としてその中に「このごろのさびしさ」(短詩)麻生路郎とある。わだち二号は「轍」八月号として八月一日に出ている。内容二十八頁菊版、

氷囊(短詩)十六句

死の傍を横ぎる如きわが晝寢

麻生路郎

美はしき金魚の鉢の冷たさよ

夏瘦せの身に移り香の堪へがたき

未だ迷ふところを君のひややかさ

肌ふれておののきし頃を想ひけり

こちよき氷囊の痛たさ夏の晝

消息、編集後記共路郎と署名があり。

卷末に「矢車」二十八号の広告があつて、「梅雨の日」(短詩) 麻生路郎とある。

◎明治四十四年十二月二十日発行の「硯」十二月号の消息に「麻生路郎氏は東京樋口支店にあつて、外国文学の研究に余念がない」という文章がある。そして編集後記には、「麻生路郎氏より何か送られると云う通知があつたが、編集迄には終に作品に接しなかつた」とのせられてゐる。筆者は、水とあるが、これは土岐水光氏である。

発行所は京都市でこたま会となつてゐる。「硯」にのつてゐる消息の樋口支店のことについて私が伺つたことがある。それは先生が亡くなられる十日程前のことで六月二十八日だつたと思う。一時間程先生のベッドの横へ座つていろいろお話を伺つた、その中に東京の話が出たので手帳の端へメモして置いたのがある。

それには宗右衛門町の富田屋の親類で金屏風屋をしてゐた樋口商店の東京支店に居たことがある。樋口支店の店

長は樋口氏の息子さんで内務省へ勤めて居られたらしい。そして独逸語を学んで居られた。路郎先生は支那語を学んで居たので仲良しだつたそうだ。

よく銀座を歩いたということでもあつた。その樋口氏が経営して居た神田のローカン堂(どんな字を書くのかお聞きするのを忘れた)へ彫刻を売りに来た高村光太郎氏とも知り合つたということである。その彫刻というのは屏風の縁の彫刻だつたらしい。その時分に画家の杉浦非水氏が三越の図案部長をして居られて、外国のデザインの本を沢山持つて居るのでよく見せてもらい、屏風のふちへ焼絵を書いたものだと言つて居られた。そんな関係で川柳雑誌の表紙を二十六種位杉浦非水氏が書いて呉れたのだとの事であつた。色々な話をお聞きしたのだがメモしたのはこれだけである。

水府先生の「ああ、路郎君」の中にこんな一節がある「大正二年雑誌「番傘」が出る時君は東京に居た。一年後帰阪して同人に加わつた。「番傘」初期の何月号かは、君の新婚の愛の巢から、ハトロン紙を切つてのりをつけて、三人で発送した。」これを見ると、東京大阪間を何回も往復せられたらしいが、大阪に落着いて新居を持たれたのは大正三年という事になる。

大正四年八月に「雪」一号が出た。有名な思はじと椿の花を火に焙べて 日車 の句が発表されている。

「雪」二号九月号からは路郎先生の句が異彩をはなつの

である。

悼 青明

浴衣がけ一寸いてくる旅なりし

絶息ときに落日は瞬けり

タングステンの破裂か青明の死か

祈 禱

感謝しつつ妻が洗濯を見てゐたり

祈禱すんで大きな月を吸ふて立ち

横臥になれば涙湧くなり風に揺るる蚊帳

「雪」三号 十月号

インキの濁り人生のむだ費ひ

晝の疲れか脊をむけた妻の息

娘を抱いて聖書の行を見失ひ

妻や待たむ靴音を高めんか

S O F A が欲しといふ妻のうら若く

靴下をなげ出しぬ今日の汗かな

「雪」四号 十二月号

浪花座を出て

前茶屋の間からみゆる水ゆらゆらと儂し

ふりやまずふりやまず端書二三通

手がすいていつそさびしい日曜日

一人かへり二人かへり事務室に灯がともし

襦袢干すよるこび

路 郎

路 郎

路 郎

路 郎

路 郎

襦袢干すよるこびに太陽は照り給へり

うながされて出勤る赤靴は泥にまみれたり

「雪」五号 十二月号

中年になつて考へることのみ多き

白髪一本僕のころをさびしうす

假装せし人々に

白粉を洗ひ落せばさびしからんに

「雪」六号 大正五年一月号

二 食

妻に中将湯をのめのめといふ寒さ

思ひ出して電球かへにゆく日脚

二食でよしとやうやうに起きるかな

経節に男のちからからるる

雪 新短歌會詠草

ひき汐に捨てしものあらはに見ゆ

妻の顔 中の間の暗き火に見たり

「雪」八号 三月号

角ばつた椅子の吐息の朝となり

地のにほひ雑誌の上に流るる

「雪」十号 五月号

砂うち拂ひ電車まで何ンにも言はず

多喜之家の二階にわが足袋のきたなさ

去年の子今年の子泣いてる中へ蕎麥が来る

路 郎

路 郎

路 郎

路 郎

路 郎

路 郎

「雪」十三号 八月号

千日へ曲れば一つつつ灯がうごき

路郎

「雪」十四号 九月号

茶屋の物干に大阪のひろさみる

路郎

煙草の火が光るのみの物干

物干にゐて逢ふてゐるのを見つけたり

「雪」十五号 十月号

面會謝絶してばせを葉の晝

路郎

私の手許には十五号までしか無いので「雪」に係したものは以上で終る。

「土團子」一号 大正七年七月号

巻頭言

路郎

現代の柳壇は青い玉と赤い玉の時代である。青い玉は靜的である。寶曆、明和の川柳はこの意味に於て青い玉である。

赤い玉には未完成の藝術を、完成した藝術にせうとする努力がある。煩悶がある。

「土團子」は柳界の平和を打破して、新らしい川柳王國を築くために放たれたるピストルの一弾である。

路郎先生の当時の情熱が偲ばれる文章である。この当時は川上日車先生も路郎先生も三人の子持であったという事である。

三人の子が家いつばいに見ゆるかな

日車

いひたいこともいへず庭の樹をながめ

路郎

起きんとする枕元を二度掃かれ

柳珍堂

「土團子」三号 九月号

娘を死なし暫く遊ぶことにきめ

路郎

米の騒ぎに物忘れする夕也

同

当時の状況をうかがう事の出来る作品である。

「土團子」四号 十月号

ちちくさい嬰兒を厭ふほど疲れ

路郎

たべてもたべなくとももの麥めしに向ひ

泣き顔をみせずお茶漬だけはたべ

頬杖に秋の空氣のやはらかさ

布團のそそぎ氣にしてるうち秋となり

当時の「番傘」から転載

出刃庖丁鯛に觸れたは一年目

葭乃

出雲では添はしておいて水をさし

路郎

象思へらく俺は孤獨だな

同

あなたのやうにいふてもと返辭せず

同

「柳太刀」再刊一号 大正七年五月号

酒に罪させてゐるなと思ふのみ

路郎

「柳太刀」二号 同 六月号

亡半厘坊兄に捧ぐ

路郎

若死の須磨は淨土に近いとこ

戀ありやなしや櫻のやうに散り

柳太刀は大正六年十月——七年三月迄と大正七年五月

に一号として出ている。

「街灯」一巻十号 大正七年十月号

八月の作

麻生路郎

ねむた眼に朝顔の葉が揺れてゐる

病児の眼に映る朝顔はさびし

理屈通り朝顔の花咲かせ

パンと珈琲と朝顔の夏なりし

落ちさうに朝顔咲かず二階借

街灯は岡山市紙屋町街灯詩社発行、四六半裁十六頁で、

宝年坊、我楽太、鉄羅漢の三人が同人で鉄羅漢編集、十号

で終る。

「後の葉柳」一号 大正八年六月号

あきらめをもつ花嫁のしんし張

路郎

其日暮しの家に基督様が立ち

「後の葉柳」一号 同 七月号

思ふまいとすれど月給はたりず

路郎

一つ蚊帳にさかなのやうにならぶ夜ぞ

酒の毒知らぬにあらざ知らぬに非ず

「後の葉柳」三号 同 八月号

天井の低くさも知らず子はうまれ

路郎

食ふだけもないのに今日も手がよこれ

後の葉柳は路郎先生編集発行で柵型二つ折。日車、半文

銭の句がある。三号で十二頁。

「大正川柳」大正九年二月号の消息欄に次の文章がのつてゐる。

麻生路郎氏は大正八年十一月限り、工業之日本社を退き、某社の依頼にて、外国為替の研究に没頭し居らるる由。其著「懐手」は今月中に発行の予定なりと来信ありたり。

「大正川柳」同年八月号に

ポケットバック

麻生路郎編輯

大阪市北区曾根崎中二丁目

ポケットバック社

一汗を流す八ツ手に手が届き

路郎

の句が紹介されている。

「大正川柳」同年十二月号 一〇二号に

新刊紹介

「川柳漫画懐手」

麻生路郎著

「大正川柳」大正十二年二月号に

「麻生路郎君」安川久流美 という文章がのせられてい

る。同じく

「大正川柳」同年六月号に

「麻生路郎氏の書翰」が四頁掲載されているが長文なので割愛する。

「濔標」二七号大正十二年十二月号

ぶぶづけの客に馴染の小料理屋

路郎

この翌年二月に「川柳雑誌」が創刊されたのである。

「路郎先生の初心時代」補遺

大正三年八月号「イシズエ」十二号金沢市北都川柳社発行に「大阪より」を執筆。

大阪より（千九百拾四年六月）

麻生 路郎

自分はながい間海を見ない。

あのサラサラとした砂の上を、ザックザック、と踏んで沖の荒れているのを見ていたい。夜の大阪に親めない身には、只一室にばかりいて何かと考へさせられている。

×

袖入やつこの売声がきこえます。

今年になって始めてです。一日一日暑くなるんですね。

×

インクスタンドの蓋のニッケルがキラキラ光っています。ウラツチの硝子がピカピカ光っています。私は光るものはみんな嫌いです。

同年九月号「イシズエ」十三号

夏 日 集

大阪

麻生路郎

間男に犬がなれてる氣の毒さ

有るのも無いのも禪ぎりの暑い事

寝がへりが見つけ灯明消しに立ち

坊主持危機一髪のところを外れ

外六句

番傘を讀みて

須惠廻家

（前略）女流作家なんて稀ですが、よしのといふ人がいますね、その句などに

先曳の犬落ちそうに舌を出し というのがありますが、矢張何処か知ら女の人の詠んだ句らしいですねーと思います。

捨てたのが死にはせぬかと色男

路郎

飯事も値切つて買ふ面白さ

路郎

鉛細工残つた鶴は首を垂れ

青明

此頃から路郎先生と安川久流美氏の交際が始まったのであろう。「イシズエ」は久流美氏の編集、発行である。

（昭43・7、9「川柳塔」No.494、496）

*1「青柳」（二巻九号）の、関西川柳社9月10日例会報（当百）に、「先月は曾て天涯として知られた千松君が現はれ、今日は又、葉柳會時代の少年徳松君が顔を出した」とある。千松の雅号は、芝居「伽羅先代萩」の政岡の子の千松から取つたものか。

*2「矢車」25号（4月20日発行）に、路郎の名で「街の色（17句）」を発表している。24号を見ると、雑吟（句数無制限）の締切が4月5日までとなっている

ので、千松から路郎に変えたのは、三月下旬から四月上旬だと思われる。「矢車」や「わだち」へは、路郎の号を使ったが、大阪毎日新聞「毎日柳壇」(西田当百選)には、以後も千松の名で投句している。

*10 参照。

*3 明治43年10月29日(土)、大阪毎日新聞「毎日柳壇」(雑吟)に掲載された。

*4 「嵐峡保津川に遊ぶ」の前書のこの句は、「青柳」二卷十一号には収録されていない。

*5 「歸阪后病を得て萩の茶屋にて静養致居候」の前書の四句は、「青柳」二卷十一号には収録されていない。

*6 「紅葉狩吟行 十一月十三日 京都」の前書のあ
る句の五句目に、(重助は呼び捨てにして賞られる)
がある。

*7 「年賀状」の前書の一句目に、(御降りに流行る桂派
三友派)がある。

*8 「神戸共進會々場にて」の前書の、この句は「青
柳」三卷三号に収録されていない。

*9 明治44年3月20日発行「青柳」(三卷三号)に、「三
月十九日千松庵に於て水府千松の二人百句會を開
く、互選の結果五十句を捨て、五十句を採る」とあ
る。千松作品五十句を「青柳」誌から掲載する。

〈足音の四方へ消へる隠れん坊〉(寐つかれず足音は
かり耳に立ち)〈膝枕金簪の耳そうじ〉(足早やは霞
の中でまち合し)〈膝枕無心を云へば寝たふりの〉
〈泥足で庭へ投げ込む花便り〉(足を投げ出す暗がりの
椅子)〈泥足を母に洗はず蜻蛉釣〉(終列車疲れた
足で身を支え)〈急ぎ足校門を入る友の影〉(疲れし
眼疲れし脚へ空傳)〈急ぎ足で来て立止まる蓄音機〉
〈膝枕舞妓は眼鏡かけて見る〉(散る櫻足投げ出した
人の脊に)〈湯上りの裸のまゝで爪を剪り〉(膝枕見
上げば襟の爪楊枝)〈鏡にうつるとは知らで拔足〉
〈膝枕囁けば只うなづきて〉(柱曆をむしる立膝)〈烟
番の立膝で讀む端唄本〉(打水の玄關に油染みた下
駄)〈這入つて來もせぬ次の間の足音〉(半鐘に足の
顫ふ物干)〈炬燵から投げ出す旅の脂の香〉(ことづ
けに草臥足の儘でより)〈砂埃足弱花を見る氣なし〉
〈風荒れし朝猫の足跡〉(膝頭抱いてみつめる沖の浮
標)〈踏切で踵を返す朝歩き〉(膝枕貸して伏目の戀
もして)〈足の運びの輕き逢ふ戀〉(千鳥足女房に媚
びる眞似もして)〈脂足脱ぎし靴下はき惱み〉(足元
に蝶々の狂ふ下り坂)〈ベンチからベンチ ベンチ
からベンチ心待)〈尺八の足投げ出して一くさり〉
〈摺り足に憐寸を探す虱の夜〉(晴衣裝巴里の宵をダ
ンシング)〈二人三脚のそれと似し妻と二人〉(疲れ

足草に投げ出す麗さ) (急ぎ足夕立雲を前に見て)
(男嫌で通る紺足袋) (夕日さす病室に我が脂足) (脂
足花見戻りの足袋の裏) (足まめの目あても無しに
家を出る) (膝立て、二階から見る朝櫻) (足が元手
に親子三人) (編み上げを素足にはいた夏の朝) (足
を早める峠の夕日) (初霜に鶏の足跡朝の程)

*10 雅号千松の他の作品を次に挙げておく。
「青柳」二巻十号(明43・10・20発行)
関西川柳社例会 十月八日

菓子折へ来る鼠瘦せた手で叱り
立ち不性鼠を追ふに物を投げ
鼠の錢足して夜長のあみだ籤
募集句

「枕」安田依々選

水枕落ち入る頃に星が飛び

「鱷鈍、蕎麥」今井卯木選

窓下へ呼べば見馴れぬ夜そば賣

日記尻鱷鈍の代もつけて置き

「滑稽文学」明44・4発行

大阪支部句会

春の灯に光る涙や君が頬

雛祭燃える毛布に桃の散る

三月句報

「春の灯」
「雛祭」

逝く春に網のほつれを綴る唄 「逝く春」
君嫁きてたゞ知るものは酒の味「戀愛」
春の雨四條の夢のあたゝかに「夢」
壁に淋しき櫛卷の影 「寂寥」

「青柳」三巻六号(明44・6・20発行)

「古き二句集」よりという題で、水府・当百・半文
錢・青明らの作品が紹介されている。

看護疲れ苦悶の聲を聞き漏し
眠られぬ胸の塊歌にする

不平多き人と日記で知られけり

踏み迷ひ來し此墓地の夕映や

すゝり泣く墓に大きな月が出て

大阪毎日新聞「毎日柳壇」西田当百選

明治43年9月25日(日)「雜吟」

(創作を其儘にして潮を浴び)(鈴の音駒下駄の

音露次更けて)

明治43年11月11日(金)「雜吟」

(稽古笛浮世小路を吹いて往き)(浮世小路養子

娘の十九にて)(浮世小路おめかと堀に白墨の

(檢温器捨て、寝返り許り打ち)(寝返りを打つ

度び濡れる枕紙)(眠られぬ歌の塊歌にする)

(萩の茶屋芒の中に貸家札)(萩の茶屋靴を脱ぐ

間に鶏を追ひ)(萩の茶屋「ゆ」の瓦斯燈に暮れ

かゝり)

時代祭

〈だんまりの其許身共練て行き〉〈騎馬武者の又しても出る京言葉〉〈時代祭五月人形の外歩き〉

明治43年11月19日(土)「簪」

〈簪で花緒を上げる松並木〉〈平打の換へ紋譚のあるらしい〉〈蟻のとわたり簪で邪魔を入れ〉

明治43年11月22日(火)「紅葉」

〈べからずの下に錢龜甲を干し〉〈戻り駕紅葉の雨にぬれて来る〉〈べからずを無筆は反古にしてしまひ〉〈温泉の道の紅葉は無駄に折取られ〉

明治43年12月1日(木)「銃」

〈臺尻で擴がる焚火消止める〉〈空氣銃添乳の母は眼で叱り〉〈空氣銃猫を跛にしてしまひ〉

明治43年12月8日(木)「毒」

〈其夜からうなされ給ふ日本武〉〈毒のない話に栗を焼く火鉢〉〈癪刊近く揮ふ毒筆〉〈毒ぢやく目の毒ぢや夕櫻〉〈解毒劑で生きた二人の添もせず〉〈今日や誰明日や我身の鰻の味〉

明治43年12月11日(日)「争」

〈蟻螂の斧を揮ふて繼子出る〉〈生傷の絶え間のないを惚れられる〉

明治43年12月23日(金)「忙」

〈忙しい中で染換へ柄撰み〉〈だんまりの机に筆が皆な動き〉〈忙しさ火鉢は灰になつたまゝ〉

明治44年1月11日(水)「新年吟」

〈年始状つい其處に住む舊主宛〉〈年始状二伸のあるは身寄にて〉〈年始状驚堂の筆を其まゝに〉〈冷たさは年始状さへ刷つたもの〉〈ぼつべんに初手は怖々息を入れ〉〈ぼつべんの立かけてある枕元〉〈御降りに新年號を買ひにけり〉〈御降りに古い役者の品さだめ〉〈御降りに流行る桂派三友派〉〈御降りの街をかるたの使來る〉

明治44年1月29日(日)「雪」

〈心待ち六甲摩耶は雪に暮れ〉〈雪解道瀨踏の氣味で辿りゆき〉〈初午の太鼓に春の雪が降り〉

明治44年2月28日(火)「雜詠」

〈蚊帳を借りにやる吉田屋の晝〉〈早じまひ夜は靜かな北船場〉〈帝國座果て、俵は北陽へ外れ〉〈井池へ連立つて來る新世帯〉〈船場と聞いて汪かと乗る詐欺〉〈天下茶屋弓術俱樂部圍碁俱樂部〉〈天下茶屋うんと握つて居る噂〉〈天下茶屋店は船場に太物屋〉〈八軒家のどかな笛で京まゐり〉〈福嶋の古巢へ戻る空俵〉〈朔日十五日松島へつゝ、走り〉〈女護嶋など、船員洒落て來る〉

〔松嶋のきぬぐ〕船の出る日也〕〔船は出て行く
松嶋に夢が醒め〕〔人叱る師走縫ふ手を休めず
に〕〔花名刺忙しくても娘なり〕〔忙しさに娘の
ま、で春になり〕〔問へばまた笑ふのみ君が頬
の細り〕〔同じ思ひのはかなさに泣く禿〕〔歐米
も説かず僻地の役勤め〕

明治44年3月22日〔水〕「文字」

〔石摺の文字に日傘をさし掛て〕〔仁丹のそれか
遙かの闇に文字〕〔タイピスト君を想へば誤り
の〕〔タイピスト紫の字に眼の疲れ〕〔何書しや
ら代筆のものうくて〕〔いつに似ぬ文字の亂や
墨の色〕〔讀で欲し夫とは言で灰に文字〕〔物足
らぬ夜や代筆の返し文〕〔衰への見えて悲しい
父の文〕

明治44年4月14日〔金〕「病院」〔3月1日締切〕

〔病院に訪ふて人なし窓による〕〔検温器浴衣姿
の艶めかし〕〔瞳をあげて細き手の検温器〕〔入
院や乳母も寢臺の人となり〕〔退院の小説雜誌
貸したま、〕〔附添のまた薬局で指相撲〕〔望み
を絶ちて山の病院〕〔附添のよく寝るが只恨め
しく〕〔魔されて呻く夜窓に風の音〕〔新聞を膝
に薬瓶待つ女〕〔退院近く附添ひの咳〕〔検温器
挟んだま、で歌かるた〕〔花折つて簪す寢臺の

人若し〕〔我訪へば寢臺の君の頬を背け〕〔看護
に瘦せしうた、寢の妻〕〔星白き夜を病院の窓
硝子〕〔病院を訪へば来て居る戀敵〕〔球突くこ
とも知つて退院〕

明治44年5月9日〔火〕「小説」

〔小説に暮れて針さし片付ける〕〔袂から紅葉集
を貸してやり〕〔貸し無くし又買て来る不如歸〕
〔眠さうに小説を讀む窓の夕日〕

明治44年6月30日〔金〕関西川柳社例會

〔鞆の浴衣の裾が松に觸れ〕〔浴衣着て道頓堀
の朝あるき〕〔夕暮の浴衣に犬がついて行き〕
〔蓄音機浴衣の人に取りまかれ〕〔物干に浴衣が
二人動いてる〕〔電気館客の浴衣の薄明り〕

明治44年7月2日〔日〕関西川柳社例會

〔いつまでも砂地に残る夢二の足形〕〔砂濱の子
を呼ぶ家に燈が點る〕〔鉢植の砂買ひに行く浴
衣がけ〕

明治44年7月4日〔火〕関西川柳社例會

〔女氣の買ふて來てから又迷ひ〕〔信ずる人の反
對に迷ひ出し〕〔血迷ふて女は金を追ふて行く〕
明治44年9月27日〔水〕「雜吟」

〔雜報を讀んでしまふと深呼吸吸〕〔同僚は遅刻の
譯も知つて居り〕〔新聞を讀みながら立つ朝の

室) (朝々を出遊るほどの美しさ) (逢曳は橋の

擬寶珠の数も知り) (人を待つ人か涼みか橋の

人) (壁に淋しき櫛卷の影) (君嫁きてたゞ知る

ものは酒の味) (挨拶のたゞさりげなく) (

伏し目勝ち我思ふ人前にあり) (よく來れど明

さぬ戀の軒つゞき) (滞る家賃に妻の世帯染み)

(家持つてから目立つ夜遊び) (貸ポトト假家の

脚へ潮がさし) (卒業の迫る日に未だ假校舎)

(荷に一時雨家移りの暇乞ひ) (名も知らぬ町^{まち}祥

へばかしや札)

ここまででは、すべて千松の名で投句している。

路郎の名で初めて投句したものを、次に挙げる。

明治44年11月29日(水)「雑詠」

(インキ壺除けて女は肱をつき) (雑記帳藝者の

年が書いてあり) (金貸してまで拵へる遊び連

れ) (停車場を先に出たのが俣夫を呼び) (美し

い悲しい別れ發車なり) (膝頭撫で、淋しい秋

を知り)

詩性と大衆性との中で

河野 春三

1

木村半文銭が「川柳雑誌」第三卷七月号(大正十五年)に「忘れ得ぬ事ども」という文章を載せていて、彼自身の明治四十二年川柳を始めたころの交遊録のようなものを詳しく書いているが、その中で

「舊日報柳壇のものが主催で(西柳樽寺別山と云ふ)川柳會を開くやうになつた。これには六厘坊が單獨で出席してゐた。會場は篠村力好君の宅である。堀江の繁榮橋南詰のせとや旅館がそれであつた。表の往來に接した居室で、第一回が開かれた。その席上で淺井五葉氏(當時了軒と號す)麻生路郎氏(當時天涯と號す)などにお眼にかゝることを得た。(中略)路郎氏の金釦の學生姿も、ぼつかりと浮き出で残つてゐる。(中略)彼れ六厘坊の周圍から日車、松窓、當百、柳珍堂、ひさご、青明、五葉、路郎、水平坊の諸君を誕生せしめたのであるから、その年少氣鋭の反面に、たしかに大きなものが握られてゐたものであらう。現在の選者になりたがる人々の多いのをみて、私は、故人の偉大さを泌々と思ふ。今の先輩や大家には、あの壓力がない。路

郎氏が少し系統を引いてゐるが、やはり線は細いのを免れぬ……」とあるのを見ると、路郎がまだ大阪高商在学時代のときだったと思う。当時の関西の柳誌は「葉柳」であったが、資料不足で天涯の作品を見ることはできない。何しろ長い川柳生活であつただけに、作品数も極めて膨大なものと思われるので、ここでは、「一応彼の句集「旅人」(昭和二十八年十一月刊)を中心にして彼の作品について語って見たい。

2

「旅人」開巻最初の句は

二階を降りてどこへ行く身ぞ

路郎

の句で、原句は「川柳雑誌」第三巻四号(大正十五年)に掲載されている。当時ボクは「番傘」で岸本水府の傘下に入りながら、この句の清新さに打たれた記憶がある。作者の暗胆とした気持ちをこれほど端的に適確に表わすことは容易でないし、当時の青年が持っていた懷疑、虚無感、不信心は現在のそれとは内容において格段の相違はあるけれども、しかも青年というものは、いつの世にあつてもこうした満たされない気持ちをもっていたものである。雑誌ではこの句の前に

二階はさびしふと取りだして見る鏡

という句があり、二つ合わせて鑑賞すると、よりハッキリ

と作者の心が分かると思う。

もちろん、ことわっておくが、こういう先人の作品鑑賞にあつては、発表の時代(その時代の思想や社会や文学思想、価値観)そのものを考えないと厳密な鑑賞は不可能で、今日の現代川柳作家の置かれてある社会や文芸観や心象表現や——すべての「現代」という複雑な場から批評するならば、あまりにもこの句の単純さに不満を感じる方もあろうし、とり立てて推奨する価値があるかと疑問に感ずる人もあろうが、大正末期のいわば、混沌とした社会思想の転換や、新興川柳と伝統川柳との思想的文学的軋轢の状勢を頭に描いていただと、麻生路郎が、日車や半文銭等と親しくし、また半面、当百を主流とする五葉、水府等の伝統派との交流の中に棹さしながら、あえて観念的な新興川柳に走らず、また、当百、水府等の伝統川柳にもあきたらず、しかもかつて路郎自身が刊行して来た「雪」(後の葉柳)「土団子」の高踏を捨てて大正十三年二月、「川柳の社会進出」というテーゼを掲げて、平易でしかも内容の清新な、いわば「詩性」と「大衆性」の中で一つの川柳文学運動を起こそうと決意したことに、彼の存在価値を公平に客観的にボクは評価したのである。もちろん彼のおびただしい作品中には決して佳句ばかりでなく、むしろ「番傘」の後塵を拝するような三要素中心の伝統川柳も多数あつて、数においてはそのほうが多かつたかも知れぬし、後年に至るほ

ど、俗な句が多くなっている事実も否定しないが、少なくとも、「番傘」とは違う文学観を根底にもっていたし、ことに初期の句に優れたものが多かったことを私は公平無私の立場で認めるものである。

3

平凡の幸福豚へ話しかけ

路郎

豚の子へ續く豚の子ばかりなり

同

これらの句は「川柳雑誌」創刊号にのつた句で、旧来の伝統川柳の三要素から解放されて、彼自身の眼と凝視で創造された佳吟と信じる。「豚の子に續く豚の子ばかり……」という心の断定は、背後に彼の暗い愁いというか彼自身の人生にも直結する寂寥がひしひしと感ぜられる。彼は句集の「はしがき」の中で

「私の句はどちらかと云えば淋びしい句が多い。私の性格がそうであり、私の歩んだ道が峻しかつたからでもあろう。要するに私は川柳によつて人間愛を求めてやまなかつた」

と書き「川柳雑誌」誌上でも*1「何故私は、苦り切つてゐる乎」と心境を吐露している。

人は彼を狷介で、人を容れない頑固で偏狭な性格の持ち主であるという。それゆえ有為の青年が彼に近づいても、すぐ反滌して背いてゆくことを繰り返しているという。そ

ういえば、塚崎松郎、井上刀三、林田馬行、黒木鶴足、松丘町二、若井たけし、川合舟々、岩本素人、松盛琴人、水谷鮎美ら優秀な作家たちも路郎の「川柳雑誌」にはいつて日常をともしると、すぐまた路郎を離れて行くという事実は事実として否定できない。

しかし、まことに片意地でいい出したら損得を考えずに青筋を立てる彼ではあるが、心の底は常に孤独であり、常に友情や愛情に飢えていた人間であつたとボクには思える。

さてこの句の発表された「川柳雑誌」創刊号の彼の「近作」を採録して見ると

- 1 ひるひなか蠅とる用があるばかり
 - 2 疑ふたままで一週間は過ぎ
 - 3 暇な日は三味張替へる氣にもなり
 - 4 平凡の幸福豚へ話しかけ
 - 5 豚の子へ續く豚の子ばかりなり
 - 6 時計にまでうつる神経衰弱症
 - 7 きれる氣がこの頃鬢に結はぬ也
 - 8 踊子へ雲でも降りて来そうなり
 - 9 青いソフト東京の夢巴里の夢
 - 10 初戀の思い出になる夏蜜柑
- の十句であるが、「ひるひなか」暇な日は「きれる氣が」等は「番傘」系の句と変わりがなく、豚の二句が光っているし、8、9の二句が幼稚ながら一応路郎作品といえよう。

紙屑をまるめてすてるに等しき

路郎

この句も簡潔平易ながら、作者のギリギリの線での抵抗が感じられて共感せられる。

すでにお気づきのよう、

二階を降りてどこへ行く身ぞ

の句はいわゆる武玉川調の七、七のリズムであり、この句も

5 4 8

紙屑を まるめて すてるに等しき

5 8 4

紙屑を まるめてすてるに 等しき

という風に破調であり、しかもこれらの場合、この破調が非常に語意を強め又はひきしめるのに成功している。その他にも路郎の句に破調の句が多いのは、「雪」時代からの碧梧桐一派の作家との交流による相互影響や、武玉川を愛していた彼独自の詩性——詩性からするリズムと自由性が作用しているもので、彼の文学の一つの支柱として他の先進とは違うものを持っていたと私は思う。

これは「川柳雑誌」初期の作家であり鬼才と称せられる

井上刀三の作品

母が鬼子といひしがまことか

刀三

電車に轢かる氣持ちを續け居る

同

人を見下げた金の音かな

同

妻を貰へば洋酒そろへん

同

地獄へ行くならむ死にたくはなし

同

等にも影響を与えているし、黒木鶴足、若井たけし、松丘町二、澄田羅門等にも、五、七、五にとらわれない、作品独自のリズムを路郎作品から学んだものとボクは考える。

4

君見たまへ蒨葎草が伸びてゐる

路郎

この句は有名で、路郎といえはこの句が浮かんでくるぐらい著名な句である。川柳雑誌第一卷十一号（大正十三年）に載っている句で、多分、当時、鳴尾時代の路郎居でのリズムの句で、庭の片隅での発見とおどろき——これが詩人にとって必要なことである。表現も、「君見たまへ」という出だしから非常に誰かに呼びかける特異な表現で、発想自体が詩的なものがあって、川柳の三要素にしがみついて来た川柳作家たちに衝撃を与えたものとして、記憶されるべきものと思う。

ただ、ここで問題となるのはこの句は一行形態で発表されたものが、「旅人」においては

君見たまへ

蒨葎草が伸びてゐる

と二行になっている。前述の豚の句も

豚の子へ続く

豚の子ばかりなり

となつており、

見渡すと

ユダのころを

みんなもち

と三行分けも見られる。

路郎はこのことについて「はしがき」で

「句の配列を棒組みにせず、一行に、二行に或は三行にしたのは、大凡そ私の呼吸によつて読んで欲しかつたからである。曾て私が刊行した「新川柳評釈」の序文に「句はその人のころである。十七音字はその人の姿である。リズムはその人の呼吸である」と書いたのを思い、私の呼吸をある程度知つてもらいたいためでもある」

と書いていて、それはそれで作者の意図は同感するが、それなら何故最初雑誌に発表するときから、その呼吸ところを適確に表わすために多行形式を採らなかつたかという点に疑問がのこる。一旦、一行形式で発表したものを句集に発表する段階になつて何故二行に三行にしたのか、その点で句集の編集上の視的効果をねらつたものとすれば、たとえば伝統川柳家であつても色紙やのれんに句を書く場合、分ち書きをするのとさほどの差違が認められない。

もちろん多行形式といつても、麻生路郎においてはすでに「土団子」創刊号（大正七年七月）に「須磨雜観」として十一句三行形式の作品を載せている。摘記すると

○

なつみかんに

さとうふりかけ

うみをみてゐる。

○

ひるふかし

いひたいことを

いふてゐる。

等というような作品で、大した句ではないが三行書きを採用したということでは記録に残したい。

また、晩年の「川柳雜誌」の「不朽洞句帖」にも

老衰で死んだそうな

誰も何も云わない

蜘蛛の糸でも

妻はわたしにすがりつく

母の路線で

女検事の慟哭

というような句が散見出来る。……がボクは一応「旅人」の句は原句通り一行形式のものとして鑑賞しておく。

……という意味は、俳句における高柳重信や現代川柳に

おける松本芳味らの多行形式とは、発想や、表現意識、心

理の屈折や躍動による休止、いわゆる「呼応」と「断絶」というような、棒書き形体を拒絶するきわめて意識的な文学的思想につながる表現効果からの多行形式とは、趣を異にしている点をハッキリさせておきたいのである。

5

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

路 郎

この句は路郎の自信作であり、また世評も代表作として推しているもので、彼も半切や短冊に乞われればもつとも多く書いたものの一つである。^{*}原句は「子を育て」とあったものをこのように推敲したものと言われている。

この句は決して悪い句ではない。父としての愛情の真実を衝いているのだが、よく見ていると、たとえば古句の

母親はもつたないがだましよ

と同じく、常識としての人情を穿った句で、格言的アレゴリーの要素がありそれだけに普遍性もあって、ある種のアピールはあるが、詩的感動というよりは人情的穿ちの句といったほうが当を得ていると思う。路郎ファンから叱られるのを承知のうえであえていう。

この句を裏返すと

飲んで欲しやめても欲しい酒を酌ぎ

葭 乃

となるようで、妻が夫を思う心と父親が子を思う心が、表裏一致しておもしろい。

私には、路郎の子供に対する句としては「川柳雑誌」初期の句で

子煩惱がつたんがつたんしてくらし

路 郎

ある時は子をだんばしでくひとめる

同

箸紙を父おちついて書いてやる

同

など「旅人」にも抜かれていた句が好きだ。

「ある時は子をだんばし（段梯子）でくひとめる」など、まことにリアルで、子を持った日常性を、啄木的に瞬間キヤッチする詩心がないとできないと思う。

晝の風呂泳ぐ気にさへなる父よ

路 郎

以上の句を経てこの句に到ると、完成された路郎精神を見ることが出来る。句意は平明で説明する要もないが、解放された子煩惱の父の一コマの風景としてもすぐれているし、「泳ぐ気にさへなる」路郎の独自の思いがよく定着しているし、「父よ」のよに何のイヤ味も感じられない佳句である。

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

路 郎

この句はさらに深い。原句は雑誌が見当たらないので^{*}制作年月は不明であるが、愛児ロンドンに死なせたかなしみが底にあるのかと想像する。ばらばらになれば……とあるのは「ばらばらになりたくない」という願望とも思える。最初の呼びかけも当然ながら適当な措辞である。路郎作品中の佳吟であろう。

このごろの疲れさんでりやは重し

路 郎

「川柳雜誌」第三卷第八号（大正十五年）に載つた句で、
原句は、

このごの疲れさんでりやは重し

となつてゐるが、これは明らかに誤植（脱字）であるが、路
郎の句を「番傘」で水府が批評したのに対して、木村半文
銭が、次号で「川柳漫評」を書き、「このごろ」と水府が勝
手に読み下して批評しているが、あるいはこれは「このご」
と作者が作ったのかも知れないと皮肉めいた批評をして
いるが、これは半文銭の意地悪批評に違ひない。この句の
載つた号の路郎の「近作」にはこの句のほか

見上げれば二階に椅子の端が見え

時の力もおおきかなしみ

同 路郎

と路郎らしい句があり「時の力」の句は路郎の心象感覺句
として当時はフレッシュであつた。「見上げれば」の句は水
府が単なる写生句に了つていと評し、半文銭も「見上げ
れば」と自己の心理作用が置かれてゐる以上、もつと切実
なるものが欲しかったし、水府説のごとく「写生に終つて
いる」と評しているが、ボクには「椅子の端が見え」が単
なるスケッチでなく、そこに作者のいろいろな感慨があ
り、ふと見上げたときに「椅子の端」が見えたという偶然
が、案外偶然でない路郎の生活と心理がうかがわれると思ふ。
なお、さんでりやの句は作者が精神的肉体的に疲労して
いるとき、上からブラ下がるシャンデリヤの、いまにも落

ちて来そうな錯覚的神経の重圧に、作者の衰弱をよく現わ
しているもので、穿ちや笑いや風刺のない場での路郎の生
活句として一つの意味をもつてゐる。

妻や待たむ靴音を高めんか

路郎

新婚時代の彼の句で、大正四年創刊の「雪」紙上に載つ
た句である。彼の妻である葎乃女史は健在で「川柳塔」に
も執筆されているが、ボクと同じく堺市の出身で、河盛芦
村氏の愛娘として名家の血をひいてゐる。

この句の「妻や待たむ」という出だしと「靴音を高めん
か」という胸のトキメキが、文語調を巧みに生かし、この
短律が、句をいかに引きしめてゐることか。もちろんこの
句の「か」は純粹文語でなくて文語、口語交り——現在の
コトバでいえば現代語として考えてよい。

葎乃女史は高齢ながら、健在であるが、女性作家として
もすぐれていて、

夕立は小気味よし君が叱陀も

葎乃

改札を出るも先駆者たらんとす

君の青私の青と違ふなり

女さまさま猫の頭を皆持てり

草に寝て今日もあしたも人間ざらい

（句集「福壽草」より）

「女さまさま」や「人間ざらい」の句は作者の個性その
ものを打ち出した佳句で、柳界の長老作家としても尊敬さ

れるべき女性作家と私は思っている。

戀の罫あの眼だらうか眼だらうか

路 郎

逢ふだけでよかつたころの榮種咲き

同

「戀の罫」はやはり一種の路郎調、特筆する句ではないが、記録に残してよい句と思う。

6

句作六十年にわたる路郎の句を詳しく鑑賞する紙数はないので一応、その他の佳吟を掲げておくことにする。

寝転べば疊一帖ふさぐのみ

幻の中に時計が鳴つてゐる

時計にまでうつる神経衰弱症

春の僕ただ良寛をころろさす

彼の一生雨雨のままだつた

啄木祭に(二句)

ああ僕も汽車を下りしにゆくところなし

父・植木・小鳥・娘はうちにならず

亡きロンドンを思ふ(一句)

だす入りの一つ缺けてもがたがたし

銃先の原始を見たり柿の色

行末を案じるように鶴は立ち

殺すことにきめて其の夜は寝たりけり

なお路郎作品で、路郎自身も佳作と信じて色紙にも染筆し、

門下生も「路郎先生の傑作」としてあげている句、たとえば

凡聖一如元旦のこころ知る

古くとも僕には仁義禮智信

六十一まだ情熱は燃えに燃え

というような句は、大上段に構えた彼らしい反骨や情熱は見られるが文芸作品として見るととき、内容は案外空疎であり、常識的である。彼の句でもう一つ特筆すべきは贈答句をふくめての前書のある句のうまいことで、特に「雪」以来の友人である小出楯重を弔う句

裸婦かたづけであるじ弔ふ

大正天皇を悼み奉る

草莽の臣かなしみの炭をつぐ

謹んで机の上を片づける

赤子なることをはつきり見せ給ふ

など、心からの哀悼が、儀礼的でないリアリズムがあることとで心をうつと思う。

7

麻生路郎は本名幸二郎、明治二十一年七月十日、尾道市の生まれであり、大阪高等商業を卒業しているということであるが、詳細はわからず、「川柳雑誌」の追悼号にも詳しい年表さえ出ていない。川柳をはじめたのは半文銭の交遊録によつても明治四十二年ごろと察せられ、小島六厘坊の

門下であったことは推察されるが、「葉柳」に出句していたかどうかは「葉柳」を見ていないので何ともいいかねる。大正四年「雪」を創刊しているが、これも今、手許なので、雑誌の内容について詳しい説明はできない。つづいて彼が出した「土団子」は創刊号から四号まで所持しているの、ここで触れて見たい。

路郎がその巻頭言「小さき旗上」で

「▼現代の柳界は例せば青い玉と赤い玉の時代である。

▼青い玉は静的である。池の中の水である。水底に沈澱せる黒い土である。その土に壓せられたる朽葉である。彼等は遂に自己の流れ行く運命をさへ知らないのである。

▼赤い玉は動的である。天上に燃ゆる太陽である。世にありとあらゆるものを焼かんとする火である。この故に頗る危険である。しかしながら此の危険のない處に眞の革命はない筈である。

▼更にもう一度繰り返していふ必要がある。青い玉は完成の藝術である。完成した藝術の模倣は藝術の墮落である。

▼寶曆明和の川柳は此の意味に於て青い玉である。江戸趣味の謳歌者は青い玉を憧憬して現代に死せんとするものである。

▼赤い玉は未完成の藝術を完成した藝術にせうとする努力がある。

▼我等現代の川柳家はこのやうな努力と煩悶の矢面に

立つて戦はなければならぬ。徒らに江戸趣味を謳歌して自己の存在を忘れてはならぬ。自己の背景をなしてゐる現代を忘れてはならぬ」うんぬんと。

いかに路郎が青年客気に溢れて、「現代」という点に力点をおいているか、「文学」という視野から川柳を動的な捉えかたによつて、見直そうとしたがその決意は、私達の現代川柳の精神にもつながるものとして、ボクは客観的な立場で路郎の作句精神を、肯定したい。

ここで注目すべき点は彼が旗上げした「土団子」には俳人である宮林董哉、兼崎地橙孫、松村鬼史(柳珍堂)、藤原游魚、等との交流が盛んで、彼らの作品を川柳作家と同列に作品を一家吟として出句していること、これは多分「雪」以来の麻生路郎、川上日車らの考えかたの底にすでに柳俳無差別のきわめて自然の文芸観があり、「海紅派」の俳人との相互影響が、短詩型文学という形式の上で自然に育まれていたものと思われる。創刊号では路郎が、三行形態の川柳を発表していることは前述したが、川上日車の句には

三人の子が家いつばいに見ゆるかな
飯ほどわたしを理性にしたものがない
同 日 車

というやうな句が見える。

「土団子」は編集発行人が麻生幸二郎であり発行所は麻生方「大阪川柳社」といい、(賛助人の中には海紅俳人の、塩

谷鶴平、川西和露、と前記の人々、同人は川上日車、斎藤松窓、松村柳珍堂、服部ふくべ、麻生路郎の五人となっている。

大正八年六月に「後の葉柳」がやはり路郎の手によって出されている。「土団子」が廃刊になって、どうして「後の葉柳」が出たのかはボクにはわからないし、ちょうど大正八年五月に「楊柳」が出ていて、ここには顧問井上剣花坊、松村柳珍堂のほかにも同人として川上日車が加わっており、また美川泥之介、杉本赤魚、小島紺之助等が新進として参加——というよりは主軸として精力的に働いているが、主義主張も雑誌の組み方もすべて、「土団子」をパターンとしているので、何故、同じ時期に路郎が別個に「後の葉柳」刊行にふみ切ったのか、この辺はまだボクにはわからない。

「後の葉柳」創刊号は、表紙とも四ページの小型栞型本であり、表紙裏は木村半文銭の「家鴨」十句、見開きのページは麻生路郎の「近作」十句、裏表紙は「予子が湧く」という川上日車の雑文であり、三人きりの雑誌。「土団子」は江戸堀北通りの路郎の葵書店が発行所となっているが、「後の葉柳」は萩の茶屋三日路町、後の葉柳発行所となっており、路郎が生活的にも転々としていたことが伺われる。

「後の葉柳」の創刊号の路郎の作品を参考のため掲げておく。

近 作

路 郎

路ン込めば卵が風に吹かれてる

せめてもの慰め顔を寄せて食ひ

あきらめをもつ花嫁のしんし張
打明けてくれて返辭に困るなり
其日暮しの家に基督様が立ち

正直がなにのたしにもならず死に

泣くによし近頃死んだ人の墓

佛然とした時にほんとのことを言ひ

わたくしをせぬ詰襟に風を入れ

知れはしない筈の悪事を一つもち

8

麻生路郎がいよいよ「川柳雑誌」を創刊したのは、大正十三年二月であり「川柳雑誌」を出してからの彼は幾度遷をしながらも、死ぬまで「川柳雑誌」にその生涯をかけるに到ったことは周知のことである。

現実とは当時の事情からいうと柳誌「みをつくし」(川柳以交吟社)という市電関係者の機関誌を母体として、原史風の「千両箱」、高橋古城山の「柳影」、中川霧太楼、平井光太楼らの「筒袖」その他の合体により、「みをつくし」の吉川唾人、竹田芦穂の尽力によって路郎が、「元来の少数精鋭の高踏をすてて、初心者指導、川柳の社会宣伝(進出)に乗り出した」と創刊号の後記に書いており、雑誌も文章は総ルビ付という大転換であった。

また側面的に観察すれば、大正十三年三月には、前に「絵

日傘」を出していた本田溪花坊が「大大阪」を創刊して若人達に呼びかけて来た事実、岸本水府、浅井五葉らの「番傘」が、青年層の川柳家を結集していよいよ新しい月刊誌の意欲を示し始めた事情、この三大誌が大阪柳壇を支配し、ここに三誌の対立が結果としては青年川柳家を続々と生み出したということ、ことに「大大阪」が趣味的で性格が変わるにつれて、よしにつけ、悪しきにつけ「番傘」と「川柳雑誌」が二大支柱として大阪柳壇を築き上げるとともに次第に全国に支部組織を傘下におさめ、大阪が川柳の中央誌という観をなした事実も歴史的に評価できるものであり、この両誌の対立、極論すれば、路郎、水府という全く相容れない性格が、事毎に対立した宿命的事実も、時には第三者にイヤな思いもさせたことであるが、この対立（又は対敵）観念が旺盛であつたればこそ、両誌は発展を遂げたともいい得ると思う。両者を個人的にも識る筆者として書きたい裏話も多いが、ここはその場でない。

路郎が、職業川柳人という立場を宣言したことも彼らしい自負として特筆しておこう。

路郎が前述したように、川柳を伝統の枠に嵌めこもうとせず、三要素は三要素として認めつつも、その形骸に没しようとしないうで「脱三要素的」な作品も大いに作って清新な句風を作りあげたこと。しかもいたずらに新興川柳に走らず観念的な句をも受けいれなかつたこと、句の表現に非

常に自由な考えをもち、口語も文語もその折々の作品の作品効果の上から自由に用いたこと、形式に縛られずしかも無秩序ではなかつたことは路郎作品の特長であり、日車、半文銭はもちろん、游魚、鬼史、葦哉、地橙孫その他の海紅系作家との相互影響などがあつたことに原因すると重ねて誌しておく。

路郎・水府の両氏は奇しくも昭和四十年七月と八月の、わずか一か月のあいだに没したことも何か因縁めいたものを思わせる。

ボクは評論の性質上、路郎・水府と呼び捨てにしたが、大正末期両氏の朱を受けた文字どおりの先生であり、いま「平安」誌から「麻生路郎作品論」を依頼されて感慨無量でもあり光栄でもある。^{*4}引用の文章及び作品中、旧仮名遣いによつたものは「旅人」の路郎の「はしがき」を尊重したものである。（昭48・8・15お盆の日）
（昭48・11「平安」）

*1 大15・3「川柳雑誌」No.26に掲載。

*2 「子を思ひ」が原句。

*3 昭3・8「川柳雑誌」No.55に発表。

*4 「読本」収録に際し、引用文・作品とも可能な限り原典に当たり、旧仮名遣い・旧字であるものは、そのように統一した。

「川柳職業人宣言」を讀んで

——麻生路郎への公開狀——

森田 一二一

麻生君——。

君に紙上で物を言ひかけるのは果して何年目か？ 殆んど思ひ出せない位である。君が「川柳雜誌」を創刊した當時から僕は君を藝術家麻生路郎としてよりも、むしろビジネスマン麻生路郎としての手腕を高く評價してゐたものだ。これは事業としての經濟的關係を離れては、藝術もまた社會的價値をもつことは出来ないといふ僕の持論からしては當然なことでもあつたのだ。君は果して如何にも事業家らしく雜誌の經營にその片鱗を見せてゐた。従つて内容的には可成りレベルを下げた編輯振であつたことも見逃せなかつた。けれども、一面またその事によつて「川柳雜誌」が今日の成長をなし得たと云ふ——吾々にとつて苦がい現象ではあるが、大阪と云ふ産業都府と、それを反映する處の市民性なるもの、特殊性を知る事によつて、一應あつた形式の雜誌もあつていゝのだ——と云ふ認識にまで達したことも事實である。そして、この事は内容の

如何に拘らず「川柳雜誌」をして經濟的に存立し得るまでに至らしめたことは、君の手腕であることは勿論であつた。然し、本來、僕自身としては依然として「川柳雜誌」の編輯方針には不満であつたが、それにも拘らず「川柳雜誌」が一步步市場的價値を高めて行くといふならば、吾々もまた黙してその成長を長い目で見て行くことも己むを得ないであらう。

麻生君——。

處で今度「川柳雜誌」が君の個人經營に變ると同時に八月號誌上で發表された「川柳職業人宣言」には、僕は近頃でない愉快さを感じると同時に拍手を送ることを惜まないものである。この問題は久しの間僕の期待してゐたものであるからだ。僕が「蒼空」六月號に「食へない文學」を書いたのも、此の問題の發展を期待する爲に外ならなかつた。

君は言ふ「私はいよ／＼川柳で飯を食ふことにした。いや喰べさせて貰ふことにした」と。此の言や卒直で甚だしい。たゞ僕らの關心したいのは君が如何なる方法でそれを実践するかにあるのだ。十數年間の長い同人雜誌時代の苦難から今日の域に達したといふことだけでも、君は川柳で食へなければ嘘だ。従つて此の長い歴史のたまものとして今日始めてわずかに君一人が川柳で食へると云ふことは決して朗らかな勝利ではないのだ。今後に於て幾人かの川柳職業人の出現を約束する前提でなくてはならないの

だ。最後の勝利は君が「川柳雑誌」の経営者として他の寄稿者にまで稿料を支拂ひ、自他共に生活を爲し得る時に於てはじめて来るのである。然し、それは現在では駄目だ。先ず君一人でもい、から川柳で食へるまでにする。ことよつて將來を期さなければならぬ。それに就ては誌友にも麻生路郎を食はせる爲の度量が必要であると共に、君もまた個人的經營に變更した當時の約束を履行して、超黨派的にあらゆる方向をもを収録するだけの決意が必要である。現在の状態では折角直言にも拘らず、内容は依然として舊態の儘である。君にとつて所謂異分子と見るもの、寄稿は一切ポイコツトしてゐる點は千秋の恨事である。男一丁の仕事として、然も同人雑誌を解體し第三者的經營者として立つ君にして、尙かつこの事あるのは君の爲にとらない。宜しくその保守的たると進歩的たるとを問はず來り集るもの凡ての爲に紙面を解放するだけの覺悟が今の君にとつて最も必要である。君が若し今日の機會に於てそれを爲し得ないならば、永久にそれは不可能であらう。君がほこる處の新聞紙法に據る有保證刊行もまたそれを待つてのみ將來の發展性を約束しうるものと思ふのである。

麻生君——。

僕は近時殆んど君との書信を交換はしてゐないけれども、君の動靜は誌を通じて窺知して居る。余り健康には恵まれない君が殆んど内潜在的にもつてゐる處の熱情とその

奮闘力！またよき内助者としてのよしの女史の愛情！恐らく今が事を爲すには最も高調時にあるのではあるまいかとさへ思はれる。「川柳は決して食へない文學ぢやないから安心せよ」——此れは「食へない文學」に書いた反語的な僕の結論なんだが、要するにその人を得るならば川柳もまた立派に市場價值を生むものであることを君は身をもつて證明して呉れるであらうことを僕は期待してゐる。

(昭和11・11「蒼空」)

白石朝太郎の講演より

昭和46年9月14日(火)、川柳はつかり吟社一〇〇号記念川柳大会(盛鉄もりおか荘)での白石朝太郎のお話の一部を佐藤岳俊氏が、テープを起こして記録したものである。

白石 朝太郎

……岸本水府は「番傘」の厚い本を出して「本格川柳」というものを言っているがね、あの本格川柳というのは根も葉も無いね。確か大正十三年頃「本格小説」というものが出てその名を見て付けたと思う。

たいがいの川柳家は私(白石朝太郎)のことを避けているが、それは何かに触れると私につつかれると思つてゐるんだね。

その点、麻生路郎は正直だね。麻生路郎が仙台に来た時のことを書いているんだが、そこに「仙台に行った最大の収穫は私（白石朝太郎）に会ったことである。」と書いてあってね。だから路郎は正直なんだよ。

みんな井上剣花坊なんか知らないというような顔をしているんだよ。ところがね、あれは井上剣花坊の「柳樽寺川柳会」の支部として「西柳樽寺川柳会」と言うのがあったんだよ。そこに六厘坊というのが居てね、彼は自ら天才六厘坊と言ってその主幹だったね。

そのグループの中に麻生路郎が居て、川上日車が居て、木村半文銭が居たんだ。そして少し年上だが西田當百というのが居たんだ。

その當百に川柳を教わったのが水府なんだよ。……本格川柳とは各自が勝手に思い込むことで、それは梶元紋太の「川柳は人間である」と同じものだね。みんながそれを聞いてなるほどと思うものだが、それでは「人間とはなんぞや」とだれも言わないからね。……

もしも川柳に何々調と言うものがあるとすれば、関西調というものがあるかもしれないね。関東以北の句は力ちからの句で血や肉になるような句だね。又関西は軽味の句だね。

それはうまいと一瞬思うような句で、チューインガムのような何かの味があるが血肉にまではならないもので例えば「これが恋なのか足音がそろい」という調子だね。……

臨川亭秘話

川雑岡山最後の日

政田 大介

はじめに

何というセンセイショナルな題であろう。だが「川雑岡山」ではなく「川雑岡山」である。これは臨川亭雑話というような生やさしい話ではない。川雑岡山過去三十九年の歴史の上に一大転換をもたらしたドキュメンタリーな重大事件なのである。

話は二十三年前に遡る。川雑岡山の古参会員の中には、昭和三十年七月号までの題字が、路郎書の「川雑岡山」であったのが、突如として八月号より、ラジオ山陽社長谷口古杏書の「川雑岡山」にすり変わったことをご記憶であろう。これは何故か？

川雑岡山最終号となった三十年七月号に掲載されている六月旬会の状況報告の中に、次のように書かれている。

「当日は午前中は、大阪から北川春巢、武部香林両氏を迎えて、吉備団子七集の編集会議と、川雑岡山の方針について、重要会議が開催される予定でしたが、突然なんの予

告もなく、前日からご来泊の路郎先生も出席され、会議は一瞬緊張したまま開会された。議題は川雑支部規定を中心に討議が交わされ、本社の説明が行われたが、結局川雑岡山は川雑支部としての諸条件をことごとく欠いているということになり、遂に独立し、自由な地方文化団体として進まざるを得なくなりました。」と。

更に編集後記に「世の中は規則によって秩序が保たれているとはいえ、川柳の世界にも知らぬ間に出来上った規則によって肅正の時が来たらしい。」

もともと庶民の抵抗として生れた川柳が、そんな規則の圧迫に屈する筈がない。支部を返上、川柳岡山社として発足を決めた。」とある。

更に「川柳岡山」と改題しての七月例会の句会状況として次のように記されている。

「厳密に言えば川柳岡山の第一回句会ということになりそうだが、しかしただ改題され改名されたというだけであつて、実際は川雑岡山の内容そのままの延長である。だから殊更に第一回だとか、創立発表句会とかいわない極自然な集りで見事なすべり出しであつた。」と書かれている。例会場もいつもの山陽旅館である。

当時の状況を知る資料は以上の記述があるだけで、それ以外には何もない。

爾来二十三年の歳月が流れた。路郎師をはじめ、春巢、香

林両氏はいずれも他界され、当日の句会出席者の中には、既に鬼籍に入られた人もあり、あの悪夢にも似た悲劇の日々は、過去の遙か彼方へ忘れ去られようとしている。

かくいふ私も既に老境に達し、記憶も年を経ると共に薄れつつあり、何時の日かこの重大事件の顛末を、後世柳界史家の為に、書き残しておかねばならぬと、数年前から思いながらも、徒らに歳月が経過した。

歴史家でも、ジャーナリストでもない私がこれを書くことの至難さは、勿論のことであるが、かつての不朽洞会員である路郎師の門下生でありながら、一旦筆を執つたならば、正確な事実にもとづき、私情を交えない公正無私な立場に立つて、記述せねばならない責任感の重圧があつた。

「死者に鞭打つ」という言葉がある。東洋人の倫理として、最も慎しむべき事柄ではあるが、真相を究明すればする程、「死者に鞭打つ」という結果になりかねないというジレンマがあつた。

しかしながら新人作家の陸続として登場する川柳岡山の盛況に鑑み、川柳岡山の歴史を大きく転換させたこの重大事件の真相を、私は後世史家の為ばかりではなく、川柳に精魂を傾けて作品に精進する人々に対しても敢えて勇断を以て、この倫理の背信に挑戦しようと決心を固めてペンを執つた次第である。

断つておくが、客観描写の為に、登場人物はすべて敬称抜

きにするをご諒承願いたい。

句会場と出席者

昭和三十六年六月十二日、岡山駅前裏通りにある山陽旅館に於て、川雑岡山六月例会が開かれた。山陽旅館は国鉄指定旅館であり、当時岡山駅助役として勤務していた国鉄マンの久米雄が交渉して毎月例会場として借用していたのである。

出席者は風来子、久米雄、十九平、恵二朗、耕水、麦太楼、雨水、槽声、承平、東岸子、舟楽、一策、一臍（後の俊平）、雲峰、糸柳、酔泉、鶴子、吞舟、末天坊、一太、松太、孝平、美婦適、正義、秀章、法院、葵邱、紅風、白李、三六、敬貢、水香、真琴、宇柳、旭泉子、一楽、ともえ、大介の三十八名であった。時恰も麦秋の農繁の最中で、雨が降れば出席予定の柳人も晴天の為欠席し、例月に比べて出席者が少なかった。

川雑岡山最後の句会

会場は八畳三間を打抜いた二階の日本間であった。

兼題は久米雄選「道草」、風来子選「砂漠」、武部香林選「興奮」、十九平選「映画」の四題。席題は大介選「悩み」、恵二朗選「百姓」の二題である。

会場の柳人達は、三木知事より寄贈された（昭和二十七年八月）知事盃と、次点に贈られる川雑岡山楯の争奪をめざして、必死に席題と取組んだ。

席題の締切時間が迫った頃、大介が煙草を買う為に階下へ降りた。丁度その時玄関の戸が開いたままになっていて、麻生路郎を中心に、中島生々庵の後任として新しく不朽洞会理事長になった北川春巢と、武部香林が突然入って来た。路郎はにこりともせずいきなり

「風来子はどこや？」と大介にいった。

川雑支部規定の説明に、春巢、香林両氏が来ることはきいていたが、路郎御大直々のしかも突然の来岡に、大介はただならぬ気配を感じた。

「会場は二階です。ご案内致します。」と答えて、三人を二階の会場へ案内した。

路郎突然の来訪に、会場の空気は一瞬緊張した。西側の床の間を背に中央に路郎が座り、その右側に春巢、左側に香林が座った。出席者は西側を正面にコの字形に座った。まず香林が口を切った。

「今日わざわざ岡山へ来たわけは、最近の川雑岡山支部の行き方が、川雑支部規定に悉く違反しているのです、この際改めてもらいたいからである。」と前置きして、支部規定の説明を始めた。要点を列記すると次の通りである。

1 川雑まつりを毎年七月十日（路郎誕生日）に、全支部一せいに開催し、路郎が出題し同じ題で各支部共通競吟、優秀句に路郎賞を呈す。

2 支部句報はガリ刷で八頁以内とすることとし句評、柳

論等載せてはならない。句報は他支部へ売ってはならない。第三種郵便認可は不要である。

3 支部会員即川柳雑誌会員とす。(支部会員は全員川柳雑誌を読めということである。)

以上のような厳しいものである。

当時川雑岡山は会員数四五〇〇名近くあり、句報も昭和二十七年五月より活版印刷になり、同年十月第三種郵便の認可も受けていた。句評欄も随筆欄もあり、紙数も十二頁建であった。

この頃の岡山県下には、五〇あまりの吟社があつたが、正式に川雑支部を名乗つた吟社は、岡山、弓削、備前、倉敷、赤坂、大原であつた。特に岡山支部の場合、会員の構成分布状況は、岡山県の北部特に津山を中心として番傘、ふあうすと系の吟社を除く他は、岡山を中心に各地方吟社の代表者、幹部会員が集まって結成された総合支部ともいふべき形態のものであつた。昭和二十五年より山陽新聞社が読者文芸として川柳を取り上げ、またその年の十二月に第一回の読者川柳大会を開くに及んで、県下に燎原の火の如く川柳熱は燃え上り、吟社の結成も職域グループ、療養所関係にも及び、川雑岡山の会員数も自然発生的に増加の傾向を示していた。従つて支部規定の規則の枠は、とうてい守られるべくもなかつた。

このことがまず路郎には気に入らなかつた。

路郎の主張

麻生路郎といへば柳歴五十年になんなんとする柳界の大御所である。しかも彼は昭和十一年、多くの柳人の反対を押し切つて、すべての職を放棄し、自ら職業川柳人を宣言したプロなのである。

彼はしばしばこう言つた。

「川柳を上手にならうと思へば、俺に体当りでぶつかつて来い。それは川柳雑誌へ投句することだ。投句することによつて選句指導を受け、自己の句の歩み方がおのずと判る。決して他の系統の柳誌を読んだり、他の吟社の句会等へ出てはならぬ。それは句が乱れるからだ。」

これは華道、茶道の家元の指導原理と意を同じくするもので、他柳派に対しては、頑迷なまでに拒否反応を示す潔癖さであつた。路郎の川柳に対する熱情は、ある意味ではワンマンであり、柳論、川雑経営に関しては、一切外に耳を貸さない頑固さを持つていた。地元大阪に於ては勿論路郎の命令は絶対的のものであつた。

川柳に命を賭けた職業川柳人の路郎にとつては、当然な主張といふべきであつた。

東京の川上三太郎、大阪の岸本水府、西宮の梶元紋太等の日本の大家と称せられる指導者達も、路郎の金城鉄壁の牙城たる岡山へは、路郎に気兼ねして一步も足をふみ入れなかつた。このことによつても路郎の威力が如何に強大な

ものであったかが判る。又山陽新聞の読者文芸の選者も路郎独占ということで契約が成立していた。

川柳の始祖柄井川柳は点者（選者）としては、すばらしい選句眼を持っていたが、作句は見るべきものがなかった。それに引きかえ、路郎は選句眼の確かさと共に、作句も名句が多い名実共に、偉大な川柳教の教祖的存在であった。しかし経済的には恵まれなかったと言える。現在の華道家元が何億という脱税を、あばかれるというような、資産造成のシステムとは異り、路郎の場合「川柳雑誌」の経営が主たる生活源であるからである。このためには雑誌の印刷を刑務所でやらせる等、少しでも印刷費の軽減を計る工夫をしていた。

三太郎の場合は、東京という日本の中枢に在住しておるという有利な立地条件により、十五の雑誌、十の新聞の選者として毎月五万余句の句を選ぶ選句料が入っていたから、自分の雑誌（しなの川柳社石曾根印刷所で印刷）が売れても売れなくてもよかった。路郎はそうはゆかなかつた。川雑支部会員即川柳雑誌会員でなければならぬ理由は、指導面もさることながら、経営面の必要性からでもあった。

支部会員が支部を通じて、川雑本社へ直結することこそ、岡山県の川柳を発展させる最短コースと確信していた風来子は、支部会誌には必ず川柳雑誌の広告を載せ、送金

料は支部負担で川柳雑誌の購読をすすめて、あらかじめ前金を本社にあずけ、新会員入会の都度差引くというシステムを採っていた。

しかしながら川雑岡山が、風来子の真摯な努力と、卓越した経営手腕により、地方柳社としては組織が強大になり過ぎた。会員が増えれば会誌も充実してくるのは当然の成り行きであるが、路郎には岡山支部の会誌の内容が充実すればする程、それを好まなかつた。初心者達は、岡山支部会誌だけで満足するから、川柳雑誌の読者が増えない。いわばライバル的存在と目されるようになっていた。

かつて徳川幕府の時代、地方の大名が経済力を蓄えて、中央の命令に服従しなくなるのを恐れ、参勤交代という制度を設け、その経済力の削減を計ったという故事があるが、路郎には、岡山川雑支部が余りに強大になつた為、何か陰謀をたくらむのではないかという疑心暗鬼があつたのではなからうか？

その証拠に川雑岡山を支社に昇格させ、風来子を支社長にするが、その条件として「川雑岡山」の編集から手をひいて本社の編集や営業を担当するようにと下命し上阪をうながした事実がある。公務員として生活している風来子は、勿論生活的にもその現職を捨てることは出来なかつたし、またこれまで誠心誠意育ててきた川雑岡山を放棄することは出来なかつた。

路郎 激怒

さて句会場は香林のくどくどしい支部規定の説明のあと、路郎は風来子に向い

「この規定が守れるかどうか？」と詰問した。風来子は

「それは無理であります。」と答えた。路郎の表情が急に険悪になった。

不朽洞入会順序からいえば、久米雄にまず意見を聞くべきが順序であるが、岡山県で最も古い不朽洞会の優等生である久米雄の気持は、すでに路郎には通じていたのか、久米雄には尋ねず「十九平はどうか？」と尋ねた。十九平は

「出来る限り支部規定に沿うよう努力します。」と答えた。かつては陸軍中佐として三軍を叱咤した十九平であるが、岡山支部の副主幹格の彼としては、盟友風来子を捨てることは出来ないし、さりとて師と仰ぐ路郎の命令に叛くことは出来ない。進退極まつての歯切れの悪い返事である。

「大介はどう思うか？」と路郎

「現状維持でゆきます。」と大介

「現状維持ということとは、十九平の意見と同じということとか？」路郎は畳みかける。

「いや、このままの状態を続けるということです。」

川維不朽洞会員であり、川維赤坂支部の代表者であり、かつ川維岡山の同人でもある大介は、温厚であるが、正義感の強い男である。

大介の肚はすでに決まっていた。風来子と行動を共にしようというのである。

大介の色よい返事を期待していた路郎は「ブルータス汝もか!!」と心中にがり切った。

「恵二郎はどう思うか？」

「十九平さんと同じ意見です。」

温厚な彼のことであり、路郎に心酔している彼としては当然の答であった。

「他に意見のあるものは言いなさい。」というと、日比製練川柳会の代表者迫田美婦適が、

「川柳雑誌以外の柳誌を読むとか、他の柳派の句会へ出るなどということは、余りにも文芸の世界に杵をはめ、自由を束縛するものではありませんか？」と迫った。

これに対して路郎は持論を繰返し強調し、信念を曲げなかった。

突然大介より右手三、四人目の席へ坐っていた北山槽声が大きき声で

「路郎先生！あなたは川柳を通じて商売をなさるおつもりですか？」と鋭く切り込んだ。

槽声は冠句作家としての長老であり、西大寺市文化連盟の文芸部長である。芥子川柳社（西大寺川柳社の前身）の重鎮であり近年川柳に転向した硬骨漢である。

天下の路郎に対し誠に無礼とも思える質問をつきつけ、

路郎の激怒は頂点に達した。

風来子に向つて

「岡山支部を直ちに返上せよ。君は只今限り不朽洞会員を除名する。」と顔を引きつらせテールを叩いた。この時大介の差向いに坐つていた恵二朗が突然涙声で

「路郎先生！ もう何も言わないで下さい！！」と叫んだ。

岡山県の北海道といわれる県境の大原町から、毎月の句会に皆勤の熱心な彼であり、路郎を神様のように信奉している彼、旧家に育ち生来のユーモリストで人と争いなどしたことのない善人そのものの彼にとつて今、目の前の師弟の不幸な世紀の対決に対し、彼としては「忠ならんとすれば孝ならず、孝ならんとすれば忠ならず」のかの平重盛の心境そのものであつたに違いない、後で判明したことであるが、恵二朗選の席題の選句を失うという前代未聞のミスを起したことから推しても彼が如何にショックを受けたかが判る。

除名を申渡されて風来子も負けてはいなかつた。

「お言葉を返すようですが、岡山支部は本日限り返上致します。不朽洞会は先生に除名される前に、私の方から脱退させて戴きます。」凜然と言ひ切つた。

それは土壇場に追い込まれた窮鼠の姿でもあつたが、彼は岡山の川柳の発展のため、ひいては川雑本社のために、何も悪いことは一切しておらないという信念があつた。

路郎は続けて「今日の句会は風来子に関係のない句会で

あること、支部のゴム印、看板、会員名簿、会費その他一切の財産は、本社へ持ち帰つて預る。」といった。

風来子はこれらのものは総べて会員のものであるといつて提出を拒んだ。

血で血を洗う息づまるような争いは終つた。

ファイナーレ

風来子は

「先生ともうお逢いする機会はないかも知れませんが、お別れに短冊を一枚書いて下さい。」と冷静な口調で言つた。

こう言われれば路郎は拒むわけにはゆかなかつた。

「いつまでも肉と葱との仲であれ」 路郎

とさらさらとしたため席を立つた。鮮やかにして静かな退陣である。数分前の激しい論争のショックで誰一人として見送りに立とうとする者はいなかつたが、風来子は路郎のカバンを持つて階下に降りて行つた。春巢、香林も無言のまま続いた。

「先生長い間いろいろお世話になりました。どうかお元気で——」と風来子。

「君も元気で頑張り給え。」と路郎は言うて山陽旅館を後にした。時に昭和三十年六月十二日午後三時半であつた。

人類は悲しからずや左派と右派

路郎

路郎の名句そのままを地で行くドキュメンタリードラマ

の終焉であり、川雜岡山最後の幕切れの日であった。

(昭53・9「川柳ますかっ」と No.411)

一日逢わねば……

—明治時代からの柳友として

岸本 水府

路郎君が七十になる——おどろいた。

青年だった明治時代の顔が頭にこびりついているから、人の見る眼とちがった「若さ」が私には迫ってくる。(路郎君からみた私も、これと同じような感じがあるかも知れない)

明治四十二三年頃から知り出して、四十四年ごろがその交りは絶頂だった。そのころ大阪には関西川柳社の会より外になかったが、特にその中の路郎、青明、五葉、半文銭の四君と私の五人は、文学青年として肝胆相照らす間柄となっていた。この交りが実をむすんで「短詩社」となった。
*雑誌「短詩」は二号より出なかつたが、その結束は固かつた。結束というとむつかしいが川柳の上のつながりは固く、つきあいは、いつも笑いがただよい楽しいものだった。

五葉君の句だったか、

われ彼を彼われを訪う日曜日

という句は、正にその辺の消息を物語るものであった。一日逢わねばあほうみたいだった。議論もした、百句会もやった、徹夜もした。川柳の事務所をつくろう、そろえのゆかたをこしらえようなど空想が空までのびて行くようだった。その中で路郎君と私は月の内半分は逢っていた。一緒に当百庵で、晩酌の中へ割り込むようなこともあった。番傘の出る大正二年前後、路郎君は東京に居た。大阪を去る時路郎君から私への留別の句は

いつまでも若かれ長髪刈らであれ

この短冊は今も持っている。私から路郎君へ送った送別の句は控えがない。大阪駅へ見送りに行つたが逢わずに空しく帰つたと日記に残っている。

間もなく路郎君は帰阪した。大正四年だったか、名古屋から帰阪した川上日車君と意気が合つて「雪」を発行、川柳革新に乗り出した。私は「番傘」。しかし路郎君との交りに変りはなかつた。ただ、あのころのようなひとり者時代とちがつてお互に忙しくなつていった。

最近、古写真を出してみた。いわゆる「あの頃」を見ると、路郎君と私だけになつてしまった観がある。川柳をつづけていることが「若さ」を保つていてくれているにちがいない。

(番傘川柳社・主幹)

*雑誌「短詩」……雑誌「わだち」のこと。

(昭32・7「川柳雑誌」No.362)

愛の鞭は厳し

— 恩師を語る —

中島 生々庵

先生御還曆の思い出

戎橋筋のオメガで御還曆祝賀の集りが持たれたのは昨日の様な気がするが十年になる。予想を遙かに上廻った盛會に世話係が目面白黒さしたり当時の電力事情で懇親宴の最中停電となつてロソクの灯で祝杯を挙げたり、その雜然たる中に参会者一同の親しみと愛情がみち溢れてほんとうに心から御健祥を寿ぐ雰囲気がひし／＼と感ぜられた事が今日でもはつきり脳裡に浮んで来るのである。真っ白い麻服の先生の後につゝ、しまやかに葎乃奥様が続かれて会場に入つて来られると満堂破れるばかり、やがて「六十一まだ情熱は燃えに燃え」と云う世紀の名句が発表せられてあれから十年である。先生は益々お元氣だし奥様も一寸もお変りがない。芽出度い限りである。先生は愛妻家と云うよりも私に云わしむるならば敬妻家と申上げた。先月私の三男が御夫妻で掘ごたつにお並びになつて居

られるのをスナップしたのを拝見しても一分の不自然さもなく文字通りのベターハーフであらせられる。宜なる哉我が不朽洞会員は殆ど全員愛妻家揃いで一偉觀を呈して居る。もう間近い御夫妻の金婚式を門下生一同は首を長くして居る次第である。

門下生に対する愛の鞭はきびし

川柳人としての或は社会人としての人間を陶冶すると云う意味での門下生に対する先生の愛の鞭は些かの躊躇なく打ち落される。仔獅子を谷に蹴落すその落された仔獅子であるが門下生の大勢の中には先生の愛の鞭が必要以上に強すぎるかの様に受取る仁が時として生じるわけである。私は先生に対する門下生の姿を長い目で見て居ると面白い流れとなつて一つのほぼ定まつた方向に力強く流れて居る事に気付く。私はその流れに従つて時間的に三つの時代を分けて見て居る。第一は陶酔の時代、第二は不安の時代、第三は尊崇の時代である。門下生のすべてが先生の人徳と云うか、作句の態度と云うかに一度は必ず無条件に惚れ込み陶酔する。そしてそのまゝ、第二の時代を経験する事なしに第三の時代に流れ移るのが大多数である事は事實である。然し先生が余りにもアクの抜け切つたお人柄のために——気取り屋さんでない事に一種のたよりなきに似たものを感じたり、或は情と理に徹する恐ろしく強い

大きな力の持主であらせられるために圧迫感の様なものを感じたり、とにかく先生にピントを合せるのに多少とも時間と努力とを要する仁が出来て、第一の時代に受け取って居た「麻生路郎」に對し何となしに満たされない不安若しくは懷疑に近い面さえ生ずると云つた時代を経る人もあるわけである。そう云つた御仁も結局は第三の心からなる尊崇の時代と云うものに落付いてゆくのが普通のコースである様である。而もこの第二の時代に相当悩んで來られた御仁である程、先生を尊崇慕慕する念は、より徹底し、より強力であるとは私は見て居る。その理由として「麻生路郎」が五十年一日の如く巧まれない生地のみ、の「麻生路郎」なるが故であると私は私なりに解釈して居る。

先生は大変かたくなに見える

私達にとつて身動きならぬ程白と黒との区別が厳しくて頑固でワンマンの存在であるやの事がある。然し決してその頑固とかワンマンとかが今日の言葉で云うところのドライなそれでは絶対にない。目に涙もろい涙を一ぱいたためての頑固さであり温かい腕で抱きしめてのワンマンであるのである。正しきに徹する非妥協性とその信念の強さが熱涙の裏付けによつて生地のみ、の恩情に迄変化し先生の御人徳の体臭となつて私達門下生に迫つて來るのである。

先生の夢は大きい

我れ世界の川柳家たらんと若い時から云つて居られたと承つて居る。古稀を迎えられた今日否、喜寿だろうが米寿だろうが、「燃えに燃えあがる情熱」に乗せて先生の夢は益々大きく生々若鮎の如く烈々太陽の如く將に懦夫をして立たしむるのである。先日エレンブルグが見えた時「旅人」「福寿草」「私達」の三句集を「川柳とは何か」に添えて贈り、その席上御自作の三句を御説明なされた由。先生は二十数年前から川柳の外国語訳を真剣にお考えになり、故笠原路生教授と共に親しく手を染められた事も承つて居る。エレンブルグは精読と且つ出来れば翻譯印刷の勞もとる事を約束したそうで先生も可なり御満足の御様子で「川柳の生命たるリズムを外国語で伝える事は至難中の至難であるけれどもたとえ句の解説に過ぎない程度であってもソ連人の中に川柳が判つて呉れる人が出来る糸口が今度の事で見出された様気がする」と云つて居られて夢よ今一度のお言葉をお続けになり「古稀の祝がすんだら米國やソ連までもゆきたいと思うからその節はよろしく頼むよ」と云われている。

先生は大変リアルな方である

大胆にして細心と云う昔からの言葉は先生のために造

られた感じさえする。川柳家と云うものが感情的な情熱一点張りでは駄目である事は論をまたぬが先生の御性格の裡に想像を絶した冷たいリアルが流れて居るのも当然とは云え、私達の心を動かすものがある。交叉点を渡る際御自分がその交叉点に到着される迄に「青」になつて「青」には足を踏み出すことなく一度「黄」になつて「赤」になつてこんど「青」になつてから歩き出されるのが常である。門下生がいろいろ私生活の事で先生に御相談を持ちかけるのが可なり多いがそれに対する御指示等も全く抜かりのない完璧のもので何時も頭が下る。この正月、梨里さんの御難産に際し前日迄に関係方面の電話番号書抜きを完全に整備されてあつたため、さしもの危急時に当直医、医長、手術室、パトロール、救急車等々掌を指す如く数分の裡に芽出度くゴールインしたあのお手際はよくこの間の消息を物語る一端である。アルコールが入つて居ようと居まいと先生のお伴して居るとこのゾンデがたえず私達にふれて来る。

先生は有名な読書家である

「近頃漱石を初めから系統的に読み返えして居るよ」こんなお言葉を承つたのはたしか昨年暮れだったと記憶して居る。待たされる応接間、選句の合い間の会場等で一寸の時間でもあれば御愛用の横長の茶皮ケースから「漱

石」をとり出して読んで居られる。多分御家庭でもそうであらうと想像して居るが心からたのしげにふか／＼と読んで居られるお姿を最近ちよい／＼お見受けする。先生の広く深く詳しく洋の東西を問わぬ読書力の旺盛なものにはたゞ／＼舌を巻いて眺めるばかりであるが最近の「漱石」には御自分の長い川柳生活と余程ふれ合つた点がある御様子で漱石の若い時代の诗情豊かな天下無双の写生文が、社会百般の事から、生活の事に転じやがて「明暗」に迄移りゆくその変化が先生の川柳生活五十余年の年令的变化と大変相通ずるものがあるが面白いのだとお語りになり御自身の御近作が興味や技巧を離れ淡々水の如き域にあらせらる、事も御指摘になつて「漱石」にひかれてゆくお心持ちを時にふれてはお話下さるのである。之れは私達門下生に対して本の読み方味わい方等を身をもつて御教示下さつて乱読の弊をお戒めになつてのお言葉であると頂いて居る。

先生の御健康を思う

私達が朝夕心を痛めるのは先生の御健康である。七十年の歳月を常人の十倍百倍酷使して来られたその健康の源はどこにあるか。藪医竹庵的医学では到底説明は出来ない。問う人あらば先生は即座に「精神力だよ」とお答えになるだらう。燃えて燃えて燃え揚つて何物も焼きつくさず

にはおかない精神力だ。之れは明らかな実証がいくらでもある。然し私達門下生が先生の御健康を御案じ申上げる取越し苦勞は全く無理無用であろうか。先生は近來お眼がお疲れになる。何とかして余りの劇しいお仕事や睡眠不足、わけても小さい活字に視力を費される事を御心配申上げて居る。又近來はお好きな酒量も減じて来て居る。これは先生が御健康に注意されたり、或は氣分的にたのしいお酒だけをのんで居られる結果の様にもお見受けして居る。地方支部等へ御出席に際し、その地方の方々々が千載一遇のおもてなし下さるのは勿論結構であるが旅のお疲れや揮毫講演等御氣遣いに加えての過重サーピスは心して頂きたく切に思うものである。

私達門下生の悲願

一年の一ヶ月一ヶ月の一日でもいゝから先生にほんとうに心から安らかな生活の憩を差し上げたい。これは曾て先生の川柳生活五十年祝賀の際の企劃の一部でもあったので是非とも実現せねばおかぬ私達の悲願である。その第一は先生をあてもない浪々の旅に出して上げたい事、第二にその旅のお帰りを静かな方丈に一机を備えてお待ちして居る事。そこから湧き出るであろうとこの玉句のかずく……考えて見る丈でも胸が躍る。決してこれは私達の夢物語ではない。

大巨星にも百年の事がある

御還暦がすんだら古稀だ喜寿だ米寿だと祝酒に浮かれて常日頃は先生お一人にばかりほんやり甘えて居ていゝものだろうか。誰しもふれたくない事乍ら必ず一度は先生にも百年の時がある。今日のままでいゝのか。数年も前から私は折ある毎に若い不朽洞会員諸子に提して居るところがあるが私達門下生がほんとうに先生を尊崇し、先生のみ心を心として居るとしたならば今日からしつかり思いをここに致して備えおく事が先生への御報恩の道の一つであると確信するものである。(本社不朽洞会・特別会員)

(昭和32・7「川柳雑誌」No.362)

ある日の恩師

私達の恩師、麻生路郎先生のある年のある日のことを、その門下生である不朽洞会員が、ここに飾る感激の思い出展——(編集局)

光明を見つける

丸尾潮花

山積された川柳の中に埋まってお忙しい日常であっても、私達が疲れている時は決してお手伝はさせられない。君は今日疲れている様だから遊んで帰ったらいと言われ御自分も私と共に手をお休めになつて「レコードでもかけて賑かにやれ」とおっしゃりながら、御自分でもあぐらの膝に三味線を入れて爪弾きで端唄も歌われる先生である。

昭和ビルに事務所のあつた頃、生きていたことがわずらわしくなつて先生に御相談に行つたことが有つたが、先生は、君はまだ死ねない。世の中の人のためにも、自分のためにも、もっと、もっと泣かなければ死ねない。まだ君の泣き方は足りない、とおっしゃつた。其れ以来、夜中に家を飛び出して波打ちぎわに走つたりして妹達を悲しませ

なくなつた。

ゼスチユア合戦

黒川紫香

○恐縮したこと

先妻が亡くなつた日、まだ何処にも、通知をしていない、てんやわんやの最中に、路郎先生の見舞を受け、非常に恐縮感激しました。

○楽しかったこと

北支部の頃、同好の者と宝塚で先生を囲んで、一泊を楽しんだ時、興重なるに従い、ゼスチユア合戦がはじまり、其の時の先生の、ゼスチユアぶりが優秀且つ見事であつた事が忘れられません。

河豚の毒素

須崎豆秋

二十年前のはなしですが、千日前で友達と河豚を食べていたところが急に胸が悪くなり出し「やられた」と直感したので、なにがなんでも路郎先生へだけは今生のお訣れをして置こうと思ひ立ち、木枯の吹きすさぶ夜の十三間道路を駆けまろびつへドを吐きながら玉出のお宅へかけつけましたところ、先生が「なんじやい豆秋青い顔して」と聞かれますので、実はかくかく、しかじかと申し上げると、

笑いながら「一杯やれ癒るわ」と言われるもんですから、末期の水のつもりで呑んだんですが、何の変哲もなく命に別条ありませんでした。

しかしそれ以来河豚の毒素で頭が少し変になったと見え、ちよいちよい無作法なことを仕出かしては先生へ御迷惑をおかけしていることは誠に汗顔の至りです。

それにしても昨年の暮れに私が不朽洞へ復帰の際にお伺いした折には先生が「菊池寛の父帰る。じゃなくて子帰る。じゃからのう……」とおっしゃって迎え下さった寛仁なるお言葉には、目頭が熱うなるなどという形容を通り越して頭から足の爪先までジーンといたしました。もう河豚はコリゴリです。

純綿の握りめし

浜田 久米雄

戦争中のこと。たしか十八年のはじめ寒いころぼくがまだ広島にいた頃だと思ふ。路郎先生葭乃奥様とがちょうど広島におられる息子さんに面会に行かれる途中、打合わせてはくは郷里よしなが駅から汽車に乗ることになった。これを聞いた母が先生が通られるなら弁当を差上げねばならないといって、そのころ田舎の人だけがたべていた純綿のにぎりめしに卵焼きをどっさり作ってくれたので、持って汽車に乗った、満員列車の中でうまそうにたべておら

れる先生夫妻の横でぼくは制服制帽ゲートル巻きで立っていた。今から思えばまことに阿呆らしいことだが、その時分の純綿は大したものであったように思う。十四年前の恩師の姿であった。

(昭32・7「川柳雑誌」No.362)

父を想う

西村 梨里

父が亡くなってまる三年の月日が流れた。日頃慌しい生活を送っている私にも、ようやく父がこの世を去った……今はもう父と話すことも出来なくなったのだと云うことが、領けるようになった。

しみじみと父のことを思うとき、私は嫌でも父と共に過ごして来た日のことを、川柳と共に過ごして来た日のことを重苦しく思い出す。

凡そ譲歩すると云うことを知らなかった父は、ついに自分の思い通りの人生を生き抜いた。私が書こうとすることは、父の人格を或は傷つけるものかも知れないが、父の存命中には云いたくても云えなかったことを、一度は誰かに聞いてもらいたいと思う。

川柳を社会化するため、当時不定期刊行だった柳誌の月

刊々行、東京大会や、朝日会館を借り切つての「川雑」一〇〇号記念など次々と奇想天外なことをして来た父は遂に昭和十一年職業川柳人となり、川柳家から白眼視されながらも終生その意地を押し通したが、考えてみれば意地だけでそんなことが出来たのではない。北川春巢先生が甲辞の中で「十七文字に魅入られた人生であつた」と、云つておられるが全くその通りだと思ふ。それらのことも後になつて云えば何でもないことのようにでも、人に先馳けてやること云うことはなかなか、まして私達が子供の頃には「川柳って何や」と云う人が多く、「俳句のようなもの」だと云つて説明しなければならなかつた時代であつて、川柳人口もかなりふえ、川柳が盛んになつた今日でも朝日会館を借り切つての川柳会をするなど、おそらく至難な問題であらうと思ふ。

父は非常に性格の激しい人で雑誌が刷り上つて来ても誤植を見つけると「あつ」とびつくりするような声を上げて「こんな誤植がわからんなんて……」くどくどと腹立ちを繰返すのだつた。またちよつとした家族の者の落度に対しても、この上ほろくそには云えないだろうと思ふくらいに、人を叱るにしてもありつたけの力を傾けて叱らねば気が済まないような父だつたが、晩年はやや普通の人になつていて、時には私達の言を入れてくれることもあつた。こうした性格なので父の許を離れて行つた弟子もあると思

う。何と云つても浄瑠璃語りが三味線を習つたり、芸者が踊りを習つたりするのは違つて、趣味人を相手なのだからと私はいつも云うのだが、よくもこの父について来て下さつたものだとも多くの弟子の方々に只々感謝せずにはおれない。

父が職業川柳人となつた当時、私はまだ小学生で何も知らなかつたが、今から思えばその頃だつたと思ふ。母が心臟病で倒れたこと、調味料にもことかくような日もあつたこと、書棚の本をかかえて古本屋へ行く父、何時もしてもらつた誕生日のお祝がして貰えなくて泣いたことなど、子供心にそうした事を今も覚えてゐる。このような生活がどれくらい続いたかは覚えなければども、私は世間の川柳家にこれだけは知つて貰いたいと思ふのは、父が他に職業がないからこの道を選んだのではないと云うことだ。

当時の高商を卒えた父が、他の職業につけばそれ相当の地位で迎えられたのに、五人の育ち盛りの子供を抱えてたべられない社会へ飛び込んだのだと云うことだ。それからどのようにして来たか私は知らないけれども、恐らく文字通りの苦難の道であつたろうと思ふ。それがどうにか軌道に乗るようになった今日では「あれは川柳を食ひものにしてゐるのだ」と云う見方をしている人が、おそらく弟子の中にでもいたと思ふ。私は或る人から直接こう云うことを聞かされた。その人は詩人で純粹だからこそ、直接こうし

た事が云えたのだと思うのだが、父が或る人に謝礼金を請求したことを、職業人だからこそきかないと云われた。まさか今時、詩人だからと云つてカスミを食つて生きていられるような人があつたら、お目にかかりたい。まして仕事をするためには人も雇っている。食わずに仕事をすれば美しいのだろうか、その人からは後援の意味で雑誌に広告を貰つたこともあるし、父の味方にもなり、後援もして貰つたし、私は感謝しているけれども、その時それらのことを恩きせがましく云われたとき、なぜか胸を強く突き刺される思いだった。勿論趣味雑誌の広告などというものは広告の価値を考えるよりも、後援の意味でしかないのは承知である。それだけに広告料などと云える程の額でもない。他のどんな趣味にくらべてみても微々たるものでしかない。

それでも川柳の世界では大きな後援であつたのだ。

私達一家がたべられないとき、お世話になつたわけではないのに、私は思わずその人の前で泣かすにおれなかつた。私はこの口惜しさを永い間かみしめながらも、父の存命中にはやはり云うことは出来なかつた。私が今こう云うのは決して川柳家に弓を引く気持ちで云うのではない。川柳をお金儲けの道具にして来たのではないと云うことを亡くなつた父のためにも、また残された私達のためにもわかつて貰いたいと思うだけである。父が川柳以外のものすべてを捨てる気持でこの道を選んだとき、私達はまだ幼な

くて父の行動をとやかく云うべき力もないまま知らずに引き込まれた世界ではあつたが、成人してからは父に對する批判も持ち、子供としての立場も主張した。父は川柳のために殉死しようとも悔はないだろうが、私達はそんな巻き添えは食いたくない。かつて文科を志して親の許しが得られずに廻り道をした父は、子供達には希望の道をとかねがね云つていたし、最も理解のあるはずの父ではあつたが、家庭の事情がそれを許さなかつた。私は父に色んな形で反抗した日もあつたし、口論するようなこともあつた。あの氣の強い父が本当に涙を流して「済まなかつた。もう川柳は止める」と云つて泣いたことを今もまざまざと思ひ出す。

然し父に川柳が止められようはずがないし、私達もそこまでは期待してはいなかつた。結局は何となく父の巻き添えを食つたような生活がつづいたが、こうしてみんながこんなことをしていてもし父が死んだらどうなるだろう、女の私はまだよいとしても男の兄や弟には将来がある。何時も大きな不安と焦燥の毎日であつた。何だ彼だと云いながら父の仕事もまあまあ軌道に乗り川柳で生活しているようになり、子供達もおそまきながらそれぞれの道を選んで川柳の家を出たが、今思い返してみても永い日々重苦しい私達の青春時代であつた。来る日も、来る日も編集や校正に追われ、友達と約束をして郊外に出たり、映画を見た

りなどと云うようなこととは縁の遠い明け暮れであった。父が死んだ今、既にそれぞれの道を選んで歩んでいるが、いまさら父にうらみつらみを並べようとは思わないが、これ程の犠牲を払ってするべき仕事だったのだろうか、それ程川柳と云うものは価値のあるものなのだろうか、いや、価値があろうとなかろうとそうせずにはおれなかった父なのだろう。私は今、父の死を悲しむ気持とは別に嵐が止んだ後の安堵に似た気持をゆつくりと味合うのである。

(昭43・7「川柳塔」No.458)

ああ、路郎君

岸本 水府

訃報胸を打つ。
思えば――

僕たちの関西川柳社が出来て

一年目の明治四十三年の夏の句会に、

僕のとおりへすわった

千松という作家、

さかんに句が通る。

そのはず 今日ではじめての

人ではなかった。

僕より古いとわかった。

これが後の路郎君だった。

この日から、僕とのつき合いが

始まった。

はたち代の者五、六人が寄って

雑誌「わだち」を出した。

むろん路郎君も僕も加わって――

たのしかった。

「雲の峰人生きんとす生きんとす」

同志五葉の作である。

このような意気で進んだ。

大正二年雑誌「番傘」が出る時、

君は東京に居た。

一年後に帰阪して同人に

加わった。

「番傘」初期の何月号かは

君の新婚の愛の巣から、

ハトロン紙を切つてのりをつけて

三人で発送した。

大正七年、僕は萩の茶屋へ

移った。

君の家の三軒目で、

踏切の向こうには半文銭が居た。

川柳村が出来たとよろこんだのも束の間、

僕をのぞく二人は日車と組んで

川柳革新の旗をひるがえした。

大正十三年、君は今の

「川柳雑誌社」を起こし

本筋の川柳に返った。よかつた。

創立句会のフラッシュユ

燃えたあと——

君は僕の肩をたたいて

「頼むよ」と言った。

大阪柳界とみに繁栄。

やがて光陰は波濤の如く、

お互い団体をもつことの

苦節を見た。

戦争——終戦

柳界の風雪もまた長くきびしかった。

土地に心に 離れ住む 春夏秋冬。

昭和四十年七月七日の宵

七夕の星は空にかがやいた。

この光る星は、君の作品と

君の選んだ句だった。

命ある何万の星こそは

今後永遠に光を失わない。

この星の下で昔の君の名の

千松君 さよならを呼ばせてくれ。

切に冥福を祈る。

病床にて

(昭40・8「番傘」)

あの人は死を知っていた

——老いたる友よさらばさらばですとは涙——

川上 三太郎

「先生、大阪の麻生先生が——」

けた、ましい門生のKの電話に思わずこっちもあせった。

「何だと」

然しやっぱりそうだった。麻生さんは死んだ。私は卓上

の受話器を手にしたまま、暫し呆乎とした。

「やっぱり、やっぱり」

こうと知ったら四月か五月に西下してあの人を見舞うべきであった。然しあの人ゝの雑誌にあの人の病気が多忙かのどちらかが書かれてない月はなかった。柳に風で——まづ今月も、それが三月、半年、一年とこのところあの人に会っていない。それどころか私はあの人から私が「大附属病院」に入院中二度も見舞われてゐるのであった。そう思つて考えてみるとあの人は自分の病氣は棚に上げて、ひとの病氣となるとよく案じてゝ雑誌に私の病氣の事に二三度触れていたつけ。すまない。

路郎さんと私の交遊は大正の初期からだから、五十年以上になる。吉川英治だの私たちが東京でゝいまの川柳はどうかしなくてはならぬと当時の先輩の作品がまだるっこく若さのまゝに起ち上がった時、関西でこれに應じて若しくはあちらが起ち上つたので東京のわれれが相呼応したのか、とにかく東西で心一つにして作品行動に奔走したのだつた。その西の一人にあの人がゐてくれた。いやむしろリーダー格であつた。当時心身ともに馬のような私は爾来たび／＼西下した。西下すれば必ず彼の家を訪れた。岸の里、文の里、天下茶屋とそんな土地の名が思いだされる。二人はしば／＼夜を徹した。一升瓶の数が殖えていく。彼の門生が誰かしらいつもいた。そうして私たちの談論と共に風発した。乱耽、万よし、かほる等、等々——。

それが昭和の初期まで続いた。だが一年のうち三回が二回になり一回、時には一年中相会わずに過ぎた年もある。いま思えば残念でもあり口惜しい。友には会つておくべきである。

川柳雑誌の本年七月号の「不朽洞句帖」には参つた。六句とも秀拔であり心いたましく哀しく自らを傷つかせた。中でも

雲の峰という手もありさらばさらばです

には私をも傷つかせた。絶唱だからである。あの方は整然と死を知つてゐた。死そのものを、その日を、その時を——。

(昭40・9「川柳雑誌」No.46)

恩師路郎先生を偲んで

北川 春巢

(前略)

私をはじめ先生にお目にかかつたのは、忘れもせぬ、阪大川柳会にはじめて出席した昭和十二年五月であつた。丁度二十八年前であるから逆算すれば先生のお年は当時四十九才、今の私よりも少しお若かつたわけである。阪大恵済団の小会議室で、コの字型に配置されたテーブルの椅子席であつた。先生は正面の椅子に座られ、それに次いで

故長崎柳秀先生、故笠原路生先生、故石崎洗塵先生、故尾崎方正先生、現阪大名誉教授布施筑川先生、現大阪警察病院長井上湧三先生その他「大川端」に名を並べておられる方々が、文字通り綺羅星の如く居並んでおられた。「大川端」は阪大川柳会創立五周年記念に昭和十年発刊された句集の名前である。私は入会の記念として同書を一冊頂き、現在も愛蔵している。当時の阪大川柳会のメンバーで今も川柳を続けておられるのは、佐野菜こと西尾菜氏ただ一人だけである。先生はお髪もお髭も黒々として、川柳家というよりは、居並ぶ医学博士の上に「大」の字をつけて、「大博士」と呼びたいご風貌であった。その時抜いて頂いた句も忘れはしないが、柳秀、路生などの大教授の、句が抜けた時の子供のようなお喜びの様子も忘れることができない。阪大川柳会の句は、その後も「川柳雑誌」の各地柳壇欄で発表されていた。

(中略)

路郎先生のご選句ぶりは、当最も最近も変わらず、コップのおチャケを黙々と飲みながらの選である。添削ということとはされなかった。質問があれば答えられたが、時に三才の句の批評をされることもあった。しかし三才を抜くということがすでに批評である、というようにおっしゃっていた。(以下略)

(昭40・9「川柳雑誌」No.460)

噺の師

——もう一度会いたかった——

高須 啞三味

(前略)

大正末期から昭和初期へかけて、何年間か、ボクは路郎師の切望するまゝに、川柳雑誌社東京支社のようなものを引き受けて、毎月の「川柳雑誌」を、東京の目ぼしい書店へ配って歩いた、ことがあった。

その頃のある年、全国川柳大会が、東京で開催されたことがある。その会のあと、ボクは路郎師と「みちのく」の小林不浪人君とを、大森のカニ料理に招待し、二次会を上野池之端に移して、大いに歓談したが、この不浪人君と路郎師の交遊が、それから非常に緊密になったことは、ボクの大好きな二人のために、非常に嬉しく思ったことであるが、それを機に、路郎師は幾度か、青森へ招かれたのであるが、その行き帰りには、必ず東京へ一度寄って、ボクと一日をすごすのが、路郎師の旅程となっていた。

去る昭和三十七年であったか、不浪人亡き後の青森へ、路郎師が招かれた時は、路郎師が随行者二人をつれていたので、ボクの家を宿にしては貰えなかったが、ボクはその

帰路を擁して一夕歓迎の小宴をはり、心から大連以来の久闊を叙した。ところが、その一カ月ぐら以後、新潟の句会へ出席されることになった路郎師は、こんどは一人で行くから、宿を頼むということで、行きも帰りも、ボクの家を宿として、合計四日か五日、ボクの家にくれたが、その時の御様子では、食欲が余りないほか、多少歩行の不自らしい点を除いては、別段健康の悪いなどということには気がつかなかった。

その後で、ボクらの古川柳研究の論議が、「川柳雑誌」に連載されることになり、その原稿の責任をボクが持つことになってから、ボクと路郎師の間は、また急に交渉が多くなり、路郎師に会う度に、師は

「君が、もう少し近くに住んでいたらなあ」

「また昔のように、ウチの東京支社を、君のところにおいてくれないかなア」

などと言われたことが、何度あったろうか？ その度に、ボクは隻手の身の不自由さを強調して、師の期待に反いて来たが、

「まあ、それでは仕方ないから、君はウチの特別寄稿家ということで、ウチのスペースをいつでも自由に、君の勝手に使ってくれよ」

と、師は洪い顔をして、ボクの身勝手を許してくれたが、何という深い知遇であったことかと、ボクは今にして、涙な

がらに、師と会ったこと、師の言ったことを、それからそれへと反芻して、勿体なく思い出しているのである。本当に、もう一度会いたかった、と切に思う。(以下略)

(昭40・9「川柳雑誌」No.46)

噫 路郎先生

○ 阿部 佐保蘭

(前略)

仏壇に御線香をあげ、先生の御冥福を祈り、三年前の七月二十六日に渋谷永川町報恩舎にて小生の為録音して戴いたテープをかけて、在りし日の御元氣だった先生を偲ぶことにした。

このテープはその当時随行された薫風子君(今の薫風)メ女さんも傍に居られて御存知のことと思うが、先生も御機嫌よく、小生の突然の願いを心よくうけ入れて下され、先生の句集旅人より左の十句を自選して朗読して下さった。

二階を降りてどこへ行く身ぞ

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

春の僕ただ良寛をこころざす

凡聖一如元旦のこころ知る

春の草代議士などに踏まれるな

古くとも僕には仁義礼智信

還 曆

六十一まだ情熱はもえにもえ

台風のあんな力が欲しくなり

人類は悲しからずや左派と右派

啄木祭に

ああ僕も汽車を下りしにゆくところなし

この最初の句は昭和九年一月に発行された昭和川柳百人一句の中にも第四番目選ばれているから、よっぽどお気に入りと思われる。他の九句は今新しく選ばれたもので百人一句の中には見当らず、二十九年たつと、かく変るものと興味深く思われるのである。

(中略)

この時に先生は同時に昭和川柳百人一句より、葎乃先生の左の五句を選ばれ朗読して下さった。

のんでほし止めてもほしい酒をつぎ

ヒヤシンスの音沙汰でなしパンのこと

へちまへちまこは行水するところ

浴槽へずらり立ったは皆わが子

風鈴の正体ガラスとは淋し

尚之に加えるに須崎豆秋氏が作詞せられた川柳祭の暇を解説付で一番から三番まで、吹込んで下さった。こう云うところにも、先生の奥様並びにその愛弟子への愛情が覗えて涙ぐましいものがある。

(中略)

この外に小生は昭和三十八年四月二十四日に拙著川柳句集「鶴の姿」の序文をお願いに不朽洞をはるばる訪ねた時の先生を中心に葎乃奥様、薫風君、林宏子さんをまじえた和やかな風景を録音したもの、並びにその後先生が川上三太郎先生の病氣見舞に上京された際、啞三味先生の武蔵庵での対談風景をテープにとつたものと合せて三本テープを所蔵しているのであるが、他の二本は又の機会に譲らせて戴き、先生を思い出す度に私はこのテープをかけさせて戴き先生を偲ぶよすがとしていつ迄も家宝として大切に保存させて戴くつもりである。(以下略)

○西尾 栗

青年路郎!! この言葉は、恩師路郎先生の壮年時代より、中年、老年時代の最近迄の、先生に奉った言葉で、あの筋骨質のスマートな端麗な容姿から受ける感じと、内に秘めた旺盛なファイトと、文学に対する炎のような情熱とは、正に自他共に許す、路郎先生にふさわしい、青年の二字の尊称であった。こんなに、万年青年の若々しい、先生とこの度永遠にお別れしなければならなくなったことは、誠に不思議な夢のような思いであります。私が、先生に初めて、お目にか、つたのは、今から丁度三十四年以前の昭和六年七月二十五日の天神祭の晩でした。その晩が、阪大川柳会

の創めて開かれた晩だったので。爾来十有余年、阪大川柳会を指導されました。阪大川柳会には、時の名誉教授長崎柳秀先生。同じく笠原路生先生を初め、現在国立病院長の布施筑川先生、警察病院長の井上湧三先生等、教授、助教授の先生許りでしたが、路郎先生には、句の上では絶対に妥協されることなく、こちらで書いていても、ひやひやする位ビシ／＼と意見を通しておられるのを感じてきいておりました。先生は川柳を教えると同時に、信念をも教えて下さいました。今更ながら、私達が、先生を慕い、先生に帰依するところのものは、この強い意志と信念にあったのだとつくづく思い起している次第であります。

○ 山川 阿茶

先生は子供の頃淡路町に住んでおられ、おばあさんが大の文楽好きだったので御霊神社の中にあつた頃の文楽へ始終行っておられたそうである。拙宅での句会の折、綱大夫さんと津大夫さんに来て貰つた事があつて、その日はとてもよくはずんで生々庵氏に画いて頂いた鯛の色紙をかけてあつたら誰れかが水づめの鯛みたいだとか頭ばつちよの鯛だとか毒舌をふるい出した。先生も興に乗られ早速この色紙に筆をとられて

これ非売品やでと云う鯛を画き

と書いて下さつた。い、遺品である。綱大夫さんにも何か

書いておあげになつたと思います。

朝日座が文楽座であつた頃二三度お伴した事があつて、その頃は棧敷で料理も喰べお酒も飲めた時代で裏棧敷の三あたりで、魔法瓶のお酒をちびり／＼やりながら太三味線に聞き入られた先生、或る時は首をふり、或る時はそつと涙を拭かれた先生の面影が裏に焼きついている。

ほろ酔いでよく文楽の裏棧敷

(昭40・9「川柳雑誌」No.46)

人物 像

橘高 薫風

プロフィール

その朝は一面の銀世界だった。対岸の千光寺の朱塗りの護摩堂や大悲閣、また、西国寺、浄土寺と続く堂塔も鮮やかな白銀の装いを凝らし、それへ朝日が射して、常の見馴れた光景とは全く別な美しさが、幸二郎の眼を見張らせた。

二才の時、母に死別して、生まれた尾道に近い瀬戸内海にある周囲六、七里の島へ里子にやられた幸二郎は、島の小学校へ上つた。その日の朝の雪は下校時にもまだ残つて

いた。畦道を帰る悪童たちは久しぶりの雪で、さまざまに遊びをするのだった。積った雪に顔を埋めると雪に顔の形が残った。印された顔形を誰のものであるか思い思いに当てる遊びがあった。鼻の大きい子はすぐに分った。どの顔形にも鼻の凹みの下に青い鼻汁がにじんでいた。幸二郎の顔形にだけはそれがなかった。

「これ幸ちゃんの顔形」

「インテレのや」

「そうや、インテレのや」

と皆が斬し立てた。インテレとはインテリのことである。幸二郎の幼い頃からの知性と、身体は小さいが全身火のような闘志とは、川柳の巨星、麻生路郎を形成する両輪であった。

一 情熱の路郎

麻生路郎は明治二十一年七月十日に生まれ、昭和四十年七月七日にこの世を去った。七月に生まれ七月に死んだ文字通り情熱の人であった。

凡聖一如元旦のころ知る

元旦、この句を床に掛けてじっと見つめていると路郎の風格が浮かび上ってくる。凡聖一如（ほんしょういちにょ）という仏教の言葉をとり入れて、これ程までに格調高く元旦の気持を詠んだ句も少ないのではなからうか。

大正十三年二月十五日に発行された菊版三十数頁の「川柳雑誌」は、それまで兎糞的に断続しての発行だった各地小型柳誌に喝を入れた。川柳の社会化と質的向上にはかくなければならぬと柳界に魁での快挙であった。創刊号の同人の作品欄は「川柳塔」、一般投句者には、「近作柳樽」と名付けられたが、それらは、路郎の死を以て終刊となった四百六十号まで変ることがなかったのも、路郎の性格を端的に物語っている。路郎は編集にも句会の運営にも次々と新機軸を打ち出した。写真版をふんだんに掲載したのも「川柳雑誌」が最初ではなかったか。

昭和七年五月、「川柳雑誌」百号記念に催した、「川柳の夕」に、参加者で朝日会館の大会場を埋めたのが、今に、川柳の語り草となっている。本気になれば、人の追従を許さぬ仕事をする、それが路郎の面目だった。後、「専門家なき世界は発達せず」と、当時としては無暴な職業川柳人を宣言したのも、川柳に賭けた男の情熱以外の何物でもなかった。なればこそ還暦に際して、

六十一まだ情熱は燃えに燃え

と、自ら詠い上げることが出来たのである。

二 二つの自序

ここで路郎の二つの著書に書かれた自序を紹介する。

自序

エスベラントのために一生を捧げたザメンホフ博士は偉らかつた。ロシア文学の英訳に一生を捧げたマガレツト夫人は偉らかつた。くそ虫の研究に一生を捧げたアンリ・ファブルは偉らかつた。何れも自分の夢を実現させた人達である。

そして川柳に一生を捧げた私は？私は云うべき言葉を知らない。

川柳の社会化運動と 一冊のこの句集。

私にも多くの夢がある。私の一生はまだピリオドを打たれていない。せめてそれを力ぐさに、歩き続けよう。

一九五三年十一月三日

麻生路郎識

自序

川柳はサタイヤであると云う人もあるが、そうでもない。バックだという人もあるが、それもあたらない。日本の俳諧の真似事である仏蘭西ハイカイでないことは云うまでもない。以上挙げた短詩型はいずれもどつかに類似点があると云うに過ぎない。

その点川柳は世界に類例のない短い詩型であつて、しかも日本独自のものである。しかし短いと云うことが、必ずしも、作り易いと云う理由にも、つまらないと云う理由にもならないことである。

作り方については出来るだけ平易に書いた。書いただけのことは判つてもらいたいし、判つたら大いに作つて欲しいからである。句の味の方は解説本位にした。その方が判り易かろうと思つたからである。例句は主として現代作家のものを拝借した。新仮名遣以前の作品も学生が読み易かろうと思つて新仮名遣に改めた。その点については作家諸君の諒承を願いたい。次に私の川柳観を少し書いておきたい。

私は川柳を人間陶冶の詩であるといっている。人間へ締め木をあてて絞ると、いろんな悪汁が流れ出て、そのあとには朗らかな脱俗した人間が残るのではないかと思う。その締め木の役を川柳が果してくれているように思えてならない。句はその人の心であり、十七音字はその人の姿であり、リズムはその人の呼吸であるからである。

人間は生れながらにして、跪くように出来ている。しかし、いくら跪いても、どうにもならないことに気づかないようである。しかし私は川柳することによって体内の悪汁を排出することに成功している。だから私にとつて川柳することは単なる趣味ではなくて、人生をいかに生きるかということを知るためである。拙句の、

寝転べば畳一じようふさぐのみ

と云うのが川柳によつて得た私の人生観なのである。更に私は、

人類は悲しからずや左派と右派

と云う句を詠んでいる。これが私の世界観である。私は常に川柳に生きることによつて、平和な世界を生み出した。い念願に燃えているものである。

本書を手に入られる人達も又川柳によつて、よりよき人生に生きぬいていただきたい。

一九五五年仲秋

川柳雑誌社編輯局にて

麻生路郎

前者は句集「旅人」の序であり、後者は至文堂発行の学生教養新書「川柳とは何か」―川柳の作り方と面白い方―の序文である。路郎が、川柳人にしては稀に見るスケールの大きな抱負と識見をもつて、川柳の社会化運動、古句研究、初心者指導を推進させて行つたかは、これらの自序を一読しても理解される。

三 肉親の言葉

筆者は更に、昭和三十二年七月発行の「川柳雑誌」麻生路郎古稀特集号に掲載された文章を再録する。一つは三女の西村梨里女史が、「情熱は續く」と題して、父路郎の一面を語つたものである。

「一口に云えば父は川柳のために生まれてきたような人で七十才という長い年月の間には、職業上の変化、生活上

の変化はあつても只一つ川柳への情熱だけは、十七才の時から今日まで休みなく持ち続けて来たことである。長年川柳の社会的向上のために苦闘を続けて来たことは私よりもよく知つて居られる方もあると思うが、作家としての苦しみについては、存外知つている方が少ないのではないかと思う。私は今ここで父のそう云う面について考えてみたいと思う。

一般の川柳家が趣味人であると言ふ点でも作家としての苦しみというものが、川柳家には少ないのではないかと考えられるのだが、専門家としての父が、作家としての生命を持ち続けることの苦しみが一番よく知つているのは私達家族の者であらうかと思う。人間生活と云うものが誰にも大差なく年と共に感激性をなくしてゆくものだが、そう云う意味でも高年輩となつて尙詩人としての生命をたもつてゆくことは至難であり、大きななやみでもある。或る時はそうしたいら立ちを如実に感じることもあるが、兎も角川柳家としての第一線を七十才の今日までゆずらずに来た父は決して平凡な人ではない。

三十才を出たばかりの私よりは、はるかにものごとく感じ易く烈しい性格の持主である。

父の旧作に、

君見給えほうれん草が伸びている

と云うのがあるが、気のつかぬ間にほうれん草が伸びてい

たと云うことでさえ、これだけの感激を持つ父でこそ今日の路郎があるのだと思う。何時だったか、川柳雜誌社の主催で阿波踊りに四国へ行ったことがあるが、帰りに姫田夕鐘さんが船着場へ送りに来て下さった。陸と船とをつなぐ幾本かのテープ……船が離れるにつれて次々と切れて少なくなっていくテープの数、その中に父と夕鐘さんをつないだテープ一本だけが、最後まで切れずに残った。父はこのテープを一しよけんめいにたぐり寄せ無事に船の中にかい込んでしまうと、まるで少年のようにさもうれしうに、にんまりと笑って最後まで切れなかったことを非常に喜んだ。そして今度はそのテープをいねいに元通り巻きはじめた。この子供のような喜び方と根気には、私もいささかあきれたものであるが、以前雑誌の表紙画を描いていた米田さんも感心されたことである。私だったら『終いまで切れなかったわ』と云ってその場にテープは捨てられたことであろうと米田さんに話したら、『僕は恋人のテープだったらそうしたかも知れないがね』と云われたことがあった。

父は子供好きで、私の子供もよく可愛がるし、私達が赤ん坊の時にもよく入浴させてくれたそうであるが、私達ももの心付いてからはむしろきびし過ぎる父だった。子供が中学に入るときにも入学の手続なども自分でさせる程で、子供を甘やかすという所は少しもなかった。

また父が門下を大切にすることは非常なもので、我が子より大事なのではないかしら？ と思うことさえある位だ。然しそれ以上に父を大切にしておさる門下を沢山持っている父は本当に幸せ者であり、私も子として只々感謝している。古稀とは——古来稀れなる長命——だそうであるが、健康で今日を迎え、多くの良い門下に恵まれた父を心からよろこぶと共に皆様に厚く厚く御礼を申上げて筆を置く。」

もう一つは麻生葭乃女史のもので、「嵐を怖れぬ路郎」の一部分である。

「其後路郎は川柳の社会進出と、質的向上を思うのあまり、遂に本職を捨て、金にもならない川柳一本で立つことに決心した。一番読者の多い大衆雑誌でさえ、如何にすれば読者にアトラクティブであるかを競うが如く、多種多様の雑誌は書店の店先で、濃厚な色彩によって、或は新鮮味なタッチによって購読者の眼を捕えようとしている。此競争の烈しい中で、薄っぺらな短詩型専門誌の発行と、川柳に関連ある仕事などで安心の出来る所得のあろう筈はなかった。加うるに路郎には其当時五人の子供があった。きまった職に就いていて、孜孜として働いても、子沢山の渡世は決して楽ではなかったのだから、路郎の此企ては、恰もコロンブスのアメリカ発見に類するものであった。此のアメリカ発見の舟は、みすばらしい荒莫塵を敷いた和船な

ので、絶えず天候に気を配らねばならなかった。乗組員は私達夫婦と、子供達である。勿論子供達は目当があつて上船したのではない。父が乗つたから続いて乗つたのである。いつまでも浜で遊んでいた子供もあつたらうし、山手の住宅で残つていたい子供もあつたであらう。然し太陽を中心に廻っている星は軌道はずす訳にはゆかなかつた。行けども行けども、鳥は見えず、水や空、空や水なる真只中を、船は木の葉のように揺られて行つた。子供達の一人は舵をとつた。他の一人は櫓をこいだ。時化を喰つたら、皆んなで、かぶつた水を船から外へ掬み出した。路郎は舳に立つて動かなかつた。パロメーターであり、パイロットでもあつたからである。私はおとなしく両手を膝へおせて、舳にもたれていた。」

と述べ、更に、

「路郎は生きんがための職業と、川柳とを天秤にかけて、常に均衡を保っているが、どちらかを選べと云えば一も二もなく川柳と答えるであらう。」と断言しておられる。

四 路郎と酒

酒とろりとろり大空のころりかも

路郎の面影を追うと、右手に盃、左手に煙草という情景が浮かんでくる。うれしいと云つては飲み、淋しいといつては飲み、揮毫すると云つては飲んだ。李白の末裔を自

認していたことは、「虎の面に題す」との前書のある句に、李白という友あり遠きむかしにも

という句があるのででも判る。川上三太郎とは酒の上でもよきライバルであつた。

「三太郎君もよく飲んだなあ。僕が翌日の仕事にさしかえると寝た後も、蔑乃を相手に二階で夜の明けるまで飲んでるんだ。彼と僕とで飲んだ酒やビールの壺を横倒しにして並べると東海道が繋がってしまうかも知れない。まあ少くとも僕の方は、すでに名古屋をはるかに越しているに違いないよ。」と云つておられた。

なあちろりこれから秋に親しもう

十二月首だけ入れて呑んで行く

三人が酔えば三人らしくなり

青春を呑むべく生れ来し如し

酒を詠んだ句はいくらでもある。だが、

別離わかれの言葉に深酒をしなさんな

と、女心に触れた路郎、蔑乃夫人に、

飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ

と詠ませた路郎も、昭和四十年三月、肝炎で入院、それが命取りとなつて七月の夜、不帰の客となつてしまわれた。

「身体の色まで、好きだった酒とおんなじ琥珀色になつてしまつた。」

ある日、そうしみじみと述懐されたのである。

五 路郎の父性

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

路郎はこの一句を生むために生まれて来たのだとまでこの句を評価する門下生もあつたが、路郎の子煩悩ぶりは数多くの作品に残っている。路郎は子供達に、ロンドン、アート、一步、奈那、リリ（梨里は雅号）など、型破りの名を付けた。長男ロンドンの場合は戸籍係がおいそれと受付けてくれず、執拗なトラブルの後、やっと我意を通したのだとのことであつた。ロンドンは英京の意ではなく、野生の狼の生態の研究でも知られた米国の社会学者ジャック・ロンドンに因んだ名前なのである。この句の句碑が有名な川柳の町、弓削の駅前であり今秋九月には建立三十年を迎える。

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

路郎がクリスチャンであること、洗礼名がヨハネであることを知っている人は少ない。ルツという洗礼名を持つ葎乃夫人に影響を受けて、この門に入ったのだらうが、教会に足向けるところを見なかつたし、その教義を話題にすることもなかつた。

路郎にはよく叱られた。死の前前日にも編集部林宏子女史と私とに雷を落とされた。死ぬ前の人とは思えぬ迫力があつた。更に、葎乃夫人に対しては想像を絶するものがあつたが、

夕立は小気味よし君が叱咤も

とさらりと受け流しておられるところを見ると、葎乃夫人も人物が大きいと賛嘆させられる。

路郎は一切ボールペンを使用しなかつた。使い慣れた万年筆で、原稿も手紙も書いた。事務の記帳をもした。ゆつくりと書いた書体は、その毛筆の字と同じく厳しさといつくしみに満ちた慈父の味があつた。大きな父の姿勢であつた。それは、句の選にも云えた。大磐石の自信を以て門下生の句を育てた。大きな花を咲かせるために容赦なく蕾を剪つた。奥村丹路にロマンの花が咲き、須崎豆秋にユーモアの実がなつた。門下に多士済済の個性が伸びて行つた。その結果、路郎の死に殉じて筆を折つた異色作家も出た。

六 路郎くさぐさ

春の艸代議士などに踏まれるな

草の根よ僕も闘う草の根よ

路郎は野党精神が旺盛だつた。無産党代議士と悼名された時期もあつた。路郎の頭には常に番傘川柳社があり、岸本水府があつた。番傘・川雑の対抗意識は、朝日・毎日のそれのように熾烈であつた。両巨頭が双方の指向する道を負けじと鏗を削って進み続けたことは、関西の川柳界に活力を与え、水府・路郎個人それぞれをも大きくしたのではなからうか。路郎は野党派にありながら、地位肩書には弱

かつた。作品の充実した好作家より、経済力や社会的地位の優れた作家を重用した。不朽洞の洞友に名士、碩学の名を揃えたし、門下に医学博士を蝟集せしめた。川柳の社会的地位向上への意図のようでもあった。外国からの訪人、例えば、宇宙飛行士ガガーリン大佐の来阪を迎えて握手もしたし、オランダの詩人、ステファン女史の来日にも、会って世界最短の詩、川柳を説き、自らの句集「旅人」を贈呈した。エレンブルグ博士にも同様だった。

「川柳雑誌」の表紙に、エスペラント語で「Penso Flugas trans - La Land Limon(芸術は国境を越えて飛ぶ)」とあるのも路郎の大きな夢を物語るものである。

首相逝く

待ったなしの歩にさされたる犬養毅

雨の松本にて

遠く来て信濃に山のな日なり

南北氏を悼みて

宿替もこんどは番地ないところ

小杉放庵逝く

星が流れたあれは放庵だったのか

右のように路郎は前書のある句がうまかった。正に堂に入っているという感じであった。ものの核心に迫り、人物の特徴を把握するまで、その身を近づけ、その心を寄せたのである。執念と云えばよいのだろうか。路郎は死ぬまで

執念に燃えた作家だった。自ら不死鳥とも号した路郎の身に近かに接していた門下の誰彼には、その意識するとしなないとに拘らず、路郎の精神が感得、伝承されているに違いない。

七 日車と路郎

路郎が作品を生み出す苦しみ、執念を共に味わった仲間
に川上日車がいる。日車は先にも触れた路郎古稀特集号では、次のように若い日を思い出している。

「古川柳には、古川柳独特の味いと響をもっている。私たちは久しくそれに浸って川柳作家としての揺籃期を過ごした。だが少年期はやがて迎える青年期の前提である。少年期に、紅いぐと映ったもの、それは、伝承的、紅いぐであって自己の発見した、紅いぐではなかった。ここに少年期と青年期との間に一つの曲り角がある。その曲り角を意識にとめず一直線に歩みつづけるのも、透徹した一つの道ではあるが、自己に厳しい執着を持つ者にはそれが出来ない。そこに青年期の浮水が横たわる。路郎と私が手を携えて『雪』を発行したのは、まさに此の曲り角に立った時であった。

くろくろと道頓堀の水流る

路郎

行末はどうあらうとも火の如し

同

こうして路郎の眼は次ぎ次ぎと人生のあらゆる角度に
拡がっていった。」

と。

「雪」が発行になったのは大正四年で、路郎が編集兼発行人になつてゐる。創刊号の扉には、

「嘘をほんとも嘘とも思わずに、今日迄は過して来た。それが嘘の面白味に満足出来なくなつたこの頃、ほんとの權威がずしりと頭上を壓して来た。雪はそのほんとのものに接したい望みで生れたのである。しかし、ほんとの權威に窮屈を感じる時代が來ぬとも限らぬ。その時は吾々が嘘の人となつて、再びほんとの權威を呼び起す時であらう。」とあり、これには青雲を望む志の遙けさや、いささかの銜をさえ感じさせるものがある。作品も総体に若若しく感覺的で、

SOFAが欲しいといふ妻のうら若く

妻や待たむ靴音を高めんか

と新鮮である。そして、大膽で不羈奔放な試行錯誤に揺れながらも、

よきこともあるまじ妾流れゆけり

纏節に男のちからからるる

親船を離れてきりきりと舞ひぬ

壁に塗り込められたやう人動かず

水溜り飛びそこねても一人かな

などには、すでに後の路郎の句風が確立されつつあつた。日車の云う、

*行末はどうあらうとも火の如し

の句は「雪」十四冊の中にはない。「葉柳」か「後の葉柳」

時代のものか、日車の思い違いながら日車の脳裏に印象付けられたそれは、路郎若き日の炬火であつた。爾来五十年を経ての死の一ヶ月前には、

炎の中に忘の字が灰になつて残り

の作品が発表になつた。

八 路郎の死

明治二十一年生まれ、霹靂火の路郎の悲劇的な環境の中の死や作品は、それだけを論じても価値のある、充実した鬼気迫るものである。

死期が近づくと人間は自分の回りに円を書く。自分の回りに円を書くから死が忍び寄るのかも知れない。香具師が土に円を書いて、「さあお立合い。」と見物客を寄せる、それに似た円である。その円が次第に小さく、次第にせばまつて行く。そして、遂に死に到るのである。路郎の死も丁度そのような死であつた。路郎独りのみを容れることの出來るところまで縮められた円に、永遠の生命の備わつた路郎がいる。寂然とした路郎がいる。

一行詩これが私の墓だとは

エピソード

路郎は死後の世界でまだ夢を見ている。いや、うつうつと夢幻の虚空を漂いながら、渾身の力で生きた五・七・五

の世界を見返っている。すると、朦朧とした視野の中に一人の達人の姿が浮かび上ってきた。路郎が、俺によう似ていると思うほどもなく、その達人はどうやら俳聖芭蕉であるらしいことに気付いた。

芭蕉は、「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。」と、おくのほそ道の冒頭で述べている。芭蕉は死と向き合った旅で己を磨いた。おくのほそ道の、飯塚や尿前の関、越後路のくだりにある難渋ぶりは想像に余るものがあったろう。元禄七年九月はじめ、郷里で「続猿蓑」の編集を終え、奈良を経て大阪へ向うが病気がちとなる。その頃の句は実に淋しい。

此の道や行く人なしに秋の暮

此の秋は何で年よる雲に鳥

そして、十月五日、花屋仁左衛門の屋敷で門弟に看取られながら息をひきとる。辞世は、

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

であつた。

ひるがえつて、路郎句集の標題「旅人」は、奥の細道の中の二文字を藉りたものだ。初めて職業川柳人を宣言して家族と断崖の上に立った路郎は、芭蕉の旅と変らぬ峻しい人生の旅旅を続けた。めでたい喜寿を迎えた年の三月末に

肝臓障害で入院する。

ドッグ入りこのボロ船をどうする気

しがみつくほどのこの世でなかりけり

五月にひとまず退院したが、

死はゆらぐ文楽人形に死はゆらぐ

死の影が紋十郎の背後から

と、その頃すでに死を予期していた。そして七夕の夜、卒然と幽明境を異にしたのだった。芭蕉と同じに辞世の句を残した。

臨終が冬ならいろはおくりで逝かんかな

雲の峯という手もありさらばさらばです

の二句で、川柳に手を染めてから六十二年と二ヶ月だった。

芭蕉の臨終には、木節、去来、惟然、正秀、之道、伽香、支考、吞舟、文草、乙州、其角、次郎兵衛が待した。遺骸は、十人の門弟に取り囲まれて川舟で淀川を溯り、粟津の義仲寺へ送られた。路郎の眼に、虚空の芭蕉の幻が消えて川舟が現れた。川霧に包まれた芭蕉の門弟の顔に、なつかしいわが門下生の顔が重なって来た。

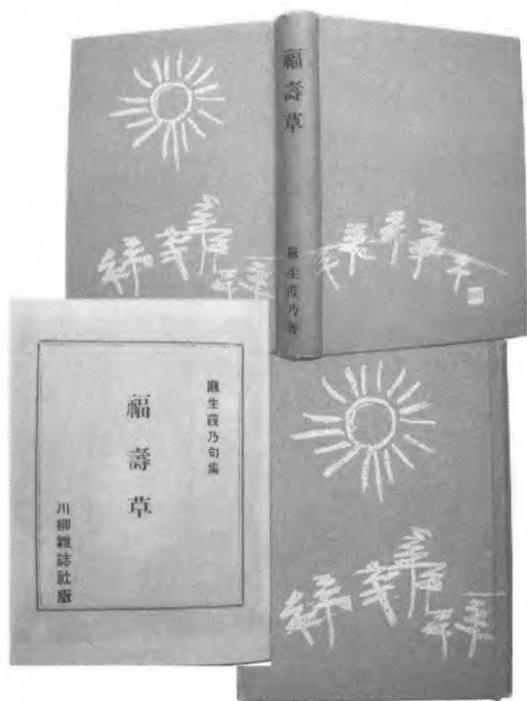
*「行末は」の句は、「番傘」（大正11・1）の「近詠」

（二十三句）に、（行末はどうならうとも火の如し）の

形で発表された。「ならうとも」は、誤植か。

〔川柳全集 2 麻生路郎 橘高薫風編〕昭54・7・31、構造社出版（株）

麻生霞乃作品 「福壽草」



句集「福壽草」

「福寿草」

平成6年1月16日に、夫婦句集『旅人・福寿草』が刊行された。「福寿草」は、麻生霞乃句集『福寿草』（昭和30年7月1日発行）から橘高薫風が抜粋した300句を収録したものである。表記・用字も『旅人・福寿草』に拠った。作品の最後に『福寿草』のあとがきを、巻末に索引を付した。

十七字我等の国語なるぞかし

初日キラキラ 網は殺生忘れてる

数の子のみんな育てばすごかろう

松の内ダークサイドのない飲手

福寿草松にしたがいそろかしこ

松竹梅松は母屋という形

節約の床葉牡丹が活けられる

松の内まだ一軒を飲み残し

返信でくだ巻きかえす飲仲間

三ヶ日爛番をしただけのこと

屠蘇機嫌らしい追補のある賀状

飲むほどにもう初雪のかげもなし

初風呂へ冬の姿で来て目立ち

門松は無用常住座臥の門

散髪屋すぐにもかかるように言い

剃りに来て意外にうつる襟と知れ

記念品社名れいれいしくきざみ

秋ざくらあまりに堅きペン皿や

コスモスに風あり友の書齋見ゆ

牡鶏が来て鶏頭のまぎらわし

ちよほちよほちよほちよほちよほと咲く女郎花

揚花火散った姿の曼珠沙華

尺あてて見れば暴君揃いなり

言いまけて又鏡台へ向きなおり

飲んでほし やめても欲しい酒をつぎ

お帰りにならず 刺身も色かわる

夕立ちは小気味よし 君が叱咤も

相談をしてひとしなをはぶく膳

気を変えて雲は東へ流れ出し

雀来よ来よと 伸びる屋根の草

池に鶴残して一家都落ち

住吉の馬と生れず馬力曳く

信心の茶店かしわのすきもあり

幕の内 一寸 はさめばくずれそう

鐘がひびかぬ大都会の淋しさよ

別府染とうとう縫わず夏がすぎ

しみじみと心培う部屋もなし

一生に自分の部屋というが欲し

墓口も襟も子供の払い下げ

「HEALTH」見てまだ生きのびる欲を出し

生きることにきめて頑固を立てとおし

われ充てり 充てりと 裏の菜種咲く

葱畑みなくすだまをさし上げて

内なりという瓜もみのほろにがく

手をのべた袖の下にもつくつくし

片便り彼岸桜が淋しゅうて

糸瓜もう水をとられる風と知り

へちま へちま ここは行水するところ

帆立貝人手貝など子に教え

児を寝かしてからの天下を寝てしまい

夕桜ここが終いの法界屋

出語りがあるかと思う桜の灯

花の留守あてがいぶちの酒に酔い

鳳仙花竿の雫のかかるとこ

錦魚草プチブルとまでゆかぬ庭

浴槽へずらり立ったは皆わが子

木綿着の心安さよ子と眠る

子を置いて朝湯へ来るも五年ぶり

長女だけ母のさばきが気に入らず

指図するだけのマダムの土いじり

子が出来て床の飾となった琴

若く言えば帽子を脱いで見せるなり

百姓のゆつくり返事書くとときめ

客齋の家に残したつばめの巢

愚痴を聞くまも忙しい四本針

パトロンへひけめ感じる兄を連れ

パトロンへ妹の靴もたのんどき

母は来ずたのんだ梅の壺も来ず

夜ふかしも朝寝も父にまけじとす

母は毒婦 処女の桜ン坊

御随意に座蒲団敷いて貰う客

園丁とおもてか猫がつきまとう

箸うごく通りに猫の首動き

改札を出るも先駆者たらんとす

鬱憤は空へ消えるか巻たばこ

脱稿は近し煙草はもうしまい

金の奴隷の奴隷となつて御寮人

貯金箱またひき潮となりはじめ

信心の寺は昼寝によいところ

夕立が晴れてお寺の冷やつこ

懐が寒くなつての純喫茶

片意地な親子だまつて膳につき

あぶなげなお世辞ピヨピヨひよこの毛

柄にないお世辞は的をはずしたり

まけ方は二銭三銭丁稚らし

あれも又数の中なるウエートレス

マドロスの気で出張の夜を歩き

女将から鱈と呼ばれて気に入られ

忘れもの届いて呑んだ順が知れ

ラブレターの嘘に女神と書きにけり

心ブラを貸ある女将めざとく見

袖はねて紙幣さきが出そうもないマント

梯子酒妻へはにぎり通しとき

男の世界覗く眼鏡はこちらです

あかしばなそのまま朝の酒となり

朝酒にほのぼの海が白らみたり

せいのない相槌ながら愚痴を聞く

交渉に邪魔な正直者を連れ

植木屋の隣へ住んで少し植え

紫の粉が散れ 粉が散れ 揚雲雀

揚雲雀 わが魂を持って行け

眠るよりほかに浄土の地をば見す

君の青私の青と違うなり

ものぐさは猫におとらず火を囲む

そも何のうれいぞ海の鉛色

昼の風呂いつそあひるで居りましょか

まああんな瘦ぎしもいる土俵入

極大で握る火事場の握りめし

牡丹雪櫓太鼓が鳴りそうな

すだれ巻き揚げても暑い大阪市

大根畑へ紋白蝶が降って来た

不景気にかかる人出を憤り

縞鯛はキング真鯛はクインにて

盂蘭盆の風にながれて来た蜻蛉

こおろぎよ私も蚊帳で起きている

行末はハムとなる声のどかにて

娘まだ帯へ縫込む智慧も出す

未亡人その冗談へむきになり

夫人夫人と言われ個性のないくらし

花粉に酔えり浅はかなることよ

今日の私の心に嵐立ちそびれ

無言の祈り十字架のいや高し

魂の創世記はこれからですの

山を移す信仰に生きんかな

サンデー晴 五女はバイブル持つて出る

虫を殺してる人ばかりだろうか 吊革を持つ

風に靡く柳ではござんせぬ

此癖を捨てたら形見何もなし

曲げぬところが私のまこと あなたへのプレゼント

空見れば空に葉刈の音がして

別館を建て増しつつじ真盛り

仏壇の埃を意見して帰り

産めよ殖えよ 地に充てよと 囀るよ

籠の鳥諦めたのか 空を見ず

ワンステップのテンポで茶碗洗うかな

桜漬山々霞むかと覚え

夕焼を残して雀寝しずまり

峰の雪旅立つ心そぞろなり

子を捕られた雀 けろりと樋から出

群雀なかの一羽がタクト振る

午前九時出頭すれば刑事居ず

やがてトンネル 百姓が小さく見え

案山子かと思れば煙草を喫い出した

誘惑の灯をタクシーで見えて通り

花の寺酔えば祈願の身も忘れ

合シヨールさえも重たい花疲れ

宙を浮く思いフェルトで逢いに行き

十合 大丸 帯一本にくたびれる

デパートを出たら灯もつき雨も降り

ニユールツクあれが長屋を出た姿

貝細工其の日暮しの手にぬられ

雛の画に題して

ひな壇の蛤沖が恋しかろう

明けきらぬ部屋に真白き雛の顔

五人ばやし富樫に似てるのも交じり

月見草 一番星が出はじめた

蓼そえて一層涼しい鮎の皿

地下鉄へ出よとしたのに地下売場

さくらん坊頸の細さに似る乙女

水と油何を好んで和睦せん

本売った事も苦学の中へ入れ

古本屋自論を吐いて売りつける

読むだけの客と見ぬいた古本屋

古本屋不承不精に値を申し

初午に社員総出と言う会社

貸浴衣着るがはやいか肩をぬぎ

七光だと婦人記者思えども

とつときの文句ではめる婦人記者

いけすかない仲居も生きる姿にて

煙みななびいて都市を威圧する

売れ残りらしい小鯛をまだまけず

鬼灯と見しは束の間の錦魚

錦魚二匹あと追うて行く姿也

曼珠沙華子の命日に毒々し

こおろぎよ今年は一人たらぬ蚊帳

腰掛は瀬戸か伊万里か藤の下

消える虹なれば尊く美しく

船旅の嵐も海の魅力にて

月おぼろ君の情に似ておぼろ

おごらねばならぬ封書をとりつがれ

窓を開けても六甲は見えず

岸の里の新居にて

山を見ずこのヒヤシンスあれば足る

鬼あざみ無縁の墓を淋しゅうす

嘘 嘘 嘘 木魚の音もそうひびく

風鈴屋汗かく荷とは思われず

貸浴衣足四五寸も出る息子

パラソルをたたんで歩く藪の風

晩酌の膝を飼猫見逃さず

約束をあぶながらられる程に呑み

谷川の音が床下くぐる宿

悪人へ陽は燦々と惜しみなく

法科出も何の要なき部屋住い

ヒヤシンスの音沙汰でなしパンの事

貧しき家に天寿全うする草よ

野の百合を見よと予算のないくらし

種子蒔いているなと屋根の雀ども

小町草袂の柄をぬけて来て

さらばさらばと散るはずかけ

うどん屋の酒は足から醒めそうな

ようように松の梢へさわる月

鶴の間の几帳のかけはなおくらく

妹の方が手なれたきゆうりもみ

金は及ばぬ山の靈気や

囀りが籠にこぼるるばかりなり

蜃気楼と思え財布も人も樹も

ウインドへみとれる妻をほって行き

スフにしてあとは梯子で消える金

番付を見なおす今の愁歎場

スリーカップスオフワイン悩みことなるくちにふれ

電線から落ちる雫もあとやさき

世は進化せりああ傀儡となりし我等

子等は星 月は冷えゆくものと知れ

振向けば君も小さい並木路

なつかしの故郷を翼の下に見て

ポプラの葉風に一揆を起すよう

小金あり梅干す事で夫婦もめ

浜ひるがお蝶々は低う低うとび

菜の花はあの屋根のはて屋根のはて

この辺に野だての釜の欲しい芝

後楽園にて

鉄瓶をおろして雨の音と知る

奪い合うていっち下手なが炭をつぎ

燭瓶を射通す檜の火を見つめ

ルビーサファイヤ花のしめりに及ぶべき

其の姿 虹も立つならめかしましよ

鎧戸は開かず朝霧せまる家

薄情な男となつて鹿島立ち

中山の人出へ匂うこぼれ梅

中山へ帯も返さぬ倦怠期

因襲脱し難きビルの鳥居よ

袖張つて海が見えたか奴いか

お彼岸の亀にも無沙汰してる也

一心寺の墓に隠れて帰る也

無念無想どころかせわし一心寺

睡蓮も咲き証文も要る世也

朝の蚊帳流れ出すかと思われる

初蚊帳の中はシャツ着たキリギリス

蜻蛉までみがるな盾津草の上

もう秋の雲が出だしたなんばきび

茅屋をお静かですと賞められた

チ、チ、チ、チ、殺す場面となる虫か

すず虫はこれか淋しや昼の籠

風さつとすすきの虫をだまらせた

虫しげきまま朝となる物案じ

露を吞んでいたし松虫のように

金箔の眩惑も見ゆ南無阿弥陀

女の子揃えの柄が気に入らず

おぼっちゃんだわと見合をした所感

良縁をことわる訳を知る妹

ほそぼそと湯屋の煙のひるひなか

叩かれて背広つまずきそうに行き

団服の手前マルタマ素通りし

モーニング ピアノへ立っていと細し

ああ 金がでっちあげたる声かそも

老眼をかけて文句のてきびしさ

事務多忙一輪挿しも邪魔がられ

歩と角と飛車と桂馬の子をば持ち

臍くりの伝授に永居して帰り

かこちつつなげきつつ喫う巻たばこ

豆腐屋は虹の出ているのも知らず

お美事といわれ苦しい酒を呑み

発心の桜淋しい色となり

水仙白く われをいましむ

お達者なことよ蘇鉄がよみがえり

一心寺

骨仏みな成仏をした人か

人生を霞と見てる親がかり

母の三十三回忌に父逝く

父と母同じはちすを疑わず

今ぞ知るかたくなな父慈悲の父

死出の旅にも日本酒位あるかしら

亡き父を思う

父はあらず壁ばかりなる父の部屋

夢に來た父はゆもじの夏姿

弟へ残す形見のかたボール

長男ロンドンを喪いて
ロンドンの一周忌

まぼろしであつたか死んだ兎の裸

一周忌かしくもここも草萌ゆる

一周忌こんな蒲団で寝ていたか

紺緋 今はアートのために裁つ

香を焚いてまぎるる事も凡夫なる

母君を喪い給える生々庵氏に

ただ弥陀にすがれと珠数を残されし

落下傘敵に見られなさとりれな

南進日本さても墳墓の地の多き

煙立ち立つ難波の街であつた筈

第一便二便もバナナ食うたより

猫 今日もお粥のしずくだけ貰い

第二疎開地 伊賀 上野市

開墾の畠は一里さきの山

盗み手はないが鳥が食う畑

第三疎開地 大和 宇陀川のほとり

崖上の窓へ自転車から話し

ややあつて雷峰を替えて鳴り

終戦後の大阪にて

焼跡は豊作茄子も花ざかり

疎開地へ浅黄の空を置いて来た

眼覚めても雀の鳴かぬ窓に居る

十二神将チヨンと木頭ひびきそう

角伐りは夕日をうけてくたびれる

今鳴いた鳥はどの枝依水園

十八間戸素性あかさぬ人も居る

十八間戸ヨルダン川はないけれど

粕桶へかつぱと伏した瓜と瓜

奈良人形糊ききすぎた袖を張り

夕靄に仮駕二挺三輪へつき

多武峰

拝殿も桜も燃える中へ来て

見下せば大和三山跨げそう

聞いて来た滝は身のたけほどにして

墓に水かけに 海越え山を越え

あとがき

私の句が個人句集として刊行されようとは夢にも思っていなかった。不朽洞会員の句集が上梓される時には少しばかりお仲間入りをさせて頂くつもりであったが、不朽洞会の前理事長中島生々庵博士の発案で私の句集を別に出すことに常任理事会で決議された。此案は生々庵博士の義理堅いお考えからであろうと推察しているが、現理事長の北川春巢博士がその意を継承され刊行委員長としていよ／＼上梓の運びとなった。なるべく肩の凝ることは遠慮したいと云う私の我儘を今、ごりがんに通しては却って常任理事の方々へも度々御迷惑をかけることでもあり、また姉娘を早くかたづけねば妹娘が縁づかぬと云う世のならいもあるので、私はおとなしく皆さんの御好意をおうけすることにした。

編纂については、年代順に句を拾うことも一応考えられたが、私は明治四十四年頃から作句

をはじめているので、そんな古い時代の句を蒐集することも、整理することも容易でないので、「川柳雑誌」の創刊時代（大正十三年）から今日までの句の中で順序もなく拾うこととした。その点、この句集はごった煮の感があるうと思われるが、たとえ一ト品でも二ト品でも、皆さんの味覚に訴えることが出来れば、それで沢山だと思っている。そして仮名遣いは読み易いだろうと思つて最近の仮名遣いに改め、字駒も二三訂正した。なお巻頭に掲げた写真は路郎句集「旅人」の出版記念祝賀会の時のものと、阪神時代のもので、特に句集のための撮影はしなかつた。終りに拙句の蒐集については八木摩太郎氏に格別の御助力を願つたので茲に深甚の謝意を表する。

一九五五年初夏

麻生葭乃識

麻生路郎著作解説

*各著作（発行年月日順）に通し番号を打った。内容は同じでも、書名・判型・発行所など変更のあるものは、別の著作とした。

I 路郎が著した、あるいは選集・編集した書籍

1 『川柳漫画 懐手』



小出楯重装幀・柴谷柴舟漫画。一九二〇年（大正九年）10月25日・奎文堂（大阪市西區御池橋西詰・東京市京橋區銀座尾張町新地一七）・二〇二頁・152×22mm（菊半裁判）・壹圓貳拾錢「内容」路郎の作品一一一句に注解を加えて、柴舟の漫画を添えたもの。井上劍花坊・食満南（北毛筆自筆）・岸本水府の序は、次の通りであ

る。「川柳の友達も多いが、中でも麻生路郎はホントの人間だ。と云ふと、他の川柳友達はウソの人間と云ふことになるが、さうでは無い。ホントの人間だから川柳のやうなものが出て来るので、川柳家はみんなホントの人間だが、そのホントの人間の中で、最もホントの人間だといふホントに手数のかゝつた人間が麻生路郎だ。「あなたはすこし馬鹿だ」とか、「君は野心があるだらう」とか、「先生は下手ですネ」とか、「僕はエライ人間と信じます」と云ふやうなことを誰の前でも平氣で言ふのが路郎の本色だ。知らぬ者は腹も立てるが、知つて仕舞へば好い男だ。其調子で川柳と漫画と組合せた「懐手」といふ本を出す、と云つて来た。面白いにちがひない。そもく川柳と漫画を組み合わせること、は、江戸時代の「繪本柳梅」や、「神事行燈」や、

「種ふくべ」や、何や蚊やと限り無く有り、明治になつても、風俗畫報などでやつて居た。今も講談俱樂部其他でやつて居る。僕も會て久保田米齋と組んで展覽會をやり、また近藤浩一路と組んで、木版の繪紙を出して居る。更に自畫自賛で万畫會といふ大仕掛な仕事をやらうとたくんで居る。路郎の關西日報の柴谷柴舟と組んでやるので文句入りの是迄に類の無いものらしい。いよく出来て仕舞つた後で無いと、ほめることもけなすことも出来ないが、このホントの川柳家の句を畫にするといふ以上、まだ逢つたことは無いが、柴舟といふ人間も、ホントの畫かきだらう、英雄とか、君子とか、紳士とか、淑女とか云ふエライ人が嘘をかためて居る世の中へ、ヌーと懐手をしたホントの人間が罷り出るも面白からう。これが序文だ。／＼きんたまを握つて達磨堂に乗り／＼大正九年二月劍花坊。「川柳の上手な路郎さんがこしらへた本だから面白いにきまつて居る別に蛇足を加へる必要を認めないつまりこの本をたくさんに買へばよいのであるさうして面白ければ路

郎さんは満足するのであるこの序文なんかはおあしの中へ交つて居るのではない／大正九年の春 南北。「路郎君と私とは今から十年程前の句會で隣り同士になつたのが初めて、今では同じ萩の茶屋に三軒離れて棲つて居ます。昔は大の仲よしで、死んだ青明君などと毎日のやうに逢つて炬燵で十五錢の牛肉辦當を食ひながら馬鹿をいひ合つたり、いろいろの空想に耽つたものでしたが、今は互に大人になり切つてしまつて川柳の上に何とか彼とか争つて居ります。その喧嘩相手の路郎君から私に此本の序文を書けと云つて來られて私は少々皮肉を感じました。然し路郎君にも非常な自信があつての上ですから、喧嘩相手の私も氣ぬけのする事夥く、路郎句集ともいふべき此本の一句句々を讀んで行くうちに、路郎君の持つてゐる川柳眼を非常に懐しくおもひ、何時の間にやら喧嘩相手といふ事を忘れてしまひました。初めて路郎君に逢つた人は誰でもむづかしさうな人だといひますが、實際つてみるとさうでないやうに、此本の句をよむと路郎君の眞個の川柳の才を知る事が出來ます。今、路郎君の眞個の川柳の才にめぐり合つた私は、十年前の炬燵と牛肉辦當の親しみに返つたやうな氣がしま

した。／番傘川柳社にて／岸本水府。自序に、「懷手」は私の柳樽であります。／大正九年二月／萩の茶屋にて／著者」とある。凡例に、「(一)本書は私の人生觀、社會觀を川柳の形式を藉りて發表したものである。／(二)不即不離の註解を試みたのは、川柳を全く知らぬ人が川柳を理解する上に助けともならばとの微意に外ならぬ。従つて本書は川柳の入門書ではない。／(三)作品は明治大正にかけて、番傘、柳眉集、ツバメ、凧、土團子、商業之大日本、讀賣柳壇、毎日柳壇、朝報柳壇、日日柳壇等に發表したものの中から選んだ。それに未發表の新作をも加へて置いた。／(四)本書の出版に際し序文を賜はつた井上劍花坊氏、食滿南北氏、岸本水府氏及び出版の動機を與へられた三好正明氏、渡邊迷破氏の好意を感謝する。又、本書のため特に装幀を快諾された小出楯重氏、漫畫に其の輕妙な筆を揮はれた柴谷柴舟氏に感謝する」とある。「卷末に」に、「春早々に出る筈であつたが印刷屋の多忙が祟つて延々になつてゐたところへ財界の悲雨慘風は一般出版界にも少なからぬ打撃を與へた。「懷手」も止むなく港入りして風待ちに日を消してゐたが、之を月並に言へば燈火親しむべきの候である昨

今、むなしく懷手としておられず、財界暫しの天候を見定めて浮世の風にあたることにした。賣れる賣れぬはこつちの知つたことでなし、賣る賣らぬは本屋の腕、買ふてやらうとおつしやるのはお客様の胸三寸にあること、本屋サンのもとむるまゝ、に再び贅言を弄した。／大正日日新聞社編輯局にて 九年の秋 著者」とある。総ルビ付。『所蔵館』東京 国立国会〈大阪 大阪市立中央〉(2冊) 関西大学〈兵庫〉県立〈岡山〉県立〈広島〉県立

2 『日々間に合ふ現代模範美的候文』



一九二三年(大正十一年) 6月20日三版・藤谷崇文館(大阪市西區靱南通二丁目一番地)・四二六頁・188×88mm(三五判)・八拾錢【内容手

紙文の模範例を、慶賀・招待・報知など21の項目に分けて著したものの。自序に、「書簡文ほど、やさしく見へて至難なものはあるまい。／誰れにでも書いて、誰れもよく書きうる人が少ない。／書簡文の目的は、むづかしい文章を書くことでも、徒らに美しい文章を書くことでもない。自分の意志を相手方に充分理解させるのである。／であるから、いかに美しい文章であつても、いかに至難な文字が羅列せられてあつても相手方に充分こちらの意志が徹底せられない場合には、その書簡文の價値は零である。／自分は淺學非才で仲々模範的書簡文を綴るだけの實力がないかも知れないが、こんな場合には、こゝにいふ書き方をすれば相手方にこちらの意志が了解されるであらうと信ずる範圍に於て充分力を盡したつもりである。／先刻からいふてあるやうに書簡文の目的が既に自分の意志を相手方に完全に通じるのにあるのであるから、面を向つて對話するのを紙上に表現するものだと思へば間違ひはないのである。／であるから文章を書くつもりで無闇に飾らず思つた事柄を思つた通りに書くことが必要である。／しかし、思つたことを思つた通りに書くといふことが一ト口に云つてしまへば何んで

もないが仲々困難なのである。／思つた事はほんなこともいいかと云へば一概にさうは不可ない。／そこに手紙としての一種の約束もあれば思つたままを紙上に書き表はす言文一致体と文章体との二様の書簡文体とがある。／自分は参考の爲めに兩方の文体を用ひて置いたから留意して讀んでいただけは、早速それを實際に應用することが出来る。／自分としてはこの書が諸君の手紙を書く上の参考となれば之れに越した望みはない。／萩の茶屋遅日莊にて著者」とある。総ルビ付。【所蔵館】〈東京〉三康図書館

3. 日々間に合ふ現代模範女子美的候文



扉

一九二三年（大正十一年）6月20日三版・藤谷崇文館（大阪市西區靱南通二丁目一番地）・四一七頁・188×28mm（三五判）・八拾錢

【内容】女性の手紙文の書き方の模範例を慶賀・招待・報知など19の項目に分けて著したものの。自序に、「手紙は自分の思ふてゐることを相手の人に充分傳へることが出来れば、その目的は達せられてゐるのである。幾ら美しい手紙が書けたところで、相手の人に自分の考へてゐるだけのことが満足に傳へられなかつたらば、その手紙は失敗に終つてゐるのである。／斯う考へて來ると美文的候文であるとか、口語體であるとかいふことは、末の末の問題である。要するにどちらでもいい、から自分の意志を完全に表はすことにつとめればいゝ、わけである。／私はいつともさう思つてゐる。自分の思つたことをその儘にかけば立派な手紙が出来るといへば、手紙ほど樂なものはないやうに考へるかも知れないが、自分の思つたことを自由に書き表はすといふこと位むづかしいことは無いのである。自分の思つたことを充分に書くことが出来れば、それは立派な文章家である。／思つたことを其儘かけといふたからとて、唯だら／＼と思ふたことを書いただけでは、自分のほんとの意のあるところが相手の人に理解されるものではない。／そんなら、どんなに書いてら自分の思ふことが相手の人に理解される

やうに書けるかといへば、そこに手紙を書く上の苦心が要る。／他人の書いた立派な模範的な手紙を澤山読んで見る必要がある。澤山讀めば讀んでゐるうちに何う書けば對手の人によく通じるかといふことが自らわかつて来る。／私の書いた手紙が決して立派な手紙であるとは云へません。けれども讀んで御覽になれば、こんな場合には斯んなに書くものであるといふ参考にはなるだらうと思ひます。／この手紙の本を讀まれた上で、ほとんどの手紙を幾つも書いて見れば、／次に手紙を書くことの熟練もつまなければ幾ら本だけ讀んでも未だ充分だとは云へない。兎に角、この本をよく熟讀玩味してから幾通も幾通も手紙を書いて見ることです。これが此の小さな本の著者から讀者に對する言葉である。／萩の茶屋にて／著者」とある。総ルビ付。【所蔵館】〈東京〉共立女子大学

4 『雄辯五分間 演説と挨拶』

一九二二年（大正十一年）6月1日・藤谷崇文館（大阪市西區靱南通二丁目）・三五七頁・188×88mm（三五判）・八拾錢。【内容】演説や挨拶の例をまとめたもの。挨拶の部（26編）・卓上演説の部（26編）・付録祝詞と式辭の部（41編）



より成る。総ルビ付。「自序」に、「時代の要求は誰でも喋れなくてはならないといふことである。自分の言ひたいことが徹底的に喋れないやうでは現代の活きて動いてゐる社會から落伍してしまふ。言はなくてもいい事まで喋る必要はないが、言はなければならぬ場合に喋れないことは、自己の生活を無意義なものに化して了ふのであらう。／本書は、さうした要求がありながら如何に喋るべきかに感ふてゐる人達の前に捧げる爲めになつたもので多少ともに益する處があれば編者は満足に思ふ。／終りに大阪市民館々長志賀志那人氏の序を賜はりし事を感謝する。／大正十一年の春／路郎生」とある。路郎の川柳論「作家と環境」も、卓上演説の部に収録している。「読本」の「麻生路郎文集」に収録。【所蔵館】〈秋田〉能

代市立（大正十四年7月15日八版）

5 『童話の森』



一九二二年（大正十一年）6月10日・田村書店（大阪市東區南久太郎町四丁目十三番地）・二〇〇頁・185×125mm（菊半裁判）・壹圓【内容】野口雨情作を始め、童話一六二編を路郎が選集したもの。巻末に目次一七頁を付す。序に、「わたしは毎日のやうに、埃まみれの大阪へ出て、疲れきつてかへつて來ます。用があつてもなくても、あのけむつたいやうな大阪の街を歩いて來ねば氣が濟まないのです。／綿のやうにからだがつかれて、頭が變にしびれたやうになると萩の茶屋の私の巢へ戻つて來ます。そしてワイシャツを脱ぎすてると、きまつたやうに私は二

階の窓の手摺に凭りかかつて、あかくたれたやうな太陽が西の端に落ちて行くのを涙くましくながめてゐます。時には脚の早い雲が東から西へ、南から北へ流れて行くのを凝視してゐます。／＼怒うした自然の色に私のころはなごみます。そして一日の疲れが流れをきつたやうに出て来ますが、私はそんな時に限つて私のころもちにびつたりとあふ歌や童謡を自分勝手な節をつけてうたふのです。さうすると、まるで夢のやうな世界が私の目の前にあらはれて來るのです。私の魂はお伽の國へも幻の國へも幾度かさまよひ行くのでした。／＼若い者のうれしい、よろこばしい世界は遂に若い者にしかわかりません。私の魂はいつまでもいつまでも若くありたいために童謡の森の中を絶えずさまよひ歩きます。自然の愛の泉を汲むために、若い人達とその歎びをわかちたいために、私の若い魂はいつまでも亡びないでせう。／＼この小さな本は私のすきな童謡を拾ひ讀みしてゐるうちに自然にあつまつたものです。作品の九分九厘までは少年少女作です。ほんの僅だけ専門家の人の作品をとり入れてあります。その點について特にこのことはりいたして置きます。／＼ここにあつめた澤山な童謡のうちには既に曲譜

のつけられたものもあります。けれどもわざとそれをかかげることをいたしませんでした。／＼うたふ人達によつて、そのうたにふさはしい曲譜をつくられることも一つのよろこびではありませんか。若しこの集の曲譜が出来ましたらお見せくださるやうお願ひします。書肆に推薦しまして上梓いたしたいと思ひます。／＼大正十一年春／萩の茶屋の遅日荘にて／路郎生」とある。序文から一枚置いて目白が数羽描かれてゐる絵に、「お日さん／＼きれいな／＼五しきの紐を／＼杉や檜の／＼お枝にかけた／＼お日さん／＼おはよ／＼谷のおばさん／＼こんにちは／＼かあいや／＼めじろの／＼ごあいさつ」の童謡が添えられてゐるが作者名がない。「川柳塔」昭和48年5月号に、福田丁路が「童謡の森」を紹介しており、「問題は前記の目白の童謡で、これのみに作者名が書かれていない。自分としては先生の作ではないかと思つてゐる」とある。川柳家林田馬行の童謡「帽子洗ひ」を載せておく。「赤い帽、黒い帽／＼父さん兄さん持つて来い／＼辻で伯父さん洗ふてゐる／＼白うなつたら返したる／＼きれいなつたら返したる／＼父さん兄さん持つて来い」。総ルビ付。【所蔵館】(岩手) 日本現代詩歌文学館(大阪) 大阪市立中央・梅花女子大学

6 『新譯 イソップの話』



一九二三年(大正12年2月20日)・藤谷崇文館(大阪市西區靱南通二丁目二番地)・四二五頁・12×12mm(菊半裁判)・六拾錢【内容】序に、「世界中の人で、文字を解する人で『イソップ物語』の中の話を一つでも聞いたことも讀んだこともないと云ひ得る人があらうか。私達はそれが『イソップ物語』の中の一つであるとは知らずに小學校の教科書の中でさへ學んだことがある。まして中學一二年程度の英語を學んだ時、更に『イソップ物語』に親しまされたのである。／＼『イソップ物語』は私達にいろんな思想を吹き込んだ。いろんな教訓を與へて呉れた。單に面白いただけでなく實に有益な本であるから一讀の價値は充分である、英語やその他の

外国語で読むことの出来ない人達のために本書を著はしたのであるから譯は逐字譯つじじやくによらず自由に譯出してゐる。けれど英書と對照して全く參考にならないこともない。／皮肉な教訓が随分澤山あるから熟讀されたならば益する點が多からうと思ふ。／大正十二年春／鳴尾にて／譯者。神・人間・鳥・獸・虫・樹・雜の部に分けて、二二九編収録している。総ルビ付。大正13年に四六判で發行。【所蔵館】〈東京〉国際こども

7 『これは面白い 世界歴史の話』



一九三三年（大正12年）2月25日・自光社出版部（大阪市西區北堀江御池橋西詰南）・三〇七頁・88×125mm（四六判）・六拾錢【内容】教

育講話。これは面白い児童文庫児童文庫十六編の第五編。エジプト文明を記した「埃及の洪水はお祭騒ぎ」から、第一次世界大戦の終焉「最う逆も駄目」までを、93章に分けて著した子供向けの世界歴史の話。奥付の著者は麻生路郎だが、本文の初めには、阿蘇次郎とある。総ルビ付。【所蔵館】〈長野〉上田市立上田（大阪）府立中央国際児童文学館（大正13年4月30日六版）〈兵庫〉神戸女学院大学。＊編者所有のものは、大正13年10月10日七版。

8 『新釋 ロビンソン漂流記』



一九三三年（大正12年4月から5月）・藤谷崇文館（大阪市西區靱信濃橋交叉點西入）・四四四頁・52×122mm（菊半截判）・六拾錢【内容】

ロビンソン漂流記の翻訳書。本文の書名は「新譯奇談ロビンソンクルーソー」。尾道学研究会より送つて下さったコピーを元に記録する。序に、「外國の面白い物語として是非とも一讀しておかねばならぬものに『アラビヤナイト物語』『インツップ物語』『ガリヴァ旅行記』『ロビンソン・クルーソー漂流記』などがある。／これ等の本は何れも世界に於ける一大奇書であるが本書はロビンソン・クルーソーと稱する主人公が千辛萬苦した冒険奇談であつて到る處讀者をして手に汗を握らせるものがある。その中にあつて彼は勤勉であり、義侠心に富み、慈愛を忘れなかつた實に偉大なる人物である。／本書の讀書界に有益であることは中學校などで英語の教科書として採用してゐるのにも明らかである。我國でも幾冊か和譯せられて出版せられてゐるが、原書は可成大部のものであるから到底かかる本の一冊や二冊に纏めることが出来ない。そこで比較的くたくしい處を省略して譯しておいた。／本書によつて興味を感じた人は更に原書について一讀されんことを希望する。／鳴尾にて／譯者」とある。奥付の次の頁に、麻生路郎先生譯著とあり、「世界的三天奇書の新譯」という見出しを付けた広告

文が載っている。「あまりに有名な本である。ロビンソン・クルソー漫遊記は人生の不可思議なる運命を語つて餘まずところが無い、彼の豪膽彼らの努力は全篇に勇躍してゐる。「アラビヤ物語」は實に奇々怪々にして一讀驚嘆せしむるの書であり、「イソップの話」は皮肉と諷刺で全篇を一貫して居り、しかも教訓的なものである。取えて一讀を薦む」とあり、『新譯ロビンソンクルソー』『新譯アラビヤナイト』『新譯イソップの話』の順に掲載されている。総ルビ付。『所蔵館』〈広島 尾道学文庫（大正15年9月25日十版）

9 『新譯 アラビヤナイト』



一九二三年（大正12年）5月15日・藤谷崇文館（大阪市西區靱橋交又點西入）・三九〇

頁・ 25×23 mm（菊半裁判）・六拾錢【内容】奥付の次の頁に、8『新譯ロビンソンクルソー』と同じく、「世界的三大奇書の新譯」という見出しをつけた広告文が載っている。総ルビ付。大正13年に四六判で発行。『所蔵館』〈東京 国際こども

10 『大正 傑作壹萬句』

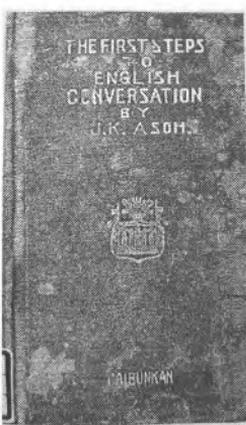


一九二三年（大正12年）7月15日・藤谷崇文館（大阪市西區靱南通り二丁目）・四七六頁・ 25×28 mm（四六横判）・壹田廿錢【内容】「編者の言葉」に、「（一）出来る限り最新の句を蒐めました。初學者が最近の傾向を知るには、さうした方が一番便利であらうと思つたからです。大正傑作一萬句とは名づけましたが季節により、又作家により多少寛大に見た傑作もありますから、そのお積りで御覽を願ひます。／＼（二）この本に採録した句の作家は日本全國にわたつて居ることは勿論ではありますが、従來の句集の多くが東京を中心としてゐるのに反して本書では、大阪を中心として廣く關東關西の作家を網羅いたして居ります。この書の特長の一つとして數へることが出来ます。／＼（三）この本に蒐めた句の多くは下記の新聞、雜誌、俳書、句集等から更に佳句と信するものを選びましたから初學に取つては安じて參考に資することが出来ます。／＼【大阪朝日俳壇】『大阪毎日俳壇』『毎朝』『關西日報俳壇』『大阪日日俳壇』『神戸又新』『太陽日報』『徳島』『ホトトギス』『同人』『カラタチ』『懸菖』『鷄』『にひはり』『潮』『ほばしら』『祇園』『春曉』『俳諧雜誌』『春潮』『俳諧文學』『天の川』『ふるさと』『海月』『青果』

『コブシ』『澤の光』『蒔柿』『タカネ』『雪』『骨』
 『土』『海紅』『文明』『東風』『初蟬』『曲水』『濤』
 『木太刀』『雲母』『俳句の友』『南柯』『斧』『凌』
 『露』『草』『高潮』『穂麥』『潮音』『雷』『中心』『か』
 げろう』『うしほ』『誕生』『雙灣句集』『枯野』『む』
 れ鳥集(一)』『むれ鳥集(二)』『葵(一)』『葵(二)』
 『木蝨』『醫大句集』『唐土句集』『日田句』
 集』『新選一萬句』『冬の土』『俳句の作り方』
 一虫の聲』／其の他から選んだので、實に十數萬の
 句中から更に一萬餘句を抜いたものでありま
 す。／(四)本書は部門を『新年』『春』『夏』『秋』
 『冬』の五大部に分ち、更に之を天文、地理、時
 候、人事、宗教、動物、植物の七類に細別しま
 した。／大正十二年盛夏／阪神鳴尾尾連日莊にて
 路郎生』とある。路郎作品は(花火高し根根崎
 艶話かな(蜻蛉眼をさへざれり道を曲る)(面
 會謝絶してばせを葉の晝(ばせを裂けたる朝
 の人戀し)の四句収録。初版の最後の頁に、『新
 選傑作壹萬句』句稿募集の案内があり、『川柳維
 誌』大正13年2月号裏表紙に、目下編纂中とあ
 るが、『新選傑作壹萬句』については、編者未見。
 出版されなかつたのではないか。【所蔵館】(岩
 手)日本現代詩歌文学館(大正12年12月10日三
 版)(神奈川)神奈川近代文学館(山梨)県立文

学館(大阪)大阪市立中央(3冊。内1冊は大
 正12年8月再版? 裏表紙奥付がなく、蔵書検
 索データによる)(兵庫)神戸市立中央(大正13
 年3月15日版不明)(愛媛)県立(大分)県立

11 『英語獨習 會話の近道』



一九二四年(大正13年)9月25日十版・大文
 館書店(大阪市東區和泉町松屋町北入)・三四
 五頁・ 88×88 mm(三三判)・八十五錢【内容】ア
 ルファベットの説明から始めて、社交會話・實
 業會話など五つのパートに分けて著した、英會
 話の入門書。著者名は麻生幸二郎の本名を用い
 ている。表紙の、書名と著者名は、「THE
 FIRST STEPS TO ENGLISH CONVERSATION
 BY J. K. ASOH」とある。序に、「日本語
 だけで話せたらそれで一生を何の不自由もな
 く暮らせた時代は既に過ぎ去つてしまつた。／

日本の到る處に外人を見、海外の到る處に日本
 人を見ることになつた。勢ひ今日の日本人は誰
 でも世界語とも名づくべき英語位は話さなけ
 れば社會生活上常に他人に一步を譲らなけれ
 ばならない。／世間には自分等は學問が無いか
 ら到底も英語は話せないなどとあきらめてあ
 る人があるが、これは大きな間違ひであつて、
 英語を話すこと云ふことは學問があるなしにか
 わらぬものである。學問があるに越したことは
 ないが左程教育のない人でも少く勉強す
 れば立派に英語の話せるものである。／本書は
 つとめて簡単に、英語の會話が出来るやうに編
 纂してあるから、繰返し繰返し音讀をされ遂に
 暗唱するまで反復されたならば英語の會話は
 本書一冊で充分である。／小店員の方でも店先
 の外人を相手にせなければならぬ時代であ
 り、労働者でも海外まで出掛けなければならぬ
 い時代である。教育があるとか、無いとかいふ
 問題と英語の會話とは全然切離して考へねば
 ならぬ。／會話を練習する人に對して必要なこ
 とは發音上力を入れる部分に注意しなければ
 ならぬ。その力の入れるところは辭書を見れば
 一々印がついてゐるから文字の意味が判らぬ
 場合辭書をひけば必ず同時に發音も注意して

見て置く必要がある。次に言葉の句切り方に氣をつけぬと、ペンケイガナ、ギナタラモツテ式の話し方では自分では立派に話せてゐる積りでも相手方にはとんと通じないのである。／＼幾ら話をせうと思つても日常使用する單語が充分でないと話せないから一般に使用される單語を巻尾につけておいたから利用されたい。／著者識」とある。『所蔵館』〈千葉 成田山仏教

12 『これは面白い 日本歴史の話上の巻』



一九二四年(大正13年)2月10日・自光社出版部(大阪市西區北堀江御池橋西詰南入)・三
四九頁・ 88×55 mm(四六判)・六拾錢【内容】
『教育講話』これは面白い児童文庫』十六編の
第三編。太古・上古・中古・近古の四章に分け

て、神代から秀吉の朝鮮征伐までの時代を著し
た子供向けの日本歴史の話。奥付の著者は麻生
路郎だが、本文の初めには、阿蘇次郎とある。総
ルビ付。『所蔵館』〈愛知 春日井市本館(大正
13年5月15日5版)

13 『これは面白い 日本歴史の話下の巻』

一九二四年(大正13年)2月10日・自光社出
版部(大阪市西區北堀江御池橋西詰南入)・
 88×55 mm(四六判)・六拾錢【内容】『教育講
話』これは面白い児童文庫』十六編の第四編。
編者未見。

14 『これは面白い 世界偉人の話』



一九二四年(大正13年)2月10日・自光社出

版部(大阪市西區北堀江御池橋西詰南入)・三
二頁・ 88×55 mm(四六判)・六拾錢【内容】
『教育講話』これは面白い児童文庫』十六編の
第七編。グラッドストーン(英吉利)・トルストイ
(露西亞)・ウイルソン(亞米利加)・ナイチン
ゲール(英吉利)・ウエリントン(英吉利)・シ
エクスピエヤ(英吉利)・リンコルン(亞米利
加)・ピスマルク(獨逸)・ナポレオン(佛蘭
西)・レオニダス(ギリシヤ)・フレデリック大
王(プロシヤ)・ハンニバル(カルタゴ)・ペー
トル大帝(露西亞)・コロンブス(伊太利)・ワ
シントン(亞米利加)・ジャンダーク(佛蘭
西)・ネルソン(英吉利)・ソクラテス(ギリシ
ヤ)・キリスト(ユダヤ)・エリザベス女王(英吉
利)の20人の話をまとめたもの。本文の初めも、
阿蘇次郎ではなく、麻生路郎の名を用いてい
る。総ルビ付。編者所有のものは大正13年10月
5日6版。

15 『受験必携 メンタルテスト』

一九二四年(大正13年)2月15日・小島文開
堂(大阪市西區阿波堀通三丁目)・一四三頁・
 88×58 mm(B6判)・五拾錢【内容】書名は、
奥付によつた。それぞれの学校の心理テスト



扉

を、置換法・反対法・記憶法・迷路法・観察法・推理法・探索法・構文法・補字法・抹消法・雙手練習法・上位聯想法・打點法・計算法・分解法に分類して編纂した。序に、「中學校、商業學校、工業學校、高等女學校、其他の中等學校の入学難は入学試験問題の研究となり、各小學校では、ひそかに入学試験準備教育を課し、之れが對應策を講ずるに到つた。しかしながら、斯る試験法は徒らに機關的暗記法となり、眞の人格的入学試験法たらず、しかも兒童の將來をあやまることの甚しきを思ひ、こゝに精神検査法なる一方法に據つて入学兒童の精神を論理的及機關的の二部に分ちて検査することとなり、中等學校の多くはこれを採用するに決し又は一部加味すること、なつた。本書は即ち精神検査とは、如何なるものなりやといふ概念を與ふるを目的として、

各學校で實地に採用したる精神検査法の問題を蒐集し更に他の類題を合はせて編纂したるもの、今後の入学受験者が、メンタルテストを受けるべき指針たれば編者の歡び、之れに過ぎず。大正十三年二月 編者誌」とある。また、「前がき」に、「近頃、東京、大阪、埼玉、岡山其の他の府縣を始めとして、全國の各中學校、女學校其の他の専門學校で、在來の學科試験に對する精神検査なるものが、入学試験の重要な試験科目の一つとして數へられるやうになりました。精神検査と云ふのは、心理的の方面から種々な手段を講じて、總合的に其の精神力の検査をする事で、即ち英語のメンタルテスト (Mental Test) の事であります。精神上の特質を測定することでありますから、單なる形式的な表面觀察ではなく内面に立至つて、任意に定めた條件の下に於て、種々なる方面から考察しますから其の條件を變更し、検査を反復し、且つその結果を量的に取扱ふ事が出來ます。これらの點は、實驗と似てゐますけれども、検査は實驗のやうに、精神作用の質的分析を試みるのが目的でなく、寧ろ其の能力を一定の標準に照らして、量的に測定せんとする教育診斷的の目的を持つてゐるものであります。／

でありますから、被験者の内省的觀察が重要な地位を占めてゐますけれども、検査の場合には、被験者の内省に依頼することがありません。是に重きを置くことと云ふことがないのであります。殊に検査は多くの兒童に就て行はれるのでありますから、尙更ら内省に重きをおくことは出來ないのであります。それでありますから一言で云ひますと、在來の身體検査が健體兒童の標準的發育に照して、個々兒童の身體發育の程度を量的に測定し、評定しやうとしたのに對して、兒童の精神的發達を検するために用ひらる、科學的測定の方法を名づけて精神検査即ちメンタルテストと解して差支へないのであります。此のメンタルテストが各學校の入学試験の一目目として採用せらるゝやうになつた爲め、被験者の兒童をして、その先入智識がないため非常に間違つかさせ、學科試験では良成績を得ても、メンタルテストで、夫れを零にしてしまふといふ憂目を見られる諸君も尠くないやうです。さうした諸君のために、又これからメンタルテスト入学試験を受けられんとする諸君のために、意を用ひて本書は編輯されたものであります。殊に本書編輯の特色としては、問題を各種別にして、あらゆるメン

タルテストの問題を網羅してあることであります。此の書をお読みになつて、反復熟讀をなされたならば、難しいと思はれてゐるメンタルテストも譯なく通過出来ること、思ひます。其のお積りで諸君の勉強を併せて祈つておきます。／別に参考のため、実際に行はれた横須賀中學校の心性検査説明書を添加して置きました、これも非常な参考になるだらうと思ひます。／編纂に際しては問題大部分を實際に行はれた、横須賀中學校、東京高等師範學校附屬中學校、東京府立中學校、東京府立第四中學校、東京府立第六中學校、東京高等學校、東京女子高等師範附屬高等女學校、東京府立第二高等女學校等の精神検査試験問題から採録したもので、文中何々検査法としてあるところに示した學校名がそれでありませう。然らざるものは、編者が随意に挿入したものであることを御承知置き下さい」とある。なお、奥付の著者は、「兒童愛護會 麻生路郎」とある。『所蔵館』(兵庫県)神戸市立中央

16 『漫畫漫文 川柳ふところ手』

路郎装幀・柴谷柴舟漫画。一九二四年(大正十三年)6月5日再版・田村書店(大阪市東區南



久太郎町四丁目)・二〇二頁・188×133mm(四六判)・壹圓廿錢【内容】一九二〇年(大正九年)10月25日に奎文堂から発行された『川柳漫画懷手』菊半裁判を四六判に改め、書名を変えて発行したもの。最初に川柳漫画二頁六句が付け加わつた以外、内容は全く同じ。ただし、初版の剣花坊・南北・水府の序と、路郎の「巻末」にはない。「再版に就て」に、「初版は豫想外に好評であつた。川柳を少しも知らぬ人でさへ面白がつて讀んで呉れた。そして川柳といふものは面白いものです」と云つて呉れた。私はもうそれで満足した。それ以上をこの本でのぞんで居なかつたからである。再版を希望する人が多かつたけれども、つい忙しいのでその儘にして居つたが、書肆田村氏の好意で新に改訂版を出すことになつた。それで書名も『漫畫漫文 川

柳ふところ手」といふ長い名に改めた。／大正十三年春／阪神沿線鳴尾にて／路郎生」とある。総ルビ付。『所蔵館』(山形)酒田市立光丘(神奈川)横浜市立中央(大阪)大阪市立中央(2冊)・関西大学

17 『卓十五分間式辭と演説(大正版)』

一九二四年(大正十三年)12月1日三版(初版は、序から5月か6月頃だと考えられる)・大文館書店(大阪市東區和泉町松屋町北入東側)・三四七頁・188×133mm(四六判)・壹圓七拾錢【内容】序に、「誰でも喋れなくてはならないのが今日の状態であります。／理を非にまげて喋る必要はないが理を非にまげられたときに、黙つてまげられてゐる必要はない。／そんな時には大に自己の主張を述べなければならぬ。そして人生生存の意義を明らかにしなければならぬ。／しかし無闇矢鱈に演壇に立ちたがることは考へものである。言ふても言はなくても済むことを、何んだか、その時何か喋べらなければ自分の權威に關するかの如く思ふて喋べる人があるが、これは大きな間違ひである。そんな時に喋べつた話といふものは決して人の心を動かすものではない。／談さなければ

起つても坐ても居られぬ時に始めて、談すやうにしなければならぬものである。／本當は、喋べることの必要はありながら全然、その喋べり方を知らない人達のため参考にもなればと思つて編したのであります。しかし形式に囚はれぬやうなるべく自由に談されるのがよろしいと思ひます。／鳴尾遅日莊にて／編者識／十三年の初夏」とある。奥付に「大正式辭と演説」とある。総ルビ付。ハードカバー。【所蔵館】（静岡）静岡大学

18 『新譯 ロビンソン漂流記譯』



一九二四年（大正13年）9月15日・崇文館書店（大阪市西區靱信濃橋交叉點西入北側）・四四四頁・188×188mm（四六判）・壹圓【内容】ロビンソン漂流記の翻訳書。本文の書名は、「新譯

奇談ロビンソンクルーソー」。序は、8『新釋ロビンソン漂流記』と同じ。奥付の裏の頁に、「兒童の讀物 麻生路郎先生新譯」とあり、「新譯ロビンソン漂流記 人生の不可思議なる運命を語りてあます所がない、彼の豪膽と努力は全編に勇躍す」「新譯 アラビヤン物語 奇々怪々世界の人類を驚嘆させた名作である、譯者は麻生先生、悪からう筈がない」「新譯 イソツプ物語 教訓と諷刺が本書の生命である」の広告がある。大正12年に菊半裁判で発行したものを、四六判に変えたもの。総ルビ付。

19 『新譯 アラビヤン物語』

一九二四年（大正13年）9月15日・崇文館書店（大阪市西區靱信濃橋交叉點西入北側）・四四四頁・188mm（四六判）・壹圓。大正12年に菊半裁判で発行したものを、四六判に変えたもの。総ルビ付。編者未見。

20 『新譯 イソツプ物語』

一九二四年（大正13年）9月15日・崇文館書店（大阪市西區靱信濃橋交叉點西入北側）・四四四頁・188mm（四六判）・壹圓。大正12年に菊半裁判で発行したものを、四六判に変えたもの。総

ルビ付。編者未見。

21 『これは面白い 私のからだ』



一九二五年（大正14年）3月1日・自光社出版部（大阪市西區北堀江御池橋西詰南入）・三三三頁・188×155mm（四六判）・六拾錢【内容】「教育講話 これは面白い兒童文庫」十六編の後に出版されたもので、第何編に当たるかは未詳。人体の各部の働きや病氣について著した兒童向けの教養書。序に、「人間といふものが、どうして出来たものであるか、又いつのほどに人間といふものは無くなつてしまふものなのかは知らないが、現在生きてゐる人間をちつとながめてみると仲々不思議な動物であることに心づく。／どんな立派な、すぐれた機械でも人間の機械ぐらい巧みに出来てゐるものはあ

りますまい。／私はさう思ふて私のからだをつく／と眺めました。眼、口、鼻、耳、手、脚一つとして不要なものはない。一つとして不恰好なものはない。／私は今病氣で床の中にあるが、更に／私のからだについて研究する時間を與へられたものだと思つてゐる。／病氣で床の中に呻吟してゐることは機械に故障が出来て格納庫に入れられてゐる飛行機にも等しいのだと思ふと何んだか滑稽にも感じられる。／小さな私のからだの研究から、諸君はどんな知識を得られるかは疑問でありますがおんな不思議な機械を恵くまれた我々は、出来るだけ大切に／して永く保存せなければ玩具を毀はして、直ぐに買つて貰ふやうな譯には行かぬと思ふのであります。／大正二四年新春／阪神沿線鳴尾遅日莊／著者誌とある。総ルビ付。＊『川柳雑誌』昭和33年3月号に、後藤梅志が紹介文を書いている。【所蔵館】〈長野〉上田市立田

〈愛媛〉県立

22 『小國民叢書 世界の昔ばなし』

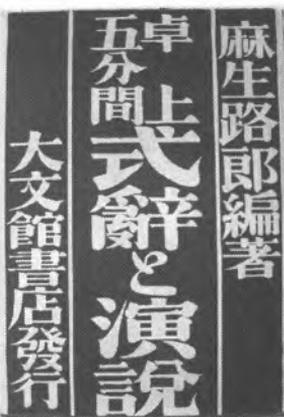
一九二八年（昭和3年）1月15日・國民出版社（東京市神田區表神保町一〇・大阪市西區新町通三丁目四一）・二四六頁・一〇八×一三〇mm（四



六判）・五拾錢【内容】7「これは面白い 世界歴史の話（大正12年2月25日・自光社出版部）の全93章のうち、①埃及の洪水はお祭騒ぎ、か（73）ナポレオンの再舉、までの章を収録し書名を変えて出版したもの。國民出版社は、小國民叢書として『日本の昔ばなし』『童話のインソツブ』なども出版している。あるいは、それらの本も路郎の作かもしれない。総ルビ付。＊編者所有のものは、昭和3年4月25日再版。

23 『卓上五分間式辭と演説（昭和版）』

一九二八年（昭和3年）2月20日・大文館書店（大阪市西區阿波座四番丁十三番地）・三四七頁・一〇八×一三〇mm（四六判）・八拾錢【内容】17「卓上五分間式辭と演説（大正版）」を、昭和版と名を改めて出したもの。内容は全く同じ。序



も同じだが、「鳴尾遅日莊にて／編者識」／十三年の初夏の「十三年の初夏」を省いている。総ルビ付。【所蔵館】○ソフトカバー（香川）多度津町立明德会（昭和3年2月20日（奥付に普及版）・鳴門教育大学（昭和4年3月5日と昭和8年8月15日（壹圓）の2冊あり）＊編者所有のものは、昭和4年3月5日再版。○ハードカバー（山梨県立（昭和8年6月10日・壹圓）（香川）鳴門教育大学（昭和7年5月5日・壹圓）

24 『川柳漫畫 異卵の遊び』

柴谷柴舟漫画 一九二八年（昭和3年）4月1日（5月8日第二版）・不枳洞（大阪市西區區千本通五丁目七番地・発行者麻生ヨシノ）・一六〇頁・一〇八×一三〇mm（四六判）・壹圓【内容】『川柳雑誌』昭和3年3月号の広告の「内容概目」



に、「川柳漫書 累卵の遊び」の章は、「麻生路郎氏が「川柳雑誌」に連載して非常なる好評を博したる川柳漫書漫文集に、更に川柳家諸氏の力作になる佳句名吟を類題により収録したるもの——」、「日月は輝く」の章は、「週刊朝日」特別號に掲載されたる川柳佳吟に選者麻生路郎氏が短評を加へて初心者の參考に資したるもの——、「大衆と共に」の章は、「講談倶楽部」柳壇の佳句に、その選者麻生路郎氏が短評を附加して一般讀者の興趣を湧かしめたるもの——とある。「序 其の壹」に「柳友よ」と題して、「二本の燐寸が／燃えつくすまでに／寒さや 空腹が／せまつて来る迄に／わたしはち／は／一句を遺しておかねばならぬ」とある。「序 其の貳」に、「(一) 川柳の妙味を、骨を折らずに味つて貰ふつもりで、噛んで碎いて摺り餌に

したのが「累卵の遊び」である。喰べて味がわるければ、それは私の料理が拙いので、即ち噛み方や碎き方が足りないので川柳の罪ではない。／(二)「川柳雑誌」では幸ひにして好評だった。そこで、もつと世の中の多くの人達にも味つてもらいたいと思つて單行本にする慾を出したのである。このころは宗教をひろめるころと少しもかはりはないのである。お金が儲けたいなどといふ、そんな大それた考へからは毫頭ない。今の言葉で言へば川柳社會進出の一助としたためである。／(三) 作品はすべて「川柳雑誌」から抜いた。類題にしてある句の多くは雑詠から採つたものである。漫書になつてゐる句、句評、漫書などと關聯して句を味ふ時、一層興趣が深からうと思つて、類題別にしたのである。／(四) 類題句の中からその一句を選んで漫書にしたのではない。漫書になつた句に因みある句を拾ひ蒐めて類題句としたのである。従つて畫になつた句と、ならぬ句との間に巧拙の差を意味してゐるものではない。つまり「累卵の遊び」は「川柳雑誌」に連載したものに、新に句を蒐めてなつたものである。作家は全國に及んでゐる。／(五)「累卵の遊び」の外に「日月は輝く」と「大衆と共に」

を加えた。／(六) 漫書に、装幀に、相變らず柴舟兄に片棒を擔いでもらつた。僕が生きてる間は君をなやますことだらうと思ふ。感謝の外ない。／昭和三年三月 路郎識」とある。【所蔵館】〈東京 国立国会(山形 酒田市立光丘(群馬 県立土屋文明記念文学館(長野 須坂市立須坂(大阪 大阪市立中央・堺市立中央・関西大学(兵庫 神戸市立中央・武庫川女子大学(愛媛 県立

25 『雄辯自在 五分間演説と挨拶』



一九二八年(昭和3年) 6月1日・中央研究所(大阪市東區谷町四丁目電停前)・三五七頁・188×92mm(三五判)・壹圓貳拾錢【内容】4『雄辯五分間 演説と挨拶』と内容・体裁は全く同じ。書名と、表紙の色を濃緑色から茶色に

変え、出版社を変えて発行されたもの。

26 『川柳漫談』



一九二九年(昭和4年)8月1日・弘文社(大阪市東區備後町二丁目三番地・東京市下谷區御徒町二丁目一九・三九二頁・188×132mm)四六版・壹圓五拾錢【内容】川柳漫談(29編)「川柳染ちがひ」「ト昔前の大阪見物」から成る。序は、「麻生路郎物語」(14)中に収録されている。序の次頁の説明に、「川柳漫談二十九篇の内」「盗人」「女の三十」「賽銭」は「週刊朝日」(昭和四年)へ、「川柳染ちがひ」は雑誌「世間」(大正十四年)に、「ト昔前の大阪見物」(大正十一年)は大阪日日新聞に掲載されたもので「川柳染ちがひ」と「ト昔前の大阪見物」とは「川

柳漫談」のお添物として掲げた。その二篇の中に挿入してある川柳はすべて拙吟である。／「ト昔前の大阪見物」は多くの俗語と方言とで書いたために、ほんとの大阪が出てゐるやうに思ふ。當時の大阪はまだ東西南北四區の大阪で、大大阪となつた、約八年後の今日、回顧して見るに甚だしい變り方である。その頃はジャズの大阪ではなかつた。藝者に取つて代つたやうなウエートレスの大阪ではなかつた。レヴューやトーキーの大阪ではなかつた。*播重がなくなり、*京與が暖簾を掛け替へ、三越が焼太り下駄穿き時代が現出してゐる。記事中の人で既に故人となつてゐる人もある。その變り方については一々説明をしないことにした。寧ろ讀者自身で點檢された方が興趣が深からうと思ふ。／「川柳漫談」の装幀及挿繪は吉岡島平氏「川柳染ちがひ」と「ト昔前の大阪見物」の挿繪は柴舟氏を煩はした。「川柳漫談」中、句主や知己柳友の敬稱は一切略した。諒とされた。い。「路」とある。*播重は、千日前にあつた女義太夫の席。京與は、道頓堀にあつた魚すき屋。総ルビ付。【所蔵館】(北海道)道立(青森)県立(岩手)日本現代詩歌文学館(東京)国立国会・都立中央・駒澤大学(群馬)県立土屋文明記念

文学館(富山) 栃波市立(愛知) 名古屋大学・相山女学園大学中央(京都) 府立(大阪) 大阪市立中央(2冊)・関西大学(兵庫) 神戸市立中央・西宮市立中央(鳥取) 県立(2冊)(鳥根) 県立(愛媛) 県立

27 『漫画浮世やまざま 川柳のそぎ』



清水對岳坊、宮尾しげを、吉岡島平、柴谷柴舟、吉田清漫画、一九三二年(昭和6年)6月20日・湯川弘文社(大阪市南區順慶町一丁目五三・東京市神田區錦町三丁目一一)・三三〇頁・188×132mm(四六判)・壹圓【内容】赤い灯青い灯・趣味と娯楽・衣食住篇・戀愛・三昧・子どもの世界など、27の章に分類して川柳漫画を編纂したもの。序に、「日本人はむづかしいも

のをありがたがる癖がある。お経などもその一つである。坊さんがフシをつけて唄つてゐると、いかにもありがたいものやうに取扱つてゐるが、さて何處がありがたいのか、わかつてはゐないやうである。キリスト教の聖書のやうに、一讀萬人の肺腑をつく方がもつとありがたさうなものであるが、それではあまりに安ッぽいと云つてけなす。けなすばかりでなく一讀しただけでキリスト教がわかつたやうなことを云ふ。をかした話である。／川柳もどちらかと云へば比較的わかり易く、一讀萬人の肺腑をつくため、あまりありがたがられぬうらみがある。かみしめたらウンと味が出るのに、一向かみしめて見やうとしない。一讀してすぐわかつたやうに云つてしまふ。これは確に日本人の大きな缺點だと思ふ。／本書は少しく川柳をかみしめる稽古をして貰ひたいために出したのである。何分、短い詩型であるから、自分ではわかつたつもりでゐても、その句の内容の七八位しか解してゐなかつたり、中には全然意味を取違へて、けなしたり感心したりしてゐる人がゐないでもない。そこで、難かしい川柳は別として、比較的わかりよい句や、面白い句や、味のある句を選び出して、それに漫畫の力をかり

て一層句意をはつきりさせて、川柳にお馴染の薄い方にも味つて貰ふことにしたのである。／岸の里の寓居にて／編者識」とある。総ルビ付。『所蔵館』（福島）須賀川市立（千葉）県立中央（大阪）大阪市立中央

28 『産業界の先驅 宇喜多翁』



一九三二年（昭和6年）11月24日・宇喜多秀穂翁記念傳記刊行會（大阪市住吉區天王寺町二七九番地）・二五八頁、一〇〇×一〇〇（四六判）丙容 安政6年讃岐に生まれ、高野登山鐵道株式會社取締役や帝國交通協會理事長を務めた宇喜多秀穂の古稀祝賀として、昭和4年11月24日（日）に、松山城麓長者ヶ丘に寿像が建立された。その記念に刊行された伝記である。「宇喜多

翁傳」「翁の横顔」「年譜」から成り、路郎は発起人幹事兼編纂委員の三人に名を連ね、奥付に、「編纂兼發行者 麻生幸二郎」とあることから実質的な編者だと考えられる。緒言に、「人生誰か功名を欲せざるものあらんや、而かも多くは事志と違ひ徒らに醉生夢死を歎ずるもの此此みな然りであります。而も我が宇喜多秀穂翁の如きは異數の傑人なりと謂はねばなりません。翁はその壯時より終始一貫奮闘努力の結果空しからず、既に功成り名遂げて、常人ならば悠々自適餘生を樂しむべきに拘らず、齡古稀を過ぎたる今日、益々壯んに日夜東奔西走して殆んど席の暖まる暇なく尙國家社會を念として倦むところを知らず活動を續けて居られます。／蓋し翁としても男子の本懐これに過ぎざるべく、一面また健康に恵まれざれば到底爲し能はざる所にして、その清福眞に羨むべきものがあります。翁は幼にして穎悟、夙に英學を修め、心中深く期すところあり、我國産業界の搖籃時代たる明治初年に於て早くも泰西の農學に志し、率先して東都に學ばれた先覺の士であります。而して學業を卒るや直ちに四國に歸りて職を官界に奉じ専ら産業の開發に力を盡し各方面にその功績を遺されたのであります、が、

後ち民業の發達は交通機關の普及に俟たざるべからずとの確信の下に意を決して官界を去り、鐵道事業に身を投じ、爾來或は郷國或は阪地に於て斯業のため鋭意奮闘せられた事は世人の普く知るところであります。實に翁の生涯の如きはその儘が我國に於ける産業並に文化發達の歴史の具現であります。加之、翁の一代は實踐躬行の活模範であつて、玲瓏璧の如きその人格と相俟つて後進の大に學ばねばならぬところす。／辛未晩秋／編者謹記」とある。また、「翁の横顔」には「翁に捧ぐ」と題して、「壽傳記翁の歡喜や思ふべし」(天下茶屋席あたたまるひまもなし)の祝吟を寄せている。【所蔵館】(北海道)道立・北海道大学(岩手)県立(東京)津田塾大学(大阪)大阪産業大学・大阪市立大学・大阪樟蔭女子大学・大阪商業大学・阪南大学(京都)同志社大学(和歌山)和歌山大学

29 『川柳漫畫行進曲』

清水對岳坊、宮尾しげを、吉岡鳥平、柴谷柴舟、吉田清漫画一九三二年(昭和7年)8月15日・湯川弘文社(東京市神田區錦町三丁目一)・大阪市南區順慶町一丁目五三三・三三八



頁・88×88mm(四六判)・壹圓【内容】27『漫画浮世さまさま』川柳のぞき(昭和6年6月20日・湯川弘文社)を書名を変えて発行したものの総ルビ付。【所蔵館】(富山)高岡市立中央(大阪)大阪市立中央(2冊)(滋賀)県立

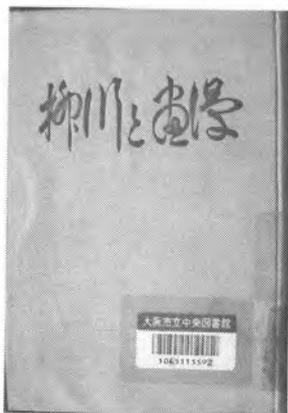
30 『成功美談 末末の大統領』

一九三二年(昭和7年10月5日)・國民出版社



(大阪市西區新町通三丁目四一番地)・二三七頁・88×88mm(四六判)・二十五銭【内容】14『これは面白い』世界偉人の話(大正13年2月10日・自光社出版部)で取り上げた世界の偉人20人のうち、最後の5人、ジャンダーク(佛蘭西)・ネルソン(英吉利)・ソクラテス(ギリシヤ)・キリスト(ユダヤ)・エリザベス女王(英吉利)を除いた15名の話を受録し、書名を変えてハードカバーで発行されたもの。総ルビ付。

31 『漫画と川柳』



清水對岳坊、宮尾しげを、吉岡鳥平、柴谷柴舟、吉田清漫画一九三四年(昭和9年)3月20日・富永興文堂(東京市下谷區御徒町貳丁目四十九番地)・三三九頁・88×88mm(四六判)・壹圓八拾銭【内容】27『漫画浮世さまさま』川

柳のぞき(昭和6年6月20日・湯川弘文社)・
29『川柳漫行進曲』(昭和7年8月15日・湯川弘文社)を、書名と出版社を変えて発行したものの。前の二冊にあった見返しの、路郎の(ただしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと)〈貸家は聳ゆ子のある方はお断り〉を漫画にした頁はない。布装上製本。総ルビ付。【所蔵館】〈青森〉県立(大阪)大阪市立中央

32 『阪大川柳會句集 大川端』



一九三五年(昭和10年)8月1日・不朽洞(大阪)市西成區玉出本通三丁目三十六番地)・一九九頁・188×188mm(四六判)【内容】昭和6年7月25日(土)発足した「阪大川柳會」の作品を(路郎が再選してまとめたもの。序に、「山を登り

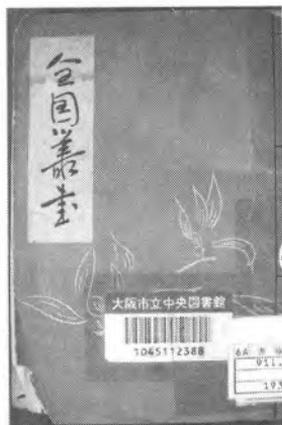
切るまでには幾度か足をとどめて、歩み續けて来た道を振り返るものである。／瞰下に白光つた一筋の帯のやうな流れへ無限の情趣をよびかけるのもこの時である。／さうした感懐と意圖の下に刊行される句集「大川端」が川柳愛好の士の渴を醫するに足ることはいふまでもなからう。／☆句集「大川端」の挿柄は阪大川柳會で一度私の選になつた句ばかりであるが、斯うして簡人々々の句を一列に再選して更にその人々の心の奥深く觸れ得た感がある。／灰色の街——大阪にこの句集のあることを、こゝろからよるこびたい。／天神祭を前に阪大の一室にて／麻生路郎」とある。長崎柳秀(金魚屋に舞妓たもとを教へられ)笠原路生(六角堂幾何學的に暮れて行き)小林橙舎(一本の外はどうでも良いテープ)佐野菜(温泉や坐り羅漢に寝る羅漢)など、十七人の会員の一八五一句を収録。路郎は最後の頁に、「席題句抄」として、(腰が立てばまだ富田屋の一の客(爪弾の晋作油断せぬ構)(佛壇は凡夫の拜む色で塗り)(嚴父慈母子に見せられぬ本もある(笑はぬ父に恩給がつき)(腰の低いとこも家主にひけをとる)(店子店子とたゞで貸すやう)(天井へ聞かず講義と知らざりき)(女店員中の一

反抱へたり)〈西部戦線わが重貞に異状なし〉(朝訪へば蚤をつまんであるところ)の十一句を寄せている。【所蔵館】(大阪)大阪市立中央

33 『式辭と演説挨拶の仕方』

一九三六年(昭和11年)12月30日・國民書院(大阪)市東淀川區西町赤十字隣・三七〇頁・188×135mm(四六判)・壹圓五拾錢【内容】17・23の「卓上五分間式辭と演説」(大正版)(昭和版)に、増補の部(田中義一・若槻禮次郎・床次竹二郎の演説)を加えて、書名・出版社を変えて発行したもの。【所蔵館】〈香川〉鳴門教育大学

34 『全国叢書 川柳の巻』



一九三八年(昭和13年)6月15日・岡本ノ一

ト社（大阪市南区西賑町一九）・二〇頁・
 110×110mm（A6判）・非売品・三十万部【内容】
 便箋会社の岡本ノート社が全国便箋の付録と
 して出した冊子。路郎が古川柳76句を選び、評
 釈を加えたもの。路郎は、「便箋のある風景（五
 句）」と題して、「便箋へ夢の話は美しき」（春夏
 秋冬が便箋にをどる）（便箋の用意故郷に父母
 があり）（御不在へ便箋を借る久しぶり）（便箋
 と一輪差しと奥様と）を寄せている。【所蔵館】
 〔大阪〕 大阪市立中央

35 『新川柳評釋』



一九三八年（昭和13年）10月15日・不朽洞天
 阪市西成區玉出本通三丁目三六番地）・一四六
 頁・88×130mm（四六判）・八十錢（滿洲・朝

鮮・臺灣・樺太等の外地八十八錢）【内容】「川
 柳雜誌」に連載された「川柳評釋百句」と「川
 柳名句評釋」を合纂したものの。自序に、「句はそ
 の人のこころである。十七音字はその人の姿で
 ある。リズムはその人の呼吸である。／この評
 釋では、不即不離の間に川柳の良きこころを美
 しき姿を正しき呼吸を紹介するに過ぎぬ。／皇
 紀2598年9月18日夜／黒龍丸船室に
 て／著者識とある。凡例に、「★本書は月刊『川
 柳雜誌』に連載した拙稿『川柳評釋百句』及び
 『川柳名句評釋』の二篇の合纂で、句数は前者が
 百、後者が百七十一句、合計二百七十一句あ
 る。／★評釋は所謂評釋でなくて、不即不離の
 ものとした。しかも原句を傷けぬやう心血を濺
 いだ。／★句は全國の柳誌から拾った。句主の
 雅號を左に録して敬意を表する。（以下略）」と
 ある。巻末に索引を付す。【所蔵館】〔青森〕 県
 立（東京） 国立国会 〔大阪〕 大阪市立中央（2
 冊）・堺市立中央・関西大学（長崎）長崎大学医
 学分館

36 『陣中川柳』

一九四三年（昭和18年）2月30日・興亞書局
 〔大阪市西區江戶堀南通二丁目一三〕・一〇一



頁・88×130mm（B6判）・三十五錢・2万部
 発行。奥付に、「配給元 東京市神田區淡路町二
 丁目九番地 日本出版配給株式會社」とある。
 【内容】はしがきに、「★この句集は廣溝橋に端
 を發した支那事變と大東亞戰爭とに勇躍征途
 につかれた防人たちの陣中吟を蒐めたもので
 ある。／★従つて、今は靖國の神と祀られてあ
 る英靈幾柱かの作品と、既に歸還されて戦域に
 精勵されつつある人たちの陣中吟と、今なほ聖
 戦完遂のため闘ひ續けられてゐる人たちの作
 品との合纂である。／★作家の地域は随分廣範
 圍にわたつてゐるが、各地を轉戦されてゐる人
 たちもあり、再度の出征で、出征地を異にして
 ゐられる人たちもあるので、すべて省くことに
 した。／★本句集は聖戦完遂のため遠く異域に

闘ふ皇軍將兵の勞苦を憐ふ一助ともならばとの念願の下に編んだのである。／★本句集刊行に際し、作家各名位並びに表紙及び挿畫を煩はした柴谷幸二郎畫伯に深甚なる敬意を表する。／昭和十七年嚴冬／川柳雜誌編輯局にて／編者識」とある。十三章に分けて、五〇〇句収録。路郎の句は、それぞれの章の始めに、挿畫と共に、(還らない覺悟で抱けば子の笑顔(出發・船内生活) (地下足袋でしるす南支の第一歩(敵前上陸・進軍・クリーク) (伏せ暫し土の香をいつくしむ 戰鬪・空襲) (入城へ支那の子が持つ日章旗(入城・占領) (誰可する歩哨の聲が錐に似る(歩哨線) (陣中へ判じてくれと母の文(露營) (臨終の馬に言葉が言はせし(軍馬) (はるけくも來たなど地圖にどう顔(戰線) (慰問品いちいち鼻にもつて行き(慰問文・慰問袋) (僕の子もこの子くらゐとやるお菓子(宣撫) (た、づめば戰友の血がにほひさう(戰友) (行き違ふ部隊も負けぬ汗をかき(汗と兵隊) (鐵帽と鐵帽がちり合ふ煙草(煙草と兵隊) (部隊長部下に刈らせるい、日和(雜)の二三句収録。後記に、「支那事變が勃發して一年目、昭和十三年の晩夏に私は北支蒙疆の旅に出た。その第一の目的は北支蒙疆の人情風俗習

慣の研究であつた。それは從來、日本と云ふ國は戰爭には捷つが戦後の發展とか健設とか云ふ方面にかけては頗ぶる拙であるとか聞かされてゐたので、支那事變が片づいた時、同じやうなことを繰り返へすやうでは國を擧げての聖戦も九俣の功を一簣に缺くのうらみがないと云へないので、この點についての研究を續け筆による御奉公が出来ればと云ふ念願から旅であつた。尤も支那事變がさう簡単に片づくとは考へてゐなかつたので、第二第三の訪支蒙疆の旅に出る覺悟で、先づ事變直後とも云ふべき頃の北支蒙疆を知ることであつた。この希望は事變前から張家口に在住する岩崎柳路氏(目下、張家口の民團議員であり、張家口日本商工會議員である)の好意で果すことが出來たのみならず、氏は終始カメラによつて私の目的を援助されたのである。／歸阪後の私は、約半歲にわたつて、私の主宰する「川柳雜誌」誌上に北支蒙疆の印象を執筆して現地の報告を詳にしたと同時に、國民學校當時はまだ小學校の父兄會、或は實業家の有志團體、婦人團體等に、先づ汝の對手を知れと云ふ意味で、北支蒙疆に於ける支那人、蒙古人等の性格、風習等々に就て、詳細な報告的講演を試みたのであつ

た。／第二の目的は皇軍慰問と戰跡視察であつた。そして皇軍將兵が如何に多大な勞苦を嘗めつつあるかを如實に、眼に視、耳に聽いたのであつた。歸阪してからの私が微力のあらんかぎり皇軍慰問に致したことは云ふまでもない。大阪市の刊行した慰問誌、堺市が郷土將兵のために刊行した慰問誌、其他の新聞雜誌、展覽會等々に多くの時日を費して慰問の赤心を披瀝したが、なほ足らざるもののあることを痛切に感じてゐた。戦局の擴大は遂に大東亞全世界にまで及んだ。皇軍の勞苦は全く筆舌に絶するものがあるのである。銃後國民の一人として、そこには幾ら感謝しても感謝し切れないものがある。「陣中川柳」はまことに小冊には過ぎないが、遠く異域にある皇軍將兵への慰問の一端に資することが出來ればと云ふ念願の下に編纂したのである。(麻生路郎)とある。【所蔵館】《青森》近代文學館(岩手)日本現代詩歌文學館(東京)都立中央(石川)白山市立松任(大阪)大阪市立中央・関西大学(愛媛)県立(2冊)

37 『新川柳講座』

一九四八年(昭和23年) 6月10日・水武書房
(大阪市阿部野區北田邊町三四三番地・二二二)



頁・28×188mm(B6判)・百圓【内容】自序に、

「こゝでは川柳の歴史には觸れないことにする。それはこの本の目的が、「川柳とはどんなものか」「川柳はどうして作るか」と云ふやうな指導を目標にした入門講座であるからである。／

○／川柳は五音七音五音即ち十七音字中心の人事詩である。と云つたところで、それは大ざつばな云ひ方であつて、自然を詠まない譯ではない。／○／しかし、何んと云つても人間臭い短詩であることには間違いない。／押へれば芒

放せばきりぎりす／と云ふ古句があるが、川柳はその如く正體の掴みにくいものなのである。いゝ、入門書のないのもそのためである。／川柳はサタイヤであると云ふ人もあるが、それも

でもない。パツクだと云ふ人もあるが、それも

あたらない。日本の俳諧の眞似事である佛蘭西ハイカイでないことは云ふまでもない。以上擧げた短詩型は何れもどつかに類似點があると云ふに過ぎない。／そして川柳は世界の何處を探しても類例のない短い詩型である。しかし短いと云ふことが、必ずしも、やさしいと云ふ理由にも、つまらないと云ふ理由にもならない。／○／ある人は川柳はつまらないと云ふが、そんな人はつまらない川柳しか知らない人である。つまる川柳を見せたら、これが君、川柳かと驚く。しかし驚く人はまだいゝ方で、つまる川柳を見せたら判らない人がある。川柳人にとつては悲しき存在である。／○／私が川柳に手を染めたのは明治三十七年の春のことである。フトしたはづみで川柳するやうになつたのであるが、それから、四十五年の月日が流れた。いまだに川柳をすてないところを見ると、川柳の持つ魅力も相當なものである。／○／とう／川柳の講義を出版するところまで来た。自分の好きなものを人も好いてくれることはうれしいことに違ひない。キリスト教の傳道と一緒に、自分だけでおさまらないことになつたのだ。少々は迷惑でも読んで貰ひたい。／○／

正直なことを云へば詩の講義をする位間抜け

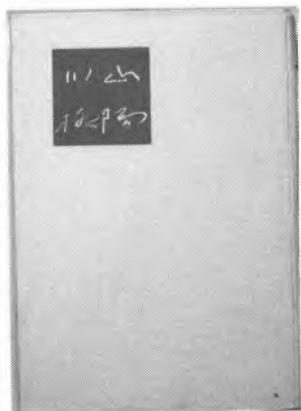
たことはない。詩なんて、黙つて読んで貰つて、「どうだい」と云へば「素派らしいなア」と云つてくれれば、それでいいものなのだ。しかし、「どうだい」と云つても、「判らないなア」と云はれば、おせつかいにも講義をしてやらうと云ふ親切心も出るものなんだ。誰かが平易で親切な講義をしてくれれば、僕なんかは背後で藤椅子にでも凭りかかつてゐたいのだが。――

／さてとなると誰もやらない。そこでやむなく、僕がこんなものを「川柳雑誌」に書いてゐたところが、あまり評判がいゝので、満洲から引揚げて来た琴水君が出版を引うけてくれることになつたのだ。／○／こんなことを書いてゐると、いかにも書きなぐりのやうに聞えるが、どうして／これでも幾年間と云ふもの心血を濺いで執筆したものだ。適切な例句の抽出には全く精魂をおびただしく消耗した。或る一講などはその例句を蒐集するのに、戦時下の二ヶ年半を費やし、それだけでも単行本の一冊位出せるほどに研究をつづけたものだ。／みなで三十七講ある。その中には松坂俱樂部の川柳講座で講義したものを礎稿としたものもある。すべては私の主宰する「川柳雑誌」へ發表したものであるが、さて出版となると、そのまゝでは

出せない。雑誌へは例句の蒐つたものから執筆掲載したので、配列を多少變更して、讀む人の便宜をはかつた。棋補もし、改竄もした。そして面目一新と云ふ譯だ。忙しいと云ひながら、さて本に纏めるとなると、やりつばなしに出来ないのが私の性格だ。〇/三十七講で川柳のすべてを講述し得た譯ではない。未だに「川柳雜誌」へ書き續けてゐるのがい、證據だ。しかし「川柳とはどんなものか」「川柳はどうして作るか」と云ふことを知るには、本書の三十七講を熟讀玩味すれば充分であると云ひたい。/昭和廿三年四月、川柳雜誌社編輯局にて「麻生路郎識」とある。参考に、目次を記しておく。川柳を創りたい方に、川柳とはどんなものか・川柳を作るのにどんな道具が要るか・川柳の音數と其のくきり方・句の多讀と作句資料の多讀に就て・多作と寡作・川柳と俳句とどう違ふか・身邊句に就て・寫生句とはどんなものか・寫生句は斯うして作る・なぜ没になつたか・没になつた句は潔く捨てよ・動く動かぬといふこと・穿ちの句とは・可笑味の句・輕味の句に就て・眞實味の句・擬聲語の句・擬人法の句・重語法の句・疊み句に就て・直喩法の句・隱喩法の句・換喩法

の句・提喩法の句・倒置法の句・省略法の句・引用法の句・誇張法の句・外語外來語の引用句に就て・女性の句に就て・旅の句のこゝと・鳥獸蟲魚の句に就て・花卉草木の句に就て・敬語を用ひた句・方言を用ひた句・時事を詠んだ句に就て。表紙は田村孝之介。【所蔵館】(岩手) 日本現代詩歌文学館(東京) 都立中央(愛知) 県立・名古屋市立鶴舞(兵庫) 県立(岡山) 久米南町(2冊) (鹿児島) 奄美

38 『山陽川柳』



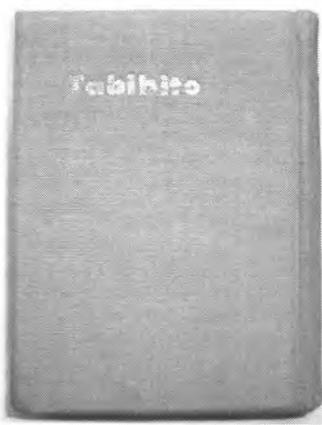
一九五三年(昭和28年)10月15日・山陽圖書出版(岡山市東中山下四〇)・二二七頁・188×128mm(四六判)・貳百円【内容】昭和24年12月1日(木)に復刊された山陽新聞夕刊「山陽柳壇」の第1回から第18回までの選と選評を

まとめたもの。序に、「昔の人でも、云いたいことを云わないではいられなかつたらしい。徒然草はそうした人の産物であつた。今の人たちは昔の人たちよりも、もつと云いたいことの多くがある筈である。しかし誰もが徒然草を書くほどの時間を持合せない。そこに短詩文学と云うものの存在がある。その人の人世観や社会観や世界観を詠む批判文学としての川柳が、そうした人達の渴を医するに足る唯一のものであると云えよう。なやみ多い現代の寵兒として川柳が登場した理由がそこにあるのである。多年川柳の社会化に盡瘁して来た私にとつて、これに越した欣喜があろうとも思えない。/数年前のこと、郷土文化に理解と推進を惜しまれない夕刊山陽が、その発刊記念に、弘く読者が川柳を通じて云いたいことの云える窓口を開かれ、川柳の選評を私に依頼された。そして昭和二十四年十二月三十日の夕刊に、山陽川柳の名でデビューしたのが、今日の山陽川柳の母胎なのである。それが時代の要求に合致した企画であつたことは云うまでもなからうが、多数作家の熱意と、新聞社の絶大な協力と、一句一句の選句もゆるかせにしないで、微力のかぎりを盡したたまものに外ならないと思う。/斯くして

山陽川柳は万華の如く咲き誇った。岡山縣下の各市町村は云うまでもなく、遠く隣縣にまで波及し、日を逐うて読者及び作家が激増し、今日見られるような山陽川柳の黄金時代を現出したのである。／本書はこゝ数年間に詠み続けられて来た山陽川柳の作品に、多少の削除をなし、一本に纏め、一つは作家諸氏の足蹟のモニエメントとし、一つは後進のため、作句指針の資料たらしめんとして公刊されたのである。終始一貫選評に當つた私としての欣びは大きい。／昭和二十八年初秋／川柳雜誌社編輯局にて／麻生路郎とある。路郎は、「愛情探究」と題して、次の13句を寄せている。(人類は悲しからずや左派と右派) (パチンコの煙草かいなど喫われて居) (駅を出た村の子既に影もなし) (ただ歩くだけの恋にも春が来る) (剃刀のするどさもあり子を愛し) (もの思う女は鮎に手をつけず) (老人の日に旗竿がまた買えず) (地震からやつぱり男頼りにし) (菊植えていても社長は俗に生き) (故郷ではただ物質で評価され) (政治の貧困さを罵る酒となり) (主婦としての投書を書いて胸にはせ) (労基法無視した老いの一徹さ) (所蔵館) (岩手) 日本現代詩歌文学館(2冊) (群馬) 県立土屋文明記念文学館(大

阪) 大阪市立中央(岡山) 井原市立・久米南町(4冊) (愛媛) 県立

39 旅人



一九五三年(昭和28年)11月30日・川柳雜誌社(大阪市住吉区万代西五の二五)・七二二頁・15×125mm(菊半裁判)・八百円【内容】川柳生活五十周年記念に刊行された麻生路郎句集。発行者は路郎句集刊行会(会長 中島生々庵)。旅人(人生の雑音・大空(李白の末裔・戀ころ・愛慾)・不死鳥(水の垢・前書のある句・旅つれづれ)の三部七章からなる。旅人の部は二六二句。大空の部は、李白の末裔(四八句)・戀ころ(一〇二句)・愛慾(二四八句)で、二九八句。不死鳥の部は、水の垢(四四六

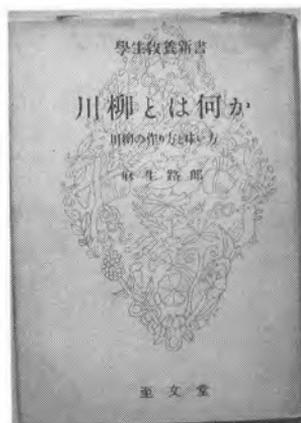
句)・前書のある句(四七句)・旅つれづれ(五七句)で、五五〇句。計一一一〇句収録。自序は、「麻生路郎の人と作品」の「人物像」(橋高薫風)にある。はしがきに、「★一般に句集の編纂は年代順に配列されているようであるが、本句集はそうした方法によらなかつた。／★五十年間に詠みすてられた句の蒐集となると、それ事態が一大事業であつて、私のような多忙な人間にとつては到底なし得ることではない。従つて私の初期の句や他誌に発表した句などは殆んど採録しなかつた。／★本句集は主として「川柳雜誌」の創刊号(一九二四)から最近号(一九五三)までの作品から自選したものである。尤もそれ以前に私が刊行した柳歌「雪」後の葉柳「土団子」などからホンの少しばかり拾つた。それは私のノスタルジアとでも云えよう。／★本句集は「旅人」「大空」「不死鳥」の三部に大別した。それを更に私の好みで「人生の雑音」「李白の末裔」「恋ころ」「愛慾」「水の垢」「前書のある句」「旅つれづれ」と小別した。これは普通の本のように、順序を越えて読まなくても、どつからでも欲するところを開いて一句一句を味つてもらい、私との思想の交流を切望したからである。そして私自身も読ん

で下さる諸氏の懐に飛び込みたいからである。旅を詠んだ句は私に思い出の数々を再演してくれて忘れないものではあるが、私と同じ環境に置かれていない人達にとつては興味が半減されることを思い、身近なものをホンの僅ばかり発表したのに過ぎなかつた。これは機会があつたら、旅行記と共に纏めて見たいと思つてゐる。従つて異郷で詠んだ句などは一切割愛した。／★句の配列を棒組みにせず、一行に、二行に或は三行にしたのは、大凡そ私の呼吸によつて読んで欲しかつたからである。曾て私が刊行した「新川柳評釈」の序文に「句はその人のところである。十七音字はその人の姿である。リズムはその人の呼吸である」と書いたのと同じ、私の呼吸をある程度知つてもらいたいためでもある。／★私の句は私の生活からにじみ出した句であるが、その句のすべてが、事実を根元として創作されたものであるかと云へば、必ずしもそうではない。しかし眞実をつかむためには、及ぶかぎり心を砕いた。／★私の句はどちらかと云へば淋びしい句が多い。私の性格がそうであり、私の歩んだ道が険しかつたからである。要するに私は川柳によつて人間愛を求めてやまなかつた。／★句はつとめて判り易いこ

とを念願として来たが多少は難解の句もあるうと思ふ。／★以前の句は旧仮名遣いのままにしておいた。一寸読みづらい気もするが多少とも時代が判つていいかも知れないと思つて、ワザと統一しなかつた。／★本句集は私が川柳に手を染めてから、本年の五月で五十年になると云うのでその記念に私を愛する人達によつて上梓されたものである。私の光栄これに過ぎるものはない。たとえ一句でも共鳴される句があれば望外の喜びである」とある。題字は麻生路郎。装幀は田村孝之介。【所蔵館】(倉手) 日本現代詩歌文学館(東京) 都立中央(栃木) 県立(大阪) 府立中央・大阪市立中央・堺市立中央・府立大学・関西大学(兵庫) 県立(岡山) 久米南町(3冊)(愛媛) 県立

40 『学生教養新書 川柳とは何か 川柳の作り方と味い方』

一九五五年(昭和30年)11月15日・至文堂(東京都新宿区弘方町二七)・二六四頁・18×28mm (B6判)・二百五拾円【内容】至文堂から出された学生教養新書全五十巻の内の一冊。川柳の作り方(二六五頁)と川柳の味い方(九九頁)に分けて著した川柳の入門書。自序は「麻生路



郎の人と作品の「人物像」(橋高薫風)にある。「川柳の作り方」の目次を参考に記しておく。川柳とは・川柳の形式ⅠⅡ・川柳の三形態(一)文語体の句——(二)口語体の句——(三)話し言葉の句・川柳を表現する文字・川柳を表現する語彙(一)雅言を用いた句——(二)俗語を用いた句——(三)術語を用いた句——(四)漢語を用いた句——(五)外語外来語を用いた句・多読多作・雑吟と課題吟・入門は身辺の写生から・写生句は斯うして・穿ち味の句・可笑味の句・皮肉味の句・真実味の句・軽味の句・感覚味の句・比喩法の句・誇張法の句・擬人法の句・擬音法の句・前書の句・慶弔句のこと・七七型の句に就いて・恋の句に就いて・時事吟に就いて・川柳と俳句の相

違点と類似点・句会の在り方(二)句会——
 (一)句報・選に就いて(二)自選——(三)簡
 人選——(三)共選——(四)互選・暗合と類
 句(一)暗号——(二)類句・推敲の仕方・句
 品に就いて・風格に就いて。昭和23年発行の
 『新川柳講座』と目次の見出しは同じものが多
 いが、文章は、例句も選び直して、新たに書き
 上げたものである。【所蔵館】(北海道)江別市
 情報・室蘭伊達広域図書情報システム・旭川
 市立中央・北海道大学・帯広畜産大学・北海
 道教育大学(青森)県立・八戸市立(岩手)県
 立・日本現代詩歌文学館(山形)県立・新庄市
 立・市立米沢・日本大学文学部(東京)国立
 国会・都立中央・荒川区立南千住・中央区
 立・武蔵野市立中央・実践女子大・青山学院
 女子短大・國學院大學・実践女子大学・日本
 大学文学部・明治大学和泉・法政大学和
 泉・跡見学園中高(茨城)県立・土浦市立(千
 葉)県立・木更津市立・和洋女子大学・市川学
 園(栃木)県立(3冊)(神奈川県)県立・横浜市
 立高津・横浜市立中原・平塚市立中央・鎌倉
 市立中央・藤沢市立総合(山梨)県立・県立文
 学館・甲府市立甲府・都留文科大(岐阜)瑞
 浪市民・東海学院大(新潟)県立・三条市立

(2冊)・柏崎市立(長野)県立(2冊)(石川)
 白山市立松任・静岡)県立中央・静岡市立清水
 中央(福井)敦賀市立(愛知)名古屋市鶴舞・
 豊橋市中央(京都)府立(2冊)・同志社大学文
 学部(滋賀)長浜市立びわ(大阪)大阪市立中
 央(2冊)・大阪市立港・大阪市立東淀川・堺
 市立中央・吹田市立中央・府立大学・大阪樟
 蔭女子大(兵庫)神戸市立中央・姫路市立城
 内・神戸大学・県立大学(徳島)県立(愛媛)県
 立・聖カタリナ大(高知)高知市民(岡山)岡
 山市立中央・岡山大学(広島)県立(山口)県
 立(2冊)・周南市立中央・県立大学・水産大
 学校(島根)出雲市立出雲中央(福岡)北九州
 市立若松(長崎)県立(大分)大分大(熊本)
 熊本市立(宮崎)日向市立(沖縄)県立(ロン
 ドン)大英図書館アジア・太平洋及びアフリカ
 コレクション。*編者所有のものは、昭和30年
 12月5日再版。

41 『私 達』

一九五七年(昭和32年)1月20日・川柳雑誌
 社(大阪市住吉区万代西五の二五・三六〇頁・
 125×21mm)(菊半裁判)・三百五十円【内容】川
 柳不朽洞会員一四五名の作品を路郎が選集し



たもの。序に、「いのちある句を創れ——これは
 私が大正十三年に、川柳の社会化と初心者指
 導と川柳研究を目標に『川柳雑誌』を刊行して
 以来、今日まで叫び続けて来た言葉であった。
 そして『川柳雑誌』によって育ぐまれて来た
 多くの作家はこの言葉を金科玉条としてひた
 むきに作句し続けて来た。従って多くの名作家
 が輩出したことは云うまでもない。昭和十一
 年七月、私の主宰する川柳雑誌社にとって運営
 上の一大転換期が来た。それは従来の同人制度
 を脱皮し、社は私の個人経営となり、私自身は
 職業川柳人を宣言し名実共に社会的柳誌とし
 てデビューすることとなった。これに呼応し
 て、故西田艸薬氏(故西田当百氏の嗣子)等の
 提唱で、路郎門の人達のみによる川柳不朽洞会

を結成（会名は私の堂号不朽洞に因む）私の指導の下に、多事多難な戦禍にもめげず、川柳を唯一の心の糧として精進、会員は日に月に激増し、全国及び海外に於て二百数十名を数えるに至り、会員の多くは又百数十名乃至数十名の会員を擁する所謂「川雑」系と称する多数の句会を持ち、現柳壇に重きをなしている。斯うした歴史的存在を誇る川柳不朽洞会から今回會員諸氏の名吟佳句を蒐め、その真価を弘く世に問うことは^{もとより}意に意義深いものと信ずる。／本句集に参加された作家の所在地は全国は勿論遠く海外にまで及んでいる。その句歴に至つては数十年の永きにわたり、既に一家をなしている作家も尠くないので、作家それ／＼の個性が遺憾なく発揮されて居り、その点柳界稀に見る絢爛多彩な句集として大いに自負し得るところのものである。／各作家は本句集の刊行を契機として一歩前進がのぞましく、後進はこれ等の句を範として切磋琢磨の具とされたならば柳道の発展も期して俟つことが出来よう。いささか蕪言を弄して序とする。／一九五七年の新春／川柳雑誌社編集局にて／麻生路郎識」とある。また、あとがきに、「★本句集は川柳不朽洞会員で参加を希望された作家百四十五名の作品

集である。作品は「川柳雑誌」の「川柳塔」や「近作柳樽」その他から各自が二〇〇句以下を自選して提出されたものを更に私が一年有半の日時を費して慎重に精選したものである。尤も戦禍のために資料を焼失された作家のものと、物故された名作家の作品は編集部で出来る限り蒐集の労をとり、それ等の句の中から更に私が選句したものである。／★本句集は前述のように選句に多くの日時が費されたために、長谷川迷路医博、坂田良坊医博の如く選句中に物故された会員のあつたことは甚だ遺憾とするところであるが、生前に賛同出句されていたので故人の意思を尊重し、そのまま巻中に収めることとした。／★本句集は曩に刊行された麻生路郎句集「旅人」昭和二十八年十一月三十日発行と麻生霞乃句集「福寿草」(昭和三十年七月一日発行)とで三部作のかたちをとり、川柳雑誌社の句風の全般を認識してもらふこととした。従つて本句集を手にされた方々には是非とも「旅人」や「福寿草」を併せ鑑賞していただき、それ／＼人生に徹した深さと巾の広さを味読されたいものである。／★本句集の巻末に採録した物故九作家(岩崎柳路・笠原路生・関本雅幽・高橋かほる・長崎柳秀・西田

艸楽・福田山雨楼・村松夢裡・米本貞志子の九名)編者註は私の常に忘れることの出来ない私の分身とも云うべき人たちなので、その名作品の一部を掲げその霊を慰めると共に、後進の範とすることとした。これ等の作家は日本柳壇にとつても歴史的存在であることを茲に銘記しておきたい。／★本句集に蒐録した句は旧仮名遣いのももすべて新仮名遣いに改めた、それは将来の読者について考慮を払つたに外ならないのであるから、その点作家も諒とされたい。／★本句集の編纂に際し校正その他について八木摩太郎氏を煩わした点が大い。特に謝意を表する。——不朽洞主人」とある。「川柳雑誌」昭和32年3月号「窓口談義 句集「私遣」遺る句のかず／＼」に「私は今、句集「私遣」の作家別索引をひろげて、そのひとりひとりに、ほおえみかけている。この人達はみんな私が二ヶ年近くも選句に費やし、足掛け三年もかかつて、この選集を刊行するのをジツとこらえて待つてくれた人達である。／そうした人たちが、この句集を手にしてよるこんでいる顔、顔、顔を思いうかべながら私はこの句集が出来るまでのことを何かと回顧して見た。／各人の出句は二〇〇句内としたが、その多くは二

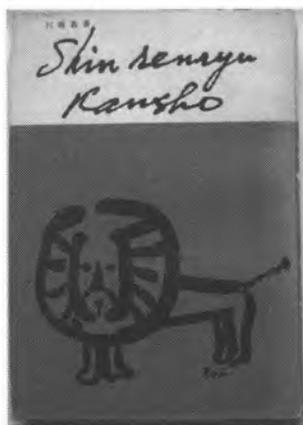
〇〇句を出句した。出句は「川柳雑誌」の川柳塔に発表されたものであることを条件としたが、会員としての年数の浅い人には「近作柳樽」や句会の句其他から補って二〇〇句としてもいいと云うことにした。これ等の条件は一度私の選をしたものから更にその人の個性を活かしてフルイにかけるのが最良の方法であると考えられた結果に外ならない。／句集「私達」の総句数は四、三〇〇句で、会員一三六名、物故作家九名、総人員一四五名と云う多数の作品集である。それ等の作家の職業、年齢、教養、環境等は全くまち／＼であり、句について見ても、社会性の実に幅の広いものであることを一つの特徴と見ることが出来る。そうした作品集であるだけに選句に容易ならぬ苦心を要したことは云うまでもない。各作家の個性を活かした選句と云うことは云うべくしてなか／＼容易なことではないが、私はこの句集の選句のために、どんなに精力を消耗したか知れない。おそらく、自分が一冊の単行本を書きあげるよりも、より多くの精力を消耗したことを告白して憚らない。それは私として残る句集にしたいと云う念願に燃えていたからである。この意味から云えば選句も又創作であると云えないこと

はないであろう。／私の日日は実に多忙な日なのでこれ等の選句は私の一日の仕事を終えた夜の十二時以後の一、二時間をあてていたのである。時には朝の新聞の来るまでの私の読書時間を割いてこれにあてたこともあった。／選句後の清記については摩太郎君を煩わした。摩太郎君の楦の下の力持がなかつたら、おそらく、もつと／＼刊行が遅れたかも知れない。／校正については実に嚴重にやった。初校と清記句稿とのつき合わせ、句意に疑わしい点があれば更に出句者の句稿とも合わせて見た。校了までには五校、六校を経て漸く責任校了へと運びこんだのである。印刷屋、製本屋、紙屋の協力を得て、句集「私達」が良心的な出版物となつたことに大きな欣びを感じている。今はただこの句集が柳界の金字塔として永遠に新らしいいぶきを放つてくれることを祈るのみである。

〔句集「私達」の選者・麻生路郎〕とある。〔所蔵館〕〔岩手〕日本現代詩歌文学館〔栃木〕県立〔大阪〕大阪市立中央・堺市立中央〔兵庫〕県立〔岡山〕久米南町（2冊）〔愛媛〕県立

42 『新川柳鑑賞』
一九五九年（昭和34年）7月10日・川柳雑誌

社（大阪市住吉区万代西五丁目二五・二四四頁・18×18mm（B6判）・二五〇円）〔内容〕「川柳雑誌」に連載した「新川柳鑑賞」を、「四季」「恋・酒・果物」「夫婦を中心に」「女・男」「職業・職業人」「上役・下役」「衣・食・住」「金」「趣味」「旅・仏・神」「動物・植物」「雑」に分類して採録し、真珠句抄を附録として添えたもの。表紙・野尻弘。「著者の言葉」に、「私が川柳に手を染めたのは明治三十七年だった。その頃の作家は宝暦明和の作品を凌ぐというにあった。しかし、明治三十九年頃から、そうした目標に満足出来なくなったので自ら天才と称した小島六厘坊が川柳革新の口火を切ったが、同四十二年の初夏の頃、六厘坊は二十一歳の若さで肺患のため世を去った。／六厘坊歿後、革



新傾向は東西呼応して稍表面化した^{せう}がそれが伸びるためには幾歳月を要した。しかも既成、革新が兄弟^{けいどう}にせめぐに過ぎなくて川柳そのものは社会から遊離していた。それを遺憾とした私は川柳の社会化を提唱し、川柳を弘く社会に認識させるためと作家養成機関として大正十三年に柳誌「川柳雑誌」を創刊した。昭和十一年には専門家なき世界発達せずと主張したが誰も荆棘の道に踏入ろうとはしなかった。私は多くの非難や忠告を押し切って、先ず隗より始めることになり、昭和十一年七月に職業川柳人宣言となったのである。その後、日支事変、太平洋戦争となり、悪戦苦闘は筆紙に尽せないものがあつたが、戦い抜いて漸く今日に到つたのである。島田という男は「我れ世に勝てり」と云つたが、私のような鈍才にはそうはいかない。まだまだこれからである。この小冊子を刊行するのも、私が愛する川柳を弘く世に知ってもらうための一片に過ぎない。／一九五九年六月／川柳雑誌社編集局にて／麻生路郎識」とある。凡例の一部を載せておく。「★「新川柳鑑賞」は麻生路郎主宰の月刊「川柳雑誌」に昭和二十八年十月号から昭和三十四年の五月号まで連載したのから、囊^{かさ}に東京至文堂から刊行した

「川柳とは何か」の後半に「川柳の味方」として発表した二百十九句の鑑賞を省ぶき、更に未発表の鑑賞原稿を追加したものである。／★従つて、どんな句の鑑賞が「川柳とは何か」の方へ割愛されているかを知る便宜上、書の巻末に、附録「真珠句抄」として二百十九句を掲載しておいた。／★「新川柳鑑賞」は一般の読者を目標に執筆したので、句の鑑賞を多少解説的に、興味的にしたことをことわっておく。／★本書の鑑賞句は主として月刊「川柳雑誌」から

II 路郎が発行、あるいは編集に関わつた川柳雑誌

1 「漱」



創刊号

一九二一年(明治四十四年)七月一日、創刊号発行。発行所は、短詩社(大阪市西區九條町六百十二番地ノ四號)。編輯兼発行者は、藤村一。四

拾つたが、他の柳誌や句集からの名吟も鑑賞したので五百六十三句の多きに及んでいる。本稿は日々多忙の中で、鑑賞執筆したので原句をすくなくならず傷つけたことと思ふ、その点を句主に深くおわびする。／★句主の雅号を左に録して敬意を表する。(以下略)巻末に、「新川柳鑑賞」索引を付す。【所蔵館】(岩手)日本現代詩歌文学館(東京)国立国会・都立中央(栃木)県立(大阪)大阪市立中央(2冊)《兵庫》県立(郵税共)。

藤村一の創刊の「辭」に、「私は多く言ふを欲しない。／私等は飽迄眞面目でありたい。眞摯でありたい。／私は眞摯と努力と修養とが私等に缺くべからざる最良の武器であることを信ずる。／私等の詩が一般から是認せらるるか否かは私等の向後の努力如何によつて決せらるる問題ではあるまいか。／ただ、私等は往く處まで往きたい。そして深く斃れたい。／私等は何處までも眞面目である。眞摯である。／私は多く言ふを欲しない。／一千九百二十一年七月／

藤村 一」とある。
目次を次に記す。

敝創刊號目次

辭……………	藤村 一
偶吟(短詩)……………	淺井 五葉(三)
疲れし魂(短詩)……………	森井 荷十(六)
短詩概論(評論)……………	麻生 路郎(八)
太棹のトーン(短詩)……………	地神 竹二(二〇)
白粉溶く手(短詩)……………	菅 とよ子(二三)
汀來て(俳句)……………	寺井花影公(二六)
敝詠草……………	淺野默葉等(二八)
シヤボン玉(短詩)……………	土岐 水光(二〇)
生ぬるい室(短詩)……………	馬場 由三(二二)
夜の電車(短歌)……………	木村 西思(二五)
路傍より(短詩)……………	麻生 路郎(二八)
朝のPOPULAR……………	岸本 龍郎(三二)
白髮(小品)……………	淺井 片々(三六)
二階(短詩)……………	木村 三郎(四〇)
母(短詩)……………	杉村 歌三(四二)
口三味線(短詩)……………	藤村 青明(四三)
消息。編輯後に……………	(四六)
表紙畫……………	八木清次郎

『番傘川柳百年史』(5頁)によると、「その頃、関西川柳社の文学青年組——藤村青明、淺井五葉、木村半文錢、麻生路郎に水府を加えた6人組が意気投合、一種の川柳革新運動ともいうべき短詩社をおこした。天才青明を中心に毎晩青明の家に集まった。水府を編集長として月刊『敝(わだち)』を2号まで出した」とある。水府が編集長だったが、創刊号・2号とも路郎が編集後記を書いているので、路郎も編集に深く関わつたと考えられる。

路郎の「短詩概論」、「路傍より(短詩)」、「編輯後に」を、次に載せておく。

短詩概論

短詩社の短詩、即ち吾々の十七字詩は、新しく生れた詩である。最近一年たらずの吾々の努力は實に目覚ましいものであつた。

吾々の詩が果して短詩といふ普遍的な名稱に依て、一般から是認されるか、或は否定されるか、それに就ては、吾々は餘り考へを費さなかつた。

吾々は内容を尙ぶ。吾々は舊來の詩を破壊

し、新らしき建設の爲めに殆んど他を顧みなかつた。

吾々は、此の新らしい短詩が、必然明治詩壇に生れ得べき運命を有するものと確信して疑はなかつた、そして試作に腐心したと同時に、舊形式を重じ、舊思想に囚はれたる人々の覺醒を促した。今の處では、吾々の短詩が毎く完璧の作品であるとは言へない、併し吾々の今後の修養と努力とは、近き將來に吾々の詩が完成さる、日をもちきたらすことを信じて疑はない。

從來述べたところは、短詩に関する感想であつて、短詩とは何んな詩であるかといふ、其の形式及内容には説き及ぼさなかつた。

吾々の短詩は、俳句及川柳と等しく十七字詩である、併し乍ら俳句の如く季題の拘束を受けない、川柳の如く遊戯的でない、吾々の心裏から滾々として湧き出づる、深い、厚い、廣い、大きい、情景渾融の主觀詩である、——客觀を交じへた主觀詩をも包含するのである——要するに、吾々の短詩は主觀及純主觀の(純主觀は全然客觀を交じへず、主觀の内には多少の客觀をも交じへたものとして)抒情詩であると思へば、大した間違はないのである。

而して前に俳句の如く、季題に束縛され、川柳の如く、遊戯的でないと例證した爲めに、俳人より或は川柳家より、多少の反駁があるかも知れぬ。

併し乍ら、私は今俳句及川柳と我短詩との優劣を論ずるが目的ではない、短詩とは何んな詩であるかを、概括的に述べて諸君の一考を煩すに過ぎないのであるから、右の問題に關しては更にかくこと、しやう。

言ふ迄も無いが、吾々の短詩には、自己の感情思想を、最も正直に、最も忠實に、吐露するのであつて、自己を偽り作爲した形式韻律によるものは、如何に美しい文辭によつて覆はれて居やうとも、短詩としての價値は絶無なのである。

どんなに措辭が巧みであつても、どんなに調が高からうとも、内容の充實して居ないものとはならない、かさねて言ふが自己を詐つた詩に價値があらう筈がない。

吾々は後世を恐れる、識者を惶れる、無節操、無努力な詩に依つてわらはれたくはない。

以上は至つて粗笨な論ではあり、殊に抽象的なので、初學の人々には、確然と了解せられぬ

かも知れない。

夫れ等の人々には、吾々の作品を出来る限り、多讀することを切にお薦めする、そして内容の概念を、感受することが出来たならば、始めて詩作して欲しい。そして自覺して貰ひたい。其處で初めて詩といふものが生れるのだ。

(四十四年六月稿)

路傍より

〈前の人の前に人ありはらだたし〉(自働電話
ここにも人は先にあり) 〈絶え絶えの戀想ふ日
のやるせなさ〉(また文の來すなりにけり梅雨
に入る) 〈離れ住む今日この頃の苦しさよ〉(僕
も君も熱しやすくて冷め易き) 〈眼を覆ふて靜
かに泣きし君にくき〉(冷めきらぬ悲しき戀に
生きてあり) 〈弱い男が強い女にほられし〉
〈冷めてゆく女と、何が面白かる〉(兄に嫁が來
て淋びしさが募りゆく) 〈苦しさに死ぬ氣にな
れぬ弱きわれ〉(勤めたり勤めなんだり五月雨)
〈宿直のころよきかな敷布の眞白〉(けだるさ
にふとんを抱いて寝たりけり) 〈ほろゑひて裸
に夜着のころよき〉(酔ふて來てひとり淋び
しく唄ひけり) 〈君とありし日は一合の酒に唄
ひぬ〉(若き心酔ふたふりして肩による) 〈友は

皆われより先に酔ふてあり) 〈酔ひもせずただ
盃をとるころ〉(あてもなく歩きぬ酔ひも醒
めはてぬ) 〈酔ふてあり女をパイと突きはなし〉
〈金ためて何にならうと思ひけり) 〈金ためて金
ためて人死んでゆく〉(くれにけり向ひの窓に
消えし顔) 〈あれを思ひこれと思ふて今日もく
れ〉(姉に泣かれてうちあける氣になりぬ) 〈姉
に泣かれ亡母になかるころよしぬ) 〈泣きし
顔の風に吹かるころよき〉(亡母あらばと
埒なきことをまた思ふ) 〈泣いたあと心持よく
別れけり) 〈チーとみる友の頭の禿淋し〉(ふと
嗅ぎぬつかひ残しのチツクの香) 〈六月の机上
よ書をアブラの香) 〈ものうくて電車を待つに
うづくまゐる)

編輯後に

□編輯がすんだ。

○〇五五五を吸り乍ら、殘稿の堆いにはほゑ
まざるを得なかつた。

□木村三郎以下數氏の散文、小説其他の作品は
遺憾ながら次號へ廻はすことにした。

□それから意外な方面から寄稿がある筈の處
が筆者が忙しかつた爲めに締切の間に合わな
かつた。

□本誌の表紙書を揮毫してくださった八木清次郎氏は展覽會出品で多忙中なのを御願ひしたのは誠に御氣の毒であつた。深く厚意を謝します。

□新しく入社せられた人もありますから、短詩社同人を左に録して置きます。

藤村青明 浅井五葉 木村三郎 岸本龍郎

麻生路郎 馬場由三 地神竹二 杉村歌三

土岐水光 加古宙平 石巻清文 (次第不同)

□地方で開かれた短詩會の詠草はつとめて載せる考へであるから、お送りを願ひたい。原稿は勿論編輯上の都合もあるので投稿規定に依つて欲しい。

□隨時に同人が集つて開いて居つた短詩社の詩會は今後毎月例會を開く事にした。毎號紙上で場所や日時を知らすことにするから出来る限り出席をして貰ひたい。(路郎記)

「轍」は二号(明治44年8月1日発行)で廢刊となつた。「矢車」28号(明治44年8月10日発行)に掲載されている、「八月號要目」を次に載せておく。定価は一〇錢。別に郵税一錢。

八月號要目

題 未定 (短詩) 木村 三郎

題 未定	(同)	岸本 龍郎
葉を吹く風	(同)	馬場 由三
母	(同)	杉村 歌三
葬られる僕の歌	(同)	三輪破魔杖
とりとめぬ心	(同)	森井 荷十
蔭にて	(同)	浅井 五葉
淋しき影	(同)	有馬 輝昭
灯にそむく君	(同)	浅野 黙葉
題 未定	(同)	地神 竹二
水囊	(同)	麻生 路郎
ウイテコイ	(同)	藤村 一
和蘭陀皿	(散文詩)	寺井 花影
病院	(小説)	小泉 勇造
裁縫の暇	(短詩)	菅 とよ子
轍詠草	(同)	山崎映水等
夜の紫陽花	(俳句)	寺井花影公
化學の時間	(繪畫)	鷺尾 吾一
洋盞の水	(評論)	藤村 一
七月の短詩	(同)	九反田 學
R君へ	(感想)	A生
わだち	(同)	きくまろ
轍詠草	(短歌)	阪田光四郎等
斷片	(小品)	浅井 片々

2 『雪』



創刊号

大正4年8月1日創刊号(大正6年2月25日終刊。25x38mm(菊判)。通巻19号、通して頁数を記している。総頁263頁。川柳を新短歌と称す。編集兼発行人は、麻生幸二郎。大阪市北區上福島中一丁目十二番地。發行所は同住所の養書店。大正5年1月15日から、大阪市西區江戸堀北通二丁目二十番地に移転。發行所養書店も同じ住所。大正5年9月号から定価拾錢。

以下、路郎の作品を中心に記録する。

創刊号(大正4・8)——8頁。參錢。路郎の作品なし。

2号(大正4・9)——12頁。翻訳「一夜」。

「跪つきて」の題のもとに、「悼青明」の前書で「浴衣掛一寸いてくる旅なり」(絶息ときに落日は瞬けり)〈タンクステンの破裂が青明の死か。「祈禱」の前書で「感謝しつつ妻が洗濯を見てゐたり」〈打水に浴衣の白さはほえまる〉「祈禱」で大きな月を吸ふて立ち」(横臥になれば涙湧くなり風に搖るる蚊帳)。

3号(大正4・10)——12頁。五銭。「店頭より事務室へ」の題で、「晴。友去れば又あきんとなり」(インキの濁り人生のむだ費ひ)〈人にとにあらず賣れぬ日の續く時〉「晝の疲れか春をむけた妻の息」(娘を抱いて聖書の行を見失ひ)〈Sofaが欲しといふ妻のうら若く〉(赤の鉛筆汝の使命赤なりき)〈生のための事務ならずやと思ひつ〉(月俸四拾、副業の店の塵埃)〈「重荷の重みを偶と思ふ夜の事務」(勞働して始めて生の有難味)〈病想も漸く展開ゆかんとす〉(土役が休んで閑な日曜日)〈妻や待たむ靴音を高めんか〉(靴下をなげ出しぬ今日の汗かな)。

4号(大正4・11)——36頁。「浪花座を出て」の題で、「くろくろとうき川竹の水ながる」(前茶屋の間からみゆる水ゆらくと儚し)〈雁次郎にこころ吸はる日曜の夜や〉。

「朝鮮土産」の題で、「朝鮮の話もなくて土産くれけり」(元始的な團扇に煽いで見るかな)〈向かひの貸家きづけり靴穿きながら〉(よきこともあるまじ妾流れゆけり)〈料理本などよむ妾なりしが、秋か〉(夏から秋へ妻の瘦せたるも哀れ)〈かさね着の頰を牛肉の團樂かな〉(腰辨は常の如く出勤でつねのことく)〈算盤の響夜

氣は重く沈めり)〈僅かに漏らす腰辨の筆かな〉(あぶさみれば碧氏の俳話れたり)〈下り坂を哀れ深うみし別れかな〉(ふりやまずふりやまず端書三通)〈手がすいていつそさびしい日曜日〉(一人かへり二人かへり事務室に灯がともり)。「襦袢干すよるこび」の題で、「陽の方へ心うつりゆく止む日かな」(枕あつし果てしなく生活を思へり)〈雨雲のゆきかひ續けさまに咳き)〈襦袢干すよるこびに太陽は照り給へり〉(蒼空を海とみてこころ慰まん)〈時雨るるか庭の雑草ははやく暮れけり〉(うながされて出勤る赤靴は泥にまみれたり)〈口敷もきかずペン

の重荷を果す日かな。随筆「未来のない碧梧桐氏」。神戸での碧梧桐歓迎會での路郎の作品は、「蜻蛉眼をさへざり道を曲る」。雪同人に、伊藤親魚・小穴隆一・中谷義一郎・信時潔・加藤静兒・鹽谷鶴平・宮林重哉・松村鬼史(柳

珍堂の俳名・藤原游魚・小出楡重・石濱純太郎・川西和露。雪幹事に、齊藤松窓・麻生路郎・川上日車。

5号(大正4・12)——「中年」の題で、「さがし疲れてひたすらに花をみる」(こころたひら冬の珈琲する)〈中年になつて考へることのみ多き〉(中年のあ掻き光の一路なる)〈中年の眞摯を僕も知りそめし〉(降りさうな十一月の火鉢に黙す)〈白髮一本僕のこころをさびしうす〉「假裝せし人々に」の前書で「白粉を洗ひ落とせばさびしからんに」。

6号(大正5・1)——20頁。「二食」の題で、「妻に中将湯をのめめといふ寒さ」(思ひ出して電球かへにゆく日脚)〈「食でよしとやうやうに起きるかな」(風邪のこちち飛行機の音を遠くきけり)〈晝も炬燵木綿着の縮消へるほど〉(子の親の中刈にあぶらけもなし)〈六疊に一日父としての愛〉(蠶節に男のちからからるる)。随筆「僕のマント」。「雪新短歌會記事」中の、当日の入選作に、「ひき汐に捨てしものあらはに見ゆ(妻の顔中の間の暗き火に見たり)」。7号(大正5・2)——20頁。「榮光」の題で、「寄生木は抱擁の畫にしたり」(春早々の小包二人して解きぬ)〈湯さめいとし雪はらりし

て晴る、) (黒髪すき下す妻に蟬りもなし) (幻が男の操おびえさす) (幻を冷水に洗ひ捨てしかな) (親船を離れてきりきりと舞ひぬ)。

8号 (大正5・3) —— 16頁。「地の極」の題で、(尺八の譜の手摺れ雪となる) (壁に塗り込められたやう人動かず) (僧侶が来て遺瀧なし香からめば) (黄金を拜む人の顔の光れる) (葬ひの雑音街の底よりす) (角ばった椅子の吐息の朝となり) (微風の吹くまま光りに歩む) (地のにほひ雑誌の上流る)。

9号 (大正5・4) —— 16頁。随筆「近眼鏡を懸けて」。「途中」の題で、(男ばかりで蟲のい、話かな) (顔も大風呂敷も鼠色の日々) (唇が乾いて白らむのを待つ悲しさ) (夜伽) (土の生、一ト握りの悲なりき) (墓地にて) (鹽はんぶんのこの子が僕の子か) (二女生る) (空洞の體を踐湯へ運ぶ) (凡人の凡人雲脂を掻いてやり) (椅子をならべて足をなげ出す四月) (素肌素足眼が熱うなる樓) (外光のあた、かさに大手をふれり)。

10号 (大正5・5) —— 8頁。「大阪を離れて」の題で、(若艸に大阪の方を向ひて牛ひとり) (運糧汽車の音ばかりきこゆ) (藤の棚をぬけてステツキふりくゆけり) (潮風に思ひつ、歩

む只思ひつ、) (たつた一ト日砂を弄りに啄木のごと) (潮風と砂懷ろに足袋に) (寝轉べば砂ひんやりと悲しけれ) (默然として砂の上に

一風が出る) (水溜り飛びそこねても一人かな) (砂うち拂ひ電車まで何ンにも言はず) (松原にたつた一人はさみしすぎ) (商人日記)の題で、(電気が無暗に光る、店森とす) (電気が無駄に光つて、まだ賣るつもり) (電気が無暗に光る、魔がさしたやうな店) (素通りを見てゐる店のころかな)。「宗右衛門町の晝」の題で、(多喜之家の二階にわが足袋のきたなご) (清水一

荷富田屋のしんかんと)。「蕎麥」の題で、(去年の子今年の子お玉杓子かラケットか) (去年の子今年の子何が悲して泣くのやら) (去年の子今年の子泣くな泣なと戸を締る) (去年の子今年の子泣てる中へ蕎麥が来る) 随筆「近眼鏡を懸けて(二)」。

11号 (大正5・6) —— 8頁。詩「泡」「生」。

12号 (大正5・7) —— 20頁。この号は、梅屋おせん号。吉井男の短歌「梅屋おせん」の歌、(喜多村縁郎の「梅屋おせんに就て」、(茂乃の「梅屋おせんを觀て」、(路郎の脚本「死人の家」など)。「口豆華豆 路郎記」に、「時に吉井男、岡田八千代、田村俊子の諸氏相次いで來阪し偶々

雪同人と觀劇の一夜を過す。これ梅屋おせん號の出づるイワクインネン故事來歴なり」とある。

13号 (大正5・8) —— 16頁。「土を踏む時」の題で、(水銀がちる戀がちる夜や) (死なりきあひあふ橋を渡る) (千日へ曲れば一つづつ灯がうこき) (道頓堀を東へ東へひとり) (子持) (ころ湛々亭をいづ) (子持) (ころ三十路は近し) (子持) (ころ必々としたことをいふ) (僕はただ麥酒一杯に歌一つ) 創作「白粉の花咲く家」。

14号 (大正5・9) —— 20頁。「浴後」の題で、(茶屋の物干に大阪のひろさみる) (物干の静かに梨を喰ふかな) (煙草の火が光るのみの物干) (物干がゆらゆらしたやうに思ひて女見つ) (戀もなくて物干にむらがり) (物干にゐて逢ふてゐるのを見つけたり) (物干の明暗齧の大きさなど) (物干にひとりものはこり顔なる) 隨筆「近眼鏡を懸けて(三)」。

15号 (大正5・10) —— 16頁。この号から定価拾銭。創作「反抗(二)」(麻生不死鳥。9月17日) (雪同人子規宮俳句会での作品は、(花火高し曾根崎艶話かな) (面會謝絶してばせを葉の晝) (ばせを裂けたる朝の人戀し)。

16号 (大正5・11) —— 12頁。隨筆「庖丁と

郎は、あまのじゃく・江戸堀幸兵衛の筆名も使っている。創刊号の「編輯局から」に、「いろいろの意味に於て今は混沌とした世の中である。夜の十一時から十二時、さうだ仕舞風呂のざはめきを濁つた温泉の中から見えてゐるやうだ。斯うした時に俗人は此雰圍氣に同化して無爲、又明日のことを思はないのが常である。私達はさうしたまじめな心を抱いて永遠に眠らうとする人々を憐れみ悲むものである。どうかしてさういふ儂ない人生の山路を辿る人々の前にこのさ、やかなる『土團子』を提供したい。◆『土團子』は青葉時に詩の國へ旅立つた畏友小島六厘坊を偲ぶために借りて來た名である。土團子は川柳を中心として人の世の喜劇や悲劇を見世物とする雑誌である」とある。

路郎の作品を中心に記録しておく。
創刊号（大正7・7）——小説「彼等の戀」。「須磨雜觀」の題で、〈ひるのふろ／あを葉のかけの／おつところ〉〈いぬのはなしに／いしをけりけり／ありく〉〈あを葉のかけ／あを葉のかけ／こくなりうすくなる／したの犬〉〈なつみかんに／さとうふりかけ／うみをみてゐる〉〈光琳のすみたてに／そよかぜがあたり／ねむし〉〈ひるふかし／いひたいことを／いふ

てゐる〉〈ひるふかし／みおろせば海の／ひろびろと〉〈あるときは／することのなかばも／せずに生き〉〈いひたいこともいはず／庭の樹を／ながめ〉〈いひたいことは／風に吹かせて／海へうみへ〉〈ひるさふかさ碧さに／うみは／よろしきかな〉。写生として、霞乃女の「鶴屋南北さんの二階」を掲載。

2号（大正7・8）——「土團子評論」「溪花坊と源屈。食滿南北の戯曲「最後の偽」掲載。

3号（大正7・9）——評論「忘却性の日本人」。「死」の題で、〈手紙を書いてゐれば朝顔の花〉〈今日も暑からう朝顔ひらき〉〈朝顔の前で爪きる夏やすみ〉〈朝顔がひらいた朝のち、の味〉〈娘を死なし暫く遊ぶことにきめ〉〈しらく／しき悔みの涙ます〉〈その父は金借りることを思ひゐる〉〈米の騒ぎに物忘れする夕也〉。

4号（大正7・10）——「黒の悲哀」の題で、〈ちぢくさい嬰兒を厭ふほど疲れ〉〈たべてもたべなくともの麥めしに向ひ〉〈麥めしといふあじきな夜となる〉〈よく来てくれましたと髭がのびてゐる〉〈長髪と思はる、ほどのびし愛〉〈泣き顔を見せずお茶漬けだけはた〉〈頼杖に秋の空氣のやはらかさ〉〈布團のそそぎ氣にしてるうち秋となり〉。江戸堀幸兵衛の筆名で「擬

人法警見」。

【所蔵館】〈京都〉京都大学文学研究〈大阪〉大阪市立中央

4 「後の葉柳」



壹の壹

大正8年6月15日創刊号。発行兼編集人は麻生幸二郎（大阪市外萩の茶屋三日路六六三番地。樹型〔57〕×〔86mm〕・4頁・拾銭。3号（大正8年8月15日発行）で廃刊。創刊号のみ川上日車の文章「才子が湧く」も掲載しているが、他は川上日車・木村半文銭・麻生路郎の作品のみ掲載。日車の「才子が湧く」は、「麻生路郎物語」（8）にある。路郎の作品を記録しておく。
創刊号（大正8・6）

期待にそむく點は幾重にもおゆるしが願ひたい。●本誌の成立については先に御挨拶状も差上げてありますので、御承知の方も多からうと存じますが住所不明のために通知狀が舞ひ戻つた方もありますので重ねて極簡単に申上げておきます。●從來大阪から柳誌「みをつくし」を發行されてゐた川柳以交吟社の方々が日に「みをつくし」が隆盛になり、多數の會員を有する結社になつたので、單に會員相互の機關誌であるといふだけでは満足が出来なくなり、「みをつくし」創刊當時から同誌の顧問といふ關係にあつた私のところへ主幹になつて雑誌を大きくして呉れぬかといふ交渉がありました。●けれども私としても全く突然のことではありお断りを仕様かと思つたが、餘りに以交吟社の同人の方々が白熱的なのに動かされて遂に起つことになつたのです。●元々斯うした仕事は物質的に恵まれてゐないではさう、樂々とやつて行けないことを百も承知なので、氣永にやつて行かうと思つて居ります。●それがため以交吟社の人々に前述の方針の下にならば、引受やうとして單に以交吟社にとまらず、この際出来るだけ多くの吟社を併合して、雑誌を堅實なものにしようではないかと謀

つて賛成を得た次第であります。●それがため神戸の柳影草社の高橋古城山氏、筒袖の中川露太樓、平井光太樓、山岡剛山の諸氏、山口縣の柳川洲馬氏、千兩箱川柳社の原史風氏その他の諸氏が續々と入社され、私達のこの仕事を救けてくださることになつたのです。●東京の井上劍花坊氏、金澤の安川久流美氏、小林紅法師氏、廣島の八翠坊氏その他の諸氏から本誌の創刊に際して深甚の好意を寄せられたこと、二木幸堂氏から維持費中へ金一封を送られたこと、各地川柳家から小生宛に年賀狀を賜つたことなど取纏めて、で御禮申上げます。●本誌はもつと早く出る筈であつたが最初に廻はした印刷屋が労働争議のため、原稿が其處で暫く滞在したためです。大變にお待たせしたことをこ、におわびしておきます。三月はすぐにとりかゝります。●本誌は私が編輯しましたが次號からは新進氣鋭の竹田蘆穂氏が編輯を擔當することになつて居ります(二月二十一日)とある。同人の雑詠欄は「川柳塔」、一般の雑詠欄は「近作柳梅」、共に路郎選。5月号(4号)から川柳書架(川柳書の紹介)、「句になる迄」――選削改作句稿より――(初心者のための添削欄、路郎執筆)掲載。

大正14年(一九二五年)

1月号(12号)によると、同人25名、十四支部。4月号(15号)から川柳家の戸籍調べ連載。7月号(18号)から句作上の常套語(路郎執筆)連載。大正15年2月号まで8回連載。

8月号(19号)に、急告として川柳雜誌社事務所(大阪市港区八條通二丁目十一番地)橋本二柳子宅。現・港区八幡屋三丁目十七番辺り)新設。

大正15年(一九二六年)

1月号(24号)は48頁。同号によると、同人30名、十四支部。1月から本社句会場を端の坊から日本橋俱樂部に変更。

2月号(25号)から従来より8頁増頁の40頁本位となる。同号から讀者の天地欄新設。

4月号(27号)から句作上の常套語法(路郎執筆)掲載。

10月から本社句会場を端の坊に戻す。

昭和2年(一九二七年)

1月号(36号)によると、同人33人、十四支部。2月号(37号)から柳梅評釋二十四篇まで(路郎執筆)連載。

4月号(39号)から川柳漫畫累卵の遊び(路郎執筆・柴谷柴舟画)掲載。12月号まで8回掲載。

6月8日(水)本社を鳴尾から大阪市西成區千本通五丁目七番地に移転。

8月号(43号)から同人制を廃し社友制を採るとともに、紙質を改良、増刷をし、市内の各書店に配本。

8月に本社印刷部に輪転機を据える。

11月号(46号)から古句賞懸欄(蛭子省一担当)新設。

昭和3年(一九二八年)

1月号(48号)によると、特別社友39名、維持社友鮎美等6名、二三支部。同号に、川柳漫畫女ごころ(路郎執筆・柴舟画)掲載。

2月号(49号)から月評欄掲載。以後名称の変更などあるが、原則として句評は連載。同号に、川柳漫畫人の一生(路郎執筆・柴舟画)掲載。7月号で5回掲載。

2月4日(土)橋本二柳子転居のため、川雑事務所も大阪市港區八條通から大阪市住吉區杭全町六〇三番地(現・東住吉區杭全八丁目一番26号か六丁目12番14号か、七丁目12番辺り)に移転。

3月から本社句会場を日本橋俱樂部に変更。

8月号(55号)に光耀抄(女性作家の作品を掲載)の頁新設。同号から、創刊以来続いている

募集句の欄を「一路集」とする。

昭和4年(一九二九年)

1月号(60号)によると、特別社友22名、維持社友31名、二八支部。1月から誌友制を設ける。本社事務所に電話開通。同号から川柳漫畫假の姿(路郎評・柴舟画)6月号まで連載。

2月号(61号)から川柳類題索引連載。2月から特別社友を同人、維持社友を社友と改称。

6月号(65号)から随想隨筆のBUILDING欄新設。

7月号(66号)から通信消息の飛燕往來欄新設。

昭和5年(一九三〇年)

1月号(72号)によると、同人31名、社友42名、二八支部。同号から大問題小問題欄(柳論)掲載。

5月号(76号)から柳壇の人々掲載。

8月号(79号)から光耀抄(川雑婦人友の会の前身)連載。

10月号(81号)から、「近作柳樽」欄の投句者増加の解消として、一部と二部に分け、二部は安井ひろしが選をする。

11月句会から一年間、句会費を三〇銭から二〇銭に値下げ。

昭和6年(一九三一年)

1月号(84号)によると、同人25名、社友49名、二八支部。同号から地下鐵欄・火華欄(誌上匿名)新設。

2月号(85号)から川柳雜誌社基金募集。

3月から本社事務所の町名番地変更により、大阪市住吉區平野西之町八三番地。

9月号(92号)から、路郎多忙のため、「川柳塔」欄を岩本素人・松盛琴人・福田山雨楼・橋本

緑雨の合議選に、「近作柳樽」欄を安井ひろし・松丘町二の二人が交替で選をすることになった。路郎は新設した「第一線」「春秋點」の選をする。

昭和7年(一九三二年)

1月号(96号)によると、同人22名、社友48名、二八支部。同号に日本柳壇百人選掲載。

5月号は100号記念特集号(菊判84頁・参拾錢)

「百號が出た——いろいろの意味で生みの苦しみは一號々々加重されるばかりである。雜誌を出してあるうちに、誰でも陥る壓力それを私はおそれる。隨力で書く原稿、それも私はおそれる。今柳界にとつて一番おそろしいことはこの隨力であらねばならない」(灰皿)より。

100号当時の編集局長は、麻生茂乃・伊藤恵
陀・橋本緑雨・安井ひろし・山本丹路・松丘
町二・松盛琴人・福田山雨楼・安西杏三・住
田乱取。

6月号(101号)から「川柳塔」欄をひろし
と町二の合議選、「近作柳樽」を路郎選とする。

他の雑詠欄を廃止。同号から武玉川研究連載。
梅本秋農屋・森東魚・蛭子省二によって、以後
十二年間に亘って連載された。

8月号(103号)から事務所の住所が町名変
更により、大阪市住吉區平野西之町八三、とな
る。

昭和8年(一九三三年)

1月号(108号)は創刊十周年記念特集号(1
28頁)。「川柳塔」欄も路郎選に戻る。同号に
よると、同人24名、社友46名、三三支部。

8月号(115号)から柳壇書報(画報2頁を
巻頭に)新設。

9月号(116号)から初心者指導の川柳バイ
ロット欄(山雨楼担当)を新設。

11月号(118号)は東京句会記念号。11月17
日(金)本社同人社友会で、社友制を廃し一列
同人とし、旧社友を評議員、旧同人を理事と称
することに決定。同人37名、理事19名。この年、

光頭会支部(永田里十九)、奉天支部(江戸みつ
る)、八束支部(平塚乱笑)、野山支部(野山修
一)、玉造支部(清水白柳子)、今治支部(渡辺
曉蓮)今里支部(吉田水車)発足。本社社章制
定。

昭和9年(一九三四年)

1月号(120号)によると、同人(評議員)41
名、同人(理事)17名、三四支部。

11月号(130号)から「川柳雑誌」事務所を
大阪市天王寺區上汐町二丁目五一(現・中央区
上汐二丁目六番地)に移転。この年、新居浜
支部(越智虹子)、大鐵支部(植山九天)、伯耆
支部(湯原美笑)、鏡川第二支部(尾添好郎)、竹
原支部(町田承春)発足。

昭和10年(一九三五年)

1月号(132号)によると、同人(評議員)48
名、同人(理事)15名、三四支部。

2月号(133号)から日本名所名物川柳掲載。
3月号(134号)から明治以後の川柳年表(西
島○丸執筆)連載。

6月本社句会より路郎カップを授与。

7月号(138号)から12月号まで川柳指導講
座(川上三太郎指導)5回掲載。同号から「柳
界展望」の頁が出来る。

10月、東京支社開設、福田山雨楼初代支社長に
就任。

この年、行人会支部(平井春光)・十三支部(浅
野牧人)開設。

昭和11年(一九三六年)

1月号(144号)によると、同人(評議員)50
名、同人(理事)12名、支社長福田山雨楼、三
一支部。

2月号(145号)から川柳指導講座を塚越正
光(迷亭)が三太郎の後を受けて指導。

3月、有保証の新聞紙法の適用のもとに掲載内
容の拡大を図り、川柳の社会化に一步を進め
る。

6月号(149号)1頁「社告」に、「事務所廢
止/今後、社務一切を發行所に於て行ふ/一層
の御後援をお願いする」とある。

7月号(150号)は、川柳雑誌社の会計に不
正があったことをほのめかす記事と川柳人会
設立の4頁のみ。7月2日(木)同人会で、川
柳雑誌社を路郎の個人経営とし、同人会を廃し
不朽洞会を設けることが決定。不朽洞会員の掲

載はない。名誉会員は、(千葉)久良伎(東京)
三太郎、周魚、雀郎、三面子、正光、天民子(福
島)五花村(青森)不浪人(函館)晟修(金沢)

久流美(静岡) 珍竹林(長野) 紫痴郎(松山) 五

健(大連) 濤明(朝鮮) 可宵、省二(兵庫) 南

北(神戸) 紋太(京都) 福造(大阪) 東魚、溪

花坊、雞牛子、塊人の24名。

8月号(151号)に川柳職業人宣言掲載。「川

柳塔」欄を廃止、雑詠欄は「近作柳樟」欄のみ。

川柳名句評釋(路郎執筆)の連載開始。発行日

を毎月15日に変更。

9月号(152号)から柳誌要目欄新設。

10月5日に掲載事項の種類が変更されたので、

11月号から再び無保証新聞紙法による刊行に

戻る。

11月号(154号)から「川柳塔」欄復活。

昭和12年(一九三七年)

1月号(156号)によると、路郎社主・賛助

員・客員は掲載しているが、不朽洞会員の掲載

はなし。二九支部。

2月7日(日)不朽洞会員初会合。

3月号(158号)に不朽洞会員31名を発表。

10月号(165号)は武玉川新研究号。

10月25日(月)事務所を大阪市西區江戸堀上通

二丁目四六番地昭和ビル二〇一号室 現・西

区江戸堀二丁目一八番二七号)に開設。

12月号(167号)は川柳人協会特集号。

昭和13年(一九三八年)

1月号(168号)から十五周年を記念して、菊

判を菊倍判とする。定価は參拾銭の据え置き。

同号から川柳評釋百句(路郎執筆)の連載始ま

る。同号によると、不朽洞会員33名、二八支部。

★十五周年を迎へて★

東亞に低迷した戦雲は我が帝國の強行軍に

よつて早くも拂拭され國民舉つて戦捷の春を

壽くに到つた。

この時にあつて我が「川柳雜誌」は十五周

年を迎へて一段の飛躍を期するも又銃後に於

ける文化的貢献の重大さを痛感するに外なら

ない。こゝに誌面は形式内容共に柳誌として未

踏の地域に進出せんことを劃し先づ第一に型

を菊倍判とし創作内容を厳選し、紙質を改め颯

爽たる雄姿を以てデビューすることとした。切

に御愛接を切望する。

5月号(172号)は創刊十五周年記念特集号。

「社の今昔」に「現在不朽洞會員としては綠雨、

かほる、山雨樓、艸樂、里十九、丹路、柳路、梧

郎、鮎美、新水、夕鐘、夢裡、沒食子、水車、變

人、八步、豆秋、紀太、小柳子、いわを、青兒、

白峰、民郎、おさむ、史風、みつる、勇、ライ

ト、古弗、水客、紫香、潮花、形水、並木等の

三十四名である」とある。また「川柳雜誌と畫

家」には表紙や挿画やカットを描いた人を掲げ

ている。「略」帝展の審査員になつてゐる人も

あれば、十錢漫畫を描いてゐた人も交じつてゐ

るし、全然畫家でない人達もある。名前を見て

ゐるだけでも興が湧く。次に芳名を掲げて謝意

を表する。柴谷柴舟氏、吉田きよし氏(故人)、

小出檜重氏(故人)、加藤静兒氏、伊藤鯉魚氏、

吉岡阜平氏(故人)、牧野寅雄氏、田村孝之介氏、

岡本一平氏、清水對岳坊氏、岩本素人氏、森田

ひさし氏、湯川左右氏、富田英三氏、大西長三

郎氏、梅田吞吸氏、麻生アト、麻生リリ、小

寺鳩甫氏、橋本榮助氏、橋本木象氏、三好計加

氏、食滿南北氏、高尾しげを氏、前田五健氏、小

川武氏、富本憲吉氏、朝賀大鱗氏、北みきを氏、

樋口ヒロム氏、と麻生路郎。」

7月号(174号)で百句になつたため、川柳

評釋百句(路郎執筆)の連載終わる。

8月号(175号)から川柳評釋都會風景(路

郎執筆)連載。

9月号(176号)から本社を自宅から事務所

に移す。

10月、十五周年記念出版として「新川柳評釋」刊

11月号(178号)から、旅行記北支蒙疆の印象(路郎執筆)を、昭和14年4月号に亘って連載する。

昭和14年(一九三九年)

1月号(180号)によると、不朽洞会員33名、二八支部。同号から、再び有保証新聞紙法の刊行により、世相の批判と警告を論及。社会ベージ欄新設。

2月号に、川柳人協会の選による日本柳壇百人撰が掲載される。

5月号(184号)から編集兼発行印刷人の住所が、本社と同じ大阪市西區江戸堀通二丁目四六番地(昭和ビル)となる。

昭和15年(一九四〇年)

1月号(192号)から毎月一日発行に復元。表紙に「芸術は国境を越えて飛ぶ」という意味のエスペラント語 *Per artas trans la landojn* を入れる。同号によると、不朽洞会員47名、二八支部。同号から川柳二千六百年史(戸田孤蓬執筆)連載。また、同号に建国二千六百年記念「柳誌皇軍慰問」として、「川柳雑誌」を慰問品として送りたい人を募る広告が出ている。二千六百部に達したら打ち切る。

4月28日(日)不朽洞会総会(茶房グルマン)開

催。

7月から不朽洞会に委員制を施行し、初代委員長に戸倉普天就任。

9月号——200号記念号(菊倍判24頁・参拾錢)

昭和16年(一九四一年)

1月号(204号)から菊倍判をB5判に改める(40頁・参拾錢)。

同号によると、不朽洞会員87名、二九支部。同号から川柳世界史(戸田孤蓬執筆)連載。

3月号(206号)から吟行地調へ(路郎執筆)連載。同号から3回に亘り奥村丹路論(高鷲亜鈍執筆)掲載。

5月7日(水)大阪府警察部特高検閲課横路主任から、大阪府下における柳誌統合問題は「川柳雑誌」は有保証新聞紙の営業誌として、「番傘」は同人誌として二誌を残すことを容認された。昭和川柳「川柳春秋」「赤煉瓦」「天守閣」は、統合あるいは廃刊することになった。

8月号(211号)から、奥付に配給元として「日本出版配給株式会社(東京市神田區淡路町二丁目九番地)」が記される。

8月10日(日)不朽洞会総会(大鉄百貨店六階A B室)開催。

昭和17年(一九四二年)

1月号(216号)によると、不朽洞会員103名、三三支部。

1月17日(土)本社事務所を昭和ビル内二〇一号室から一階七号室へ転室。

2月号(217号)から初等川柳講座(路郎執筆)連載。

8月2日(日)不朽洞会総会(大福寺大広間)で、委員長に戸倉普天、副委員長に橋本緑雨・奥村丹路就任。

昭和18年(一九四三年)

1月号(228号)によると、不朽洞会員111名、三六支部。

5月号(232号)は海軍慰問号。5月から編集長に須崎豆秋、句会部長に黒川紫香就任。

12月号(239号)は雑誌奉還終刊号(B5判40頁・本号に限り六拾六錢。創刊以来定価参拾錢を堅持した。武玉川研究終わる。一三七回(初篇三三回、二篇三〇回、三篇三五回、四篇三〇回、五篇途中まで一九回)に亘って連載された。

昭和21年(一九四六年)

8月号(240号)は再刊号(B5判8頁表紙なし・参圓)。発行所は、大阪市住吉区万代西五

丁目二五番地。同号から續川柳講座(路郎執筆)連載。

8月25日(日)川柳不朽洞会において、中島生々庵が、郷里丹波に帰省する戸倉普天のあとを受けて不朽洞会理事長に就任。

10月号(242号)に、通信添削の案内あり。添削者は、葭乃・艸樂・没食子・貴志子・香林。

昭和22年(一九四七年)

6月号(245号)から定価五円。この年になつて初めての発刊。再刊後、初めて川柳不朽洞会員の名前が掲載される。不朽洞特別会員11名、維持会員30名、正会員53名、計94名。

7月号(246号)は、路郎主幹文芸賞受賞記念特集号(B5判12頁・五円)

10月号(249号)から定価一〇円。

昭和23年(一九四八年)

4月号(253号)から定価十五円。同号によると、不朽洞会員は、特別会員10名、維持会員24名、正会員56名、計90名。

9・10月合併号(258号)から定価二〇円。

昭和24年(一九四九年)

2・3月合併号(262号)によると、不朽洞会員は、特別会員9名、維持会員34名、正会員99名、計142名。

5月号(264号)から定価三〇円。

8月、本社難波連絡所を、北極星三階に新設。

昭和25年(一九五〇年)

1月号(272号)によると、不朽洞会員は、特別会員9名、維持会員34名、正会員104名、計147名。

5月号(276号)の「社の黑板」によると、本社役員として、論説委員に福田山雨楼・戸田古

方、企画委員に中島生々庵・須崎豆秋、句会委員に永田里十九・土井文蝶・森下愛論就任。

9月号(280号)に、「添削會會員募集」の広告が出ている。会費は一回百円で一人五句以内。講師は、葭乃・山雨楼・豆秋・鮎美。

昭和26年(一九五一年)

1月号(284号)によると、不朽洞会員は、特別会員10名、維持会員31名、正会員134名、計175名。同号「社の黑板」に「千日前連絡所の開所時間は月・水・金の午後二時から五時

まで——大劇一つ南の小路東入ル紅ぼたん階上」とある。

2月号(285号)から新川柳評釋百句(路郎執筆)連載。

3月号(286号)から不朽洞の喫煙室欄新設。

昭和27年(一九五二年)

1月号(296号)から定価四〇円。

2月26日(火)限りで川雜十日前連絡所を廃止。以後は歌舞伎座の六階、関西芸能倶楽部で柳人と面談する。

3月号(298号)によると、不朽洞会員は、特別会員6名、維持会員28名、正会員139名、計173名。

3月9日(日)川雜青年部発足のため世話人会出来る。青年部會員資格は、満39歳以下の男女。

5月号は、創刊300号記念特集号(B5判36頁・特価五〇円)。

8月から、本社句会場を、大宝文化会館(南区三休橋)から光明寺(天王寺区下寺町)に変更。10月4日(土)不朽洞会新陣容決定。理事長に中島生々庵、副理事長に武部香林・村松夢裡就任。

11月号(306号)に「川雜支部の改組と新設」の記事があり、A地区では次の支部・幹事が発表されている。梅田支部(水谷鮎美)阿倍野支部(須崎豆秋)鶴町支部(浜畑胡蝶)大鐵局支部(正木水沓)天鐵局支部(間島青丹子)池田支部(黒川紫香)堺支部(八木摩太郎)桜島支部(丸尾潮花)淀川支部(武部香林)大和支部(上田翠光)西成支部(土井文蝶)京都支部(村

松夢裡) 天王寺支部(富岡淡水) 姫路支部(夷
一笑) 篠山支部(小西無鬼) 浜寺病院支部(膳
所新三) 玉造支部(清水白柳子) 交通局病院支
部(北川春集) 淀支部(市場没食子) 暇支部(阿
萬万的) 烏ヶ辻支部(森下愛論) 準支部として、
市電交助会(新川博也) 杏林川柳会(阿形一杉)
角一ゴム川柳会(福本翻骨)。

12月号(307号)に「川雑支部の改組と新設」
の記事があり、B地区では次の支部、幹事が発
表されている。出雲支部(尼縁之助) 東京支部
(宮田不二) 鳥取支部(中島鐵洲) 姫路支部(夷
一笑) 小郡支部(長野井蛙) 下關支部(国弘半
休門) 八代支部(佐野卜占) 大聖寺支部(野村
味乎) 名古屋支部(吉田水車) 大牟田支部(高
田抱逸) 貴生川支部(黄瀬美秋) 備前支部(濱
田久米雄) 岡山支部(藤本清年) 弓削支部(福
島鐵児) 岡大支部(大森風來子) 岡山県庁支部
(服部十九平) 呉支部(林野畦光) 詫間支部(大
西迷窓)。C地区は布哇支部(古川慶花麗)。以
上、計40支部。

昭和28年(一九五三年)

1月号(308号)によると、不朽洞会員は、特
別会員9名、維持会員22名、正会員166名、計
197名。

5月号(312号)から人間横丁(東野大八執
筆)連載。

9月号(316号)の「選者制の更生」に、「本
社の選者は一ヶ年の内に六回以上、本社句会に
出席又は六回以上「川柳塔」或は「同舟近詠」に
出句しなければ翌年度は選者としての待遇か
ら除外される」とある。

10月号(317号)から新川柳鑑賞(路郎執筆)、
平清盛 歴史物シリーズ(富士野鞍馬執筆)連
載。

12月号(319号)によると、不朽洞会員は、特
別会員9名、維持会員20名、正会員173名、計
202名。

昭和29年(一九五四年)

2月1日(月) 副主幹制を制定。初代副主幹に
福田山雨楼就任。

7月号(326号)から「近作柳樽」の選を北
川春集との共選にする。

昭和30年(一九五五年)

1月から、不朽洞会理事長が、健康上の理由で
辞任した中島生々庵から北川春集に交代する。

3月号(334号)から女流作家訪問記(丸尾
潮花担当)連載。

5月号(336号)によると、不朽洞会員は、特

別会員9名、維持会員17名、正会員189名、計
215名。

6月号(337号)「不朽洞だより」(摩天郎執
筆)に「水谷鮎美氏(尼崎市)は多年川雑梅田
支部(大阪市)幹事として活躍されたが今回、家
事の都合に依り辞任せられ、四月十五日後任と
して節間杏花氏を推薦、杏花氏が幹事に就任さ
れた。鮎美氏多年の尽力誠に感謝の意に堪えな
い」とある。

6月26日(日) 川雑婦人友の会発足。会長に麻
生霞乃、初代理事長に中島小石就任。

9月号(340号)は山雨楼追悼号。

昭和31年(一九五六年)

2月号(345号)によると、不朽洞会員は、特
別会員9名、維持会員16名、正会員189名、計
214名。同号から定価五〇円。

3月から不二田一三夫人入社、編集局へ。
6月号(349号)から川柳家の二十四時連載。

10月1日(月) 北川春集編集局長に就任。
11月24日(火) 川柳不朽洞理事会総会(諏訪ノ

森中島生々庵邸)で、理事長に西尾菜、副理事
長に川村好郎・若本多久志就任。

昭和32年(一九五七年)

2月号(357号)によると、不朽洞会員は、特

別会員10名、維持会員17名、正会員194名、計221名。

2月、不朽洞会員合同句集「私達」刊行。

7月号(362号)は麻生路郎古稀特集号(B5判66頁・特価一〇〇円)。

9月号(364号)から**全国の名物と川柳行脚**(水谷竹井執筆)掲載

12月1日(日)不朽洞理事会総会で、山雨棲亡きあと空席になっていた副主幹に中島生々庵就任。

昭和33年(一九五八年)

1月号(368号)に、「川柳塔」欄の出句数を、自選力を高めるために、十句以内とするとの社告が出ている。それまでは無制限だった。

2月号(369号)によると、不朽洞会員は、特別会員10名、維持会員20名、正会員201名、計231名。19支部。

4月号(371号)から**私の作句法**掲載。

5月号(372号)から定価六〇円。

6月号(373号)から**不朽洞の人々**掲載。

7月号(374号)に不朽洞会員バッジ制定の広告が出ている。一個二百円。

9月号(376号)から**須崎豆秋論**(高鷲亜鈍執筆)掲載。

11月16日(日)不朽洞総会(金竜閣)開催。理事長に土井文蝶、副理事長に川村好郎・西いわを、新たに参事として戸倉普天・中島生々庵・北川春巢・武部香林・西尾菜・若本多久志・松江梅里就任。

昭和34年(一九五九年)

3月から本社句会場を、道頓堀文楽座別館四階へ変更。

3月、婦人友の会理事長が、中島小石から山川阿茶に交代。会長は麻生蔑乃。

4月号(383号)によると、不朽洞会員は、特別会員19名、維持会員48名、正会員186名、計253名。一六支部。

5月号で(384号)**新川柳鑑賞**(路郎執筆)の連載終了。六七六回、約六年に亘って連載された。

6月号(385号)から**川柳名句と難句**(路郎執筆)連載。

11月22日(日)不朽洞理事会総会(大成閣)開催。

12月から本社句会場を、日本橋北詰大阪観光ホテルへ変更。

昭和35年(一九六〇年)

1月号(392号)から定価七〇円。同号から

川柳夫婦善哉(丸尾潮花担当)掲載、**絵と川柳で表現する歴史**(戸田吉方執筆)連載。

3月号(394号)によると、不朽洞会員は、特別会員20名、維持会員47名、正会員192名、計259名。

3月の本社句会場は文楽座別館、4月からは難波高島屋西側未生会館四階へ変更。

4月16日(土)常任理事会で、前理事長土井文蝶が病氣辞退のため、理事長に中島生々庵、副理事長に若本多久志・松江梅里就任。

9月号(400号)は四百号特集(B5判76頁・特価一〇〇円)

10月から本社句会場が、新装成った大阪観光ホテルに戻る。

昭和36年(一九六一年)

1月号(404号)によると、不朽洞会員は、特別会員20名、維持会員45名、正会員193名、計258名。

3月から本社句会場を関西会館(天王寺電話局東隣)に変更。

6月号(409号)から定価九〇円。

昭和37年(一九六二年)

1月から本社句会場を、千日前の自安寺に変更。

2月号(417号)によると、不朽洞会員は、特別会員19名、維持会員45名、正会員187名、計251名。

昭和38年(一九六三年)

3月号(430号)によると、不朽洞会員は、特別会員17名、維持会員46名、正会員194名、計257名。

3月17日(日)不朽洞総会開催。

8月号(435号)から定価二二〇円。

昭和39年(一九六四年)

1月号(440号)から川柳 題詠句の鑑賞(路郎執筆)連載。

同号から、互いに言いたい事を言い合う私達の地下街柳新設。

3月号(442号)から川柳名句抄の鑑賞(路郎執筆)連載。

4月号(443号)によると、不朽洞会員は、特別会員17名、維持会員46名、正会員192名、計255名。

4月号「不朽洞会から」に、「本会理事長中島生々庵氏が一身上の都合により理事長を辞任されたので、若本多久志、松江梅里の副理事長ならびに西尾菜、土井文蝶、川村好郎の参事諸氏等が極力留任を懇請したが決意堅く遂に辞

表を受諾することになり、次いで其の責を負い副理事長及常任理事が文蝶を残して辞任、三月九日の臨時理事会に於て辞任を認め、直ちに不朽洞会運営のため左記の諸氏を常任理事に選任した。若本多久志、松江梅里、北川春葉、川村好郎、土井文蝶、西尾菜。理事長は当分欠員のままとする。(多)とある。この件に付き、橋高薫風が「川柳展望」8号(昭和52年2月1日発行)の「人間をもとめて」で、天根夢草の質問にこう答えている。「——ところで薫風さん、川柳雑誌は路郎先生の遺志によって廢刊となつたのですか? 私はあれには疑問を持っているのですよ。自分はいさぎよくていいかも知れませんが、多数の会員誌友の事を考えたトップの発言ではない。薫風 あれは路郎の意志と伝えられているけれども、誰も真相は知らんのです。まあ、色々と事情があつてね、先生は喜寿のお祝いの年に死にはつたわけやけどね、その時の常任理事会のお祝いの計画を先生が蹴つた。そんなことから中島生々庵をはじめとする常任理事の連名辞退となつてね。先生は総スカンを喰つたわけや。その中で、土井文蝶さんだけは、頑として路郎先生についた。我々もそこに悔いを残したし、先生もまた、川柳雑誌は

俺一代というような気もちを抱かれたのやないかと……。これは想像の域です。」
3月31日(火)、中島生々庵副主幹辞任に伴い、北川春葉が副主幹に就任。河野春三が新たに編集局に入り、春葉の後を受けて編集局長に就任。雑詠「人生譜」欄(河野春三選)を新設する。
5月号(444号)の「社の黒板」に、「★路郎主幹の喜寿・金婚の祝賀行事が川柳不朽洞会が主軸となつて、全国や海外にまで呼びかけ、大々的に行なう企画が昨年以來、たびたび協議があつた。しかし、路郎主幹は、そうした厚意だけでも感謝に堪えないが、何分目下の状態では、それにお応えするだけの健康ではないことを自覚され、折角張り切つて企画されているのに、言うにしのびないが、そうした祝賀行事は取りやめて欲しいと言われている。それに代わるものとして、本誌の四百五十号記念をやつて欲しいとのことで、社としても、その意を諒として不朽洞会の世話役にまで報告することにした」とある。「柳椽室 路郎生」に、「(前半略)★「社の黒板」にもある通り、私の喜寿、金婚の祝賀行事は私のわがままから、とりやめていただくことにしたので、寛恕が願いたい。そ

の代りご厚意に応えるため他の方法を考慮したいと思つている。★私は近く、編集室を二階に移すことにした。そして、ベッドをその隣室に移して、雑音から少しも遠がれることにした。第一のネライは気分転換にある。終日執筆していると、アタマに圧迫の感じ方がひどいからだ。今の世の中では、そう簡単に移転も出来ぬので、せめて階下から階上に移つて気分を新たにすることにしたのである。その点新居を求めて八十回も引越した食満南北の時代はよい時代だった」とある。

7月号(446号)に、次の広告が出ている。

路郎先生の喜壽・金婚の祝賀について

——お知らせとお願い——

日本柳壇の巨匠であり、我等の恩師である麻生路郎先生の喜壽・金婚祝賀行事については本会が主体となつて昨秋以来慎重な企をととのえ、全川柳人ご賛同の下に一大盛典を挙行する運びになつておりましたところ本春に至り路郎師から「諸君のご厚意は衷心から感謝するが、目下自分の健康状態では到底そのご厚意にお応えすることがむずかしいと思つてからお断りしたい。」と固辞されましたので、本会ではその善後策につき数回役員会を開催いたしましたし

て、先生のお身体に障りのない範囲で、同時に先生のお気持ちに添うた我々の祝意をうけて頂く行事として左記企画のご揮毫についてご諒承を頂きました次第でございます。

ご承知の通り先生はご高齢のことでもあり、願われないことはありませんが、これが最後のご揮毫となるやを思う時、我等川柳人として愛蔵すべき家宝を得る、得難きチャンスではないかと存じますので、何卒この機を逸さずご参加お申し込みの程お願い申しあげます。

昭和三十九年六月吉日

川柳不朽洞会常任理事

北川春巢／松江梅里／川村好郎／

土井文蝶／若本多久志

麻生路郎先生作品頒布

作品——一、軸・横額 二、色紙 三、短冊
揮毫料——不要とし、お申し込み参加者より、喜壽・金婚お祝金を右相当額拠出して頂きます。この額につきましては常任委員会に於て各標準を定めてありますので、お申し込み受付と同時に詳細な規定をお知らせいたします。

同時期間——先生のご健康状態も考えまして、頒布期間——先生のご健康状態も考えまして、お申込順に六ヶ月以内とし、昭和四十年三月迄とします。

大阪市住吉区万代西五丁目二五
申込所 川柳不朽洞会

電話大阪六七一局六〇八一

11月号(450号)の「柳樽室 路郎生」の前半に、「★秋の日ざしが机上に跳る。都塵の中にもさわやかさが感じられる。★こうした佳い季節に本誌は創刊四五〇号を迎えた。普通なら祝賀の記念号を華々しく出すところだが、今の私にはそうした月並なことは煩わしいだけだ。ひとりひそかに祝杯をあげれば、それですんでしまふ。清潔で簡単、それが今の私には一番ふさわしいのではないかと思ふ。昭和二十八年には私の句集「旅人」が出た。それを機会に、私の誕生日をみんなで祝つてやろうという、「川雑川柳まつり」が生まれた。もう十年も生きるか、どうか判らぬが、せめて十年ぐらいは生きたいという意図から、十年を目指して企画することになったがその「川雑川柳まつり」も昨年で予定通り終了にした。十年の歳月も流れるように早かった。そこへ本年は喜壽と金婚が重なった。これも昨年から大だ的に祝賀の企画が、あったが、私の健康が、みなさんのご好意にお応えする状態でないことを思いおことわりしたのであった。★本誌の発行中には日支事変があ

り、太平洋戦争があり、我が国の一大転換期の

新設。

多事多難時代に遭遇したにもかかわらず雄々

昭和40年（一九六五年）

しく闘い抜いた「川柳雑誌」を高く評価され、支

1月号（452号）から川柳太平記（富士野鞍馬執筆）連載。

持し続けられたご好意は何物にもかえがたい

2月号（453号）によると、不朽洞会員は、特別会員16名、維持会員45名、正会員193名、計

ものだと感謝している次第だ。「川柳雑誌」が芽

254名。同号から「近作柳樽」欄は好郎との共選。

出度くゴールインするのは、いつの日か判らぬ

4月号（455号）から大陸放浪（東野大八執筆）連載。

がその時こそ、柳人こそぞって祝つていただき

9月号（460号）が終刊号（B5判46頁・二〇円）

い。★日本柳界を背負つて来た多くの先輩柳人

【所蔵館】（北海道）北海道大学（岩手）日本現代詩歌文学館（東京）国立国会・日本近代文学館（長野）上田市立上田（長野）「花月文庫」（京都）京都大学文学研究（大阪）大阪府立中之島・大阪市立中央・大阪大学総合・関西大学（奈良）奈良大学（鳥取）県立（広島）尾道学文庫

ざと姿を消しゆく。それこそ自然の姿には違

ないが、生き残っている人々にとってはこれぐ

らい淋しいことはないと思う。柳界の曲りかど

に来たことを思わされると同時に次代の新人

の飛躍を希うのは私だけではあるまい」とあ

る。

11月14日（土）河野春三が、東京に住むことに

なったため、編集部辞任。「人生譜」欄は、1月

号まで。2月号から北川春東選の「一円帖」欄

良 奈良大学（鳥取）県立（広島）尾道学文庫

Ⅲ 没後刊行された著作・句集・研究書

1 『麻生路郎句集 旅人とその後の作品』

一九七七年（昭和52年）5月8日・川柳塔社

（大阪市南区鰻谷中之町二〇番地）・二五一

頁・178×103mm（文庫判）・千円「内谷」路郎十

三回忌を記念して、『旅人（昭和28年）』の収録句一一〇句に、その後の作品一〇〇句を加えて刊行されたもの。ただし、旅人その後の作品

の冒頭の二句（出鱈目に生きて米寿もないもの



だ）（女のいない酒はさみしき）は、「旅人」に収録された作品なので、その後の作品は九十八句となる。発行者は、旅人普及刊行委員会。会長は中島生々庵。ご挨拶に、「川柳の社会化運動と一冊のこの句集。私にも多くの夢がある。私の一生はまだピリオドを打たれていない。せめてそれを力ぐさに歩き続けよう。」／右は、一九五三年秋、麻生路郎川柳生活五十年記念として、路郎先生の手によって発刊された、「旅人」の巻頭にある先生の自序の一節である。／「旅人」が発刊に至るまでに、相当な時間を要した事は言うを俟たぬところであるが、愈々資料原稿が大阪市北区の大阪出版堂へ届けられ、先生ご自身しばしば出向されて直接、店主と談合の機会を持たれ、私も幾度かお伴して、当時の事

情も可なりはつきり記憶して居る。しかし、お話しの内容は、私のような門外漢には殆ど判らぬ点も多かった。主人をつかまえて、印刷や製本上の技術の専門的指示、時によっては、手きびしい叱責の言葉さえ飛び出す有様であった。このようにして、大略先生のご希望に添うた「旅人」が発刊されたわけで、さて出来上つてみると、さすがにその内容句の充実さは勿論、掌にうけとつた魅惑的な重量感、句の配列に対する製本上のきびしい注文、そうした、もろもろの要件の集結によつて、眩ぶしいばかりの脚光をあびつつ世人を驚嘆させたのである。／「リズムはその人の呼吸であり、句はその人のこころである」という先生のお言葉どおり、三十年近い歳月を経た今日でもなお、行間にはつきりと先生のお姿を蘇らせてくれる「旅人」である。ただ驚沢な所願とお叱りをうけるやも知れぬが、日常私共がたえず身辺に携行するには、些か豪華すぎるうらみがあり、先生のお所謂「川柳社会化」にも、何となく、ふざわしくないような感じ、抵抗らしいものを禁じ得ない面もあつた。この点は私共後進の者が抱く不躰なお願ひであるだけでなく、先生ご自身も、

しばしば生前に、「再版でもする時があれば、今少し手軽な普及版とでもいった型を考慮したものだ」と言つて居られたことを承つても居たので、このたび先生の十三回忌法要を営むご縁を機にして、有志相謀り、宿願への実現具体策をとりあげた次第である。／こうしたいきさつで、川柳塔社内の常任理事会は、それぞれの委員を委嘱し、爾来約一か年間検討、討議を続け今日に到つた。／結論として、現在「旅人」の中に納められている句はそのままとして、「旅人」以後に遺された沢山の句の中から、私共が到底亡失してはならない千数百句にのぼる玉句を如何に取りあつかうべきやが、大きな議題になり結局、百句を追加拜載したいとの悲願に一致し、ここに「旅人普及版刊行」に到つたのである。／ただ私共が、このたびの発刊企画当初から最も懸念し、且つ惶れた点は、出来上つた時点で於て、これあるがために、英邁極まりなかつた先生のご遺徳を些かでも毀損するような事なきや否や、又は基本的な考え方として、この企画が果して、先生は勿論、遺族方のご意向に添う所以のものであるかどうか、等々であつた。そのことは私共の胸に去来する大き

な不安であつた事も事実であつた。しかし蔑乃奥様はじめご遺族のご快諾と、同時に何かとご協力まで頂く手筈になつて今日芽出度く誕生致した。要すれば、拙ない私共が、か細いなगरも、先生を思慕景仰するところが実つたものと思召され、一冊でも多く大方諸子のご清鑑を乞ひ、もつてありし日の路郎先生を偲ぶよすがの一端とでもして頂ければ幸甚この上もない儀であると存するのであり、発刊のご挨拶を申上げるに当り、この上とも宜敷くご指導とご支援の程お願いする次第である。／昭和五十二年二月四日／「旅人」普及版刊行委員長／中島生々庵とある。跋に、「私の書齋にはいつも路郎著の「旅人」がある。気がむくとよく掌にのせてみる。するとその重みの底から声がする。／「先生、これ、大きさといひ、厚味といひ、装ていといひ全くいふことなしですな」／「そうか甚だうれしうや、これには……」／心から嬉しうなその声とその老顔。ごくりと私のどど仏が動く。／「旅人」は路郎先生の快心の句集刊行物なのだ。／以上は東野大八さんの、旅人路郎を蕉翁に寄せての書き出しであります。／この名著「旅人」は私達も常に座右に置

2 川柳全集② 麻生路郎 橋高薫風編



いて、名吟に感動し、佳句に感激して、作句の指針としてまいりました。謂わば「旅人」は、私達にとって聖書であります。／この度、先生の十三回忌を記念して「旅人とその後の作品」の普及版を企画しましたところ、同人諸氏の大いなる賛同を得まして、茲に発刊する運びとなりました。普及版となりまますと勢い先きに掲げられた、先生と大人さんの会話とはうらはらなものになって、まことに申し訳ないことになりましたが、私達湯仰の「旅人」が何時何処でも、幅広くことの喜びを許していただけるよう特に、形水氏と私とが、生駒の麻生家をお訪ねして、快よく承諾を得ました事を、ここに附記致しまして、大方のご了解を得たいと存じます。／なお薫風氏には、たびたび生駒に足を運んでいただき、清記には鬼遊氏を煩し、写真には岳人氏、編集その他には二三夫、史好、酔々の諸氏にご苦勞をおかけした事を深く感謝申し上げます。／丁巳立春／水鶏庵にて／西尾某識とある。【所蔵館】〈青森〉近代文学館〈岩手〉日本現代詩歌文学館〈富山〉滑川市立(2冊)〈兵庫〉県立〈和歌山〉県立〈岡山〉久米南町・早島町

一九七九年(昭和54年) 7月31日(昭和55年) 11月5日二版・昭和57年8月三版・構造社出版(株)(東京都世田谷区三軒茶屋二丁目一番番・一六一頁・18×28mm(B6判)・一〇〇〇円【内容】作品(句集「旅人」からと「旅人」以後の作品を抜粋した四百句)・川柳エッセイ(末広博士の「暴政は人を皮肉ならしむ」を読む)「三十年計画」「川上三太郎君」「名人団平のこと」「机下雑然(川雑 発表時は「机下雑然」の題「植物痴」「ガガーリン氏を迎えて」「南北逝く」「妻を語る」の九編)・人物像(編者による)・書簡集・略歴から成る。「机下雑然」「植物痴」は「読本」の「麻生路郎文集」に、「人物像」は「麻生路郎の人と作品」に、それぞれ収録し

た。あとがきに、「麻生路郎選集の編集を引受けた時、これは大変な仕事だと思った。しかし、すぐ、事は案外簡単に運ぶのではなからうかと考え直した。路郎先生の略歴が原稿用紙三枚に制限されているのがその理由である。先生の経歴なら、詳細に書上げると三十枚以上にもなる筈だからで、写真にしても四五十点ほどもせせと集めた意気込みが、今になっておかしく感じられる。／六巨頭といわれる川柳家の中でも、路郎先生は、作品・文章・講演のいずれにも一流の才能を発揮されたので、論説にしる随想にしる膨大な資料の中から、所謂、「氷山の一角」を選ぶ難しさを思い知らされた。作品を一頁五句立てにして文章の頁を増やすようにしても、作品を年代順に並べよとのことだったので、古い雑誌を逐一辿らねばならなかった。＊路郎作品の冒頭に掲げた数句は、出生の日時や場所が詳らかでなかつたものである。／川上日車氏の記された句／くろぐろと道頓堀の水流る／にしてもすつと後のもので、当時の「雪」大正四年十一月号には、くろぐろとくき川竹の水ながる／と掲載されている。「うき川竹」を「道頓

堀の」と推敲された先生のところがよく判る気がする。もつとも、公害対策が推し進められ、最近の道頓堀の水は、くろぐろでは無くなっている。先生もさぞかし苦笑していらつしやることだろう。／俺に似よ俺に似るなと子を思ひ／の句は、「文芸春秋」昭和八年十月号に特集された「古今川柳百名吟」の中に、現代川柳のたった四句のうちの一旬として選ばれた程の句だから、どうしても出生の一端なりと知りたくて、「川柳雑誌」を更に丹念に調べ始めたところ、それは大正十五年七月十一日午後一時から開かれた第五回遅日莊柳談会（於鳴尾の路郎先生居）席上で発表されたものであることが判った。その日のお昼少し前に私自身も生まれたのだから、これは私にとつて感激的な出会いだった。／「一句を残せ」「いのちある句を創れ」を標榜し、職業川柳人として立たれた先生の作品は、一句一句がいのちの軌跡であつたし、プロ意識に徹した詠いぶりであつたことも、今度の仕事で強く実感された。そして、芭蕉がそうであつたように、先生の命脈まさに尽きようとする時、心情を吐き出された作品が、たまたま辞世となつたまでで、決して、ここで辞世の一つ

でも残しておかなければというよつな気持は、些かなりとも無かつたであらう。／「麻生路郎」を二十五枚書いたが、先生のこととは以前に川柳誌の「柳都」や「平安」に書いたことがあるので多くは重複することとなつた。／私は今、初めて先生にお会いした時、先生が、「川柳は十七音字を基調としたリズムを持つ批評詩である。」とかいつまんでご教示下さつたこと、晩年の柳話で、穿ちを強調されたこと、ご自身の沢山の句の中では、／寝転べば畳一帖ふさぐのみ／が一番お気に入りだつたこと、李曰の詩、王羲之の書がお好きだつたこと、晩年、中脳がいれんを起し、失語症・失書症という一語も発し得ず、仮名が二文字とは書けない廃人同様の身になられたのに、奇跡的に再起されたこと、などなどが思い出されて、別れを肯んぜぬ幼児のような気持になつている。／型破りのプロログとエピソードは、私の脳裏で演じられた幻の舞台の描写である。／最後に、この仕事を私に担当させて下さつた川柳塔の中島生々庵主幹、西尾某副理事長をはじめとする常任理事の諸氏、路郎書簡や句碑の写真の提供と原稿の清記に協力下さつた東野大八、工藤甲吉、浜田久

米雄、浜野奇童、上田翠光、不二田一三夫、高杉鬼遊、板尾岳人、宇佐美和子の諸氏に感謝し、本年八十六才であらせられる麻生霞乃先生の「長寿を心からお祈り申上げる。／昭和五十四年七月七日／橋高薫風」とある。＊冒頭に掲げた年代未詳の句は、（俺に似よ）以外に（行末はどうあろうとも火の如し）（春の僕ただ良寛をこころざす）（だしぬけに鐘の鳴るのも旅のこころざす）（しらじらしき悔みの徒まず）（十二月首だけ入れて呑んで行く）の、計六句。（行末は）の初出は、「人物像」の末尾に記した。（だしぬけには、大正13年8月、山中温泉での作。発表時は（だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと）。【所蔵館】北海道・小樽市立・旭川市立中央【青森】五所川原市立・近代文学館（岩手）奥州市立江刺・日本現代詩歌文学館（山形）県立・山形市立本館（福島）県立（1982・教育出版センター）（茨城）取手市立・栃木県立・県立足利・日光市立今市・大田原市立（群馬）前橋市立・県立女子大学（埼玉）県立久喜（千葉）成田市立・浦安市立中央・放送大学（東京）国立国会・都立多摩・練馬区立光が丘・足立区立中央・江戸川区立中央・江東区立城東・目黒区

立八雲中央・八王子市立中央・府中市立中央・調布市立中央・武蔵野市立中央・國學院大學・明治學院大學（神奈川県）県立・横須賀市立中央（新潟）県立・新潟市立白根・三条市立（長野）諏訪市立岡谷（山梨）都留文科大學（富山）県立・魚津市立魚津・滑川市立（石川）金沢市立玉川（静岡）沼津市立・富士宮市立中央（福井）福井市立本館（愛知）名古屋市立鶴舞・扶桑町・愛知大學豊橋（滋賀）県立・大津市立本館・立命館大學衣笠（大阪）八尾市立山本・関西大學・奈良・県立図書館（兵庫）県立・神戸市立中央・伊丹市立・宝塚市立中央（岡山）岡山市立中央・久米南町・早島町立（鳥取）県立（山口）周南市立中央（愛媛）県立（高知）香南市立野市（熊本）熊本市立

3 『旅人・福寿草』

一九九四年（平成6年）1月16日・川柳塔社（大阪市阿倍野区三町2・10・16ウエムラ第2ビル202号室・一八二頁・B5×B8mm（B6判）・一、五〇〇円【内容】「川柳塔」八〇〇号記念に出版された、路郎・葎乃の夫婦句集。御挨拶に、「大正十三年二月、我等の柳祖、麻生



路郎・葎乃」夫妻が、一大決心のもとに、創刊された『川柳雑誌』第一号から数えて、平成六年一月号を以て、八〇〇号の誌寿を迎えることになった。同人雑誌と言えば、三号雑誌と言われる永続性のないものであるが、今日に至るまでの基礎を築かれた両先生の御努力の程は、涙なくしては語れない。／はじめ同人制で出発し、途中、師弟制に変更し、昭和十一年、川柳作家のプロを宣言され、愈々川柳の社会化運動に邁進され、葎乃奥さんは、作句の傍らよく柳誌を助けられ、『福寿草』という句集を発刊された。あの有名な『福寿草松にしたがいそろかしこ／飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ／ヒヤシンスの音沙汰でなしパンの事／と、主人路郎を激励された。／四男五女のご家庭と雑誌

没頭の夫君を助けて、川柳に燃やされた情熱は洵にまぶしく、後進の我等は幾度景仰したことだろう。／この度、八〇〇号を記念して、『旅人・『福寿草』の夫婦句集が刊行されるにあたり、後世に残る名文中の美文「旅人」の自序／エスペラントのために一生を捧げたザメンホフ博士は偉らかつた。ロシア文学の英訳に一生を捧げたマガレット夫人は偉らかつた。くそ虫の研究に一生を捧げたアンリ・ファブルは偉らかつた。何れも自分の夢を実現させた人達である。／そして川柳に一生を捧げた私は？私は云うべき言葉を知らない。／川柳の社会化と、一冊のこの句集。／私にも多くの夢がある。私の一生はまだピリオドを打たれていない。せめてそれを力ぐさに、歩き続けよう。／という立派な自序がある。／又、『福寿草』の序文は路郎が女流作家について委しく述べられている。『川柳雑誌』の春泥抄に奥さんは毎月かかさず活躍されて、幾多の女流柳人を養成しておられる。／母は毒婦処女の桜ん坊／草に寝て今日もあつたも人間さらい／煙立ち立つ難波の街であつた筈／最後の一句は、時の特高の目にとまつて反戦思想と言われ、府庁へ呼ばれたいきさつもあつた。路郎が古稀の時に／古稀はよし弟

子に孫弟子ひまご弟子／という句を扇子にして、弟子達に下さつた。今や曾孫弟子ならぬ龜の孫、鶴の孫が沢山いるが、路郎・葎乃の両先生を知らぬ人が殆どである。／八〇〇号を機に、『旅人』、『福寿草』の佳句秀吟を今一度皆さんにお目にかけて、我等の柳祖を偲ぶも亦、故なきにあらざとしてここに刊行した次第である。／西尾 栞とある。あとがきに、「この句集の『旅人』は、川柳全集2『麻生路郎』(構造社)として橋高薫風が収録した400句を、また、『福寿草』は、麻生葎乃句集『福寿草』から橋高薫風が抜粋した300句を収録した。／今回の編集にあたっては、原則として仮名遣いを「現代仮名遣い」に改め、字体も「新字体」として表記を統一し、現代の読者に読みやすい新訂版とした。(田中正坊)」とある。『所蔵館』(大阪) 羽曳野市立中央(岡山) 赤磐市立中央・久米南町(2冊) 広島 尾道市立中央

4 『川柳とは何か 川柳の作り方と味い方』

一九九八年(平成10年) 7月7日復刻版・教育情報出版(大阪市西成区千本南一―十二―八)・二六四頁・183×188mm(B6判)・二、〇



扉

〇〇円【内容】昭和30年11月15日に、至文堂から刊行された同書を復刻したもの。発行者は麻生アト。序文に、「麻生路郎先生が昭和三十年に至文堂から出された学生教養新書『川柳とは何か―川柳の作り方と味い方―』が、このたびご遺族の意志で復刻上梓される運びになった。うれしいことである。／路郎先生は、言うまでもなく川柳の六大家と呼ばれる先駆者の一人で、明治二十一年生まれ、その中の最年長であられた。／若くから川柳の社会化と質的向上のために尽力され、優れた見識により、その目的を果たされたことは、世人のよく知るところである。／往時、至文堂が企画した学生教養新書全五十巻は、人間形成の養われる学生時代に、正鵠な教智と豊かな感性に満ちた教養を探索させようとの意図で、文学や美術、映画、音楽

など、芸術分野の権威者がそれぞれ専門とする部門を執筆して、若者の啓発に資したものである。／著者には金森徳次郎、池田亀鑑、吉村公三郎、三好達治、千田是也、吉野秀雄、平畑静塔、阿部知二といった錚々たる人たちの名が見える。川柳を受持たれた路郎先生も、畢生の仕事と自らを鼓舞されたことであろう。／川柳の形態、歴史、それに初心者向けの作句法を、懇切丁寧な分かりやすい筆遣いで述べておられる。／その上、その当時最も充実していた路郎門をはじめとする数多くの柳人の佳句を二百句以上も取り上げ、鑑賞の粹を示されているのだから、川柳を味わう楽しさもまたこれ以上のものはなからう。／現在、多くの先覚者の努力でようやく質的に向上した川柳が、再び川柳とは申しかねる垂流の蔓延で憂慮しなければならぬ時、まことに時宜を得た指導書の復刻である、われわれは双手を挙げて歓迎する。／この書は初心者のみならず、指導の立場にある諸賢も机辺に収め、柳界に裨益されんことを願う次第である。／平成十年四月八日／橋高薫風とある。【所蔵館】(北海道) 道立・札幌市立中央(青森) 県立(秋田) 県立(宮城) 県立(山

形 県立〈東京 国立国会・都立中央〈茨城 県立〈千葉 県立中央〈埼玉 県立久喜〈神奈川 県立〈群馬 県立〈新潟 県立〈富山 県立〈石川 県立〈岐阜 県立〈愛知 県立〈長野 県立〈三重 県立〈滋賀 県立〈京都 府立〈大阪府立中央・大阪府立中央・大阪府立福島・大阪府立此花・大阪府立大正・大阪府立浪速・大阪府立生野・大阪府立阿倍野・大阪府立平野・豊中市立野畑・東大阪府立花園〈兵庫 県立〈奈良 県立図書情報〈和歌山 県立〈香川 県立〈岡山 県立・赤磐市立中央〈広島 県立・尾道市立中央〈5冊〉・尾道学文庫〈山口 県立〈鳥取 県立〈島根 県立〈愛媛 県立〈福岡 県立〈大分 県立〈熊本 県立〈宮崎 県立〈鹿児島 県立

5 『師弟』

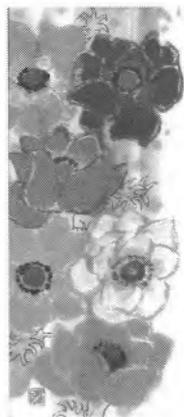
一九九九年(平成11年3月20日)・葉文館(大阪市浪速区恵美須西2・9・15)・二一九頁・188×127mm(四六判)・一四二九円+税【内容】師麻生路郎と弟子橋高薫風の作品各二五〇句を、薫風が編んだもの。路郎の作品は「旅人」から二〇八句、「旅人」以後の作品から四二句抄出

川柳句集

師弟

麻生 路郎

橋高 薫風



している。表紙絵は野尻弘。あとがきに、「最晩年賀状の宛名を書きながら、賀状に一句添えるようになって久しいとの感慨にふけり、川柳雑誌の一員としての自覚を持ちはじめたから、はや四十二年経つことに気付いた。／麻生路郎先生が『川柳雑誌』の創刊号を出されたのが大正十三年、この世を去られたのが昭和四十年だから、こちらも四十二年に亘る真摯な歲月であった。私はこの偶然的符合に驚いた。／それから平成十一年三月二十日に開催する川柳塔社七十五周年記念川柳大会を機に、急換、句集『師弟』の出版を思い立つたのである。／先生と句を並べることの烏詩がまさに躊躇しながら、麻生アトさんに申し出たところ、快くお許しを得ることが出来た。／まことに嬉しい限り

で、大道をまつしぐらに進まれた先生と違って、私はというところから多岐の仲間の介添えて凌いで来た修行の道程ながら、それでも万感の思いが寄せてくる。／世の中には文芸の世界に、師とか弟子とかいうもののあるはずはないと言ふ人も多いが、私は路郎先生から生きる上での魂のような、気骨ともいえるものを頂いた。これが師でなくて何であろう。／ただ期日に追われての不備な句集なので、完璧主義の先生の、あの苦虫を噛みつぶしたような顔を思い出さねばならないのが、この上なく辛い。／表紙は野尻弘画伯にお願したら即座に快諾を得た。路郎先生の晩年、『川柳雑誌』の表紙を飾って下さっていたのを思い出したのである。／画伯は古い雑誌を取り出し、路郎先生のイメージを新たに呼び起こして描いて下さった。／私としては望外の喜びで、この方は路郎先生も満足気に領いて下さるに違いない。／心からお礼を申し上げます。／平成十年十二月／橋高薫風」とある。【所蔵館】〈岩手 日本現代詩歌文学館(東京 国立国会〈岡山 久米南町

麻生路郎年譜

本年譜は、「麻生路郎物語」（東野大八）を元に、「川柳雑誌」「川柳塔」等の柳誌や諸資料を参考にして作成した。

明治21年（一八八八年）

祖父は、備後屋久助といつて尾道では相当に知られた唐津商（陶器商）だった。祖父のあとを継いで唐津商をしていた父善七（34歳）と母クニ（31歳）の次男として、7月10日（火）広島県尾道市十四日町に生まれる。本名幸二郎。母が病気のため出養生をしたので、生後程なく尾道市の対岸にある向島の漁村に里子に出される。兄（福太郎）と、二人の姉がいた。上の姉は神戸、下の姉は大阪に嫁いだ。

明治22年（一八八九年）

11月12日（火）、母クニが肺結核のため32歳で死去。戒名・釋眞覺信女。

明治26年（一八九三年）

2月24日（金）大阪府堺市に、河盛彦三郎（慶応2年8月25日生まれ。当時26歳・しげのの長女として、蔑乃が生まれる。本名ヨシノ）

明治28年（一八九五年）

7歳
学齢期になり生家に引き取られることになったが、家を嫌がったため向島の小学校に通うことになる。島の小学校は一里半も離れた所にあり藁草履をはいて通った。

明治31年（一八九八年）

10歳
店がつぶれて単身上阪して会社員をしていた父善七が、家族を大阪（淡路町三丁目）へ呼びよせる。路郎も里子生活に終止符を打ち、安土町の船場尋常小学校四年に編入する。当時、尋常は四年、高等は四年だった。高等小学校は二年までは東区小学校の分教場へ、三年四年は農人橋の西詰めの学校に通う。小学校の頃から、尾崎紅葉・村上浪六・泉鏡花・幸田露伴などを読み、講談本・探偵小説などは殆ど読破した。二時間もあれば一冊読んでしまうほどであり、教室でも読んでいて教師に取り上げられたことがある。また、授業中にはよく窓の外の景色を夢中で写生していて、教師が前に立つても気づかなかったこともある。書道は夜店で王羲之の拓本を買い、仮名は小野鷲堂の手本を使って練習した。11月14日（月）、ヨシノの母しげの死去。戒名釋貞行。

明治36年（一九〇三年）

15歳
美術学校へ行ったが父に許されず、文科を志望したがこれも許されなかった。それで市立大阪高等商業学校を受験することになったが、受験準備をしていなかったため合格せず（十三倍の競争率）、私立明星商業学校（現・私立明星中学校高等学校。大阪市天王寺区）に一年通う。

明治37年（一九〇四年）

16歳
堂島浜通三丁目（現・大阪市北区堂島3丁目付近）にあった市立大阪高等商業学校（予科3年、本科3年。後の大阪商科大学、現在の大阪

市立大学。以下大阪高商と記す)に入學し、柔道部に入部。当時、雑誌部・商事研究部・講演部・語学部・水上部・陸上部・庭球部・柔道部のクラブがあった。予科の頃、中尾都山(今橋の鴻池の向かいで指南していた)に尺八を習っていた時期もある。読売新聞柳壇「瘤柳」田能村朴念仁選)に投句する。この頃、大阪日報柳壇「浪花樽」の投句が縁で、小島六厘坊と出会う。路郎がどのような雅号で投句していたかは不明。まだ天涯を名乗ってはいなかった。

明治38年(一九〇五年)

17歳

5月20日(土)に六厘坊が発刊した「新編柳樽」に参加する。年末には、六厘坊が大阪新報柳壇(「新報柳壇」)を担当する(「川柳総合事典」参照)。

明治39年(一九〇六年)

18歳

6月に「新編柳樽」を改称した「葉柳」に参加する。夏、平野町五二館楼上の川柳大会で、浅井五葉と隣り合わせる。「川柳雑誌」(昭和8年6月)の「句集の事其他」に、「私が最初彼(六厘坊)編者註を知つたのは私が西横堀の篠橋

に住んだ時代かそれ以前かと思ひますが(明治何年かは未詳)編者註)、私は當時天涯と號して居ましたが、彼は初めて来るなり「天涯君」と云ふなりあるかゝりないか判りもしないのに家人の案内もなくもう二階へ上つて来てゐました。そんな性格の持主だつたのです。(中略)三十九年頃平野町の句會で「おい、看板を書いて呉れ」と云はれたことも覚えてゐます。私はよく看板を書かされたものです」とある。

明治40年(一九〇七年)

19歳

大阪高商予科を卒業、本科に進む。「葉柳」8月号に、天涯の名で初めて作品が掲載されている。「霊」井上剣花坊選で(紫の雲が下りるは靈驗記)〈椋鳥をとらまへて説く靈驗記〉。「灯ろう」六厘坊選で(相庭に灯籠だけが五つ六つ)。「海水浴」阪井久良岐選で(繪葉書の着く度黒くなつた事)。「葉柳」9月号に、6月例会で維持会員の内規を発表したとあり、会員に麻生天涯の名が見える。

明治41年(一九〇八年)

20歳

8月、六厘坊が「土團子」發刊。

明治42年(一九〇九年)

21歳

「葉柳」は櫻花號(4月刊)をもつて終刊。5月16日(日)六厘坊(21歳)が肺結核で死去。9月12日(日)関西川柳社の發会式が開催される。9月20日(月)父善七(56歳)が脳溢血で死去。戒名・釋眞淨信士。

明治43年(一九一〇年)

22歳

2月20日(土)第一回関西学生相撲大会(堺市大浜)に出場。3月、大阪高商本科を卒業。卒業生43名、測量機械屋に勤める。8月14日(日)関西川柳社例会に千松の名で出席。それまでは、天涯を名乗っていた。10月8日(土)関西川柳社句會の帰りに、そば屋の一六庵で千松(路郎)が水府と初めて話をする。

明治44年(一九一一年)

23歳

3月19日(日)千松庵(床屋の二階を間借りしていた)において十五銭の肉鍋を一つずつ取り、水府と「足」百句会を開く。「矢車」25号(4月20日發行)に、路郎の名で「街の色」(17句)を投句する。路郎という号は、本名幸二郎の「幸」を取って付けたものだが、「アサヒクラブ」

〔昭和22年9月24日号〕の「川柳家告知板」に、「号は主義の男尾道の男の意」とある。青明・龍郎（水府）・五葉・三郎（半文銭）・歌三（蚊象・路郎等短詩社同人が、7月「轍」を発売するも2号で廃刊。8月15日（火）上京し、東京市下谷區坂町十一高野方に住み、樋口金屏風店（東京市日本橋區通二丁目九。大阪高商同窓生の樋口湧治郎を頼って就職したと思われる）に勤める。上京するまでは、頻繁に水府と会っていた。4月などは十七回も互いに行ったり来たりした。路郎から水府へ送った留別の句は（いづまでも若かれ長髪刈らであれ）。上京直前は、大阪市市岡町五十七番地（現・西市岡町辺りと思われる。現在の住所表記は川端一步の調査による。以下同じ）に住んでいた。「新川柳」10月号の「各地通信」に、「昨夜は大變に騒がして誠にお氣の毒でした、殊に御厄介になりました（当時の「新川柳」発行人の横浜在住の塩川喜代志宅に厄介になったのだろう―編者註）厚く御禮申します、東京へおこしのせつはよつて下さい、荷十氏の案内で表記へ落つきました 八月十八日夜」とある。また、12月号の「各地通信」に、「下谷は秋にふさはしい處でしたが日本橋

區に移つても秋は矢張り秋ですね、何んとなく暮れて行く街は物悲しいです、私の店頭には一本の柳がその淋しさをたすけますので棄てた都の友のことが惚ばれます／夕ぐれは残せし都思ひ出つ／蟲もなかず日本橋區の秋の暮／金屏風や衝立の並んだ前で一人ポツンと二葉亭全集を讀んでみました、いやに薄ら寒い晩です、頭の上には五十燭光の電燈が光りをほしいま、にしてをります、一寸電話に立つて座に戻つた時火鉢の傍の坐蒲團の上に『新川柳』と原稿紙とがありました、雑誌はありがたく頂戴しました、原稿紙も取つ放しはしないつもりです折角ですから何か送ります、けれども頼りなご加減は小學校の生徒に通譯を依頼したやうなものでせう、的にせないで待つてゐて下さい、雑誌の批評も書いて見たいが私は無遠慮な評をするから一寸差控えておきます、同人諸氏によりしく御つたへを頼みます／十月三十日夜 日本橋區通二丁目樋口方」とある。

明治45・大正元年（一九一二年）

24歳

この年から、葎乃は当百居小集句会に出席するようになったらしい。

大正2年（一九一三年）

25歳

この年、当百居小集句会で、河盛ヨシノと初めて出会う。葎乃の記憶によると、大正元年だという。1月15日（水）関西川柳社から「番傘」創刊。東京にいた路郎は創刊を知らされていなかった。「番傘」（昭和34年8月）の「水府自伝19」に、路郎が「1月の末ごろに帰阪」とある。路郎は、海外流出の許可願のため帰阪し、病気の姉を看護しながら川柳を作っていた。「番傘」2号（5月15日発行）から参加する。「凧」（松山市）7号（7月20日発行）に、「大阪より」執筆。「番傘」3号（8月15日発行）の「大阪より」に、「大阪の柳壇によしの（よしのは雅号）君といふ女流作家を有つて居ます。麻村君の娘さんです」とある。同4号（11月27日発行）の「大阪より」に、「元氣な路郎君が病（肺尖か）編者註）に罹つて、西區京町堀上通三丁目一三（現・西區京町堀二丁目2番9番付近）編者註）へ宿替しました。西田さんの近所で閑があると話しに行つて居ます」とある。

大正3年（一九一四年）

26歳

1月に発刊された「文藝の三越」（三越呉服店

発行・253頁)という冊子がある。東京の三

越呉服店が文芸二十種に総額三千円の懸賞を掛けて募集し、入選した作品をまとめたもの。

路郎は「一口嘸」(選者は岡鬼太郎と前田曙山)

で、四等(賞金三元)に入選している。その作

は「番頭」(新橋と上野の中の呉服店)どちらから

ても橋を三越——、どちらから来ても橋を三越

か、全く巧いね」小僧「それぢや番頭さん、深

川や麴町から来たたらどうなります」3月10日

(火)神戸に住んでいた姉が亡くなる。ヨシノ

(21歳)がプール女学校(大阪市西区川口外国人

居留地にあった。現・プール学院大学)英語専

修科を卒業。4月9日(水)西田当百夫妻の媒

酌で、河盛ヨシノと挙式。「朧」16号(5月5日

発行)の「僕のこと、朧のこと」に、「僕は森

の宮西の町から左の所へ轉じた。大阪西區豊橋

南詰際(ヨシノの父蘆村宅)編者註「僕は今

度女流作家河盛よしの氏と結婚した。女史は今

後麻生葎乃として柳檀にまみえること、なつ

てゐます。□家内は父河盛蘆村氏を加へて三人

です。三人が三人川柳家といふ譯です。家族温

泉でなくて、家族川柳だから一寸柳界のレコー

ドを破つたわけです。媒介は西田當百氏を煩は

しました。□川柳家諸氏の祝詞祝吟は勝手な

ら謝つてゐます。川柳家はそんなものには至つ

て月並で至つて拙劣ですから。けれども普通の

通信はよるこんで御受けをします」とある。「川

柳雜誌」(昭39・5)の「妻を語る」に、「結婚

はしたが、私は毎日葉餌に親しんでいた。一銭

の収入もなかつたが、葎乃も私そのことには

触れなかつた」とある。「番傘」(通巻5号・5

月3日発行)は、路郎の新居から水府も加わり

発送した。「朧」17号(6月2日発行)に「蛙曰

ク」執筆。「朧」22号(11月13日発行)の「大阪

より」に、「静養に随分長い時日と物質上の高い

犠牲を拂つてゐた私も九月一日から又一倍多

忙な職業に就くことになりました。そして十三

日には居を北區新川崎町御料地内第四十號

(現・北區天満橋一丁目辺りだと思われる。造

幣局北側辺り)編者註)に移しました。泉布觀

の近くで澁川橋を渡るとすぐ櫻の宮へ行けま

す。ちとお立寄を願ひます。宅は蘆村、葎乃、

僕の三人共至極達者です。但し僕だけは至極の

部にははいりませんけれど」とある。「川柳雜

誌」(昭39・5)の「妻を語る」に、「この就職

(大阪中央電信局)編者註)で西区の豊橋の二

階住まいから早速、北區新川崎町の御料地内へ居を移したのであつた」とある。

大正4年(一九一五年)

27歳

1月28日付、当百宛に「番傘」脱退の書簡を

出す。「番傘」7号(3月号)から、川上日車と

同人辞退。同号の「大阪より」に、「此際に臨ん

で、少々皆様を驚かせますのは路郎氏が同人を

罷めた事と、(略)路郎氏は「川柳も一人一黨が

結句樂でせう」といつて罷められました。(略)

路郎氏の出来事は二月に入つてからの事です

が、(略)とある。その後も句会には出席して

いる。「大正川柳」33号(4月15日発行)の「柳

界消息」には、「關西川柳社を退き一人一黨主數

を以て川柳研究を續けらるゝ由に候、六厘坊再

び生るゝ、日鶴首に堪えず候、氏は今度大阪市

北區上福島中二丁目十二番地(現・福島區福島

六丁目11番付近)編者註)に居を移され候」と

ある。この地で古本屋(葵書店)を開く。4月

17日(土)長女純子誕生。8月1日(日)川上

日車と共に「雪」創刊号を發行。2日(月)、藤

村青明死去。12月10日(金)夜、第一回新短歌

会(観橋ヒラシカ・バー)開催、11時20分散会。

日車・游魚等10名出席。路郎が聖三一教会で洗礼を受けた(クリスチャンネームはヨハネ)のは、クリスチャンだった葎乃(洗礼名ルツ)の影響だろう。いつ洗礼を受けたかは不明だが、「雪」3号(大正4年10月)に、「娘を抱いて聖書の行を見失ひ」があり、聖書を読んでいたことがわかる。また、「番傘」大正5年8月号に、「雑草」の題で、葎乃と路郎がキリスト教に関する句を十句ずつ発表している。聖三一教会は明治10年、川口居留地から西区京町堀に移転している。西区に移転した大正5年に洗礼を受けたか。

大正5年(一九一六年)

28歳

1月15日(土)「雪」発行所を大阪市西區江戶堀北通二丁目二十番地(常安橋南詰南人東側)に移転(現・西区土佐堀二丁目5番23号付近)。葵書店を繁華なところへ移した。「凧」25号(1月29日発行)に、路郎の年始の句(「新世帯春をゆつくり差し向ひ」)が掲載されている。「雪」7号(2月)「店頭六號記」に、「移轉後のどさくさまざまにへ喜多村緑郎氏來訪。共に紅梅亭(法善寺裏にあつた寄席―編者註)をさく」とある。

1月22日(土)第二回雪新短歌会(宗右衛門町禪六)。4月7日(金)次女御世子誕生。「雪」11号(6月)の「埃一束」(筆名ヨタリスト)に、「路郎クン何處よりか子猫を貰ひ來りてカイゼルと名づく。妻君二人の子供さへ中々面倒なるにとて顔をしかむ。まあ、え、がなあと路郎クン三人の子持の積なり。妻君、諦めてカイセルに與ふるに洋食皿を以てす。それに長女の牛乳の幾分を注ぐ。路郎クン、やれくと思ひ、まづく家庭圓滿と。妻君再び曰ク純ちゃん(長女)の茶碗からカイセルが御馳走に預からんとし、カイセルの洋食皿から純ちゃんがいやしんぼして困りますと。妻君又曰ク、御世ちゃん(二女)の胸の上にカイセルがあがつて困ります。路郎クン遂にカイセルを門下生に贈る」とある。7月23日(日)藤村青明一周忌句会(神戸)に出席。「雪」14号(9月)の「近眼鏡を懸けて(三)」に、「御世がやうやう彼女自身の力でひつくりかへるやうになりました。汚れた疊から辛じて首を擡げてみます。まだ鼠をとつたことのない子猫が始めて鼠に出逢つた時のやうに驚異な眼で手近な彼女の周圍を眺めてみます。御世の眼に映ずる世

界は何んと言つても小さなものに違ひありませんが彼の女の眼に觸れる限りの一つ一つに身も心も打ち込んである態度は非常に尊いものです。彼の女は乳さへ充分に飲めば靜に眠つてみます。あまり泣くといふことはありません。しかしながら御世が泣く時には、丸々と太つた手と足を極度にふるはせて泣きます。心から泣く其の聲は力強いものであります」とある。9月17日(日)雪同人子規忌(難波鐵眼寺)を営む。

大正6年(一九一七年)

29歳

2月「雪」19号で廃刊。この年の二、三ヶ月、葎乃は子供を二人の子守りに任せ、「婦女世界」(大阪市西區区土佐堀裏町十六番地)の婦人記者になった。12月30日(日)、三女御幸誕生。

大正7年(一九一八年)

30歳

6月8日(土)志賀半厘坊追悼句会(須磨・みの作居)に出席。「柳太刀」再刊2号(6月20日発行)に、「一體にこの頃の會は議論百出の方で作句の方は殆んど度外視して居るやうな傾向があります。みの作、路郎、青岸、紋太、艶

笑と云ふ文句屋が集つたのですから口角泡を飛ばすのも無理はありません。路郎君の辯舌には思はず酔はされました。気がついてそこへに作句にかゝりましたが時間は十二時になりました。(E生)とある。同号「柳巷樓語(えん生)」に、「大阪の川柳家中の新らし屋として『雪』を發行してゐた路郎氏一派の人々から『王團子』と云ふ川柳雜誌が出るぞうだが藝術味ある同氏の事だから吃驚するやうなハイカラな川柳雜誌が出るだろうと此頃は寄るとすぐにその評判です」とある。22日(土)川柳六厘坊

忌(西區南堀江二丁目・書林俱樂部)を営む。7月「土團子」創刊。「番傘」7月8月号に、「川柳講座」連載。7月号の「ばん傘會員(四十七人)」に、路郎・葎乃女(葎乃を改名)とも名を連ねている。7月21日(日)剣花坊氏歓迎句会(書林俱樂部)開催。「番傘」8月号の「あれから」に、「路郎氏は大阪日々柳壇の選をしてゐます」とある。9月号の「あれから」に、「葎乃女史が脚本家たらんとして南北君の門に入る。近く脱稿するものがあるさうだ」とある。8月1日(木)午後二時半頃、次女御世子満2歳で死去。10月「土團子」4号で廢刊。『株式会社桃谷

順天館創業百年記念史」(昭和60年6月・桃谷順天館)の「百年史年表」によると、この年に「川柳の岸本水府、麻生路郎、広告部に文案家として入社」とある。月給二百円。「麻生路郎物語(11)」の「葎乃書簡」に、「路郎が桃谷へ入社したのは夕風橋へ移転してからのことです」とある。桃谷順天館が營業所と研究所を市岡元町に移転したのは大正11年4月であり、葎乃の記憶違いか。

大正8年(一九一九年)

31歳

2月16日(日)、三女御幸満2歳で死去。当時の住所は、西成郡今宮町大字今宮六六三番地。6月「後の葉柳」創刊。發行所は大阪市外萩の茶屋三日路六六三番地(三女を出産して母体を持ちかねると注意され、古本屋を廢業して転居。水府は六六四番地に、半文錢も近所の町内にいた。現在の西成区天下茶屋二丁目8番10号・11号・15号が、萩の茶屋三日目11番17号辺り)。辨型4頁のものを3号出して廢刊。6月1日「楊柳」(發行者小島紺之助)創刊。「楊柳」2号(7月)から、木村半文錢と共に社友として参加。川上日車は創刊号から同人として参加し

ていた。22日(日)、紙衣小集句会(京都)に出席。「楊柳」9月号(4号)に、作品「人後(10句)」と「先輩無用論の前提」執筆。8月9日(土)長男ロンドン生まれる。「役場の都合で」「北極光(オーロラ)」と改めたり」と「番傘」9月号「あれから」にあるが、何とか認められた。ロンドンという名は、アメリカの社会学者で狼の生態を研究したジャック・ロンドンからとった。9月9日(火)、井上剣花坊歓迎句会(天王寺安井天神美川庵)に出席。14日(日)松村柳珍堂死去。「楊柳」11月号(6号)に、「鬨ふ者の爲に」執筆。この年「商業之大日本」主幹を務めるが、11月限りで退社し、外国為替の研究に没頭する。研究費を出してくれたバトロンのことについては、「一枚のはな紙」と題して昭和28年11月19日(水)JOBKから放送された。また原稿が「川柳雜誌」同年12月号にも掲載された。

大正9年(一九二〇年)

32歳

「楊柳」1月号(7号)に、「若き作家に與ふるの言葉」執筆。2月「楊柳」8号で廢刊。同号に、「柳樽に對する疑義」執筆。3月18日(木)

から大正日日新聞時事川柳欄を担当。「川柳雜

題」欄はすでに井上劍花坊が担当していた。18

日20日(土)24日(水)と、路郎・木村半文銭・

小島紺之介の作を掲載。一般投句者の句は、4

月6日(火)から掲載されるようになった。18

日は三人の句を五句ずつ十五句掲載している

が路郎の句を二句紹介しておく。(女教員デー

と言はずに観せてやり)(女教員流石に惚れた

とは言はず)。秋、大正日日新聞社経済部主任

として就職。当時の大正日日新聞の社主は出口

王仁三郎であった。10月4日(月)、大正日日新

聞に、「時事吟に就て」執筆。25日「川柳漫画 懐

手」(筆文堂)刊行。11月18日(木)、四女奈那

誕生。昭和7年5月4日「川柳の夕」の講演記

録(川柳・昭和7・6)に、「四女に奈那と云ふ

のがあるが、その名前の出た理由は「なんぞ

く生れしや」と云ふ所から来たのである。

大正九年の経済界の恐慌の時生れたからであ

る。其當時の私の句に「天井の低くさも知らず

子は生れ／がある。それほど私の家は貧乏なの

である」とある。奈那が腺病質でまた母体も

たぬといふので、奈那を和歌山の紀の川のもと

へ預ける。

大正10年(一九二一年)

1月9日(日)、全国川柳大会(大阪商品陳列

所内衆楽館)で「作家と環境」の講演をする。3

月号の「百萬石」(北都川柳社)に、「耕人とし

て」執筆。7月号の「番傘」に、斎藤松窓、相

元紋太と共に、番傘客員として紹介されてい

る。8月号の「番傘」に、「小さな城から出て」

執筆。

大正11年(一九二二年)

「みをつくし」(川柳以交吟社)1月号に、路

郎と水府が顧問として名を連ねている。「番傘」

2月号「道頓堀河畔より」に、「路郎君は原稿製

作社を起し一般より原稿の創作取次の需めに

應じてゐる」とある。2月5日(日)日日川柳

會(商中陳列所衆楽館)開催、50余名の出席。日

日主筆上總天香及び路郎の講演あり。「番傘」創

刊十周年記念号(4月1日発行)に、「十年後の

今日」執筆。6月より前に「日々間に合ふ現代

模範美的候文」「日々間に合ふ現代模範女子美

的候文」(藤谷崇文館)、6月1日に「雄辯五分

間 演説と挨拶」(藤谷崇文館)、10日に「童話

の森」(田村書店)を刊行。著述業として本式に

33歳

手を染める。「番傘」9月号「夜目遠目」に、「路

郎が鳴尾へ宿替した。さしづめ野球選手の宿で

もせねばと本人が云へば、今に番傘野球部が出

来るから番傘御指定御宿といふ看板を掛けさ

してやると蚊象がいふ」とある。9月1日(金)

兵庫県武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地ノ一

(現 西宮市鳴尾町三丁目3番15号辺り)に転

居、遅日荘と名付ける。10月25日(水)次男ア

ート誕生。この年、大阪日日新聞に、「ト昔前

の大阪見物」執筆。

34歳

大正12年(一九二三年)

2月に、川上日車・木村半文銭による「小康」

が発刊。日車に要請されるが参加せず。2月20

日「新譯イソップの話」(藤谷崇文館)、25日「こ

れは面白い 世界歴史の話」(大阪自光社出版

部)、4月から5月に「新譯ロビンソン漂流記」(藤

谷崇文館)、5月15日「新譯アラビヤナイト」、

7月15日「大正 傑作壹萬句」(藤谷崇文館)を

刊行。6月号「大正川柳」に、麻生路郎氏の書

翰」掲載。川柳以交吟社の依頼により、新柳誌

の刊行を決意する。この年に、「英語獨習 會話

の近道」(大文館書店)も刊行。

35歳

大正13年(一九二四年)

36歳

1月19日(土)川柳雜誌社創立大会(大阪市南堀江書林俱樂部、56名出席)で「鶴」の選。2月15日(金)「川柳雜誌」創刊号を發刊する。路郎主幹の下に、同人24人、十支部。18日(月)第三支部(浜寺)の金熊寺から砂川への觀梅吟行で「梅」の選。2月10日「これは面白い、日本歴史の話 上の巻・下の巻」「これは面白い 世界偉人の話」(大阪自光社出版部)、15日「受驗必携 メンタルテスト」(小島文開堂)を刊行。5月16日(金)小島六厘坊忌(大阪市南區清水町・端の坊)句会で「宿題」の選。21日(水)夕、BKから「戦線と統後の川柳」放送。6月5日「漫畫漫文 川柳ふところ手」(田村書店)刊行。5月から6月に、「草上五分間式辭と演說(大正版)」(大文館書店)刊行。6月23日(月)新和歌浦吟行。和歌山城で「石垣」の選。7月号「大大阪」に、「柳書に就て」執筆。7月31日(金)の夜行で橋本「柳子(後の柳雨)を帯同して北陸へ。翌8月1日、歓迎句会(金沢市味噌藏町貸席「遊月」)で「夏」の選。9月号「百萬石」の「はがき抄」の「山中温泉から 麻生路郎」に、「七時ごろに宿につきました一浴の後」

ールに蘇り宿の女に連れられて黒谷橋のあたりをそゝろ歩きました。丑の日だといふので大變な客です。(中略)だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと」とある。9日(土)藤村青明忌(端の坊)句会で「昼」の選。9月9日(火)松村柳珍堂忌(端の坊)で「空」の選。15日「新譯 ロビンソン漂流記譯」「新譯 アラビヤン物語」「新譯 イソップ物語」(崇文館書店)を刊行。23日(火)柳翁忌(端の坊)で「年寄」の選。10月5日(日)大阪日日川柳大会(六甲苦樂園大觀樓)を開催、司会を務める。10月、松郎等が「灰」創刊。12月号「川柳雜誌」については、誌名を省いて記述する。以下同じ)から吉川啞人等、同人辭退。

大正14年(一九二五年)

37歳

1月23日(金)創立一周年記念川柳大会(端の坊)で「父親」の選。1月、塚崎松郎・井上刀三・林田馬行・平井光太樓が「灰」を廢刊して、2月から同人に参加。3月1日「これは面白い 私のからだ」(自光社出版部)刊行。4月4日(土)五女リリ誕生(梨里は雅号)。8月9日(日)夜、納涼川柳会(道頓堀川納涼船上)で

「花火」の選。9月15日(火)井上劍花坊、大連の帰途、路郎宅に宿泊。16日は六甲苦樂園大觀樓で句会。17日(木)は天王寺廣田家で歓迎句会。劍花坊の來阪を機会に吉川啞人が同人に復帰。10月1日から、過労のため二週間寝込む。11月、三好革郎が「映画と探偵」を創刊、川柳欄を松郎と担当。この年、「世間」に「川柳柴ちがひ」執筆。

大正15・昭和元年(一九二六年)

38歳

1月24日(日)新春川柳大会で「恩人」の選。2月7日(日)、第一回遅日莊柳談会を開く。3月7日(日)女人高野吟行。7月11日(日)、第五回柳談会(遅日莊)で「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」を詠む。8月18日(水)から21日(土)まで、田辺市柳陰社(堀楓林)に招かれ南紀川柳行脚。11月17日(水)、名古屋の森田二二が來社。24日(水)本社近畿支部連合句会(日本橋俱樂部、70名出席)開催、路郎は風邪で欠席。

昭和2年(一九二七年)

39歳

1月号に、岡本一平が「漫畫漫文 藝術的の

採み方」、正岡容が「川柳家の家の字に就いて」

を寄稿。「週刊朝日」新年特別号で第一回懸賞文

藝大募集「光」の選。短歌の選者は若山牧水、俳

句は松瀬青々。賞金は第一席三〇円、第二席二

〇円、第三席一〇円。1月16日(日)、菅公千二

十五年祭を記念した川柳献句祭(大阪市北区天

満宮)で、「梅」の選と「川柳家の眼」の講演。

2月18日(金)、有恒俱樂部(野村ビル7階)で、

「川柳に就いて」の講演。2月に四人の子が流感

に罹る。3月1日(火) ロンドン(8歳)がジ

フテリアで亡くなる。葬儀委員長は桃谷順天館

広告部長長野晴濱。「週刊朝日」春季特別号で

「戀」の選を発表。4月9日(土) 悪性の腸チフ

スで阪大病院に入院。5月8日(日) 退院。「昭

和川柳」創刊號(5・5発行)に、随筆「二萬

圓」を寄稿。6月8日(水) 鳴尾から大阪市西

成區千本通五丁目七番地(現・西成區千本中一

丁目16番21号)28号か、17番29号(36号辺り)

に転居。6月号「退院と轉居」に、「▲憂鬱の家

はロンドンの死によつて一層陰惨な空気が漲

ぎつた。誰も彼も蒼い顔をしてゐるやうに思へ

てならない。熱が一寸出ても脅やかされる。そ

れがためにほんとの病氣を誘ひ出してゐるや

うにさへ思へた。私が退院してからも容易にさ

うした冷めたい感じが去らない。それがために

昨年来、ぼつ／＼頭を擡げてゐた宿替熱が急に

高くなつた」とある。「週刊朝日」夏季特別号で

「夏休み」の選。7月10日(日) 二柳子・萬よし・

かほると松江支部訪問。歓迎川柳大会で講演と

「花道」の選。8月号から同人制を廢し社友制を

採り、特別社友(旧同人) 32名、十八支部。同

号の「編輯室から」に、「新組織發表と共に、新

に入社した人々と退社した人々」とを左に掲げ

る。尤も退社した人々が必ずしも新組織に不平

をいだいて出た譯ではなく、他の止むを得ざる

理由によつて、退社されたのであるから誤解の

ないように特に一言しておく。(略) 退社した

人々では佐々木默闇君、塚崎松郎君・石賀(林

田馬行は事情により、この頃石賀を名乗つてい

た【編者註】馬行君・黒木莢豆君、井上刀三君

の五君である。松郎、馬行の兩君は従來本社の

編輯部にあつて、本誌のため大いに尽されたの

で、その勞を多とし退社送別會を開催(句報

參照)したが、生憎小生の勤務先に不幸があつ

た、め萬よし君に代つて司會をやつて貰つた。

幸ひに兩君ともその意を諒として呉れたこと

をよるこんである」とある。8月9日(火) 西
垣松雨死去。

昭和3年(一九二八年) 40歳

「週刊朝日」新年特別号で、「松の内」の選。1

月15日「世界の昔ばなし」(國民出版社) 刊行。

2月3日(金) 客員今井卯木死去。20日「卓上

五分間式辭と演說(昭和版) (大文館書店) 刊

行。4月1日「川柳漫畫 累卵の遊び」(不朽洞

刊行。15日(日) 金沢川柳大会(金沢商工会議

所で、「作家の態度其他」の講演。6月1日「雄

辯自在 五分間演說と挨拶」(大阪中央研究會)

刊行。7月刊行の『現代漫畫大觀第5編滑稽文

學漫畫』(中央美術社)の川柳漫畫の選句をし

た。全290頁のうち川柳漫畫は175頁。画

は清水對岳坊・宮尾しげを。8月号編輯後記

に、「路郎主幹は晩春以來神經衰弱で弱つて居

られます」とある。8月16日(木) 夜、羽越線

に乗り北海道周遊の旅へ、函館の亀井花童子宅

に滞在。20日渡島川柳社歓迎會。小樽では柳

吟社と交流。26日函館を出発し、青森で喜田飯

山、東京で岩崎柳路に会い、28日(火) 帰阪。9

月6日(木) 高野山吟行で、「高野雜觀」の選。

11月5日御大典奉祝句会(日本橋俱樂部)で、「神馬」の選。「週刊朝日」12月8日に、「新妻」の選を発表。

昭和4年(一九二九年)

41歳

「番傘」十八卷一号(1月1日発行)の「あれから」に、「路郎氏は今度桃谷順天館を引かれ」とある。昭和3年末、雑誌印刷費を捻出するため「広告賣文社・大阪市東區農人橋二丁目七番地(現・中央区農人橋二丁目一番31号辺り)」。昭和4年・大阪文案社と改称。昭和5年6月号の裏表紙には、大阪市西成區千本通五の七とある)を興す。1月号に、「舊冬、賣文社を興して」の前書で(風少しあれど 船出の四十)を発表している。「週刊朝日」新年特別号で、「新妻」の選。「週刊朝日」1月6日13日20日発行に、「炬燵」の選を発表。この月から昭和5年11月まで、ほぼ毎月選をしている。2月11日(月)松山支部発会記念川柳大会(道後公会堂)で一題選句の後、「子規と川柳」の講演。「ワレ柳壇の子規たらん」という演題にしようと思つたが、蔑乃に止められる。3月3日(日)金熊寺・砂川吟行。6日(水)朝、一步(愛称ポー、同人

に鳥山一步がいたので、雅号をPOEとした)誕生。4月「週刊朝日」春季特別号に、「川柳漫談 これも人生」執筆。5月1日(水)夜、大阪夕刊主催の東西川柳家漫談大会(丸萬ビル五階)が開かれ、路郎・南北・水府・三太郎・紋太・雀郎・鮎ン坊・迷亭・溪花坊等が出席。6月5日(水)聖駕奉迎句会(日本橋俱樂部)開催。8月1日「川柳漫談」(弘文社)刊行。4日(日)洲本吟行。9月「週刊朝日」秋季特別号に、「川柳漫談」執筆。11月24日(日)宇喜多秀穂の寿像除幕式(松山)に出席。

昭和5年(一九三〇年)

42歳

「週刊朝日」新年特別号に、「古川柳新春風景」執筆。1月5日(日)本社新春句会(日本橋俱樂部)で前田雀郎が「素」を講演。16日(木)矢田冷刀死去。2月から橋本二柳子、緑雨と改号。3月から須崎豆秋(句集「ふるさと」初版の表紙が「崎」の字で、これが戸籍の字。ただし、引用文では「崎」の字のままにする)社友となり、天王寺支部幹事となる。4月から福田山雨楼、同人参加。4月20日(日)西原柳雨死去。25日(金)柳雨追悼会(東京四谷寺町の西念寺)に出

席。5月4日(日)日本ラインへ旅行。15日(火)大阪を出発し、日本海側から函館へ川柳行脚。18日(金)第二回海峽親善川柳大会(函館)に出席。23日(水)函館の柳友と別れ、24日(木)白河で下車、大谷五花村を訪ねる。25日(金)東京で雀郎と会う。30日(水)東京を發ち、31日(木)帰阪。6月、女性柳人だけの「川柳光燿會」発足。7月6日(日)宇治吟行。7月「週刊朝日」夏季特別号に、「新案避書法」執筆。8月7日(木)午後六時半から納涼川柳動物句会(天王寺動物園)開催。10日(日)深日・加太吟行。10月5日(日)夜、河盛彦三郎(蘆村)天下茶屋の某家で卒倒。11月14日(金)午前零時、河盛彦三郎、亡妻の三十三回忌の日に64歳で死去。仏名・釈諦順。「週刊朝日」11月30日に、「疑ひ」の選を発表。この回が、「週刊朝日」の最後の選。次回から井上劍花坊に交代する。12月16日(火)川上三太郎來訪、徹骨痛飲。

昭和6年(一九三二年)

43歳

2月13日(金)客員小出槍重、45歳で死去。裸婦かたづけであるじ甲ふ(槍重の計に光るガラス繪)置きざりの妻と子にはや一七日の甲

吟を詠む。3月に入院、4月中入院。6月20日『漫画浮世さまざま 川柳のぞき』湯川弘文社刊行。「上方」7月号(7号)に、「川柳西瓜は赤し―天神祭裏面観―」執筆。7月25日(土)阪大川柳会発足。8月3日(月)朝日新聞「天声人語」に、川柳の句が全段で紹介される。8日(土)動物句会(天王寺動物園)開催。10月から石曾根根郎社友。10月4日(日)京都川柳社創立20周年記念大会に出席。11月24日『産業界の先驅 宇喜多翁』刊行。この年、堺市立公民病院事務長の職につく。

昭和7年(一九三二年)

44歳

葭乃、本社新春句会で初講演「情熱の句を語る」。1月16日(土)神戸支部新年句会(八宮神社)で講演「爆弾を抱えて来たる」。梶元紋太「川柳雜誌」客員でなくなる。2月18日(木)、大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地(現・西成區玉出西一丁目6番4号か、7番5号辺り)へ転居。3月28日(月)純喫茶キング開店(玉出本通三丁目)。4月3日(日)関東川柳団歓迎句会(芳雲寺)で挨拶。17日(日)金沢の産業と観光の博覧会記念川柳大会出席。5月4日(水)川

雜創刊百号「川柳の夕」(朝日会館)開催。当時の句会費が三〇銭のところ一円の入場料をとつたが、聴衆一千余人、三円五〇銭の黒字。15分遅れの午後7時15分開会。当日のプログラムは、A川柳を語る「女性は躍る」三太郎、「川柳にあらはれたる家庭」水府、「人間苦の藝術」路郎。B長唄「新曲浦島」。Cことも舞踊「兎のダンス」「繪日傘」「エジプト」「水兵さん」山根舞踊研究所。D「喜劇 戀の畏あの眼だらうか眼だらうか」。午後10時10分開会。7日(土)午後9時半の急行に乗り、8日(日)島根県今市蕨川支部(伊藤緑之介幹事)創立五周年記念川柳大会に出席。5月20日(金)創刊百号記念句会(ちとせ俱樂部)開催。6月号「編輯の窓」に、「五月二十四日の夜は心交社主催の川柳のアーベントに招かれて川柳を語つた。私の話の前後に、山根のことも舞踊を入れてもらつた。こともとつきあつてみると肩が張らなくてもいゝ。私は十数年前の少國民新聞時代に歸つたやうな氣持がして愉快だつた」とある。路郎は、少國民新聞(現・毎日小学生新聞)の仕事をしていた時期もあることがわかる。6月4日(土)百号記念京都支部加茂川句会(昭和図書館)に

出席。「上方」7月号(19号)に、「夏の夜の大阪風景」執筆。「きやり」7月号の「東西南北」に、「麻生路郎君 堺市公民病院書記長を辭す」とある。7月6日(水)浅井五葉死去。11日(月)女性だけの川柳光輝会創立句会(米本邸)に出席。8月15日「川柳漫書行進曲」(湯川弘文社)刊行。23日(火)から三日間、大阪朝日新聞のホームセクション欄に、「川柳に見る近代女性」が連載される。23日24日の選句と評釈は水府、25日は路郎。9月上旬、臨時議會直後から青田勝晴代議士(立憲政友会)の秘書を、昭和8年の7月頃まで務める。10月5日『成功美談 未表の大統領』(國民出版社)刊行。11月号「編輯の窓」に、「關西日報の關西柳壇の選者を務める」とある。12月27日(水)伊藤愚陀死去。

昭和8年(一九三三年)

45歳

「文藝春秋」新年特別号「古今川柳百名吟」に、「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」が選ばれるが、「俺に似て」「子を育て」と誤植される。選者は角虎坊・始ン坊・劍花坊・雀郎。1月15日(日)創刊十周年祝賀川柳大会(道頓堀俱樂部)開催。2月16日(木)小阪小学校で、小学生か

ら高校生並びに保護者に対して川柳講演をする。5月5日(金)六厘坊50回忌(道頓堀俱樂部)記念句会。7月12日(水)『平文錢句集』刊行記念句会(卓球会館)に出席し、「箇人句集と平文錢」の講演をする。8月「喫茶新聞」毎月一回発行。大阪府料理飲食業組合連合会役員や玉出同業組合の副組合長をしている関係で洋食飲食店の繁栄機関として発行された。後、玉出組合の組合長に推薦される。9月10日(日)玉造支部(友帆)創立句会に出席。9月26日(火)伊東愚陀・住田乱耽句集「潮騒」刊行記念句会(端の坊)。10月15日(日)十周年記念東京句会を浅草並木俱樂部(前田雀郎が借りてくれた)で開催、「大空」の選をする(一五〇余名出席)。11月3日(金)植物句会(天王寺公園)開催。12月17日(日)、大阪朝日新聞日曜版の半頁が、路郎の「川柳年忘れ」で埋められる。

昭和9年(一九三四年)

46歳

1月10日発行『昭和川柳百人一句』(発行者・宮尾しげを)に、「君見たまへ蒔穰草が伸びてゐる」(戀の畏あゝの眼だらうか眼だらうか) (天井の低くさも知らず子はうまれ) 二階を降りて

どこへ行く身ぞ」(草莽の臣かなしみの炭をつぐ(大正天皇を悼み奉る)) (子を死なし學校に子の多いこと(學校の横に住みて)) (お元日坐るところへ坐らされ) (ひとりゐればひとりは限りなくさびし) (夕櫻とんぼがへりがしてみ) (三人が酔へば三人らしくなり) が掲載される。1月14日(金)大鉄支部(九天)創立句会に出席。20日(土)午前4時、四男洋誕生。紀の川に里子に出す。1月9日(火)大阪朝日新聞「新聞街二丁目」、20日(土)大阪毎日新聞「家庭と学藝欄」の随筆「雪」にも、出産を待ち受ける路郎の様子がうかがえる。2月11日(日)BK第二(大阪中央放送局)から放送された建国祭に因んだ「二千六百年前の大阪」座談會に出席。3月9日(金)午前9時46分大阪発で、鮮満地方へ川柳行脚。29日(木)帰阪。川雅同人岩崎柳路が一切の面倒を見た。3月20日『漫画と川柳』(富永興文堂)刊行。4月3日(火)きやり創立十五周年記念大会(浅草寺伝法院)で、席題「佳き日」の選。14日(土)夜校と動物句会(天王寺動物園)開催。22日(日)四国支部連合会主催四国川柳大会(今治)に出席。5月号「きやり」十五周年記念号に、「川柳作家十五

戒」執筆。5月6日(日)「京」百号記念大会(京都木屋町)に出席。6月2日(土)大阪毎日新聞「家庭と学藝欄」に、「うちは」執筆。24日(日)午後7時半、大阪中央放送局第二放送から川柳の披露と合評を岸本水府と放送。路郎は「人情味の句に就て」の話と「辞職」の選、披露は山雨楼。水府は「凡ての人の文藝」川柳の話と「口紅」の選、披露は文久。その後、路郎をリーダーに「都會風景」の句についての合評、水府をリーダーに「対照批評(五題)」が交換され、9時に終了。7月に、川柳二十日会(路郎宅で柳談等を聞く会)生まれる。8月11日(土)大阪時事新報「一人一話」欄に、「球界回顧」執筆。18日(土)20日(月)の同紙家庭欄へ、モタン・實話怪談「圖書館の幽霊」「高師の演の幽霊」執筆。9月6日(金)大阪毎日新聞学芸欄に、「秋と酒」執筆。11日(水)井上劍花坊死去、13日(金)告別式(鎌倉建長寺)に参列。「川柳人」11月号(劍花坊追悼号)に一頁を使って、次の追悼文を寄せる。「悼/明治川柳中興の祖井上劍花坊氏の急逝は/我が柳壇の一大損失たるや言を俟たず/茲に謹みて悼意を表す」。10月5日(金)関西風水害慰問句会(道頓堀俱樂部)開

催。12月26日(木)BKから一夕一話「川柳滿洲旅行」放送。

昭和10年(一九三五年)

47歳

2月15日(金)大毎「ちぐさく問答」に「女秀頼中村芳子」執筆。「土方」3月号(51号)に「變遷を思ひ出すまゝ」執筆。3月19日(火)午後11時、四男洋、満1歳で死去。3月、大阪時事新報広告副部長として入社(6月号に「奮馬に鞭ち子を学校へやる」を発表。4月、三男一步、学童に上がる。4月25日(木)26日(金)大阪朝日新聞ホームセクション欄に、「川柳に見る親(ころ)」執筆。29日(月)観心寺吟行。5月、木曜会(毎週木曜日本社事務所での談話会)生まれる。6月の本社句会より路郎カップを授与。8月1日「阪大川柳會句集 大川端」(不朽河)刊行。15日(木)近江八幡に川上日車を訪ねる。9月22日(日)午後7時半より、BKから全国中継で「川柳の夕」放送。路郎は「川柳の笑ひと涙」の講演。12月号「柳界展望」に「古本と古本屋」十、十一月號に、「私の古本屋時代」を執筆」とある。「講談俱樂部」11月号に、「女店員」「麦酒」の選を発表。同月中旬、病臥。大

阪時事新報を退社。12月からは自由出勤の嘉寶商事一社のみ勤務。12月7日(土)、「川柳雜誌」京阪神支部連合忘年川柳大会(日本橋俱樂部)開催、「歳晩の味」の講演。一八〇名出席。

昭和11年(一九三六年)

48歳

「講談俱樂部」2月号に、「大臣」「火鉢」の選を発表。「三味線草」2月号の「川柳のころ」に、「路郎は代議士に成つて川柳は正運動をやるのだといふ。汀柳を選挙長にして次回に出るか」とある。2月号「柳界展望」によると、薬店講座(銀座西三菊正宗ビル嘉寶商事東京出張所内薬店講座)の選、流線型小型新聞「明るい家庭」に、「川柳小解ビルの机で」を連載(発行所は大阪市西區阿波堀通一ノ一〇嘉寶ビル内家庭生活研究会)したとある。3月、有保証の新聞紙法の適用のもとに掲載内容の拡大化を図る。「講談俱樂部」5月号に、「孝行」「三階」の選を発表。5月号「柳界展望」に、「麻生路郎師(本社主幹)は嘉寶商事株式会社を辭され専心川柳雜誌に全力を致される事となつた」とある。6月6日(土)ゼネラルモーターズで自動車組立ての見学。14日(日)天虎飛行場から琵琶湖上を飛ぶ。6月、橋本緑雨「街の雑音」発刊。7月、川柳雜誌社を路郎の個人経営とする。同月、良乃が心臓で仆れて三ヶ月の病臥。川柳人協会設立。8月号に「川柳職業人宣言」掲載。薬店講座に「街のスナツプ」を、8月2日(日)

の大坂朝日新聞コードモのページに「川柳の作り方」を執筆。19日(水)午後9時、BKから「雑吟」「支関」の選評を放送。「土方」9月号に、「ちんべい」執筆。9月17日(木)上京し、川上三太郎宅を根城に川柳人協会に關して東京柳人と懇談。21日(月)松本の石曾根民郎に、土地の人との座談会を開いてもらった。(遠く来て信濃に山のない日なり)は、このときの作。10月17日(土)簸川支部十周年記念大会に出席。「三味線草」11月号「諸家消息」に、「粹十一月號に「僕の戀愛觀」を執筆」とある。11月12日(木)岡田三面子死去。「講談俱樂部」12月号に、「夕刊」「涙」の選を発表。12月30日『式辭と演説挨拶の仕方』(國民書院)刊行。

昭和12年(一九三七年)

49歳

1月号「川・雜・案・内」に、路郎の軸箱入二

十円、額二十円、小物五円、短冊三円で頒布する旨、広告を出している。1月9日(土)本社新年句会を大阪朝日新聞社三階大広間で開催。

2月号「柳界展望」に、「新生路郎氏は誠文堂新光社発行の『廣告界』の文案研究特輯ページ』文案家は楽しいやないの執筆をされた」とある。2月10日(水)田中五呂八死去。3月14日(日)大阪毎日新聞「議會のそと明朗質問戦」に於て、「時計の針は何故左へ廻らぬか」の質問に、「コツ／＼働く時計の針は左傾しないからだ」、「尼

さんは何故丸坊主か」の質問に、「丸坊主だと後ろ髪を引かれる心配がない」と答えた。さまざまな質問に、吉屋信子・南部忠平・新村出・横山エンタツ等が真面目にあるいはユーモラスに答えたもの。「講談俱樂部」4月号に、「教師」「ルンペン」の選を発表。4月号から住田乱耽不

朽洞退会。4月18日(日)第四次全国川柳人交歓大会(名古屋)に山雨楼と出席、関西側を代表して挨拶。25日(日)玉手山汐の宮雨中吟行。6月号に、藤村並純が「川柳壇無能論」を執筆。6月20日(月)名古屋支部(吉田水車)創立記念句会(長田寺書院)に出席。6月になって、昨年の夏から体調を崩していた葎乃が、市電に乗

るだけの体力を回復した。7月7日(水)本社句会に、安川久流美来阪。「講談俱樂部」8月号に、「軍人」「涙」の選を発表。9月、キング喫茶店廃業。10月16日(土)有恒川柳会(有恒会は大阪高商の同窓会の名)生まれる。25日(月)事務所(西區土佐堀筑前橋電停前、昭和ビル二〇一号室)開設。11月、松坂屋松坂俱樂部の趣味道場で、月二回「川柳講座」が開かれること

になった。月謝は一ヶ月金一元。1回目は20日(土)に開催。この講座から、戸倉普天・中島生々庵・武部香林・戸田古方・米本貴志子・川村好郎等が出る。「講談俱樂部」12月号に、「団結」の選を発表。12月28日(火)大阪文藝協会の忘年会に出席後、市立今宮保護所で浮浪者が作句した「タクシー」の選をする。

昭和13年(一九三八年)

50歳

1月11日(火)有恒川柳会(有恒俱樂部)の例会開催。2月19日(土)應治郎追慕川柳会「誓得寺」開催。来賓に、中村芳子・林敏夫・高田天野。3月23日(水)電気科学館見学句会(四ツ橋電気科学館五階)開催。「講談俱樂部」4月号に、「二日酔」「黒板」の選を発表。4月、五

女リリが大坂タイピスト女学校に入学。徐州陥落で提灯行列が行われた翌日の5月21日(土)BKから「戦線と銃後の川柳」放送。7月号「柳界展望」に、「だいき」六月號へ、「ほととぎすを川柳に聴く」を執筆された。大阪日日新聞では同紙の三面へ「川柳雜誌」掲載句を川柳漫画カットにし、連載発表して好評である」とある。

6月15日「全国叢書 川柳の巻」(岡本ノート社)発行。18日(水)薬石新報社創立五十周年記念川柳大会(東區今橋神田ビル友和俱樂部)で、「本復」の選と講演。7月24日(日)グライダー見学川柳会(眉津陸軍飛行場)開催。「講談俱樂部」8月号に、「貯金」の選を発表。9月16日(金)北支蒙疆の旅の壮行会が、南区豊屋町カナメ食堂で催される。18日(日)神戸第一突堤から黒竜丸で北支蒙疆の旅に出る。10月21日(金)帰阪。大阪時事新報の社長の好意で新聞の特派員として派遣され、費用は川籍同人岩崎柳路が一切の面倒を見た。10月15日「新川柳評釋」(不朽洞)刊行。11月23日(水)「北支蒙疆講演會」(尼崎難波小学校)で、三時間余りに亘る講演。「講談俱樂部」12月号に、「トラック」「勤勞奉仕」の選を発表。12月3日(土)川柳人協会

の選を発表。4月、五

主催・朝日新聞社会事業団後援の第一回同情週間師走川柳大会(大阪朝日新聞社三階大広間)開催。14日(水)川柳人協会から、阪井久良伎に古稀記念として金一曲屏風を贈呈。

昭和14年(一九三九年)

51歳

3月25日(土)西日本鉄道川柳大会(尾道駅前松風館)に出席、講演「旅と川柳」と「駅前」の選。四十年ぶりに父母の眠る福善寺(尾道市)に墓参する。4月号後記に、「雑音の多い玉出の宅は私の執筆をなやまし、愚息のヴァイオリンの勉強をさまたげることが尠なくなつた。それで萬障を排して南海本線の湊遊園地に居を移すことにした。従つて簡人宛の郵書に限り左記へお願いしたい。堺市出島町三五一番地」とある。4月16日(日)松坂俱樂部三周年記念川柳大会(日本橋松坂屋)で、「商品券」の選。「三味線草」7月号「事變二周年記念日」に、「▼早朝、北支蒙彊行脚記念アルバムを出して、支那事變發端の地、一文字山、蘆溝橋の寫眞を眺め、聖戦二ヶ年間の犠牲者を偲び、黙祷を捧げた。▼酒なしデー、白粉なしデー、一菜主義等々、國民擧つて大自肅の七月七日だ。僕も自

肅と柳務にいそしんで暮した。ひる飯をカツ飛ばす忙しさで走り廻る。夜の十時すぎに漸く夕食、さすがにビールが欲しかつたが、口のハタをひねつて置いた。終」を寄稿。7月15日(土)大阪朝日新聞に時事吟(ジヨンブルよ日本刀は錆びてゐず)〔排英を九段の神もみそなはせ〕等を発表。8月16日(水)渡邊暁童、營業担当として入社。12月2日(土)第二回同情週間師走川柳大会開催。

昭和15年(一九四〇年)

52歳

1月号から表紙に、「芸術は国境を越えて飛ぶ」という意味のエスペラント語を入れる。建国二百六十年記念に、前線將兵の活字飢饉の慰問品として「川柳雜誌」送付を募る。5月8日(水)ワカナ・一郎とその映画を語る会(新興キネマ試写室)開催。6月6日(木)広島支部句会に出席。6月頃、堺市出島海岸通二丁目一八二番地(現・堺市堺区出島海岸通)丁目8番辺りへ転居(6月号の不朽洞の住所は、堺市出島町三五一だが、7月号の化粧新聞柳壇の投句先は海岸通になっている)。8月11日(日)裸の句会(堺みなと海岸)開催。9月号「柳界展

望に、「事務生活」八月號に「川柳の味ひ方五講」を執筆」とある。9月15日(日)皇紀二六〇〇年奉祝・創刊二〇〇号記念「川柳とは?の会」(三越八階ホール)で、「川柳の形態と用語」を講演。11月12日(火)堺市婦人団体の「戦時婦人生活確立講演會」で講演。

昭和16年(一九四一年)

53歳

5月号「川協のページ」に、「阪急産業報國會機關紙『阪急』の阪急柳壇の選を擔當される事となつた」とある。6月7日(土)下関・九州・四国巡遊の旅へ。12日(木)大洲支部(棕影)創立句会に出席。25日(水)日本文化協会第一回総会(早稲田大学大隈會館)に出席。9月4日(木)郷土講話「大阪と川柳」をBKから放送。10月6日(月)姫路陸軍病院を川柳慰問。30日(木)、堺市が発行した慰問誌「銃後の堺」に、「川柳に詠まれた行長」執筆。12月号「川協のページ」に、「東亞川柳」十一月号誌上に、「滿洲へ渡つた時の想出」を執筆された」とある。12月3日(水)長女純子が結婚した。

昭和17年(一九四二年)

54歳

1月号「柳界展望」に、「週刊朝日」に岸本水府氏と交替で、自作の時事川柳とその評釋を擔当されることになった」とある。3月9日(月)小林燈舎死去。14日(土)西日本鐵道人川柳大会(広島鉄道俱樂部)で講演。15日(日)津山支部創立句会に出席。4月、三男一歩、商業学校に入学する。4月3日(金)和歌山陸軍病院を慰問、講演。6月15日(月)発行の慰問冊子「戦ふ堺」に、自作の時事川柳とその解説を執筆。18日(木)21日(日)の4日間にわたり大阪新聞に、「戦争と川柳」を執筆。1月以降「週刊朝日」に連載された時事川柳と解説が、6月28日(日)発行号で打ち切られる。7月1日(水)モラエス同心会主催のモラエス忌に出席(モラエスはポルトガルの外交官。昭和4年7月1日、徳島で死去)。翌2日(木)の中外日報主催のモラエス座談会にも出席。8月11日(火)津田麗月冠(京城)が不朽洞を訪問、夕刻から歌舞伎座の五郎劇へ案内する。11月4日(水)府下貝塚町の千石荘病院で川柳講演。12月4日(金)大東亜戦争一周年記念川柳大会(御津八幡宮)開催。

昭和18年(一九四三年)

55歳

2月15日(月)発行の慰問冊子「伸び行く堺」へ「聖戦へ子は萬歳のくせがつき」の句を揮毫。30日「陣中川柳(興亞書局)刊行。3月7日(日)西日本鐵道人川柳大会(山口市湯田町鉄道修養道場)に出席し、翌8日(月)は出雲の緑之助を訪問。松江市で合同小集句会を開き、9日(火)帰阪。4月11日(日)創立二十周年記念南方動物川柳会(天王寺動物園)開催。5月、堺市から大阪市住吉區万代西五丁目二五番地(現・住吉區万代五丁目11番15号)に転居。「麻生路郎物語(2)」に、「葎乃と結婚以来、転宅転居の連続で、この万代の家にとどりついた時が実に十四回目の勘定になる」とある。6月号「廻転椅子」に、「私は四月下旬に引越を開始し五月末に漸く完了した。『あなたとこの宿替は大陸的だんな』と云はれたと娘がいふ。いかにも漫々的なにあきれたといふ口吻である。大阪から湊の海岸へ引越す時には四月初旬から八月下旬までかかったが、湊から大阪へ舞ひ戻るのは、そうはからなかつた」とある。5月14日(金)日東紡績大阪営業所で、17日(月)蝶理織物株式会社で、20日(木)貝塚の千石荘で、

川柳の講演。6月5日(土)山本元帥追悼句会(御津八幡宮)開催。13日(日)喰べられる雑草の吟行(南海高野線沿線郊外)開催。8月15日(日)神戸トキワ合板株式会社の慰安会に招かれ、川柳の講演。9月15日(水)「普天隨筆」刊行記念会(長堀の大市)に出席。11月9日(火)日本楽器産業報告会の招きにより浜松で講演、

11日(木)は富士高原児童養護道場へ、12日(金)は甲府で「川柳常会」主幹篠原春雨翁と歓談。13日(土)帰阪。12月号(239号)が「雜誌奉還」終刊号となる。

昭和19年(一九四四年)

56歳

6月30日(金)西田当百死去。9月15日(金)有恒俱樂部立川の紹介で、三重県伊賀上野市から四キロへだてた阿山郡府中村一の宮三三七の妙慶寺へ疎開。疎開後もガリ版刷を刊行し、職域句会を指導するなどして川柳活動はやめなかつた。

昭和20年(一九四五年)

57歳

6月5日(火)長崎柳秀死去。8月4日(土)

高橋かほる死去。終戦後、一の宮の生活の後半頃から、路郎は大阪の万代の家に戻り、葎方は伊賀上野市桑町に移る。

昭和21年（一九四六年）

58歳

1月27日（日）、時局批判川柳大会（天王寺）で、時局観の講演と「選挙」の選をする。第22回衆議院議員選挙（4月10日投票）大阪一区（定数7）に無所属で立候補するが、得票662票で候補者81名中、下から9番目で落選。戦後朝日ビルの三階に設置された検閲室に派遣された検閲官がハワイの門下生である前山北海・古川麗花麗だった。二人の斡旋で、8月1日（木）「川柳雑誌」を再刊。「川柳往來」（6・1発行）の「たより」に、「川柳雑誌社は近く改題『川柳塔』を刊行再出發する」とあり、誌名変更を考えていたことがわかる。8月12日（月）17日（土）、四天王寺境内で催された盆踊りに、路郎や水府が川柳絵行燈の句を寄せる。路郎の句は、初盆へもうなげくまいなげくまい（今日からは自由の鐘のなるところ）。8月25日（日）川柳葡萄句会（奈良平群村・正光寺）開催。11月号の「社のサービス部からのお知らせ」に、

「路郎主幹の揮毫作品左の小規によつて同好の士にお領ちいたします。短冊一葉五〇圓、同（新）四季）五葉二〇〇圓、色紙一葉七〇圓、同（新）四季）五葉三八〇圓、軸・額・小物（表装なし）二〇〇圓」とある。10月20日（日）、すげ笠川柳社全国川柳大会（愛知県大山町）に出席。11月10日（日）出雲支部二十周年記念川柳大会に出席。11日（月）松江支部の人々と語らう。12日（火）は鳥取で大西八歩・中島鉄洲と鼎談。13日（水）午後11時帰阪。14日（木）河村蘆村十七回忌の法要を一心寺で修す。12月4日（水）葎乃が仮寓していた上野に水府が来訪、夫妻で芭蕉の遺蹟養虫庵へ案内する。大阪日日新聞社から日日サロン（週刊娯楽新聞。12月22日創刊、定価一円五〇銭）が発刊され、その柳壇を担当することになった。

昭和22年（一九四七年）

59歳

2月10日（月）路郎が水府・生々庵と共に、なわ文芸賞受賞。4月23日（水）蟹の目川柳社一周年記念大会（金沢）に出席。29日（火）金沢放送局から「手をさしのべる川柳」放送。30日（水）の夜行で帰阪。再刊以来月間を守って

きたが、この年は6月によく通巻245号を発刊。「P★P」に「選刊申譯なし。主たる原因は電力飢饉で印刷機の榮養失調であるが、かて、加えて紙キンのインフレ値、雑誌は賣れても半分欠損非營利的事業だけに経営上容易ならぬもの、あることを察知していた。き今後の御支援が願ひたい」とある。6月1日（日）路郎主幹になわ文芸賞受賞記念川柳大会（住吉・生根神社）開催。7月13日（日）浪の音川柳社一周年記念川柳大会（山口県久賀町）で講演。8月9日（土）具塚市で、大阪府主催文化夏季大学講師として「川柳と生活」の講演。「アサヒクラブ」9月24日号「川柳家告知板」に、周魚・水府・三太郎・路郎・紋太・五花村・〇丸・雀郎の八名が紹介される。10月11日（土）大阪市交通局川柳結成大会で、「川柳と生活表現」の講演。11月16日（日）、伊賀上野に疎開していた葎乃が、上田翠光の斡旋で、大阪に近い奈良県宇陀郡三本松村頓光寺に移る。（名も知らぬ山の起伏をうれしがり）は、この時の作。12月2日（火）すげ笠社主催全国川柳大会（名古屋・十洲楼）に出席。3日（水）新東海新聞主催の座談会に出席。12月号「六號室」に、「歸り

の切符の列にある間に、大阪へ来るといふ〇丸、三太郎の兩君にはぐれてしまった。辛じて最後の電車をつかまえたが、中川驛でヤミ狩があつて手間取られ、大阪へついても上町線のレシラクがない。ま、よと伊賀線に乘換えて上野市の老妻の疎開先へ出向いたが、葎乃は大阪からまだ戻つてゐない。そのま、布團の中へぐり込んだ。翌四日午後一時に辰子女史の宅で晝食の御厄介になつた。この間二十五時間何一つ口にしなかつた。三食飛んでも更に元氣は失せない。これでなくては『川柳雜誌』を背負つてはいけないのだと思ふと同時に、非常時型の胃袋に感謝してゐる」とある。昭和33年1・2月号「川柳不朽洞會から」に、「十二月十七日大阪日日新聞社主催の『歳末世相放談』を岸本水府氏と對談せられた。記事は二十一日の夕刊に掲載せられた」とある。12月29日(月)BKから「歳末のユーモア」放送。

昭和23年(一九四八年)

60歳

1月28日(水)大阪通信病院従業員組合文化部で、「裸になれ」の講演。2月11日(水)月刊趣味社創立一周年記念の川柳會(京都)に招か

れ、祝辞と兼題「水雨」の選。4月24日(土)民主日本川柳大会(岡山)に出席。26日(月)大阪府知事に招かれ英国詩人プランデンの講演會に、翌日の同氏を囲む文芸人懇談會へも出席。5月16日(日)日立造船文化祭川柳大会(大阪)に出席。「川柳しなの」6月号に、「作家と熱と力」執筆。6月10日「新川柳講座」(水武書房)刊行。7月11日(日)路郎還暦川柳大会開催(道頓堀オメガハウス、391名参加。路郎は謝辞を述べ、「還暦」の選。10月3日(日)岩崎柳路死去。11月2日(火)大阪市交通局文化祭の川柳會で講演。4日(木)九州川柳行脚に出る。八代・熊本・人吉・大牟田・日田・博多・下関をめぐる。7日(日)は熊本文化祭川柳大会(世継神社)に出席。14日(日)に帰阪。27日(土)不朽洞山房徹夜句會(奈良三本松頓光寺)開催。12月3日(金)広鉄局川柳コンクール(広鉄職員會館)に出席。

昭和24年(一九四九年)

61歳

3月3日(木)日本輿論新聞に「大衆の剣を見よ」、15日(火)大阪日日新聞夕刊に「幕外」執筆。4月2日(土)大阪市制六十周年記念川

柳會(大宝文化會館)開催。24日(日)国鉄西日本川柳大会(城崎)に出席。5月8日(日)川柳雜誌社主催・朝日新聞社後援「あやめ池ステート・フェア全国川柳大会」(あやめ池遊園地内野外劇場)開催、出席285名。「新日本のユーモア味と川柳」の講演と「青春」の選。10月9日(日)美作支部創立川柳大会(第一回西日本川柳大会。岡山県弓削町小学校講堂)で、「駅前」の選、松茸狩吟行「雑吟」の選。61名出席。11日(火)姫路支部創立句會(樹甫居)に出席。11月5日(土)文芸家懇話會(大阪図書館)、13日(日)大阪市教育委員會と各社共催の第一回大阪市民川柳大会(大丸水曜クラブ)に出席。10月末、葎乃が奈良県宇陀郡から帰阪する。荷物は三本松村向淵の翠光居の二階に預かつてもらう。11月27日(日)ふあうすと川柳社の幹部が東洋樹居で「路郎氏に物を訊く會」を催す。12月1日(木)に復刊した「夕刊山陽」の「山陽柳壇」の選者となる。31日(木)に、選が初掲載。17日(土)7時15分、大阪放送局から「川柳家の観た歳末雑感」を放送。

昭和25年(一九五〇年)

62歳

4月23日(日)第七回西日本鉄道人川柳大会(広島県二十日市・鉄道職員会館)に出席。24日(月)小郡鉄道職員倶楽部(山口)で、「旅と詩人の講演。25日(火)下関支部川柳大会で、「いのちある句を創れ」の講演。29日(土)ふあうすと川柳社二十周年記念・楳元紋太還暦祝賀川柳大会に出席。5月28日(日)第一句碑(すべりん)親は涼しいとこで待ち(「川柳雜誌」大正15年8月発表。大阪市南区巖谷仲之町、中島小児科後庭内)建立。6月15日(木)米本貴志子死去。8月3日(木)第二句碑(名もしらぬ山の起伏をうれしがり)(昭和22年11月16日作。奈良県室尾村三本松村向淵、上田翠光居)建立。祝賀句会は8月12日(土)開催。9月17日(日)第二回西日本川柳大会で、「世渡り」の選、84名出席。この日に、第三句碑(俺に似よおれに似るなと子をおもひ)(大正15年7月11日(火)、鳴尾での柳談会席上の作。岡山県久米郡久米南町下弓削丁R弓削駅前)建立。臨時増刊紋土500号の歩み(平成3年1月1日発行)に、弓削平句文集「六塵」からの引用で、路郎句碑建立の事情が記載されている。「第一回西

日本川柳大会を終ってから大分経った頃だから晩秋だったと思う。弓削町役場内での句会の席で、「麻生路郎先生の句碑を建てたら」と誰かが言った。「そりゃあええなあ」と言った人があった。お金のかかることである。誰も何も言わずそれだけのそれっ切りの話であった。ところが大阪で、弓削に路郎先生の句碑が建つのだという話になったそうだ。弓削の人達がびっくりにした。おべんちゃらもいい加減にして貰いたいと苦々しく言う人もあった。総て団体の物事は決議してから言うものである」とあり、以下句碑建立のために、駆けずり回った様子が書かれている。石も寄贈して貰い、彫賃も無料奉仕だったことがわかる。路郎はその感想を、「どこやらの歌碑は何十万の建設資金を募集したが、金が集まらぬので立ち消えになったという話を聞かされたが、弓削駅前の句碑は、建設が決まると同時に、快速調で出来上ってしまった。石を運ぶ、土を運ぶ、樹木を運ぶ、すべて奉仕である。延べにすれば大したものだ。トラックまでが奉仕であった。この町の字引きには、道義の類廃という文字はないらしい。自ら進んで奉仕されたのである。句碑の前に立った

私は、ただ有難さに涙がこぼれた」と述べている。「川柳しなの」8月号、第百号記念特別課題「育て親」の選。9月20日発行「化粧新聞」に、「川柳と化粧」執筆。11月26日(日)大阪市復興文化祭京阪神交歓市民川柳大会(毎日新聞社講堂)に出席。12月17日(日)夕刊山陽新聞創刊一周年記念読者川柳大会(岡山市山陽新聞社講堂)で、「新聞」の選。出席一一一名、投句一一五名。

昭和26年(一九五一年)

63歳

1月15日(月)山焼川柳大会 第一会場奈良公会堂、第二会場若草山山麓)開催、路郎の川柳を花火で揚げた。4月22日(日)第四句碑(ふるくとも僕には仁義禮智信)(「川柳雜誌」昭和22年7月号発表。岡山県和気郡吉永町福満、大森娘句楽居前庭)建立。式後記念川柳大会(大森娘句楽居)で、「命」の選をし、軸吟五句発表。5月3日(木)京都支部復活句会に出席。13日(日)あかね会主催川柳大会(奈良県五条)で、「川柳と俳句」の講演と「割箸」の選。9月23日(日)第三回西日本川柳大会で、「隣」の選。出席126名。11月3日(土)川柳不朽洞会主催

麻生路郎先生壽贈呈川柳大会（大阪市立大宝小学校講堂）開催。4日（日）第二回大阪市文化祭京阪神交歓市民川柳大会（毎日新聞講堂、23日（金）出雲支部二十五周年記念川柳大会出雲市公会堂）に出席。12月8日（土）備前支部忘年会（浜田久米雄居）に出席。9日（日）第二回山陽新聞読者川柳大会で、「社会」の柳話。一四三名出席、投句二二名。

昭和27年（一九五二年）

64歳

1月15日（火）水府還暦祝賀全国川柳大会中之島中央公会堂）に出席。4月27日（日）川雑柳談会開設。5月号は創刊300号記念特集号。5月11日（日）観光静岡全国川柳大会で、「蜜柑」の選。6月22日（日）壺坂寺吟行。「川柳はこたて」11号（6月30日発行）に、巻頭言「實行して欲しいことの一つ」を寄稿。7月、大阪郵政局募集郵政川柳の選評。9月14日（日）岡山支部句会。21日（日）第四回西日本川柳大会で、「娘」の選。出席151名。10月5日（日）京都川柳社四十周年記念川柳大会（先斗町歌舞練場）に出席。11日（土）BK「市民の時間」に、「折詰」の選評を放送。11月1日（土）物故川柳

人慰霊句会（光明寺）。16日（日）第三回大阪市民文化祭市民川柳大会（毎日新聞社講堂）で、「非凡」の講演。12月7日（日）第三回山陽新聞読者文芸川柳大会（岡山）に出席。30日（火）NHKから「朝の訪問」放送。

昭和28年（一九五三年）

65歳

1月4日（日）から、大吉村の二葉荘を見に葭乃と美作への旅に出る。5日（月）英田郡の新年川柳大会に出席。7日（水）は本田恵二朗居に招かれ、8日（木）帰阪。3月3日（火）15日（日）川柳不朽洞会主催川柳生活五十年記念短冊展を阿倍野近鉄百貨店で開催。3月29日（日）BKから川柳生活五十年の記念放送。4月号の「編輯局にて」に、「前号は初句のうち」に売切れてしまい発送部がうれしい悲鳴を挙げた。こんなことは終戦後はじめての出来事である」とある。4月12日（日）赤坂町誕生祝賀記念川柳大会（岡山県赤磐郡）で、「町」の選。15日（水）大阪市警視庁警察学校講堂で「川柳に就いて」の講演、24日（金）にも同所で講演。5月4日（月）毎日新聞社主催「週末定期レクリエーション・ボート（関西汽船）がね丸」の別府行に招

待され、船中で川柳に関する講演をする。10日（日）南区医師会の招きで生々庵夫妻と、淡輪・友ヶ島・加太・和歌浦・温山荘を回遊。14日（木）大阪府立碑労働セツルメントが開設した文化教室（宿院労働会館）の川柳教室講師、22日（金）から大阪市警視庁警察学校文化講座の講師を務める。6月8日（月）BKから「浴衣」の選評を放送。12日（金）夜、世界長ゴム株式会社で、「川柳の話」の講演。14日（日）、暗峠から生駒山上まで吟行。7月号「国文学解釈と鑑賞」に、「川柳の味」執筆。7月13日（月）大西野介死去。8月16日（日）湯郷温泉納涼川柳大会（岡山）に出席。30日（日）水族館開設記念川柳会（堺大浜水族館）で、「船旅」の選。9月20日（日）第五回西日本川柳大会で、「畳」の選。出席145名。10月1日（木）から山陽新聞朝刊の時事川柳の選を担当。10月から毎日新聞の依頼により、新日本放送のモーニングタイムズの「今日の川柳」担当。10月15日「山陽川柳」（山陽圖書出版）刊行。16日（金）夜行で上京、藤本満年夫妻・孤浪と面談、新橋演舞場で「花の生涯」を観劇、20日（火）帰阪。11月15日（日）第四回大阪市民文化祭大阪市民川柳大会

で、「路郎放談」の講演。19日(木)BKの「ラジオ絵葉書」で、「一枚のはな紙」放送。12月6日(日)第四回山陽新聞読者川柳大会(岡山市遺族会館)で、「葉」の選、出席者二〇余名。翌朝路郎の披露と句会風景をラジオ山陽で放送、7日(月)帰阪。8日(火)BKから「借金」の選評を放送。11日(金)夜、句集「旅人」出来上がる(「旅人」の奥書には、11月30日発行とあるが遅れていた)。29年1月号「編輯局にて」に、「十一日の夜、待望していた句集『旅人』が出来上り非常なよろこびを感じた。清貧に甘んじている私にとつては文字通りの豪華出版である。私を愛する人達によつての刊行なので一本を先ず亡き父母の霊前に捧げて、その人達の好意を報告した。そして運んで来て呉れた出版社の人たちや、この仕事のために多大な手伝をしてもらつた摩天郎氏と祝盃をあげた。有難う」とある。

昭和29年(一九五四年)

66歳

1月1日(金)「北国新聞」に、新年文芸川柳の選と、「迎春」の題で(元旦の白足袋白しとも白し)(オ、寒むと云つて初日をヒシヤと閉め)

(初夢にやつぱり会社ふるわぬい)(三ヶ日ちつとも来ない呑み仲間)(門松に祖先のかけがうすくなり)を発表。6日(水)から、「北国新聞」夕刊の「北国柳壇」を担当することになった。1月号「公私雑記」に、「摩天郎氏が来訪(1月2日)編者註」。続いて生駒のアート夫婦が早希ちゃんと来た。摩天郎氏が帰つた。夜に入つてアート夫婦が帰ると云う。お、降りになつたので停留所まで送つてやると云うと、そんならうちまで送つて呉れと云うので一緒に生駒へ行く。そして泊れと云うので泊る。三日も飲みつけて遅くなつたので泊る。四日の夜漸く腰を上げた。五日に仕事があつたからである。元日からズツと酒をのんだだけで、まことに平々凡々たる正月であつた」とある。2月4日(木)山陽新聞の学芸欄に、「時事川柳の投句家へ」執筆。5日(金)村松夢裡死去。同日、堺市の日刊大阪新聞に、「外から見た塚」執筆。17日(水)路郎主幹川柳生活五十周年記念句集「旅人」出版記念会(阪急ビル八階特別食堂)開催。3月27日(土)病臥。4月11日(日)に初めて用便を足すために二階から降りたが、また熱が出る。この日に京都黄傘二十五周年記念全国川

柳大会があり、路郎も「二十五年」の講演をする予定だったが、やむなく欠席。25日(日)大阪府文芸懇話会阿倍野区菅植彦邸に出席。5月8日(土)BK川柳「男の子」の選評を放送。9日(日)大万川柳三周年記念川柳大会(阿倍野区大万)で、「大吉」の選。17日(月)毎日新聞夕刊に、「川柳から見たアブレ精神」執筆。6月21日(月)葎乃が疎開荷物を纏めに奈良の上田翠光居を訪れ、23日(水)に帰阪。8月4日(水)疎開荷物をようやく全て引きあげる。7月10日(土)第一回川雑川柳まつり(天王寺区下寺町大覚寺)開催、柳話と特別課題「誕生」と兼題「伴」の選。特別課題は後日選をし、路郎賞が授けられた。受賞者は楢原一善、倉敷支部に優勝楯を贈呈。8月14日(土)15日(日)の両日に亘つて阿波踊見物と鳴門観潮の会開催。9月19日(日)第六回西日本川柳大会で、「欲」の選。出席163名。10月17日(日)毎日新聞「読書」の頁に、「本と私」執筆。31日(日)第五回大阪市民文化祭大阪市民川柳大会「毎日新聞社講堂」で、「ロシエフコオの箴言を通して」の講演。11月13日(土)BK川柳「社長」の選評を放送。17日(水)夕刊から「毎日柳壇」選

者になる。11月号「公・私・雑・記」に、「毎日柳壇」が新設されることになった。川柳界のめざましい興隆を物語る一つの証左と云えよう。選者は私が委嘱されることになったので、心血をそそいで選句にあたりたいと思う」とある。12月5日(日)山陽新聞社主催第五回読者川柳大会(山陽新聞社樓上)に出席。出席者一七〇名、投句三〇〇名。

昭和30年(一九五五年)

67歳

東京都台東区役所に初代川柳句碑再建委員会が設置され、初代川柳伝遺吟(木枯や跡で芽を吹け川柳)の碑再建につき、発起人を懇請されたので快諾する。1月11日(火)〜16日(日)阿倍野近鉄百貨店で、米田三男之介(画)と「句と画の合作色紙展」を開く。2月から須崎豆秋、正会員から維持会員に。2月8日(火)ルーブル展(京都)を参観。3月6日(日)米子支部創立記念山陰川柳大会(皆生温泉友恭寮)で「お世辞」の選と講演、講演の一部がNHKから放送される。29日(火)南のロータリー倶楽部で「真実に生きるためのユーモア」の講演。30日(水)英国詩人エ・ブランデンを迎える府文芸

懇話会(四天王寺本坊)に出席。4月10日(日)BKから「落選」の選評を放送。同日、葭乃と篠山川柳大会(孔雀会館)に出席し、「保証」の選。17日(日)雨の吉野に出かけたが、花は一つもなかった。5月22日(日)倉敷支部川柳大会(歎龍寺)で「真相」の選。6月12日(日)「川雑岡山(大森風来子)が、川柳雑誌社から独立し、「川柳岡山」となる。川雑岡山支部は、土井楽山が受け継ぐ。6月16日(木)副主幹福田山雨楼死去。7月1日(金)、葭乃句集『福壽草』刊行。10日(日)BK川柳「シャツ」の選評を放送。同日、第二回川雑川柳まつり(下寺町光明寺)開催、柳話と特別課題「子沢山」と兼題「大阪弁」の選。BKから二十年三十年の歩みを続けている人々の「松の落葉の時間」に放送の依頼をされ、7月中五回連続で土曜日放送。22日(金)大阪市長招待の在阪文化人との文化施設懇談会(花外楼)に出席。9月4日(日)毎日新聞夕刊に、「川柳で探る夜の大阪」が掲載される。これは毎日新聞社主催で川雑の路郎・豆秋・白柳子・小松園・梨里が、夜の観光パスで、中之島・大阪城・BK局・キャバレー・メトロ・歌舞伎座等を見物し、それを川柳で紹

介したものの。同月23日(金)初代川柳句碑再建除幕式(浅草三筋町龍王寺)に出席。25日(日)第七回西日本川柳大会で「サーピス」の選、出席者164名。10月号「川柳不朽會」の頁に、水谷鮎美・須崎豆秋の名が見えない。同号「不朽會から」に、「井野格一氏は八月限り、光好三四詩氏、水谷鮎美氏、須崎豆秋氏は九月限り、夫々家事の都合で退会された」とある。水谷鮎美は句集『美をふらす』の発刊のことで除名。豆秋も鮎美に味方したので除名されたのかもしれない。大阪府警察本部の依頼により機関紙「なにわ」10月号から川柳欄の選を担当、一回目の課題は「パトロール」。10月8日(土)BKから「古本」の選評を放送。11月13日(日)第六回大阪市民文化祭大阪市民川柳大会(毎日新聞社講堂)で、「俗生活に及ぼす川柳の力」の講演。15日「川柳とは何か」(至文堂)刊行。12月11日(日)山陽新聞社主催第六回読者文芸川柳大会で選句と講演。

昭和31年(一九五六年)

68歳

1月8日(日)BKから「丹前」の選評を放送。2月1日(水)、弓削川柳社が川雑支部から

独立する。川雑弓削支部は、直原七面山が受け

継ぐ。2月10日(金)大阪府古市警察署で川柳

について講演。12日(日)北川春果の労をねぎ

らいつつ、葎乃と生駒に遊ぶ。4月からの番組

改正により、BK「趣味のしおり」の時間がな

くなり、BK川柳も消滅する。3月28日(水)「大

阪ゆう・もあ・くらぶ」の発起人会が東区今橋

クラブで開かれ、路郎が常任理事に推される。

4月8日(日)川雑婦人友の会と篠山方面在住

の川雑婦人友の会員との合同の篠山観桜川柳

句会(篠山城)に葎乃と出席。13日(金)梨里

が西村英雄(河内市本庄、近畿電気通信局大阪

管理部勤務)と結婚。梨里は「川柳雑誌」編集

長を辞任。同日(金)「毎日新聞」夕刊に、「ユ

ーモアの喪失」(執筆。5月号「川雑案内」に、「ヴ

アイオリン講習希望の方は枚岡弦楽教室(枚岡

市河内町六三〇)へ。講師は元宝塚歌劇団・関

西交響楽団の奏者麻生アート氏。A級千二百

円。B級八百円(週二回)とある。同号「柳界展

望」に、「岡山県金光図書館から路郎師の「川柳

とは何か」を盲人のために点訳許可の申込があ

った」とある。5月3日(木)番傘川柳まつり

(天王寺本坊)に出席。葎乃と共に12日(金)は

三朝温泉へ、14日(日)は鳥取市復興記念山陰

川柳大会(鳥取市東町児童会館)で、「ホテル」

の選。6月7日(木)山雨楼忌(光明寺)を修

す。24日(日)関西短詩文学連盟結成、初代理

事長に就任する。常任理事は平田春一・小野十

三郎・田村木国。理事は、安西冬衛・藤本浩

一・初井しづ枝・五十嵐播水・岸本水府・前

川佐美雄・岡橋宣介・岡本圭岳・西東三鬼・

坂澄風・相元紋太・鈴江幸太郎・竹中郁・山

口草堂・安田青風・吉沢独陽。7月8日(日)第

三回川雑川柳まつりで、柳話と特別課題「社員」

と兼題「毛脛」の選。19日(木)の毎日新聞夕

刊に、「大阪言葉と川柳」執筆。9月号「不朽洞

会から」に、「道頓堀八月一日号」に「道頓堀を詠

んだ川柳」を執筆」とある。8月26日(日)婦

人友の会(おんなばかりのつどい)一周年記念

川柳大会(光明寺)で、「爪弾き」の選。9月13日

(木)の毎日新聞夕刊に「老いの坂」、19日の読

売新聞に「初代川柳忌に際して」執筆。10月7

日(日)関西短詩文学連盟主催短詩文学講演会

(読売新聞講堂)に出席。10日(水)高商子科の

頃、尺八を習っていた中尾都山が死去。大阪府

の文芸懇話会でも同席した。13日(土)NHK

松江で大杜町長と対談の録音(17日朝放送)。14

日(日)出雲支部三十周年記念山陰川柳大会(出

雲市公会堂)で、柳話と「刀」の選。11月11日

(日)大阪市民文化祭第八回市民川柳大会(毎日

新聞社講堂)に出席。12月号「会員異動」に、「須

崎豆秋は同氏の切なる復帰希望が十二月十三

日の常任理事会で容れられ会員に復帰された」

とある。12月25日(火)毎日新聞夕刊に、「自家

用車」執筆。

昭和32年(一九五七年)

69歳

1月、五女西村梨里が男児出産、哲夫と命名。

20日「私達」(川柳雑誌社)刊行。文藝と、22日

(火)広島鉄道局主催川柳大会に出席。23日(水)

は下関で西日本新聞社のインタビューと句会。

24日(木)は広島に戻り歓迎句会。2月20日(水)

安川久留美死去。3月1日(金)小松支部(茶

屋)発足。15日(金)「私達」出版記念の夕(大

阪観光ホテル)開催。24日(日)明和病院支部

発足記念川柳大会に出席。4月26日(金)ソ連

の作家エレンブルグの文芸大講演会(中之島中

央公会堂)に出席。「旅人」「川柳とは何か」「福

壽草」「私達」を贈呈。14日(日)道明寺天満宮

観桜吟行。5月14日(火) 食満南北死去。7月号は麻生路郎古稀特集号、特価百円。7月7日(日) 第四回川雑川柳まつり路郎先生古稀祝賀川柳大会(元藤田邸)で、「厳選の意義」の柳話。8月16日(金) NHK第二放送から、川柳を入れたよまやま話を、司会洪沢秀雄、川柳家は三太郎・雀郎・水府・路郎の四人で放送。9月8日(日) 北国新聞社主催北国川柳大会(金沢市北国新聞社三階講堂)で、講演「短詩型文学の社会性」と「顔合せ」の選。10月6日(日) 帰宅後夜中、失語症・失書症に陥る。7日は筆談。8日は漸次言語を取り戻す。診断病名は中脳血管痙攣。原因は長期間の睡眠不足と極度の疲労。13日(日) 大阪市民文化祭大阪市民川柳大会(毎日新聞社講堂)で挨拶。12月22日(土) B K「お休みの前に」で、随筆「髭」が放送される。

昭和33年(一九五八年)

70歳

1月14日(火) 番傘五十年全国川柳大会の前日祭では生々庵副主幹が路郎の代理で祝辞を述べ、15日(水) 大会は葉副理事長が祝辞を代読。路郎は、両日とも静養のため欠席。2月11

日(火) 府立大阪警察学校で「趣味と生活」の講演。講演筆記が警察本部の機関誌「なになわ」4月号の巻頭を飾る。3月号「川柳家の二十四時」に、「三十二年十月六日に睡眠不足と過勞の積み重なりで仆れてから、また床をあげず、静養中ということになっているが従来からの三分の二ぐらいの仕事はやっている。従来は睡眠四時間、日曜祭日なしで毎日二十時間が仕事の時間だった。これまでは一時にはまだ起きていたし、外から戻ってくることをさえあつた。朝五時に眼を覚ましラジオを聴取、六時半から九時まで新聞と読書にあてた。それが済むと朝の食間では殆んど柳務(選と通信に眼を通す。原稿執筆其他) 午後は会へ出かける。会のない時は柳務。―中略―訪問客のある時には柳務はしない。句会、講演、試写会其他の集會等はのつびきならぬものの外は失礼している。あまり面白くない其の日其の日だが、静養中とあつては是非もない」とある。2月から、橋高薫風が編集部へ入部。3月23日(日) 大万川柳会七周年記念川柳大会(阿倍野橋橿喜大万)で「おっさん」の選。24日(月) 26日(水)、第一回関西短詩

文学連盟主催短詩文学作品展(東区今橋大阪美術倶楽部)開催。4月13日(日) 食満南北の句碑(五六人立って又平手くらがり) 除幕式(尼崎市近松公園)で祝辞。20日(日) 路郎の代わりには腹乃が、備前支部創立十周年記念川柳大会(牛込会館)に出席。5月18日(日) 婦人友の会創立三周年会員百名突破記念川柳大会(光明寺)で、柳話と特別課題「女ころ」の選。23日(金) 28日(水) 大阪ゆう・もあくらぶ主催「茶気チャキ展」(心斎橋さこう百貨店)を開催。大阪の名士が出品した浴衣コンクール。路郎の作品を、「題して―恋は果しなく続く……。マジックインキで描いたペン先が果しなくつづいている。詩人らしい感覚に若さがあふれるもの……。紺地に白抜きのペン先」と、編集の不二田二三夫が記している。7月6日(日) 第五回川雑川柳まつり(天王寺区光明寺)で、柳話と特別課題「仲よし」の選。この年から特別課題の表彰を当日行うようになった。8月、三男麻生一歩に男子誕生。16日(土) 蛭子省二死去。「川柳はこたて」9月号に、「花童子の事ども」執筆。10月15日(水) 大阪市民文化賞受賞者選考委員として出席。受賞者は、山村愛・市

川寿海・竹本住大夫・鍋井克之・水野祥太郎。
19日(日) 大阪市民文化祭第十回川柳大会(毎日新聞社講堂)で、「大阪と川柳」の講演。11月8日(土)〜10日(月) 関西短詩文学連盟主催第二回短詩文学作品展(大阪美術倶楽部)開催。29日(土) 府警本部の雑誌「なにわ」新年号の「新春放談」なにわ文芸選者を囲んで」のため、安西冬衛(詩)・安田青風(短歌)・牧野美津穂(俳句)との座談会に出席。

昭和34年(一九五九年)

71歳

1月15日(木) 正本水客・黒川紫香・丸尾潮花川柳句集『三人』刊行祝賀川柳大会(光明寺)開催。2月2日(月) 内藤草一郎死去。9日(月) 関西短詩文学連盟理事長に再選。22日(日) 宝塚映画製作所見学川柳の会開催。3月19日(木) 宮田不二死去。25日(水) 牧村史陽著『大坂城物語』出版記念会(高麗橋三越)に出席。28日(土) 姫田夕鐘死去。4月10日(金) 葎乃が、皇太子殿下御成婚奉祝篠山支部十周年記念川柳大会(孔雀会館)に出席。11日(土) 高沢一浪死去。15日(水) 南北句碑作品選定委員会(ななば味園)に出席し、ただ一人(悪人が栄えた

ままで初日果て)を推薦する。5月1日(金) 陶弘忌(南北忌)句会(大阪美術倶楽部)に出席。5日(火) 井上信子一周忌句会(鎌倉市建長寺)で選。17日(日) 食満南北三回忌法要・南北亭竣成・句碑(昔堺に男ありけり夏まつり)除幕式(堺市南宗寺)に出席。6月14日(日) 浪速高等学校(大阪市)文化祭で文芸部が麻生路郎川柳特集の展示をする。15日(月) 文芸懇談会主催英国詩人エドモンド・ブランドン氏歓迎会(新大阪ホテル)に出席。7月3日(金) 木下幽王死去。10日『新川柳鑑賞』(川柳雑誌社)刊行。12日(日) 第六回川柳雑柳まつり(大成閣)で特別課題「親譲り」の発表。9月3日(木) 近鉄上六から葎乃と発ち、木曾福島着。4日湯田中駅に着き車で中島紫痴郎宅へ。車で五分の紫痴郎の別宅無心庵に逗留、近くの安代温泉で憩う。5日志賀高原に遊ぶ。6日歓迎小集句会で「山」の選、7日は終日揮毫。8日発って9日(水) 帰阪。葎乃と二人だけの初めての旅行だった。10日(木) 勝谷山川兎死去。9月20日(日) 葎乃と、婦人友の会五周年祝賀句会(中島生々庵邸)に出席。23日(水) 曾根崎警察署で、「警察官と酒」の講演。10月7日(水)〜9日

(金)、関西短詩文学連盟主催第三回短詩文学作品展(大阪美術倶楽部)開催。19日(月) 大阪市文化賞受賞者推薦委員会に出席。25日(日) 大阪市民文化祭第十一回川柳大会(毎日新聞大阪本社講堂)。11月9日(月) 川上日車死去。12月10日(木) 近畿日本鉄道の招きで、大阪名古屋間直通運転記念の新ヒスターカーに葎乃と試乗。

昭和35年(一九六〇年)

72歳

1月10日(日) 川上日車終焉の地近江八幡を訪問(水客・薫風子・奈良子・宏子・一三夫と毎日放送の岩崎愛二同行、令妹小野豊と歓談。このときの様子が、12日(火) 毎日新聞滋賀版に掲載される。2月11日(火) 前田伍健死去。17日(水) 前田雀郎死去。20日(土) 学者文化人安保懇談会(大手前会館)に出席。28日(日) 池田蘭子著『女紋』出版記念会(新大阪グレル)に出席。3月20日(日) 噴煙十周年大鳴瀧明古稀祝賀川柳大会(熊本市農協会館)で、「人生」の選。27日(日) 大万川柳九周年記念大会で柳詩。5月号「ボクの水曜」に、「略」今までボクには祝祭日も日曜日もなかった。原稿を書くため

には昼夜の別もなかったが、四月から水曜日を川柳の仕事から一切離れることにした。従って私でなければならぬことなら、会合であろうとなんであろうが日を変えてもらいたい。そのためには電話へも出ないからその点おゆるしが願いたい。用があつたら社の者へメモするように申付けて下さい。月に四回か五回の休養をとることに踏切ったボクの断に協力されたい」とある。5月15日(日)第七回川雑川柳まつり(宝塚阪急旅行会館)で、柳話と兼題「腹案」の選と特別課題「学生」の発表。9月号は四百号特集号、特価百円。9月11日(日)誌寿四百号祝賀川柳大会(大成園)で、「四百号を回顧して」の謝辞。21日(水)西村梨里次男出産。10月2日(日)大阪市民文化祭川柳大会(毎日新聞社大阪本社講堂)。11日(火)尾崎方正死去。11月24日(木)〜29日(火)関西短詩文学連盟主催短詩文学秋の作品展(梅田阪神百貨店丸善画廊)開催。26日(土)尾崎方正追悼句会(奈良当麻寺)で、「名園」の選。

昭和36年(一九六一年)

73歳

2月、三男一歩に長女誕生、四番目の孫。3

月8日(水)、国語研究会(大阪市立東高等学校図書室)で国語教員と市教育委員対象に、現代川柳の動向について講義。19日(日)大方川柳十周年記念大会(割烹大万)で、「真理をつかめ」の柳話。4月号の「柳壇室」に、「旅と宿」という雑誌に随筆をかかされたり」とある。「旅と宿」は、日本旅行の前身である日本旅行会が出していたPR雑誌。現・日本旅行本社にも当時の雑誌は残っていない。4月1日(土)アジア・アフリカ作家会講演会(朝日会館)に出席。同日午後5時からの歓迎夕食会(太閤園)で、メンバーのソ連作家と歓談。9日(日)岸本水府作品展(阪急百貨店六階美術部)で水府夫妻と歓談。22日(土)奈良支部創立句会(奈良高校書道室)で、高校生を対象に、講演「川柳とは何か」と「母校」の選。5月4日(木)須崎豆秋死去。6月5日(月)大阪芸文協会第96回講演会(生国魂神社社務所)で、「川柳種々相」の講演。12日(月)堺市友会総会(高石町海浜荘)で講演。7月1日(土)午後3時25分、伊丹空港から飛行機で葭乃と道後へ。夕食後、狸通を訪ねたが不在のため夫人と歓談。2日、砥部で土ひねり。3日は、路郎が伝記をまとめた

宇喜多翁の寿像を松山城麓長者ヶ丘に確かめに行くと、像は戦時供出されたのか、白石のみ残っていた。狸通と前田伍健の墓に参る。4日は子規堂へ。5日(水)は再び砥部へ寄り、帰阪。7月16日(日)第八回川雑川柳まつり(大成園)で、柳話と特別課題「気軽」の発表。10月5日(木)〜10日(火)短詩文学作品展(阪神百貨店丸善画廊)開催。10月15日(日)大阪市・大阪市教育委員会・関西短詩文学連盟主催第13回大阪市民文化祭川柳大会で、「めし」の選。番傘・せんば川柳社不参加。11月4日(土)富田林市文化祭川柳大会(西方寺)で講演と選。12日(日)第15回堺市文化祭市民川柳の会(堺労働会館)に出席。

昭和37年(一九六二年)

74歳

1月7日(日)大阪芸文協合理事会(生国魂神社)に出席。11日(木)、新年互礼会(市長公館)に出席。2月24日(土)葭乃古稀、自祝乾杯。3月、岡山県美作市川上945霊山寺境内に、住職永幡善男(柳号どく路)が句碑(笠すて、見よ青空の廣いこと)建立。その左下部に色紙大(さげとろりとろり大空のこ、ろかも)

〔川柳雑誌〕昭和6年12月号発表の路郎の句もはめ込まれている。3月18日(日)俳誌「早春」四百号記念句会(今橋クラブ)に出席後、浪花踊(毎日ホール)を霞乃と鑑賞。25日(日)大万川柳十一周年記念大会(割烹大万)で、「未練」の選。4月14日(土)大阪府主催文芸懇話会に出席し、来賓の久保田万太郎と交歓。5月16日(水)白川朋吉・菅植彦の大阪市名誉市民祝賀会(生国魂神社)に出席し、18日(金)画家工芸家文化人等による祝賀会(羽衣荘)にも出席。20日(日)阿倍野支部豆秋忌句会に出席。24日(木)午後四時半ガガリン氏歓迎レセプション(新大阪ホテル)に出席し、同六時からガガリン少佐歓迎関西大集会(扇町プール)にも出席。6月9日(土)奈良支部創立一周年記念麻生路郎先生講演会(奈良高校お茶室)で、講演と「奈良」の選。同日夕、ソ連作家観光団歓迎懇談会(大阪府厚生会館)に出席。7月8日(日)第九回川雑川柳まつり(四天王寺本坊)で、柳話と特別課題「情熱」の発表。20日(金)橘高薫風子・藤村メ女を伴い、深夜青森駅ホームに降り立つ。22日(日)東奥日報主催第十六回青森県川柳大会に特別選者として招かれ、「川

柳一と筋に」の講演。23日(月)は、工藤甲吉と四人で十和田湖を遊覧。(十和田湖よみなさけになれ旅人へ)は、この時の作。26日(木)東京で路郎を囲む歓迎会、27日(金)帰阪。8月31日(金)小野十三郎詩集・詩論出版記念パーティー(毎日文化ホール)に出席。9月16日(日)、武部香林・若菜が、徳島県笠置山で白骨死体で発見される。10月5日(金)東上、高須唾三味・阿部佐保蘭の案内で、慈恵大東京病院に入院中の三太郎を見舞う。6日夜は、東北川柳大会の前夜祭。7日は大会(河北新報社別館ホール)で講演及び選。翌朝離仙。8日東京滞在。9日(火)夜、帰阪。10月13日(土)大阪市民文化祭第14回川柳大会(毎日新聞社大阪本社講堂)で挨拶。高鷲亜鈍宛葉書(消印10月18日)に、「おはがき拝受。香林・若菜の件についてはなるべく慎重に事を運んでいるので(新聞記事は見たが)、それで岡山の千田ふさ子さんに詳報を依頼し、生々庵にだけ報告と相談をし、五日に東京へ、六日に大倉、八日に再び東京へ九日の夜十時に大阪駅へ帰ったのです。そして岡山の返信を受けたので、いよいよ香林若菜の計の確実さを知り、十一月七日夜の本社句

会で追悼の意を致すことに決し既に、二人の引伸写真などもつくり、自安寺の僧侶に読経のことも依頼しました。貴稿は本日、不二田君宅へ持参させますが、すでに編集の大半が終っているので、十一月に組込みは不可能かも知れませんが、何んとなれば次号に入れてくれるように、どうしても這入らねば次号に申伝えました。あの原稿の「白骨の秋」だけは考慮しよう云つておきました。その点おおくみ下さい。十月十七日」とある。11月、大阪市立中央図書館に「短詩文学文庫」設置。現在は短詩文学文庫を収めた部屋はないが、目録は残っている。目録の序に、「短詩文学文庫は昭和37年春、大阪市立中央図書館の開館を記念して、川柳界の重鎮、関西短詩文学連盟理事長であった故麻生路郎氏と当時の館長が短詩文学関係者に呼びかけたのがはじまりです。故麻生路郎氏、橋本緑雨氏、安田青風氏、竹中郁氏をはじめ多くの短詩文学関係者のご協力をいただき、著者・蔵書のご寄贈を受け、当館の貴重なコレクションとなっております。このたび、このコレクションの目録を刊行し、関係者のご参考に供し得ますことを喜びといたします。短詩文学関係者のご好意

に感謝の意を表します、とともに、故麻生路郎氏の「冥福を心からお祈りいたします。昭和52年3月／大阪市立中央図書館長小原勉」とある。収蔵資料二〇八点のうち、「川柳」五二点、「江戸時代の川柳」一〇二点、「近代の川柳」一三七点、「個人の句集」一四三三点、その他「逐次刊行物」などにも川柳書を多数収蔵。11月10日(土)第六回「著者は語る会」(大阪市立図書館)で、「川柳と世相」の題で二時間余りの講演。

昭和38年(一九六三年)

75歳

2月23日(土)大阪府立図書館開館六十周年記念式典に出席。3月10日(日)大万川柳二十周年記念大会「割烹大万」で、柳話と「と旗」の選。11日(月)玉造支部句会十周年記念句会に出席。17日(日)不朽洞絵会(自安寺)で、「人」の選。4月26日(金)ハワイ支部長山快夢起歓迎会(宗右エ門町料亭いろは)開催。7月7日(日)第十回川雑川柳まつり(北極星)で柳話と特別課題「先見」の発表。8月26日(月)英国詩人エドモンド・プランデンを囲む文芸懇話会・講演会・歓迎晚餐会(国際ホテル)に出席。9月5日(木)大阪芸文協会(生国魂神社)で、「川柳あれこれ」の講演。9月30日(月)

10月5日(土)短詩文学作品展(毎日ギャラリー)開催。10月10日(木)今橋クラブ婦人部の懇談会に招かれ、「川柳と人生問題」について講話。13日(日)京都支部の田中鳥雀を訪問、八坂鳥居前旅館「磯田」で歓談。11月3日(日)昭和38年度大阪文化賞・大阪芸術賞贈呈式(フェスティバルホール)に出席。17日(日)大阪文化祭第15回川柳大会で、「女」の選。24日(日)堺市文化祭市民川柳大会(堺労働会館)に出席。

昭和39年(一九六四年)

76歳

3月29日(日)大万川柳十三周年記念大会で柳話。「川柳人」4月号(387号)に、井上信子七周忌を迎えるに当たり、次の作品を寄せる。(黙ってはいても化石に候わず)「世紀をジャンプして生さんとす」(人相も肝腎や蜘蛛殺される)「夫婦別あり影と影」(脚がオレを支えていたことに気づき)。5月4日(月)夫妻で京都の都踊に招待される。19日(火)関西国民文化会議主催「憲法をまもる学者と芸術家のつどい」(大阪府労働会館)に出席。6月号の「柳樽室」に、「約八年間編集局で働いてくれた不二田一二三夫君が、ラジオやテレビ方面にその手腕を買われ、その道一筋にバク進することとなった

ので、前号限り編集局と袂を分つこととなった」とある。7月23日(木)土井文麿死去。7月に開催していた川雑川柳まつりが昨年で10回を逃げたので、8月9日(日)川柳ゆかた会(大阪府信用金庫会館)を行うことになった。路郎は「神経」の選をする。「川柳人」9月号「雑詠誌上句会」の選。9月5日(土)白川朋吉・菅橋彦大阪名誉市民をしのぶ会、18日(金)菅橋彦画伯をしのぶ懇話会(高島屋五階ケリル)に出席。10月9日(金)伊丹空港から熊本へ飛び、田中辰二(鳴風)の病床を見舞う。午後、大村空港で諫早川柳会の出迎えを受ける。その夜から下痢気味になり臥床。翌10日、午後一時から枕許で二十名ほどの句会が始まり、選句と柳話をベッドの上でする。枕許での宴会が八時まで続いた。池田可宵が長崎での歓迎打ち合わせのために訪れたが、長崎も雲仙も断念して、諫早の川岡晝眼子宅で臥床四泊。13日(火)午後帰阪。11月12日(木)文楽11月公演「恩讐の彼方に」(道頓堀朝日座)観劇。21日(土)大阪文化祭第16回川柳大会(大手前会館)で、「食通」の選。他の兼題選者は宣介、水府、塊人。毎日新聞社の後援がなくなる。主催は大阪府・大阪府教委、大阪市・大阪府教委。番傘、川柳文学、

せんば、川柳雑誌の四社が世話をする。24日(火) 摩天郎の案内で堺市臨海工業地帯を見学。堺市友会懇親会(羽衣新東洋)で河盛市長と歓談。

昭和40年(一九六五年)

77歳

1月1日(金) 大阪市長公館での年賀に出席。喜寿金婚の年を迎える。3月14日(日) 大万川柳第14回記念大会で、「誘惑」の選。風邪で寝込み、20日(土) になって、川柳きやり吟社四十五周年・周魚主幹喜寿祝賀記念句会(4月4日)に出席することを断念。31日(水)、ビールス性肝炎のため大阪赤十字病院へ入院。5月14日(金)ひとまず退院。自宅療養。入院後発行の「川柳雑誌」5月号から「柳樽室」には、路郎は執筆せず、編集部員の他、葎乃も筆を執っている。葎乃の分を次に抄出する。5月号に、「☆路郎の病氣療養の期間は相当水びくようであるので、我々留守部隊は長期戦を覚悟して、極めて合理的にエネルギーの消耗をはかってゆかなければならないのであるが、案ずるより産むが易いで、幸に、「川柳初編研究」「江戸川柳と紋章」「川柳太平記」「明治川柳と風俗」そして東野大八氏のユーモラスな随筆で毎号誌

上を賑わせているし本号も大八氏の大陸引揚川柳家同窓会の記事は、読んでいろうちにも、川柳人のあたたかい友情にふれて思わず眼がしらの熱くなるのを感じるのである。(中略) 編集室にはいつも顔を見せて組込みを手伝って下さる摩天郎氏があり、入門講座で指導研究を担当して下さる白柳氏があり、柳界展望をまとめて下さる薫風氏がある。総務部には稻妻のよう働く宏子さんがいる。句会部では永年面倒を見て下さっているいさむ氏があり、忙しい中から馳せ参じて下さる柳宏子氏、八郎氏、庸佑氏がある。こうした暖かいステイムに囲まれて留守番をしている私の幸福を感じている次第です。なお今後とも御執筆による御支援をお願いして止みません」とある。6月号に、「★極端にあつがりの私はそろそろ冷房が恋しくなってきた。路郎は四十六日目に退院した。矢張り安静が必要なので、面会謝絶で二階の広いダブルベッドの上で、沈思黙考の人となつていく。従来じつとしていた嫌いな路郎にはこれ以上の責め苦はない筈である。然し、どうしても早く治つて、果たさねばならぬ責任が残っているの、頑張っているのだと私は思つている。日に日に、ほんの毛筋程ずつ快方に向かっ

ているので御放念願い度い。(中略) ★熊本の田中辰二先生からお見舞の電報を戴く。「ゴゼンカイイノルタツジ」とあつた。路郎は直ぐ返事を出して呉れと言つて次の電文を渡した。「デンカンシャ一四ヒタイインサラニベツリヨウホウデガンバルチロウ」此の電文は如何にも病床の二人の心状がよく出ている。間もなく奥様の代筆でよこされた先生のお便りの中に、「絶安と絶安同志頑張ろう」とあつた。先生も久しく病臥されている。唯々御恢復を祈るばかりである。(以下略)とある。7月号に、「★梅雨季の気候は降つても照つても蒸し暑い。退院後の路郎は入院中と同じように安静が必要なので病床に横たわつたままである。病室は南をうけた二階の一室で部屋の空気は少しも動かない。暑がりの私はたまりかねて、路郎の許しを受けてカーテンの後ろの障子を僅かに開かせて貰うのだが、冷房は嫌い、扇風機は好まぬ隙間風は夏でも寒いという主人公に気かねてか、物見台からの涼風はさも遠慮がちに、しすしすと忍び込んで来るのである。六月の初旬から汗疹になやまされる私には正しく行(ぎょう)である。寒中淹にうたれて祈願する人もあるのだから、これ位の辛抱はまだ序のくちと心得てよ

かろうと自分に言い聞かせている。★最近花好きの私もいささか経済も考えて、香港フラワーを愛用していたのだが、路郎の退院後は、二男の嫁が数日置きに、グラジオラスや、黄菊や、霞草や、芒や、姫百合や、菖蒲などを次々と替えてくれるので、病室はグリーンハウスの出張所のようにである。★安眠をしようと思えば、いつも頭を空っぽにしていなければならぬ。かりに眼を閉じて映画の場面を思い浮かべようとするれば、必ず眼の筋肉は緊張するのである。身体のあるゆる部所から緊張をとり去ることは到底路郎には出来ない事である。路郎が口を開けて熟睡している時は頭の前でラヂオが鳴っている。此場合ラヂオは考える働きを邪魔する機械になっているのである。シャンソンござれ、ジャズござれで何でも頭のちよっぱなでやまかしく鳴っている。君が代が響いてあとがシンとなるまで。(以下略)とある。7月7日(水)夜、死去。戒名 柳粹院 釈路郎。8月号の「柳樺室」を全文掲げておく。★ロングランであった路郎の川柳生活は行年七十八才で終止符をうった。川柳職業人を宣言してからの路郎の生活は決して生きがための生活ではなかった。川柳の社会的進出とその質的向上に全力を傾倒

し、日本内地の識者を訪うて、従来のあやまれの川柳観をただして廻り、北支蒙疆にまで其足を伸して目的を遂行した。路郎は又自分の主義主張は頑として曲げなかった。私はだまつて、両手を膝へ置いて路郎の動向を傍観していたにすぎなかった。消極的な意味での妨害者であったであろうが補佐役としては何の役にもたなかつた私であった。然し路郎は決してそれを悔いてはいなかつた。私というものを最もよく知っていた路郎は仕方がないと諦めていたのだと思っている。半世紀以上に互る路郎の生涯は紆余曲折、実にいばらの道ではあつたが、何事も自分の意志通りに断行し得られただけは幸福な人であつたと思う。路郎は川柳の外には何も考えていなかつた。枕辺につきそつていた息子、娘等も、何か大切なことを言い残しはしないかと耳をすましていたそうだが、時々口から洩れる諺言は講演のきれつぱしのようなものばかりであつた。「川柳雑誌」は一応廢刊はしても、あとに続く門下生には厳しい指導を受けた松坂倶楽部川柳講座出身の方々もあり、路郎出席の阪大川柳会、通信病院川柳会、南海電鉄川柳会、その他創刊当時から支部の面々もおられるので、「川柳雑誌」二世のありかたを大

いに属目している次第である。路郎は又、川柳ひとすじで活躍して来たのだが、他の詩型にもそれ／＼の特徴をよく理解していた。従つて歌人、俳人、詩人のベテランにも交友があつた。関西短詩文学連盟の設立に尽力し、毎年各部門で文化祭を開催し、作品展を開らくなど、労働の奉仕は常にオーバークであった事に気付かなかつたのであつた。若し、路郎の魂此世にとどまることあれば今後の柳界のことであろうと思つている。★路郎の病状が急に悪化してからは編集部の仕事は外部、内部ともにピツタリと活動が停止した。十八日の本葬がすんでからも雑誌の組み込みが出来てないと云うのは、一ヶ月からも遅刊する事になるので、編集部は昼夜兼行で八月号のまとめをつけた。欲しい原稿もスペースの関係で掲載出来ず、不手際の際は幾重にも御容赦願ひたい。九月号は追悼号として発行する事になったが御寄稿下さつた原稿の取捨はすべて編集部へ御一任願ひ度い。なお門下一回の今後の方針に付いては談合の上で決定される事と思う」

「川柳雑誌」は、9月号の四六〇号で、その幕を閉じ、10月からは「川柳塔」と名を改め、新体制で発行されることになつた。

川柳雑誌 1929年2月号(創刊号) ~ 1965年9月号(460号)
川柳雑誌 10月号 111号
498

飲んでほし	403	別館を	407	もう秋の	412
【は行】		別府染	403	モーニング	412
拝殿も	414	HEALTH見て	403	ものぐさは	406
墓に水	414	返信で	402	木綿着の	404
薄情な	411	茅屋を	412	【や行】	
箸うごく	405	法科出も	410	やがてトンネル	408
梯子酒	406	鬼灯と	409	約束を	410
初午に	409	鳳仙花	404	焼跡は	414
初蚊帳の	411	ほそほそと	412	山を移す	407
初日キラキラ	402	帆立貝	404	山を見ず	409
初風呂へ	402	牡丹雪	406	ややあって	414
パトロンへ妹	404	発心の	413	夕桜	404
パトロンへひけめ	404	ポプラの葉	411	夕立が	405
花の寺	408	本売った	408	夕立は	403
花の留守	404	【ま行】		夕靄に	414
母は来ず	405	まあんな	406	夕焼を	407
浜ひるがお	411	幕の内	403	誘惑の	408
パラソルを	409	まけ方は	405	行末は	407
晩酌の	409	曲げぬところが	407	夢に来た	413
番付を	410	貧しき家に	410	ようように	410
ひな壇の	408	松の内ダーク	402	浴槽へ	404
百姓の	404	松の内まだ	402	世は進化	410
ヒヤシンスの	410	マドロスの	405	夜ふかしも	405
昼の風呂	406	窓を開けても	409	読むだけの	408
風鈴屋	409	まぼろしで	413	鎧戸は	411
福寿草	402	曼珠沙華	409	【ら行】	
不景気に	406	見下せば	414	落下傘	413
夫人夫人と	407	水と油	408	ラブレターの	405
仏壇の	407	峰の雪	407	良縁を	412
歩と角と	412	未亡人	407	吝嗇の	404
懐が	405	無言の祈り	407	ルビーサファイヤ	411
船旅の	409	虫しげき	412	老眼を	412
振向けば	411	虫を殺してる	407	【わ行】	
古本屋自論を	408	娘まだ	407	若く言えば	404
古本屋不承	408	無念無想	411	忘れもの	405
臍くりの	412	紫の	406	われ充てり	403
へちまへちま	404	群雀	408	ワンステップの	407
糸瓜もう	404	眼覚めても	414		

臨終が[後]	78	揚 花 火	403	おぼっちゃん	412
【れ】		揚 雲 雀	406	お美事と	413
煉瓦の下の	34	朝 酒 に	406	牡 鶏 が	403
【ろ】		朝の蚊帳	411	女 の 子	412
労 基 法	37	あぶなげな	405	【か行】	
老人に[後]	76	あれも又	405	開 墾 の	414
老人の日に	36	言いまして	403	貝 細 工	408
老人の日の	37	生きることに	403	改 札 を	405
老 人 は	29	いけすかない	409	案山子かと	408
六 十 一	35	池 に 鶴	403	崖 上 の	414
六 疊 に	46	毒 は 毒 婦	405	かこちつつ	412
論 文 の	69	一周忌かしこも	413	籠 の 鳥	407
【わ】		一周忌こんな	413	貸浴衣着る	409
ワイシャツの	62	一 生 に	403	貸浴衣足	409
ワイシャツも	35	一心寺の	411	粕 桶 へ	414
若 い 燕	41	今ぞ知る	413	数の子の	402
わがままを	45	今鳴いた	414	風さっと	412
わが世とぞ	28	妹 の	410	風に靡く	407
わかれたらとも	44	因襲脱し	411	片意地な	405
^{わかれ} 別離の言葉に	43	ウインドへ	410	片 便 り	404
忘れてくれと	53	植木屋の	406	門 松 は	402
私 達 と	35	嘘 嘘 嘘	409	鐘がひびかぬ	403
笑はぬ父に	46	内なりと	404	金の奴隷の	405
割 箸 を	43	鬱 憤 は	405	金は及ばぬ	410
われ老いしか[後]	75	うどん屋の	410	花粉に酔えり	407
我 々 が	58	奪い合うて	411	藁 口 も	403
腕 白 が	56	産めよ殖えよ	407	柄 に ない	405
ワンマンカー[後]	75	孟 蘭 盆 の	406	燭 瓶 を	411
		売れ残り	409	聞いて来た	414
		園 丁 と	405	消える虹	409
		お 帰 り に	403	記 念 品	402
		女 将 から	405	君 の 青	406
		おごらねば	409	今日の私の	407
		お 達 者 な	413	気を変えて	403
		弟 へ	413	錦 魚 草	404
		男 の 世 界	406	錦 魚 二 匹	409
		鬼 あ ざ み	409	金 箔 の	412
		お 彼 岸 の	411	愚痴を聞く	404

葎乃作品索引

【あ行】

ああ 金が	412
合シヨール	408
あかしばな	406
秋ざくら	402
悪人へ	410
明けきらぬ	408

未亡人けふも	54	木棉着で	44	洋室へ	51
未亡人として	69	貰ひ子の	47	酔うて来て	39
宮様と	73	門弟の	67	酔ふて来ると	38
見渡すと	27			よう降りまんなあ	50
民主主義[後]	75			やうもまあ	32
【む】		妬かれてた	46	ヨーヨーで	49
向ひの貸家	52	焼藪で	54	用を持って[後]	75
昔とは[後]	76	やけくそで	49	よきことも	52
むかしむかし	72	家賃だけ	46	よく怒る	52
麦の秋	53	宿替も[後]	75	よく来たと	61
虫すだく	73	宿の二階	71	横綱が[後]	75
蟲なくを	68	雇はれて	68	吉野山	72
無常とや	27	柳行李	66	よしや道は	70
息子といふ	49	屋根に出て	64	余所の奥さんを[後]	75
息子には	45	藪医者と	48	世の苦勞	66
無造作に	72	山と河[後]	77	世の中を	63
むつとしたが	47	山と話そ[後]	76	夜店出し	64
胸の痛みを	61	山の上	63	嫁入りを	28
村田さん	70	闇市の	55	嫁ですと	35
無力な男	35	ヤミ出来ぬ	54	嫁にやつた	51
【め】				世も末か	34
名人は	67	夕刊の	67	寄り添へと	30
妾となつて	29	有限も	32	喜びの	70
妾とも	57	夕桜とんぼがへり	74	【ら】	
滅私奉公	28	夕桜名もない	53	ラウンドガール	40
眼も涼しかろ	70	誘惑を	51	落選へ	55
【も】		浴衣掛	69	落第か	49
もういらぬ	60	行き先も	70	ラヂオ又	35
儲けてる	66	行末は	40	裸女の	65
もう叱る	27	行末を	66	裸婦かたづけて	70
もう世辞を	32	行くだけの	51	裸婦を	62
もう泣かぬ	63	湯ざめする	45	【り】	
もう畑	50	ゆびさすは	73	李白という[後]	76
もう僕も	30	夢を見て	62	良心が	35
もう未練	43	【よ】		料理本	52
黙秘権の[後]	76	よいとこへ	53	料理屋を	36
もしひよつと	30	妖艶を	43	愒気から	46
もの思う	43	羊羹のことで	64	臨月へ	34
		羊羹のすこし	60		

副業を	62	歩をついた	61	マーケット	65
河豚だ酒だ	61	文学を	62	まあまあと	39
不景気が	66	文化勲章[後]	75	巻脚絆	34
不幸にも[後]	76	文楽人形[後]	74	まけて呉れる	28
不孝者	60	【へ】		貧しさに	32
藤の棚	59	塀に沿うて[後]	76	貧しさの	65
不肖の子へ	49	弁護士も	31	又辞職	49
婦人記者	59	返事だけ	58	又せんじ葉	50
伏屋にも	71	べんちゃらの[後]	74	又飲み	71
舞台人なし	72	ベンチヤラを	56	まだ嘘が	31
豚の子へ	31	【ほ】		まだ弟が	48
二人きり	42	芳紀まさに	35	間違つて	63
二人して	57	宝石に	62	まちほけを	42
ふたりふたり	70	暴力はよし	29	待つたなしの	70
仏壇は	51	ポーナスで	45	眞似したり	42
仏飯へ	50	朗らかさ	55	幻の黒髪	44
筆不精	36	僕は医者でも	64	幻の中に	31
太つたを	32	保険金	35	まま事の	41
ふと眼をやれば	32	星が流れた[後]	77	ママとなり	50
太を弾く	34	坊っちゃん[後]	76	ママ母の	50
腐肉とは	36	時鳥から	58	豆香水	62
船は行く	41	骨抜きに	42	磨一步	56
船を忘れる	71	炎の中に[後]	78	万引で	46
部分品が[後]	78	ほほえめば	43	【み】	
不平も云わぬ[後]	75	惚れて居るのに	41	身代りの	34
冬は尖つて	28	惚れられて	40	操など	42
ふられたと	41	香港は	57	みじかしと	48
振りむけば[後]	77	本妻が	40	水溜り	37
古い値を	60	凡聖一如	33	店を休んで	46
古着屋は	69	凡人に[後]	76	みだれ籠へ	40
古くとも	35	本店が	68	道眞を	65
ふるさとの	55	本店は	67	みち足れる	72
ふるさとは	54	本堂で	66	道ばかり	65
古本屋でも	62	本堂の	66	見てくれと	73
古本を	61	本堂を	66	三七日へ	71
附録だけで	52	本復を	34	みな呑んでるぞ	39
不渡りは	64	【ま】		みのむしの	73
訃を聞いて	62	まああがれ	47	見はらしを	56

軒 先 に	54	葉牡丹の[後]	75	人妻のあまりに	31
軒 店 へ	68	浜へ出りや	68	人妻の櫛を	64
後 添 が	65	浜 辺 まで	68	人妻のてかてか	43
吞ます気で	38	バラツクへ	54	人 妻 よ	44
のみに来た	39	はらませる	69	人並にいける	38
飲みに来いと	39	春 寒 し	34	人並に女房	47
のろけることを	42	春 の 艸	34	一ト握り	35
【は】		春のすえ	31	人の下駄	66
配 給 を	55	春の日は	33	人の声に	59
肺である	64	春の僕	33	人の世の	71
歯が痛い	28	春もやや	55	一匣べつたり	72
ハガキすら	35	半 襟 を	42	人前はあんな	43
馬鹿な話だ	68	番 傘 に	61	人前は家賃	61
莫迦は莫迦	58	パンとミルクの[後]	75	一ト幕見	53
薄 情 が	53	ばんぱんの	34	ひとりゐれば	32
薄 情 と	43	ハンモツク	47	一人子の	48
薄情な男	53	【ひ】		ひとり立てば	27
薄情な日傘	40	日あたりの	28	一人 旅	72
白 米 の	55	日 一 日	66	ひとりひとり	46
箱 乗 り も	67	P T A こ こ で も	28	独り身へ	29
箸紙を書いた	39	P T A に 出 る を	50	日永には	67
箸 紙 を 父	45	ビールの	39	火の見櫓	53
箸 の 国	71	ビールビール	39	日 は 東	51
裸の外に	32	落籍されて	60	媚葉の如く	43
畑 の 中	45	引 継 ぎ の	71	病 院 の	52
パチンコの	31	引 止 め て	60	病 院 は	54
初 戀 の	40	日ぐるまも	56	病臥して	70
初 戀 も	40	ひげを剃る	50	翻へる袖は	55
初日の出[後]	76	久 方 の	72	翻へる文字は	34
鼻の偉大さ	64	必要以上に	53	晝 寝 から	62
花 道 の	66	必 要 な	51	晝の風呂	44
花見茶屋	74	妃 殿 下 に	69	ビルの窓	33
花 見 に	50	人 柄 が	35	ひるひなか	61
母親は人出を	49	一 口 も	30	拾ひ屋の	57
母親は日の	47	一 皿 は	64	貧乏だけど[後]	76
母と子の	46	人 質 の	66	【ふ】	
母 の 事	49	人 妻 と	43	夫 婦 づ れ	38
母の子に	47	人 妻 に	57	醜 男 の	68

手の染まり	53	どの子どもどの子ども	47	二階のに	57
ではここで	39	どの兵も	50	二階のへ	32
出は出たが	63	とは云ふものの	63	二階を降りて	27
照り照りて	39	泊り客	59	二月の寒さ	58
手を貸せば	63	友達に	33	苦々しがれば	30
天才か	33	友達を	41	握らせりや	54
天才へ	31	どもの児に	48	握らせる	62
電車賃も	60	トランクは	34	にぎりやの	30
天井に	27	とりまきを	61	二合 繰	38
天井へ	32	泥 繩 の	55	二号を持つて	52
てんてこてんてこ	46	とろろ昆布	57	二十六羽	72
天皇へ雨も	69	十和田湖よ[後]	77	日本 髪	58
天皇へ民の	69	【な】		日本びいき	65
天皇も	69	なあちろり	38	女房に負けまい	65
伝 票 の	67	内閣が[後]	75	女房に安請合	50
【と】		内 職 で	59	女 房 の	39
燈下管制	57	名が売れた[後]	74	俄 雨	58
道後の湯[後]	76	長 靴 が	31	鶏 を	66
同情の	57	仲 直 り	36	人 形 に	59
当 選 に	61	流 れ 作 業	52	人 形 を	60
同 窓 も	54	泣きごとは	63	人 間 に	28
童 貞 が	67	慰 め て	59	人 間 の	32
尊 ぐ も	59	無くなると	51	人 参 や	54
道頓堀[後]	78	泣けて来る	42	人相も[後]	77
党のため	65	名古屋胴	58	【ぬ】	
東 洋 の	70	なすびも	32	ぬけさくの	33
盗 塁 へ	67	七 転 び	73	【ね】	
十日 戎	51	何はなくとも	44	ねエ愛して	41
遠く来てあらしの	71	名ばかりの	50	ネオンの下を	43
遠く来て信濃に	74	ナフキンへ	40	葱 赤 蕪	58
時計がとまつた	33	ナフキンを	66	ネクタイが	49
時計が一つ[後]	76	名も知らぬ	74	猫入らず	41
時計にまで	31	奈良二郎	73	寝転ぶ癖の	71
年 頃 は	48	奈良の宿	73	寝 転 べ ば	27
土地が沈むとよ[後]	77	名をすてて	44	寝 仏 の	74
どつかで飲んで	38	汝の父は	48	寝 仏 を	73
突 撃 で	34	【に】		【の】	
どつちつかずの	58	新 嫁 の	51	農 村 の	54

村長を	66	黙っては[後]	77	【つ】	
【た】		撞球よころべ	28	追放解除	36
大安へ[後]	74	だらしなさ	44	追放を	30
鯛一疋で	28	樽据へて	38	使ひきれない	64
大金に	65	誰が捨てた	67	付き合ひで	54
大根を	66	誰の墓	54	月に吸はれ	36
大臣に	27	戯れに死ねれば	27	次の間で	54
代診は	67	戯れについても	28	銃先の	63
泰にいる	56	戯れに捕へた	58	謹んで	72
第二の天性[後]	76	丹前は	72	包紙に	57
代表の	62	【ち】		妻だけが	50
台風一過[後]	76	近頃の	67	妻に中将湯を	52
台風が外れた[後]	75	地下センター[後]	77	妻の名の	47
台風と学者[後]	78	近道に	59	爪弾の	52
颱風の	36	地球あわただしく[後]	77	爪弾きを[後]	75
台風へ	57	父・植木	47	妻や待たむ	45
台風も[後]	78	父親に	45	妻よ踊れ[後]	76
鯛焼けば	27	父として	49	つまり胃が	29
だがしかし	55	父の汗	46	面当ての	63
凧あがり	45	父の死後	45	つりの多い	59
凧つひに	65	父の死に	45	連れ出すに	51
他殺やろうと	53	父の咳	50	連れたのを	41
だしぬけに	71	乳の出る	46	つれないと	53
だす入りの	48	父の名を	49	【て】	
ただ歩く	42	父ひとり	49	抵抗の	42
只一句	31	父を求め	48	定食に	62
畳も匂い	30	中風だんねと	35	定食の	64
立ち廻りの	53	チウリツプ	62	定食へ	37
脱穀機	53	酎をのむ	39	停電の	54
伊達巻の	51	朝鮮の	30	定年後[後]	78
店子店子と	33	長男の	49	停年は	70
田辺節	72	長髪も[後]	78	手紙では	40
他人らしく	29	貯金帳	37	敵前上陸	56
頼むよと	71	一寸来て	73	デザイナーの[後]	76
蓑盆	57	血を売る男[後]	76	出鱈目に	37
足袋の新ら[後]	74	陳情に	34	鉄が錆びたと	34
たべさしを	42	ちんばこを	47	てつちりへ	29
だまつて呑む	38			てにをはの	29

正月も昔は	36	水族館に雀鮎	72	戦術に	56
松花堂へ	73	スキツチを	58	先代は	65
城下町[後]	77	水都祭[後]	75	洗濯に	46
昇降機	66	水兵に	57	膳に左して	49
商魂が[後]	74	すき焼と	60	善人が	31
障子さへ	64	少し貸せと	52	千人針	56
障子張る	46	すしだけで	52	せんべいの	73
少女で通す	40	涼しさは	57	先方の	63
情痴の果ての	43	涼み船	37	【そ】	
焼酎は	39	涼むのかと	37	ソアラー機	56
商売は	53	すすめられ	59	さう聞けば	73
情報天皇に	52	スタートを	62	雑木林を[後]	77
証文は	28	素つばだか	63	総辞職犬も	33
鐘樓に	36	捨てること[後]	78	総辞職再び	33
職責で	30	ストリツパーに	50	さうださうだ	50
職人同志	57	砂ほこり	61	相談を	67
職人へ	65	スピーチを	62	雑兵に	60
書斎はいいが	30	すべりんこ	48	素麺に	64
女中では	41	炭ついで	42	草莽の	69
女中の子	29	拘られたを	50	疎開の子	55
しらじらしき	37	【せ】		祖国ある	56
知らぬまに	70	生活を	32	俗曲へ	53
ジリ貧に	54	青春を掴み	61	袖口で	66
神経衰弱の	29	青春を呑む	40	その嘘に	30
信心で	74	聖書一冊	56	その額も	73
人生を[後]	78	贅沢は	54	その乞食	65
親切を	67	西部戦線	33	その子等は	70
寝台を	57	赤心一票	57	そのころの	42
死んだそうなど	36	せつかちの	54	その座敷	64
新築新築	54	石鹼を	51	その書棚	38
新築へ	71	背の高さ	55	その母も	49
新店は	68	鞆売屋	58	その日ぐらしも	28
親類に	41	世話好きが	54	その船出	70
人類は	37	千円が	31	sofaが欲しと	45
【す】		全快だ	58	空は晴れたり	63
吹殻 <small>かわら</small> で	37	全壊と	36	それが世の中	28
水車小屋	53	選挙違反	57	それからは	38
水族館おこせと	72	先妻は	66	そろばんの	32

このごろの	68	さて呑むと	38	支那炭を	65
このごろは	63	淋しがりの[後]	78	死にともなかつた	49
木の葉を	40	淋しさは	47	死ぬ気で出た	66
この村の	74	錆びついた[後]	77	死の影が[後]	78
この村も	49	寒うおまんなアと	28	死は強し	30
子煩悩	44	寒がりが	62	死はゆらぐ[後]	78
五明樓	72	寒さは寒し	67	自分すら[後]	76
米の値に	62	サルトルを	42	自分の好きな	61
米の値も	57	三合に	35	資本家で	45
子よ妻よ	47	サンシーも	31	資本家の	59
子等の浴衣の	45	三周忌	48	資本家はキヤラクター	29
小料理屋[後]	75	三代も	64	資本家は寢衣の	60
これ以上	32	残置燈	58	霜やけて	62
これ位に	60	サントリーで[後]	74	弱点を	29
これだけを	59	三人が	39	尺八を	64
転げ込んで	41	【し】		借金が	60
殺すことに	67	思案する	51	借金で	65
子を泳がせて	47	鹿おもへらく	73	車庫の裏	29
子を死なし	48	志賀高原[後]	76	写真だけ	41
混雑の	30	しがみつく[後]	78	襦衣一枚で書いた	67
【さ】		叱らずに	61	襦衣一枚出来ぬ	59
さあ動き	71	敷かれてやる[後]	77	シャツよりも	55
さあみんな	44	時雨れてる	74	斜陽族仏壇	36
財産が	36	志士として	55	斜陽族墓地	52
賽銭の	66	四十では	52	銃後銃後	40
搾取されて	35	死所として	61	獣人に	63
桜かねと	34	地震から	36	十二月うれしい	61
桜は桜	42	しづかさは	33	十二月剃刀	30
桜は白け	63	地藏盆[後]	77	十二月首だけ	38
酒女	38	失職を	44	十二月自分の	51
酒がいつしか	38	失望が	62	十二月まがり	39
酒とろり	38	失明に	30	収入の	32
酒なんか	39	失禮々々	35	十八間戸	73
坐食して	38	失禮を	46	重役も	33
さすが銃後	56	失戀が	34	祝電へ	51
誘うても	68	地でゆくか	43	出世など	32
雑談の	32	品切れで	68	主婦としての	52
さて金と	53	品切れに	68	正月も三日	52

君の子が	71	苦の世界	53	恋という[後]	78
君の酒は	39	くびきりに	45	恋のない	61
君僕と	51	くびきりへ	27	戀の罫	42
君見たまへ	31	首しめた	44	戀人が	40
君も征くか	71	首つりは	48	戀人の	40
君止せよ	36	誠になつた	33	戀をして	42
旧温泉	72	くびをつれとの	34	孝行は	68
急所とは	29	組見の	52	広告塔	68
仰山に	60	雲助の	65	甲子園へ[後]	77
供出を	55	蜘蛛の糸[後]	77	校長と	45
胸像も	36	雲の峯と[後]	78	幸福は	34
供託に	63	苦楽園	59	公報を	52
今日中に	67	車いす[後]	78	光明の	69
けふの父は	45	黒い鞆へ	63	蝙蝠よ	30
京の夏	74	苦勞がる	46	子が死んで	33
今日も店に	27	黒髪すき	46	子が出来て	46
玉碎す	35	軍属の	56	子が病んで	48
去年の子	37	軍服で	31	古稀はよし[後]	75
清盛へ	73	【け】		故郷では	52
気楽さは	68	敬遠を	39	後家の相談	32
銀行と	37	慶應に	47	御降下の	55
銀行の	34	藝者決して	67	心得て	60
金婚に[後]	77	藝者自身も	41	心ここに	72
【く】		外科を見舞ひ	56	心にも	30
クイックスロー[後]	75	下宿した	60	腰が碎けた	47
食ふための	59	結界の	44	腰が立てば	52
食ふべくも	28	月末の	59	腰が抜けた	38
苦学した	58	けむだしの	60	腰のひくい	33
草の根よ	35	けろりかんと	54	小新聞の	33
くされ縁	42	原稿紙へ	70	子沢山子に	48
苦沙彌先生[後]	75	現在に	38	子沢山僕の	49
くすぐつたいよ	35	現在の	63	子供服	47
薬湯の	70	嚴父慈母	47	子にやつた	44
くちづけへ	43	減俸の	46	この鮎は	74
唇は	41	健保の医者[後]	76	この腕を	34
靴下を投げ出し誰も	59	兼務兼務	55	近衛さん	70
靴下を投げ出しぬ	46	【こ】		この恋も[後]	77
国の父に	45	戀しさが	41	子のことで	48

お見外れを	55	学 童 へ	73	彼の一生	36
お見舞と	32	学 鷺 へ	55	瓦の飛んだ	36
思ひあがつた	42	駝 落 に	32	考 が	65
思ひきり	40	掛 軸 が	57	看護婦と	56
おもむろに	70	懸 取 を	62	元 日 の	31
思はざりき	49	襲 ね 着 で	72	元 日 を	39
思はざり臍が	43	火事か火事か	38	官舎の灯	71
親のある	47	餓 死 線 へ	55	観 賞 の	64
親 船 を	37	かし家は聳ゆ	46	元 旦 だ	37
折 も 折	71	稼 が ね ば	59	元 旦 も	33
俺だ俺だよと[後]	77	稼 ぐ 母	50	干 潮 の	73
俺に似よ	44	風 す こ し	64	かんにんしてと	40
俺の子と	45	風邪ひいて[後]	75	還 曆 も	58
俺の妻に	50	風よ吹け	47	【き】	
俺は彼を	65	肩 書 が	33	聞いてみれば	30
俺はもう	59	かたくなな	41	機械化の	29
愚かにも	44	かたつむり	60	機械の一部	29
女が下車[後]	75	形見分で	68	気兼して	57
女 社 長	58	鏗 節 に	37	黄 菊 白 菊	54
女 十 八	61	活 劇 の	67	戯曲に生きんと	68
女 遂 に	40	学 校 と は	63	菊 植 えて	52
女のいない	39	学 校 の	61	起 重 機 の	55
女の浴衣が	28	門 出 の 日	35	寄 贈 品	65
女の笑ひ	67	かなしくも	70	北 風 へ	51
女 また	53	かなもけりも	68	気違ひじみた	46
【か】		金ためて	60	帰 朝 して	49
解 決 を	67	金ですむ	43	きつちりと	42
外 国 の	57	金は無くとも	28	きつと来て	43
会 社 が	31	金拾ろた	51	被 ^ま 人のない	48
会社では	29	金 持 だ	36	衣 摺 れ に	40
買出しと	35	金 持 を	48	絹 夜 具 の	62
買溜めに	58	蚊 の 中 で	49	気 ^き の弱いくせに鱗	33
会 話 科 に	53	壁 に 塗 り	37	気 ^き の弱いくせに船	41
帰れとは	37	紙 屑 を	27	岐 阜 提 灯 の	41
ガガーリンと[後]	78	剃 刃 の	50	君・君もう	31
書 置 の	61	髪 結 は ぬ	46	君・君・憂鬱	58
書 置 も	52	蚊 帳 の 中 で	45	君 と こ も	54
鍵っ子だった[後]	78	借 り る 気 で	60	君 の 顔 で	39

一票が	35	売食ひが	54	拜まれて	41
一平へ	64	売る土地が	28	お女将さんと	37
いつまでも	29	うれしさと	42	お元日	27
犬洗ふ	69	うれしさに	59	お氣の毒	69
乾イズム	63	噂に聞けば	41	奥様一人	27
いのちがけで	63	うんそうだ	37	奥さんに[後]	77
いのちさへ	68	運を待つ	29	奥さんの自慢	64
祈つた甲斐も	28			奥さんの鼻	61
遺髪が戻り	53	【え】		送り人の	51
胃病の子繪本	48	栄転の	70	奢られて	61
胃病の子まま子の	47	A ² のB ² のと	48	おじいさん[後]	76
今立つた	51	エキストラ	34	おしやべりの	30
未だ ^{いま} 慾あり	43	駅を出た	37	おしやべりは	29
今見れば	60	戎橋	37	お膳が出た	56
藪なんか	53	エプロンを	66	お互ひが	30
慰問文	49	絵馬堂の	65	お互ひに	36
衣料切符	56	襟垢を	41	お互ひの女房	49
入齒の金を	65	宴会が	69	お互ひの世に	27
色々威	72	円光の	42	織田作の[後]	74
色気ぬきを	58	園公の	71	落人の	34
色事に	43	煙突の	33	落ちついて	39
色仕掛け	33			お茶漬を	48
院長を	36	【お】		おツさんも	57
【う】		老らくの恋が[後]	77	夫より	30
うざくかと	66	老らくの恋の	43	お父さんの	45
牛老ひて	55	往診に	70	お父さんはネ	45
うすぐもり	53	往診の	27	お父さんはやはり	45
嘘と嘘	30	往来で	27	弟の	68
嘘にして	59	大男一丁	63	男ばかりで	37
嘘ばかり	69	大男母を	64	踊子へ	61
嘘を云ふたが	29	大男を	48	踊の輪	55
嘘をまろめて	28	おほきな事実	48	おなじみの	69
腕の見せ	47	大きなものに	31	お婆さんに	36
鰻屋の娘	47	大阪へ	60	おばアさんの	57
うなされるのも	69	大阪も	69	お百度も	73
うぬぼれを	33	大杉を	31	おべつかが	29
生み落とされて[後]	76	オープンへ	69	お前がいたらと	45
売上の	58	をかしさはあいつが	56	お前達は	28
		をかしさは鯨の	56		
		お金を預つて	64		

麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」

葎乃作品「福寿草」索引

麻生路郎作品「旅人」は歴史的仮名遣いで表記されている作品が多い。索引でも表記はそのままだが、配列は発音に従った。例えば、「さうだ」は「そうだ」と発音するので、【さ】ではなくて、【そ】の項にある。また、「旅人その後の作品」は、見出し語の後に〔後〕で示した。

路郎作品索引

【あ】

ああ日向	32	朝新聞を〔後〕	76	イイをして	65
ああ僕も	37	味は知らねど	70	云ふだけは	34
ああほんに	56	あすか川	72	いふまでも	65
哀史一篇	56	遊ばしも	31	家へ帰れば	32
逢状の	51	アダム・スミス	61	生きとし生ける	62
愛情の	52	新らしい	59	意気張で	58
愛人が	43	あつさりど	42	意見した	66
合住居	51	兄らしい	60	医者が死を	30
逢ひたかつた	41	あの女	28	慰謝料の	43
あいの子は	50	あの記事も	32	椅子の背に	44
構曳の	40	あのダイヤ	67	椅子ばかり	64
逢ふだけで	41	あの博士	35	居候が	68
青いソフト	69	あの眼の	42	居候も	27
青空に	29	あほらしさ	39	板の間に	68
青空の	40	雨風が	44	一行詩〔後〕	77
蒼空よ	46	ある時は	44	一合の	38
秋さらり	44	アルミニウムか	58	一万や	55
あきらめていたと	44	哀れ哀れ	69	一ち違ひで	31
あきらめて嫁た〔後〕	75	安産に	51	いつからか	37
諦めてもらった	56	あんたと一緒	36	いつしかに	47
悪運つきず	29	あんたにプラス	37	一周忌雲を	71
悪筆を〔後〕	74	あんたのやうに	69	一周忌その弟	48
悪友を	62	案内人	73	一生は	31
朝顔の	63	【い】		いつ死んでも〔後〕	75
朝霧の	72	いひすぎた	59	一銭の	49
		云い出した	43	いつづけの	68
		許嫁あめりか	60	いつになく	39
		許嫁釘ぐらみ	56	いつのほどにか二号に	37
		言訳も	64	いつのほどにかブックエンド〔後〕	78

編集後記

麻生路郎の生涯の仕事が大観できること、また今後の麻生路郎研究の基礎資料となるものにしたと考えて編集した。

麻生路郎アルバムは、路郎に縁の深かった川柳人の写真を紙幅の許す限り掲載するとともに、肩の凝らない楽しめるものにした。

麻生路郎作品は、句集「旅人」(昭28)のすべての作品と、句集「旅人とその後の作品」(昭52)から「旅人その後の作品」を収録するにとどめた。句集収録以外の作品を選句して路郎作品として遺すということは、路郎作品を新たに評価することであり、今回の「麻生路郎読本」の趣旨とは異なると考えたからである。

麻生路郎文集は、それぞれの時代の路郎の考えていることが鮮明になるように、評論・随筆・紀行・書簡などの分類をせず、年代順に収録した。

麻生路郎語録は、いわゆる語録ではなくて、文集には収録できなかった比較的短い文章なども収録した。文集と同じく年代順にした。

東野大八氏の「麻生路郎物語」をまとめて読める形にしたいと、かねてより望んでいた。

「川柳塔」誌に初めて掲載された時は、各回3頁で全93頁だった。一行20字で31行の三段組だったので、窮屈な感じは否めなかった。今回も同じ三段組だが、活字の大きさを8から9ポイントに変えて、一行18字で23行に改めた。また、より分かりやすくなるように、引用文を掲載時より長く引用したり、註をつけたりしたために、133頁になった。

麻生路郎の人と作品については、年代順にこだわらず、内容によって編集した。作品論と呼べるものを、河野春三氏のものしか見つけられなかったのが残念である。

麻生葎乃作品を収録したのは、路郎が川柳に専心できたのは葎乃あつてのことであり、また、当時を代表する川柳作家の一人であつたからである。

麻生路郎著作解題は、川柳書以外の著作も、その表紙写真・序文・あとがきなど、可能な限り収録した。全国の所蔵館も記録したのは、他府県の図書館に収蔵されている本でも、送料さえ払えば地元の図書館で借り出したり閲覧できるものがあるからである。

麻生路郎年譜は、路郎の足跡をできるだけ記録しておきたかったので、年表形式ではな

く記述形式にした。執筆については、路郎が「川柳雑誌」以外の川柳誌や新聞・雑誌に発表したものを記録したが、「川柳雑誌」の「柳界展望」の記事を見て、それを掲載誌(紙)で確認することだけで手一杯だった。路郎の文章を新たに見つけようと思つて調べた川柳誌は数種に過ぎず、それもざつと目を通すだけで終わつてしまった。各川柳誌や新聞などを丹念に調べていけば、まだまだ路郎の文章が見つかるとは違いない。

索引は、麻生路郎・葎乃作品索引にとどめた。当初は、人名索引や事項索引を作成することも念頭にあつたが、時間と紙幅の都合で断念せざるを得なかつた。

* * *

出版に当たり、資料提供や入力などお世話になつた方・図書館・諸機関(敬称略)

○資料の調査・提供などお世話になつた方

池さとし、板尾岳人、岩崎公誠、上田徳(故翠光子息)、江見見清、大坂創三(故形水子息)、鍛原千里、片岡湖風、北川陸彦(故春菓子息)、小島蘭幸、小谷集一、小西雄々、小林妻子、坂根寛哉、佐藤岳俊、塩満敏、高野宵草、高野不二、田中千代子(故正坊夫人)、津守柳伸、遠

山可住、都倉求芽、中岡光次、中原比呂志、西村哲夫、濱田忠義(故久米雄娘婿)、美研アト、藤村亜成、前田紀雄、弓削川柳社、米澤若郎

○入力を手伝って下さった方

今井弘之、江島谷勝弘、江見見清、籠島恵子、古今堂薫子、伊達郁夫、中原比呂志、藤井則彦、前たもつ、松尾美智代、松原寿子、水野黒兎、三宅保州、村上玄也、村上直樹、森本弘風

○資料の調査・コピーなどお世話になった図書館・諸機関

岩手県立図書館、石川県立図書館、上田市立上田図書館花月文庫、愛媛県立図書館、大阪市の次の各区役所(北区・福島区・港区・西区・生野区・中央区・平野区・住吉区・東住吉区・天王寺区)、大阪府立中央図書館、大阪府立中央図書館、大阪府立中之島図書館、大阪法務局、大阪法務局北出張所、岡山県立図書館、尾道学文庫、春日井市図書館、共立女子大学、久米南町図書館、京都大学文学研究図書館、神戸市立中央図書館、国際こども図書館、国立国会図書館東京本館、堺市役所、堺市立中央図書館、堺市平和と人権資料館、三康図書館、滋賀県立図書館、静岡大学、住まい情報セ

ンター、東京大学附属近代日本法政資料センター、成田山仏教図書館、鳴門教育大学、西宮市役所、日本近代文学館、日本旅行、能代市立図書館、兵庫県立図書館

写真・色紙・短冊など多くの資料を提供して頂きながら、紙幅の都合で掲載できないものが数多くあったことをお詫びする。

* *

冒頭に記したように、本書は今後の麻生路郎研究の基礎資料となるようなものにしたいたい心がけた。文集や語録の出版を明記することとは当然だが、「麻生路郎物語」の引用文なども原典に当たり、可能な限り原典通りの用字・仮名遣いにしたと考えた。そのため、印刷の美研アトさんには、麻生路郎作品など、活字にはない字を一から作ってもらうことになった。難しい要求に対応して下さいましたことを感謝する。

なお、本書の内容の一部には現代の人権意識に照らして差別だと受け取られかねない表現があるが、資料的価値からそのままにしたことをお断りしておく。

* *

本書の編集委員は、奥田みつ子、川端一步、木

本朱夏、柴原道夫、西出楓楽、山岡富美子、山本希久子の七名が務めた。「川柳雑誌」・その他の川柳誌・新聞・雑誌からの資料収集、路郎著作の確認と収集、各地川柳人や御遺族からの資料収集、路郎の住まいと川柳雑誌社の現在の住所表記調査、資料の掲載許可等々、チームワークよろしく作業を進められたことを喜ばしく思うとともに、「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇号記念出版という歴史的な事業に携われたことをありがたく思う次第である。

(柴原 道夫)

麻生路郎読本

二〇一〇年(平成三二年)九月三〇日発行

著者 麻生路郎

編纂人 柴原道夫

発行人 河内権治

発行所 川柳塔社

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル201号室

印刷所 美研アト
電話(〇六)六七七九・三四九〇番